鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)

成岡遺跡
西ノ平遺跡
上ノ原遺跡

一般国道3号線隈之城バイパス建設に伴う発掘調査報告書(1)

(本　文)

1983・3

鹿児島県教育委員会

序　　文

国道３号線隈之城バイパスの建設に伴う埋蔵文化財について

昭和55年度は、その確認調査を、昭和56年・昭和57年の２年間は、発掘調査を実施してきましたが、その結果旧石器時代から明治・大正時代までの長期にわたる生活跡をはじめ、多くの貴重な文化財の発見がありました。

ここにその報告書を発刊することになりました。この報告書が文化財の保護と学術研究のため広く活用されることを願っております。

発刊に当たり、発掘調査及び報告書作成に御指導、御協力をいただきました関係者各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年３月

鹿児島県教育委員会

教育長　井之口　恒雄

例　　言

1．この報告書は、一般国道３号線隈之城バイパスの建設によって消滅する成岡・西ノ平・上ノ原遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、建設省鹿児島国道工事事務所から委託を受け、鹿児島県教育委員会が実施した。

3．本遺跡の名称は、当初霧島遺跡としていたが、地形・立地条件および遺跡の性格などから３遺跡に分けることが適当と思われるので、小字名の検討から成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡と呼ぶことにした。

4．本書の執筆は次のとおりである。

Ⅰ第１・３章．Ⅲ第６～８章．Ⅳ第６・７章	川畑昭光
Ⅰ第２章．Ⅱ．Ⅲ第１・４・５・９章．Ⅳ第１・４・５・８章．Ⅴ	池畑耕一
Ⅲ第２章．Ⅳ第２章	長野真一
Ⅲ第３章．Ⅳ第３章	弥栄久志
Ⅲ第４章１(１)・第５章７(３)(４)	青崎和憲
Ⅲ第５章７(１)(２)・Ⅳ第５章６(１)(２)	堂込秀人
Ⅲ第５章７(５)・第６章３・Ⅳ第５章６(５)～(６)第６章３(２)	山口俊博
Ⅲ第５章７(６)～(10),第７章，Ⅳ第７章	戸崎勝洋
Ⅳ第５章６(３)(４)	宮田栄二
Ⅳ第５章６(７)～(16)	繁昌正幸・戸崎勝洋
Ⅵ第１章	松下孝幸・石田肇・佐熊正史・用丸英博
Ⅵ第２章	分部哲秋
Ⅶ	五味克夫

5．現地での実測図作成、写真撮影等は調査担当者が行ない、遺物実測、トレース等も主として担当者が当たったが、他に吉永正史・中村耕治・峯崎幸晴（文化課）などの協力を得た。なお上ノ原遺跡の分については新東晃一氏の協力を得た。

6．レベル記入については隈之城川にかかる寺田橋の脚付近にある基準点（10,589m）から移して用いた。

7．調査・整理期間中、遺物・遺構の指導に次の方々をお願いした。

河口貞徳氏・五味克夫氏・河野治雄氏・沢村仁氏・亀井明徳氏・西弘海氏・小田富士雄氏・横山浩一氏・松本建郎氏・森田勉氏

目　　次

序文
例言
Ⅰ　環境
第１章　遺跡の立地および環境…… 9
第２章　歴史的環境…… 10
第３章　層序…… 14
Ⅱ　調査の経過
第１章　調査に至るまでの経過…… 15
第２章　第１次調査の経過…… 15
第３章　第２次調査の経過…… 17
Ⅲ　成岡遺跡の調査
第１章　概要…… 21
第２章　旧石器時代…… 23
第３章　縄文時代…… 24
第４章　古墳時代…… 33
第５章　奈良～鎌倉時代…… 81
第６章　室町・安土桃山時代…… 155
第７章　江戸時代…… 165
第８章　明治・大正時代…… 189
第９章　まとめ…… 191
Ⅳ　西ノ平遺跡の調査
第１章　概要…… 205
第２章　旧石器時代…… 207
第３章　縄文時代…… 209
第４章　古墳時代…… 217
第５章　奈良～鎌倉時代…… 219
第６章　室町・安土桃山時代…… 318
第７章　江戸時代…… 324
第８章　まとめ…… 349
Ⅴ　上ノ原遺跡の調査
第１章　概要…… 351
第２章　縄文時代…… 352
第３章　古墳時代…… 352

第４章　奈良～鎌倉時代 …… 353
第５章　室町・安土桃山時代 …… 353
第６章　まとめ …… 354
Ⅵ　人骨所見
第１章　成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨 …… 355
第２章　成岡・西ノ平遺跡出土の幼小児骨 …… 383
Ⅶ　薩摩郡平礼石寺と守護・地頭・郡司との関係―旧記雑録前編所収山内文書について―

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 9
第２図　周辺の遺跡地図……11
第３図　湯之谷奥周辺地形図……13
第４図　湯之谷奥採集の土器……13
第５図　模式柱状図……14
第６図　成岡遺跡グリッド配置図……22
第７図　旧石器時代の石器……23
第８図　縄文式土器（１）……27
第９図　縄文式土器（２）……28
第10図　縄文式土器（３）……29
第11図　石器（１）……30
第12図　石器（２）……31
第13図　石器（３）……32
第14図　古墳時代の竪穴住居跡配置図 33
第15図　１号住居跡……34
第16図　１号住居跡出土の土器 ……34
第17図　２号住居跡……35
第18図　２号住居跡出土の土器 ……36
第19図　３号住居跡 ……37
第20図　３号住居跡出土の土器 ……38
第21図　４号住居跡 ……39
第22図　４号住居跡出土の土器（１）…40
第23図　４号住居跡出土の土器（２）…41
第24図　４号住居跡出土の土器（３）…42
第25図　４号住居跡出土の土器（４）…43
第26図　４号住居跡出土の土器（５）…… 44
第27図　４号住居跡出土の土器（６）…… 45
第28図　４号住居跡出土の土器（７）…… 46
第29図　４号住居跡出土の土器（８）…… 47
第30図　４号住居跡出土の土器（９）…… 48
第31図　５号住居跡 …… 49
第32図　５号住居跡出土の土器（１）…… 49
第33図　５号住居跡出土の土器（２）…… 50
第34図　６号住居跡 …… 51
第35図　６号住居跡出土の遺物（１）…… 52
第36図　６号住居跡出土の遺物（２）…… 53
第37図　７号住居跡 …… 54
第38図　７号住居跡出土の土器（１）…… 54
第39図　７号住居跡出土の土器（２）…… 55
第40図　７号住居跡出土の土器（３）…… 56
第41図　８号住居跡 …… 57
第42図　８号住居跡出土の土器（１）…… 57
第43図　８号住居跡出土の土器（２）…… 58
第44図　９号住居跡 …… 59
第45図　９号住居跡出土の鉄器…… 59
第46図　９号住居跡出土の土器…… 60
第47図　10号住居跡とその出土土器 …… 61
第48図　11号住居跡とその出土土器（１）…. 62
第49図　11号住居跡出土の土器（２）…… 63
第50図　12号住居跡 …… 64

第51図　12号住居跡出土の遺物（1）… 65
第52図　12号住居跡出土の遺物（2）… 66
第53図　13号住居跡出土の土器（1）… 67
第54図　13号住居跡 …… 68
第55図　13号住居跡出土の土器（2）… 68
第56図　14号住居跡とその出土遺物(1) 69
第57図　14号住居跡出土の遺物（2）… 70
第58図　15号住居跡 …… 71
第59図　15号住居跡出土の土器（1）… 72
第60図　15号住居跡出土の土器（2）… 72
第61図　19号住居跡とその出土土器 … 73
第62図　土坑 …… 73
第63図　攪乱層出土の古墳時代土師器（1）…… 74
第64図　攪乱層出土の古墳時代土師器（2）…… 75
第65図　攪乱層出土の古墳時代土師器（3）…… 77
第66図　古墳時代の須恵器 …… 79
第67図　奈良～鎌倉時代の遺構配置図 80
第68図　掘立柱建物1 …… 81
第69図　掘立柱建物2 …… 82
第70図　掘立柱建物3 …… 83
第71図　掘立柱建物4 …… 84
第72図　掘立柱建物5と掘立柱建物7 85
第73図　掘立柱建物6 …… 86
第74図　掘立柱建物8と掘立柱建物9 87
第75図　掘立柱建物10 …… 88
第76図　掘立柱建物の出土土器 …… 88
第77図　掘立柱建物11 …… 89
第78図　16号住居跡 …… 90
第79図　16号住居跡・18号住居跡出土の土器 …… 90
第80図　17号住居跡 …… 91
第81図　18号住居跡 …… 92
第82図　土坑Aと土坑B …… 93
第83図　土坑A・土坑B出土の土器 …… 93
第84図　土坑C …… 94
第85図　土坑C・土坑D出土の土器 …… 94
第86図　土坑D …… 95
第87図　土坑E …… 96
第88図　土坑E出土の土器 …… 97
第89図　土坑F …… 97
第90図　土坑F出土の土器 …… 98
第91図　土坑G …… 98
第92図　土坑H …… 99
第93図　土坑H出土の土器 …… 100
第94図　土坑I …… 101
第95図　土坑I 出土の土器 …… 101
第96図　土坑J …… 102
第97図　土坑J 出土の土器 …… 103
第98図　土坑K …… 104
第99図　土坑K出土の土器 …… 105
第100図　集石遺構 …… 105
第101図　溝状遺構1の断面図 …… 106
第102図　溝状遺構2の断面図 …… 107
第103図　溝状遺構1と溝状遺構2出土の土器（1）(土師器) …… 108
第104図　溝状遺構2出土の土器（2）(土師器・黒色土器) …… 109
第105図　溝状遺構2出土の土器（3）(須恵器) …… 110
第106図　溝状遺構2出土の土器（4）(磁器) …… 111
第107図　溝状遺構2出土の土製品・石製品 …… 112
第108図　柱穴出土の黒色土器・土製品 …… 114
第109図　柱穴出土の土師器 …… 115
第110図　土師器（1）(皿) …… 118
第111図　土師器（2）(皿・坏) …… 119

第112図　土師器（３）…… 120
第113図　土師器（４）…… 121
第114図　土師器（５）…… 122
第115図　土師器（６）…… 123
第116図　土師器（７）…… 124
第117図　土師器（８）…… 125
第118図　土師器（９）…… 126
第119図　黒色土器　…… 130
第120図　須恵器（１）…… 131
第121図　須恵器（２）…… 132
第122図　須恵器（３）…… 133
第123図　須恵器（４）…… 134
第124図　須恵器（５）…… 135
第125図　須恵器（６）…… 136
第126図　須恵器（７）…… 137
第127図　須恵器（８）…… 138
第128図　須恵器（９）…… 139
第129図　陶器 …… 142
第130図　青磁（１）…… 144
第131図　青磁（２）…… 145
第132図　白磁 …… 151
第133図　古銭拓影 …… 152
第134図　緑釉土器・墨書土器・土製品 …… 153
第135図　石製品 …… 154
第136図　室町時代以降の遺構配置図　155
第137図　中世墓A出土の白磁 …… 156
第138図　古銭拓影 …… 156
第139図　中世墓B～I　配置図 …… 156
第140図　中世墓A …… 157
第141図　中世墓B～F …… 158
第142図　中世墓G～I …… 159
第143図　土坑Lとその出土遺物…… 160
第144図　青磁 …… 161
第145図　白磁 …… 163
第146図　染付・天目 …… 163
第147図　陶器（甕・摺鉢） …… 164
第148図　掘立柱建物12 …… 165
第149図　掘立柱建物12の出土遺物…… 166
第150図　溝状遺構４断面図…… 166
第151図　近世墓１群配置図…… 167
第152図　近世墓２群配置図…… 167
第153図　近世墓２群の墓石平面図 …… 168
第154図　１・13号墓…… 169
第155図　２・27号墓…… 170
第156図　３・４号墓…… 170
第157図　５・６・７号墓…… 171
第158図　８・９・10号墓…… 172
第159図　11・12・14号墓…… 173
第160図　15・16・17号墓…… 174
第161図　18・19・20号墓…… 175
第162図　21・22号墓 …… 176
第163図　23・24号墓 …… 177
第164図　25・26・28号墓 …… 178
第165図　古銭実測図 …… 179
第166図　古銭拓影…… 181
第167図　キセル・扇子実測図…… 181
第168図　鉄釘 実測図 …… 181
第169図　碗類（１）…… 183
第170図　碗類（２）・皿 …… 184
第171図　鉢・高坏 …… 185
第172図　摺鉢・茶家・茶家蓋…… 187
第173図　甕・徳利・壺…… 188
第174図　チリ溜め…… 189
第175図　チリ溜め出土遺物 …… 190
第176図　縄文式土器出土区図 …… 192
第177図　古墳時代の土師器分類図（１）…… 192
第178図　古墳時代の土師器分類図（２）…… 193
第179図　古墳時代の土師器分類図（３）…… 194
第180図　古墳時代の土師器分類図（４）…… 195

第181図　古墳時代の土師器分類図（５）……196
第182図　古墳時代の土師器分類図（６）……197
第183図　古墳時代の土師器分類図（７）……198
第184図　古墳時代の土師器分類図（８）……199
第185図　古墳時代の土師器分類図（９）……200
第186図　磁器分類図……204
第187図　西ノ平遺跡グリッド配置図……206
第188図　旧石器時代の石器（１）……207
第189図　旧石器時代の石器（２）……208
第190図　縄文式土器（１）……211
第191図　縄文式土器（２）……212
第192図　縄文式土器（３）……213
第193図　石器（１）……214
第194図　石器（２）……215
第195図　石器（３）……216
第196図　古墳時代の土師器・須恵器……217
第197図　奈良～鎌倉時代の遺構配置図（南半）……219
第198図　奈良～鎌倉時代の遺構配置図（北半）……220
第199図　掘立柱建物１……221・222
第200図　掘立柱建物２……223・224
第201図　掘立柱建物１と２の出土土器……225
第202図　掘立柱建物３……226
第203図　掘立柱建物４……227
第204図　掘立柱建物５……228
第205図　掘立柱建物６と掘立柱建物８……229
第206図　掘立柱建物７……230
第207図　掘立柱建物９……231
第208図　掘立柱建物３～掘立柱建物９の出土土器……232
第209図　掘立柱建物10……233
第210図　掘立柱建物11……234
第211図　掘立柱建物12……235
第212図　掘立柱建物13……236
第213図　掘立柱建物14……237・238
第214図　掘立柱建物10～掘立柱建物14の出土土器……239
第215図　土坑Ａと土坑Ｂ……240
第216図　土坑Ｃと土坑Ｄ……241
第217図　土坑Ｅ……242
第218図　土坑Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの出土土器……242
第219図　土坑Ｆ……243
第220図　土坑Ｇと土坑Ｈ……244
第221図　土坑Ｉと土坑Ｊ……245
第222図　土坑Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊの出土土器……245
第223図　土坑Ｋと土坑Ｌ……246
第224図　土坑Ｍ……247
第225図　土坑Ｋ・Ｌ・Ｍの出土土器……248
第226図　土坑Ｎ……249
第227図　土坑Ｏ……250
第228図　土坑Ｐ……251
第229図　土坑Ｐ・Ｒ・Ｓの出土土器……251
第230図　土坑Ｑ……252
第231図　土坑Ｓ……252
第232図　土坑Ｒ……253
第233図　溝状遺構１・２・３の断面図……254
第234図　溝状遺構１出土の土器……255
第235図　溝状遺構２・３および古道出土の土器……256

第236図　古道の断面図 …… 257
第237図　土坑Aと土器集積遺構1の古銭 …… 257
第238図　土器集積遺構 …… 257
第239図　土器集積遺構の土器 …… 258
第240図　柱穴出土の遺物 …… 260
第241図　土師器（1）（皿）…… 267
第242図　土師器（2）（皿）…… 268
第243図　土師器（3）（皿）…… 269
第244図　土師器（4）（坏）…… 270
第245図　土師器（5）（坏）…… 271
第246図　土師器（6）（坏）…… 272
第247図　土師器（7）（坏・椀）…… 273
第248図　土師器（8）（椀）…… 274
第249図　土師器（9）（蓋・甕）…… 275
第250図　土師器（10）（甕）…… 276
第251図　土師器（11）（甕・鉢）…… 277
第252図　土師器（12）（壺など）…… 278
第253図　黒色土器（1）…… 281
第254図　黒色土器（2）…… 282
第255図　須恵器（1）（坏蓋・坏身）…… 283
第256図　須恵器（2）（坏身）…… 284
第257図　須恵器（3）（壺）…… 285
第258図　須恵器（4）（壺）…… 287
第259図　須恵器（5）（甕の口縁）…… 289
第260図　須恵器（6）（甕）…… 290
第261図　須恵器（7）（甕）…… 291
第262図　須恵器（8）（甕）…… 292
第263図　須恵器（9）（甕）…… 293
第264図　須恵器（10）（甕）…… 294
第265図　須恵器（11）（甕）…… 295
第266図　須恵器（12）（鉢）…… 296
第267図　陶器 …… 300
第268図　青磁（1）…… 305
第269図　青磁（2）・白磁（1）…… 306
第270図　白磁（2）・青白磁・褐釉陶器 309
第271図　緑釉土器・墨書土器 …… 310
第272図　墨書・刻書土器 …… 311
第273図　土製品 …… 314
第274図　石製品（1）滑石製品 …… 315
第275図　石製品（2）砥石 …… 316
第276図　古銭 …… 317
第277図　帯金具および青銅製品 …… 317
第278図　中世墓A・B …… 318
第279図　古銭拓影 …… 318
第280図　火葬遺構とその出土遺物 …… 319
第281図　青磁 …… 320
第282図　白磁・染付・陶器・天目 …… 323
第283図　江戸時代の遺構配置図 …… 324
第284図　掘立柱建物① …… 325
第285図　掘立柱建物② …… 326
第286図　掘立柱建物③ …… 327
第287図　掘立柱建物④ …… 328
第288図　掘立柱建物⑤ …… 329
第289図　掘立柱建物⑥ …… 330
第290図　掘立柱建物①・④の出土遺物 …… 331
第291図　かまどA～D配置図 …… 331
第292図　かまどA～E実測図 …… 332
第293図　粘土貼り遺構と土坑⑤ …… 333
第294図　土坑①～④・⑥と土坑出土遺物 …… 334
第295図　道路跡断面図 …… 335
第296図　近世墓群配置図 …… 335
第297図　近世墓群墓石平面図 …… 335
第298図　1号墓 …… 336
第299図　2・3号墓 …… 337
第300図　4・5号墓 …… 338
第301図　6号墓 …… 339
第302図　墓坑出土古銭拓影 …… 339
第303図　墨書土器 …… 340

第304図　碗類（１）……341
第305図　碗類（２）……342
第306図　皿　……344
第307図　皿・鉢・猪口・高坏・
　　その他　……345
第308図　茶家・茶家蓋・その他　……346
第309図　茶家・摺鉢・鉢・壺　……347
第310図　壺　……348
第311図　上ノ原遺跡トレンチ配置図　……351
第312図　縄文時代の遺物　……352
第313図　古墳時代～室町時代の遺物　……354

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表　……　12
第２表　縄文式土器一覧表(1)　……　24
第３表　縄文式土器一覧表(2)　……　25
第４表　石器一覧表　……　27
第５表　攪乱層出土の古墳時代土師
　　器出土地区表　……　76
第６表　攪乱層出土の古墳時代須恵
　　器出土地区表　……　78
第７表　溝状遺構　1・2出土の遺物出土
　　地区表　……113
第８表　柱穴出土の遺物一覧表　……114
第９表　土師器出土地区表（１）……127
第10表　土師器出土地区表（２）……128
第11表　土師器出土地区表（３）……129
第12表　須恵器一覧表(1)　……140
第13表　須恵器一覧表(2)　……141
第14表　青磁出土地区表（１）……146
第15表　青磁出土地区表（２）……147
第16表　青磁出土地区表（３）……148
第17表　白磁出土地区表（１）……149
第18表　白磁出土地区表（２）……150
第19表　白磁出土地区表　……163
第20表　染付・天目出土地区表　……164
第21表　陶器出土地区表　……164
第22表　墓坑出土古銭一覧表(その１)　179
第23表　墓坑出土古銭一覧表(その２)　180
第24表　鉄釘一覧表　……181
第25表　碗類・皿計測表　……182
第26表　皿・鉢計測表　……186
第27表　年表　……191
第28表　竪穴住居跡一覧表　……200
第29表　主な遺構とその出土遺物　……201
第30表　墓坑一覧表　……203
第31表　縄文式土器一覧表(1)　……209
第32表　縄文式土器一覧表(2)　……210
第33表　石器一覧表　……213
第34表　古墳時代の土師器・須恵器出
　　土地区表　……218
第35表　柱穴出土の遺物出土地区表　……259
第36表　土師器出土地区及び計測表(1)　……264
第37表　土師器出土地区及び計測表(2)　……265
第38表　土師器出土地区及び計測表(3)　……266
第39表　黒色土器出土地区及び計測表　……280
第40表　須恵器一覧表(1)　……297
第41表　須恵器一覧表(2)　……298
第42表　須恵器一覧表(3)・陶器一覧表　……299
第43表　青磁出土地区表（１）……301
第44表　青磁出土地区表（２）……302
第45表　青磁出土地区表（３）……303
第46表　青磁出土地区表（４）……304
第47表　白磁出土地区表（１）……307
第48表　白磁出土地区表（２）……308

第49表　墨書・刻書土器出土地区表(1)　312
第50表　墨書・刻書土器出土地区表(2)　313
第51表　土製品出土地区表 …… 314
第52表　石製品出土地区表 …… 316
第53表　青磁出土地区表(1) …… 320
第54表　青磁出土地区表(2) …… 321
第55表　青磁出土地区表(3) …… 322
第56表　白磁・染付・陶器・天目出土地区表 …… 323
第57表　墓坑出土古銭一覧表 …… 340

付　図　目　次

付図1　成岡遺跡全体図
付図2　西ノ平遺跡全体図
付図3　成岡遺跡地層断面図
付図4　西ノ平遺跡地層断面図

Ⅰ　環　　境

第１章　遺跡の立地および環境

第２章　歴史的環境

第３章　層　序

第1章　遺跡の立地および環境

成岡・西ノ平・上ノ原の3遺跡は，鹿児島県川内市中福良町に所存し，川内市街地の南約3km，国鉄鹿児島本線隈之城駅の西約1kmの位置にある。

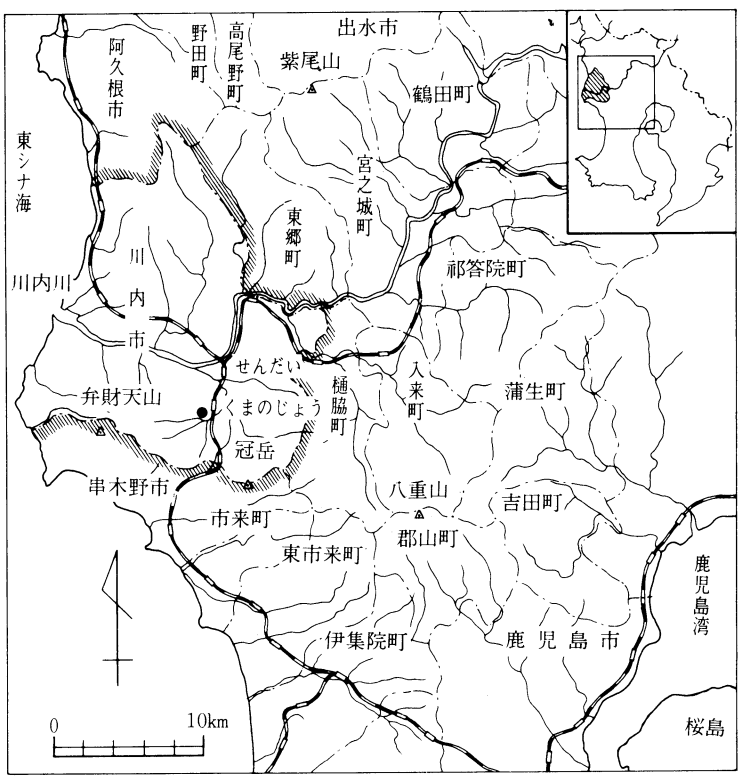
川内市は，鹿児島県の北西部に位置し，北および北東は紫尾山（標高1067m）に続く出水山地で阿久根市・東郷町，東は上床山山地で樋脇町，南は東西に連なる冠岳山地と高江山地で串木野市と境をなしている。川内市の市街地は三方を山に囲まれた盆地状の沖積平野に位置し，その中央部を，熊本県白髪岳に源を発した川内川が西流して東シナ海に注いでいる。

遺跡の所在する中福良町は，標高519mの弁財天山を最高峰とする高江山地の東北部に形成された山頂の比較的平坦な永野段から南東にのびる丘陵末端部に位置する。丘陵の南側には，川内川の支流の隈之城川が東流したのち，百次川を合流して丘陵をかすめるように北流するため，丘陵の南から東にかけて沖積平野が発達している。また，丘陵末端部に形成された台地の縁辺部には，湧水点が数ケ所あって，最近まで飲料水等に利用されていた。

成岡遺跡は，3遺跡で最も南に位置し，東へ延びる標高20m程の舌状台地上にある。水田面からの比高が約10mの平坦な台地で，畑地と利用されている。遺跡の北半分にはゴボウが栽培されて，部分的に深さ約1mの掘削が行われている。

西ノ平遺跡は，成岡遺跡の北方約200mに位置し，幅約80mの小谷を挟んで対峙する。北に上ノ原遺跡の所在する標高約35mの台地を背にして，南向きの傾斜地（標高約20～30m）を削平して3段の畑地となっている。北端はやや急傾斜を呈し約5mの比高をもって上ノ原遺跡に続く。

上ノ原遺跡は，市道を挟んで西ノ平遺跡の北に位置し，3遺跡で最も高位の標高35mの平坦な台地上にある。



第1図　遺跡位置図（・印）

第２章　歴史的環境

川内市は奈良時代には薩摩国府が置かれ，以来薩摩国の中心地として栄えた所である。先・原史時代の遺跡としても，鹿児島県最初の旧石器時代遺物（尖頭器）が確認された楠元遺跡や石庖丁・石鎌など弥生時代前期の遺物を出す若宮遺跡，小形仿製鏡の出土した外川江遺跡，地下式板石積石室の調査された横岡遺跡などが知られている。

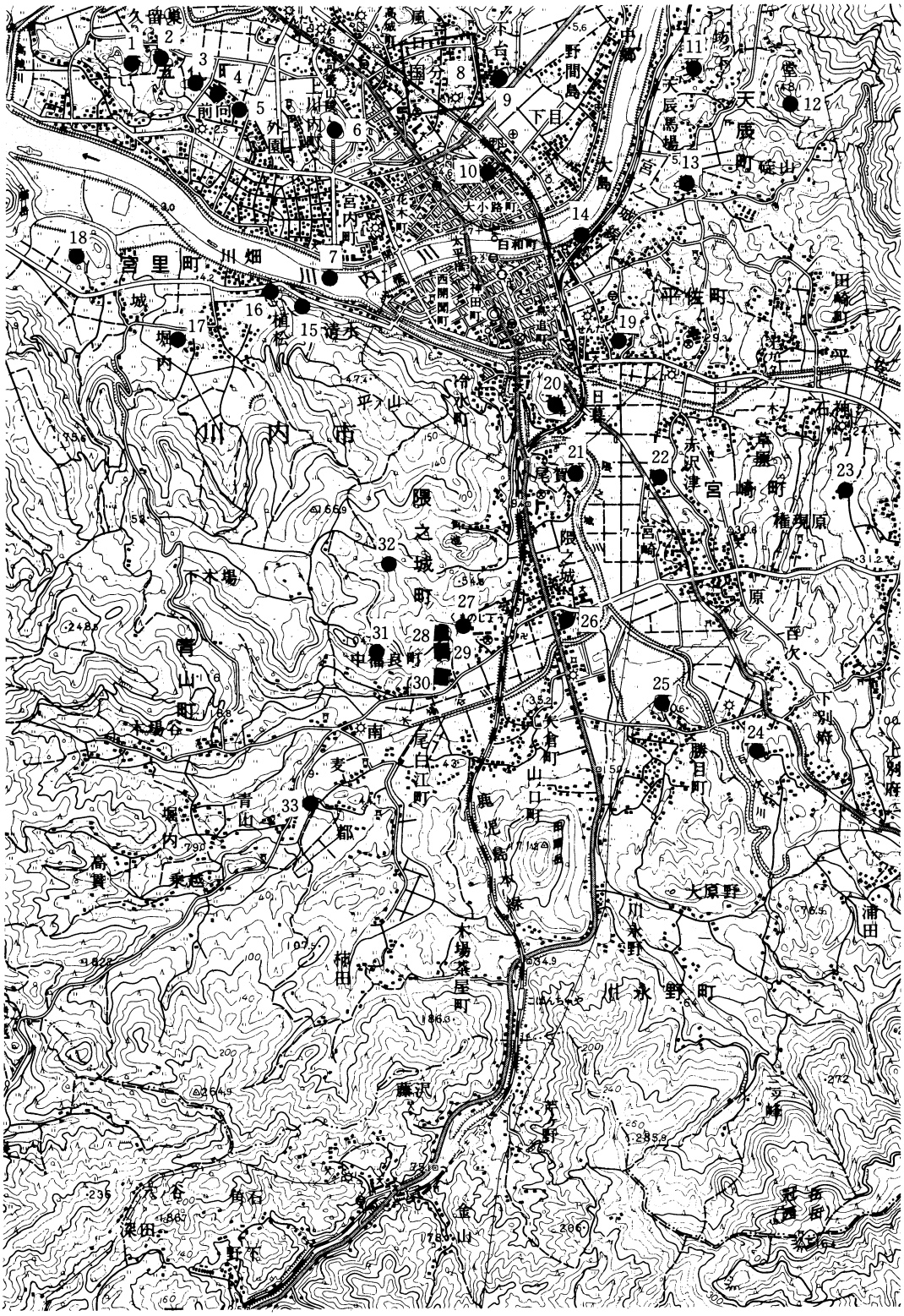
ところが，当遺跡周辺にはこれまで先・原史時代の遺跡はあまり知られていない。『川内市史』上巻に写真のある隈之城町観音橋下採集の石器には旧石器時代の石器らしきものがある。縄文時代の遺跡としては約1700ｍほど北々東の位置にある尾賀台遺跡，西ノ平遺跡と同じ台地上にある川内実業高グランド遺跡などがある。尾賀台遺跡は標高40ｍを測る狭い台地で，市来式土器を出土する。石斧・敲石等も出ており，台地の東斜面には貝塚もつくられている。また周辺の低地からも石斧などが出土している。川内実業高グランド遺跡からは後期の土器が，グランド造成時に出土している。宮崎町赤沢津遺跡，寄田町寄田遺跡でも市来式土器が出ている。青山町では川底より石斧が出土している。

弥生時代終末から古墳時代にかけては宮里町日吉，同安養寺丘，宮崎町赤沢津，向田町日暮丘などの遺跡に土器の散布がみられ，安養寺丘には地下式板石積石室もある。これらの中には赤沢津遺跡のように広大な低台地上にあるものもあって，この隈之城平野に生産の基盤を置いた人達の集落が，周辺の台地上に形成されたであろうことをうかがわせる。また安養寺丘で検出された地下式板石積石室はその分布圏としては最南部にあたるものである。

奈良時代には薩摩国薩摩郡に属しており，当遺跡付近は避石郷であろうとされる。川内川対岸の高城郡が国府・国分寺など主要な役所・寺を残すのに対し，こちらにはそうしたものが少ない。現在，山頂付近に公園のつくられている寺山の山麓には平安時代後半の軒丸瓦・軒平瓦などを出土する天辰廃寺があり，礎石と思われる巨石も残っている。宮里町清水寺近くには経塚があり，滑石製の経筒などが出土している。湯之谷の谷頭は永野段あたりからの地下水が湧出し，巨石が累々としているが，この傾斜面の一部に土師器の壺・坏・皿などが集積し，完形品も多く出土している。

鎌倉時代以降，武士の起りとともに各地で戦いが多くなり山城等がつくられるが，当地周辺でも多くの激しい戦いが行われている。1339年，1372年の碇山城の戦い，1418年の永利城の戦い，1587年の豊臣秀吉の九州征討などがその主なものである。この他にも百次城・隈之城などの山城があった。

平礼石寺は文献では平安時代にすでに存在したことがわかっているが，現在残っているものには古石塔や仁王像など中世以降のものだけがある。当遺跡の西方約500ｍの所には廃寺前の寺跡が残っている。現在，雑木林となっているが，礎石群・池跡などの他に，五輪塔などが転がっている。創建時の寺跡などは不明である。



第2図　周辺の遺跡地図

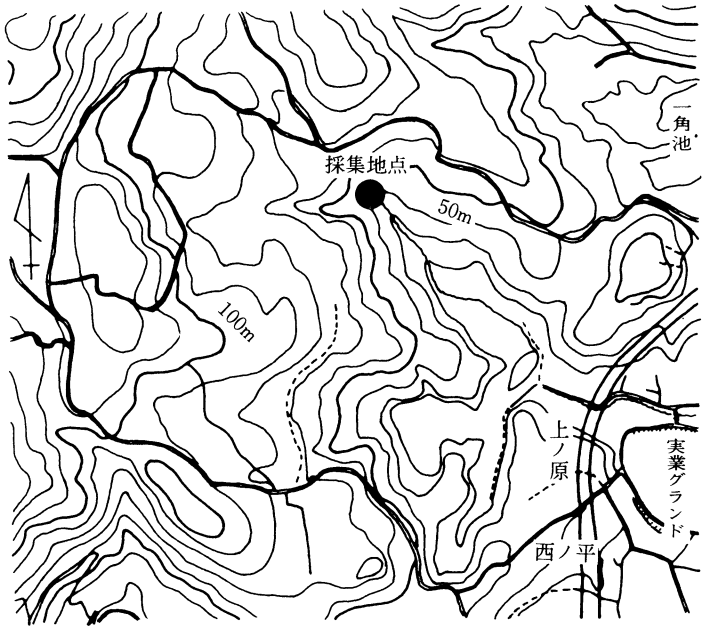
図番	遺跡名	所在地	地形	概要
1	久留巣原	五代町久留巣	台地	弥生時代中期～平安時代の散布地
2	大将軍神社	〃　〃	〃	祭神はタケミカヅチノミコト
3	崎原	〃　崎原	微高地	弥生式土器散布地
4	若宮	〃　若宮	〃	弥生式土器・石庖丁・石鎌，板石積石室
5	戦の原	〃　戦原	〃	弥生式土器散布地
6	新田神社	宮内町可愛山	丘陵	中世以降，薩摩国一の宮
7	弥勒寺	〃	川底	『弥勒寺』の逆プリント文字のある瓦出土
8	薩摩国府跡	御陵下町	台地	六町四方の庁域
9	薩摩国分寺跡	国分寺町	〃	国指定史跡。史跡公園として整備中
10	泰平寺	大小路町	微高地	2町×1.5町の寺域。鎌倉時代には存在
11	天辰	天辰町坊下	台地	古墳時代土師器散布地
12	天辰廃寺	〃　川原	山麓	平安時代後半の軒丸瓦・軒平瓦が出土
13	碇山城	〃　碇山	丘陵	中世山城
14	白羽火雷神社	平佐町	微高地	
15	清水経塚	宮里町清水	山麓	嘉永3年5月1日銘，滑石製蓋付外筒
16	志奈尾神社	〃	〃	
17	日吉	〃　堀之内日吉	微高地	古墳時代土師器散布地。鉄刀
18	安養寺丘	〃　安養寺丘	山麓	〃　地下式板石積石室
19	平佐城	平佐町藤崎	丘陵端	中世山城
20	日暮丘	向田町日暮丘	独立丘	弥生式土器散布地
21	尾賀台貝塚	隈之城町尾賀古寺	〃	縄文式土器（後期）散布地。石斧。貝塚
22	赤沢津	〃　赤沢津	台地	古墳時代土師器散布地
23	若宮神社	永利町	〃	土師器散布地
24	百次城	百次町	丘陵端	中世山城
25	坪塚	勝目町	〃	条里制施行の基点
26	隈之城	隈之城町	丘陵	中世山城
27	川実高グランド	中福良町	台地	縄文式土器（後期）散布地。消滅
28	上ノ原	〃　上ノ原	〃	本書
29	西ノ平	〃　西ノ平	〃	〃
30	成岡	〃　成岡	〃	〃
31	平礼石寺	〃　〃	〃	〃
32	湯之谷奥	〃	山麓	〃
33		青山町	川底	磨製石斧採集

第1表　周辺の遺跡一覧表

2湯之谷奥採集の土師器

隈之城平野に西側からのびる丘陵は，末端部で幾条もの枝に分かれており，その間には深浅あるいは広狭様々の谷がはいり込んでいる。川内実業高校付近へ出てくる湯之谷もそのひとつである。湯之谷はその谷頭が3つに分かれ，この南端の谷頭は平礼石寺の北を画する谷にあたる。北端にのびる谷頭では周辺に湧水する清水を集めて小川をつくり，この小川はさらに東へ下り隈之城小学校付近で隈之城川に注いでいる。

遺物の散布しているのは北端の谷頭が丘陵へあがる斜面途中で，ごく限られた範囲である。立地条件からみると生活跡の可能性はほとんどなく，巨石が多く散在していることから巨石を対象とした祭祀遺跡の可能性がある。



第3図　湯之谷奥周辺地形図（15,000分の1）

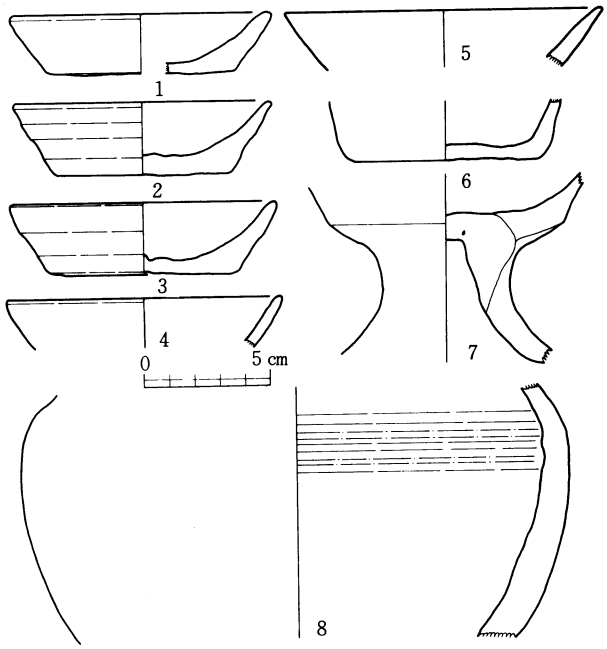
採集した土器はすべて土師器で，坏・高坏・壷がある。表面には黒色石粒（マンガン粒？）がこびりつき，磨滅もみられる。

坏はすべて底部の切り離しがヘラ切りによるものであり，器形によって2種に分けられる。1類は内面の底部と立ちあがりの境が不明瞭なもので，口縁直径が10.2cm～11.0cmのものと，12.6cmとやや大型のものとがある。2類は立ちあがりが直に近く立ちあがるものである。

高坏の坏部は，底部と立ちあがりの境に段をもち，脚部は短かい筒部からゆるやかに広がる裾部へと移る。

壷は丸みをおびた器形をしている。

これらは坏の特長などから平安時代のものであろう。



第4図　湯之谷奥採集の土器

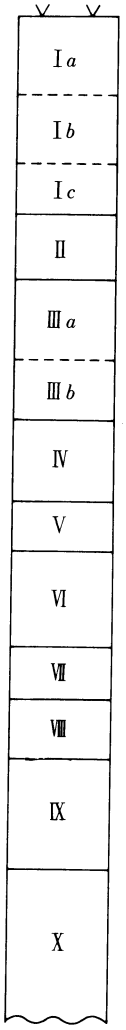
第3章　層序

遺跡の所在する成岡・西ノ平・上ノ原の台地は，基盤岩の溶結凝灰岩を入戸火砕流（シラス）が厚さ3～5mで覆いその上に砂礫層や新期火山灰層などが堆積している。基本的な層序は，西ノ平遺跡の28～30区付近で表層からシラス層まで10層に分類された。成岡・上ノ原両遺跡の中央付近はⅤ・Ⅵ層を欠くところが多い。

Ⅰa層　表層であり，現在の耕作土である。

Ⅰb層　旧耕作土で，淡茶褐色を呈する。

Ⅰc層　濁茶褐色土層で，近世の遺物を包含する。西ノ平遺跡でみられる。



第5図　模式柱状図

Ⅱ層　黒色の腐植土層で，奈良時代～中世の遺物を包含する。

Ⅲa層　黄褐色軟質土層で，通称赤ホヤ，赤ボッコと呼ばれるものである。台地の平坦部では厚さ30～40cmであるが，傾斜面では，二次堆積的な濁黄褐色を呈するところがある。縄文式土器を包含する。

Ⅲb層　黄褐色パミス層で，連続した堆積はなく，ブロック状になるところもある。無遺物層である。

Ⅳ層　黒色粘質土層で，成岡・西ノ平・上ノ原遺跡全体でみられ，縄文時代早期の遺物を包含する。

Ⅴ層　濁茶褐色粘質土層（チョコレート層）で，無遺物層である。西ノ平遺跡の28～30区付近のみに堆積している。成岡・上ノ原遺跡には堆積しない。

Ⅵ層　Ⅳ層と漸移関係にある黒色粘質土層で，無遺物層である。

Ⅶ層　黄褐色粘質土層で，層厚は5～15cmである。

Ⅷ層　淡黄色砂質土層で，シラスの2次堆積的性格をもつ。成岡遺跡では，Ⅶ層とⅧ層に旧石器時代の細石核，細石刃等の旧石器時代の遺物を包含する

Ⅸ層　砂礫層で，台地中央付近では約1.5m堆積し，部分的にパミスと砂層の互層を挟む。無遺物層である。

Ⅹ層　シラス層（入戸火砕流）である。

Ⅱ　調査の経過

第１章　調査に至るまでの経過

第２章　第１次調査の経過

第３章　第２次調査の経過

第１章　調査に至るまでの経過

建設省は隈之城駅付近で終日，渋滞を続ける一般国道３号線の暖和を図るために，昭和47年に木場茶屋駅付近から川内駅付近に至るバイパスの建設を計画した。

一方，昭和41年頃に行われた川内実業高校のグランド造成工事で，縄文式土器などが出土し遺跡の存在が周知された。この隣接地にバイパス建設の計画があることを聞いた県文化課では昭和53年11月に分布調査を実施し，字成岡・西ノ平・上ノ原の台地上に土師器等が散布していることを確認した。

第２章　第１次調査の経過

分布調査の結果にもとづき，建設省と鹿児島県教育委員会は遺跡の処置について協議を重ねていたが，とりあえず確認調査を実施することになった。そして昭和55年12月１日に建設省と鹿児島県教育委員会との間で委託契約が結ばれた。この契約にもとづいて，昭和55年12月１日から確認調査が開始された。

1, 調査体制

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	鹿児島県教育委員会文化課	課長	山下典夫
調査企画者	〃	専門員	本蔵久三
調査担当者	〃	主事	新東晃一
〃	〃	〃	池畑耕一
〃	〃	〃	青崎和憲
〃	〃	〃	中村耕治

2, 概要および日誌抄

調査対象は字成岡の台地端から湯之谷まで約500ｍ におよぶ範囲だったが，用地買収が完了しておらず，買収済の場所に限って実施した。調査は原則として２ｍ 幅のトレンチ調査で実施し，随時拡張の調査をした。現地での調査は２月５日に終了し，３月19日まで重富の収蔵庫にて図面・遺物の整理をした。

(1)成岡遺跡（12月１日～11日，１月29日～２月５日）

成岡遺跡では農道より北の部分（26区付近以北）が未買収地域だったため，調査は農道より南側に限定された。12月１日より調査を開始し，12月11日まで続行した。

12月１日（月）　午前中，北薩教育事務所，川内市社会教育課へあいさつ。発掘用具搬入。
午後よりテント設営，調査開始。

12月８日（月）　18・19－Ｆ・Ｇ区の住居跡（１号住居跡）を調査開始。

西ノ平・上ノ原遺跡の調査をほぼ終了した１月29日より11区以南の調査を重点的に実施し，特に８～10，Ｃ～Ｇ区付近では多くの柱穴が検出されたため，拡張して調査した。

２月５日（木）　平面図作成，レベル記入のあと用具片づけ，用具運搬。

以上の調査によって，竪穴住居跡・柱穴・溝状遺構などが検出された。11区以南については江戸時代以降の建物跡が検出されたので記録保存のための調査をした。安土・桃山時代以前については遺構・遺物とも見出せなかったので調査完了とした。また，27区以北については調査できなかったが，地表散布がみられたため，本調査では12区以北の全地域の調査が必要とされた。

⑵西ノ平遺跡（12月11日～23日，１月20～28日）

12月11日（木）　成岡遺跡より道具の移動。南側の調査を開始。

12月17日（水）　15Ｄ・Ｅ区に大柱穴があり，規模確認のため13・14Ｅ区と15Ｄ・Ｅ区を拡張する。12～15区には柱穴が多いため幅を広げる。

12月18日（木）　11Ｄ区に溝検出。12～15Ｄ区の住居状落込みは方形土坑である。

北側は未買収地域であったが，途中で用地の買収がほぼ解決したため，上ノ原遺跡の調査が一段落したあとで北側の調査，および南側の補充調査を再開。

１月20日（火）　26Ｄ～Ｇ区の掘り下げ開始。奈良時代末～平安時代初頭の遺物多量に出土。

１月28日（水）　８Ｄ・Ｅ区に11Ｄ・Ｅ区より続く溝が検出され，包含層の遺物も多量に出土。西ノ平遺跡の調査は本日で終了したため，土盛りなどして次回の調査に備える。

以上の調査によって，建物・溝状遺構など奈良・平安時代を中心とする遺構の検出が予想され，その範囲はほぼ全域にわたることが判明した。

⑶上ノ原遺跡（12月22日～１月26日）

部分的に未買収地域があったが，ほぼ全域の調査ができた。

12月22日（月）　午後よりトレンチ調査を開始する。

12月23日（火）　10～12Ｄ区付近に縄文式土器が出土。

12月26日（金）　雪のため発掘作業は中止したが，年内の作業が本日までのため，テント・道具の整理。

１月６日（火）　本日より作業再開。19～24Ｆ区の調査。石匙が出土。

１月19日（月）　10～12Ｃ～Ｆ区は縄文時代晩期と古墳時代の土器が出土しているため，拡張して調査を実施。４・５Ｅ区では表層の下にシラスが出てくる。

１月20日・21日（火・水）　10～12Ｃ～Ｆ区の拡張区では縄文時代晩期と古墳時代の土器が少量出土。

１月22日（木）　平面調査は終了。10～12Ｄ区の深掘り。

１月23日（金）　４・５Ｄ区深掘り。

１月26日（月）　４・５Ｆ区深掘り。表層下はシラスとなる。本日で終了する。

上ノ原遺跡では一部を除いて遺物の出土は少なく，包含層なども検出されなかったので，第１次調査で終了した。

第３章　第２次調査の経過

第１次調査の結果，成岡・西ノ平遺跡については第２次調査が必要となり，建設省鹿児島国道工事事務所と鹿児島県教育委員会文化課との間で話し合いが続けられた。そして，昭和56年10月１日に委託者分任支出負担行為担当官九州地方建設局鹿児島国道工事事務所長安藤和人と受託者鹿児島県知事鎌田要人との間に委託契約が締結され，10月12日より調査が始まった。

1, 調査体制

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	鹿児島県教育委員会文化課	課長	猿渡侯昭
	〃	課長補佐	本田武郎
調査企画者	〃	主任文化財研究員	諏訪昭千代
調査担当者	〃	主事	池畑耕一
	〃	文化財調査員	川畑昭光
	〃	主事	牛ノ浜修
	〃	〃	中村耕治
	〃	〃	宮田栄二
事務担当者	〃	主幹兼係長	川畑栄造
	〃	主査	安藤幸次
	〃	主事	山下玲子

調査作業員　（中福良町）山内正利・橋口光男・橋口政吉・土川行盛・徳守キクエ
福田敏子・木練ツルエ・森木サヲ・森木チエ・森木幸子・出来スミ子
出来照代・永吉きぬ子・森木キミ・永吉ノリ子・西山玲子・永田サチ
盛岡イク子・小牟田鈴子・吉留マツエ・徳重幸・山内澄子・山崎睦子
山内ノブ子・宮内和子・多田スミ子・橋口ワキ・原口スミ・星原陽子
新満シズエ・小牟田フミヱ・伊達エツ子
（隈之城町）村野春次・木練光夫・上村清志・村野カヨ子・馬場京子
柏木ツタエ・永田キヌ子・森山盛子・芝原アイ子・上青木ハツミ
橋口イツ子・上青木恵美子
（尾白江町）尾崎精熊・小西キヨ子・辻キヨ子
（都町）若宮アサノ・若宮秋子・山下スミ子・新盛ユキエ
（青山町）徳重岩畝・徳重ノブ子・有田静子
（永利町）松下重信・若松美利・車田鈴子・松下みち子・野元サダ子
福別エミ・勝岡チヅ子
（平佐町）相良靖文・上園敏郎・土屋伸寿・瀬戸口朋子

（その他）碇山浩美・上尾崎幸治・有馬通子・福元由美子・前園
瀬口

（整理作業員）　喜入カツエ・陣之内サチ子・坂口テル・重信紀子・竹之内由利子
山下治子・鎮守セツ子・川口セツ子・前之園俊子・中原己美子

2. 概要および日誌抄

(1)昭和56年度

①成岡遺跡（10月12日～12月23日）

農道を挟んで北側はいぜんとして未買収地域があったため，南側から表土はぎを始めた。江戸時代以降の調査を終えた時点で，用地買収が完了しなかったため，調査を中断して，西ノ平遺跡へ移動した。北側は買収地域の中で確認調査をし，遺跡の広がりを確認した。

10月12日（月）　作業員へ調査の工程，遺跡の性格，雇用条件等を説明。プレハブ設置場所の清掃。器材搬入。遺跡の草刈り。川内市教委社会教育課へあいさつ。

10月14日（水）　プレハブへ道具搬入。遺跡の草刈り。テント・看板の設置。杭打ち。北半分のトレンチ調査開始（15日まで）。

10月15日（木）　21～23Ａ・Ｂ区より表土はぎ開始。北半分からも遺物が出土する。

10月19日（月）　20～23Ａ・Ｂ区の表土はぎはほぼ終了。古墳時代の竪穴住居跡２基。

11月４日（水）　寺田橋のたもとにあるベンチマーク（ＬＨ10.589ｍ）よりレベルを移動。

11月10日（火）　16・17Ｂ区付近に墓石が散在しており，そのうちいくらかは元位置にある。

11月12日（木）　18・19Ａ区製糸工場の跡を検出する。

11月13日（金）　19Ｂ区にも墓石があり，その付近で３基の墓坑。２基には人骨が残存。

11月17日（火）　24Ｃ～Ｆ区の溝（近世）掘りあげ。

11月19日（木）　17Ｂ～20Ｂ区の墓坑にある人骨を４体取りあげ（長崎大学）

12月２日（水）　17Ｂ区付近の墓坑は16基で，うち11基に人骨が残存。多くの墓坑に寛永通宝がある。台地北側の低い段にグリッドを設定し，掘り下げる。

12月３日（木）　16・17Ｂ区の墓坑を写真撮影，実測（９日まで）。

12月７日（月）　土の埋め戻し（14日まで）。平面実測およびレベル記入（23日まで）。

12月９日（水）　人骨取りあげ（長崎大学，10日まで）。

②西ノ平遺跡（12月７日～３月31日）

排土場所がないため20区以南と，21区以北とに分けて調査した。20区以南の土は12区以南，Ｈ区以東の地点と，21区以北および，西側の畑を借用して置き，20区以南の調査終了後，ベルトコンベアを使用して土を元に戻した。

12月７日（月）　道具を移動。草刈り。テント設置場所・進入路・駐車場などの整地。

12月８日（火）　草刈り。ベルトコンベアすえつけ。南端から表土はぎ開始。

12月10日（木）　７Ｆ区に土師器坏・皿の完形品が５点出土。７Ｇ区からは軽石製岩偶出土。

12月18日（金）　７Ｆ区の土器は数段になっており，総計11個出土。他に古銭２点ある。

12月23日（水）　20H・Ⅰ区にかまど・炉などが集中している。
12月25日（金）　年末のため現場作業は本日で終わる。道具の整理・点検。
1月5日（火）　調査再開。
1月8日（金）　16E・F区の2層から多量の土師器坏・皿，須恵器，青磁，白磁が出土。
1月12日（火）　南より遺構検出開始。
1月25日（月）　21区以北も表土はぎ開始。
1月26日（火）　坪事業のある建物が2棟（建物1と建物2）ある。
2月12日（金）　建物1の柱穴にはすべて底に礎板がある。
2月13日（土）　14時より現地説明会（約150名参加）。
2月17日（水）　建物2もすべて柱痕跡があり，礎板をもつ。
2月26日（金）　20区以南の航空写真撮影。
3月9日（火）　建物2掘りあげ。柱穴中に青白磁などがある。7D区～8F区に道路跡。
3月11日（木）　盛り土返しを開始する。
3月19日（金）　19G区に土師器坏・皿が7点並んでいる。
3月27日（土）　今年度の発掘調査を終了する。道具の清掃・点検。
3月29日（月）　図面・写真・遺物の整理（31日まで）。

(2)昭和57年度

57年度も引き続き当初から再開する予定であったが，両者に行き違いがあって2ケ月足らずの間，空白期間が生じた。したがって，委託者分任支出負担行為担当官九州地方建設局鹿児島国道工事事務所長伊東仁史と受託者鹿児島県知事鎌田要人との間に委託契約が締結されたのは5月1日であった。調査は5月24日に，まず西ノ平遺跡から開始された。

①西ノ平遺跡（5月24日～9月10日，10月13日～10月27日）

5月24日（月）　午前中に電話申し込み，川内市教委へあいさつ。午後道具搬入。調査再開。
5月26日（水）　盛り土返しをブルドーザー,ショベルカーを使って実施(28日まで)。
6月7日（月）　23E区で円面硯が出土した。
6月11日（金）　25K区で室町時代の火葬場を検出する。骨片・古銭が共伴。
6月30日（水）　中世人骨の取りあげ（長崎大学，7月1日まで）。
7月5日（月）　25G区，28G区に深い円形ピットがある。
7月13日（火）　近世墓石の写真撮影。
7月14日（水）　地神のあった巨木の下から多くの層塔が出土した（21D・E区）。
7月15日（木）　近世墓坑の掘りあげを開始。
7月20日（火）　中福良地区の児童に公民館でスライドを使って遺跡説明（約70名参加）。
7月22日（木）　23E区のピットには土師器かめが立位で置かれている。
8月2日（月）　人骨の取りあげ（長崎大学）。テントを成岡遺跡へ移動。
8月4日（水）　平面実測のみを続行する（9月10日まで）。

８月７日（土）　14時より現地説明会（約20名参加）。
９月27日（月）　航空写真のために北半部を清掃（28日まで）。
10月13日（水）　11Ｈ区・25Ｆ区の土坑を写真撮影。
10月14日（木）　建物のつながりを検討。地層断面図作成のための深掘り開始（19日まで）。
10月18日（月）　北東隅の調査をするため表土をショベルカーで除去（20日まで）。
10月21日（木）　北東隅の調査を開始する。
10月27日（水）　すべての調査を完了した。

②成岡遺跡（８月３日～11月25日）

８月３日（火）　草刈り。ベルトコンベア移動，すえつけ。
８月４日（水）　北半区の表土はぎを開始する。
８月19日（木）　北半区の表土はぎをほぼ終了し，南半区の表土削りにはいる。
８月23日（月）　17Ｌ区の土坑から白磁台付皿や洪武通宝・ガラス玉が出土する。
８月24日（火）　Ｊ区で南北に続く溝からは平安末～鎌倉初の磁器などが多量に出土する。
８月31日（火）　18号住居跡からは鎌倉時代の須恵器などが出土する。
９月22日（水）　７号住居跡の周辺に墓坑があり，２基には人骨がある。
10月18日（金）　航空写真撮影。全体写真撮影。
10月12日（火）　断面実測用のための深掘り作業中，28～30Ｉ区付近で細石刃・細石核出土
10月14日（木）　平面実測のみを継続する。
10月27日（水）　深掘りを開始する。
11月１日（月）　遺物を収蔵庫へ搬出する。
11月６日（土）　14時より現地説明会（約40名参加）。
11月９日（火）　19時より中福良下公民館で，スライド説明会（60名参加）。
11月16日（火）　器材を重富へ搬出。プレハブの撤去。
11月17日（水）　以後は実測および遺物の取りあげ。
11月25日（木）　本日で，今年度の調査はすべて完了した。

③重富収蔵庫（５月10日～３月31日）

５月10日より２名で遺物の水洗・注記・接合・復元等を開始し，11月１日にはさらに５名増員した。11月26日からは調査員２名も加わって，本格的に整理作業を開始し，２月25日の入札に間にあわせた。

3. 調査中のおもな見学者

木場武則（川内市立図書館）新東晃一（明治百年記念館準備室）富田逸郎（出水高校）高倉洋彰・高橋章（九州歴史資料館）中村明蔵・永山修一（ラサール高校）村田熙（県文化財審議員）上村俊雄（鹿児島大学）日高孝治（宮崎県教委文化課）宮本長二郎（奈良文化財研究所）島津義昭・広瀬正照・鶴島俊彦・西住欣一郎（熊本県教委文化課）川内市文化財審議会・川内市ふるさと学級・川辺郡の図書館関係者，川内実業高校土木科，川内市教育委員会

Ⅲ　成岡遺跡の調査

第１章　概　要
第２章　旧石器時代
第３章　縄文時代
第４章　古墳時代
第５章　奈良～鎌倉時代
第６章　室町・安土桃山時代
第７章　江戸時代
第８章　明治・大正時代
第９章　まとめ

第1章　概　　要

バイパスは遺跡の東端付近を縦走して抜ける。バイパス予定地域で，台地は3段に分かれる。

南から記すと，まず11区以南の部分がそれで，幅は30～50m ある。この段は台地端部だったのを江戸時代あるいは明治時代になって北端付近を削ったため段となったものである。この段では8～10C～D区付近に江戸時代あるいは明治時代以降に建物があり，10C区にはコンクリート枠のはいった井戸もあった。大小多くの柱穴あるいは土坑があり，中には陶磁器もはいっていたが，建物としてのまとまりはつかめなかった。約800㎡を調査した。

次の段がもっとも広大な段で，いわゆる遺跡のある段である。12区～38区のほぼ全域を調査したが，江戸時代以前に深く削り取られた場所，掘り切り道路，山林は残存度が悪いため調査しなかった。24～33区，A～E区の部分は未買収のため，次回の調査分として残した。したがって，今回の調査面積は約5600㎡だった。次に時代を追って概要を記したい。

旧石器時代の遺物は散在しているが，特に27～30区，Ⅰ～K区付近には集中して出土するため再度，調査をやることとし，今回は未完了のままでおいた。剝片尖頭器・細石核などが出土。

縄文時代の遺物も広く散布しているが，集中的に出る所はなく，遺構も検出できなかった。前平式土器から夜臼式土器まで各時期の土器が出土したが，晩期の土器を除いて多くは数片のみの出土であった。

古墳時代は14区から30区の範囲に16軒の竪穴住居跡が検出された。すべて方形をしており，中央に炉跡をもっている点は共通している。主柱穴は検出されなかった。住居内にはかめ形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・砥石などがはいっていたが，4号住居跡は廃棄場所として使われたらしく多量の土器が包含されていた。1号・5号・10号・12号・15号住居跡の遺物には須恵器坏・かめなどが含まれており，時期を決める資料として重要である。

奈良・平安時代の遺物も多く出土したが，はっきりした遺構は12G・H区の土坑のみであった。多くの遺物の中には越州窯系青磁・緑釉土器・猿面硯・転用硯なども含まれており，土坑より出土した土師器は編年上重要である。

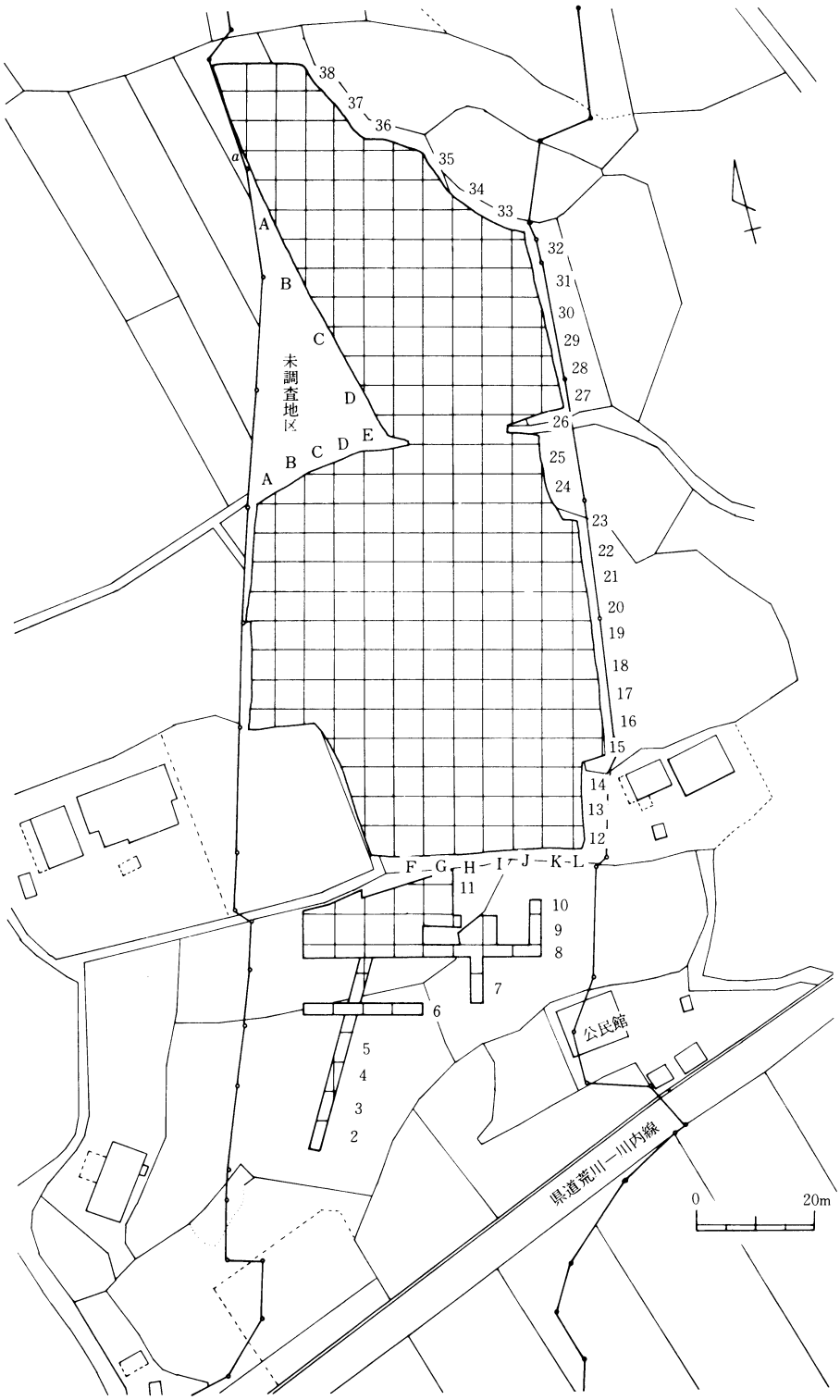
鎌倉時代前半の溝と竪穴住居跡3軒が検出された。竪穴住居跡は3軒とも小型で，竪穴周囲に柱穴を配した形態は似ている。溝からは磁器・魚住焼など多くの遺物が出土した。

室町・安土桃山時代の青磁・白磁なども出ているが，割合に少ない。数珠・洪武通宝などを副葬した墓坑が1基検出された。20 H·I 区付近にある円形土坑も同時期の可能性が強い。

江戸時代の遺物も多量に出土した。墓石を伴う墓など，長方形の墓坑が28基検出され，このうち24基には人骨も残っていた。寛永通宝・キセルなどが副葬されていた。建物跡は遺構として残っておらず，検出できなかった。

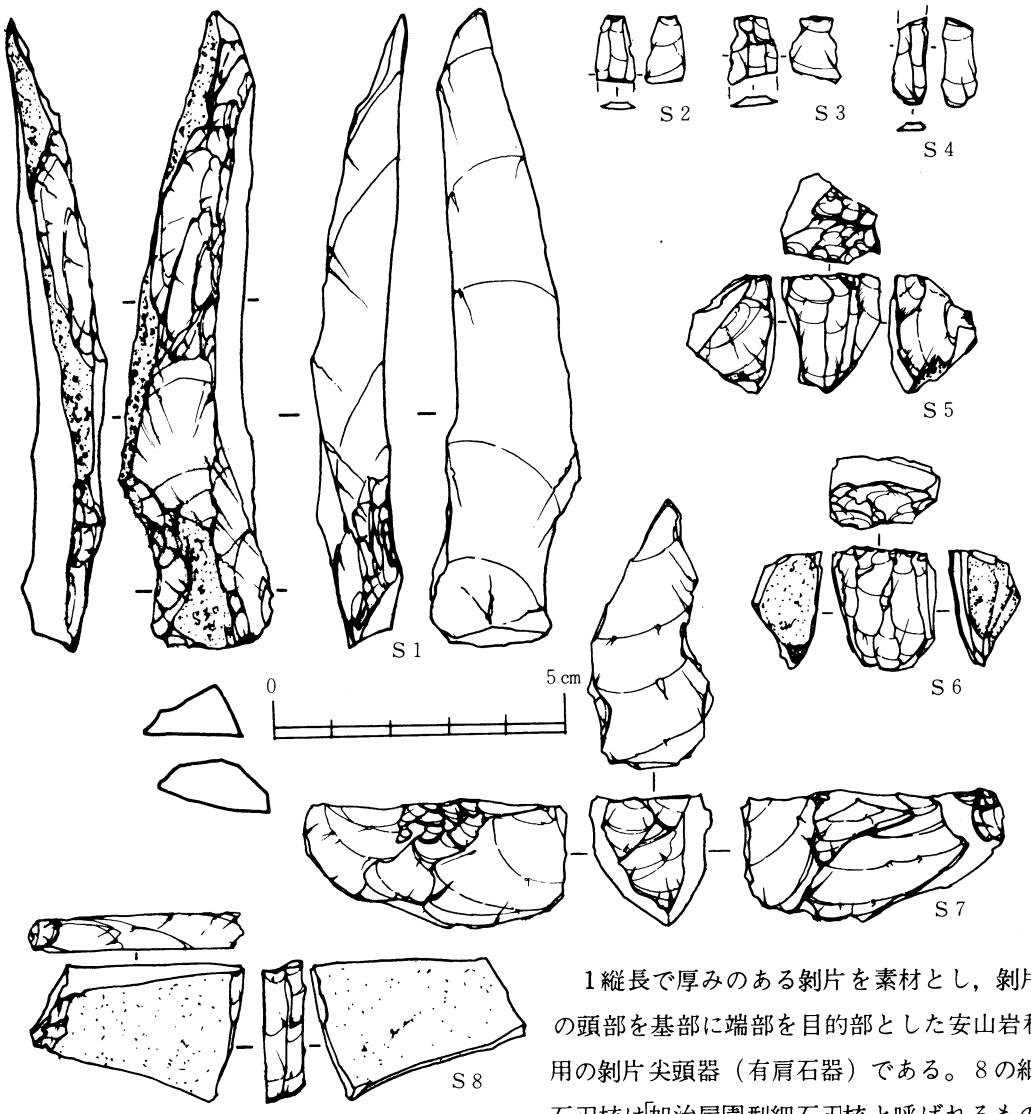
明治末ないしは大正初めには製糸工場があったようで，17・18AB区にその跡が検出された。

北端の段は段差10mと急崖でおりており，さらに北の谷水田との比高2mを測る。この段は崖下を削って幅15m ほどの平坦地にしたもので，2m × 2m の穴を4ケ所掘った。



第6図　成岡遺跡グリッド配置図

第２章　旧石器時代



第７図　旧石器時代の石器

１縦長で厚みのある剥片を素材とし，剥片の頭部を基部に端部を目的部とした安山岩利用の剥片尖頭器（有肩石器）である。８の細石刃核は「加治屋園型細石刃核」と呼ばれるもので，石材に凝灰岩質頁岩，打面は一回の加撃により作り出し打面調整は行われない。なお打面は，細石刃剥離面に対し鈍角をなす面が選ばれる条件となっている。５・６の細石刃核は，黒曜石を用い，扁平で板状の小礫を素材とし，打面形成の後，側面・背面に粗い（密でない）石核調整剥離を行い，その結果，多くの礫面を残すこととなる。７はブランクと思われ，舟形状を呈している。側面・細石刃剥離面への石核調整は，全て打面方向より行っている。このことより「舟野型細石刃核」を意図していることがうかがえる。

第3章　縄　文　時　代

1　土器および分布

土器は早期・後期・晩期の3時期にわたって出土した。分布としては33～39－A～D区に集中して晩期が出土しているが全体的に北部に晩期，南部に早期が多い。表層中が主であるため包含状態は不明である。ただ晩期の小さなまとまりが5～6ヶ所，早期のまとまりが3ヶ所みられる。

早期の遺物は押型文土器系の手向山式，貝殻文土器系の前平式，石坂式と円筒の土器が出土している。

第2表　縄文式土器一覧表（1）……早期

番号	出土区	層	特　　徴	型　式
6	35C	2	円筒土器の口縁部で波状口縁の形態をなしている。　文様は口唇部が貝殻腹縁による押圧文で外器面が貝殻条痕の地文に3条の貝殻腹縁による刺突文を施している。焼成は良く，胎土は，石英・長石・角閃石を含んでいる。色調は茶褐色を呈する。	石　坂
7	27H	1	角筒土器の口縁部で波状口縁の形態をなしている。　文様は口唇部が貝殻腹縁による押圧文で外器面は口縁部に縦位の貝殻腹縁，押圧文があり，横位の貝殻腹縁条痕の地文に横位と斜行の貝殻腹縁刺突文が施してある。　胎土は石英・長石・角閃石を含み，焼成は良い。　色調は茶褐色を呈す。	前　平
8	17J	溝	円筒土器の口縁部である。口唇部は丸味をおび，外器面は横位の貝殻腹縁による条痕がみられる。　胎土は，石英長石・角閃石を含み，焼成は良い。　色調は明茶褐色を呈す。　鹿児島県北部より熊本県にみられる土器と考えられる。	不　明
9	18F	1	押型文土器で外反する口縁部である。　文様は口唇部に押圧刻目文を，外器面には山形押型文を縦位に全面，内器面に横位に1条施している。　胎土は，石英・長石を含む。焼成は良い。　色調は淡茶褐色。	手向山？
10	32F	1	押型文土器で外反する口縁部である。　文様は口唇部に押圧刻目文を外器面には山形押型文を縦位に施している。胎土は石英・長石を含む。　焼成は良い。　この土器の文様の原体の長さは，約3cmと思われる。	手向山？
11	20G	P-1	押型文土器の口縁部である。口唇部には押圧刻目文を施こし，外器面には山形押型文を縦位に，内器面には横位に施している。　胎土は石英・長石を含む。　焼成は良い。　色調は明褐色。	手向山？
12	18D	1	押型文土器である。　部位としては肩部と思われる。　山形押型文を横位に施してある。胎土は石英・長石を含む焼成は良い。　色調は明茶褐色。	手向山？
13	18F	1	押型文土器である。　部位としては胴部と思われる。　山形押型文を横位に施している。　胎土は長石・石英を含んでいるが小礫も混入している。　焼成はやや不良。　色調は茶褐色。	
14	H 8	埋土	押型文土器である。部位としては胴部と思われる。山形押型文を縦位に施している。　胎土は長石・石英を含んでいる。　焼成は良い。　色調は赤褐色である。	
15	17E	1	押形文土器である。　部位としては頸部と思われる。　山形押型文を縦位に施している。　胎土は小礫が混入している。　焼成は良い。　色調は明茶褐色。	
16	22N	P-4	押型文土器である。部位としては胴部と思われる山形押型文を横位に施している。胎土は長石・石英を含んでいる。焼成は良い。　色調は茶褐色。	
17	23G	1	押型文土器である。　部位としては胴部と思われる。若干幅の狭い山形押型文を施している。　胎土は石英・長石を含み，焼成は良い。　色調は赤茶褐色を呈している。	
18	23B	P-1	押型文土器の底部で平底である。　山形押型文が若干みられる。　底面の調整は篦調整である。　胎土は石英長石を含み焼成は良い。色調は茶褐色。	
19	18F	1	押型文土器の底部である。　この底部は上げ底で幅2cm帯粘土を縁に貼り付けている。　文様は山形押型文を横位に施している。　胎土は長石・石英を含む。　焼成は良い。色調は茶褐色を呈す。	
20	26B	1	押型文土器の底部である。　この底部は平底で角が丸味をもっている。　文様は山形押型文を横位に施している。胎土は石英・長石を含む。　焼成は良い。　色調は明茶褐色を呈す。	
21	26G	2	押型文土器の底部である。　19と同一個体である。	
22	33F	2	押型文土器である。　口縁部に山形押型文を斜状に施している。　この山形押型文は前述のと異なり2条の山形を斜状に施している。口唇部は断面三角形で内側に押圧刻目がある。　焼成は良い。　胎土は小礫混入。	不　明

23	H－8	埋土	押型文土器の口縁部である。　楕円押型文で大形である。胎土は長石・石英を含み，焼成は若干良くない。　色調は茶褐色を呈す。	
24	H－8	埋土	楕円押型文土器の口縁部である。　口唇部は断面三角形をなす。　24と同一個体と思われる。	
25	18－F	3	楕円押型文土器である。　部位としては，頸部にあたり，弯曲している。　胎土は長石・石英・小礫を含み，焼成は良い。　色調は明茶褐色を呈す。　楕円文は大形である。	
26	H－12	埋土	楕円押型文土器の肩部である。「く」字状になり，押型文は小さく，縦位に施している。　胎土は石英・長石を含み，小礫もみられる。　焼成は若干良くない。　色調は茶褐色を呈す。	
27	20-H	P-13	楕円押型文土器の胴部である。　押型文の文様は荒い。　胎土は石英・長石を含むが小礫も含んでいる。　焼成は良くない。　色調は明茶褐色である。調整は粗い。	
28	表採		楕円押型文の胴部である。　調整は粗い。　胎土は石英・長石を含み，焼成は良い。　色調は茶褐色を呈す。	
29	19D	1	楕円押型文の胴部である。調整は粗い。　胎土は石英・長石を含み焼成は良くない。　色調は茶褐色を呈す。	
30	H－6	埋土	楕円押型文の胴部である。　調整は粗い。　胎土は石英・長石を含み，焼成は良い。　色調は茶褐色を呈す。	
31	表採		楕円押型文の形態であるが，原体は楕円部を掘り込む殻粒の型をしていると思われる。　殻粒文は小さく密である。胎土は長石・石英・蛇母を含むが小礫も含んでいる。　焼成は良い。　色調は茶褐色を呈す。	

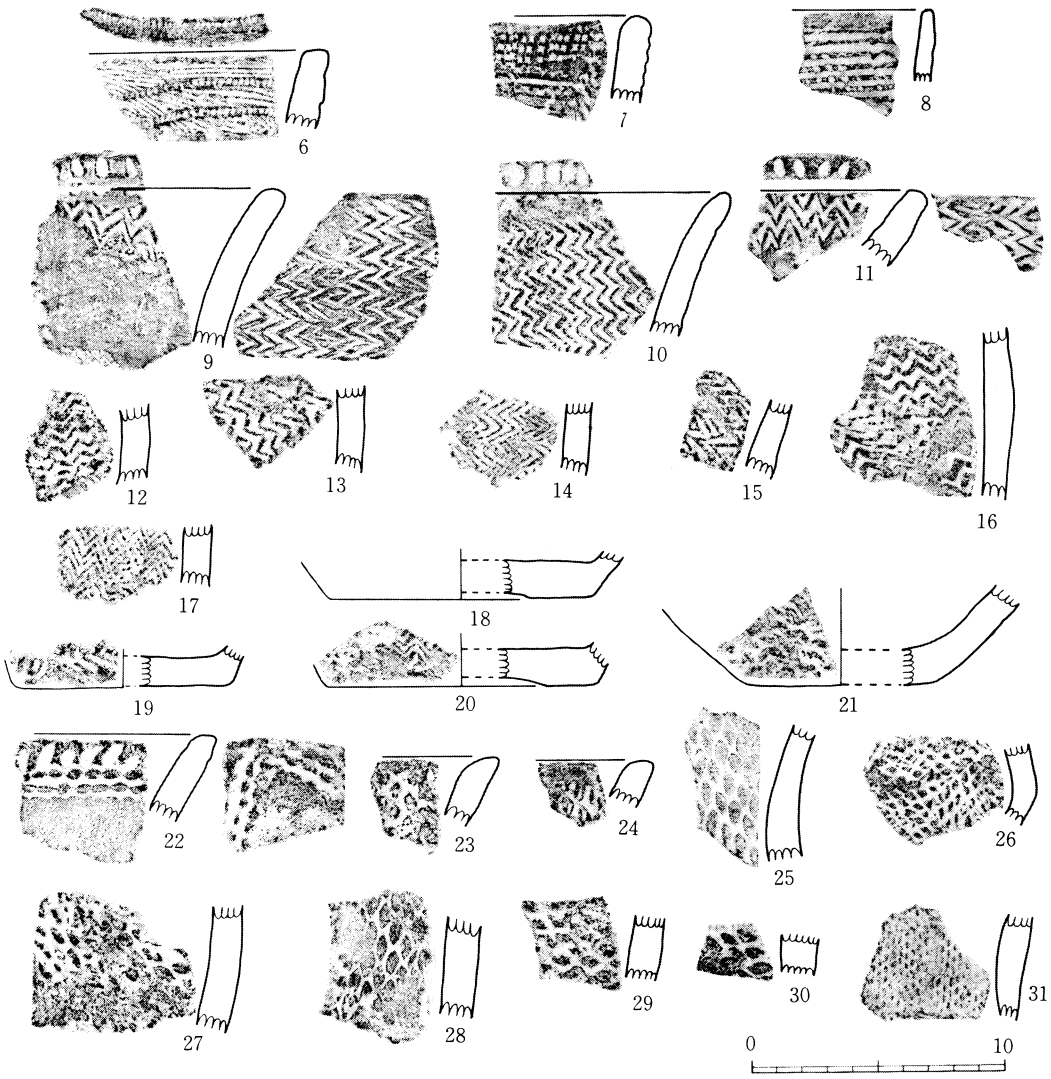
晩期の遺物は晩期Ⅱ式，Ⅲ式が出土している。器形としては甕形土器・鉢形土器・浅鉢形土器が出土している。晩期Ⅱ式でも甕形土器はⅡa 式・Ⅱb 式とが出土している。Ⅱa 式は35～43，Ⅱb 式は44～46があたる。

第３表　縄文式土器一覧表　(2)……後期・晩期

番号	出土区	層	特　徴	型　式
32	37A	1	磨消縄文土器である。　部位としては口縁部であり，山形突起部の近くであるため口唇部に５点の刻目がある。口唇部は広く沈線もみられる。　文様は沈線と磨消縄文の組み合わせである。焼成・調整ともに良い。	鐘ヶ崎
33	30E	P１	口縁部が肥厚する土器である。　文様は貝殻腹線の押圧である。胎土は小礫が混入する。　焼成は良く，調整が悪い。　色調は赤黄褐色を呈する。	市　来
34	H－12	埋土	若干上げ底の底部である。　底部の角は丸味を帯びている。　茶褐色を呈し，焼成は良い。胎土は小礫を含む。底面には炭化物が付着している。　後期の土期と思われる。	
35	38E	1	晩期の甕形土器の口縁部と思われる。　口縁端部は内湾し，山形の口縁と思われる。器面は条痕が両面ともみられる。　胎土は長石・石英が混入され，焼成は良い。　色調は暗茶褐色を呈している。	晩期Ⅱ式a
36	31D	1	甕形土器の口縁部である。「く」字形に外反する中で口唇部は内側に突起している。　器面は篦調整とナデ調整である。　胎土は長石・石英を含み焼成は良い。　色調は暗茶褐色を呈している。	〃
37	35C	P-3	甕形土器の口縁部である。「く」の字形に外反するもので，山形口縁状になると思われる。　器面はハケ目調整痕があり，茶褐色を呈する。　胎土は長石・石英を含み焼成は良い。	〃
38	34D	1	甕形土器の口縁部である。　器面は内側に篦による条痕がみられ，色調は暗茶褐色を呈している。　胎土は長石・石英を含み焼成は良い。	〃
39	19D	1	甕形土器の口縁部である。器面には条痕の器面調整がみられる。　胎土は長石・石英を含み焼成は良い。　色調は外が茶褐色で，内が黒褐色を呈す。	〃
40	表採		甕形土器の口縁部である。　器面は条痕の調整痕がみられ，内側の調整精製に近い。　この土器片は山形口縁と思われる。　色調は黒褐色を呈している。	〃
41	34D	1	甕形土器の口縁部である。　外器面に条痕がみられる。　色調は外が暗茶褐色で，内が茶褐色を呈す。　胎土は長石・石英を含み，小礫も混入している。　焼成は良い。	〃
42	33C	1	甕形土器の口縁部である。　器面調整は篦で斜状に調整した上でくびれ部近くは横位に調整している。　内面は横位の篦調整である。胎土は石英・長石を含み，焼成は良い。　色調は赤茶褐色を呈す。	〃
43	35C	1	甕形土器の口縁部である。器面調整は篦調整痕がみられる。　胎土は石英・長石を含み焼成は良い。　色調は暗茶褐色を呈している。	〃
44	21R	1	甕形土器の口縁部である。口唇部は厚く丸味を帯びている。調整は半精製であり，色調は黒褐色を呈している。胎土は長石・石英を含み焼成は良い。　晩期Ⅱ式でも，後半にあたると思われる。	晩期Ⅱ式b
45	31C	1	甕形土器の口縁部である。　口唇部は厚く，丸味を帯びている。　調整は半精製部分と荒い部分がある。色調は外面が暗茶褐色を呈し，内面が赤茶褐色を呈している。　胎土は小礫が混入され，焼成は良い。	〃
46	14E	1	甕形土器の口縁部である。口唇部は厚く丸味を帯び，外側は突帯状になっている。　口縁部は内向している。　胎土は小礫を含み，長石・石英がみられる。色調は赤茶褐色を呈する。	〃
47	32E	P-3	甕形土器の頸部である。　長石や石英を含み小礫も混入している。　焼成は荒い。　色調は茶褐色を呈する。	晩期Ⅱ式a
48	34C	P-2	甕形土器の頸部～胴部である。　器面調整は篦調整で胎土は小礫を含む。　色調は外器面が黒褐色，内器面が淡茶褐色を呈する。	〃
49	30G	1	甕形土器の底部である。　底部の外周に粘土帯を廻らしてつくった厚手の底部であるため，若干上げ底状になっている。　調整はヘラナデで焼成は良い。　胎土は小礫が混入。　色調は赤褐色。	〃
50	37a	1	甕形土器の底部である。　外周に粘土帯を廻らした厚手の底部であるため，若干上げ底状になっている。　色調は茶褐色を呈し，焼成は良い。　胎土は長石・石英を含み焼成は良い。	〃
51	36D	1	甕形土器の底部である。　外周に粘土帯を廻らした底部である。　若干上げ底状になっている。器面調整は悪い。胎土は長石・石英を含み，色調は茶褐色を呈している。	〃
52	33C	1	鉢形土器の底部である。外周に粘土帯を廻らした底部で，中央部は粘土板を貼りつけている。色調は茶褐色で，調整は良いが後から部分的に剝がれている。内側は黒褐色を呈し外側は茶褐色を呈する。胎土は長石・石英を含む。	晩期Ⅲ式

53	37A	2	甕形土器の底部である。円盤貼り付けの形態で平底である。　調整は悪いが焼成は良い。胎土は小礫を含み色調は赤褐色を呈する。	晩期Ⅲ式
54	34A	1	甕形土器の底部である。　円盤貼り付けの形態で平底である。焼成は良い。胎土は長石・石英等を含み色調は赤茶褐色を呈する。	〃
55	22D	1	鉢形土器の口縁部である。　肥厚したもので底部近くには組織痕がみられる。　組織痕は蓆目と思われる。　内面は篦調整痕がみられる。　色調は暗茶褐色を呈し，焼成は良い。　小礫を少々含む。	晩期Ⅱ式
56	23C	1	鉢形土器の口縁部である。篦調整の土器で赤茶褐色を呈している。　下部には組織痕がみられる。　組織痕は蓆目と思われる。　焼成は良い。　胎土は石英・長石を含む。内面は半精製である。	〃
57	35B	1	鉢形土器の口縁部である。篦調整で半精製である。胎土は石英・長石を含み焼成は良い。色調は茶褐色を呈する。	〃
58	H-4	埋土	鉢形土器の口縁部である。　半精製土器で外側が暗茶褐色で，内側も暗茶褐色である。胎土は小礫混入で焼成は良い	〃
59	21D	溝	鉢形土器の口縁部である。　粗製の土器で，口縁部は肥厚している。　下部は蓆目圧痕の組織痕である。　胎土は小礫混入で焼成は良い。　色調は暗茶褐色を呈する。	〃
62	H-5	埋土	鉢形土器の底部である。蓆目圧痕土器で焼成は良い。　胎土は長石・石英を含み色調は茶褐色を呈する。	〃
60	30G	1	鉢形土器で蓆目圧痕土器である。　色調は茶褐色を呈し，焼成は良い。　胎土は長石・石英を含む。	〃
61	20C	土-1	鉢形土器で蓆目圧痕土器である。　色調は暗茶褐色で焼成は良い。　胎土は長石・石英を含む。　縦糸を基本に横糸を通している。　内面は半精製である。	〃
63	H-5	埋土	鉢形土器の底部であり，蓆目圧痕土器である。色調は赤茶褐色で焼成は良い。　胎土は長石・石英を含む。縦糸を基本に横糸を通している。　内面は篦調製である。	〃
64	34C	1	浅鉢の土器で口縁線部にあたる。外反し，口唇部は肥厚し，丸味をもっている。　内面は黒色研磨をしているが，外面は茶褐色の研磨である。　外面の調整が悪い。　胎土は長石・石英を含み良い。　焼成は良い。	〃
65	34a	P-4	浅鉢の口縁である。　精製された黒色研磨土器である。　口唇部は肥厚し「く」字状になる薄手の土器である。焼成は良い。胎土も細砂を使用し黒色をしている。	〃
66	13G	1	浅鉢の口縁部である。精製された土器である。　口唇部が肥厚している黒色研磨土器である。　内側が黒色で，外側が茶褐色の黒色研磨土器である。　胎土は細砂を使用。黒色をしている。焼成は良い。	〃
67	34C	D-3	浅鉢の口縁部である。　精製された黒色研磨土器である。口唇部の肥厚は少ない胎土は細砂を使用し黒色をしている。　焼成は良い。	〃
68	H-2	埋土	浅鉢の口縁部である。　精製された土器である。口唇部は肥厚している。　色調は茶褐色をしている。　胎土は細砂を使用し，黒色をしている。　焼成は良い。	〃
69	34C	1	浅鉢の肩部である。　頸部は「く」字状に折れ肩部から胴部に移る部分も同様である。　黒色研磨土器で胎土は良く，黒色をしている。　焼成も良い。	〃
70	32C	1	浅鉢の頸，肩部である。頸部，肩部とも「く」字状に折れる。精製土器で黒色研磨土器である。　胎土は細砂を使用し，黒色である。焼成は良い。	〃
71	34D	1	浅鉢の肩部である。　肩部は「く」字状に折れている精製土器で黒色研磨土器である。　胎土は細砂を使用し，黒色である。　焼成は良い。	〃
72	13G	1	浅鉢の頸部で胴部にかけてである。　頸部，肩部ともに「く」字状に折れている。　精製された黒色研磨土器である。　胎土は細砂を使用し，黒色を呈する。　焼成は良い。	〃
73	H-12	埋土	浅鉢で，精製された黒色研磨土器にはいるが精製度は良くない。口縁部から頸部にかけて短かく，口縁部の肥厚も薄い，頸部は「く」字状に折れ肩部は丸味をもつ，胎土は黒色を呈し細砂を使用している。　焼成は良い。	〃
74	5D	1	浅鉢で精製された黒色研磨土器である。　口唇部は肥厚が少なく，口縁部は短かい。　頸部は「く」字状に折れているが外側は丸味をもっている。　肩部は外側が丸味をもち，内側が谷線をもって折曲している。　胎土は黒色を呈し，細砂を使用している。　焼成は良い。	〃
75	38A	1	浅鉢で精製された黒色研磨土器である。　口唇部は肥厚し頸部は「く」字状に折れている。　内側は山線がみえるが，外側の谷線は丸味をもっている。　肩部も「く」字状に折れるが内側は丸味をもつ谷線，外側は山線の折れ線で折曲している。　胎土は黒色を呈し，焼成は良い。	〃
76	30C	1	鉢形土器である。　茶褐色を呈した胴部と思われる。　胎土は小礫が混入されている。焼成は良い。　56～63の中にはいると思われる。	
78	24B	1	上げ底の形態をしている。　浅鉢の底部であると思われる。　胎土は細砂を使用し黒色を呈している精製度は良くない。　色調は茶褐色を呈し，焼成は良い。	
77	24B	1	甕形土器の口縁部である。口縁部に突帯を廻らし刻目を施している。突帯は口唇部より貼り付けている。外側の器面は条痕の調整痕がみられ茶褐色を呈し，内側は黒色をした撫調整である。焼成は良い。胎土は黒褐色を呈す。	

早期の押型文土器の形式で手向山式としたのは器形上類似しているためである。口縁部が外反し「く」字状の肩部をもち，平底を呈するものである。文様は文様上では2種類以上の施文がないため手向山式とはいえない。一応ここでは器形を重視した。なお手向山式の類は今後の資料をまたねばならない。



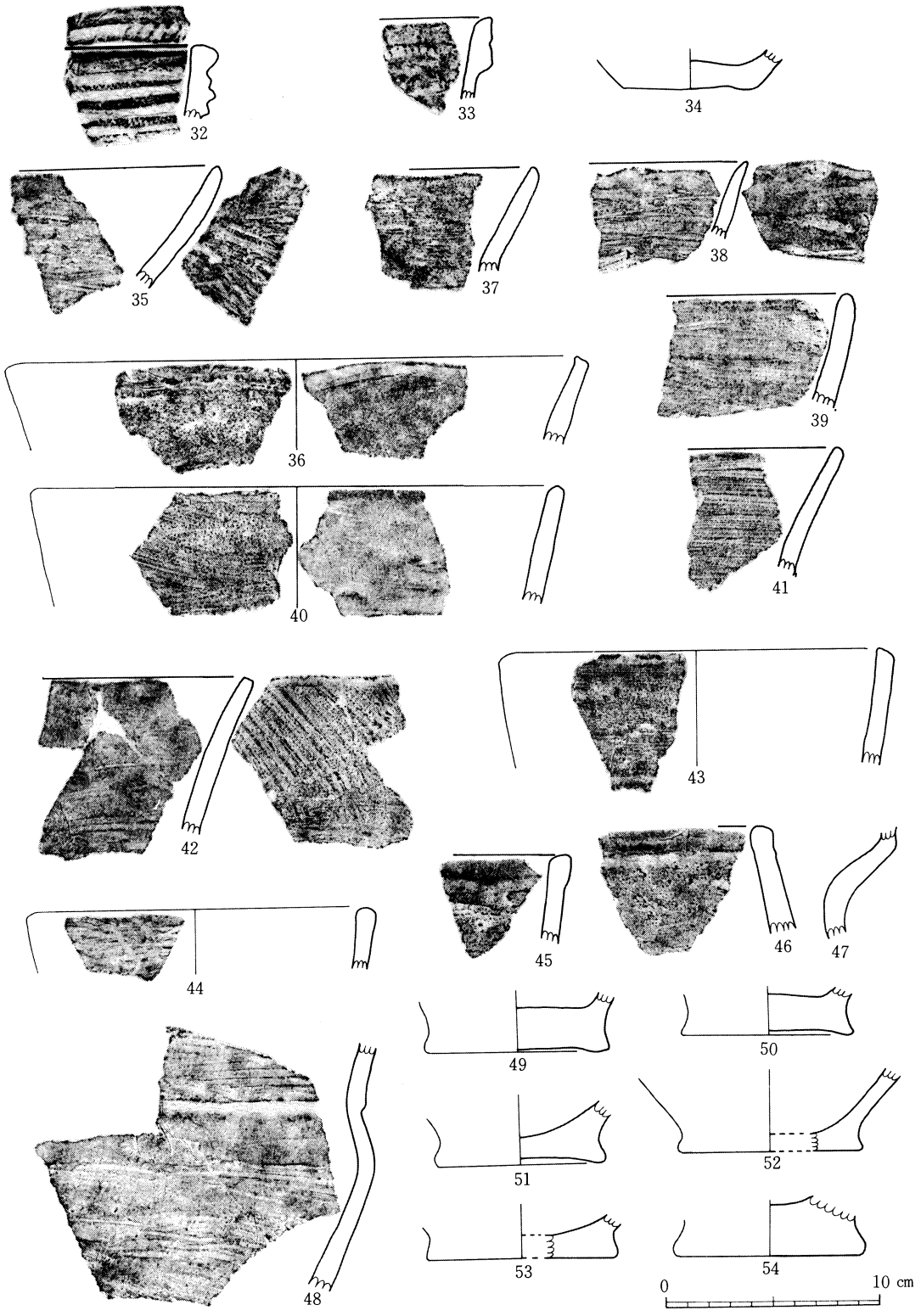
第8図　縄文式土器（1）

2　石器

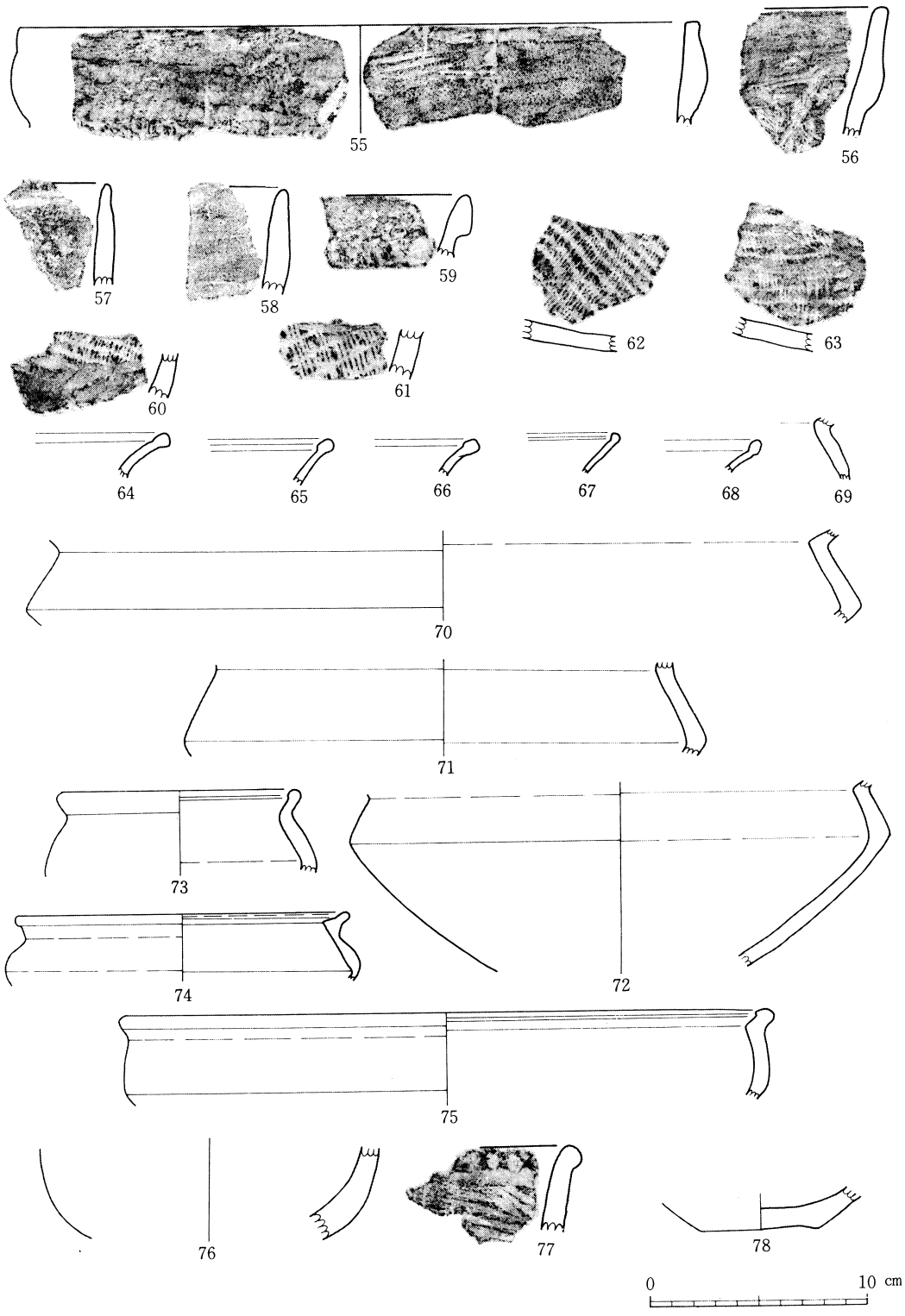
石器は11点出土した。石匙・磨製石斧・凹石・敲石である。

第4表　石器一覧表

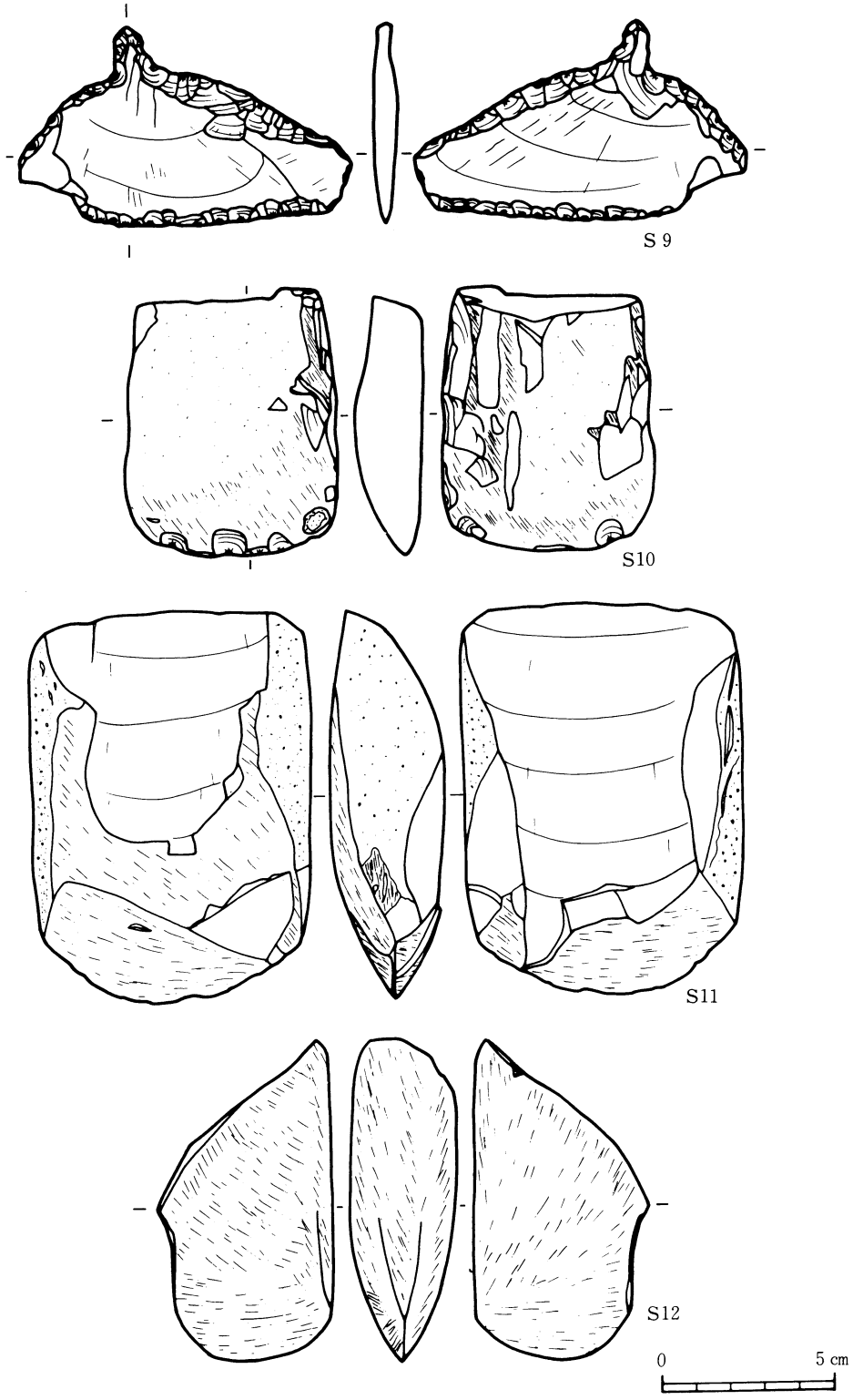
番号	出土区	層	石材	特徴	番号	出土区	層	石材	特徴
S 9	17J	溝	玄武岩	横剝の石匙	S 15	24J	溝	安山岩	凹石および敲石
S 10	31E	3	安山岩	自然礫を利用した局部磨製石斧	S 16	表採		安山岩	両面の凹石
S 11	26G	1	砂岩	自然礫を利用した局部磨製石斧	S 17	21E	1	安山岩	両面の凹石
S 12	38A	3	砂岩	磨製石斧	S 18	18E	1	花崗斑岩	敲石
S 13	31C	2	安山岩	凹石	S 19	34A	1	安山岩	敲石
S 14	18J	1	安山岩	凹石					


32
33
34
35
37
38
39
36
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0
10 cm

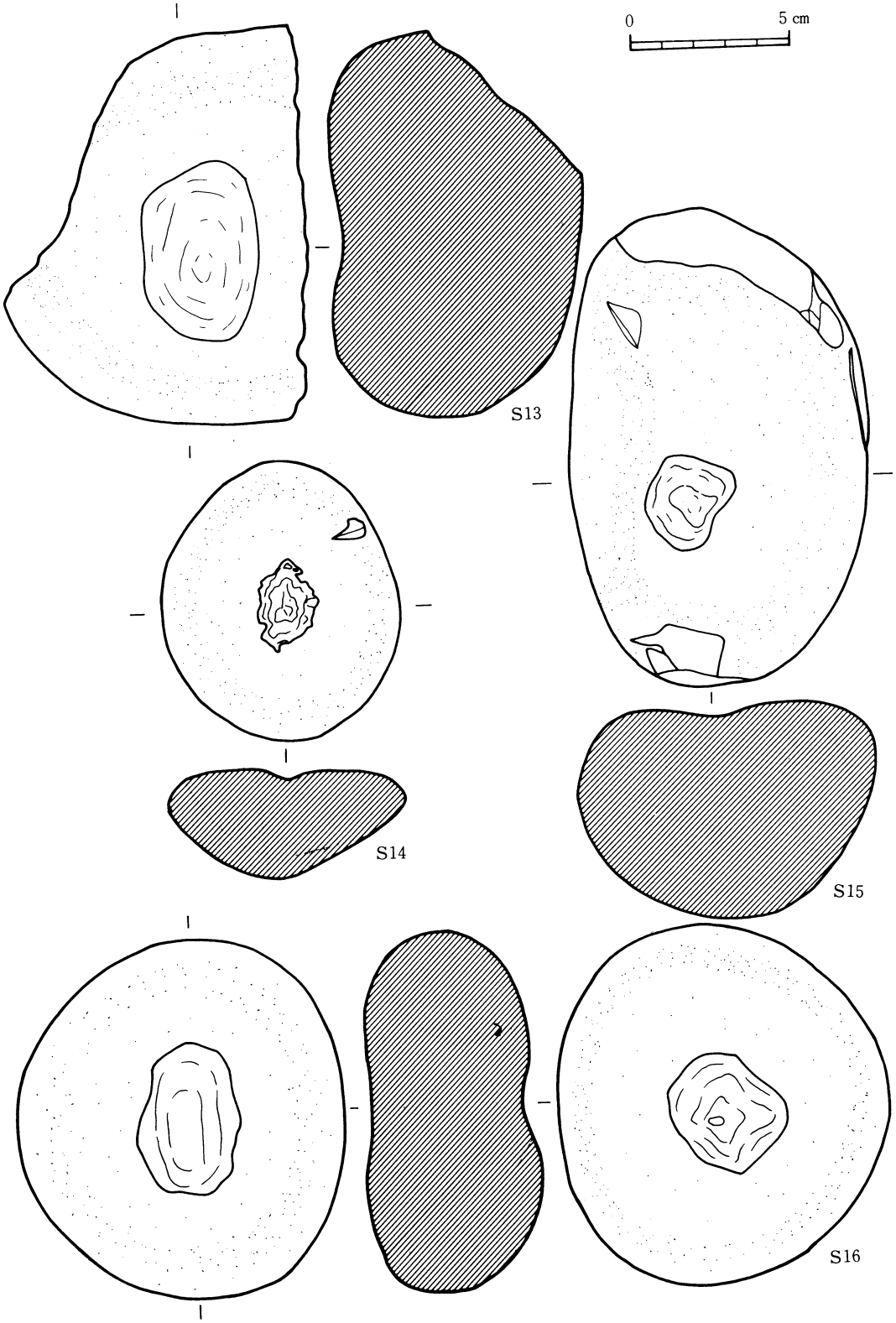
第9図　縄文式土器（2）


55
56
57
58
59
62
63
60
61
64
65
66
67
68
69
70
71
73
72
74
75
76
77
78
0
10 cm

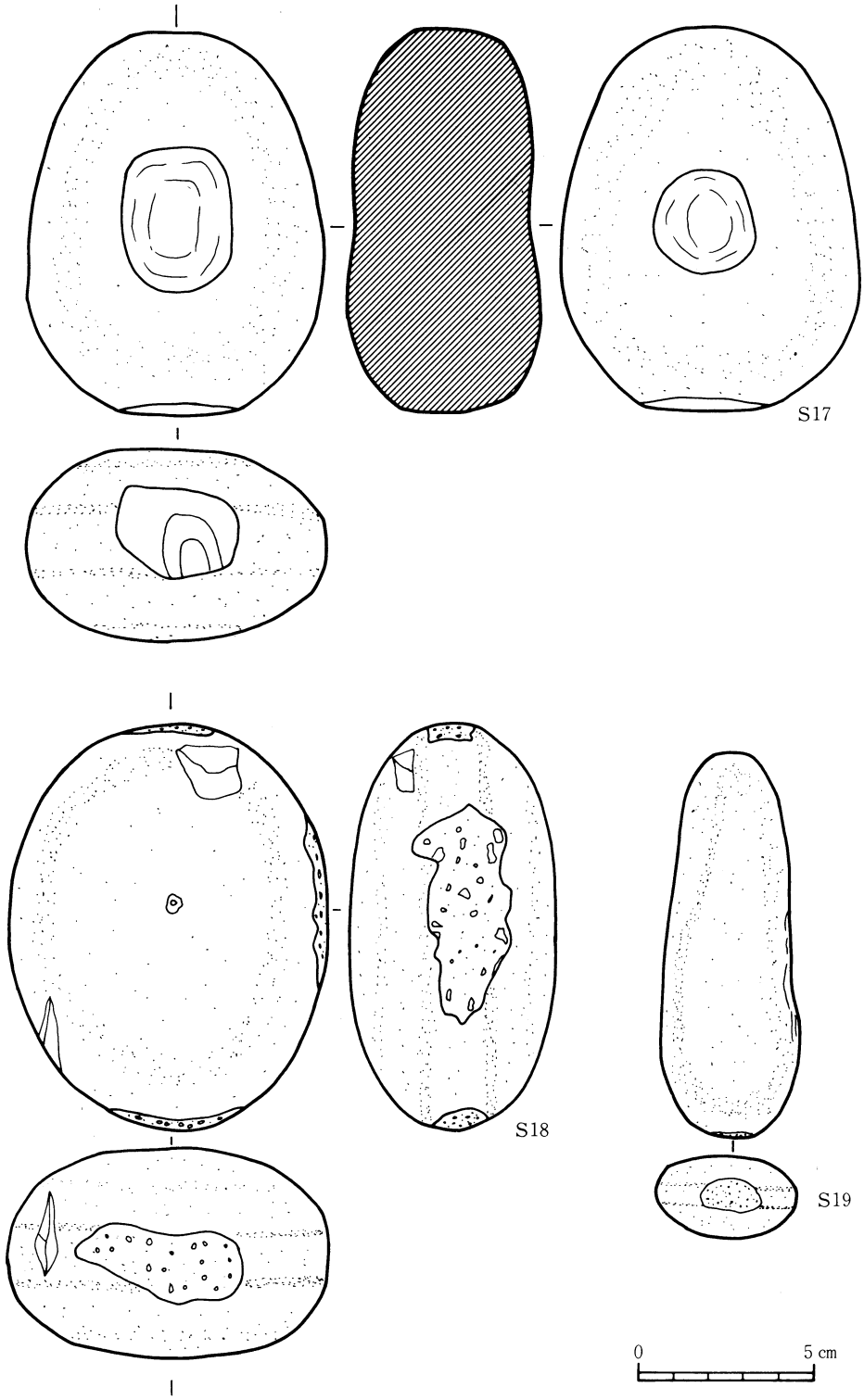
第10図　縄文式土器（３）



第11図　石器（1）



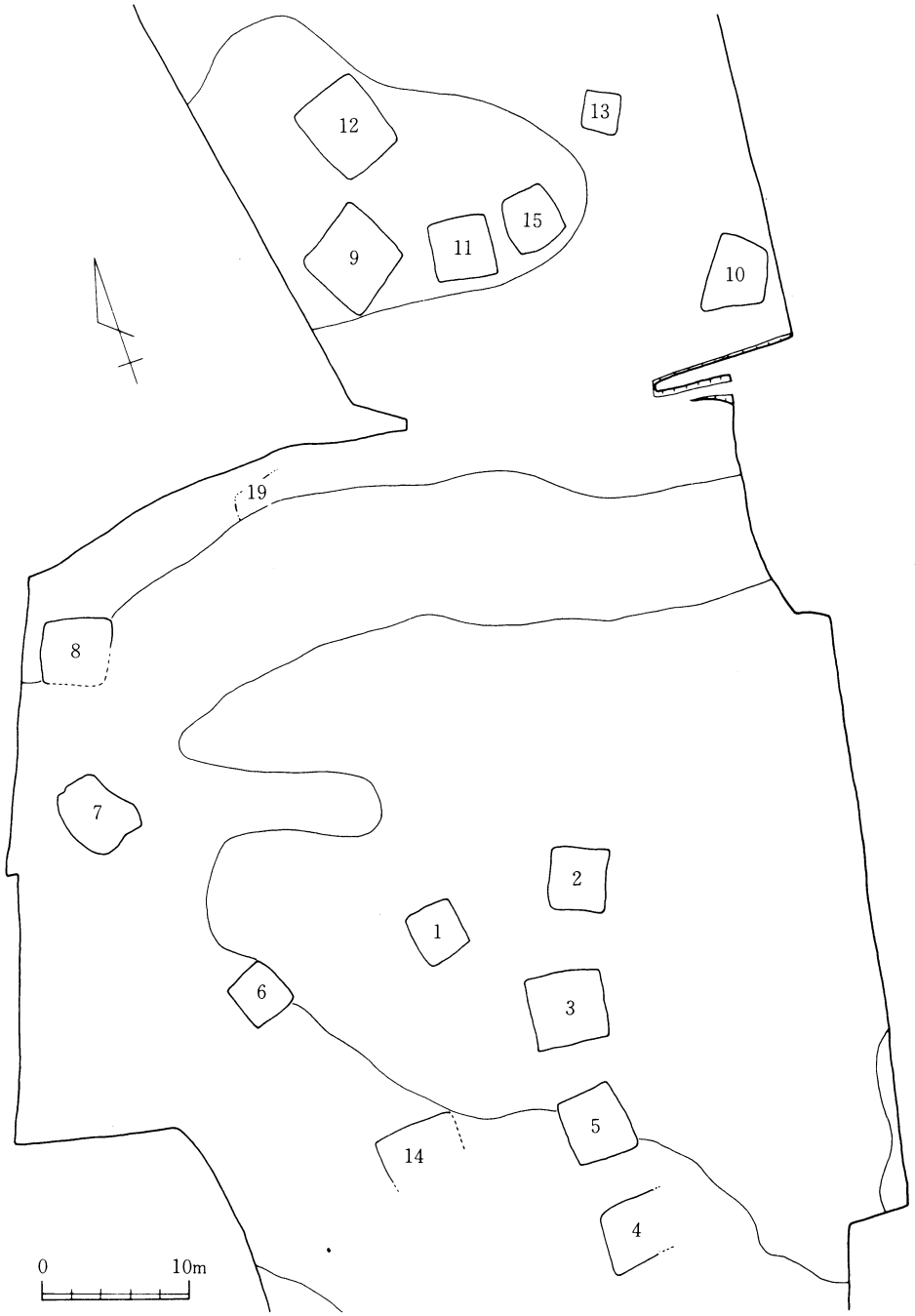
第12図　石器（2）



第13図　石器（3）

第４章　古墳時代

古墳時代には台地一帯で集落が営まれており，土器の散布はバイパス用地外にも広がっている。調査区内では16軒の竪穴住居跡と，土坑１が検出されたが，22～25区付近では江戸時代の



第14図　古墳時代の竪穴住居跡配置図

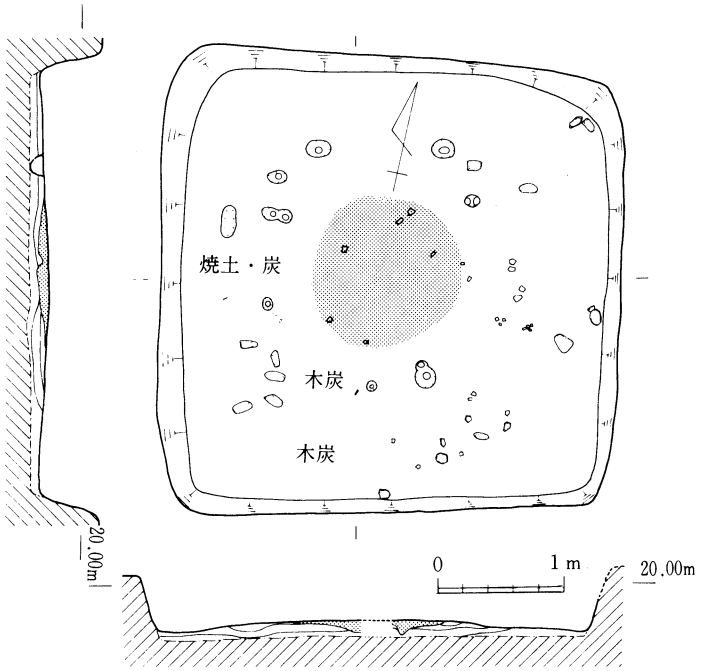
溝状遺構からも多量の土師器が出土しており，この付近にも数軒の住居跡があったらしい。

遺物の多くは住居跡内からであったが，他に周辺から土師器・須恵器が出土している。

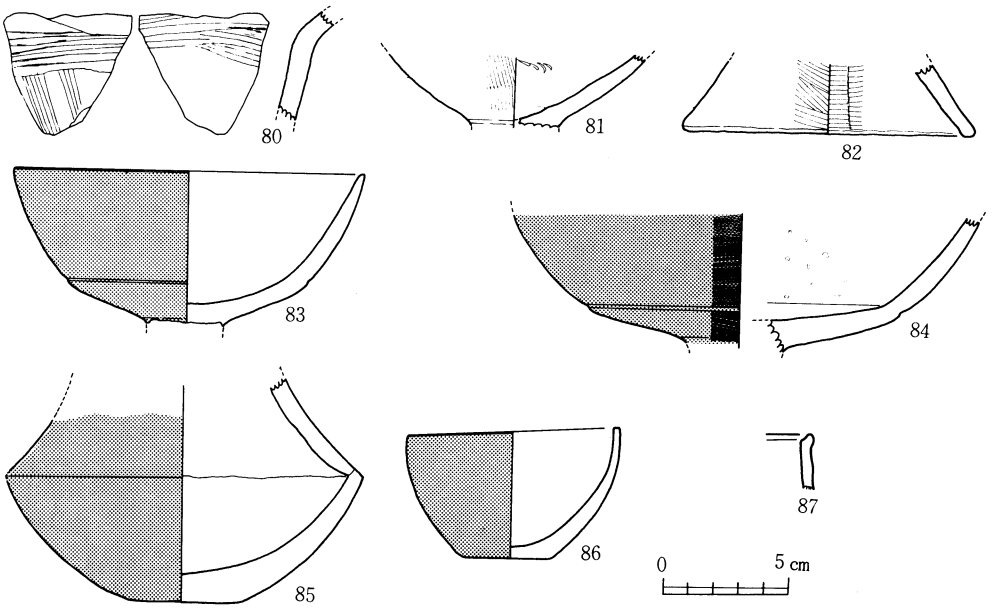
1, 竪穴住居跡

(1) 1号住居跡

1号住居跡は18・19－F・G区で発見された。平面プランは長軸3.64m，短軸3.63mのほぼ正方形を呈し，遺構検出面からの深さは約48cmである。側壁は比較的しっかりしたもので急傾斜で立ち上がる。主軸の方向はN9度W。住居跡内の中央部には径120cmの範囲に焼土や炭がレンズ状に堆積している地炉が検出された。さらに床は，濁黒灰色土や二次シラスの埋土がみ



第15図　1号住居跡



第16図　1号住居跡出土の土器

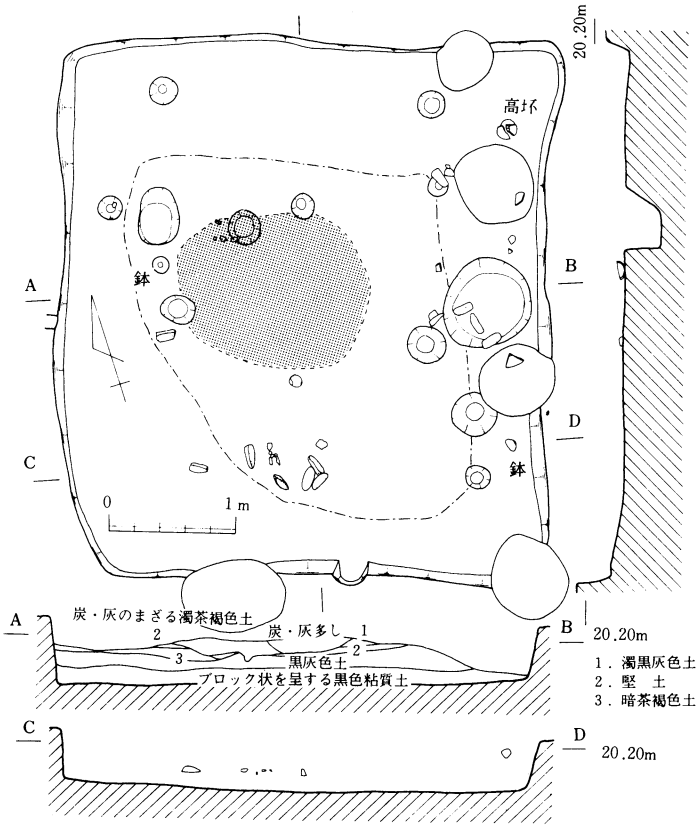
られ，貼り床をした痕跡が認められ，地炉を囲むように堅く踏みつけられた部分も検出された。その他，小ピットが9個発見された。

住居跡内より多数の土器の小破片や自然礫が出土した。

80は頸部から口縁にかけて「く」の字に折れる甕形土器片である。内外面の頸部から上位にかけては横方向，外面の胴部は縦方向に太めのハケ目痕がみられる。82は甕形土器台脚部であるが，80と同様な太めのハケ目痕がみられる。胎土は石英粒や小礫粒を含み，全体的に粗いものとなる。焼成は良好，色調は赤褐色を呈す，81は高坏の坏部である，坏部の立ち上りは急でやや直線的である。外面にハケ目調整のあと，ナデ調整を施している。胎土には細かな石英を含む。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。83は口縁径14cmの坏部である。脚部は欠損している。体部に1本の浅い凹線を施す。外面はていねいなヘラ調整を施す。84は坏部片である。体部に浅い凹線を有す。外面はこまかなハケ目がみられる。内面は風化し，部分的に剝落を受けている。両者ともに丹塗り土器である。85は口縁部を欠損しているが，胴部の直径は14.3cmを測り，底部径4.6cmの平底となる坩形土器である。器面はていねいなハケ目がみられる。丹塗り土器である。小鉢（86）は口縁径8.4cm，高さ5cm，底部径3.6cmを測る。胴部は丸く，直口する口縁部で平底となる。口唇部は平坦である。外面はヘラ調整後，ていねいなハケ目調整が施されている，丹塗り土器である。87は須恵器坏身の立ちあがり部分で，口縁端近くの内面にくぼみがみられる。

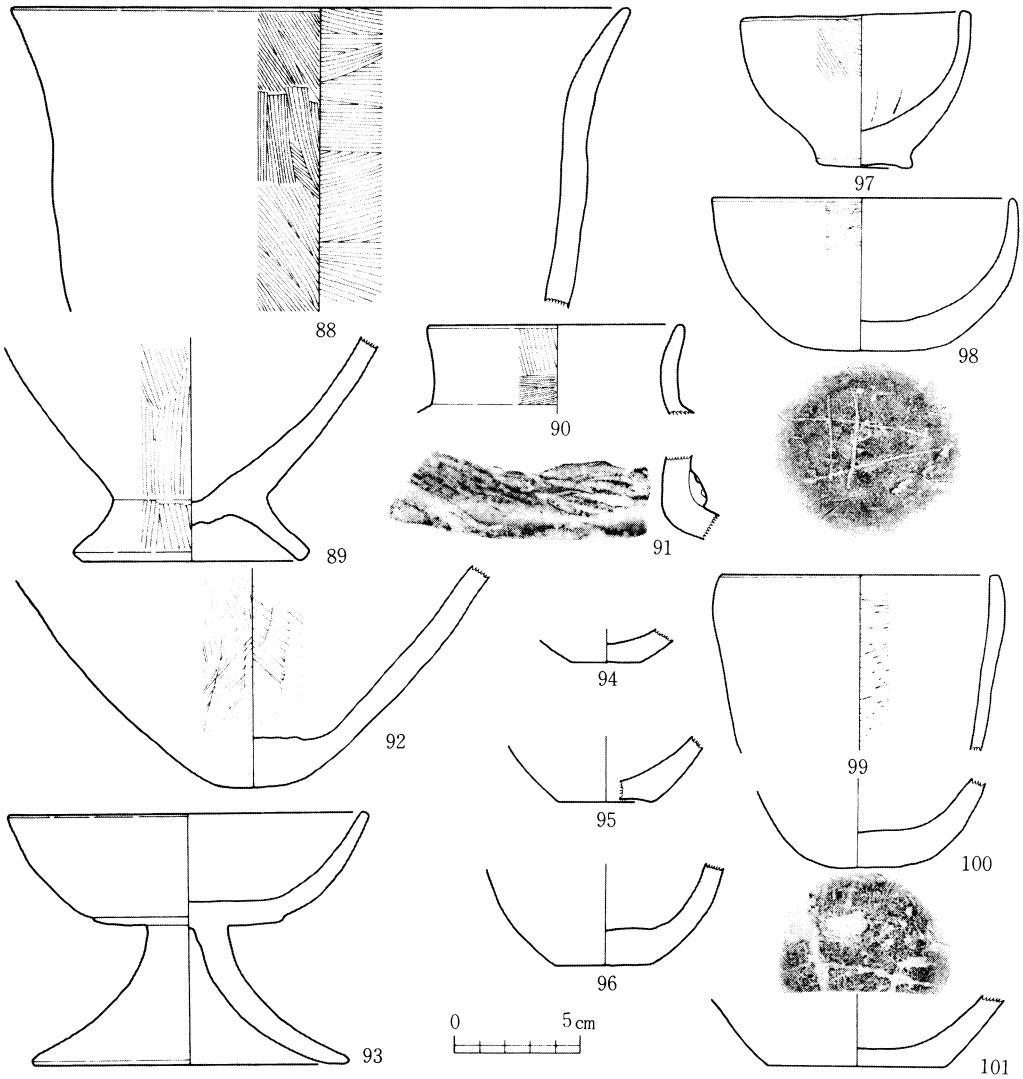
(2) 2号住居跡

19・20－H・Ⅰ区につくられた3.9m×4.2mのやや南北方向に長い方形住居跡で，検出面からの深さは約30cmである。主軸方向はN7度Eを測る。2.4m×2.8mの範囲に堅土面があり，ほぼ中央には1.2m×1.5mの範囲に炭・灰が10cmの厚さで堆積している。内部で11本の柱穴を検出したが，主柱穴等は確認できなかった。南西隅付近に直径約1m，深さ3cmほどの浅いくぼみがあり，ここには甕形土器や礫などがあった。東側でも浅いくぼみの中に礫などがあったが，整然とした配列ではなかった。



第17図　2号住居跡

甕形土器・壺形土器・坩形土器・　鉢形土器・高坏形土器などが出土している。甕形土器(88・89）は口縁部がゆるやかに外反する長胴形 の器形をしており，浅い脚台が付く。口縁直径約25cm，脚台端直径 8.5 cm，脚台高 2.5 cmを測る。外面は右下がり，あるいは縦方向のハケナデ調整，内面は横方向のハケナデ調整で仕上げる。脚台の内面は横方向にハケナデがされ，中央がやや突起している。壷形土器（90～92・ 100 ）は口縁部がわずかに外反し，丸底である。頸部はくびれ，そこに木目押圧が斜方向に三段程付された断面半円形の貼り付け突帯が付されたものもある。90は口縁直径12cmと小型である。 100 は小さい平底で，ここにわら・もみ殻の圧痕が残っている。外面は左下がりあるいは縦方向のハケナデ調整，内面は右下がりあるいは縦方向のハケナデ調整で仕上げるが，内面底付近はヘラナデもみられる。坩形土器（94～96）は底部直径が2.8 cm～ 3.8 cmの安定した平底で，ややあげ底のものもある。外面はヘラでていね

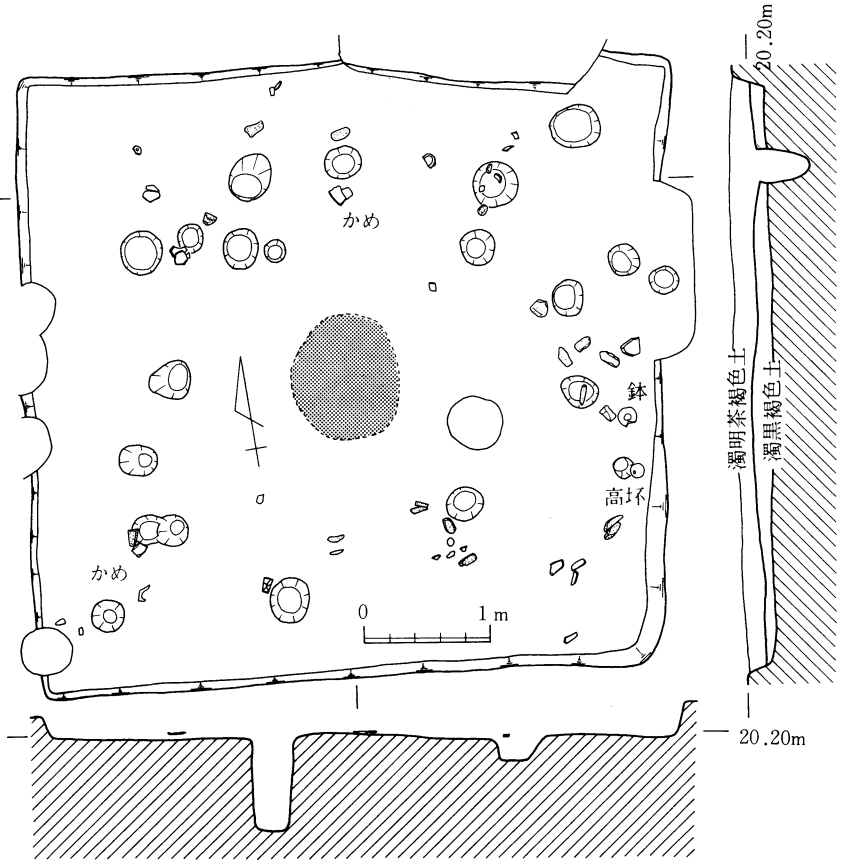


第18図　2号住居跡出土の土器

いに研磨され，全体に丹が塗られる。内面はていねいなヘラナデで仕上げられる。鉢形土器（97～101）は口縁直径11cmを測る直立に近い立ちあがりをするものと，外へ強く開きながら伸びる安定した平底のものとがある。97は口縁直径９cm，底部直径４cm，高さ６cmであげ底風の脚台が付く。外面の上半がハケナデ，下半および内面はヘラナデで仕上げる。98は口縁直径12cm，高さ６cmの安定した丸底をしており，底部に縦横２本ずつの格子状ヘラ描き文がかかれている。内外とも丹塗りである。99は外面が縦方向のヘラナデ調整，内面が横方向の研磨に近いヘラナデ調整で仕上げる。100は内外面とも斜方向のヘラナデ調整で仕上げ，底部には丹の跡が付着している。93は口縁直径14cm，脚端直径12.5 cm，坏部高さ4.5 cm，全体高10cmの高坏形土器である。外面はていねいに研磨され，全体に丹が塗られる。内面もていねいにナデられており，坏部と脚部ははめ込みとなっている。

(3) 3 号住居跡

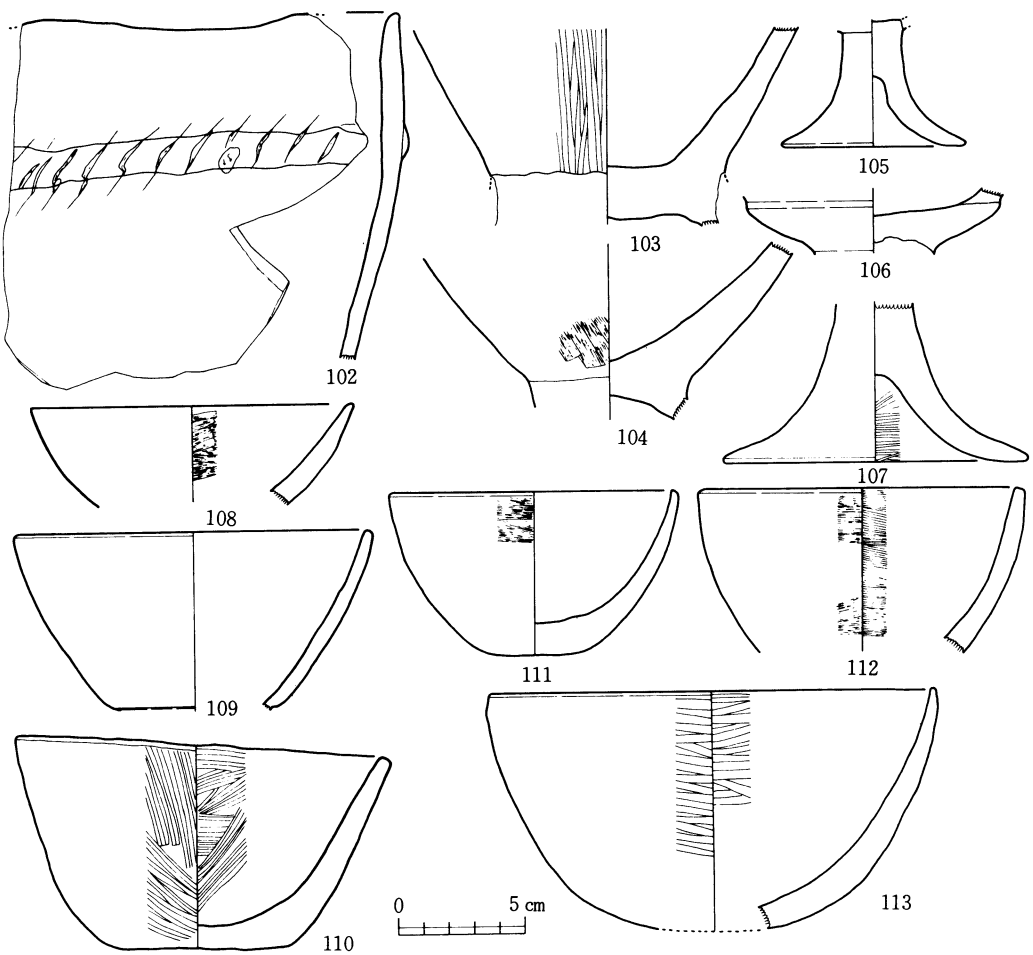
17・18－H・Ⅰ区につくられた５m 四方の正方形住居跡で，検出面からの深さは約30cmを測る。主軸方向はＮ９度Ｅである。北東側は16号住居跡によってこわされ，土坑・柱穴などによってもいくらかこわされている。ほぼ中央の直径90cmの範囲には炭・灰が10cmほどの厚さで堆積している。内部には22本の柱穴を検出したが，主柱穴等は確認できなかった。礫が周辺に散在しており，特に東側では礫とともに４面を使用した砥石があった。床面下約10cmの所に基盤層があり，その間には暗茶褐色あるいは濁黒褐色土がある。



第19図　3 号住居跡

甕形土器（102～104）の口縁は内反しており，口縁下部には左下がりの刻みがある断面半円形の突帯が貼り付けられる。底部には浅い脚台が貼り付けられる。

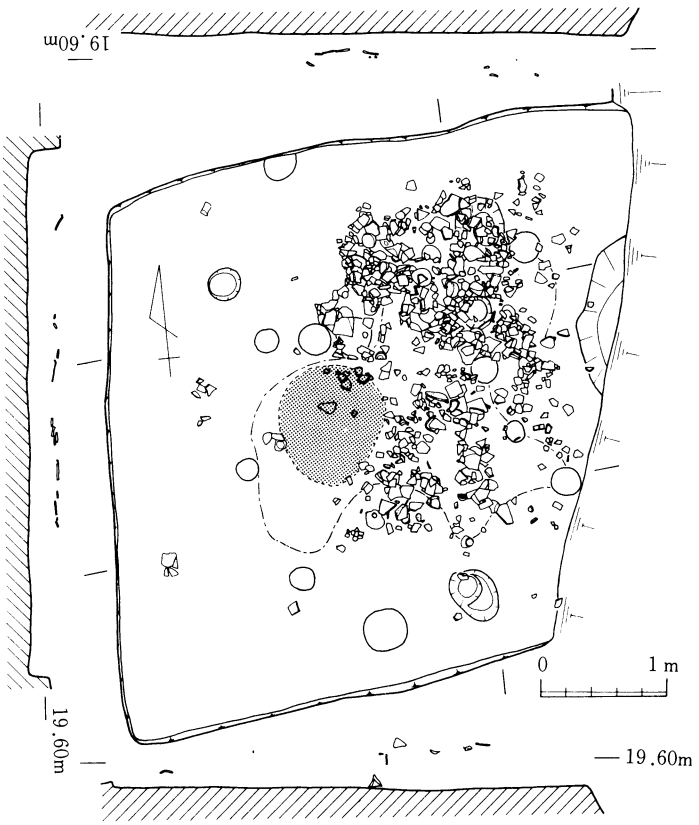
内面はすべてヘラナデであるが，外面は103・104が縦方向のハケナデ，102が横方向のヘラナデで仕上げる。坩形土器（108・109）の口縁は直径13～14cmと大型で，やや内反しながらまっすぐ伸びている。丹塗りで，頸部付近に凹線状くぼみがみられる。鉢形土器（110～113）はやや内反ぎみにまっすぐ立ちあがるもので，浅いものと深いものとがある。110は口縁直径15cm，底部直径7cm，高さ7cmの完形品で，口縁に向かってまっすぐ伸びている。111は平底のもので，口縁直径11cm，底部直径3cm，高さ6.5cmを測る。112は口縁直径が13cm，113は口縁直径が15cmあり，丸底である。110は外面があらいハケナデ，内面がハケナデのあとヘラナデで仕上げる。他の3点はヘラナデで，研磨に近いものもある。高坏形土器（105～107）は3点とも丹塗りで，脚端直径が12cmのものと，7cmしかない小型のものとがある。105の坏部と脚部の貼り付けはさし込みによるもので脚部内面には多くの爪跡が残っている。106は坏底部の貼り付け部にハケナデ痕がみられ，装着の際の剝脱を防いでいる。砥石は砂岩製のもので4面を使用している。平面形は方形で，割に薄い自然礫を用いている。広い方の2面はよく使い込んでいる。



第20図　3号住居跡出土の土器

(4) 4号住居跡

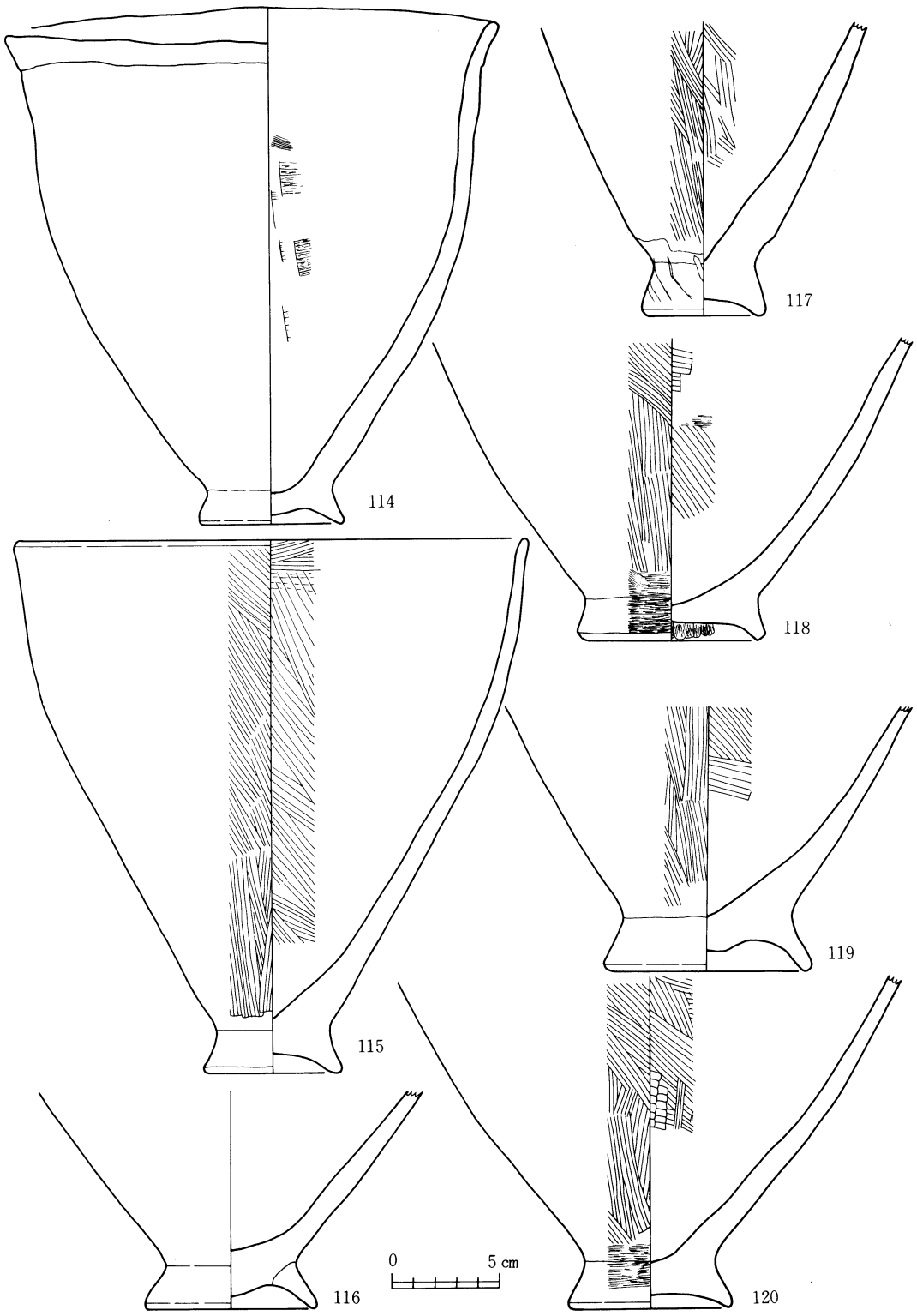
14・15Ⅰ区につくられた4.4m×4.3（＋α）mの方形住居跡で，東側は溝状遺構2によって削除されている。残存の深さは5cm～25cmで，特に西側の残りが悪い。1.9m×2.8mの範囲に堅土面があり，ほぼ中央の直径1mの範囲には炭・灰が堆積している。床面上にも鉢形土器・高坏形土器などがあるが，やや床面より浮いた所に多量の土器が，ぎっしりと堆積しており，この中には礫も含まれている。柱穴も多く検出されたが，主柱穴は不明である。



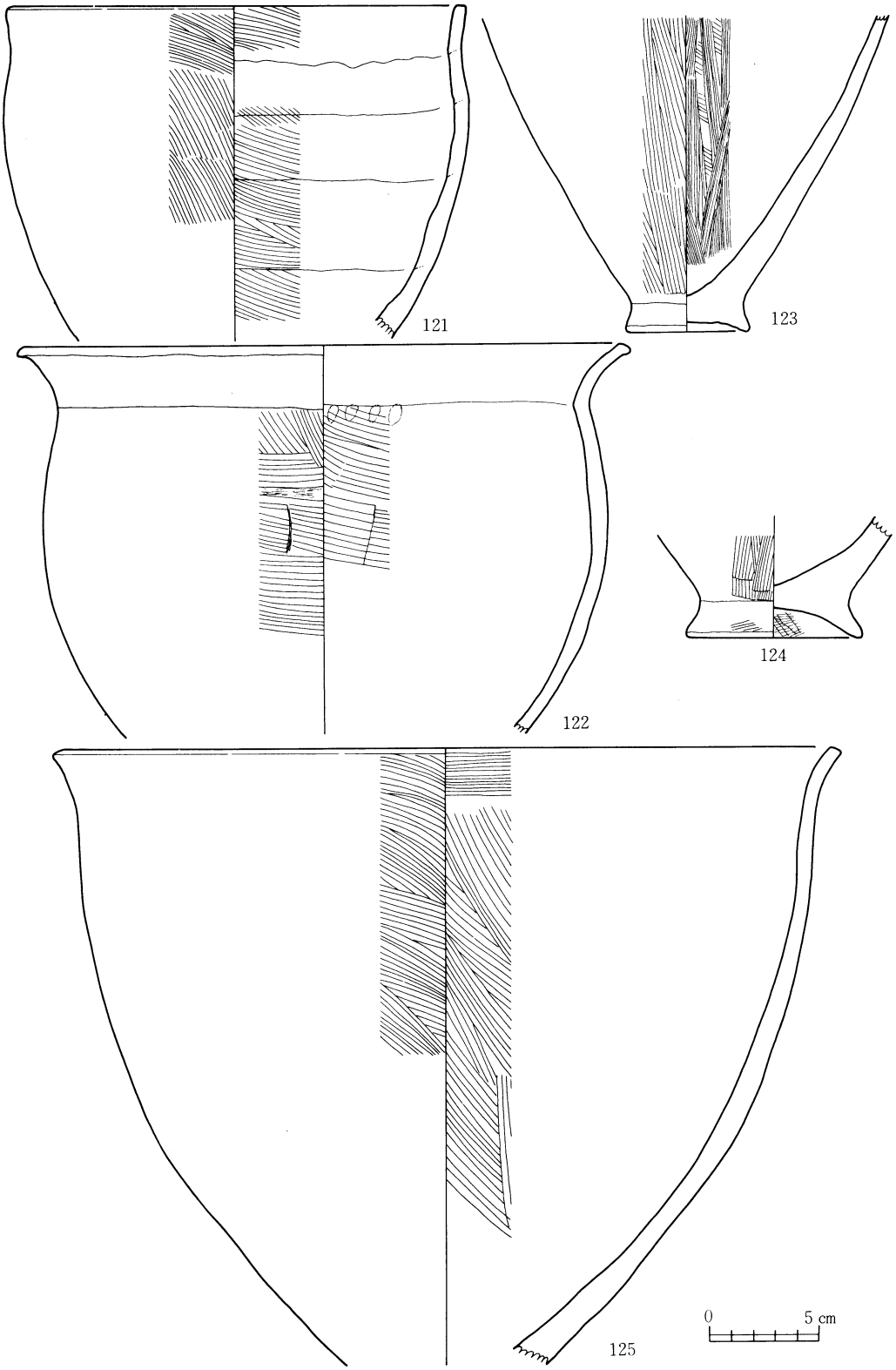
第21図　4号住居跡

甕形土器・壺形土器・蓋形土器・坩形土器・高坏形土器・鉢形土器がある。

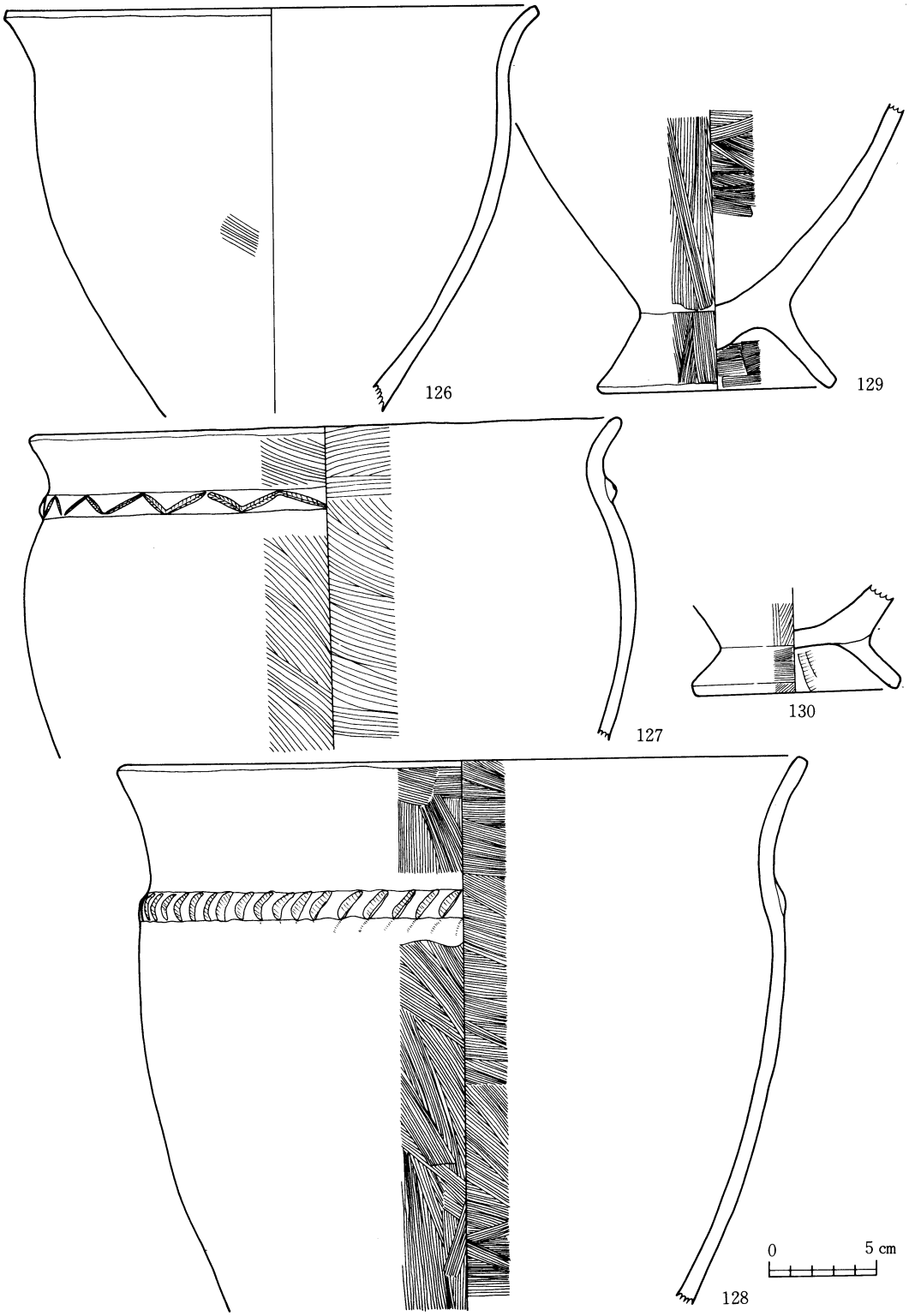
甕形土器の口縁部は，くの字状に外反するものと，やや内反するものがあり，圧倒的に多いくの字状に外反するものには，突帯のつかないもの（114～126），つくもの（127～134）がある。114はやや外反する口縁であるが，端部がやや肥厚している。口縁直径23cm，脚台直径6.5cm，高さ24cmと小型である。115は直立ぎみだが，やや外反する。口縁直径24cm，脚台直径6.5cm，高さ25cmを測る。121は口縁直径21cmと小型で5回以上の輪積み痕をよく残している。122は口縁直径28cmを測り，口縁部の外反度が強い。125は口縁直径36cmと大型であるが，割に浅い。突帯は頸部付近に貼り付けられるが，だいぶ下方に貼り付けたものもある。127は強く屈曲しており，突帯上には鋸歯状の板押圧がみられる。128・131～134の突帯には左下がりの板押圧がみられる。口縁直径は27cm～29cm位であるが，133は36cmと大型で，134は逆に25cmと小さい。132～134などは端が小さく屈曲している。135は口縁直径24cmを測り，やや内反する。138はまっすぐ外へ開いて伸びるもので，口縁直径33cmを測る。すべてに脚台が付き，概して浅い。多くは無帯であるが，136・137のように板状圧痕の押された貼り付け突帯を有するものもある。整形は，外面がハケナデ，内面の頸部より上がハケナデ，下がヘラナデのものが多い。外面にヘラナデのあるもの，内面をハケナデにするものもある。5mmほどまでの小石粒を多く含む砂質の胎土を用いている。



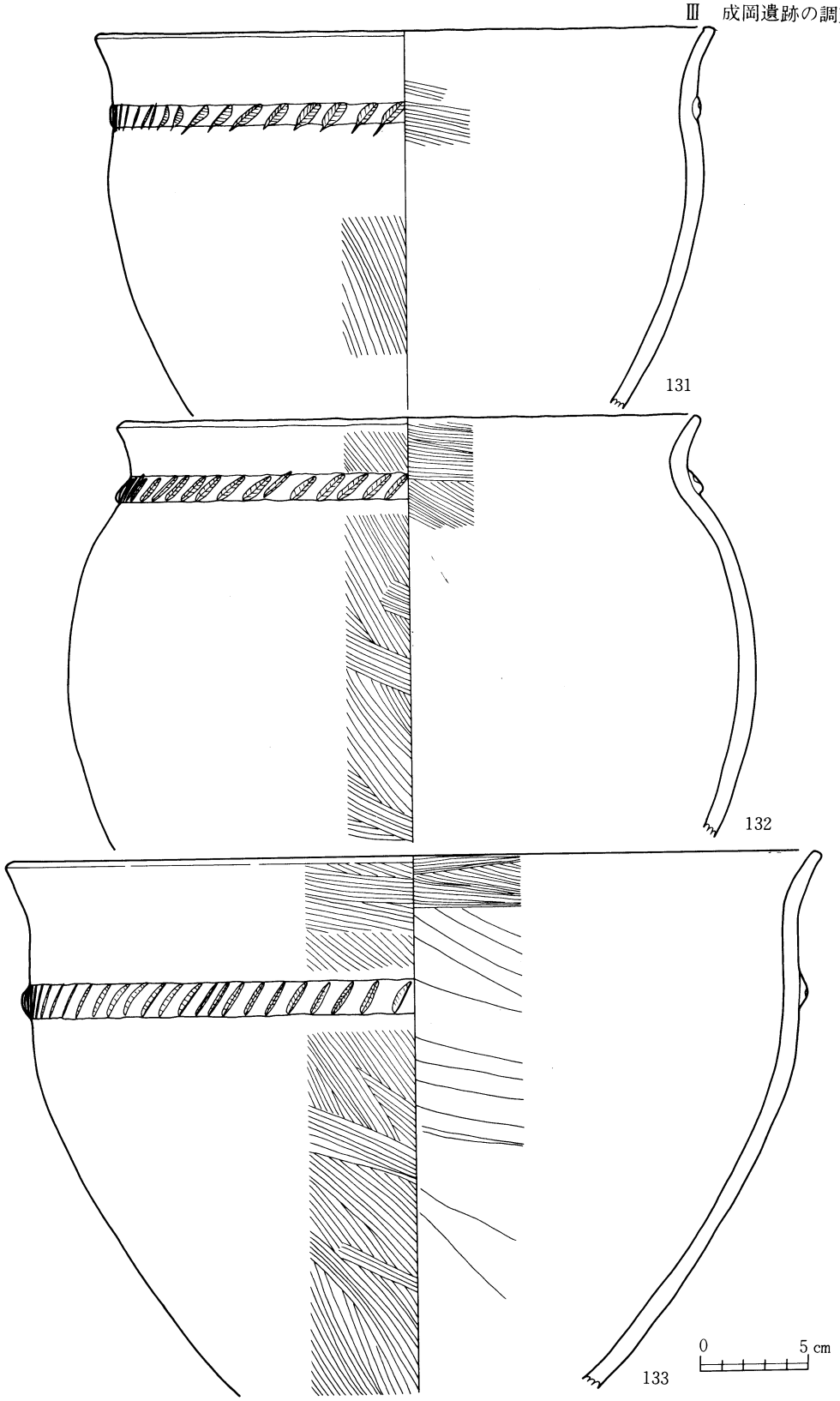
第22図　4号住居跡出土の土器（1）（甕）



第23図　4号住居跡出土の土器（2）（甕）

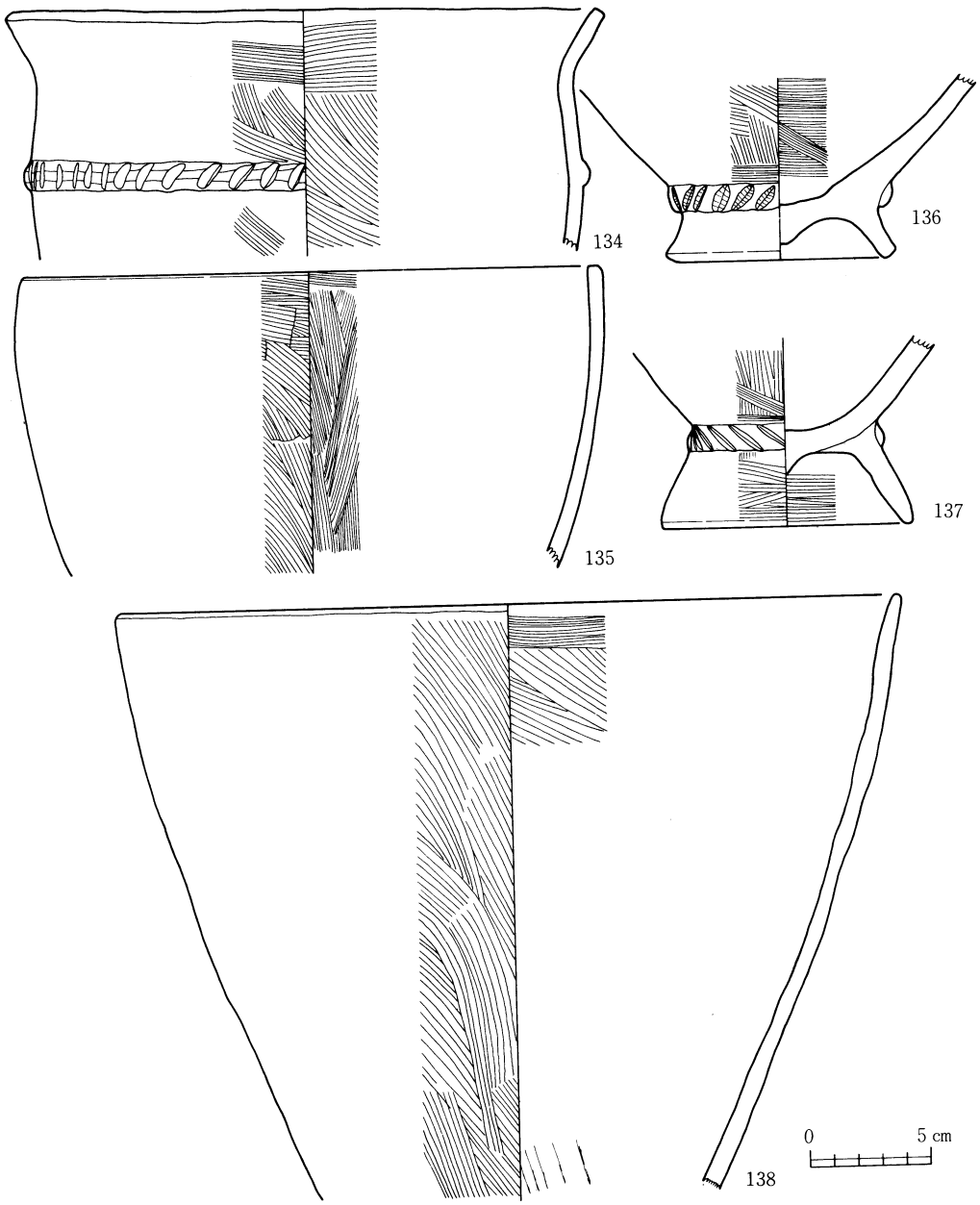


第24図　4号住居跡出土の土器（3）（甕）



第25図　4号住居跡出土の土器（4）（甕）

壺形土器（139 ～ 147）の底部はほとんどが丸底である。139 はよく磨滅して表面に小石粒の突出した土器で，口縁直径 11.5 cm，高さ30cmを測る。口縁は直立し，頸部に∧形のヘラ痕がある。140 は口縁が外反し，頸部に矢形の板押圧のある貼り付け突帯が巡る。口縁直径19cm，高さ 32.5 cmを測る。141 ～ 143 は外反する口縁をもち，141 は頸部に矢形の板押圧が付される。142 は口縁直径13cmと小型である。143 は口縁部で積みあげており，段になっている。口縁部はヘラ押しのみで仕上げている。147 は胴部と口縁部を貼りつけており，段になっている。口



第26図　4号住居跡出土の土器（5）（甕）

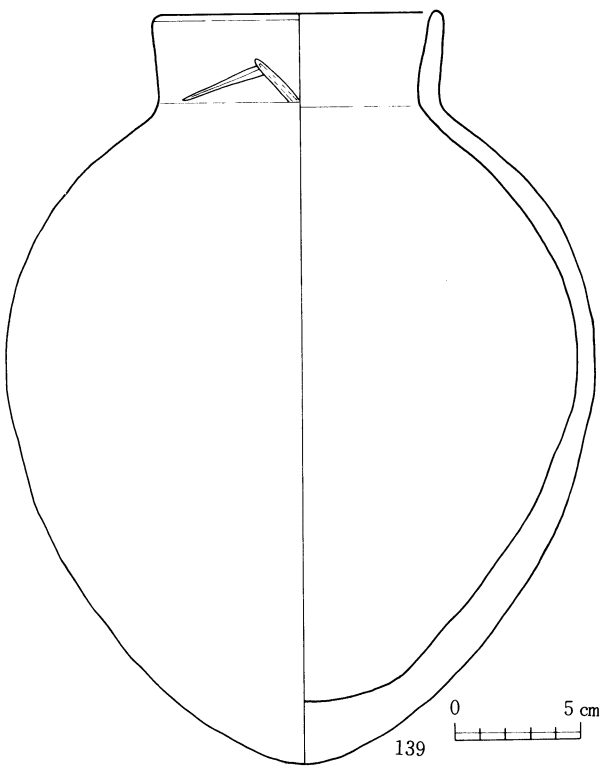
縁部は直立している。底は丸底であるが，145は平底である。144の底にはもみ痕がある。

蓋形土器（148）は倒鉢状の器形をしており，天井部直径7cm，口縁部直径25cm，高さ12cmを測る。外面・内面ともハケナデによって仕上げている。

坩形土器（149～152）の外面はていねいなヘラナデあるいはヘラミガキで仕上げ，丹塗りがされる。149は内反する口縁部で，口縁直径10cmを測る。150はソロバン玉状を呈する胴部である。151・152は丸みをもった胴部で平底を呈す。

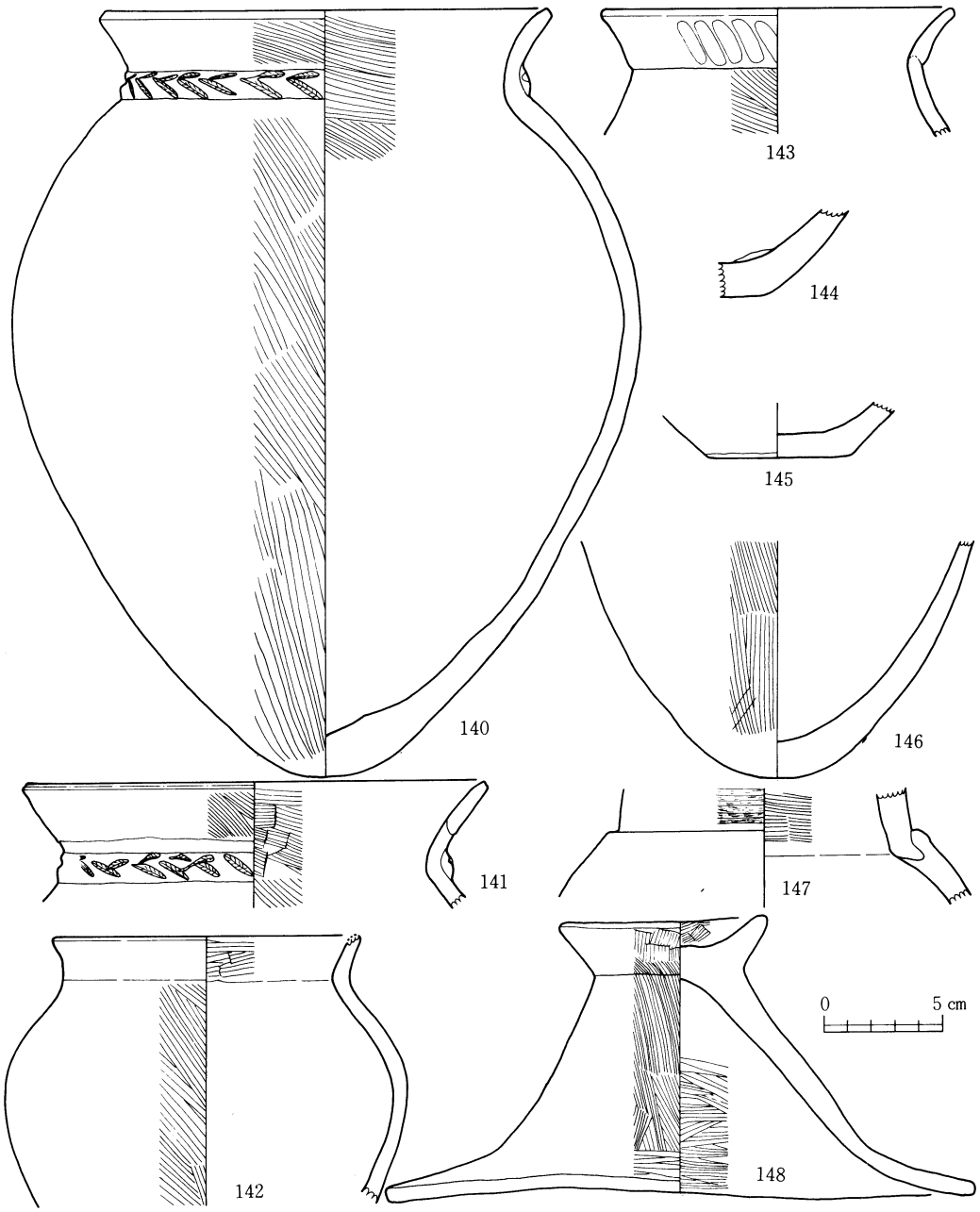
鉢形土器（153～163）には色々の形態・大きさがあるが，概して内反ぎみの器形をしている。153・156・161は丸底・平底の違いはあるが，口縁直径が12cm～16cm，高さ6～8.5cmを測り，外面には丹が塗られる。内面もていねいなナデで，良質の土を使用している。154・155は口縁の整形が雑で，凹凸が激しい。口縁直径12cm，高さ8cm前後を測り，底は安定した平底である。ハケナデあるいはヘラナデで仕上げている。157は口縁部が外反する丸底の鉢形土器で，床面で出土した。口縁直径18cm，高さ7cmを測り，上部はハケナデ，下部はヘラナデで仕上げている。158・159は外へ開きながらまっすぐ伸びるもので，厚いつくりである。内外面ともハケナデで仕上げ，安定した平底である。160も厚手のつくりで，口縁が整然としておらず整形もハケで粗くナデている。底部近くでやや外へ張り出しており，段をつくる。162は口縁直径21cm，高さ13.5cmと大型である。外面・内面とも一部ハケナデ痕を残しているが，ヘラナデで仕上げている。163も口縁直径22cm，高さ15.5cmと大型で，小さい平底をもっている。内面，外面ともヘラナデで仕上げているが，外面の一部にハケ目を残している。

高坏形土器（164～179）は外面が丹塗りの土器である。坏部は埦形を呈しているが，167は立ちあがりが外反するもので，口縁直径11.5cmと小型である。口縁直径が17cm位で深さ3.5cm～4cmの浅いものと，口縁直径が19cm～20cmで，深さ6cm～7cmの深いものがある。立ちあがりと底部は貼り付けによってつくられて，外面は板で押すために1条の凹線ができる。168は稜ができている。166は完形品で，口縁直径20cm，坏部深さ6cm，坏部高さ7.3cm，裾部直径15cm，脚部高さ8.2cm，全体高

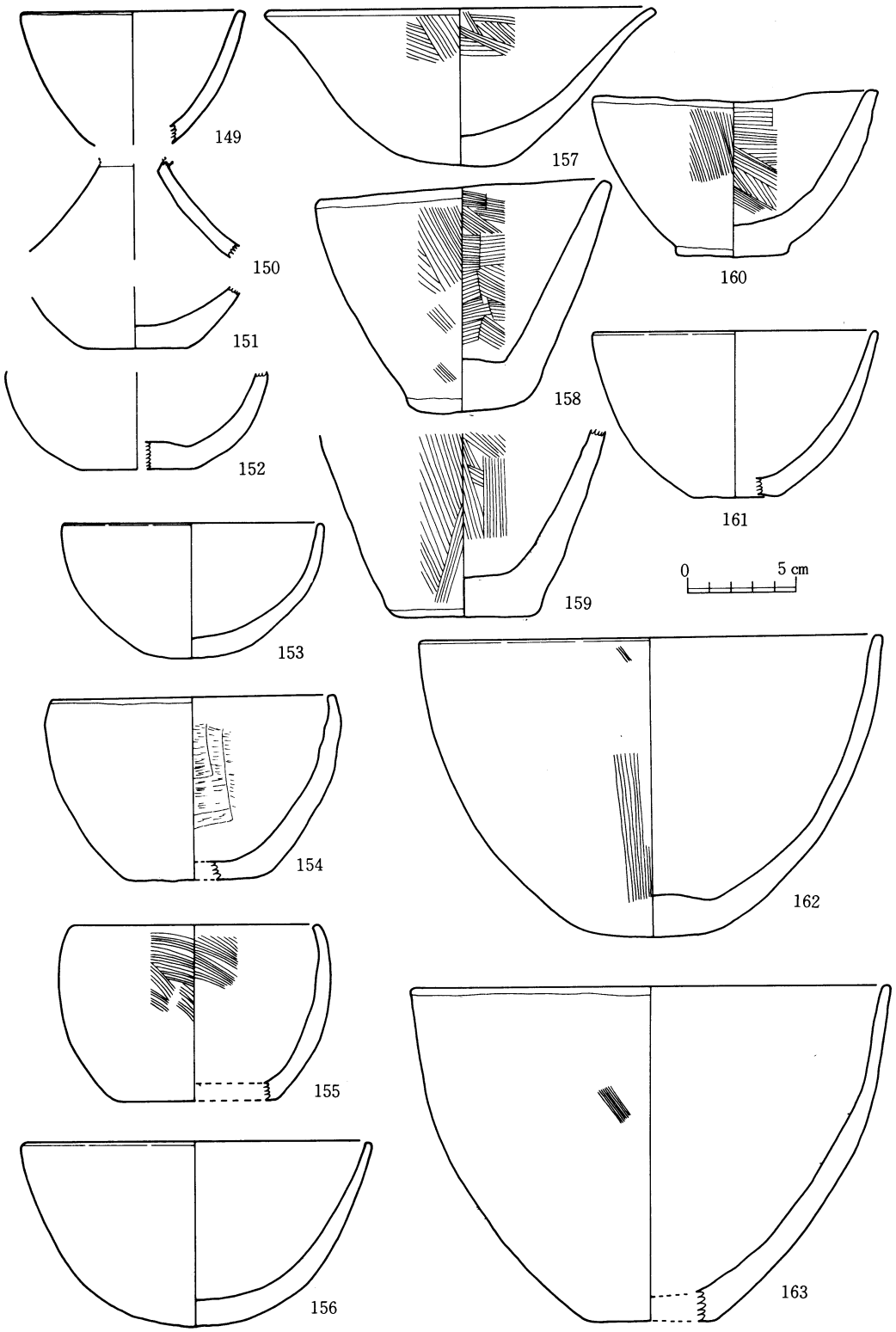


第27図　4号住居跡出土の土器（6）　（壺）

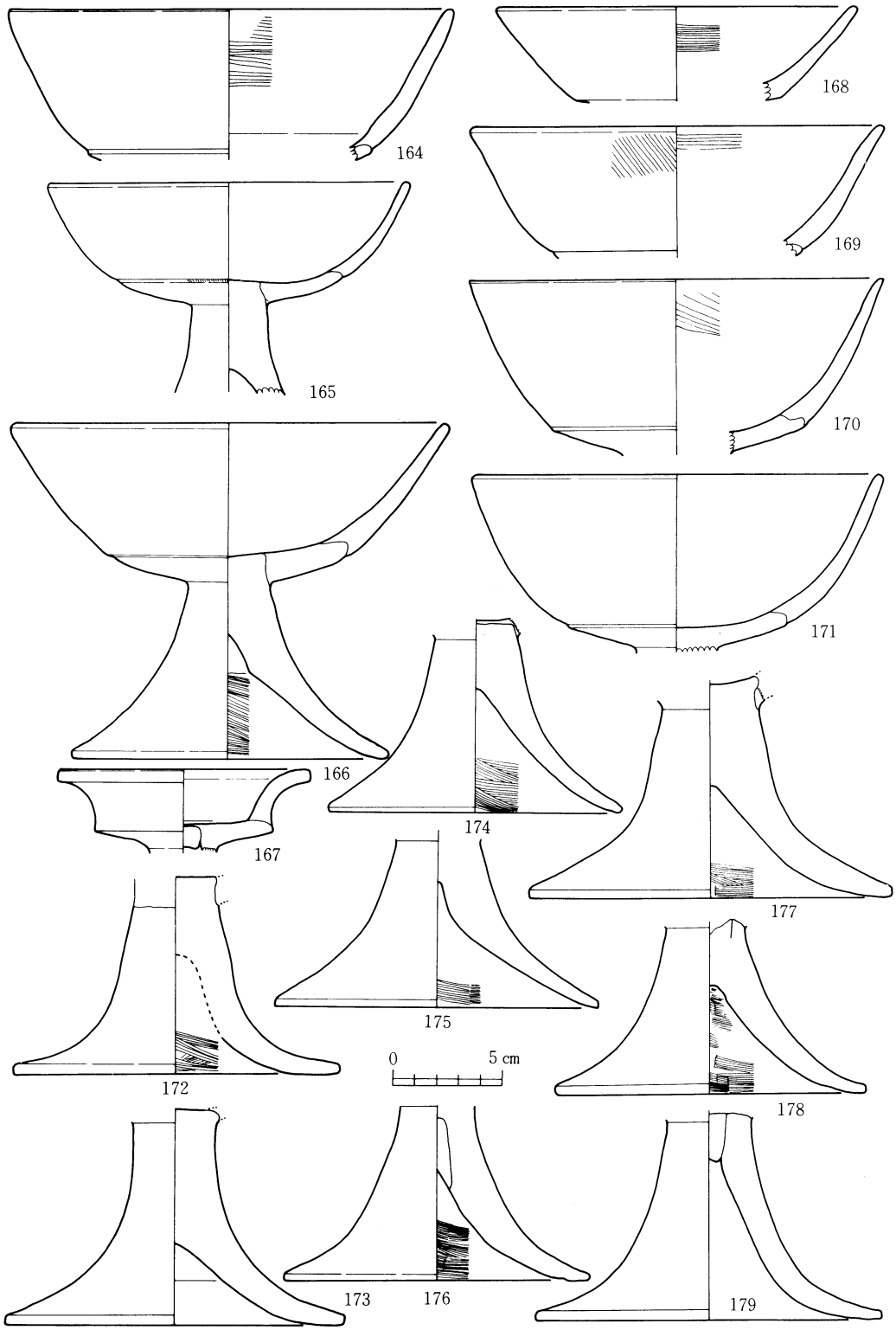
15.5㎝を測る。脚部は筒部と裾部との境がはっきりせず，なだらかにおりる。裾部直径14㎝～16㎝，脚高8㎝～9㎝を測る。坏部と脚部の貼りつけは，脚部に坏部をのせて中央から芯をいれて接合するものと，脚部のまわりに坏部を巻くようにするものとがある。167は坏部内面にも丹が塗られる。外面はほとんどヘラミガキかていねいなヘラナデで，内面はハケナデあるいはヘラナデで仕上げる。



第28図　4号住居跡出土の土器（7）　（壺・蓋）



第29図　4号住居跡出土の土器（8）（坩・鉢）



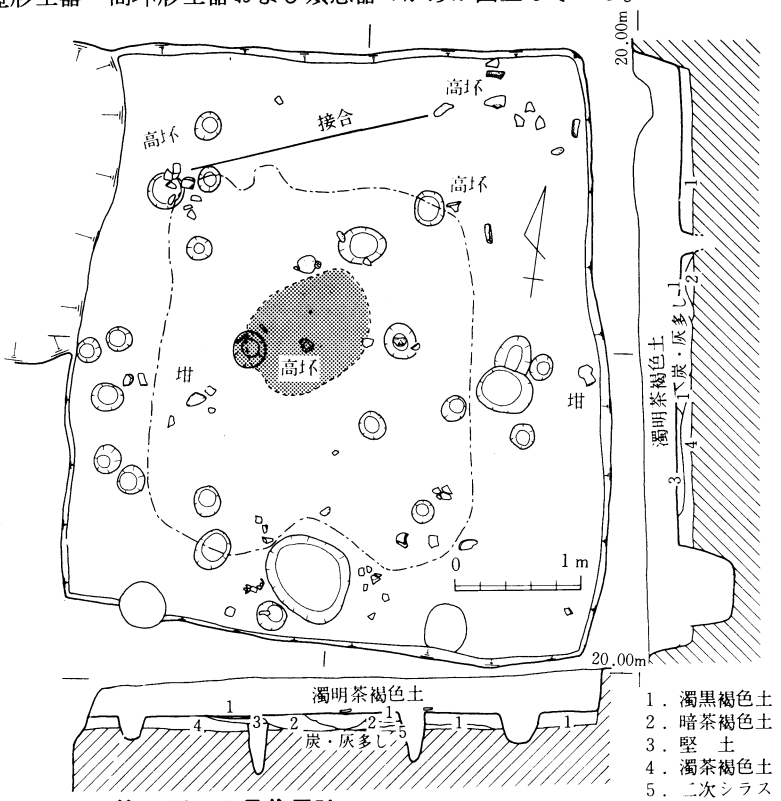
第30図　4号住居跡出土の土器（9）（高坏）

(5) 5 号住居跡

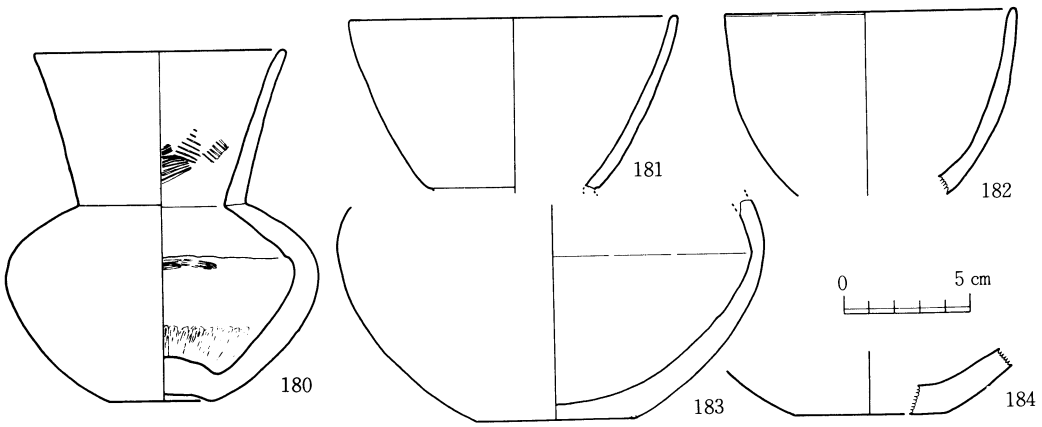
16・17—H・I 区につくられた4.3ｍ× 4.7ｍ のやや南北方向に長い方形住居跡で，検出面からの深さは10～30cmを測る。主軸方向はＮ７度Ｗである。2.5ｍ × 3ｍ の範囲に堅土面が広がっており，ほぼ中央の 0.8ｍ × 1ｍ の範囲に炭・灰などが約10cmの厚さで堆積している。内部では多くの柱穴を検出したが，主柱穴は不明だった。

土師器の甕形土器・壺形土器・高坏形土器および須恵器のかめが出土している。

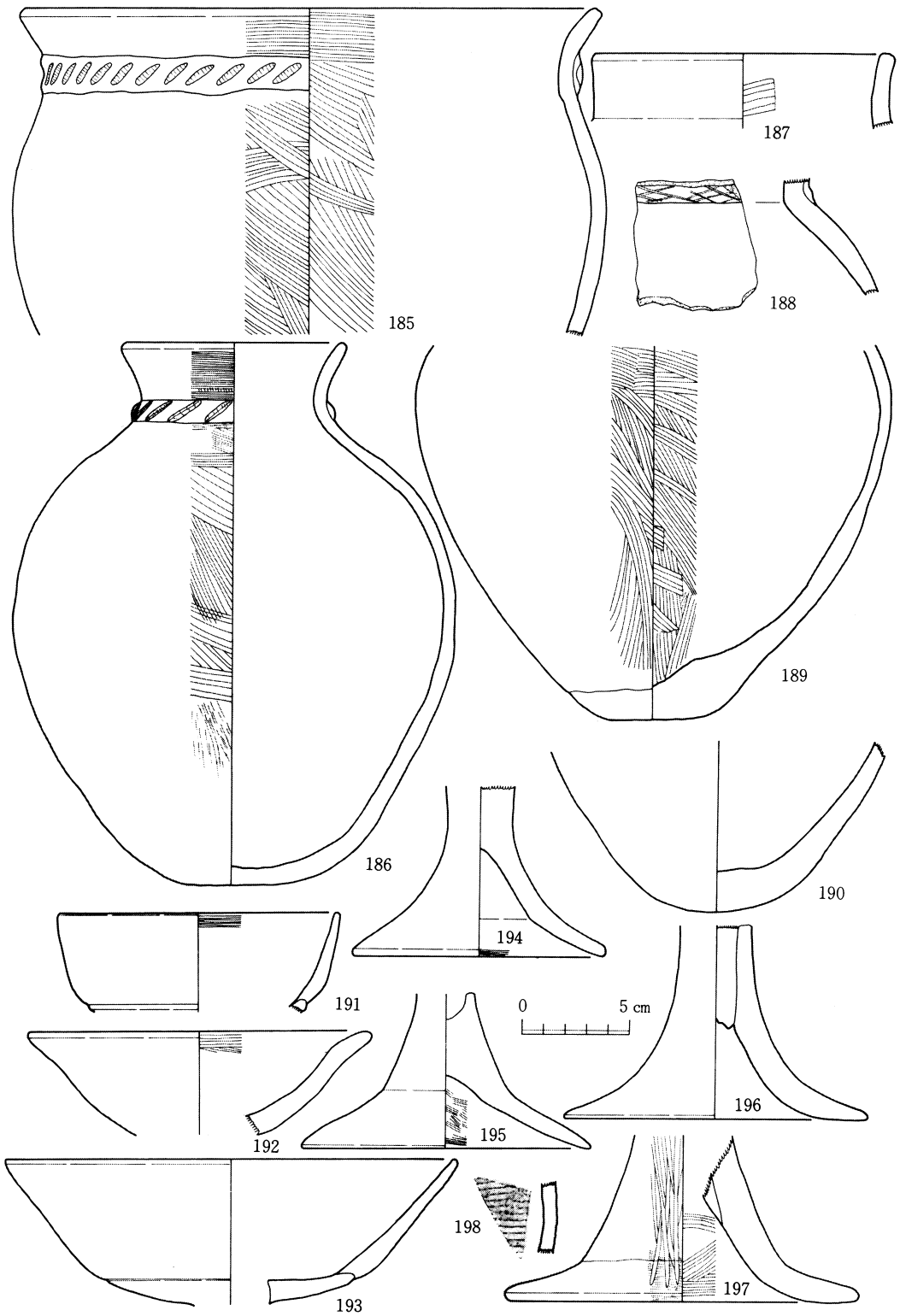
180 ～ 184 は坩形土器で，180 は完形品である。口縁直径10cm，底部直径 4 cm，高さ14 cmを測り，まっすぐ伸びる長い口縁と上半部に最大径のある胴部とからなる。ややあげ底である。181 と 182 は口縁直径11～13 cmとやや大きく，内反する口縁である。183 はこの胴部と思われる大型のもので，平底である。甕形土器（185）はくの字状に外反する口縁部で，頸部には貼り付け突帯が巡っている。



第31図　5号住居跡



第32図　5号住居跡出土の土器（1）



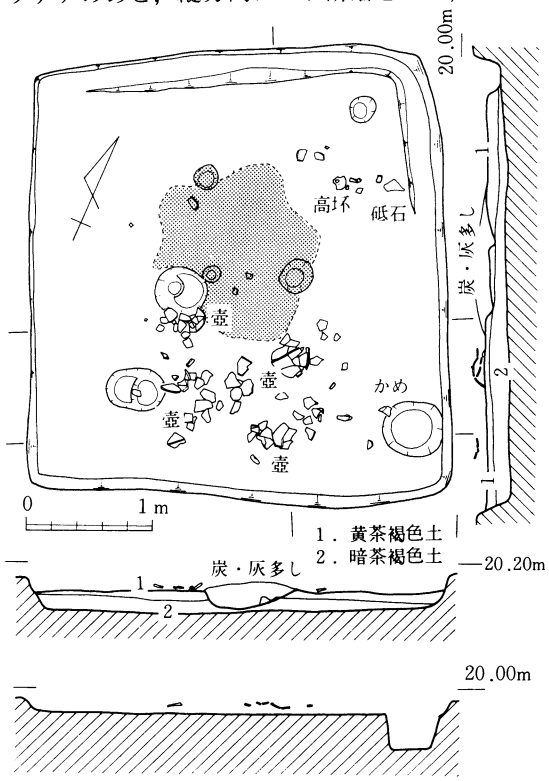
第33図　5号住居跡出土の土器（2）

口縁直径は27cmを測る。外面の整形は横あるいは斜方向のハケナデで，同じ施文具を用いて断面半円形の突帯には左下がりの押圧文が付される。内面の整形も横あるいは斜方向のハケナデである。186～190は壷形土器である。186は口縁直径10cm，高さ25cmを測る完形品である。外反する口縁部をもち，頸部には左下がりの木目圧痕をもつ断面半円形の貼り付け突帯が巡っている。胴部中ほどに最大径があり，底部は安定した丸底である。外面の整形は上半部が横あるいは斜方向のハケナデ，下半部はヘラナデ，内面の整形はヘラナデである。187は直立する口縁である。188は頸部に貼り付け突帯が巡っており，この突帯には斜格子状のヘラ描き文がみられる。189はやや安定した丸底であり，外面・内面とも粗いハケナデで仕上げ，薄く仕上げている。190も丸底である。191～197は高坏形土器である。191は口縁直径13cm，坏部の深さ約4.5cmとやや小型で，坏部の立ちあがりは直に近く立ち上がっている。坏部の底部と立ち上がりは貼り付けによって作られ，この境はややくぼんでいる。192は口縁直径16cm，坏部の深さ4cmを測るもので，口縁端部が外反するものである。193は口縁直径21cm，坏部の深さ5.5cmを測るもので，坏部の立ち上がりは外へ開きながらまっすぐ伸びている。坏部の底部と立ち上がりは貼り付けによってつくられ，その境はややくぼんでいる。脚部は筒部と裾部との境が明瞭でなく，裾部はゆるやかに開いていく。坏部との接合は195のように脚部の上に坏部をのせてくっつけるものと，196のようにくっつけて芯の部分に棒状のものを押し込むものとがある。197の外面はていねいな横方向のヘラナデのあと，縦方向にヘラ研磨を加え，暗文風になっている。多くは丹塗りであるが，195は丹がない。198は須恵器甕の破片で，表面は内外とも灰青色を呈しているが，中央は紫灰色を呈している。外面はこまかい平行叩きで仕上げ，内面はタタキをスリケシている。

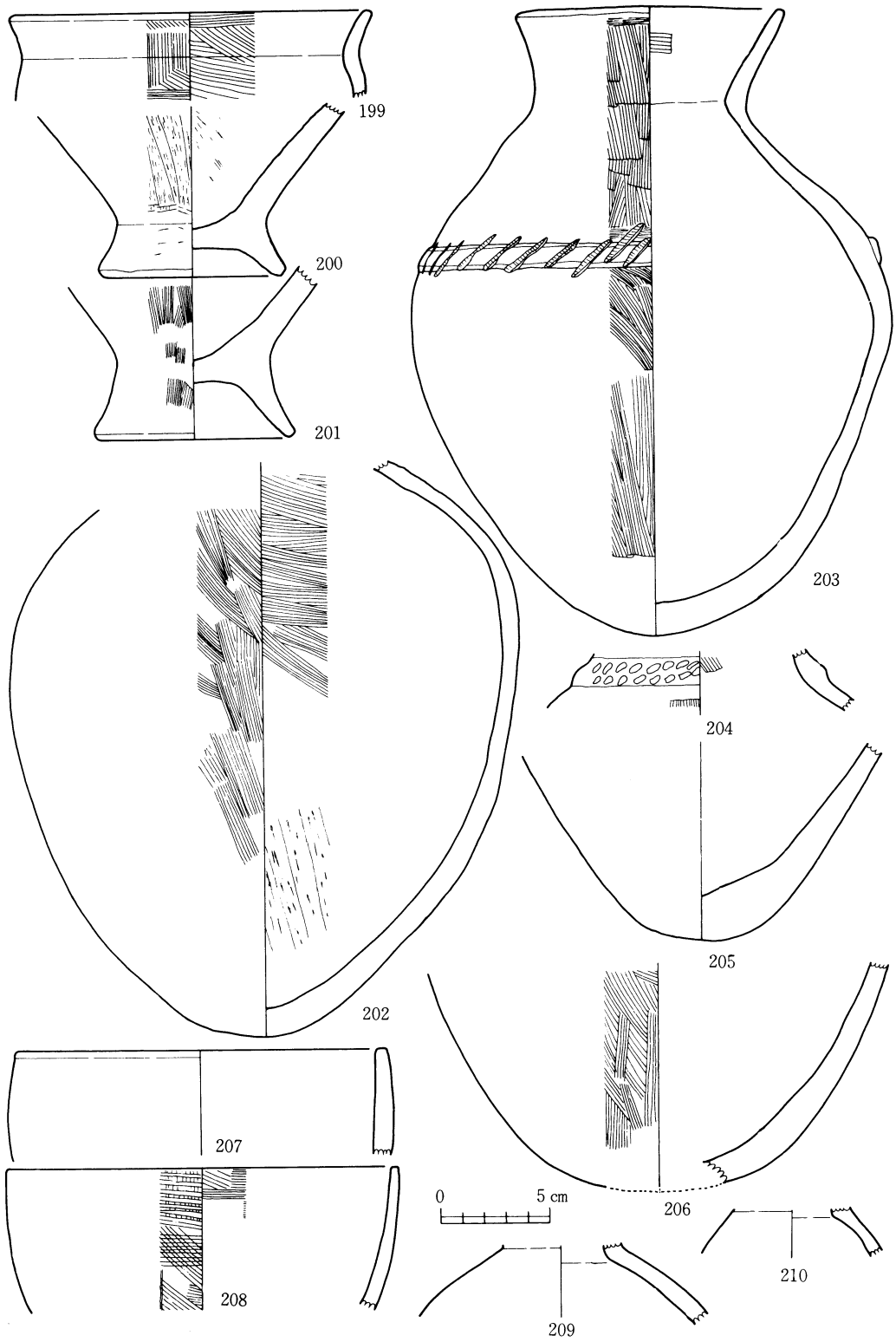
(6)6号住居跡

17・18D区につくられた3.3m×3.6mの方形住居跡で，深さ20cmほどを残している。西側と，北側の一部には幅30cm，深さ5cmの溝が壁に沿ってつくられている。ほぼ中央の1.2m×1.4mの範囲には炭・灰が堆積しており，直径70cm位の範囲では落ち込んでいる。主柱穴らしき2本の柱穴があるが，はっきりしない。床面上には多くの土器があるが，壷形土器が多い。

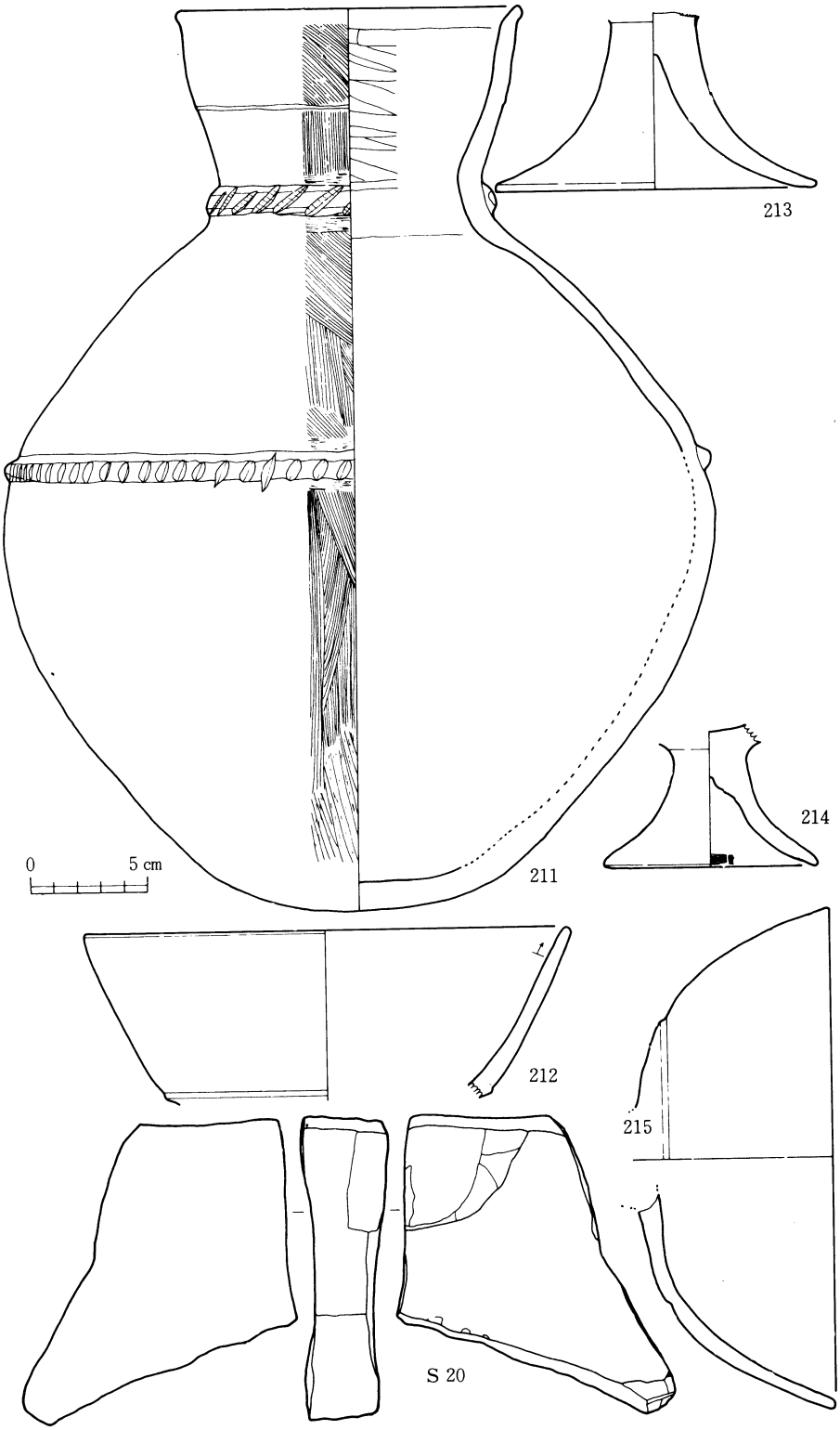
甕形土器（199～201）はくの字状に外反する口縁をもち，脚台がつく。壷形土器



第34図　6号住居跡

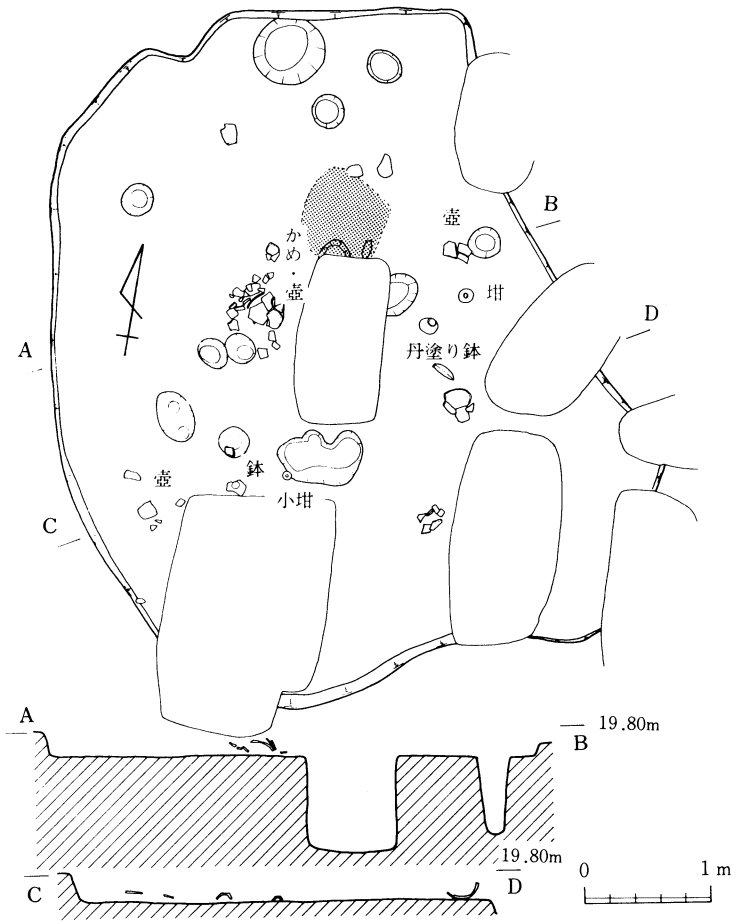


第35図　6号住居跡出土の土器（1）

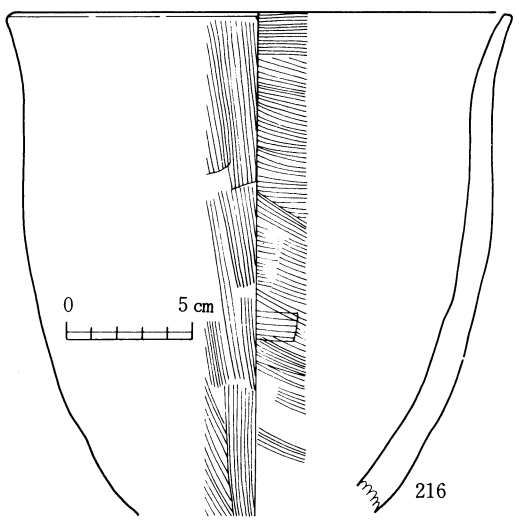


第36図　6号住居跡出土の遺物（2）

（202～206）は丸底で，長胴形の器形をしている。203は口縁直径12cm，高さ29cmを測る完形品で，口縁部は外反する。肩部に木目の押圧痕をもつ貼り付け突帯を有する。211は口縁直径15cm，高さ39cmを測る大形のもので，頸部と胴部に木目の押圧痕をもつ貼り付け突帯を有する。鉢形土器（207・208）はやや内反するもので，ハケやヘラを使ったナデ整形で仕上げられる。坩形土器（209・210）は精製したこまかい粘土を用いており，外面と，内面の頸部より上は丹塗りである。丸みをもった胴部に，外反する口縁部がつく。高坏形土器（212～215）は，口縁直径21cm，深さ8cmの坏部と，筒部と裾部の境がはっきりしない脚部からなる。ともに外面はヘラ研磨で仕上げ，丹が塗られる。床面上にあった砥石は砂岩製で，4面を使用している。



第37図　7号住居跡



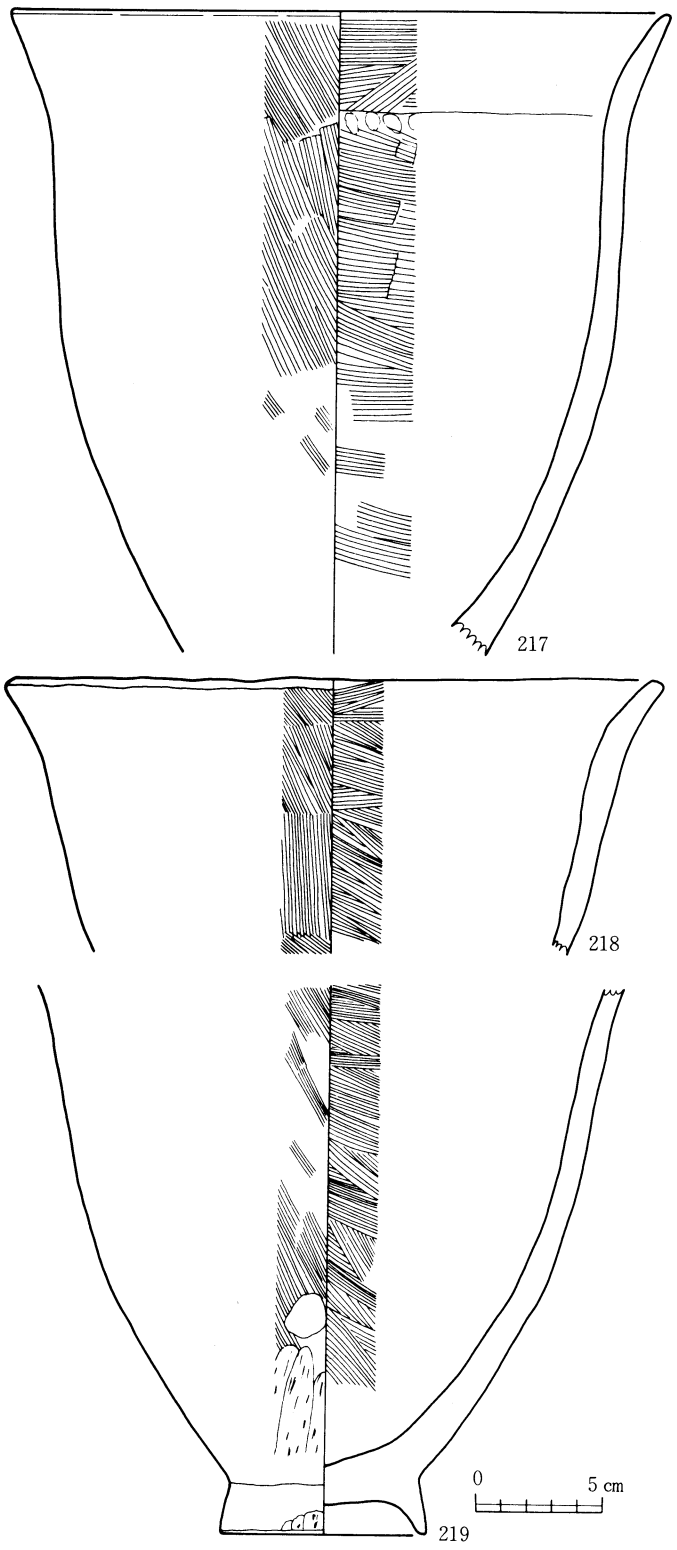
第38図　7号住居跡出土の土器（1）

(7) 7号住居跡

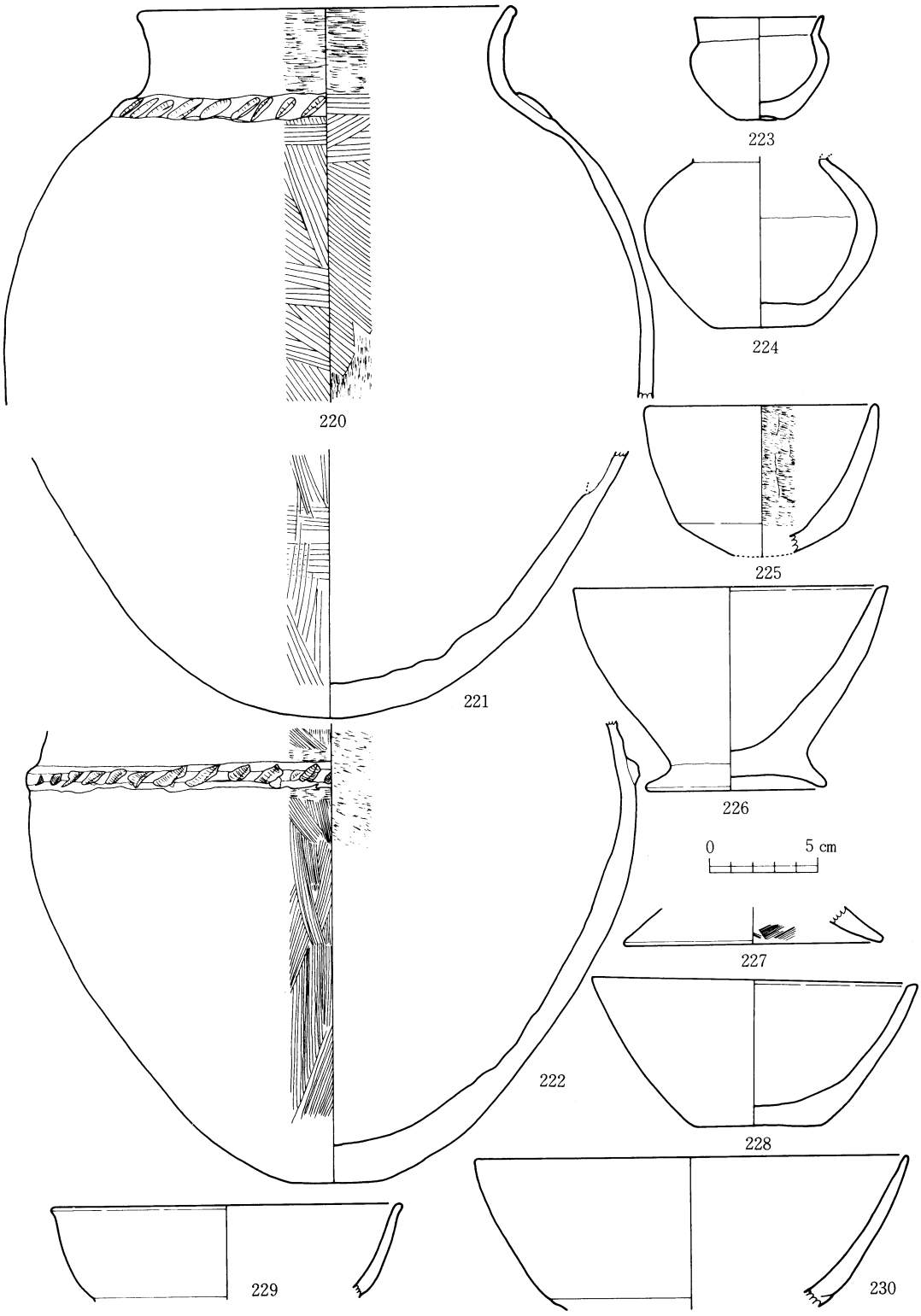
20・21A・B区につくられたやや変形した方形住居跡で，江戸時代につくられた墓坑によって広くこわされている。南北方向に5.4m，東西方向に4mほどを測り，深さ20cm位を残している。中央よりやや北寄

りに直径70cm位の範囲で炭・灰の堆積がある。床面には多くの完形品を含む土器があるが，特に灰・炭の堆積している所の南西側には甕形土器が集中している。

甕形土器（216～219）は，口縁部がくの字状に外反し，低い脚台が付く。口縁直径20cm～26cm，高さ22～28cmを測る。内外面ともハケナデを主とした調整がされ，一部ヘラナデが加えられる。壷形土器（220～222）は丸底のものと，小さい平底のものとがある。220は長胴形をして，口縁部が外反するものである。頸部のやや下部に，断面が平たい突帯が貼り付けられ，これには木目の浅い押圧痕が押される。内・外面とも粗いハケナデで調整され，薄くなっている。221・222は外面がハケナデ，内面が，ヘラナデで仕上げている。坩形土器（223・224）は丸みをもった胴部に外へ開く口縁がつく。底部は平底である。外面と，内面の立ちあがり部分には丹が塗られる。鉢形土器（225～228）には丸底，台付，平底の3種類がある。225は凹凸の目立つ器形をしており，内外ともにヘラナデで仕上げる。226・228は外面が丹塗りの土器で，228は内面も丹塗りである。調整はともにていねいであ



第39図　7号住居跡出土の土器（2）



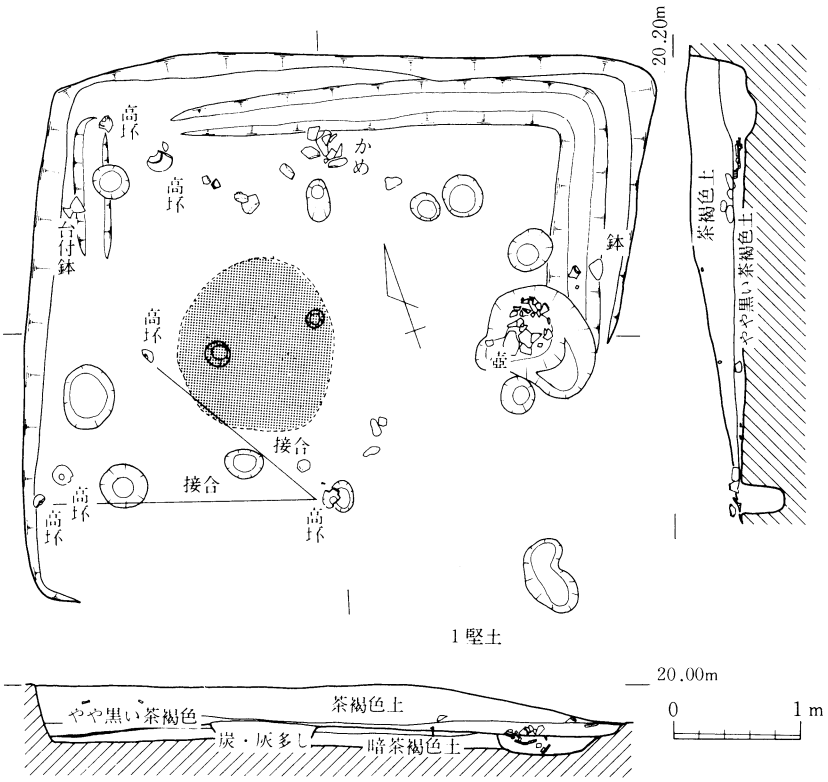
第40図　7号住居跡出土の土器（3）

る。高坏形土器（227・229・230）の口縁は端部がやや外反するものと，椀形のものとがあり，裾部はゆるやかに広がる。いずれも丹塗りである。

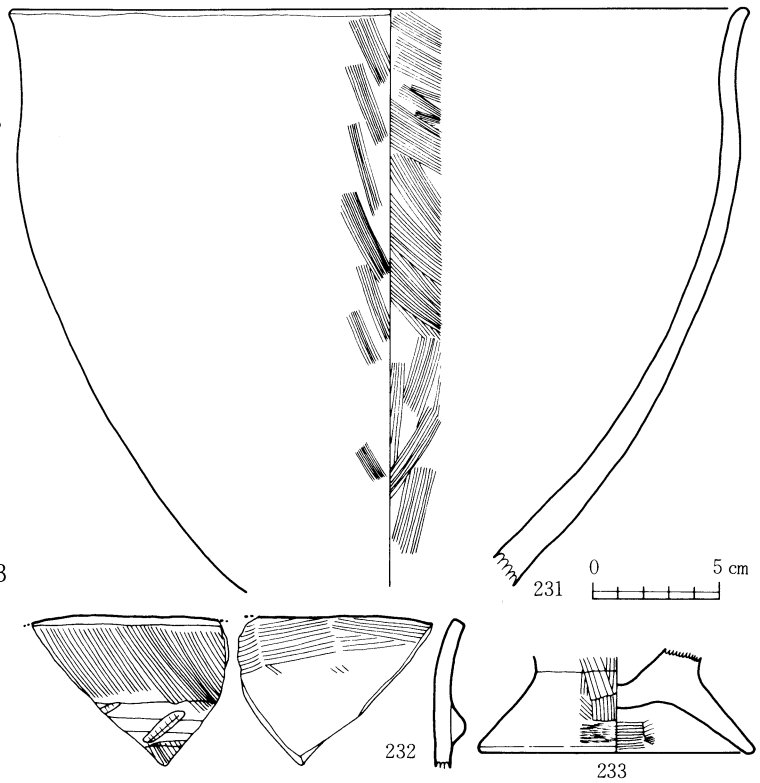
(8) 8号住居跡

22・23A・B区につくられた4.5m×4.7mの方形住居で，北側は深さ40cmとよく残っているが，南側は江戸時代の溝などによってこわされている。北半分では周囲に幅30cm，深さ10cmほどの溝が巡っている。3m四方には堅土面が広がっており，中央の直径1.2mの範囲には炭・灰が堆積しており，くぼみになっている。柱穴もいくらかあるが，はっきりしない。床面には高坏形土器・鉢形土器などがある。

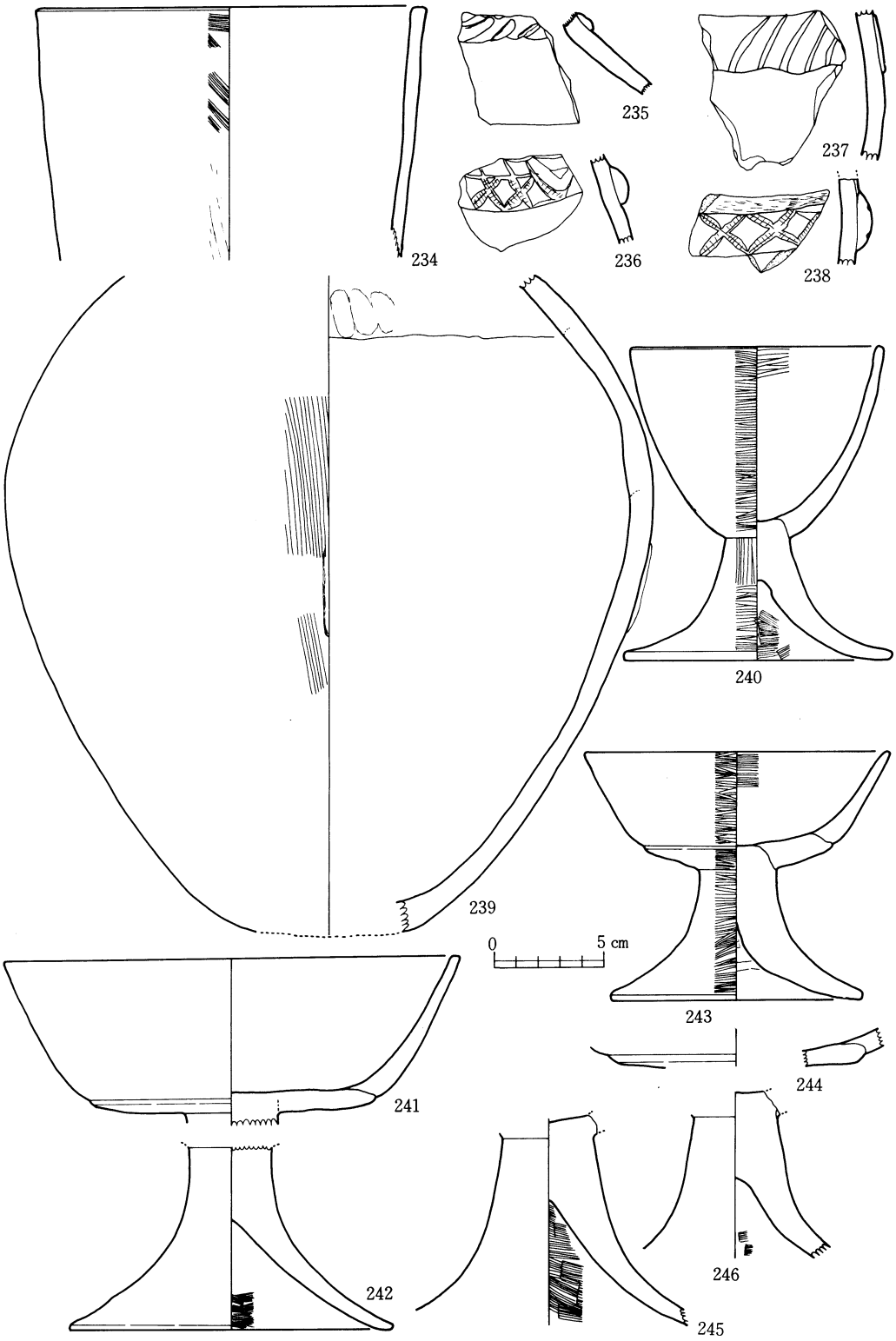
甕形土器（231～233）はくの字状に外反する口縁をもち，低い脚台が貼り付けられる。口縁直径28cmを測り，頸部に突帯の付くもの



第41図　8号住居跡



第42図　8号住居跡出土の土器（1）

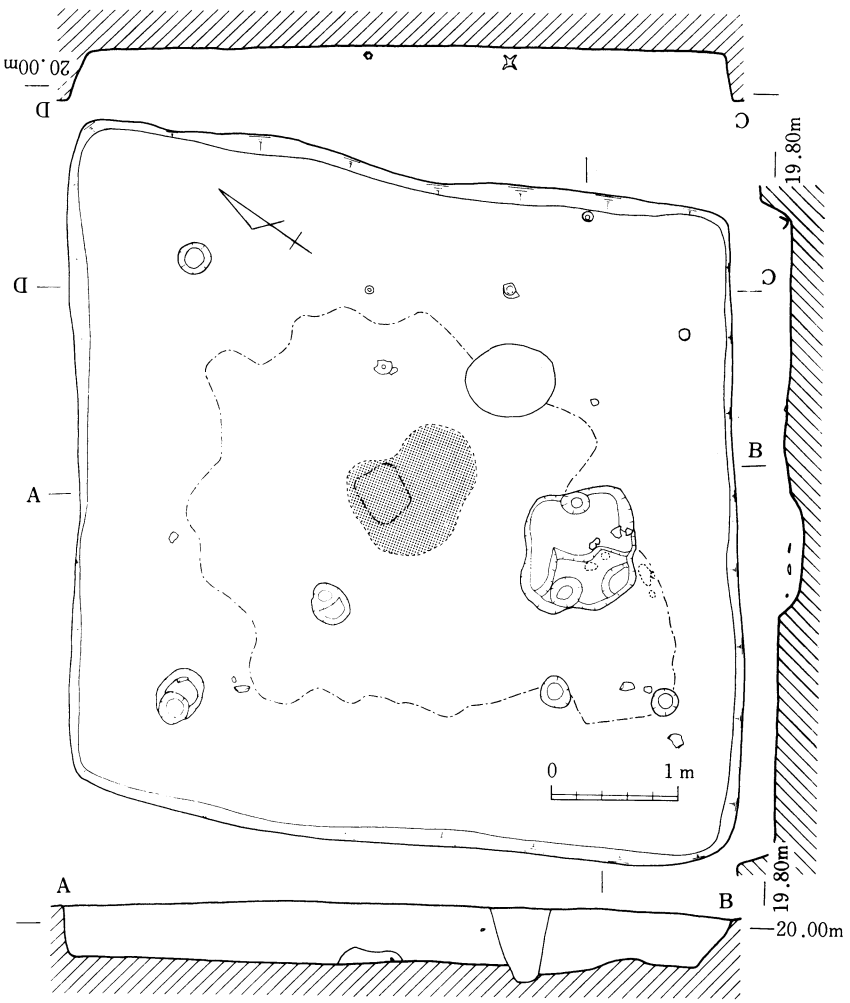


第43図　8号住居跡出土の土器（2）

と付かないものがある。壺形土器（235 ～ 239 ）は丸底で，長胴形の器形をしている。頸部・肩部には斜方向あるいは格子状のきざみが付された突帯が付く。239 の腹部には縦方向の突起が１条ある。鉢形土器（234 ・ 240 ）には直立する口縁部をもち，ヘラナデで仕上げるものと，丹塗りの台付のものとがある。240 は完形品で，口縁直径 11.5 cm，深さ 8 cmの鉢部と，裾部直径12cm，高さ 5.5 cmの脚部からなる。高坏形土器（241 ～ 246 ）はすべて丹塗りである。243 は口縁部直径14cm，裾部直径1 1.5 cm，高さ 11.3 cmの完形品である。241 はやや大型で，口縁直径21cmを測る。坏部は脚部のまわりに挿入する形で接合される。

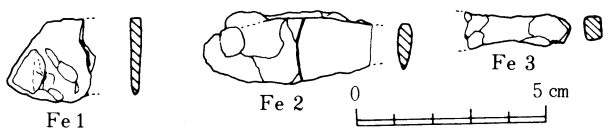
⑼9 号住居跡

28・29E・F 区につくられた 5.3 m 四方の方形住居跡で，深さ30cmを残している。中央付近の３m 四方くらいは堅くなっている。またその中央の70× 110 cmの範囲には炭や灰が堆積しており，その一角の40cm四方は床面が赤く焼けており，炉跡と思われる。南側には浅いくぼみがある。土器の出土は少ないが，坩形土器・鉢形土器・高坏形土器が多く完形品も含まれている。他に鉄製品も出土している。



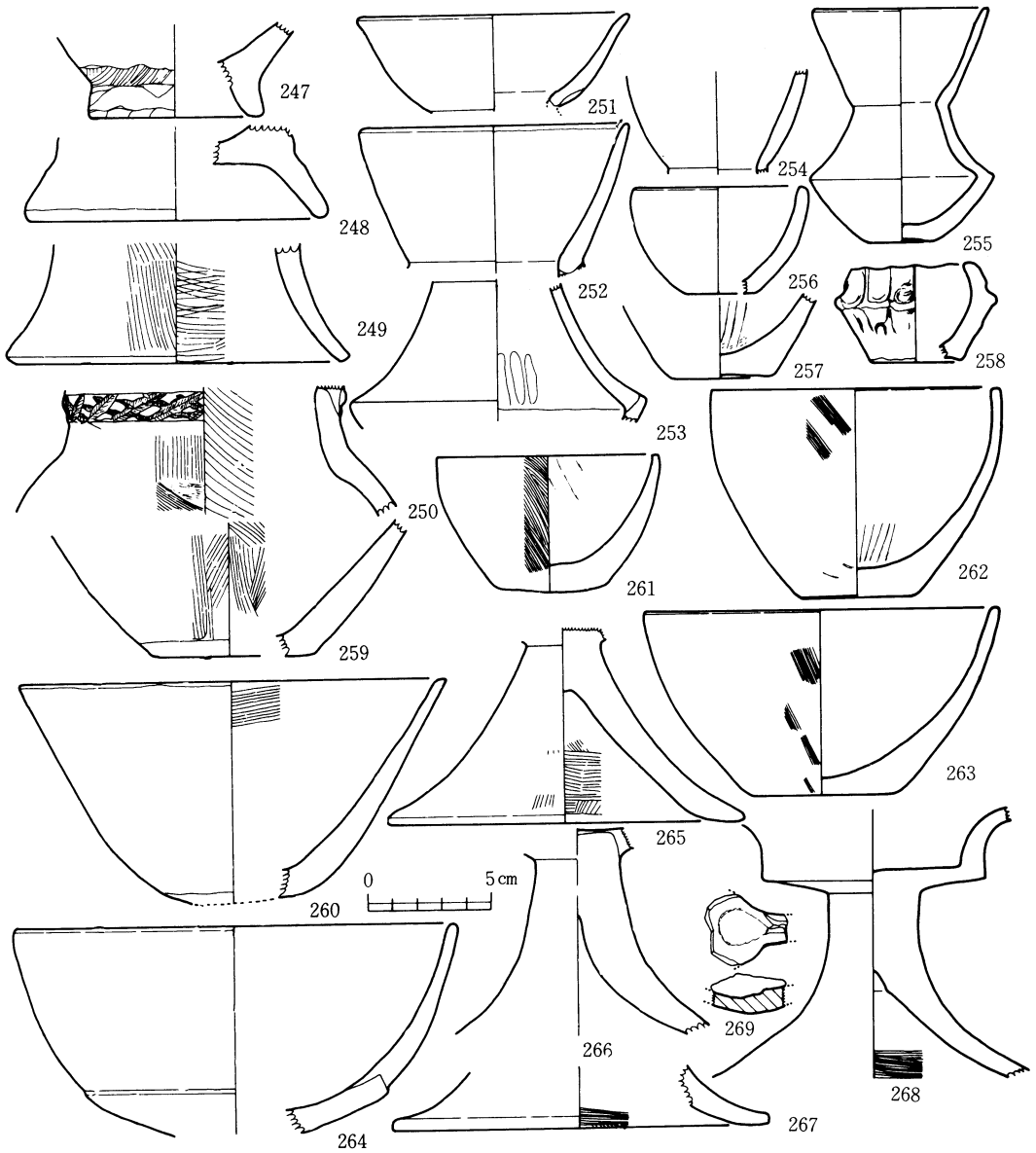
第44図　９号住居跡

甕形土器（247 ～ 249 ）の脚台は低く小さいものと，やや大きくて深いものとがある。壷形土器（250 ）はやや小型で，頸部



第45図　９号住居跡出土の鉄器

には格子状押圧のある突帯が貼り付けられる。坩形土器（251～255）は内反する口縁部と，肩部がくぼんで中央に最大径のある胴部，ややあげ底の底部からなる。口縁部は内外とも丹塗りである。255は完形品で口縁直径7cm，高さ9.6cmを測る。鉢形土器（256～263）は形態が数種あり，260が不安定な他はほとんど安定した平底である。258のように手づくね風のもの，ハケやヘラのナデ仕上げのもの，研磨して丹塗りのものなどがある。高坏形土器（264～268）の口縁部は内反して椀状のものと，外反するものがあり，脚部はゆるやかに広がる。匙形土製品（269）は浅いものである。鉄器は刀子状のもの（1・2）と柄の部分（3）がある。

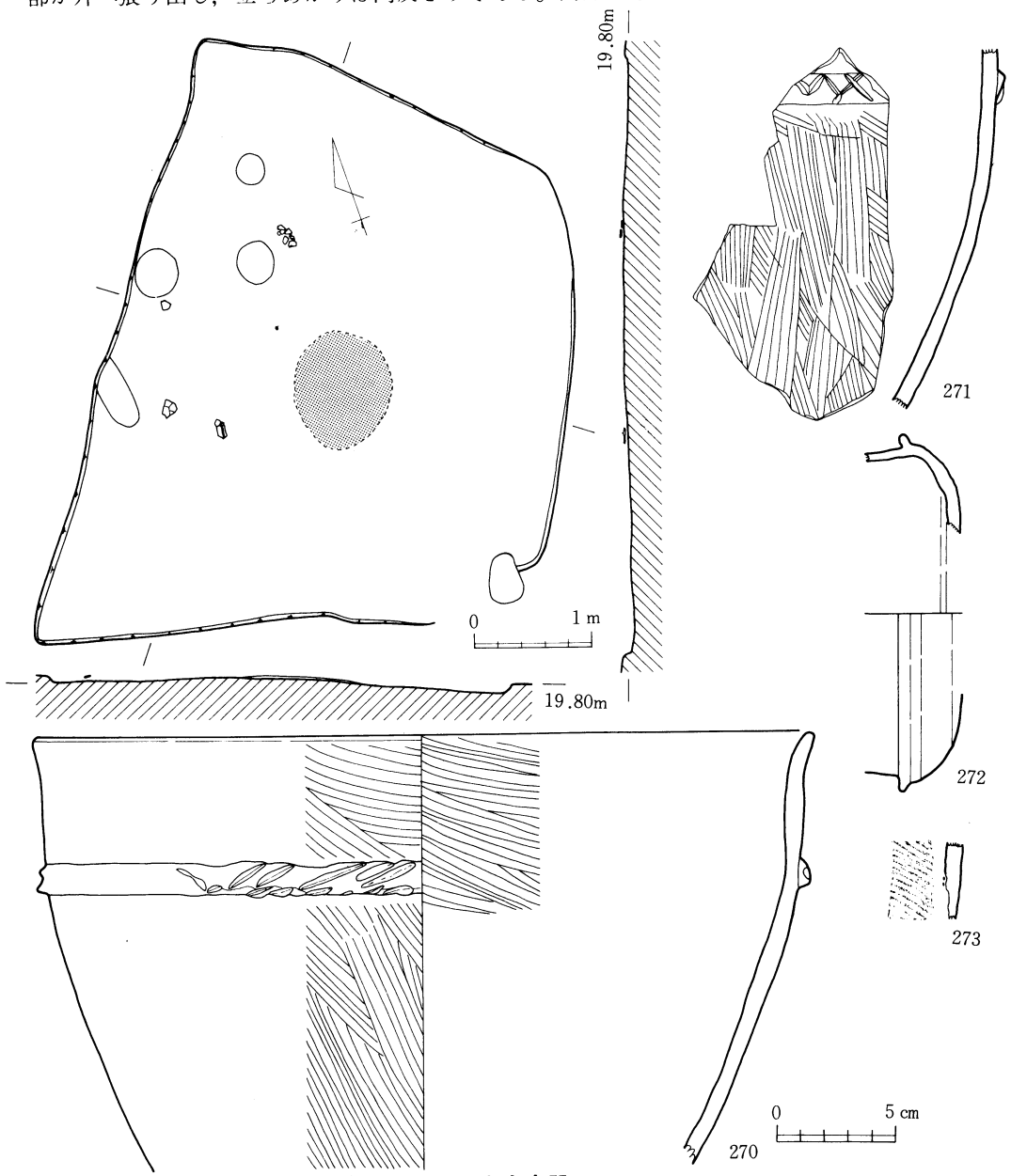


第46図　9号住居跡出土の土器

⑽10号住居跡

27・28Ｊ・Ｋ区につくられた上辺2.3ｍ，下辺5.3ｍ，高さ4ｍを測る台形状の住居跡で，ゴボウ栽培のため残りは悪い。深さも5㎝ほどしか残っていない。中央に80㎝×1ｍの範囲で炭・灰などが堆積している。床面に甕形土器などあるが，これも残りはよくない。

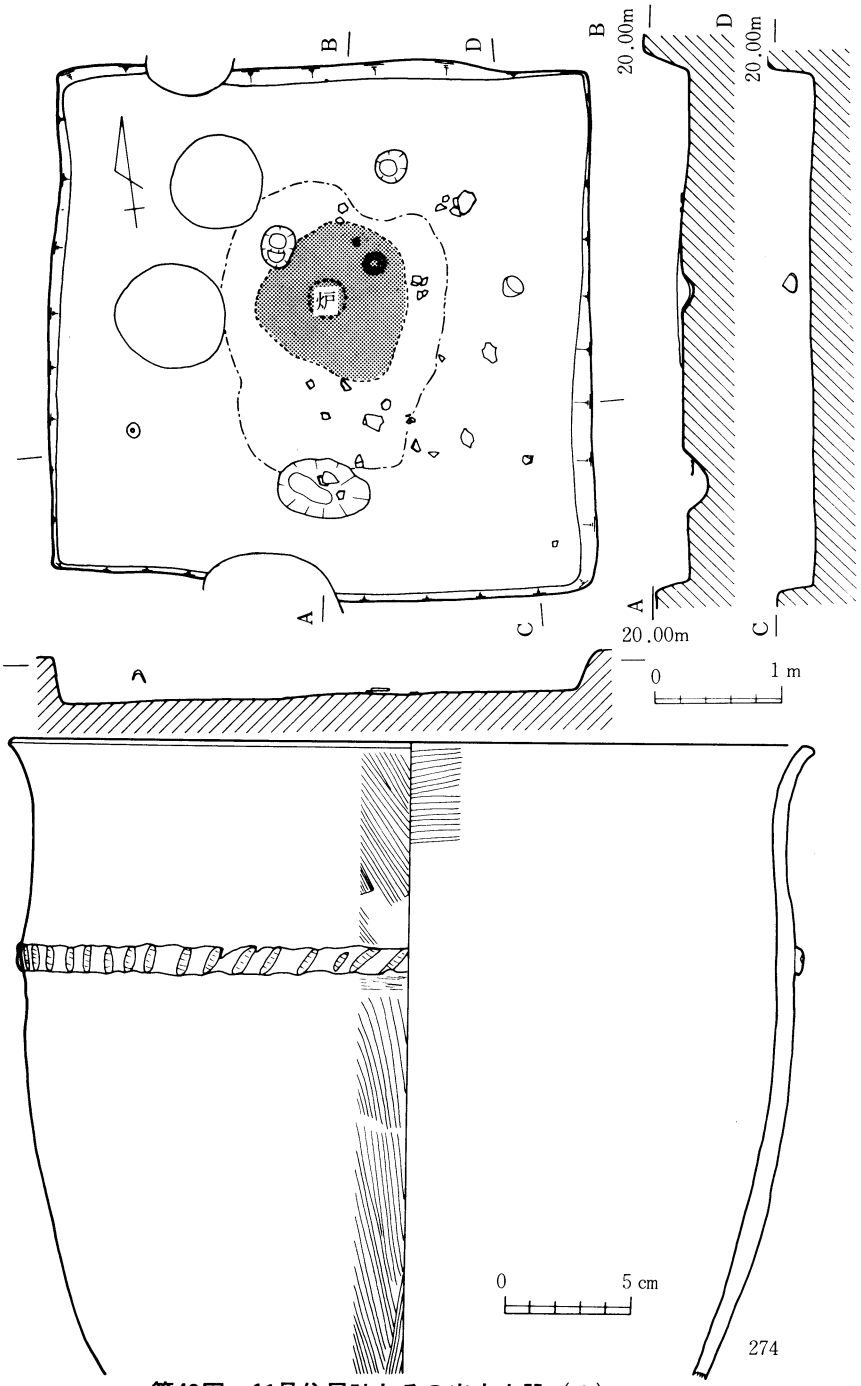
甕形土器は内反ぎみの器形をしているが，端部近くでは外反する。肩部付近に斜方向あるいは格子状の押圧が付された突帯が付されている。須恵器は坏身と甕が出土している。坏身は受部が外へ張り出し，立ちあがりは内反ぎみである。両方とも青灰色を呈している。



第47図　10号住居跡とその出土土器

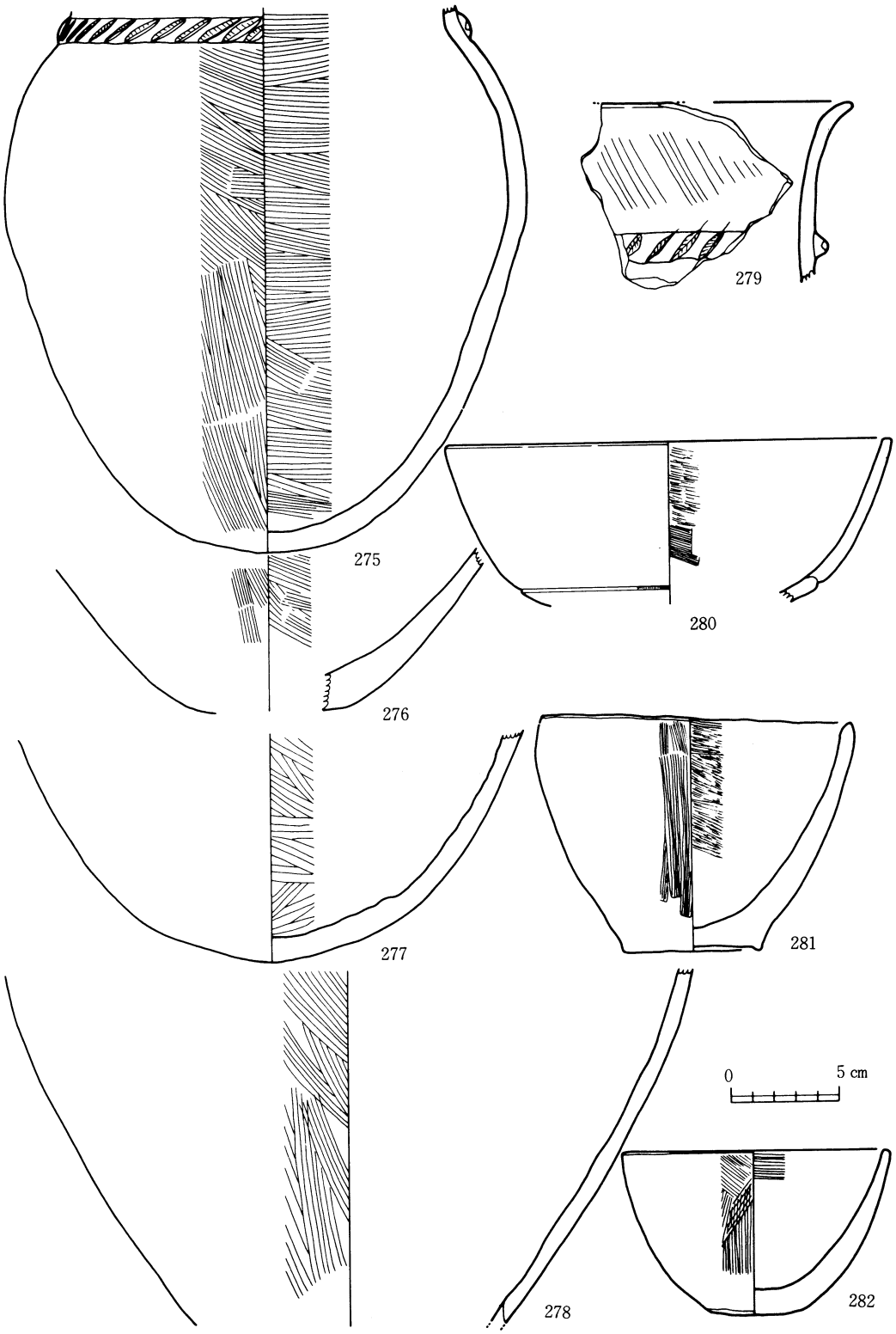
(11) 11号住居跡

28F・G区につくられた4.3m四方の方形住居跡で，深さ30cmとよく残っているが，イモ穴が多く各所でこわされている。1.7m×2.2mの範囲に堅土面が広がり，その中央の直径1.2mの範囲には炭・灰が堆積している。また，その中央の下面では直径30cmの範囲に焼土面があり，炉跡と思われる。南壁に近い所では長径70cm，短径40cm，深さ20cmのくぼみがあり，高坏形土器などがある。主柱穴等は不明である。



第48図　11号住居跡とその出土土器（1）

甕形土器（274・279）はくの字状に外反する口縁をもっており，7～8cm位下に斜方向の板押圧痕が付された貼り付け突帯が巡っている。外面は斜方向のハケナデ，内面の口縁付近は横方向のハケナデ，下半部はヘラナデで仕上げる。壺形土器（275～278）は頸部



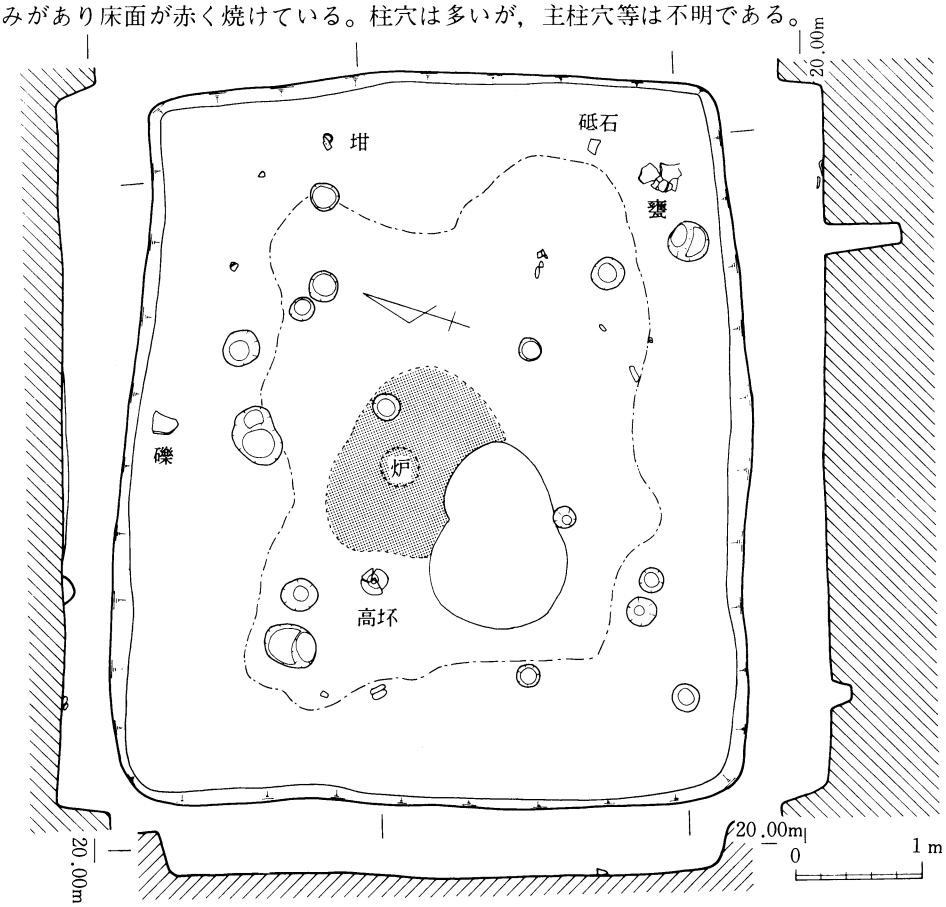
第49図　11号住居跡出土の土器（2）

に斜方向の板押圧痕のある断面半円形の貼り付け突帯があり，丸底である。外面・内面ともハケナデで仕上げているが，外面の底付近はヘラナデで仕上げている。277は底部付近に棒状の敷き物の痕跡を残している。高坏形土器（280）の坏部は口縁直径20cm，深さ7.5cmを測り，椀状を呈する。立ちあがりと底部は貼り付けてあり，その境は板押圧によって，凹線が巡っている。外面は横方向のヘラ研磨のあと丹が塗られ，内面はこまかい横方向のハケナデのあと，ていねいなヘラナデで仕上げられる。鉢形土器は内反する完形品が2点出土している。281は口縁直径14.5cm，底部直径6.5cm，高さ11cmを測り，浅いあげ底になっている。外面はていねいな縦方向のハケナデ，内面は横方向のヘラナデで仕上げる。282は口縁直径12.5cm，底部直径4cm，高さ7.7cmを測り，不安定な平底である。外面は斜あるいは縦方向のあらいハケナデで，内面は口縁近くが横方向のハケナデ，下半部が横方向のヘラナデで仕上げる。

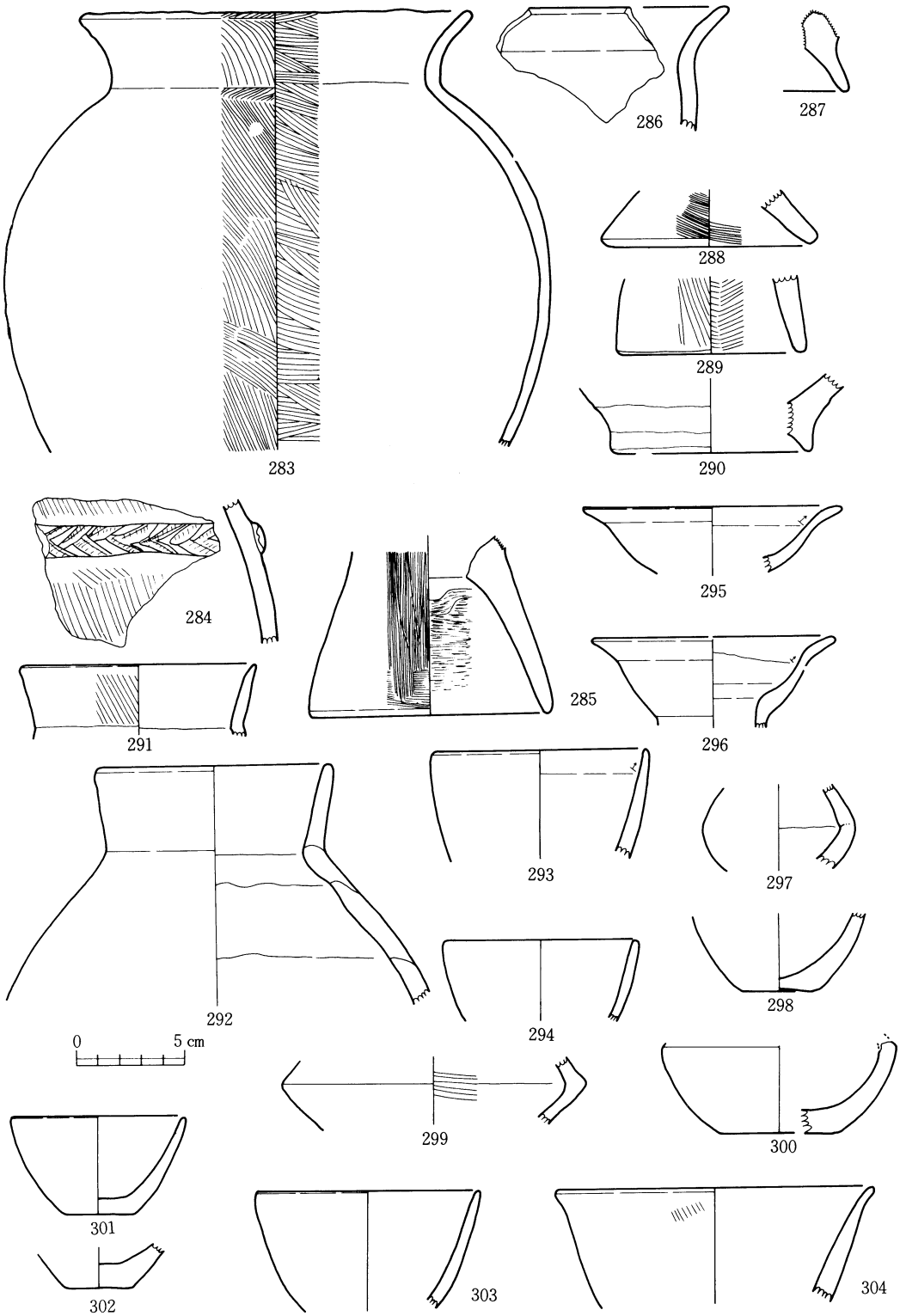
(12)12号住居跡

29・30E・F区につくられた5m×5.8mの方形住居跡で，深さは30～40cmと残りがよい。イモ穴によってこわされている所もある。3m×3.5mの範囲に堅土面が広がっている。中央の1.2m×1.5mの範囲には炭・灰が堆積しており，その中央部の直径30cmの範囲では深さ10cmのくぼみがあり床面が赤く焼けている。柱穴は多いが，主柱穴等は不明である。

甕形土器（283～290）には肥後系のものと土着のものがある。283が肥後系の土器である。口縁がくの字状に外反するもので，口縁直径18cmを測る長胴形をしており内外とも

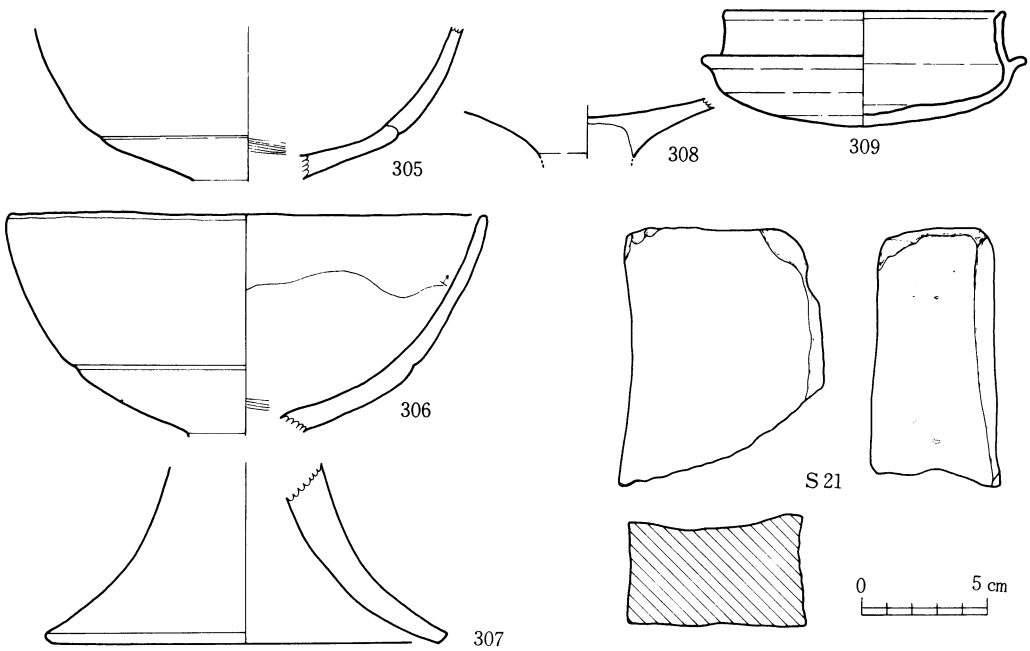


第50図　12号住居跡



第51図　12号住居跡出土の遺物（1）

に斜方向のハケナデで強く調整され，薄く仕上げられる。小礫を多く含む砂質土を用い，焼成が良く堅致である。土着の土器もくの字状に外反する口縁をもち，脚台が付けられる。頸部より下がったところに矢形の板押圧が付された突帯が貼り付けられる。脚台は浅いものと，長脚のものとがある。浅いものは1cm足らずであるが，深いものは6cm余りもある。外面・内面ともハケナデのものと，ヘラナデのものとがある。壺形土器（291・292）の口縁は やや外へ開いてまっすぐ伸びている。外面整形はハケナデのものと，ヘラナデのものとがあるが，内面整形はヘラナデである。2cm～4cmの粘土板を積みあげてつくっている。坩形土器（293～300）の口縁部は外反して広がるものと，やや内反するものとがある。外反するものの口縁直径は12cm，内反するものも口縁直径は9～10cmある。胴部は丸みをもつものと，上半部がややくぼむものとがあり，底は平底あるいはややあげ底である。外面整形はヘラによる横方向のミガキかていねいなナデであり，丹が塗られる。内面整形はヘラによるていねいなナデで，口縁部近くには丹が塗られることもある。293は内面の丹が整然と塗られており，丹塗りの道具がハケ状のものであったことを伺わせる。鉢形土器（301～304）は内反ぎみに立ちあがるものと，端部近くで外反するものがある。301は口縁直径8cm，底部直径3cm，高さ4.5cmを測り，内・外面ともヘラミガキで仕上げ，丹が塗られる。302と303も301と同じような器形・大きさをしており，外面・内面の整形はともにていねいなヘラナデである。304もヘラナデで仕上げているが，外面はその前にハケナデをしている。高坏形土器（305～308）は埦形の器形をした坏部と，裾部と筒部の境がはっきりしない脚部からなる。坏部は口縁直径19cm，深さ8cmを測り，底部と立ちあがりの境に凹線が巡る。坏部は脚部を巻くようにして接合される。外面はヘラミ



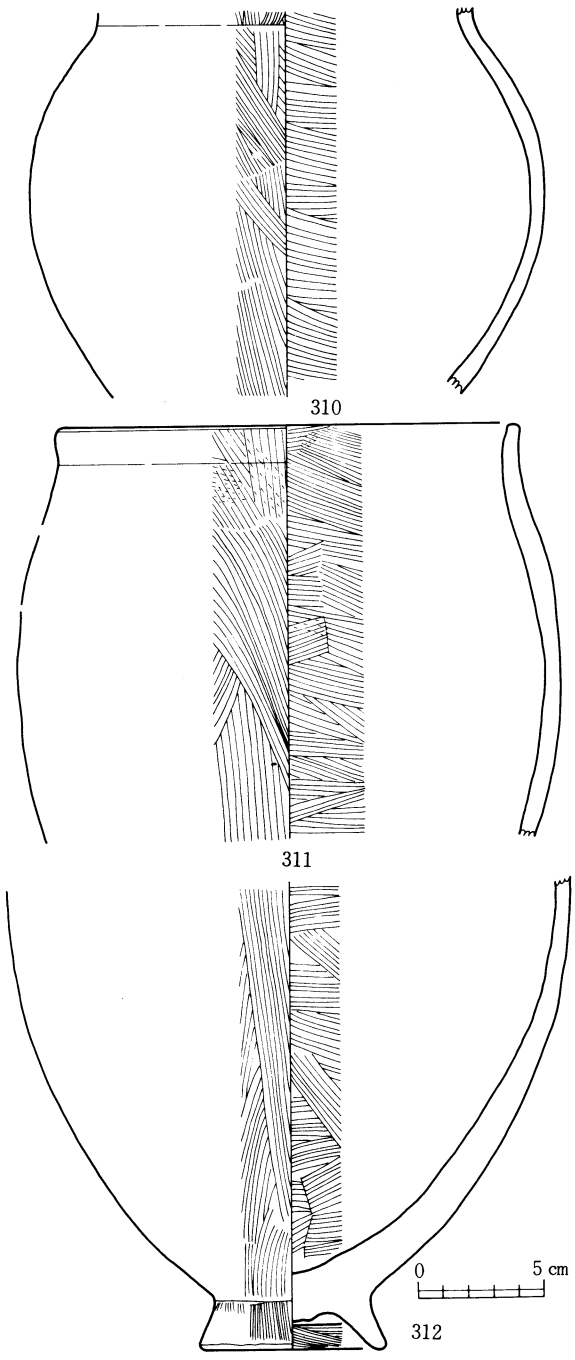
第52図　12号住居跡出土の遺物(2)

ガキ，内面はていねいなヘラナデで仕上げるが，内面の底は一部ハケ目が残っている。須恵器は東側の床面と，柱穴から出土したもので，口縁直径11cm，高さ4.5cmを測る完形の坏身である。立ちあがりはやや内反しながらまっすぐ立ちあがり，端部内面はくぼんでいる。受部は外へ広がる。0.1mm～2mm大の石英など白色石粒を含む土を用い，焼成良好である。内外面とも青灰色を呈している。砥石も床面から出土しており花崗岩を使用している。2面を使用しており，よく使い込んでいる。

⑬ 13号住居跡

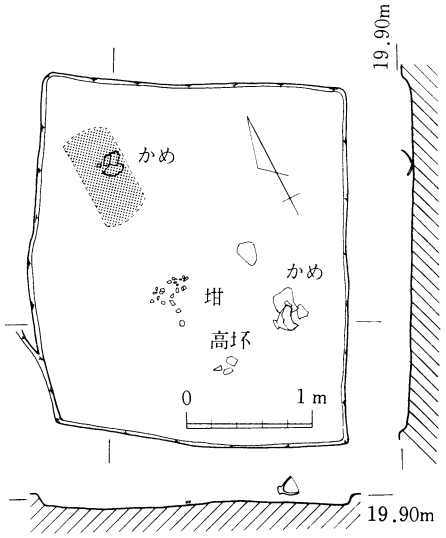
29・30Ⅰ区につくられているが，ゴボウ栽培によってこわされており，現在確認できる広さは2.5m×2.8mの方形である。深さは5cmほどと浅い。北西隅近くの直径80cmの範囲に炭・灰などが堆積している。床面には多くの土器がある。

甕形土器（310～315）は肥後系のものと，土着のものがある。310が肥後系のもので，長胴形の器形をしている。頸部が細くなっており，外面・内面とも斜あるいは横方向のハケナデで仕上げられ，薄く仕上がっている。外面にはススが多く付着している。土着の甕形土器は口縁部が外反するもので，底には低い脚台が付く。311は内反する器形をしているが，口縁部が外反している。口縁直径は18cmを測る。313は口縁直径27cmを測り，口縁部が外反している。頸部ははっきりしていないが，下部が斜方向のナデになっているのに対し，口縁部のナデは縦方向になっている。315は口縁端部に板の押圧痕があり，端部の断面を矩形にしている。外面整形は斜あるいは縦方向のハ

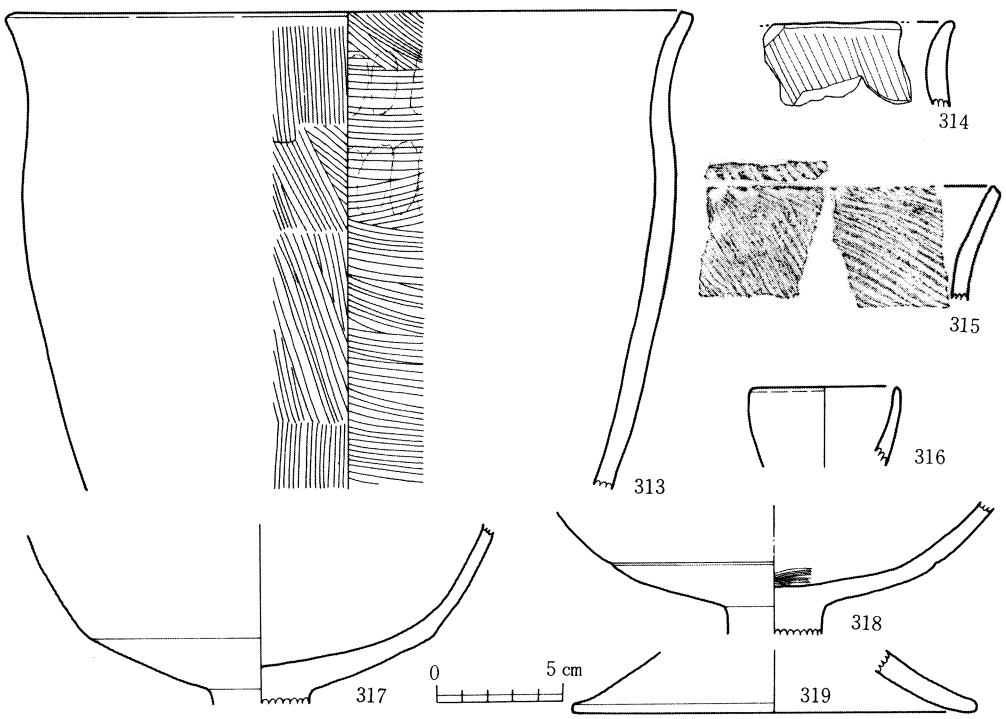


第53図　13号住居跡出土の土器（1）

ケナデ，内面整形は斜あるいは横方向のハケナデで仕上げる。313は内面にヘラ押圧の痕跡が残っている。坩形土器（316）の口縁部は内反し，直径6㎝を測る。外面・内面とも横方向のヘラミガキで仕あげ，丹が塗られる。高坏形土器（317～319）の坏部は椀形をしており，立ちあがりと底部の境は明瞭でないが，317は境に稜がつき，318は浅い凹線が巡っている。裾部はゆるやかに広がり，端部の直径16㎝を測る。坏部は脚部のまわりにさし込むように接合されている。外面はヘラミガキで仕上げ，丹が塗られる。内面はミガキに近いヘラナデで調整するが，底部付近にはハケ目が残っている。甕形土器の胎土は0.1㎜～5㎜大の石英や黒雲母などの細石粒を多く含む砂質土である。肥後系甕の胎土は石英などの細石粒を相当の割合で含んでおり，ざらざらした感じをいだかせる。黄みがかった茶褐色，あるいは赤みがかった茶褐色を呈し，焼成度は良好である。坩形土器・高坏形土器の胎土は石英・黒雲母・茶色粘土を多く含んでいるが，こまかい土を使用している。



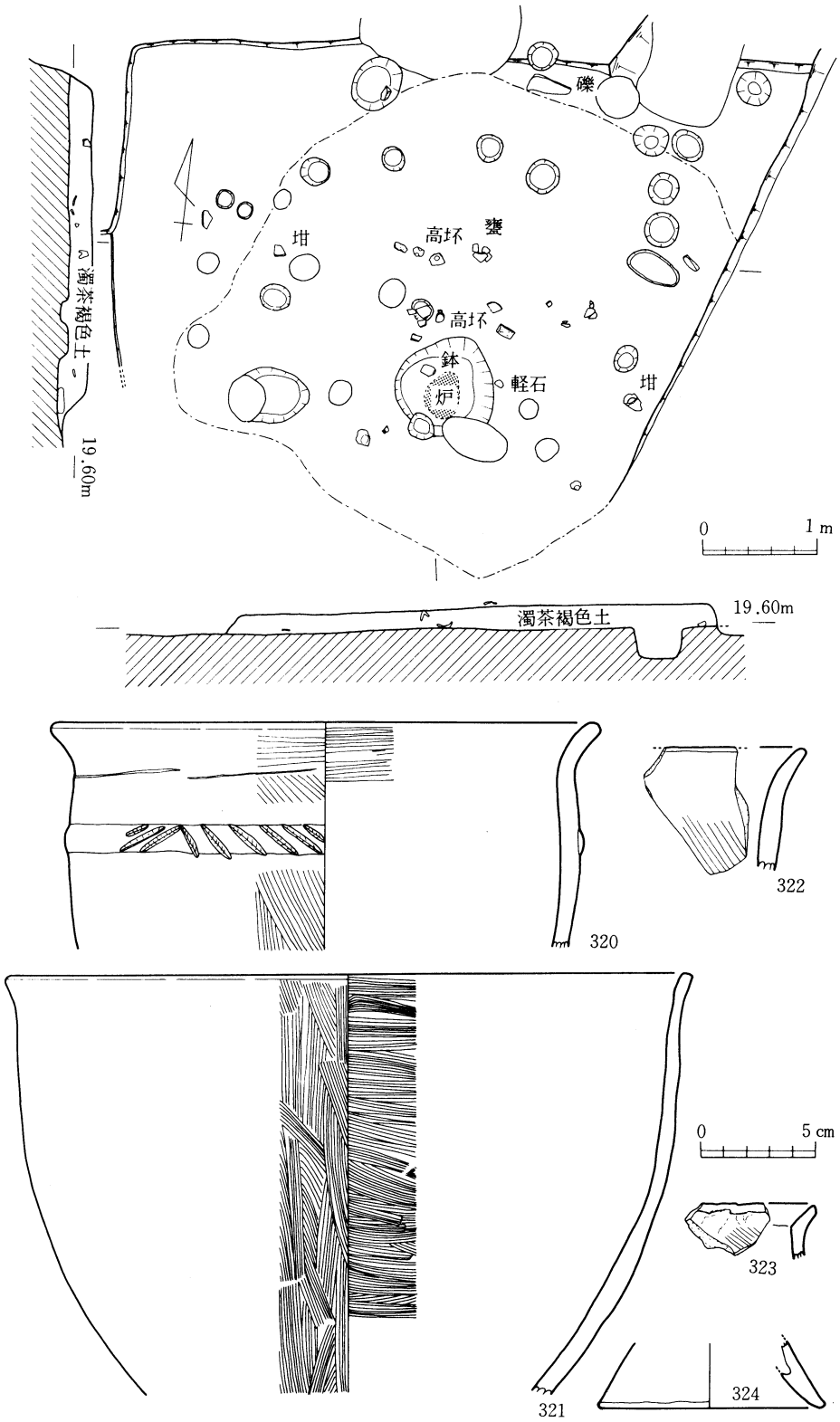
第54図　13号住居跡



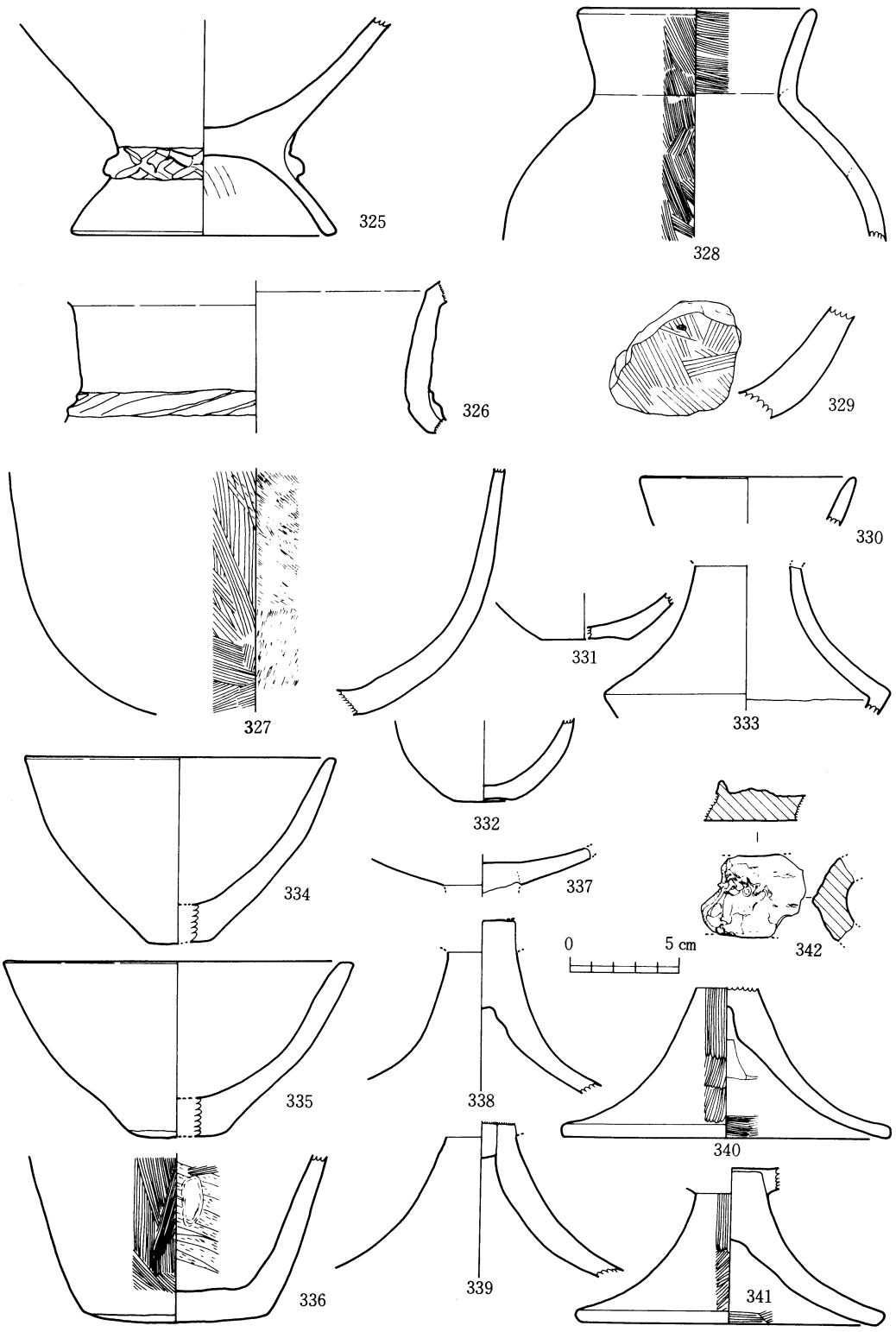
第55図　13号住居跡出土の土器（2）

(14) 14号住居跡

15・16 F・G区につくられた方形住居で，東西方向に6m，南北方向に4.8m検出したが，東側と南側が削平されているため全容を検出できなかった。深さは北側で20cmを浅している。中央付近の4m四方の範囲には堅土面が広がっている。中央近くには直径0.8m，深さ10cmのくぼみがあり，



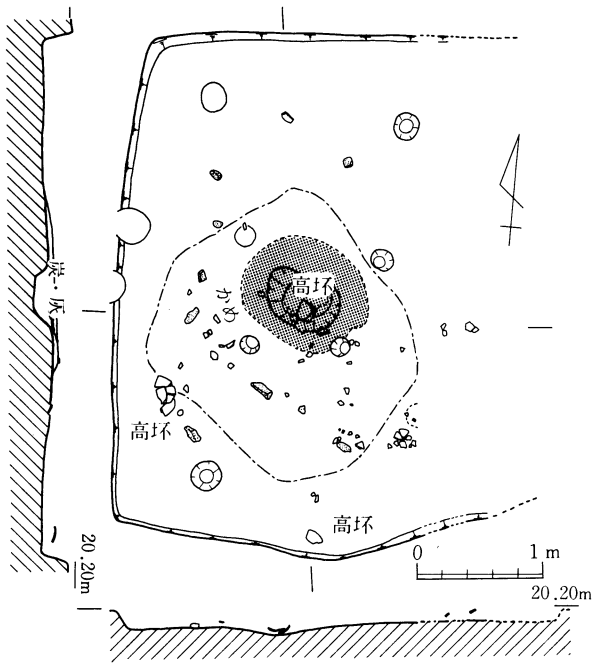
第56図　14号住居跡とその出土遺物（1）



第57図　14号住居跡出土の遺物（2）

中央は赤く焼けている。炉跡と思われる。小さな柱穴が多く検出されたが，主柱穴は不明であった。床面上に高坏形土器などがあったが，小さな破片が多かった。

甕形土器（320～325）の口縁部はゆるやかに外反し，頸部の下に突帯の貼り付けられるものと，ないものがある。320は口縁直径が24cmあり，頸部は深くナデて段をつくる。頸部より上は，外面・内面とも横方向のハケナデ，下は外面が斜あるいは縦方向のハケナデ，内面が横方向のヘラナデで仕上げる。突帯には板状圧痕が付されており，途中で右下がりから左下がりへ向きを変える。321・322は突帯がつかず，調整はハケナデを主とする。323は小型の甕形土器で，外反度が強い。整形は外面がハケナデ，内面がヘラナデである。脚台付近はヘラナデで仕上げており，325には付け根に突帯が貼り付けられている。突帯には格子状の板押圧痕が付される。324は底に押しつけられるように脚台が貼り付けられる。壺形土器（326～329）の口縁は直立ぎみでやや外反するものと，外へ開いて立ちあがり，端部付近で外へ屈曲するものとがあり，屈曲するものは頸部にヘラ押圧の付された突帯が貼り付けられる。底部は丸底であるが，327は安定した丸底でうすく仕上げている。整形は外面がハケナデ，内面がヘラナデであるが，326は両面ともヘラナデ，328は口縁内面がハケナデである。329は底部にモミ痕が付いている。坩形土器（330～333）には大きいものと小さいものがある。口縁部は外へ開きながら，まっすぐ伸びている。肩部は外反するものと，丸みをもつものとがあり，底は浅いあげ底である。外面・内面ともヘラミガキあるいはていねいなヘラナデで仕上げ，外面は丹が塗られる。口縁内面も丹が塗られ，332は内面の下半まで丹が塗られている。鉢形土器（334～336）は口縁部が広くて，底部の小さいものと，安定した平底のものとがある。334は口縁直径14cm，底部直径3cm，高さ8.5cm，335は口縁直径16cm，底部直径3cm，高さ8cmを測り，内・外面ともていねいなヘラナデで仕上げる。336は底部直径8cmを測り，外面がこまかいハケナデ，内面がヘラナデで仕上げ，底にはせんい状の圧痕が付く。高坏形土器（337～341）の脚部は筒部と裾部の境が明瞭でなく，ゆるやかに広がる。外面は横あるいは縦方向のヘラミガキで仕上げられ，丹が塗られる。内面はヘラナデであるが裾部のみはハケナデである。坏部と脚部の接合は，脚部に坏部を押し込むようにして行われる。339は筒状のもの



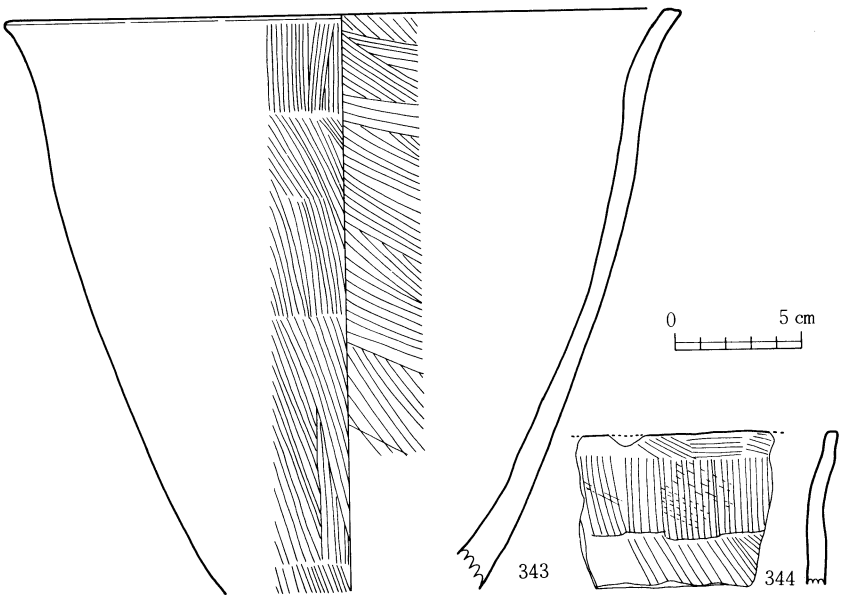
第58図　15号住居跡

を脚部に押し込んでいる。**342**はふいごの羽口で，内側の直径 2.3cmを測る。厚さが 1.2cmあり，周囲には鉄かすが付着している。

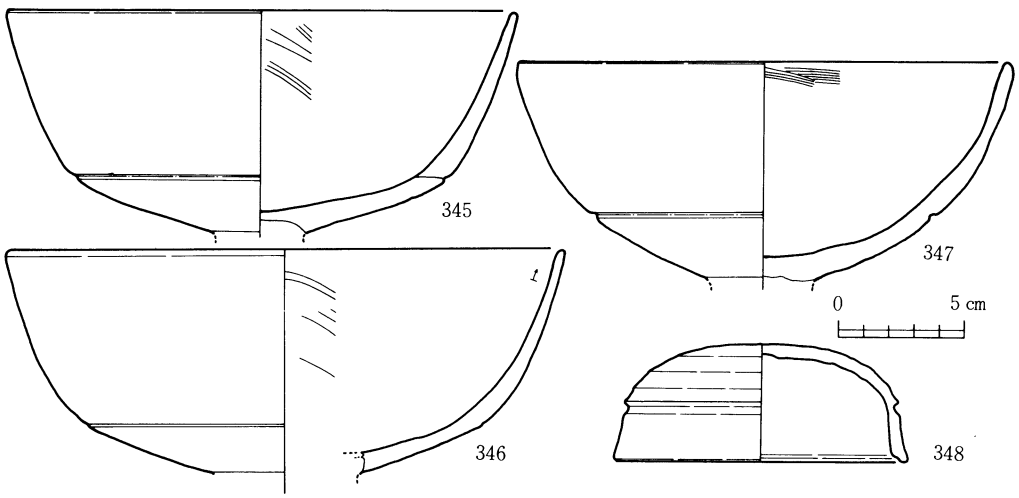
⑮15号住居跡

28・29G・H区につくられた 3.5m × 4 mの方形住居跡で，東側をゴボウ栽培によってこわされている。 1.8m × 2.1mの範囲に堅土面が広がっており，その中央付近の直径１mの範囲には炭・灰などが堆積している。その下部では45cm×60cmのだ円形をした浅いくぼみがあり，赤く焼けている。主柱穴は不明であるが，くぼみのまわりに４本の柱穴がある。

343は口縁直径27cmを測り，やや外反する甕形土器で，内・外面ともハケナデで仕上げている。 **344**も甕形土器の口縁で，外反しているが端部付近が直立している。内外ともハケナデである。高坏形土器（ **345**～**347**）は口縁直径20～22cm深さ８cmを測る椀形の坏部で，外面はヘラミガキで仕

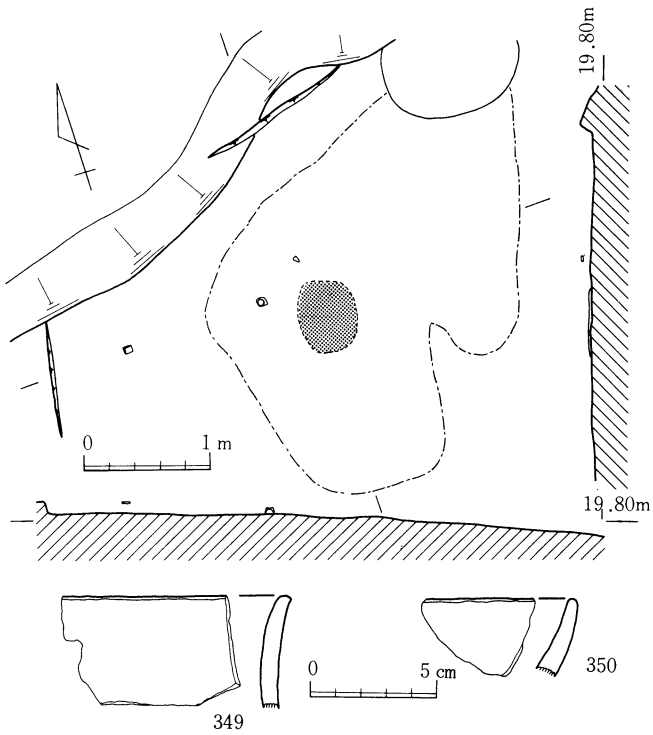


第59図　15号住居跡出土の土器(1)



第60図　15号住居跡出土の土器(2)

上げ，丹塗りである。内面はハケナデのあと，ていねいなヘラナデで仕上げ，**346**の上半は丹が塗られる。**348**は黒灰色を呈する須恵器の坏蓋で，口縁直径11.5cm，高さ 4.7cmを測る。口縁内面は段をもっており，天井部と口縁部の境もくぼんでいる。白色砂粒を多く含む密な胎土を使用している。

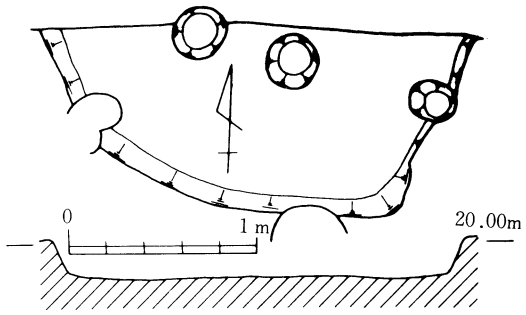


第61図　19号住居跡とその出土土器

(16)19号住居跡

24・25D区につくられた方形住居跡であるが，江戸時代の溝状遺構や道路跡によってほとんどこわされている。堅土面が2.4m～ 3.5mの範囲に広がっており，その中央に直径50cmの範囲で炭・灰が堆積している。溝状遺構からは多くの土器が出土しており，この住居跡のものも含まれていると思われる。床面にも少量の土器がある。

甕形土器はくの字状に外反する器形をしており，内面・外面とも横方向のヘラナデで仕上げられる。鉢形土器はやや内反しており，外面・内面とも横方向のヘラナデで仕上げている。



第62図　土坑

2．土坑

28G・H区につくられた略円形の土坑であるが，東側を15号住居跡にこわされている。残存規模は南北方向に 2.2m，東西方向に１mある。深さ10～20cmを残している。

3．表土層出土の土器

表土層や古代以降の遺構などからも古墳時代の土器が出土している。

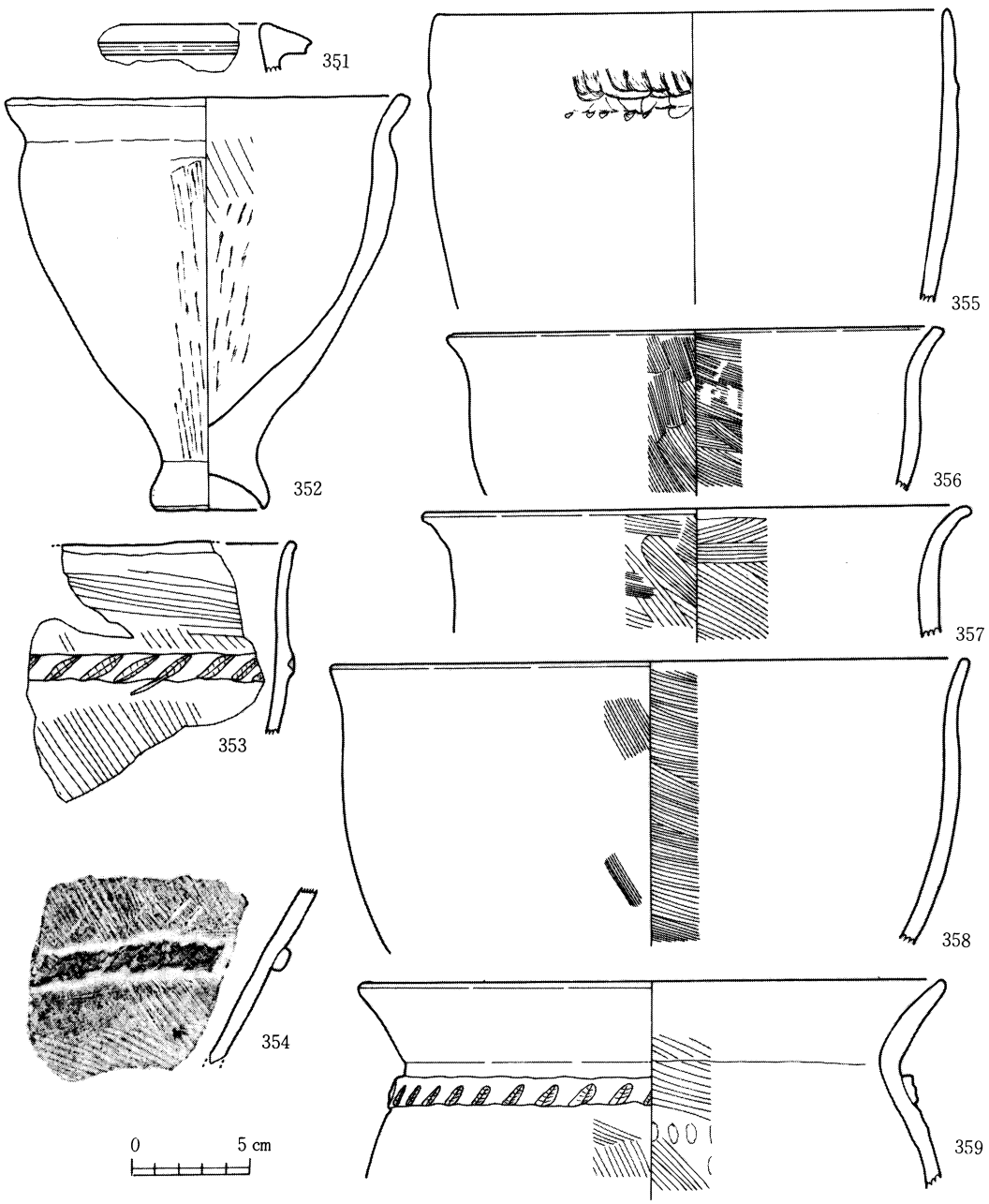
(1)弥生式土器 (351)

磨滅しているが，逆Ｌ字形の口縁をもつ弥生時代中期の甕形土器が１点出土している。口縁はやや下がっており，端部はくぼんでいる。６mm大までの小礫を多く含む砂質土を用いている。

(2)土師器

甕形土器（ **352**～ **365**）の口縁部は外反するものがほとんどで，頸部に突帯の付くものと，

付かないものがある。 **352**は口縁直径17cm，底部直径５cm，高さ17.5cmを測る完形品である。くの字状に曲がる口縁をもち，浅く，小さい脚台が付く。整形は内外ともに粗く，ケズリに近い粗いヘラナデで仕上げる。脚台のつくりも粗い。 **353**と **354**はまっすぐ立ちあがる口縁をしており，左下がりの板押しがされた突帯が貼り付けられる。 **355**はやや内反する口縁部をもっており，口縁下部に突帯は付かないものの，ヘラ引きとヘラ押しにより凝突帯とでもいえそう



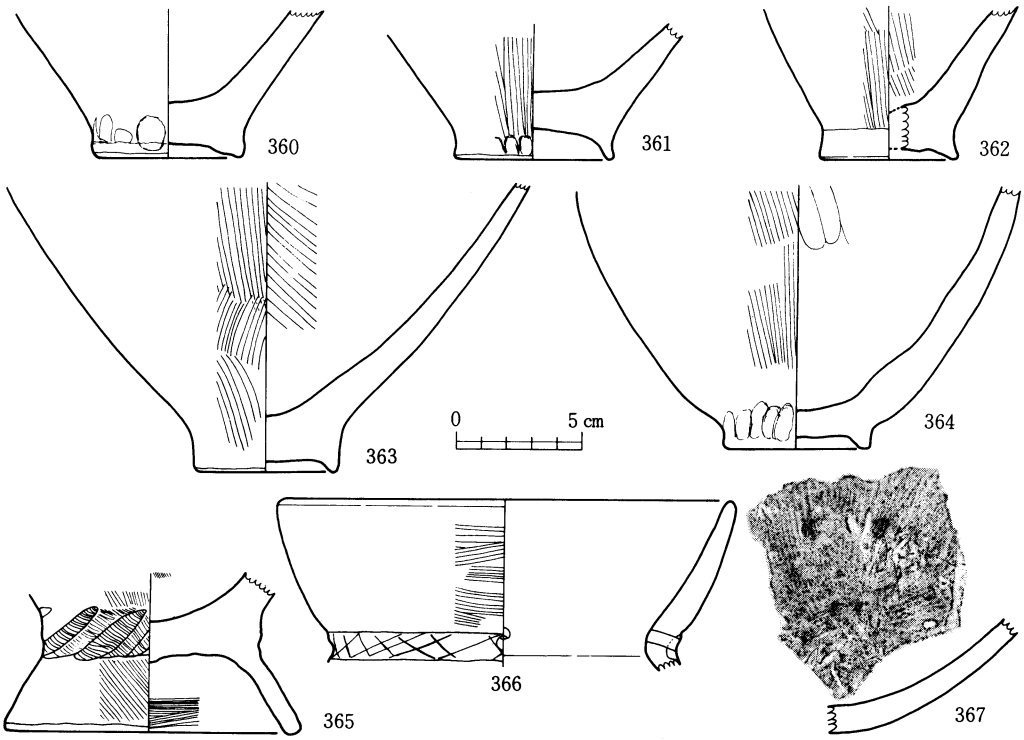
第63図　攪乱層出土の古墳時代土師器（１）

な文様をつくっている。 **359**は強く外反するくの字状口縁で，頸部に板押しのある突帯が貼り付けられる。脚台は浅いものが多く，申しわけ程度に引き伸ばしたものもある。凹凸が激しい。 **365**は胴部と脚台の境を板で強く押し，突帯を貼り付けたような文様をつくっている。

366は壺形土器の口縁で，くの字状に折れているが，やや内反する。頸部にヘラの格子状文が付された突帯が貼り付けられ，直径６㎜ほどの円孔が１個ある。 **367**の底には繊維状の圧痕が多くあり，もみ痕も３ヶ所にみられる。

坩形土器（ **368**～ **374**）は大きく２種に分けられる。ひとつは小さい胴部に長い口縁部のつく小型丸底壺の系統である（ **368**）。他種がこまかい致密土を使い，丹塗りであるのに対し，これは砂質土を用い，ヘラナデで仕上げ丹を塗らない。あとひとつは平底あるいはあげ底で，丸みをもつ胴部に内反してまっすぐのびる口縁の付くものと，胴部からまっすぐ立ちあがり外へ強く曲がる口縁をもつものとがある。胴部も最大径が肩にあるものと，下半部にあるものとがある。 **374**は口縁直径 8.5cm，底部直径３cm，高さ11cmを測る完形品で，胴部に直径 1.2cmの円孔が１個ある。

鉢形土器（ **375**～ **388**）にも多くの形態がある。まず，内反ぎみに立ちあがり，平底のものがある（ **375**～ **377**）。これは外面がハケナデ，内面がハケあるいはヘラナデで仕上げる。 **378**と **381**はていねいなヘラナデで仕上げ，外面および内面の上半部に丹が塗られる。 **379**は丸底



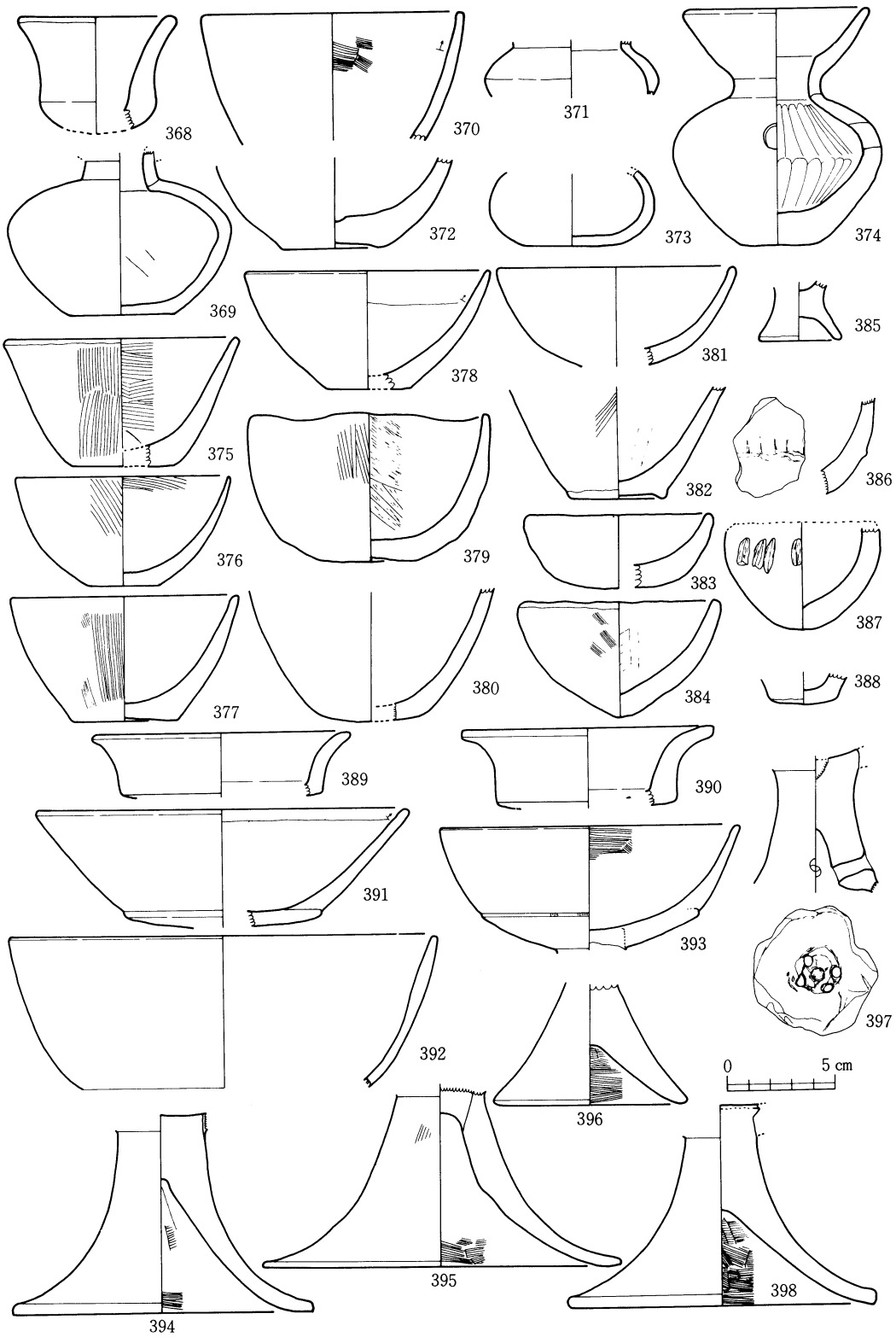
第64図　攪乱層出土の古墳時代土師器（２）

ぎみの器形をしており，凹凸が激しい。 **382**はややあげ底ぎみである。 **383**～ **388**は手づくね土器で，多くはヘラナデで仕上げる。 **385**は甕形土器の脚台である。 **386**と **387**はとがり底の器形をしており，外面の口縁下部に並行するヘラ引きがくり返される。 **388**は平たい底をした小型のものである。

高坏形土器（ **389**～ **398**）も丹塗りのものと，丹の塗られないものとがある。丹塗りのものの坏部は，直径12cmで立ちあがりが強く外反するもの，直径17cm，深さ 4.7cmと坏形のもの，直径14cm，深さ５cmあるいは直径20cm，深さ８cmと椀形のものの３種に分けられる。ほとんどは外面と，内面の口縁のみ丹塗りだが， **390**は内面全体にも丹が塗られる。脚部はゆるやかに裾部が開くが，丹のない **397**は裾部が段をもって広がり，屈曲部に４つの円孔がうがたれる。

図番	器　種	出土区	層	備　考	図番	器　種	出土区	層	備　考
351	弥生式土器	23H	1		375	鉢形土器	19C	1	
352	甕形土器	34B	1		376	〃	28E	1	
353	〃	16E	1		377	〃	19C	1	
354	〃				378	〃	20～23G	1	丹塗り
355	〃	23C～D	1		379	〃	25E	1	
356	〃	24G	1		380	〃	24・25E	2	
357	〃	23C～D	1		381	〃	18D	1	丹塗り
358	〃	22B	1		382	〃	23C～D	1	
359	〃	H 7			383	〃	37B	P 2	手づくね
360	〃	24C	1		384	〃	24C	1	〃
361	〃	24C	1		385	〃	18L	土坑	〃
362	〃	25G	1		386	〃	22・23	1	〃
363	〃	24・25E	1		387	〃	22F	1	〃
364	〃	25E	1		388	〃	33B	1	〃
365	〃	18D	1		389	高坏形土器	15 I	2	
366	壺形土器	17 I	1	円孔アリ	390	〃	20～23G	1	
367	〃	22C	1	もみ痕アリ	391	〃	23C～D	1	
368	坩形土器	26D	1	小型丸底壺	392	〃	16 I	1	
369	〃	30H	P 1		393	〃	16E	1	
370	〃	19E	1		394	〃	19C	1	
371	〃	23C～D	1		395	〃	24C	1	
372	〃	25D	1		396	〃	24・25E	2	
373	〃	36A	P2		397	〃	20A	1	丹ナシ
374	〃	18D	1	はそう	398	〃	25E	1	

第５表　攪乱層出土の古墳時代土師器出土地区表



第65図　攪乱層出土の古墳時代土師器（3）

(3) 須恵器

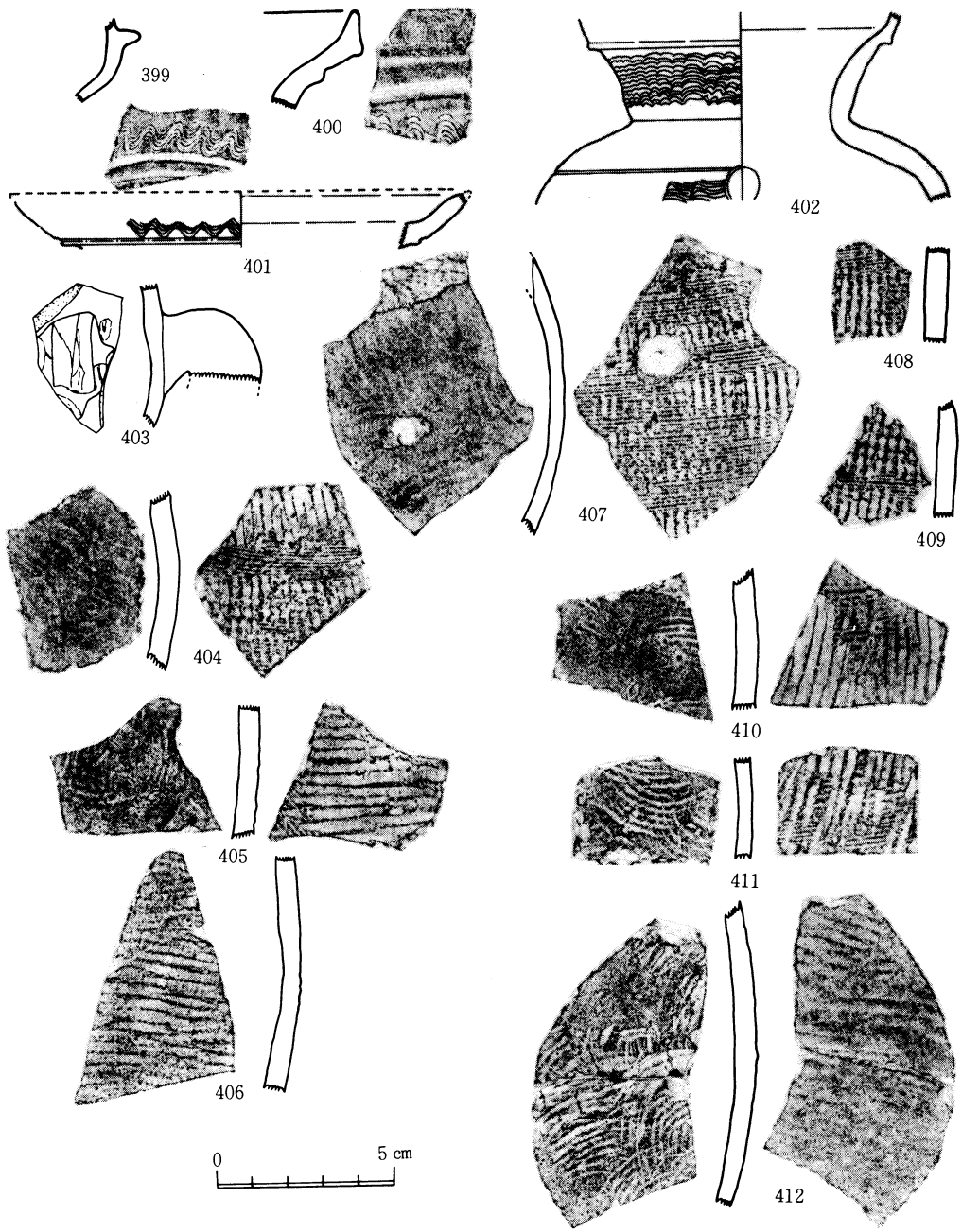
5ヶ所の住居跡から須恵器が出土しているが，表土層や2層からも多くの須恵器が出土しており，器種も坏身・壺・はそう・把手埦と色々ある。

399は受部が外へ突き出た坏身である。 **400**は口縁端部が上下に張り出した壺で，外面・内面とも飴釉がかかっている。口縁下に三角突帯が巡り，その下には櫛描き波状文が巡らされる。**401**と **402**ははそうである。 **401**は口縁直径13cmを測り，外へ張り出している。口縁下には櫛描き波状文が巡り，その下には深いえぐりがあって突帯風になっている。 **402**は頸部直径が6cmあり，そこから外へ開きながら立ちあがる。頸部の上には15条の櫛描き波状文が巡っておりさらにその上を突帯が巡っている。頸部の下は丸みをもった胴部をしており，肩部に一条の凹線が巡っており，その下には櫛描き波状文がある。この付近に円孔がひとつある。外面はやや光沢のある黒っぽい灰青色を呈し，内面は灰青色をしているが，口縁付近には飴釉がかかっている。 0.1mm～4mm大の白色・黒色砂粒を多く含んでいる。 **403**は器厚 0.4mmほどの薄いものに把手が貼り付けられており，把手付埦と思われる。甕（ **404**～ **412**）も破片が多く出土して

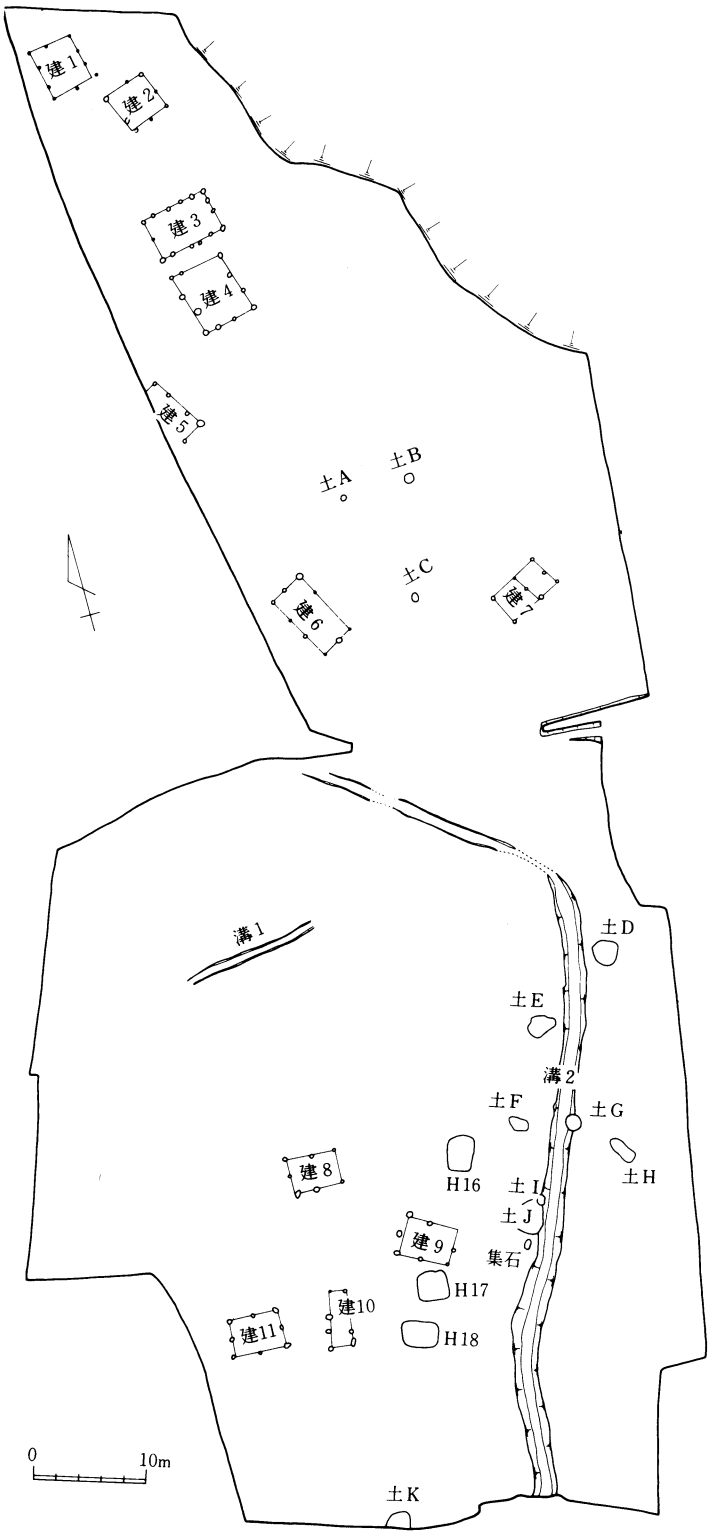
図番	器　種	出土区	層	備　考	図番	器　種	出土区	層	備　考
399	坏身					甕	19G	1	
400	壺	18I	2			〃	20～23 G・H	1	
401	はそう	H5				〃	21～22D	溝	
402	〃	20G	P6			〃	23C	1	
403	把手埦	22G	1			〃	30E	1	
404	甕	31E 16D	P1			〃	30F	1	
405	〃	24H	1			〃	30G	1	
406	〃	23J	1			〃	31C	1	
407	〃	30F	P4			〃	31E	1	
408	〃	30F 34E	1			〃	31F	1	
409	〃	19F	1			〃	31G	1	
410	〃	15H	2			〃	31H	1	
411	〃	15F	1			〃	32E	1	
412	〃	30G	1			〃	32H	1	
	〃	31D	1			〃	32I	1	
	〃	31E	1			〃	33D	1	
	〃	13L	1			〃	34C	1	
	〃	14H	1			〃	34H	2	
	〃	17I	1			〃	34I	1	
	〃	18K	P2			〃	36F	1	

第6表　攪乱層出土の古墳時代須恵器出土地区表

おり，器厚が5㎜～6㎜と薄いことより小型の甕である。外面は平行タタキが行われ，その上を櫛状施文具でナデたものもある。内面は円弧タタキがあるが，そのあとスリケシており，タタキのあとが残っているものと，完全にスリケシたものとがある。外面は灰青色あるいは青灰色をしており，飴釉がかかって黒灰色あるいは緑色を呈したものもある。内面も同じ色をしているが，中央は紫灰色を呈したものもある。白色あるいは黒色石粒を含んだ土を用いている。



第66図　古墳時代の須恵器（縮尺：½）



第67図　奈良～鎌倉時代の遺構配置図

第５章　奈良～鎌倉時代

調査区内には多くの柱穴・土坑などがあり，出土遺物・埋土からみてこの多くは平安時代から室町時代頃までのものと思われる。また中央付近には弧状に巡る溝状遺構もあり，これも平安時代から鎌倉時代のものである。表土・包含層からも多くの遺物が出土している。

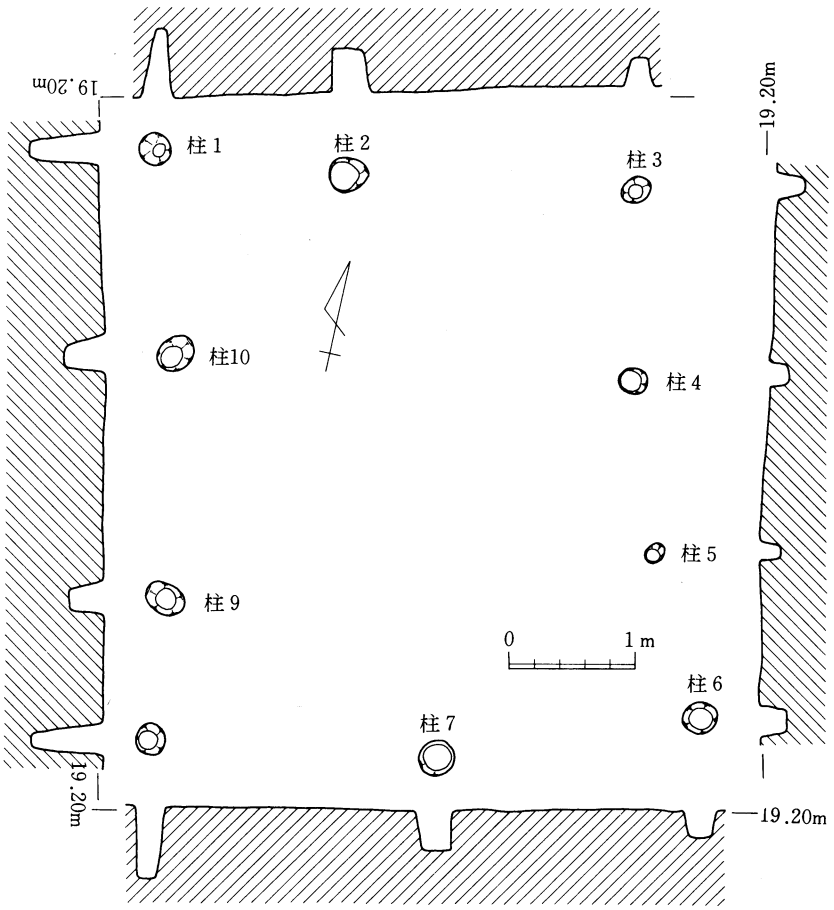
１．掘立柱建物

多くの柱穴のなかでまとまりそうなもの11棟を紹介するが，調査途中で十分な検討ができなかったため，該当する柱穴が不足するものもあった。

(1)　掘立柱建物１

37・38ａ・Ａ区にある東西の柱間２間，南北の柱間３間である。北側の柱間は 1.5ｍと 2.3ｍで 3.8ｍ，南側の柱間は 2.2ｍずつで 4.4ｍを測る。東側の柱間は 1.5ｍ，1.4ｍ，1.3ｍで 4.2ｍ，西側の柱間は 1.6ｍ，1.9ｍ，1.2ｍで 4.7ｍを測る。主軸方向はＮ10度Ｗである。それぞれの柱穴は直径15㎝～25㎝を測り，深さは15㎝ほどの浅いものから60㎝の深いものまである。

柱穴から出土した土器はなく時期がはっきりしない。



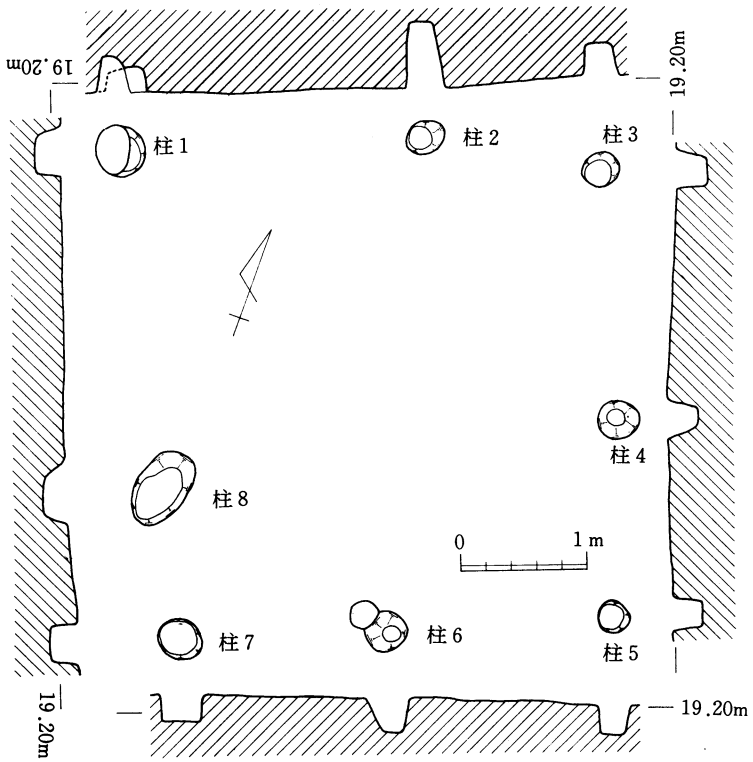
第68図　掘立柱建物１

(2)　掘立柱建物２

36・37Ａ・Ｂ区にある柱間が２間×２間の建物である。柱間隔が均一でなく整然としていない。北側の柱間は 2.8ｍと１ｍで3.8ｍ，南側の柱間が 1.8ｍずつで 3.6ｍである。東側の柱間は1.9ｍと1.6ｍで 3.5ｍ，西側の柱間が 2.6

mと 1.2mで 3.8mある。主軸方向はN19度Wである。それぞれの柱穴は直径25～35cmを測る円形をしているが，柱穴8だけは40cm×60cmのだ円形をしている。柱穴の深さは25cm～50cmとほぼ似た深さをしている。

柱穴から出土した土器はなく，時期ははっきりしない。



第69図　掘立柱建物2

(3)　掘立柱建物3

34・35B・C区にある東西の柱間5間，南北の柱間2間の建物で東西方向に長い。北側の柱間は西側から1m 1.5m，1.3m，1m，1.2mで総長 6.0mである。南側の柱間は西側から 1.0m，1.8m，0.8m，1.2m，1.2mで総長 6.0mである。東側の柱間は 1.9mずつで，3.8m，西側の柱間は 1.7mと 2.1mで 3.8mある。主軸方向はN10度Wである。それぞれの柱穴は直径25cm～50cmを測る円形ピットで，深さ35cm～60cmを測る。柱穴から土師器坏・埦・かめなどが出ている。

413は外へ開きながらまっすぐ伸びる坏で，端部は丸く収める。**414**は埦で，口縁近くは横方向のナデ整形であるが，底部近くはケズリに近いナデ整形で仕上げる。ともに精製した良質土を用いており，淡茶褐色を呈している。図化できなかったが，この他にヘラ切底の坏も出土している。

(4)　掘立柱建物4

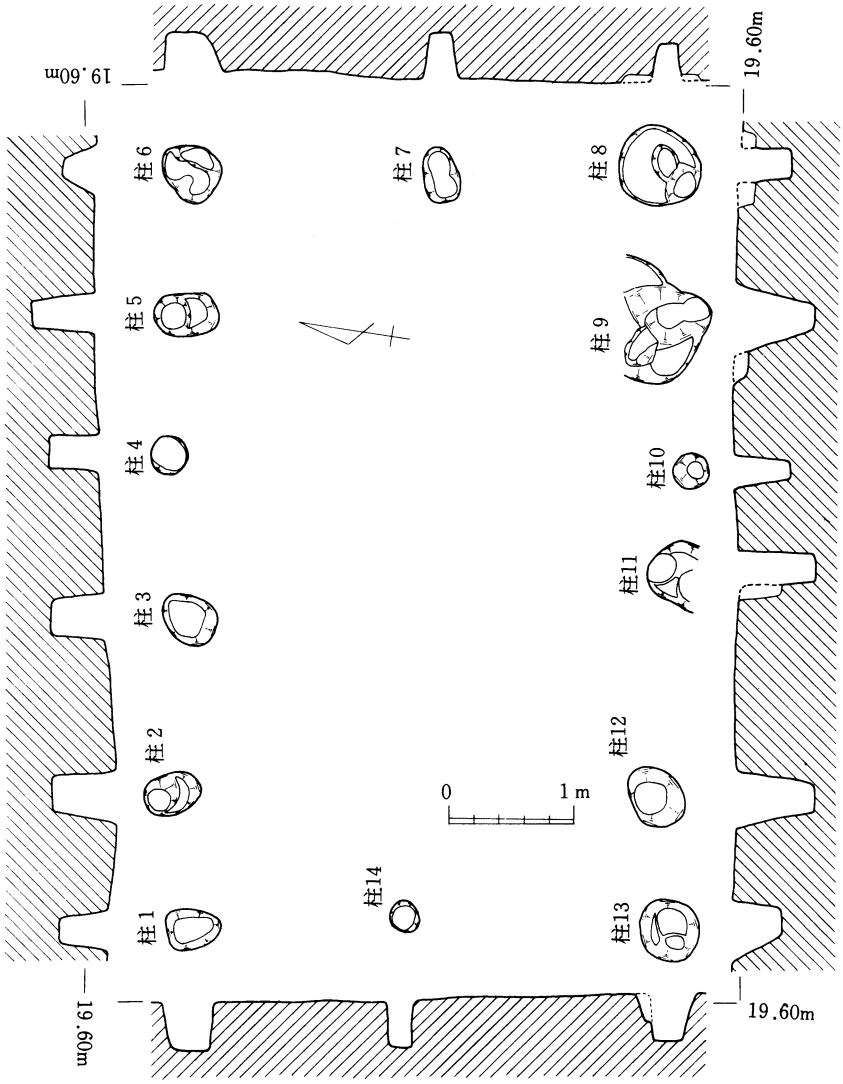
33・34C・D区にある3間×3間の建物で，柱間隔の違いから東西方向に長い。北側の柱間は西側から 1.8m，1.8m，2.1mで総長 5.7mである。南側の柱間は西側から 1.8m，1.8m，2.1mで総長 5.7mを測る。東側は北から3本目の柱跡が欠けているが，北側の1本目と2本目の間隔が 1.0m，総長 4.8mを測る。西側は北から 1.2m，1.6m，2.0mで総長 4.8mを測る。主軸方向はN14度Wを測る。それぞれの柱穴は直径30cm～60cmを測る円形で，深さは30cm～60cmを残している。柱穴から土師器の坏・皿・蓋・甕などが出土している。

415は坏で外へ開いて口縁へまっすぐ伸び，端部は丸く収まる。**416**と **417**はまっすぐ口縁

へ開いて伸びる皿で，底部切り離しは糸切りである。

(5)　掘立柱建物5

31・32B・C区にある建物で未買収地へ続いているために全容は不明である。南北方向には柱間3間を測るが，東西方向には1間以上伸びており，どこまで伸びるかは不明である。東側の柱間は北から 1.5m，2.4m，1.5mで，総長 5.4mを測る。南側の柱間は 2.4mを測る。主軸方向はN38度30分Wである。それぞれの柱穴は直径25cm～60cmを測る円形で，深さは30cm～40cmを残している。柱穴からは土師器の坏・甕，内黒土師器の埦，須恵器の甕が出土している。

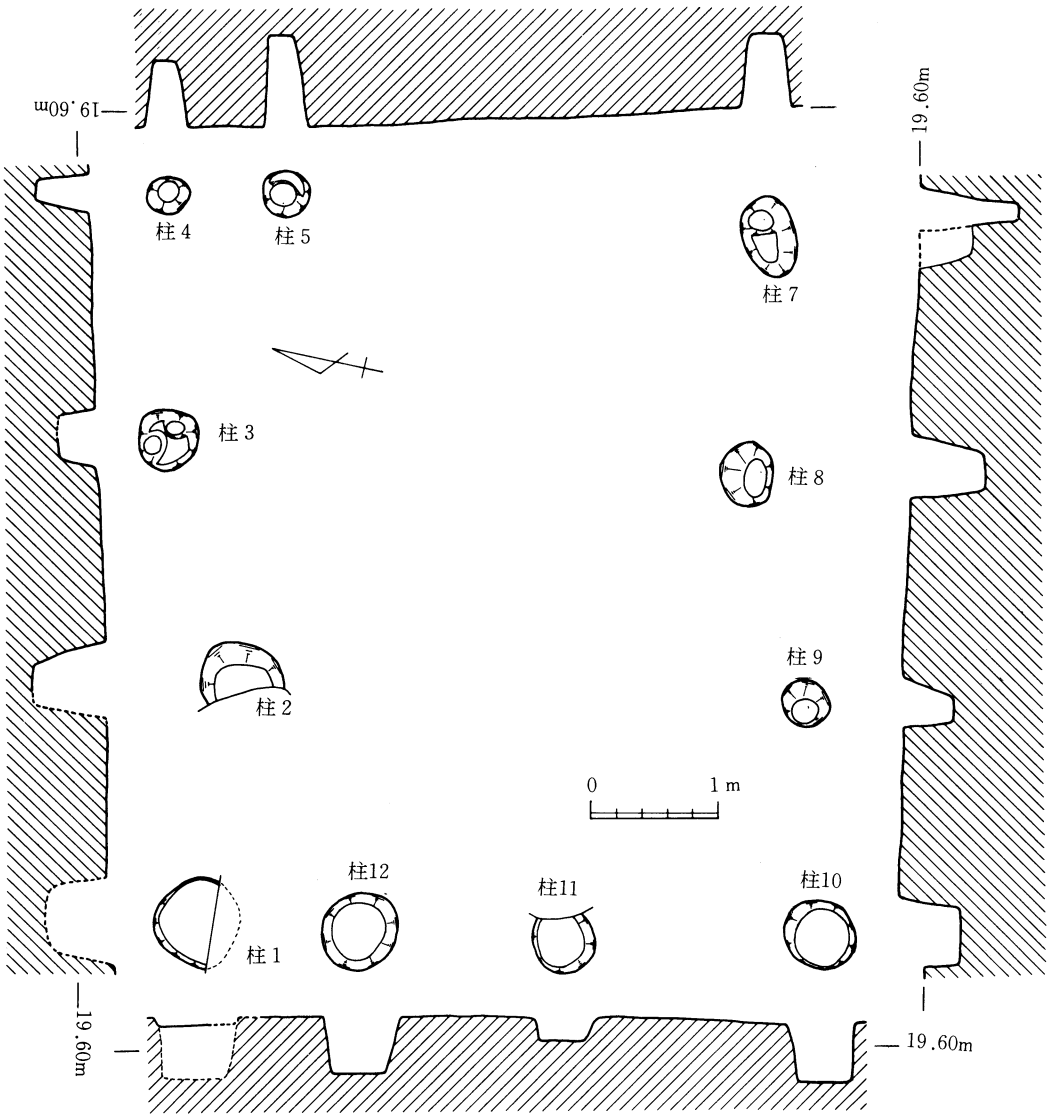


第70図　掘立柱建物3

418は外面，内面ともきれいにミガいた土師器の坏で，ほぼまっすぐ外へ伸びているが，端部付近でやや外反している。端部は丸くおさまる。明るい茶褐色を呈し，良質の土を使用している。須恵器の甕には外面・内面とも平行線タタキがみられる。

(6)　掘立柱建物6

27～29E・F区にある柱間が2間×3間の南北方向に長い建物である。北側の柱間は西から 1.5mと 1.8mで総長 3.3m，南側の柱間は西から 1.8m，1.3mで総長 3.1mを測る。西側の柱間は北から 2.3m，1.9m，2.3mで総長 6.5mを測る。東側の柱列は北から3本目が不



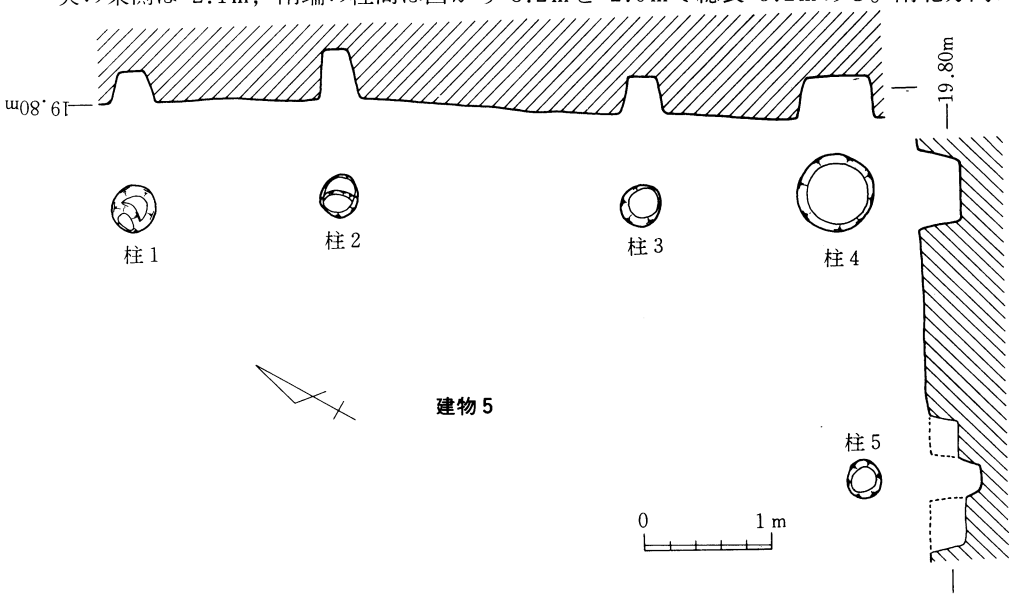
第71図　掘立柱建物4

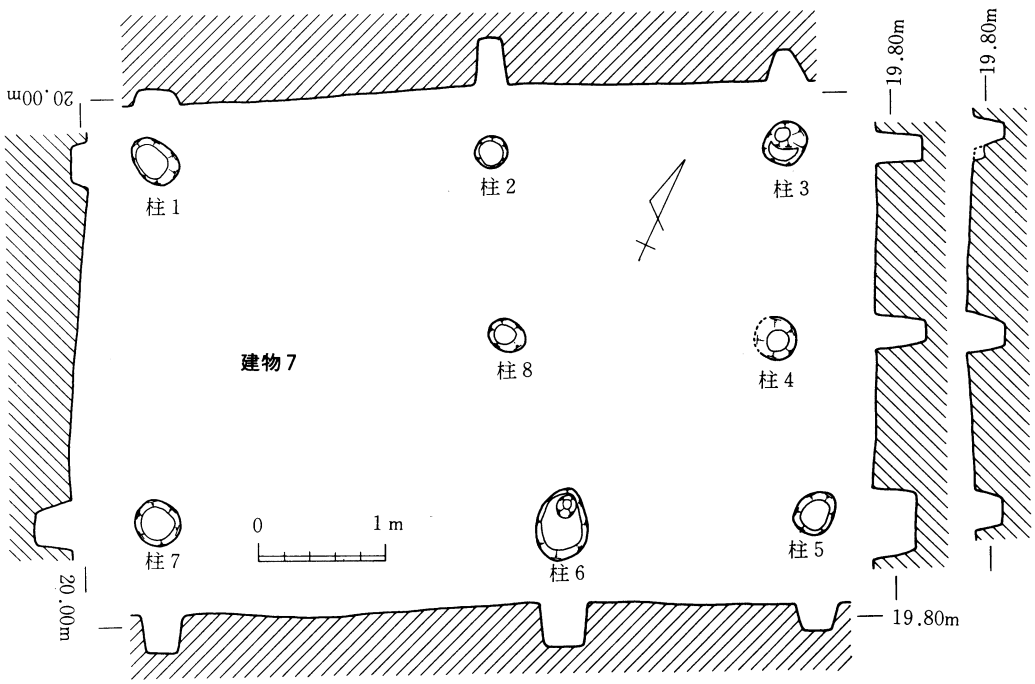
明であるが，北側の柱間は 1.8m，総長 6.3mを測る。主軸方向はN26度Wである。それぞれの柱穴は直径25cm～50cmを測る円形で，深さは20cm～65cmを残している。柱穴からは土師器の坏・埦・甕が出土している。

419は口縁端がやや外反する坏で，内面には丹らしきものが付着している。 **420**は口縁直径15.5cmを測る土師器坏で，外へ開きながらまっすぐ伸びている。 **421**はヘラ切底の土師器坏である。底部直径7cmを測り，底部付近で段をもっている。 **422**は高台端直径 6.5cm，高台の高さ 1.1cmを測る土師器埦である。内面の底は中央部がややくぼんで薄くなっている。他に板状圧痕のある土師器坏の底部がある。淡茶褐色あるいは乳褐色を呈しており，胎土は茶色粘土などを含む良質土である。

(7)　掘立柱建物７

28Ⅰ・Ｊ区にある柱間が２間×２間の東西方向に長い建物である。総柱建物と思われるが，西側の中央にある柱穴は不明であった。北端の柱間は西から 2.6ｍと 2.4ｍで総長 5.0ｍ，中央の東側は 2.1ｍ，南端の柱間は西から 3.2ｍと 2.0ｍで総長 5.2ｍある。南北方向には西端





第72図　掘立柱建物５と掘立柱建物７

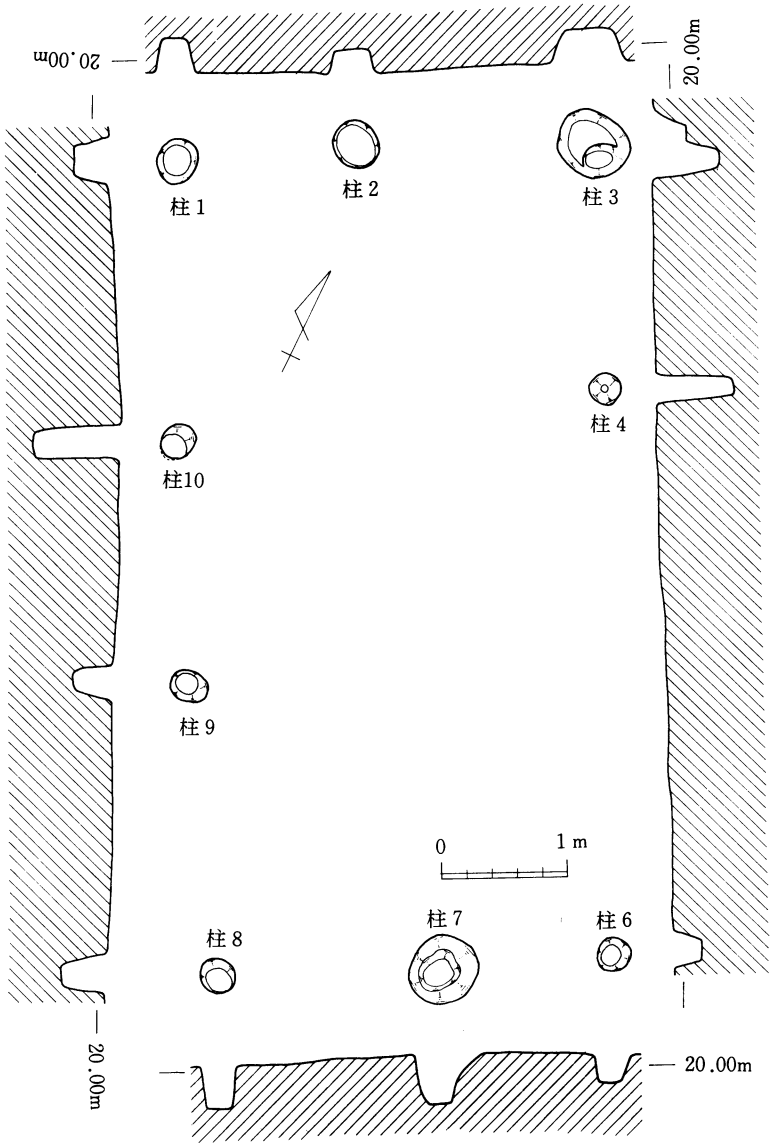
の柱間が総長 2.8m，中央の柱間が北から 1.4mと 1.6mで総長 3.0m，東端の柱間が北から 1.6mと 1.4mで 3.0mを測る。主軸方向はN25度30分Wである。それぞれの柱穴は直径25cm～35cmを測る円形で，深さは10cm～35cmを残している。

柱穴から出土した土器はなく，時期ははっきりしない。

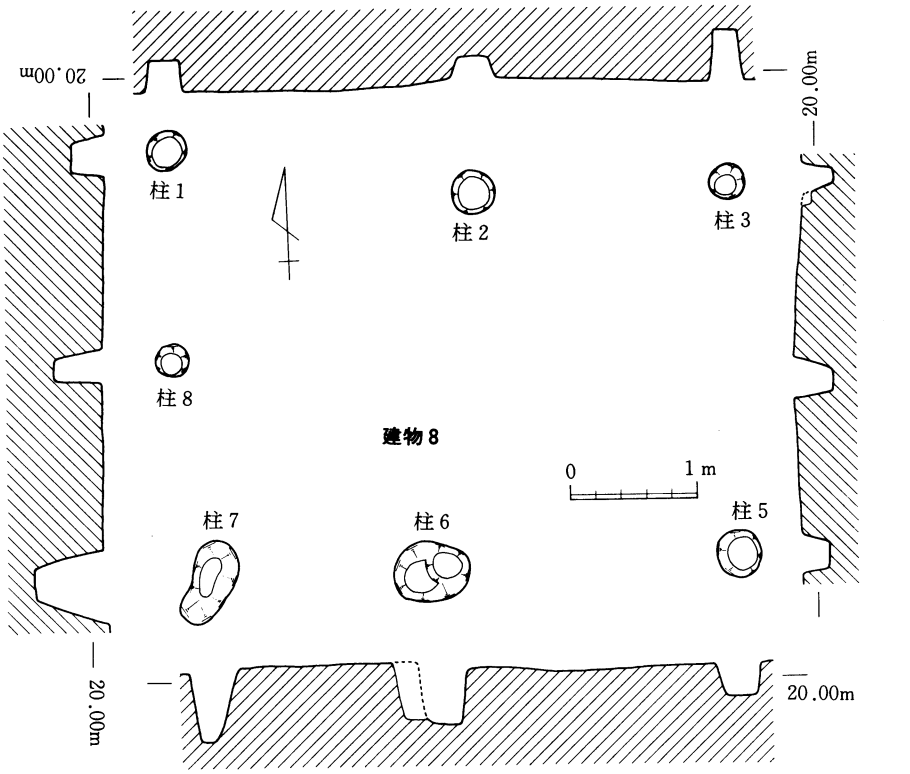
(8)　掘立柱建物８

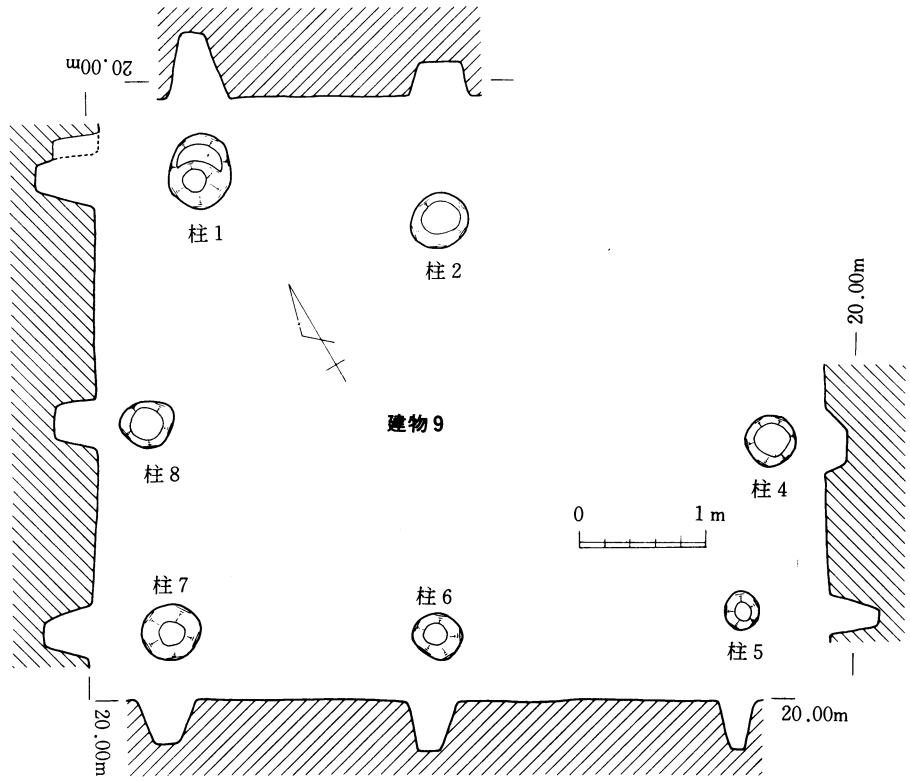
18E・F区にある柱間が２間×２間の東西方向に長い建物である。東側の中央にある柱穴が不明であった。北側の柱間は西から 2.5mと 2.0mで総長 4.5m，南側の柱間は西から 1.8mと 2.3mで総長 4.2mを測る。西側の柱間は北から 1.7mと 1.7mで総長 3.4m，東側の柱間は総長 2.9mを測る。主軸方向はＮ１度30分Ｅである。それぞれの柱穴は直径30cm～50cmの円形をしており，深さは15cm～55cmを残している。柱穴からは土師器の坏・甕が出土している。

423と **425**は外へ開きながらまっすぐ伸びる土師器の坏である。**425**は口縁直径14.5cm底部直径９cm，高さが 3.4cmを測り，底部の切り離しは糸切りである。**424**は口縁直径が10cm，底部直径が８cm高さ 1.4cmを測る土師器の皿で，底部の切り離しは糸切りである。つくり方は底部の外側に口縁付近を貼り付け上乗せする作り方をしている。いずれも精製した粘土を用いており焼成はふつうである。



第73図　掘立柱建物６





第74図　掘立柱建物8と掘立柱建物9

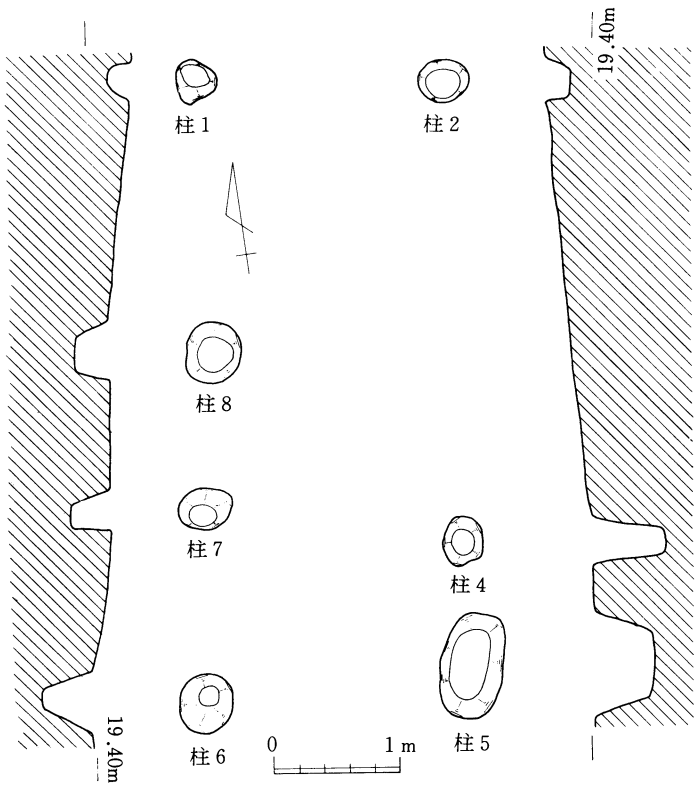
(9)　掘立柱建物9

16・17G・H区にある柱間が2間×2間の建物で，東西方向に長い。北東隅の柱穴は不明である。北側の柱間は 1.9m，南側の柱間は西より 2.1mと 2.4mで総長 4.5mある。西側の柱間は北より 1.9mと 1.7mで総長 3.6m，東側の柱間は 1.4mである。主軸方向はN30度30分Eを測る。それぞれの柱穴は直径が30cm～45cmあり，深さ25cm～50cmを残している。柱穴より土師器の坏・甕が出土している。

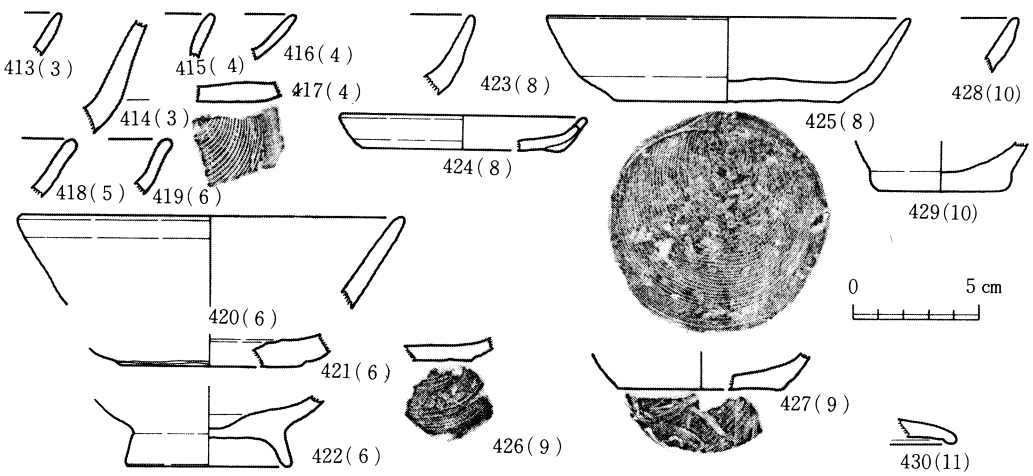
426・**427**は底部の切離しが糸切りとなる土師器の坏で，**427**の底部直径は 6.5cmを測る。底部近くで段をもっている。

(10)　掘立柱建物10

15・16F区にある東西方向の柱間が1間，南北方向の柱間が3間の南北に長い建物である。東側の北から2番目の柱穴が不明である。北側の柱間は2.0m，南側の柱間も2.0mである。西側の柱間は北から 2.2m，1.3m，1.4mで



第75図　掘立柱建物10



第76図　掘立柱建物の出土土器

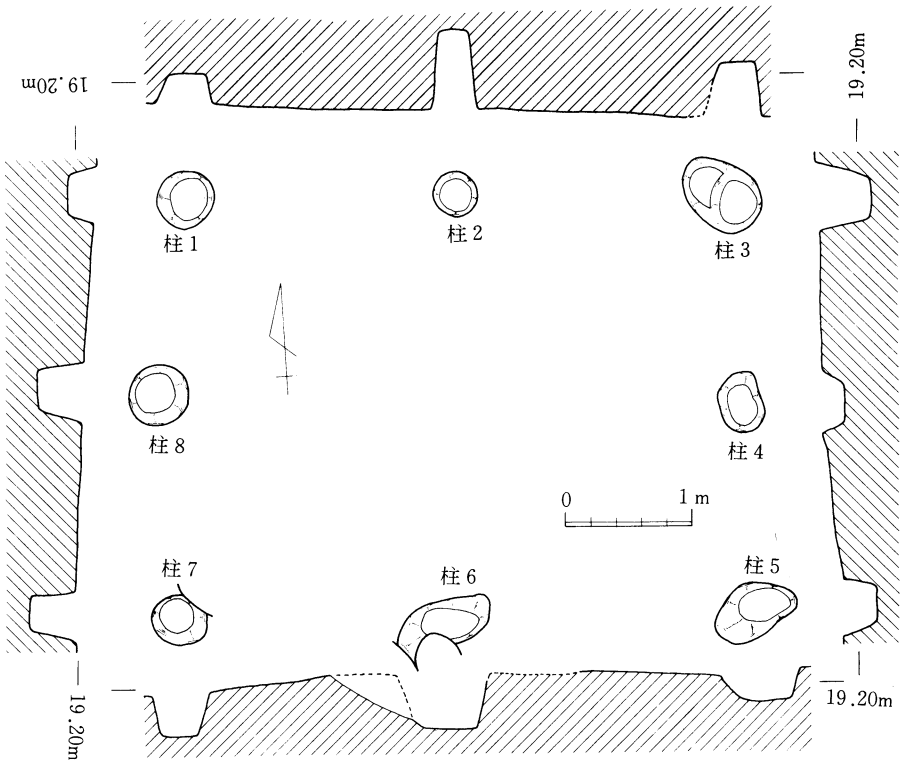
総長 4.9m，東側の柱間は南端が 1.2mで総長 4.8mを測る。主軸方向はＮ９度30分Ｅを測る。それぞれの柱穴は直径35cm～50cmの円形をしているが南東隅の柱穴は長径85cm，短径50cmのだ円形をしている。深さは20cm～60cmを残しており，南へくだる傾斜面上につくられている。柱穴内には土師器の坏・甕・鉢がある。

428は土師器の坏口縁部で，外へ開きながらまっすぐのびている。口縁端部近くは外面がややくぼみ，薄くなっている。**429**は土師器の坏で，底部直径 5.5cmを測る。端部付近でやや外へふくらんでおり，底部の切離しはヘラ切りである。いずれも精製した粘土を使っており，焼成はふつうである。

(11)　掘立柱建物11

15Ｄ・Ｅ区にある柱間が２間×２間の東西方向に長い建物である。北側の柱間は西から 2.1mと 2.2mで総長 4.3m，南側の柱間は西から 2.1mと 2.4mで総長 4.5mを測る。西側の柱間は北から 1.6mと 1.7mで総長 3.3m，東側の柱間は北から 1.6mと 1.6mで総長 3.2mを測る。主軸方向はＮ３度30分Ｅを測る。それぞれの柱穴は直径35cm～50cmの円形をしているが，だ円形を呈するものもある。深さは20cm～60cmを残している。柱穴からは土師器の坏・甕，須恵器の坏蓋などが出土している。

430は須恵器の坏蓋である。口縁端部が下へ折れ曲がっており，端部は丸くなっている。青灰色を呈し，黒色石粒など割にこまかい土を使っている。焼成は良好である。図化できなかったが，底部の切離しが糸切りとなる土師器の坏，内面ヘラケズリの土師器の甕なども出土している。



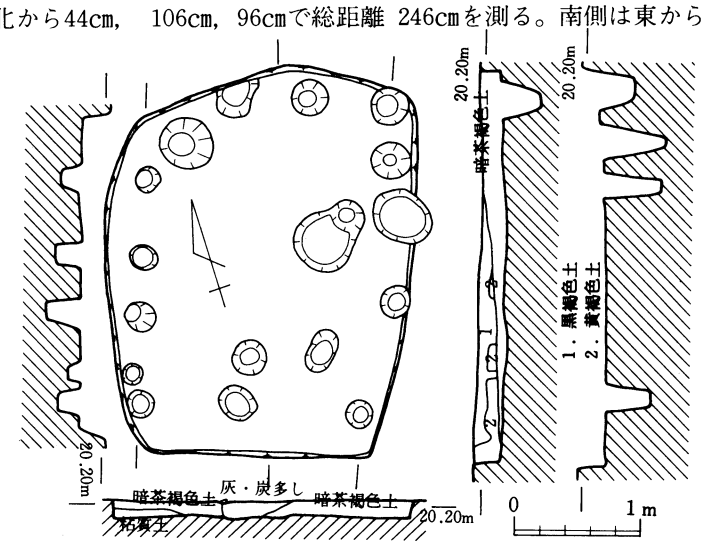
第77図　掘立柱建物11

２．竪穴住居跡

16基検出された古墳時代の竪穴住居跡の他に，やや小型の方形竪穴住居跡が３基あった。この中には遺物はほとんどはいっていないが，土師器・青磁などが含まれているため平安時代末ないしは鎌倉時代のものと思われる。

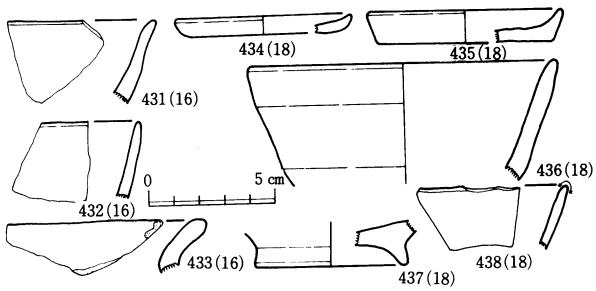
(1)　16号住居跡

18・19Ｈ・Ｉ区につくられた方形住居跡で，南北方向に 3.0ｍ，東西方向に 2.4ｍを測る。深さ約20cmと他の２基に比べ浅い。壁に沿って13の円形ピットがあり，これらがこの住居の柱穴かと思われる。柱穴の規模は次のとおりである。西側が南から直径22cmで深さ（いずれも床面から）15cm，直径16cmで深さ10cm，直径25cmで深さ27cm，直径20cmで深さ20cm，直径20cmで深さ11cmを測る。北側が西から直径41cmで深さ39cm，直径38cmで深さ23cm，直径30cmで深さ29cmを測る。東側が北から直径30cmで深さ27cm，直径30cmで深さ48cm，直径24cmで深さ43cm，直径22cmで深さ41cmを測る。南側の１本は直径28cmで深さ47cmを測る。つまり柱穴の大きさは直径が16cm～41cmである。それぞれの柱間は西側が南から24cm（いずれも心心距離），46cm，46cm，64cmで総距離 180cmである。北側が西から60cm，60cm，60cmで，やや曲がっているために総距離 170cmを測る。東側は北から44cm，106cm，96cmで総距離 246cmを測る。南側は東から98cm，72cmで総距離 170cmを測る。このように心心距離は24cmとくっついているものから長いものは 100cmを越えるものまである。こうした柱穴の他に中央に４つのピットがあり，うち２つは前後関係にある。これらが同時期のものか否かははっきりしない。埋土は下から暗茶褐色粘質土，暗茶褐色土，黄褐色土，黒褐色土となっており，黒褐色土の上には炭化材らしきものが検出された。これは南北方向に長いものがあり，それに交叉するように，炭がまじわっていたが全体的に残っていず，全容をつかめなかった。



第78図　16号住居跡

埋土中に含まれる土器は少なく，破片も小さい。**431**と **432**は内面が横方向に研磨され黒くなった内黒土師器椀である。



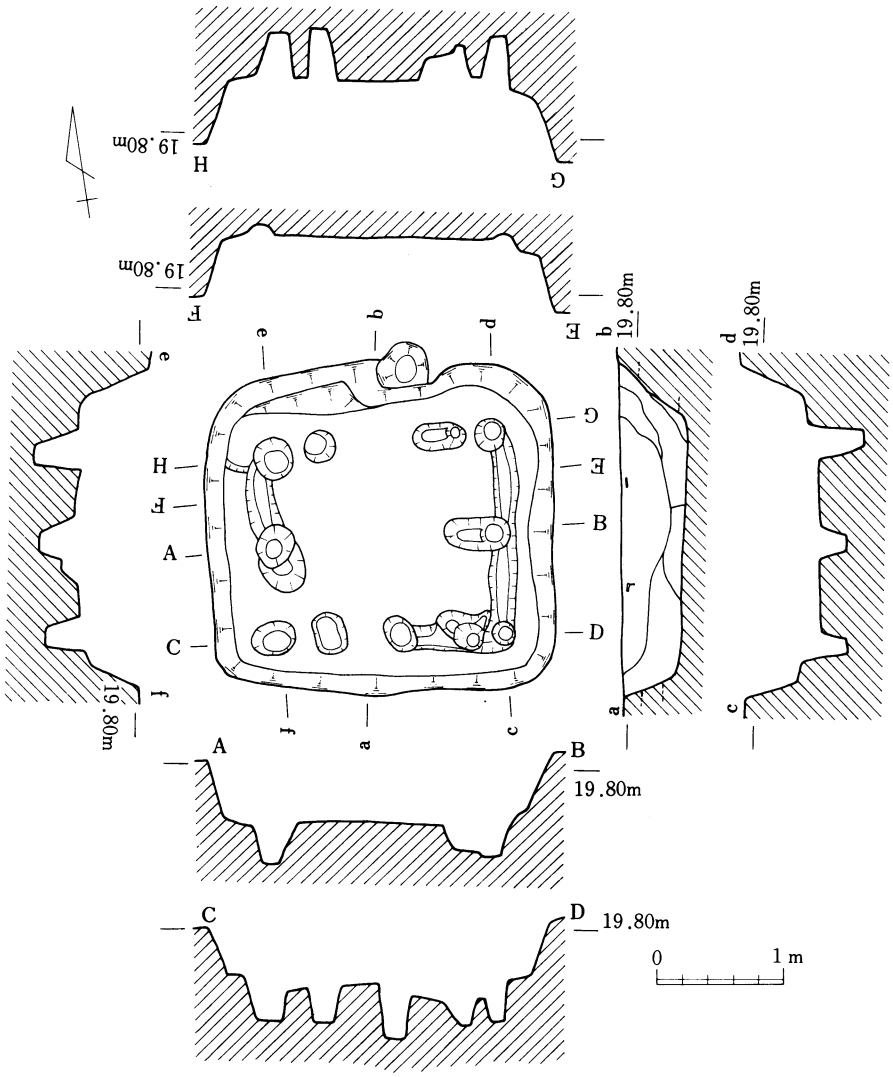
第79図　16号住居跡・18号住居跡出土の土器

432は外面も横方向のヘラミガキで仕上げており，**431**は横方向のヘラナデである。**432**は直立口縁であるが，**431**はやや外へ反っている。**433**は甕の口縁で強く外反している。外面・内面とも横方向のヘラナデで仕上げている。茶色粘土を多く含む砂質土を用いている。

(2) 17号住居跡

16H区につくられた隅丸方形の住居跡で，南北方向，東西方向ともに 2.7ｍを測る。深さ45cm～55cmと深い。壁に沿って11の柱穴があり，東側と西側および南側の一部には幅20cm，深さ5～8cmの壁帯溝が巡っている。柱穴の規模は次のとおりである。西側が南から直径30cmで深さ25cm，直径30cmで深さ30cm，直径30cmで深さ35cm，北側が西から直径25cmで深さ40cm，直径20cmで深さ26cm，直径25cmで深さ40cm，東側が北から直径30cmで深さ30cm，直径20cmで深さ30cm，南側が東から直径20cmで深さ40cm，直径25cmで深さ45cm，直径30cmで深さ30cmを測る。柱間は西側が南から70cm，70cmで総長140cm，北側が西から35cm，110cm，25cmで総長170cm，東側が北から80cm，80cmで総長160cm，南側が東より30cm，50cm，60cm，40cmで総長180cmである。

埋土より少量の土器が出土している。

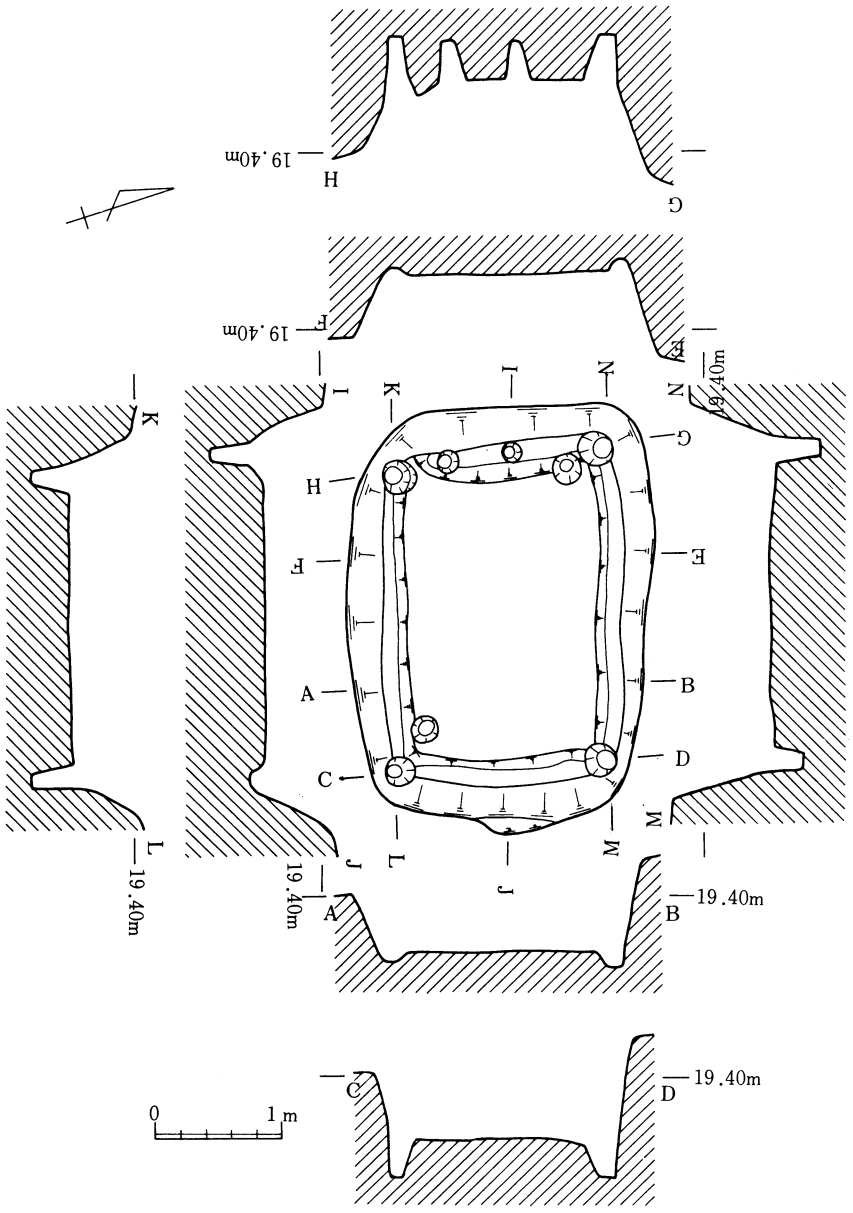


第80図　17号住居跡

(3)　18号住居跡

15G・H区にある南北方向 2.4m，東西方向 3.2mを測る隅丸方形の住居跡で，深さ50cm～70cmと深い。壁に沿って幅20cm，深さ10cmの溝が巡っており，四隅には直径20～25cm，深さ35cm～45cmの柱穴がある。西側にはその間に直径17cm，深さ30cmの柱穴が2本ある。西側の柱間は南から45cm，50cm，75cmで総長 170cmを測る。中に炉跡など検出されなかったが，南東側の少し離れた所では地表面が赤く焼けており，炉跡と思われる。

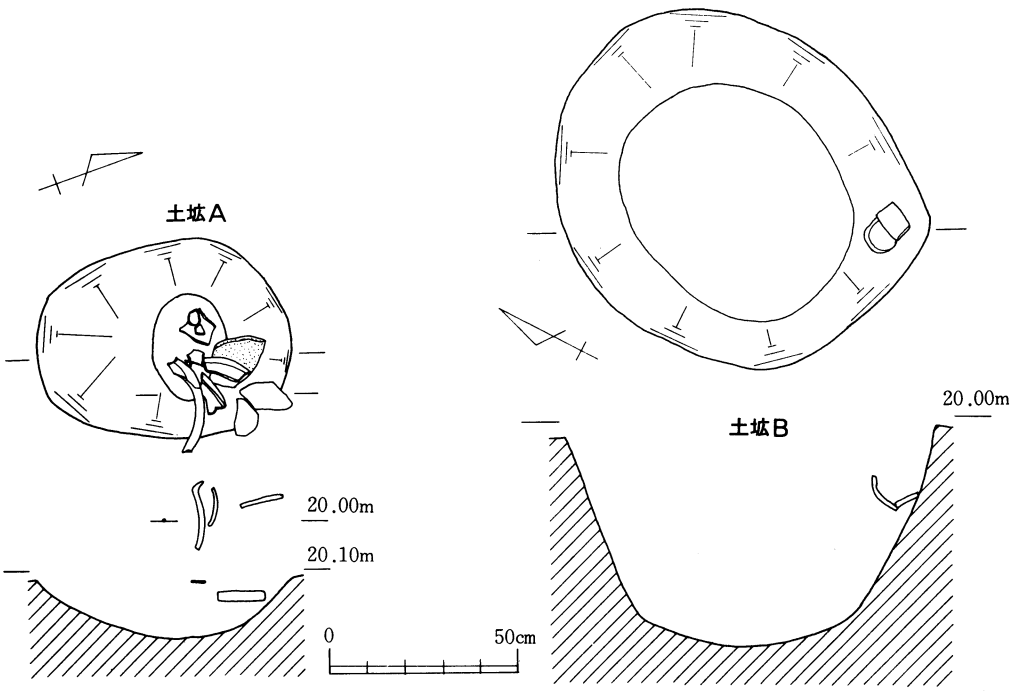
埋土中にいくらかの土器が含まれていた。**434**・**435**は土師器の皿で，**434**が口縁直径7cm，底部直径 5.5cm 深さ 0.7cm，**435**が口縁直径 7.5cm，底部直径7cm，深さ 1.2cmを測る。ともに底部の切離しは糸切りである。**436**と**437**は内黒土師器の椀で口縁直径12cm，高台直径6cmを測り，外へ開きながらまっすぐ口縁部へ立ちあがる。外面のナデもていねいでヘラミガキに近い。**438**は口縁端部の釉をかき取った白磁椀である。緑がかった灰色釉がかかっており，灰白色土を使用している。内面に1条の沈線が巡っている。



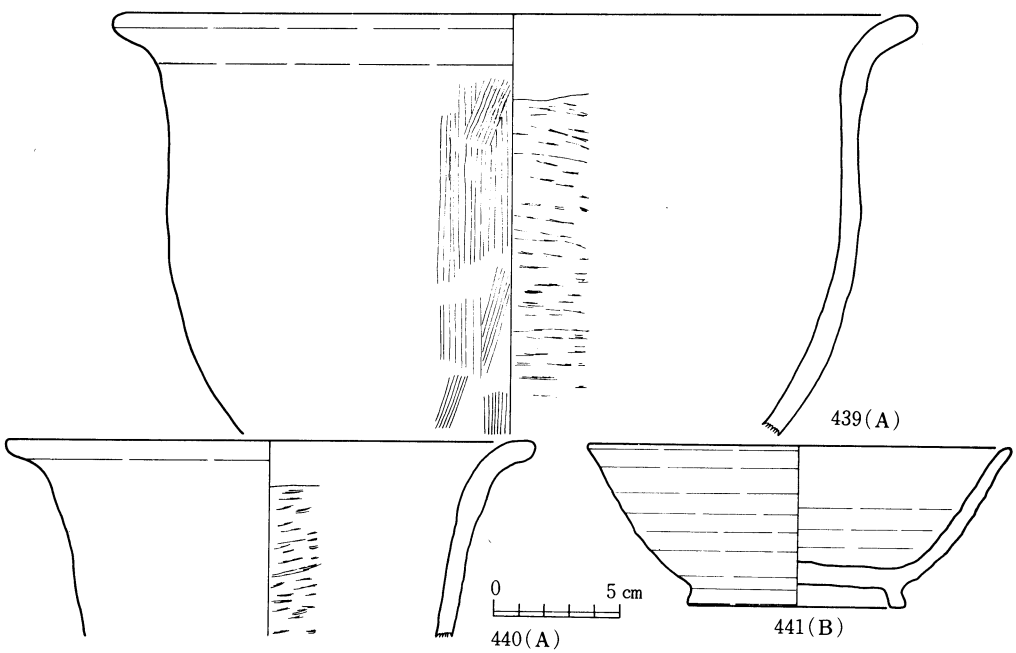
第81図　18号住居跡

3．土　　坑

土器を多く含んだり，深くしっかりした土坑をとりあげた。なお，土坑番号は整理番号と，



第82図　土坑Ａと土坑B



第83図　土坑Ａ・土坑Ｂ出土の土器

他に各地区の番号があるので，これを括孤書きで付け加えた。

(1)　土坑A（30F区土坑１）

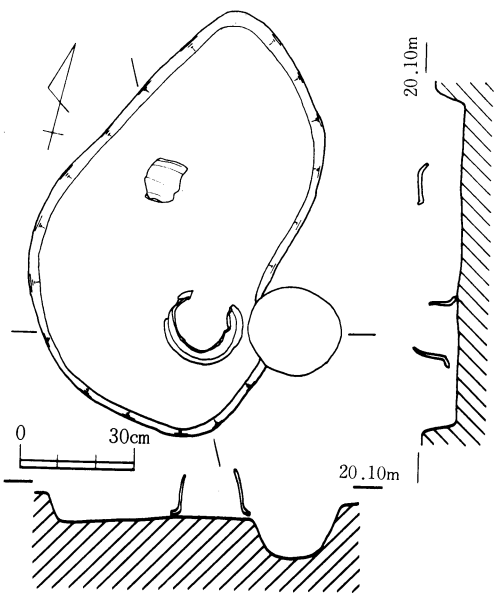
30F区で検出された70cm×50cmのだ円形土坑である。ゆるやかな傾斜で底に達しており，深さ15cmと浅い。北側に石とともに甕が２個体分集積しており，口縁部破片１点は立位だった。

439は口縁直径32cm，高さ約20cmを測る丸底の甕である。口縁部は外反しており，丸みをもった器形を呈している。整形は，外面が縦あるいは左下がり方向のハケナデ，内面の頸部より上が横方向のヘラナデ，下が横方向のヘラケズリである。**440**は口縁直径21cmを測る小型の甕で，口縁部は外反しており，底部へはまっすぐ伸びている。整形は外面と内面の頸部より上が横方向のヘラナデ，内面の頸部より下が横方向のヘラケズリである。焼成はともに良好で，胎土は石英・黒雲母粒を多量に含む砂質土である。内面はともに頸部付近まで，こげ目が付いている。

(2)　土坑B（30G区土坑１）

30G区で検出された 100cm×90cmの略円形土坑で，深さ55cmと割合に深く残っている。南西隅付近の中位に土師器の埦があった。

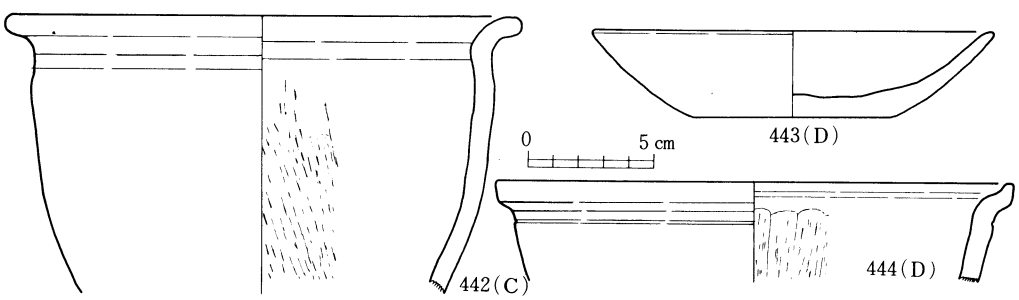
埦は体部の$\frac{2}{3}$程を欠いているが，口縁部から高台まで揃った完形品である。口縁直径17cm，高台端径 8.5cm，高さ 6.4cmを測る。体部は丸みをもって立ちあがり，端部付近でやや外反する。高台断面はしっかりした矩形を呈している。坏部底の切り離しはヘラ切りである。白色石粒・黒雲母粒・石英粒などの微石粒を多く含む砂質土を用い，焼成は良好である。淡茶褐色を呈しているが，外面は二次的に火を受けてやや赤く変色し，ススが付着している。



第84図　土坑C

(3)　土坑C（28G区土坑１）

28G区で検出された 110cm×70cmのだ円形土



第85図　土坑C・土坑D出土の土器

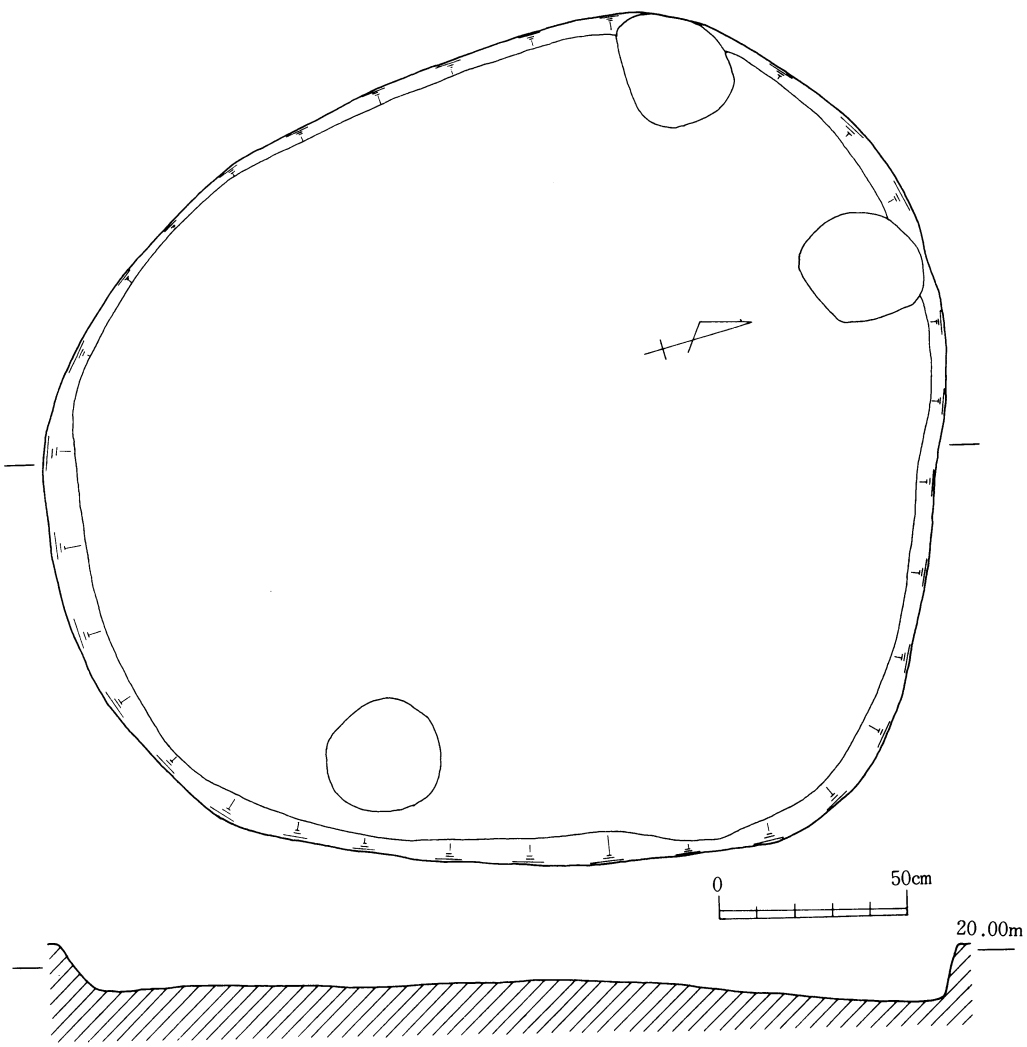
坑で，深さは10cm残っている。床面近くに甕が逆位で置かれているが，底部はない。他に須恵器の甕，土師器の坏などの小破片がある。

甕は口縁直径21cmと小型で，長胴形の器形をしている。口縁部は強く外反する。整形は外面と，内面の頸部より上が横方向のヘラナデ，内面の頸部以下が縦方向のヘラケズリである。胎土は石英などの石粒を多く含む砂質土で，焼成は良好である。茶褐色を呈しているが，外面は部分的に赤みをおびたり，紫がかっている。

(4)　土坑D（22K区土坑1）

22K区で検出された 250m× 220mの略円形土坑である。深さは10～20cmと浅い。土師器の坏と甕が出土している。

443は口縁直径16cm，底部直径8cm，高さ 3.4cmの坏である。底部から口縁部に向かっては



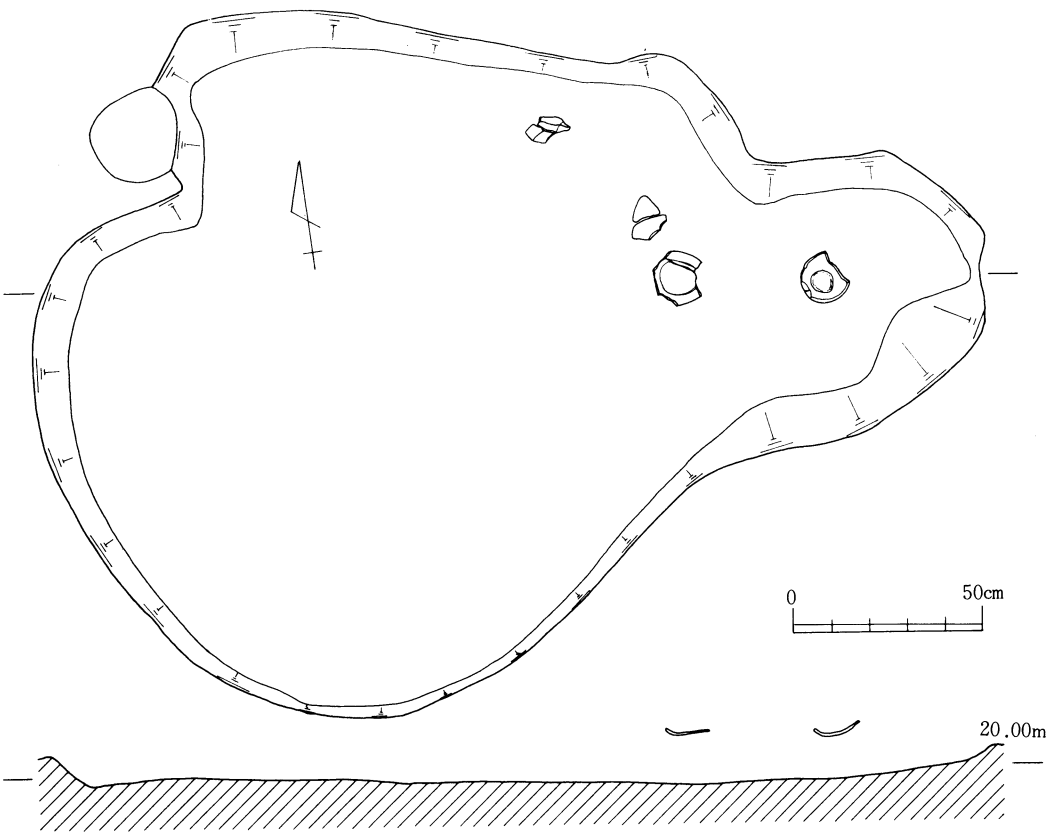
第86図　土坑D

直線的に広がり，底部の切離しはヘラ切りである。茶色の粘土など致密な土を用い，焼成は良好である。**444**は口縁直径21cmの小型甕で，端部が直立する二重口縁である。頸部には一条の凹線が巡っている。調整は外面と，内面の頸部から上が横方向のヘラナデ，内面の頸部から下が縦方向のヘラケズリである。茶色粘土や石英粒など割と細かい土を用いている。

(5)　土坑Ｅ（21Ｊ区土坑Ｉ）

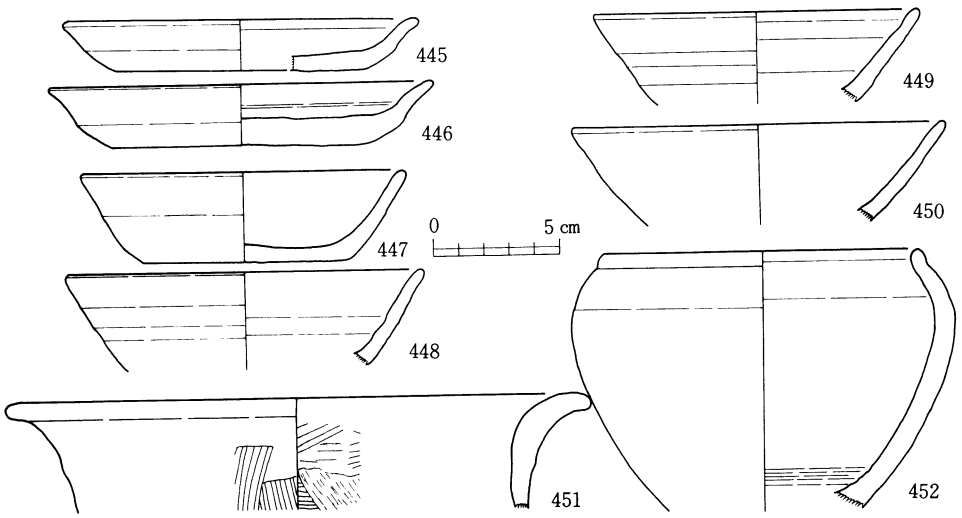
21Ｉ・Ｊ区で検出された 200cm× 190cmの略円形土坑で，さらに東へ60cmほど突き出しがある。深さは約10cmと浅い。東側に土師器の皿と坏，須恵器の壺がある。

445・**446**は土師器の皿で，**445**が口縁直径14cm，底部直径10cm，高さ２cm，**446**が口縁直径15cm，底部直径10cm，高さ 2.5cmを測る。ともに底部切離しはヘラ切りである。口縁部が外反する。**447**～**450**は土師器の坏で，口縁直径が13～14cm，底部直径８cm，高さ 3.5cmを測る。体部は外へ開きながらまっすぐ伸びており，底部の切り離しはヘラ切りである。**450**は内外とも研磨された土師器の坏で，口縁直径15cmを測る。**451**は土師器の甕で，口縁直径23cmを測る。外面の頸部より上が横方向のヘラナデ，下が縦方向のあらいハケナデ，内面の頸部より上が横方向のヘラナデとあらいハケナデ，下が縦方向のヘラケズリで仕上げる。皿・坏が割合に細かな砂質土を用いているのに対し，甕は石英・長石などの石粒を多く含む粗砂質土を用いている。

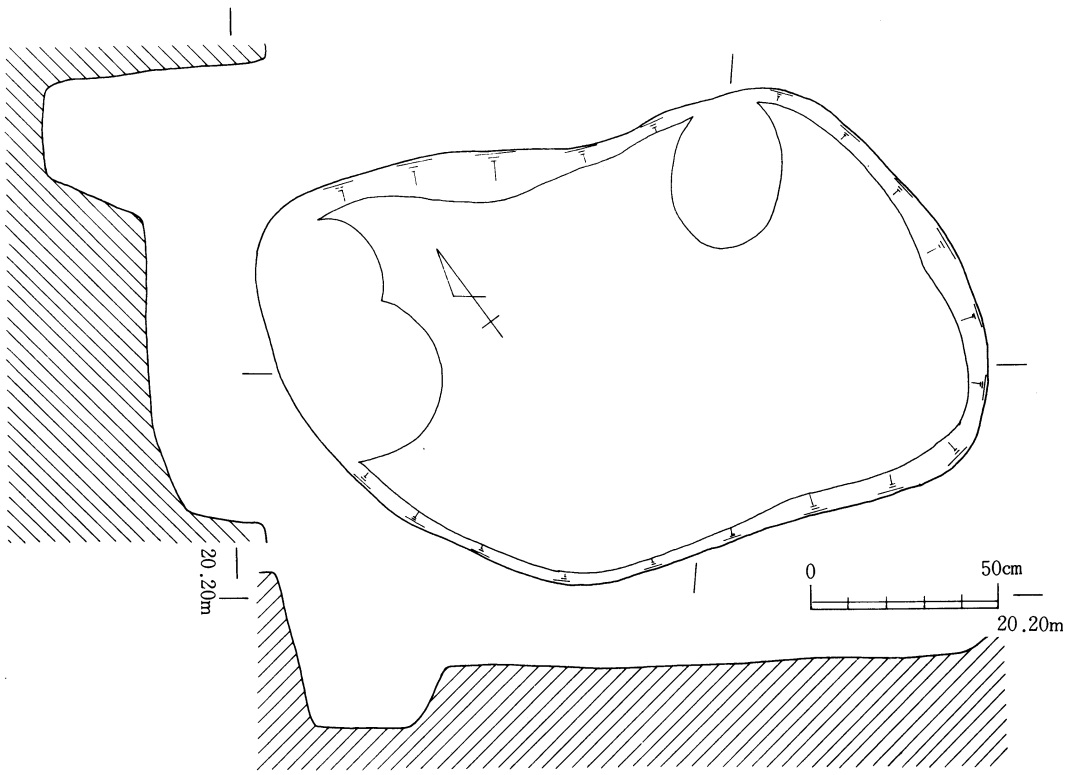


第87図　土坑Ｅ

452は須恵器の有蓋壺で，口縁直径12.5cmを測り，肩部に最大直径がある。外面・内面ともにていねいなナデ仕上げであるが，外面の底部付近には縦方向のヘラケズリがみられる。器内面は黄みがかった色をしているが，表面は赤みがかった茶褐色を呈している。



第88図　土坑E出土の土器

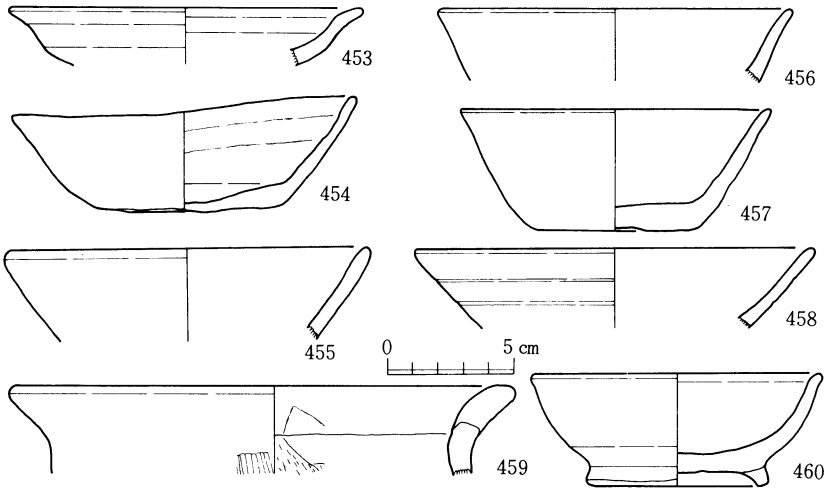


第89図　土坑F

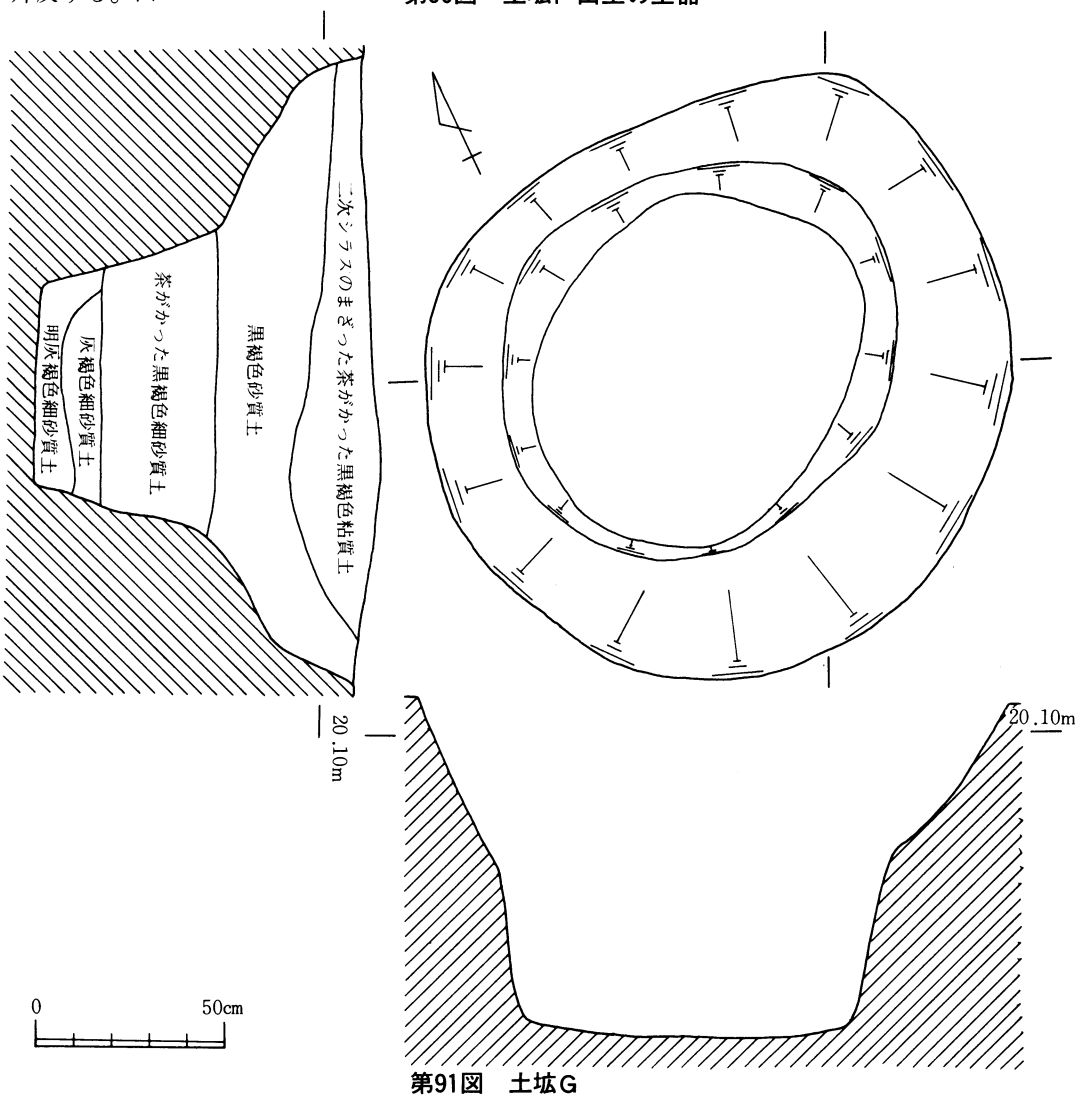
(6)　土坑F
(19Ⅰ区土坑１)

19Ⅰ区で検出された 180㎝×115㎝の方形に近いだ円形土坑で，深さは10～20㎝と浅い。

453は土師器の皿で，口縁部が外反する。口



第90図　土坑F出土の土器



第91図　土坑G

縁部直径は14cmである。**454**～**458**は土師器の坏で，**454**は口縁直径12cm，底部直径６cm，高さ５cmと深い。他は口縁直径が14～16cm，底部直径８cm，高さ４cmを測る。底部切り離しはヘラ切りである。**459**は土師器の甕で，口縁直径19cmを測る。整形は口縁部付近が内外とも横方向のヘラナデ，頸部以下が外面は縦方向のハケナデ，内面は縦方向のヘラケズリである。口縁近くに積みあげの痕跡がみられる。**460**は内面をていねいに研磨した土師器の埦である。口縁直径12.5cm，高台直径７cm，高さ 4.5cmを測り，口縁部がやや外反する。

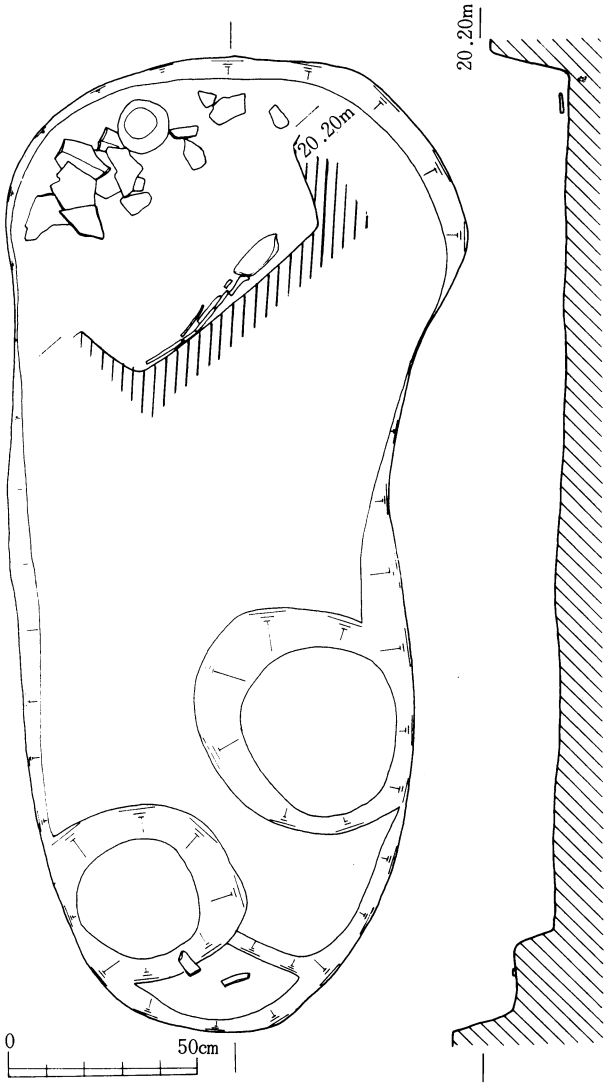
(7)　土坑G（19J区土坑１）

19Ｊ区で検出された直径 155cmの円形土坑である。中ほどに段があり，下半部は直径 100cmほどの小円となる。深さは１ｍあり，灰褐色あるいは黒褐色を基調とした５つの層に分かれる。溝状遺構２が埋没後につくられたものである。底部の切り離しが糸切りとなる土師器の坏や，土師器の甕などが少量出土したが，図化できるものはなかった。

(8)　土坑H（19K区土坑１）

18・19K区で検出された 260cm×100cmの長だ円形土坑である。北西隅付近で段違いになっており，この付近は深さ20cmほどであるが，他はそれより10cmほど下がっている。東隅床面上に土師器の坏と甕が集積している。

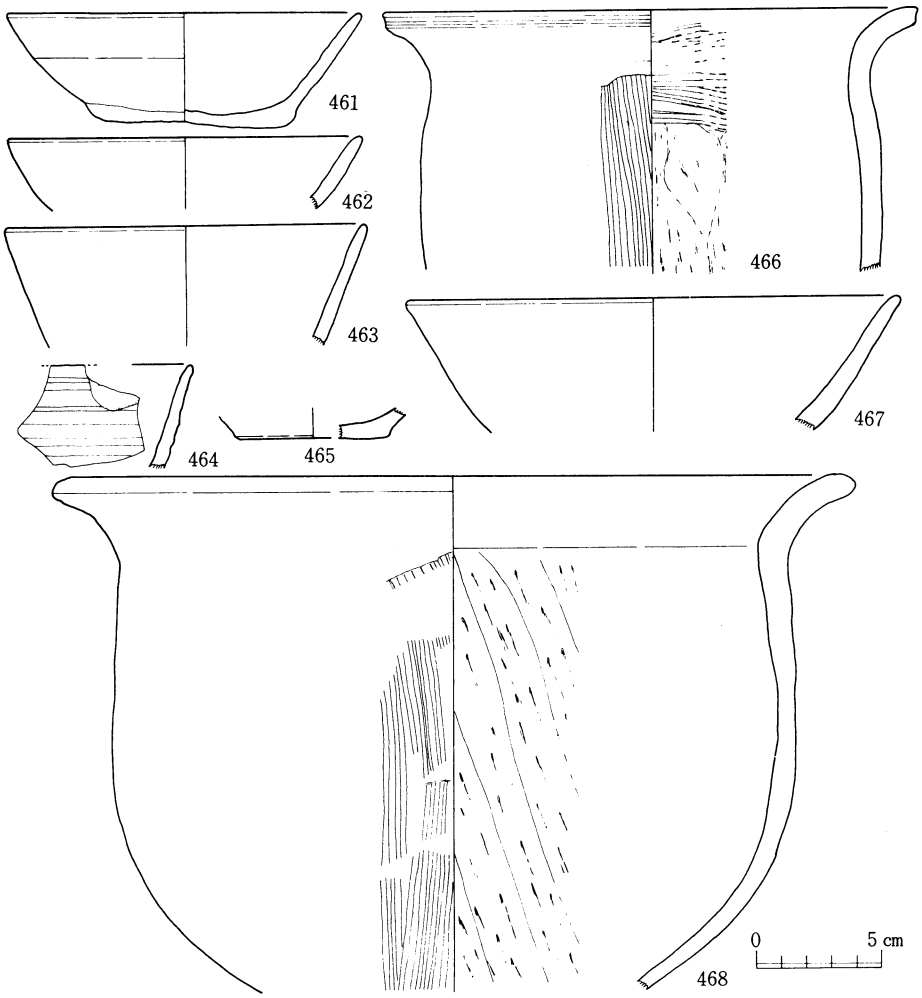
461～**465**は土師器の坏である。口縁直径14cm前後，底部直径６～８cm，高さ 4.5cmを測る。直線的に開きながら口縁部へ向かうが，底部付近ではやや外へ張り出している。**462**はやや丸みをもった器形をしており，**461**は内面の口縁付近が黒く変化している。底部の切離しはヘラ切りである。**463**が白っぽい色を呈している他は，黄色っぽい淡茶褐色を呈している。茶色粘土や石英粒を多く含む致密な砂質土を用いている。**466**と**468**は土師器の甕である。**466**は口縁直径21cmと小型である。口縁部は外反し，端部を一条の凹線が巡る。



第92図　土坑H

外面は頸部から上が横方向のヘラナデ，下が縦方向のあらいハケナデで仕上げる。内面は頸部より上が横方向のあらいハケナデであるが，口縁部周辺はその上をヘラでナデている。頸部より下はヘラケズリである。**468**は口縁直径32cm，高さ約22cmの大型甕である。口縁部は外反しており，やや安定した丸底である。調整は，頸部から上が内・外面とも横方向のヘラナデ，外面の頸部から下が縦方向のハケナデのあと，部分的に横方向のヘラナデ，内面の頸部から下が縦方向のヘラケズリである。内面の下半部には厚いこげつきがみられる。甕の焼成は両方とも良好で，**466**が黄色っぽい淡茶褐色を呈しているのに対し，**468**は茶褐色をしている。胎土には石英や黒雲母などの細石粒を多く含んでいる。**467**は内黒土師器の埦で，口縁直径19.5cmを測る。開きながらまっすぐ口縁部へ向かうが，端部付近でわずかに外反する。外面は横方向のていねいなナデ仕上げ，内面は横方向のヘラ研磨で仕上げ，光沢を呈している。

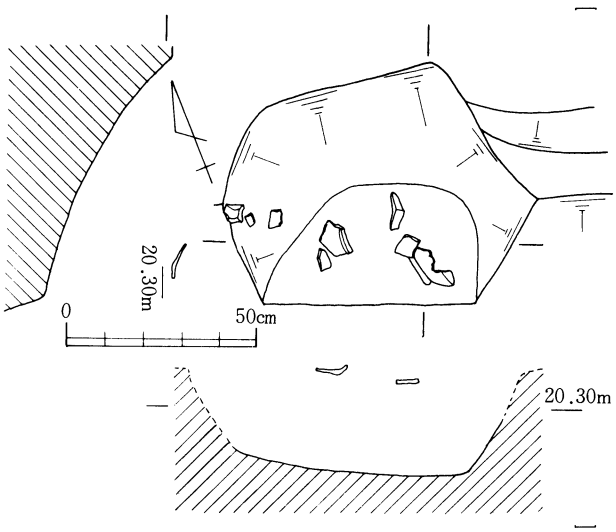
この他に，図化できなかったものとして，土師器の鉢，須恵器の壺，土師質のふいご羽口などが出土している。



第93図　土坑H出土の土器

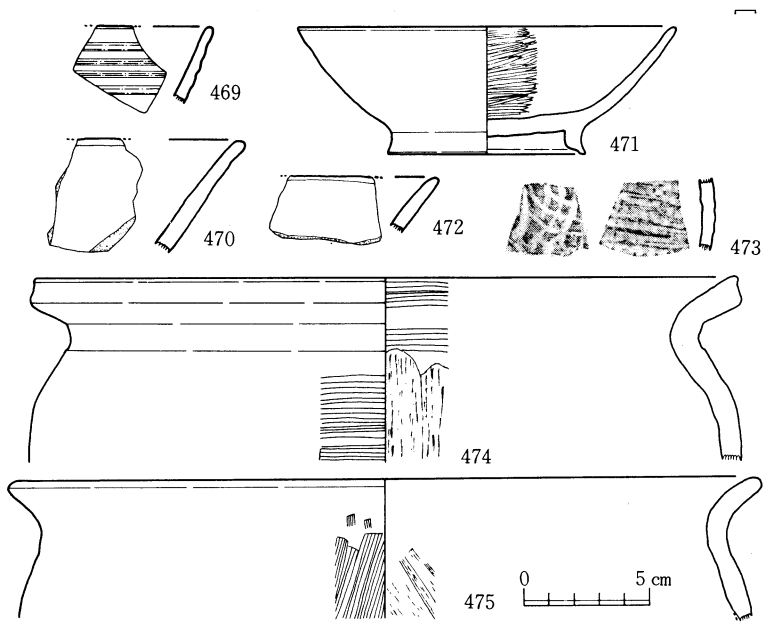
(9)　土坑Ⅰ（18J区土坑1）

18J区で検出された直径約80cmの円形土坑であるが，東側を溝状遺構2によって削られている。深さ30cmほどを残しており，埋土途中に土師器の甕や内黒土師器の椀などが出土している。



第94図　土坑Ⅰ

469は，口縁部へまっすぐ伸びる土師器の坏である。**470**～**472**は内黒土師器の椀である。体部は底部より口縁部へ向かってまっすぐ伸びており，内面は黒く光沢を呈している。底部の切り離しはヘラ切りであり，高台端の内面は凹線が巡っている。口縁直径15cm，高台直径 7.8cm，高さ 5.1cmを測る。外面は横方向のていねいなナデ，内面は横方向のヘラ研磨で仕上げている。**473**は須恵器の甕で，外面が平行線文叩き，内面が同心円文叩きである。**474**と**475**は土師器の甕である。**474**は口縁直径28cmを測る。口縁部が厚くなり，端部は直に近く立ちあがる。頸部がくぼみ，丸みをもって胴部に至る。

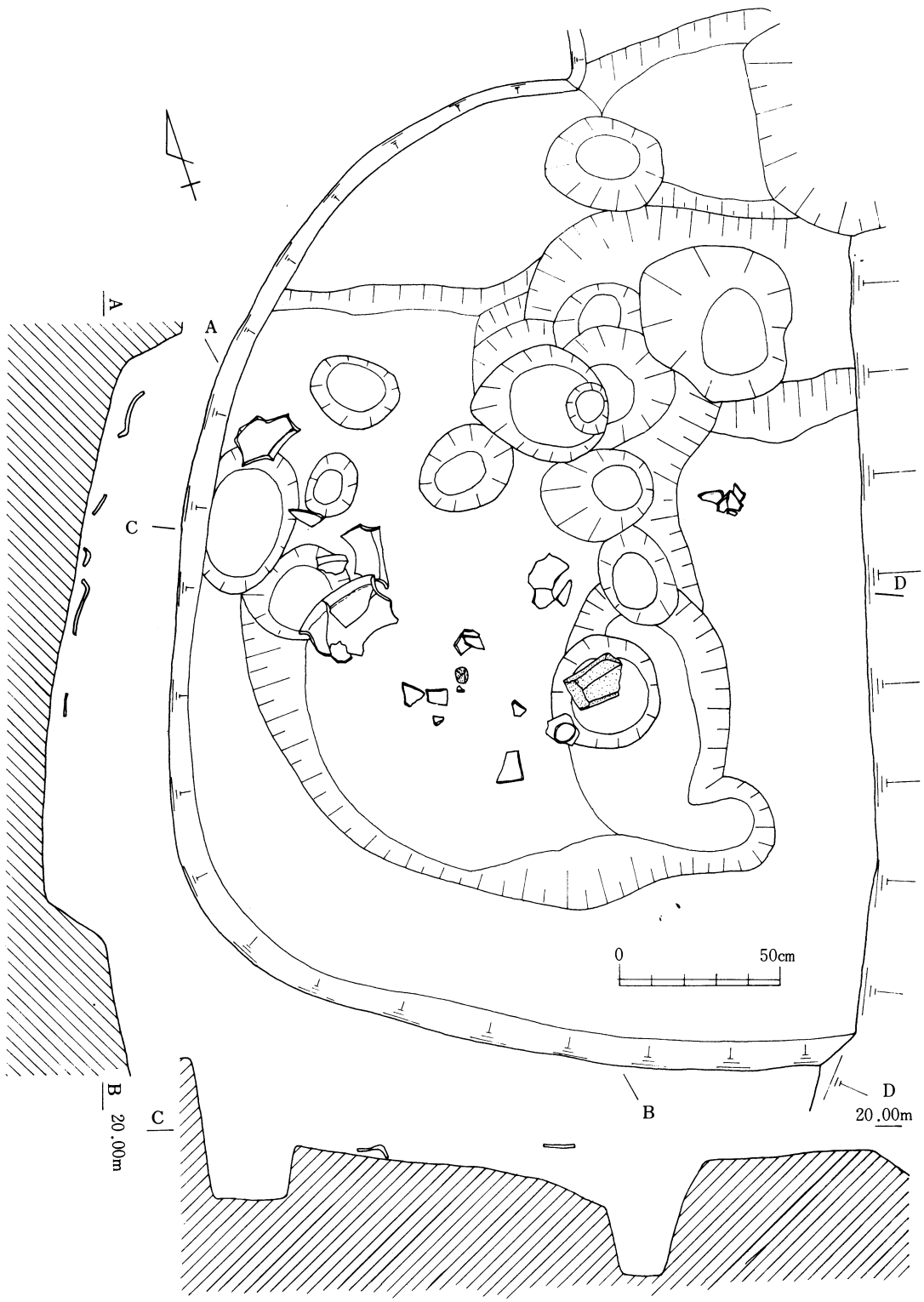


第95図　土坑Ⅰ出土の土器

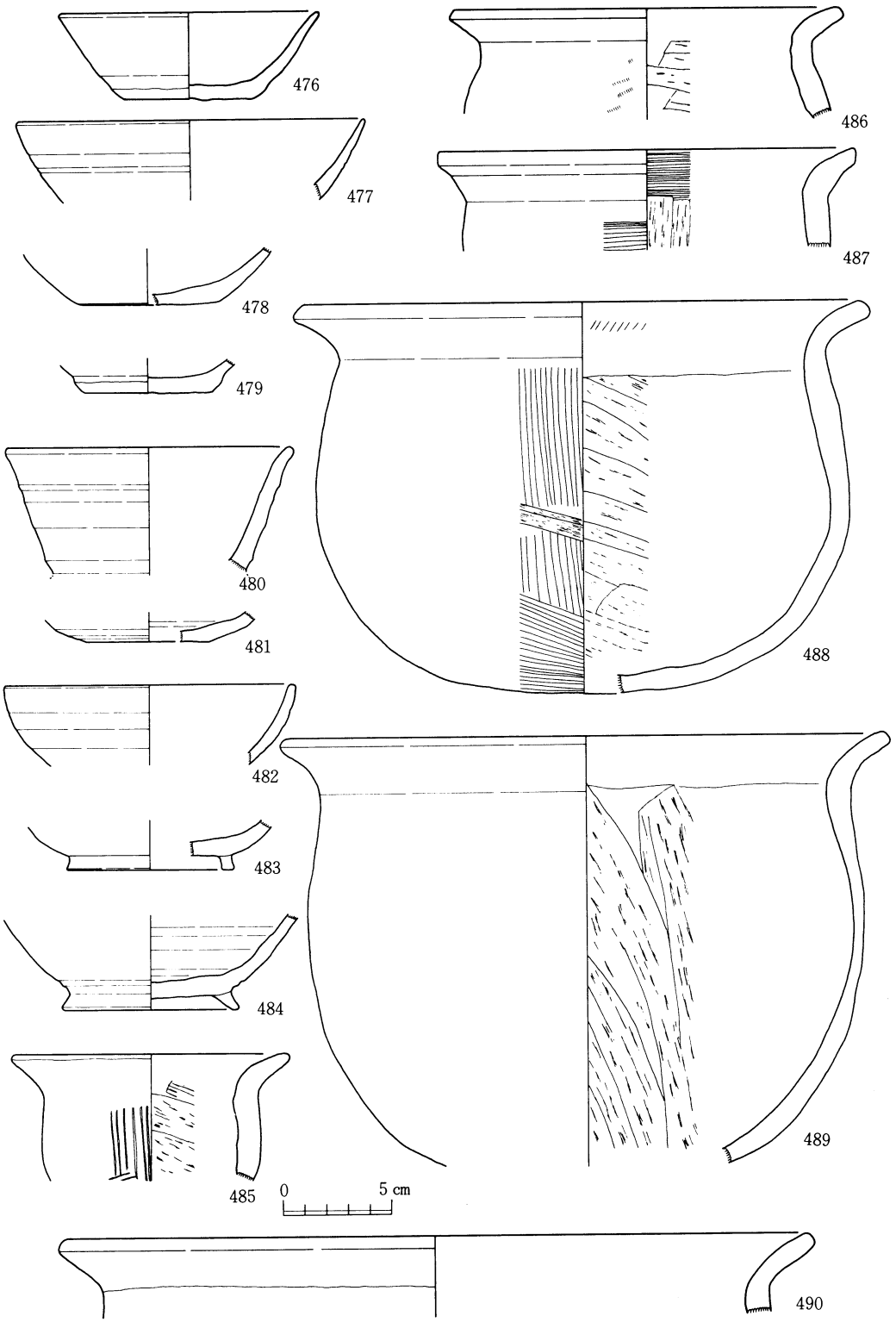
調整は外面の頸部より上が横方向のヘラナデ，下が横方向のハケナデで仕上げる。内面は頸部より上が横方向のあらいハケナデ，下が縦方向のヘラケズリで仕上げる。**475**は口縁直径30cmを測るもので，口縁部がくの字状に外反する。調整は頸部より上が内外ともヘラナデ，頸部より下が外面は縦方向のハケナデ，内面は右下がり方向のヘラケズリである。胎土には 0.1～4mm大の石英粒や黒雲母粒など細石粒を多く含む砂質土である。茶褐色を呈する。

(10)　土坑J（17J区土坑1）

17・18Ⅰ・J区で検出された円形土坑であるが，東半分を溝状遺構2によって削られている。



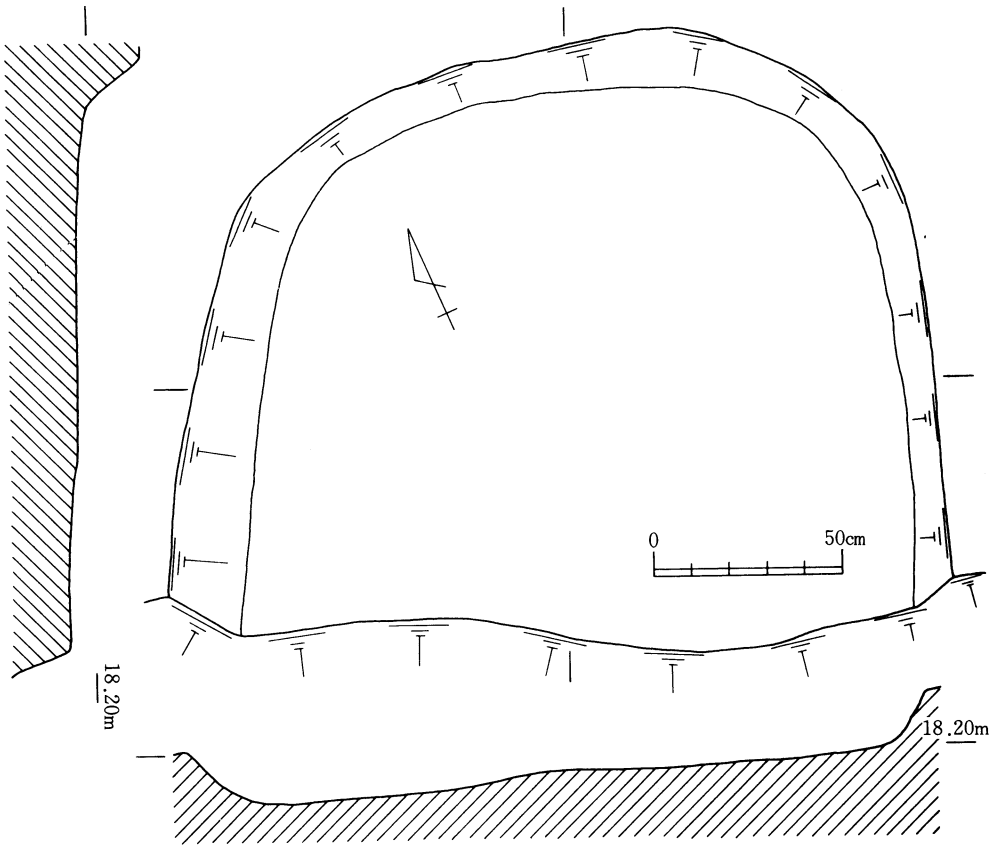
第96図　土坑J



第97図　土坑J出土の土器

現存で，南北に 3.1ｍ，東西に 2.4ｍある。基部は凹凸が激しく，深さは10cm～50cmある。床面近くに土師器の甕・坏・埦などが散在していた。

476～ **479**は土師器の坏である。開きながらまっすぐ伸び，底部の切り離しはヘラ切りである。口縁直径12cm，底部直径６cm，高さ４cmを測るものと，口縁直径16cmとやや大型のものとがある。底部へ移る手前でややくぼみ，まるみをもって底部へ移っている。他の３点が精製土を用い，明茶褐色を呈するのに対し，**476**は石英・長石など 0.1～４mm大の細石粒を多く含む土を用い，茶褐色を呈している。**480**と **484**は土師器の埦で，口縁直径13cmを測る。立ちあがりの角度は強く，外面の凹凸が目立つ。底部近くでややくぼむのは坏と同じである。高台は外へ強く張り出し，端部直径８cmを測る。**481**～ **483**は黒色土器の埦と坏で，他の２点が内面のみ黒いのに対して，**482**は外面の口縁付近は黒くしている。内外ともヘラでていねいに研磨しており，黒みは光沢を呈している。埦は丸みをおびた器形をして，高台が付く。坏は外へまっすぐ伸びており，底部に比べて相当に広い口縁となるようである。**485**～ **490**は土師器の甕で口縁直径が13cmのものから35cmのものまで各種ある。内面の頸部から下はすべて縦あるいは横または斜方向のヘラケズリで仕上げる。また，外面・内面とも頸部から上はヘラによる横方向のナデ整形がされるが，内面整形は **485**がヘラナデの前にあらいハケナデがされ，**487**は横方



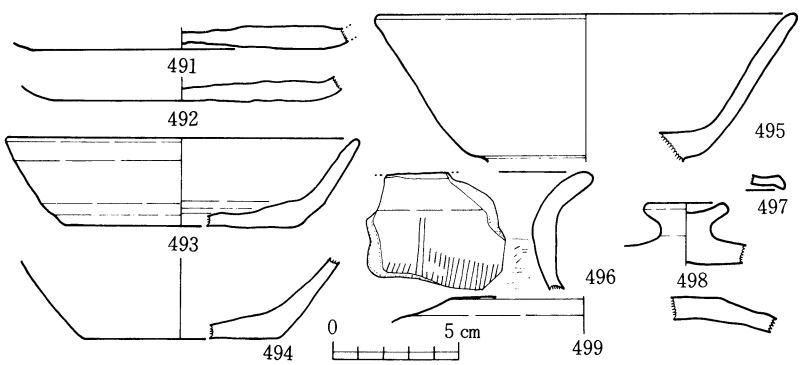
第98図　土坑Ｋ

向のハケナデのみである。外面の頸部から下は **485**と **488**が縦方向，**487**が横方向のハケナデ，**486**はハケナデのあとヘラナデ，**489**はヘラナデで仕上げている。**488**は完形品で，口縁直径26.5cm，高さ18cmを測る丸底のものである。**489**は底部を欠いているが，口縁直径28cm，高さ約20cmを測る。他にオリーブ色の釉がかった青磁壺がある。

(11)　土坑K（12G区土坑1）

12G・H区にある隅丸方形の土坑であるが，南半分は最近の農道によって削除されている。南北方向に長く，現存長は 1.6m，東西方向に 2.1mある。深さは約15cmしか残っていない。

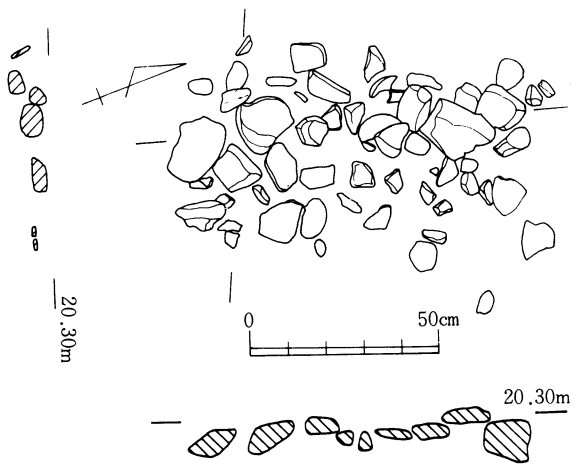
土師器の皿・坏・埦・甕・蓋と須恵器の坏蓋が出土している。皿（**491**・**492**）は底部のみで切り離しはヘラ切りである。直径10～11cmを測る。**493**と**494**は坏で，これも底部切り離しはヘラ切りである。口縁直径14cm，底部直径８～９cm，深さ 3.5cmを測る。立ちあがりは直線的で外へ広がる。埦（**495**）も外へまっすぐ開いており，口縁直径16.5cm，坏部の深さ 4.7cmを測る。蓋（**498**・**499**）の天井部は平坦で，中央に天井のくぼんだ扁平つまみがある。天井部のみはヘラケズリのままだが，周辺はていねいにナデている。甕（**496**）はくの字状に外反しており，頸部より上は内外ともヘラナデ，下は外面が縦方向のハケナデ，内面が横方向のヘラケズリで仕上げる。他の器種が石英や茶色粘土など細かい土を使っているのに対し，甕は土がやや粗い。焼成はどの器種も良好で，茶褐色あるいは淡茶褐色を呈している。**497**は須恵器の坏蓋で，端部が下に端折られている。白色石粒を多く含む細かい胎土で灰褐色を呈する。



第99図　土坑K出土の土器

4．集石遺構

17J区で１m×０.7mの範囲に集石した遺構が検出された。こぶし大から人頭大まで色々の大きさの石が10cmほどの厚さに堆積している。中には土師器坏，内黒土師器埦，須恵器甕なども含まれていた。



第100図　集石遺構

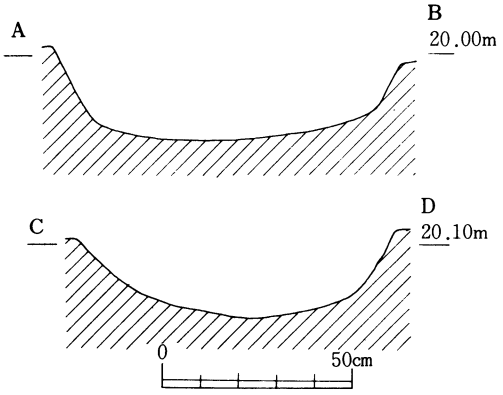
５．溝状遺構

２本の溝状遺構を検出しているが，１本（溝状遺構１）の残存状況はよくない。

(1)　溝状遺構１

21Ｃ区から22Ｅ区に向かって，東西方向に流れる溝状遺構で，埋土は黒褐色土の単一層である。幅が約１ｍ，深さ約20cmを測る。

出土遺物は少なく，図化できたのは土師器のみである。**500**は底部切り離しがヘラによる椀で，底部に段をつけて高くしている。**501**～ **503**は底部切り離しが糸による皿で，口縁直径10.5cm，底部直径 6.5cm，高さ２cmを測る。

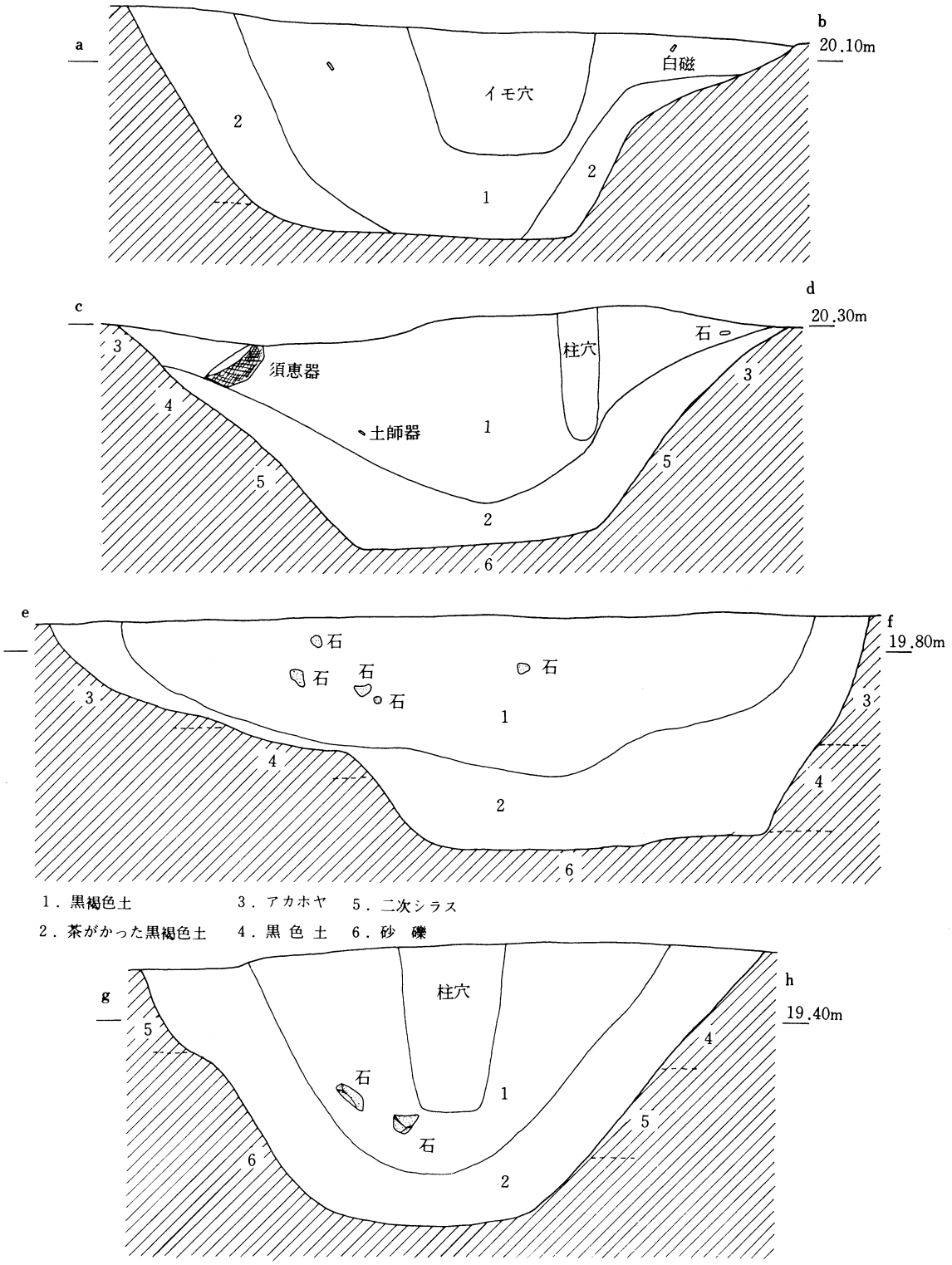


第101図　溝状遺構１の断面図

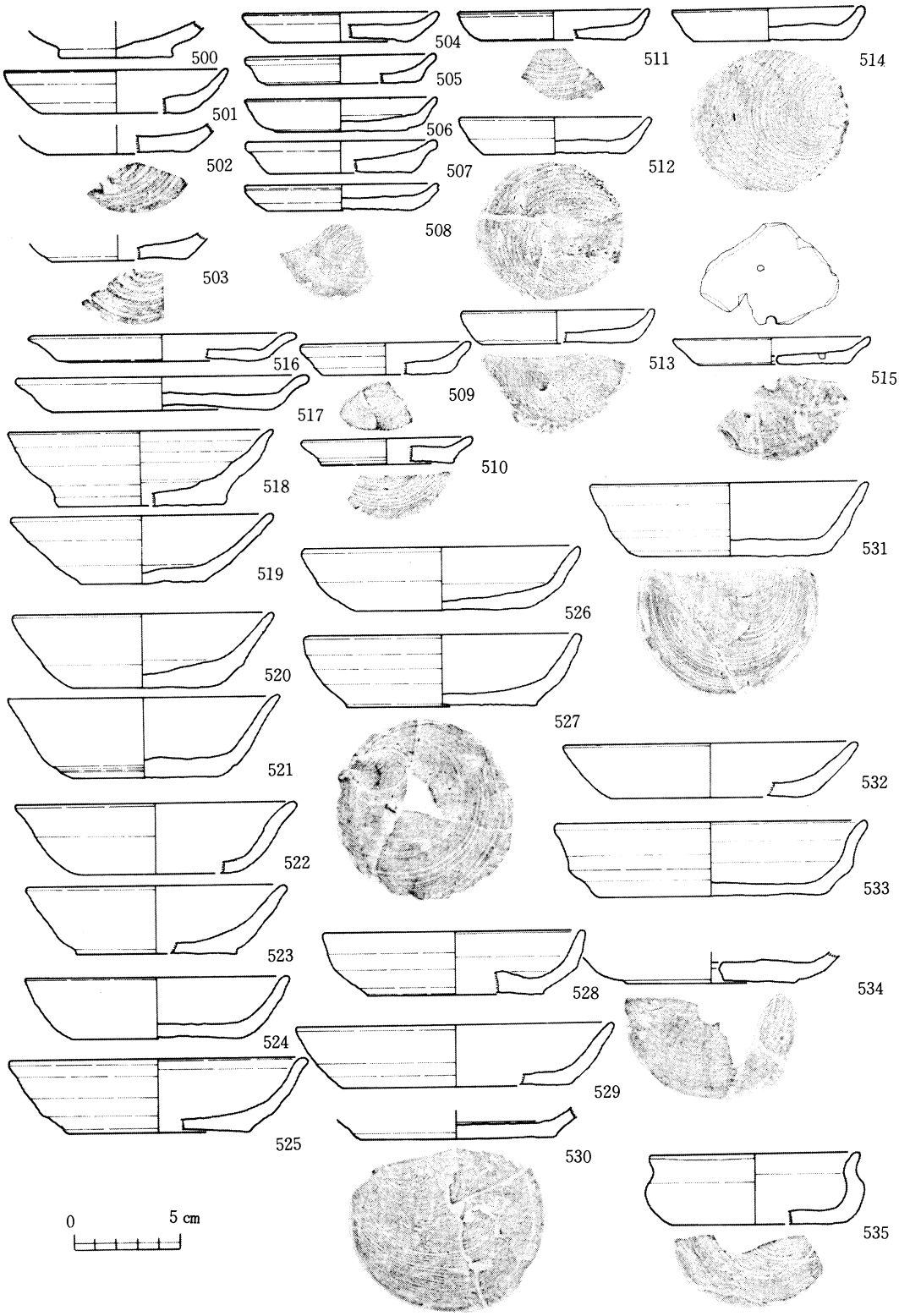
(2)　溝状遺構２

12Ｊ区からＪ区をやや蛇行しながら，まっすぐ北上し，23Ｊ区から左へ曲がりながら25Ｅ区へ続いている。底面が平たい台形状の断面をしており，南側では２ｍ近くの深さを残しているが，北側では江戸時代の溝などによって削平を受け，浅い。埋土は２層に分かれ，下部は茶がかった黒褐色土，上部は黒褐色土である。溝の底は20区あたりが最高位で，両側に下がっており，南側では砂礫層を掘り込んでいる。北西側は未買収地へのびており，南側は段下げによって消失している。埋土中には多くの遺物（土師器・黒色土器・須恵器・磁器・ふいご口・石鍋など）が含まれている。

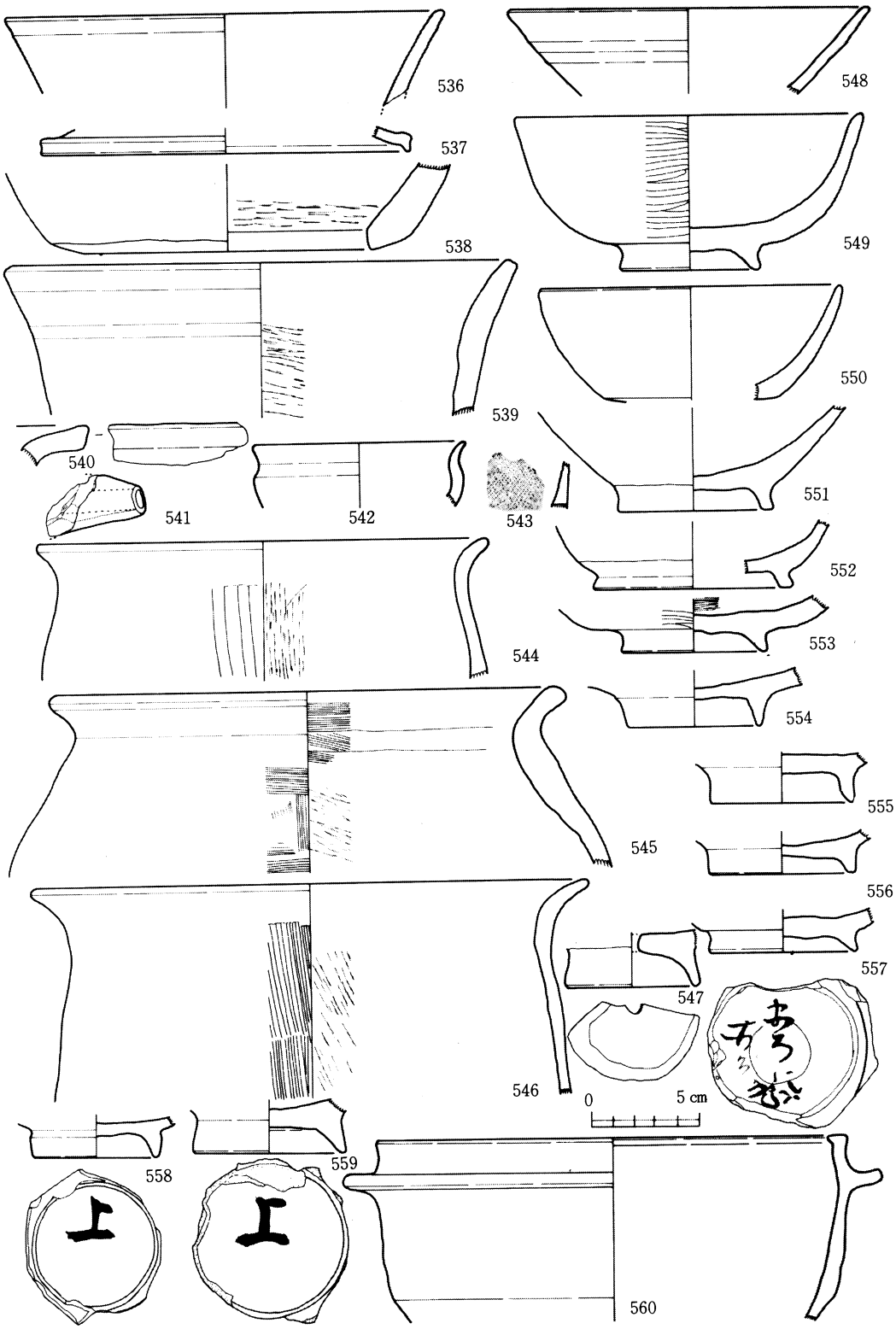
土師器には皿・坏・椀・甑・鉢・壺・焼塩壺・甕がある。皿には小皿と大皿がある。小皿（**504**～ **515**）は口縁直径が８cmのものと９cmのものとがあるが，底部切り離しはすべて糸切りである。底部直径は８cmのものが６cm，９cmのものが７cmで，高さは 1.5cm前後を測る。口縁端部に沈線をもつものもある。**515**は底部に２個の小孔があり，１個は貫通しているが，１個は貫通していない。大皿（**516**・ **517**）は口縁直径が12.5cm～13.5cm，高さ 1.3cm～ 1.6cm，底部直径10cm前後を測る。底部切り離しはヘラ切りである。坏（**518**～ **535**）の底部切り離しにはヘラ切りのものと，糸切りのものとがある。ヘラ切りのものは口縁直径12cm，高さ３cm～ 3.8cm，底部直径６～８cmを測り，器形は丸みをもつものと，開きながらまっすぐ伸びるものとがある。底部はまっすぐ移るものと，段をもつものとがある。糸切りのものは口縁直径15cm高さ 2.9cm～ 3.5cm，底部直径10.5cmのものと，口縁直径12～14cm，高さ 2.5～ 3.5cm，底部直径 7.5cm～９cmのものに分けられる。器形は底からまっすぐのびているが，外に段をもつものともたないものとがある。内底面はロクロ引きのあとハケナデをするものが多い。**534**は中央付近に２個の貫通孔がある。**535**は口縁直径10cm，高さ 3.3cm，底部直径８cmを測るくの字状に外反する坏である。椀（**536**・ **547**）はまっすぐ開く器形をしており，底部に穿孔のあるものもある。蓋（**537**）は須恵器と類似した器形をしており，端部は下へ折れている。こしき（**538**）は底が丸くあいている。鉢（**539**）は口縁がまっすぐ開いており，内面の下部はヘラ



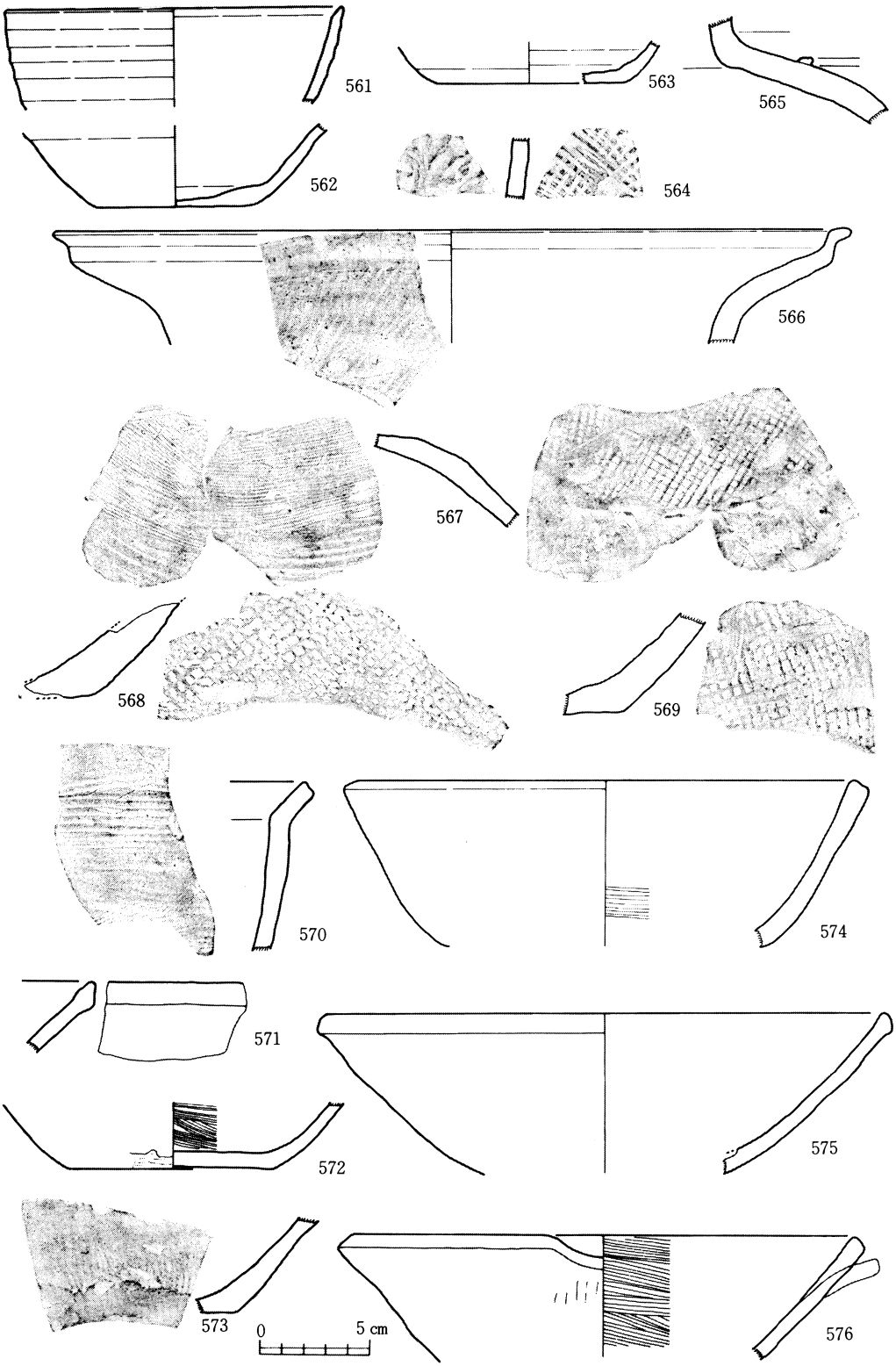
第102図　溝状遺構２の断面図



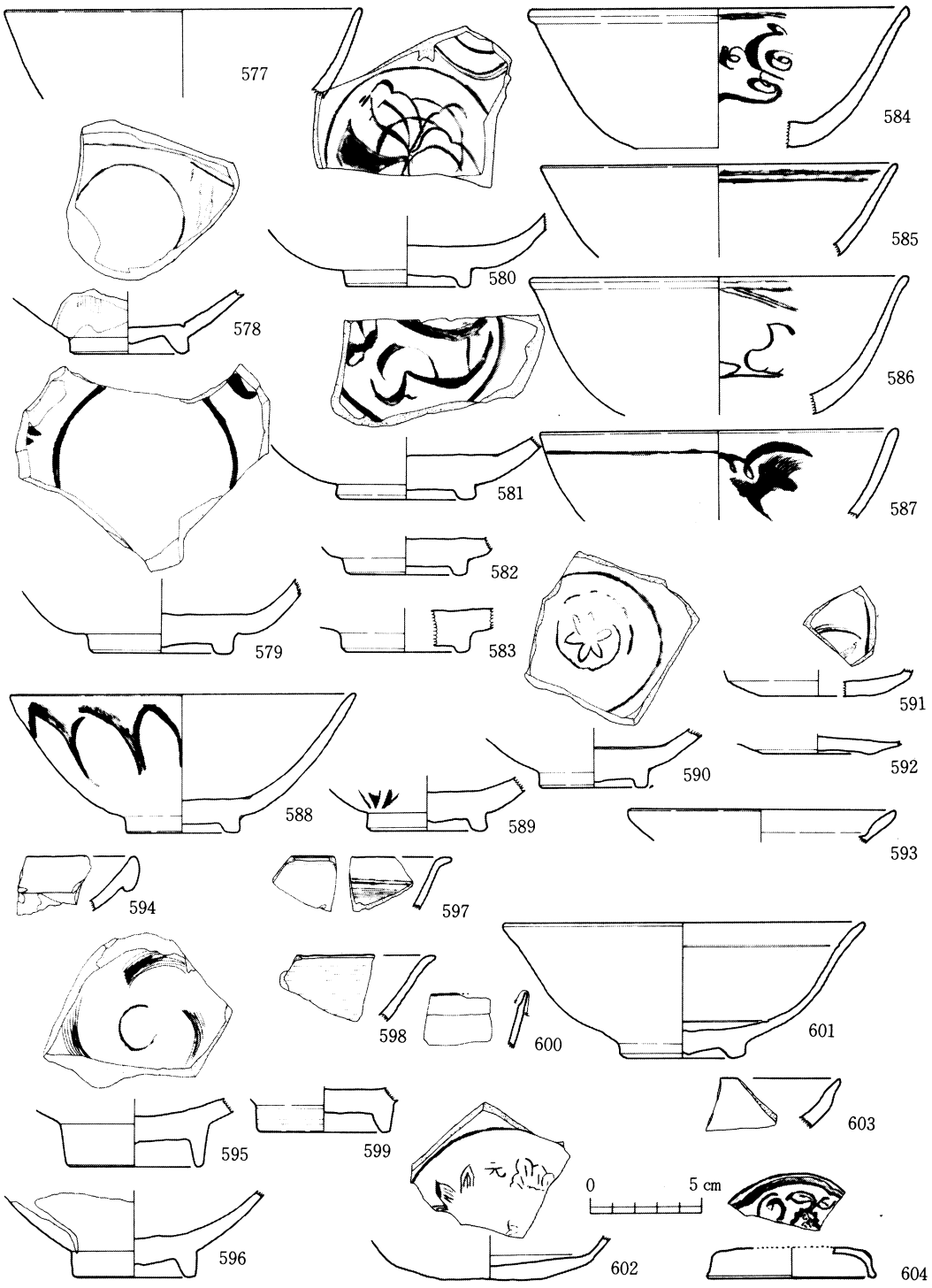
第103図　溝状遺構1と溝状遺構2出土の土器(1)(土師器)



第104図　溝状遺構２出土の土器（2）（土師器・黒色土器）



第105図　溝状遺構2出土の土器(3)(須恵器)



第106図　溝状遺構２出土の土器（4）（磁器）

ケズリで仕上げる。**541**は注口，**543**は内面に布目のついた焼塩壺である。**542**は口縁直径が10cmの小甕である。甕（**540**・**544**～**546**）は口縁直径が21cm～26cmと大小あり，内面はヘラケズリで仕上げる。

黒色土器には椀と鍋がある。椀（**548**～**559**）はすべて高台の付く内黒土師器である。底部から口縁部へまっすぐ立ちあがるもの（**548**・**551**）と，やや内弯するもの（**549**・**550**・**552**・**553**）とがある。**549**は口縁直径16cm，高さ 7.2cm，高台直径 6.5cmを測る完形品である。高台は外へ開くもの，まっすぐ立つもの，断面矩形のものなどがある。**557**～**559**は外底部に墨書がみられる。**557**は５字以上の字が見れるが，意味不明である。**558**と**559**は『上』と同じような字体で書かれている。**560**は瓦器風の鍋で，断面矩形のつばが一周している。

須恵器は坏身・壺・甕・鉢がある。坏身（**561**～**563**）は茶褐色を呈する鉄分の多いもの，軟質で緋だすき様のものがあるもの，砂質のものがある。壺（**565**）は肩部に断面矩形の突帯が付く。甕には堅い焼きのもの（**564**・**566**）と軟質のもの（**567**～**569**）とがある。**566**は直径36cmと大型の口縁であり，**564**の内面タタキは車輪文を残している。軟質のものは内面がハケナデ，外面が格子タタキで仕上げられる。鉢（**570**～**576**）は口縁がくの字状に曲がるものと，まっすぐ伸びるものがある。**571**と**575**は端部が玉縁状を呈し，暗灰青色である。**576**は片口である。ほとんどがヘラナデで仕上げるが，ハケナデのものやハケ目の残るものもある。

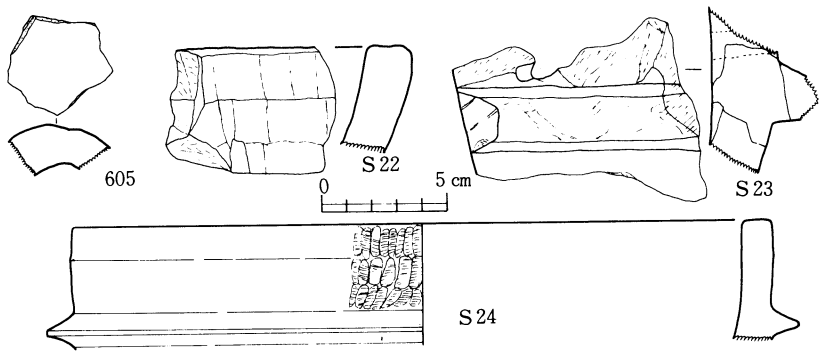
青磁は椀と皿がある。椀は越州窯系のもの（**577**），同安窯系のもの（**578**），竜泉窯系のものがあり，竜泉窯系のものは外面が無文のもの（**579**～**587**）と蓮花文のもの（**588**～**590**）がある。**590**は内底部に花のスタンプ文がある。皿も同安窯系のもの（**591**・**592**）と竜泉窯系のもの（**593**）がある。

白磁にも椀と皿がある。椀には玉縁口縁のもの（**594**），端反り口縁のもの（**595**～**599**），口はげ口縁のもの（**600**・**601**）とがある。**595**と**597**は内面に櫛描き文がみられる。**602**は皿で，内底部に花文と『元』というスタンプ文がみられる。

603は天目の小椀，**604**は天井部に草花文のある稜花蓋である。

605はふいご口，**S22～24**は石鍋である。**23**は窓部と円孔がみられる。

これらはいくらか９世紀頃のものも含まれているが，多くは12世紀のものと13世紀のものとに分けられる。溝状遺構は，この２時期にわたって引き続き，使用されたものと思われる。



第107図　溝状遺構２出土の土製品・石製品

第７表　溝状遺構１・２出土の遺物出土地区表

図番	種　類	区	図番	種　類	区	図番	種　類	区
500	土師器　埦	22E	537	土師器　蓋	27J	574	須恵器　鉢	14J
501	〃　皿	〃	538	〃　甑	21J	575	〃　〃	20J
502	〃　〃		539	〃　鉢	22J	576	〃　〃	18J
503	〃　〃	22E	540	〃　甕	17J	577	青磁　埦	15J
504	〃　〃	13J	541	〃　注口	20J	578	〃　〃	23J
505	〃　〃	14J	542	〃　小甕	15J	579	〃　〃	15J
506	〃　〃	16J	543	〃　焼塩壺	21J	580	〃　〃	21J
507	〃　〃	14J	544	〃　甕	14J	581	〃　〃	15J
508	〃　〃	18J	545	〃　〃	17J	582	〃　〃	14J
509	〃　〃	15J	546	〃　〃	19J	583	〃　〃	〃
510	〃　〃	17J	547	〃　埦	16J	584	〃　〃	15J
511	〃　〃	15J	548	内黒土師器　埦	19J	585	〃　〃	〃
512	〃　〃	14J	549	〃　〃	14J	586	〃　〃	〃
513	〃　〃	〃	550	〃　〃	10・13・16J	587	〃　〃	21J
514	〃　〃	18J	551	〃　〃		588	〃　〃	14J
515	〃　〃	16J	552	〃　〃	17J	589	〃　〃	〃
516	〃　〃	17J	553	〃　〃	21J	590	〃　〃	13J
517	〃　〃	23J	554	〃　〃	13J	591	〃　皿	23J
518	〃　坏	19J	555	〃　〃	〃	592	〃　〃	
519	〃　〃	18J	556	〃　〃	21J	593	〃　〃	21J
520	〃　〃	22J	557	〃　〃	15J	594	白磁　埦	15J
521	〃　〃	23J	558	〃　〃	13J	595	〃　〃	23J
522	〃　〃	16I	559	〃　〃	15J	596	〃　〃	21J
523	〃　〃	13J	560	瓦器　鍋	〃	597	〃　〃	23J
524	〃　〃	〃	561	須恵器　坏	13J	598	〃　〃	13J
525	〃　〃	16J	562	〃　〃	19J	599	〃　〃	21J
526	〃　〃	15J	563	〃　〃	22J	600	〃　〃	16J
527	〃　〃	16J	564	〃　甕	16J	601	〃　〃	17J
528	〃　〃	17I	565	〃　壺	15J	602	〃　皿	23J
529	〃　〃	16I	566	〃　甕	18J	603	天目	〃
530	〃　〃	13J	567	〃　〃	16～19G	604	青白磁　蓋	21J
531	〃　〃	16J	568	〃　〃	18J	605	ふいご口	18J
532	〃　〃	13J	569	〃　〃	15J	S22	石　鍋	16J
533	〃　〃		570	〃　鉢	13J	S23	〃	13J
534	〃　〃	13J	571	〃　〃	〃	S24	〃	18J
535	〃　〃		572	〃　〃	19J			
536	〃　埦	19J	573	〃　〃	15J			

６．柱穴出土の遺物

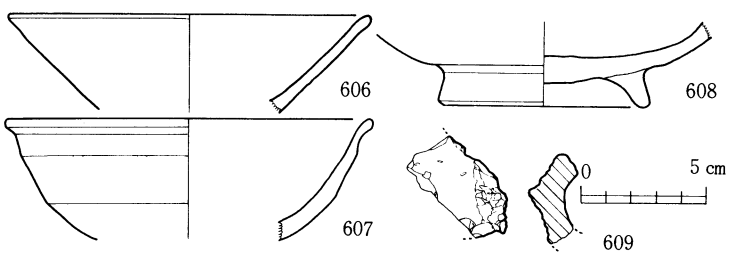
多くの柱穴が検出されたが，建物としてまとまらなかったものからも多くの遺物が出土した。ここではそれらの中から主なものを紹介したい。

内黒土師器には坏（**606**）と埦（**607**・**608**）がある。坏は口縁直径12cmを測り，まっすぐ外へ開いている。埦は丸みのある器形をしており，口縁部は端部が外反する。

609はふいご口の端部で鉄が溶けている。

土師器は皿・坏・埦・鉢・甕がある。皿には糸切り底の小皿と，ヘラ切り底の大皿（**619**）がある。小皿にも直径が８cmのもの（**610**～**612**），９cmのもの（**613**・**614**），10cmのもの（**615**）とがある。坏はすべてヘラ切り底で，口縁直径10cmの小さいもの（**616**・**617**）から11cmのもの（**618**），13cmのもの（**620**～**622**），14～15cmのもの（**623**・**624**）まである。器形は開きながらまっすぐ伸びるものと，丸みをもつものとがある。埦にも色々ある。**627**は口縁直径11cmと小さいが，深さ５cmと深い。**628**は底部が高く切り出され，充実高台になっている。**629**は口縁直径15.5cmと大きいが，深さは５cm位である。**630**は口縁直径14.5cm，底部直径 7.5cm，高さ 5.3cmを測る完形品で，口縁部へまっすぐ伸びている。鉢は内弯するマリ形のもの（**631**），やや内弯ぎみに立ちあがるもの（**632**），まっすぐ伸びるもの（**633**）がある。**632**は外面・内面とも調整が雑で，ヘラケズリあるいは粗いナデで仕上げている。**633**は外面の口縁部付近に一条の沈線が巡っている。甕は両者とも外へ強く反っている器形である。**634**は口縁直径29cmを測る長胴形のもので，内面の頸部から下はヘラケズリで仕上げている。**635**は口縁直径33cmとやや大形である。

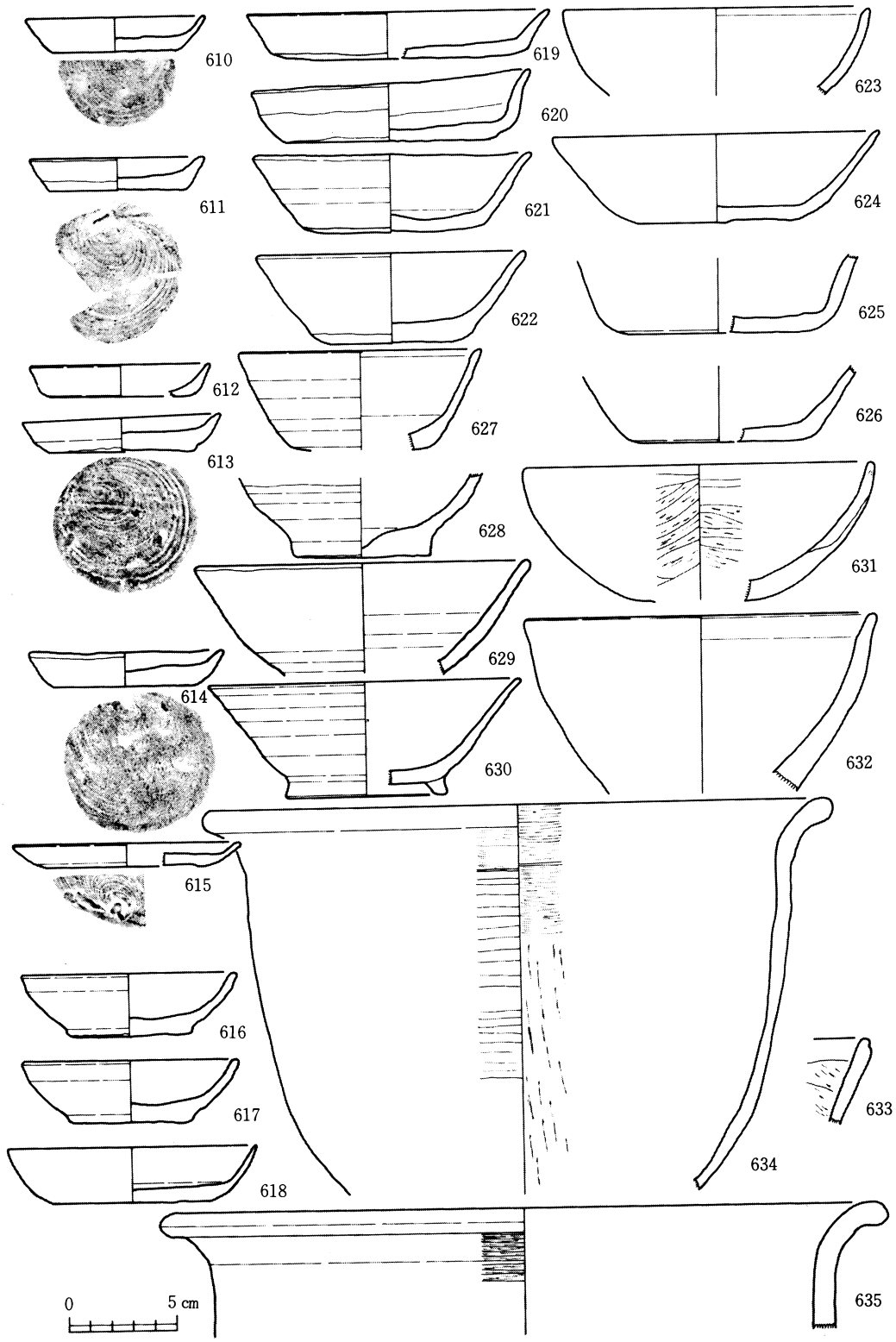
これらの遺物は器種ごとにいくつかの器形があり，数時期のものを含んでいるが，大ざっぱには平安時代～鎌倉時代のものといってよかろう。したがって，建物もこの時期を中心としていよう。



第108図　柱穴出土の黒色土器・土製品

図番	区	柱番	613	29G	12	621	29G	11	629	28D	1
606	20I	2	614	18F	1	622	20J	4	630	22I	1
607	22H	1	615	18F	1	623	28G	18	631	17E	2
608	22H	1	616	22K	2	624	20I	2	632	16F	1
609	20F	3	617	22K	2	625	20G	5	633	28F	2
610	18D	1	618	33C	5	626	28G	18	634	28E	8
611	20H	2	619	27G	11	627	22H	1	635	18K	3
612	18D	1	620	33B	5	628	28D	1			

第８表　柱穴出土の遺物一覧表



第109図　柱穴出土の土師器

７．攪乱層出土の遺物

多量の遺物が出土しており，これらは大きく分けると土師器・黒色土器・須恵器・磁器・陶器・施釉土器・土製品・石製品・金属製品に分けられる。ここでは先に紹介した遺構出土のもの以外だけについて記する。

(1) 土師器

色々の器種がある。皿・坏・埦・蓋・鉢・壺・かめ・こしきの他に特殊なものもある。

①小皿（第 110図，第 111図，636～ 669）

色調は黄白色がおもで，灰褐色・淡褐色を呈すものもある。胎土に少量砂粒を含み，器面は内外面を横ナデ，内底はナデによって調整される。636・ 639・ 640がヘラ切り底，その他が糸切り底のものである。637・ 638は，拓本を図示できなかった。図版のミスでヘラ切り底のものに混入した。糸切り底の場合，口径によって，７cm前後（ 666～ 669），８cm前後（ 638・ 650・ 652・ 654・ 657～ 661），９cm前後（その他）と，それぞれグルーピングできる。９cm前後の小皿は器高の高いものと低いものがある。656は穿孔を施す。

②大皿　（第 111図 670～ 679）

淡褐色を呈し，胎土に少量の砂粒を含む。器面は横ナデされており，底にはヘラ切り痕をもつ。口縁部が，わずかに外反するものがほとんどである。678は上げ底である。

③坏　（第 111図，第 112図，第 113図，680～ 709）

色調は黄灰色ないし淡赤褐色を呈し，胎土はよく精選され，わずかに砂粒を含む。内外面を横ナデ，内底はナデ調整される。680～ 702はヘラ切り底，703～ 709は糸切り底である。ヘラ切り底を有す坏は，全体に底部と体部の境が丸味をおびている。また，口径とくらべて，器高の高い一群（ 680～ 686・ 689～ 691）と，口縁部と体部がやや外方に傾き器高の低い一群（ 687・ 688・ 692～ 699）とに，大まかに分けられそうである。700は丸底坏で，ヘラケズり痕が，体部下半まで残る。701は大坏，口径14.6cmで，702は特大坏，口径20.6cmに及ぶ。なお，底部に板目のあるものは見あたらない。

④埦　（第 113図，第 114図，710～ 736）

色調は，淡褐色ないし黄灰色を呈す。胎土に少量の砂粒を含み，石英砂粒を含むもの（ 712・ 716・ 722）もみられる。器面は，ほとんどが，内外面横ナデである。710・ 711は埦，712～ 717，724～ 728は高台付埦，718～ 723は埦部のみ残っているもの，729～ 736は底部を肥厚することで，高台状に見えるものである。

710・ 711は，底部にヘラ切り痕をもち，口縁部はやや外反して，内側端部に平坦面を形成している。712は，内面をヘラミガキしており，外面はヘラナデにより調整されたのか，器面が荒れている。714は，内外面とも，ていねいにヘラミガキされている。715は，焼成が非常によく，堅致で，土師埦とは異質な感がする。718～ 721は内弯気味に立ちあがり，口縁部でわずかに外反する。722・ 723は口縁部まで内弯し，端部上面に平坦面をもつ。729～ 736はヘラ切り離し後，ナデでヘラ切り痕を消している。埦部は，719～ 720が，これにあたるかも

しれない。

⑤蓋　（第 114図，**737～ 746**）

黄白色ないし淡赤褐色を呈し，胎土に少量の砂粒を含む。**740・ 741**は石英砂粒を含んでいる。**737～ 739**はつまみで，**737・ 738**は宝珠様に，**739**は円柱状をなす。**740～ 743**では，口縁端部が，下方に垂直もしくは，外方にやや張り出して，つまみ出しを行い，体部から口縁部にかけて，屈曲し，内面に稜を有する。**740**の天井部は，ほぼ水平，**742**では，わずかに窪みをもつ。本遺跡出土須恵器蓋と，形式上同一である。

⑥甕　（ 114図，第 115図，第 116図，第 117図，**747～ 777**）

色調は淡褐色ないし黄灰色を呈す。胎土は，砂粒を多く含み，径５㎜前後の小礫さえ含むものもある。長石・石英砂が目立ち，ほとんどが，これを含む。焼成は良好である。調整は，内面頸部下は，ほとんどヘラケズリ（下→上）され，口縁部は，内外面ヨコナデ，但し，一部内面に横方向の荒いハケ目を施すものがある。外面頸部から胴部にかけては，縦方向の荒いハケ目ないしは，ヨコナデである。おそらく長い胴部に，頸部が若干しまり，口縁部がやや肥厚して，短かく外方へ大きく屈曲する器形であろう。口径が20㎝を越えない小型甕（**753・ 764・ 767～ 775**）がみられる。**766**は，焼成が硬質，致密で，水引き跡も明確で，異質の感がある。**773・ 774・ 777**は，口縁部が，さほど外反せずに立ち上がる。**777**は，沈線の文様らしいものが，うかがわれる。

⑦甑　（ **117**図，**778**，**779**）

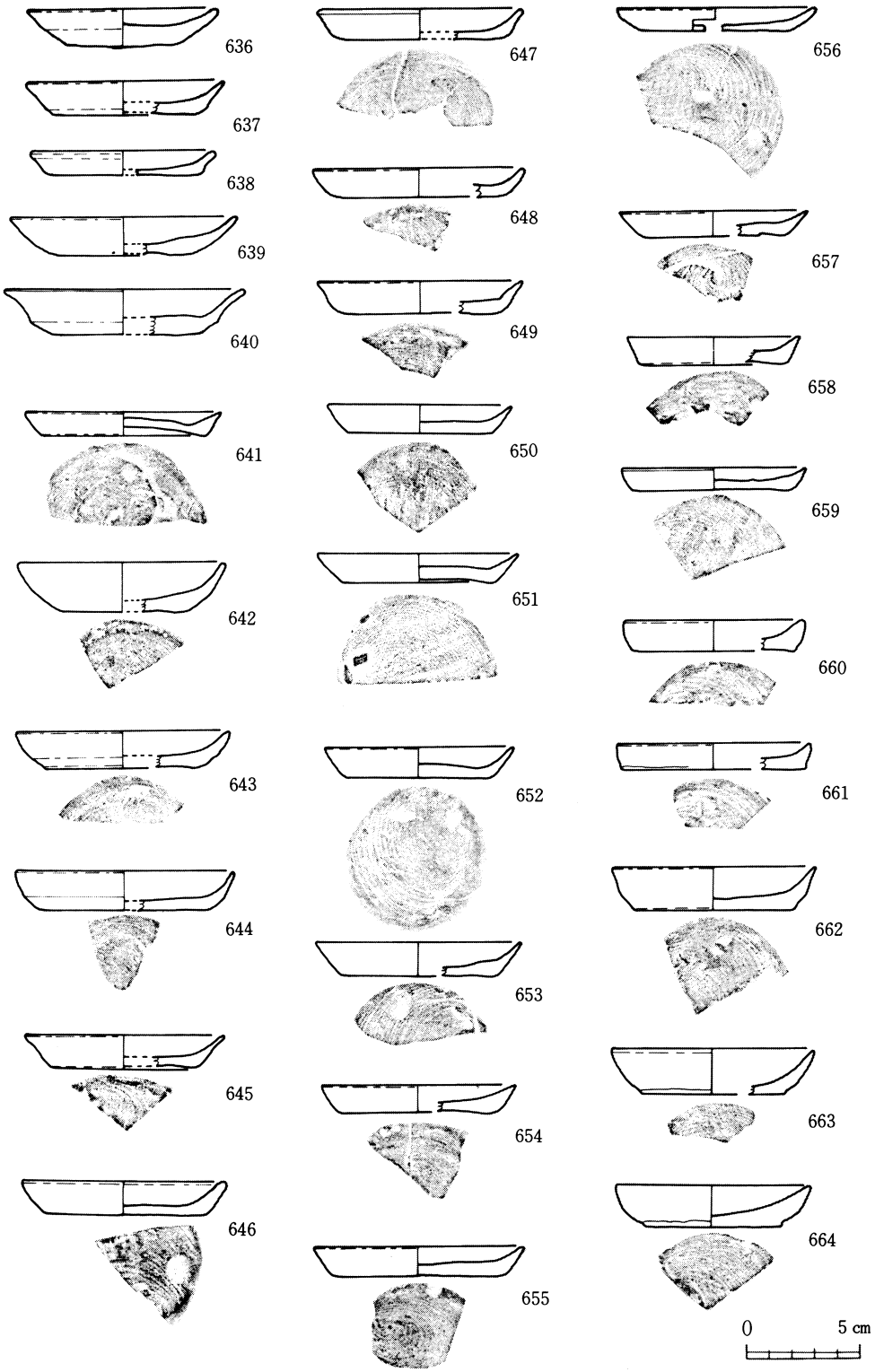
778・ 779は，中央に大きな穴のあく甑である。黄灰色で，胎土に砂粒を含む。**778**には，底部と外面にヘラミガキがなされている。（図がさかさになっている）

⑧鉢　（ **118**図，**783～ 786**）

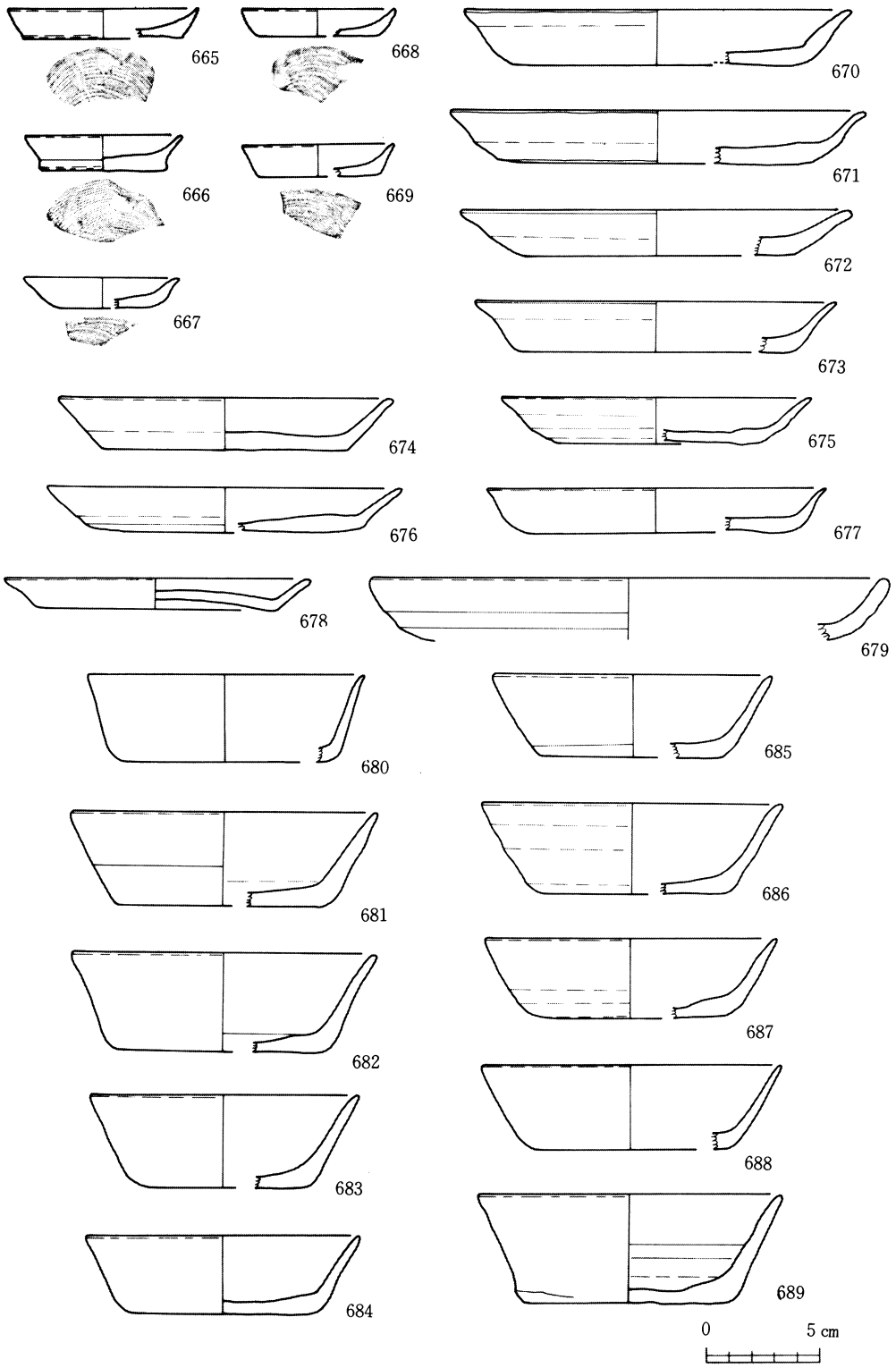
色調は淡褐色ないし黄灰色である。**783**は暗褐色を呈す。胎土は **786**を除いて，砂粒を含み石英砂粒が混じる。**786**は細砂を含む。小型・大型に２分される。

⑨その他　（ **117**図，**780～ 782**，**118**図，**787～ 792**）

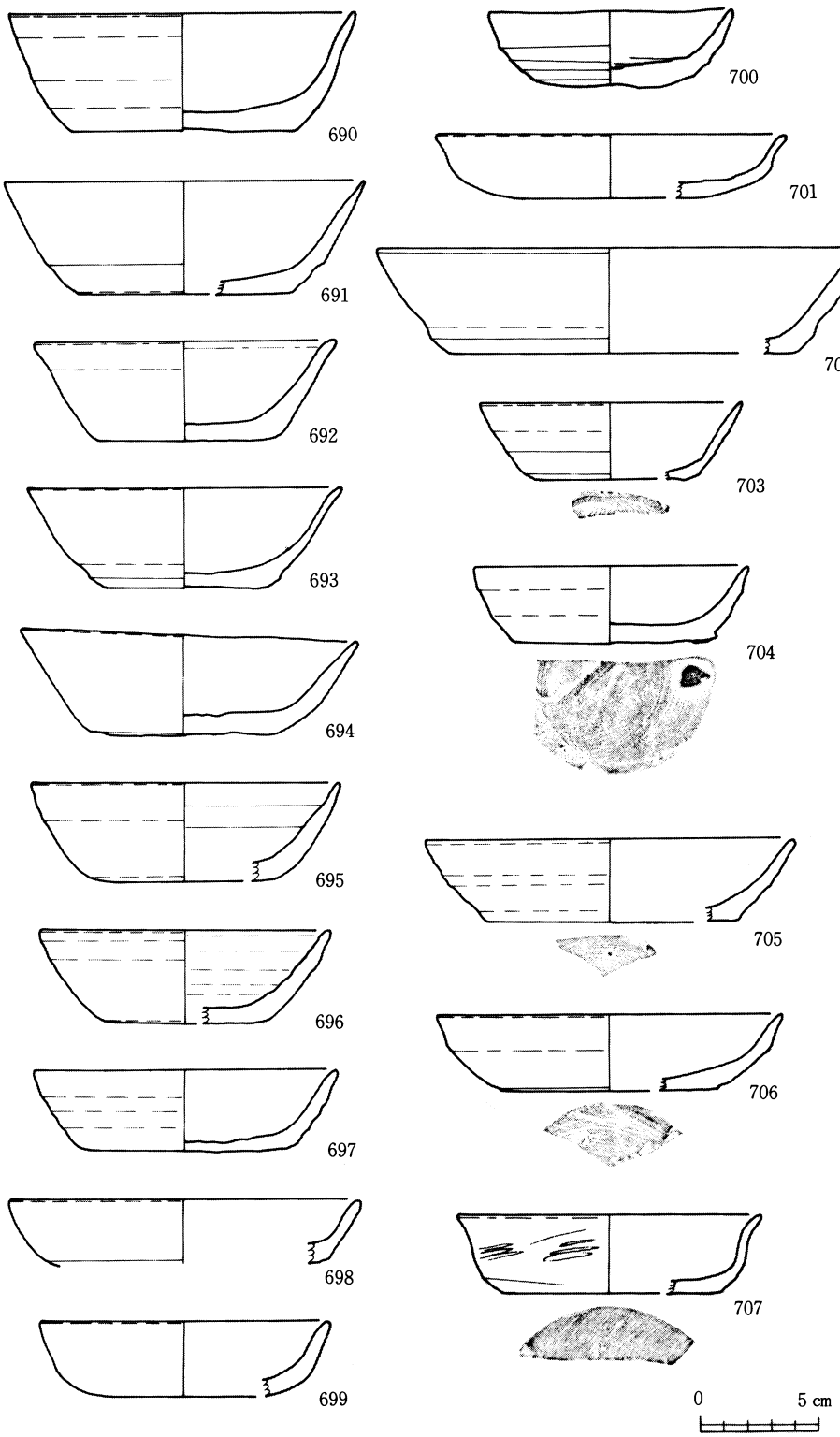
780～ 782は，器形不明の底部，**787**は淡褐色を呈し，胎土に石英砂粒，その他砂粒を含む。内側に布痕があり，俗に焼塩壺と呼ばれている。**788・ 789**はすり鉢。**788**は黄白色で，内外面横ナデ，胎土に少量の砂粒を含む。９本単位の沈線を施す。**789**は，淡褐色を呈し，砂粒を多く含む。７本単位の沈線を施している。**788・ 789**ともに石英砂粒を含む。**790**は鍋形土器である。ひさし部分のみ残存す。淡黄褐色，内外面ヨコナデ，石英砂粒を少量含む。**791**は，内底に同心円状，内面に放射状に，深い沈線を施す。鉢形土器の底部であろう。色調は黄白色胎土に少量の砂粒を含む。**792**は耳坏，黄灰色で，胎土にわずかに砂粒を含む。中央部に穿孔している。**793・ 794**は把手，**793**は黒色で，ていねいにヘラナデされる。**794**は，淡赤褐色で，ナデで調整される。双方ともわずかに砂粒を含む。**795**は，坏，あるいは埦の一部と思われるが，やや軟質の黄白色の土器片の，内外に漆を塗っている。漆は乾燥して，割れ口に浸透した部分を残して剝落している。修復の可能性もある。胎土はよく精選されている。


636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
0
5 cm

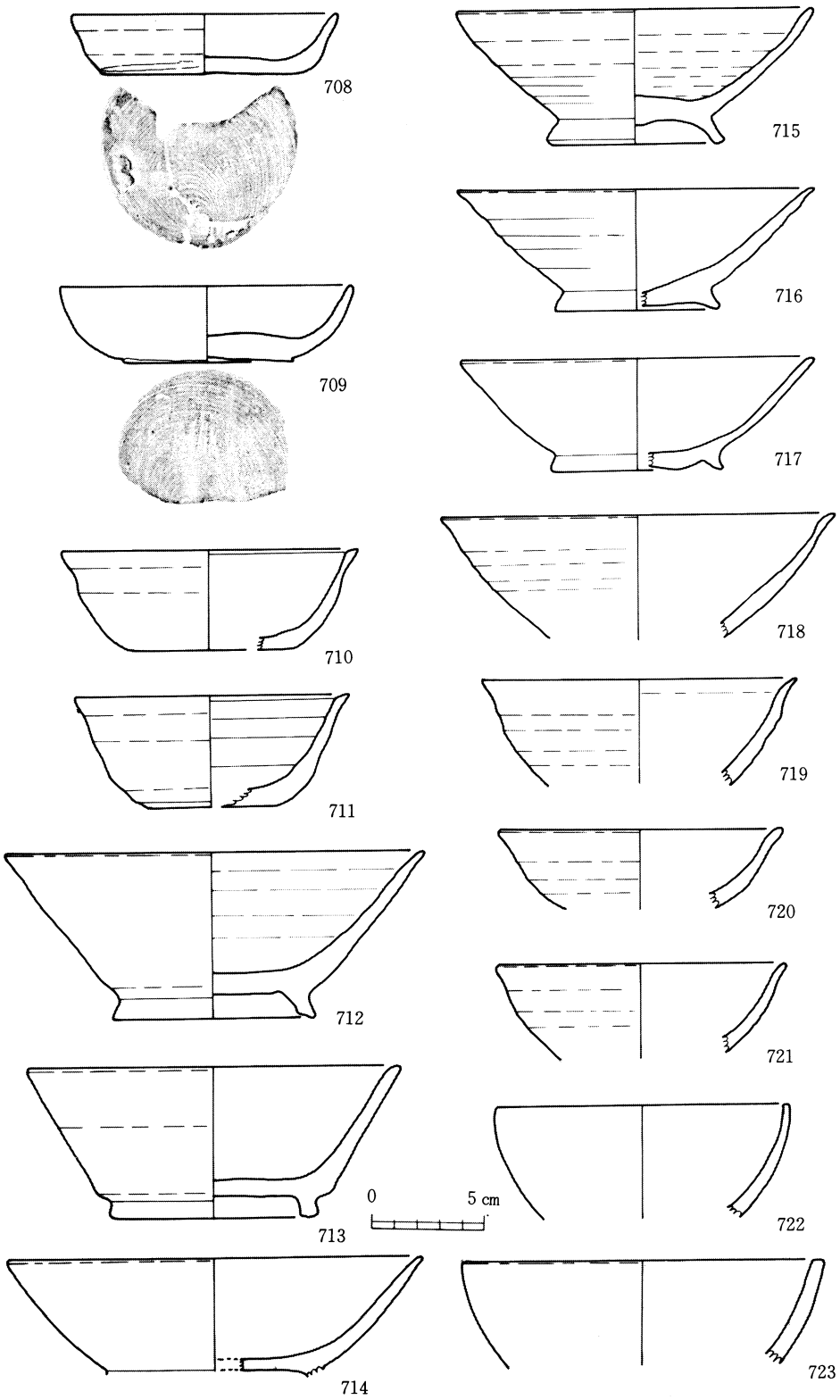
第110図　土師器(1)（皿）



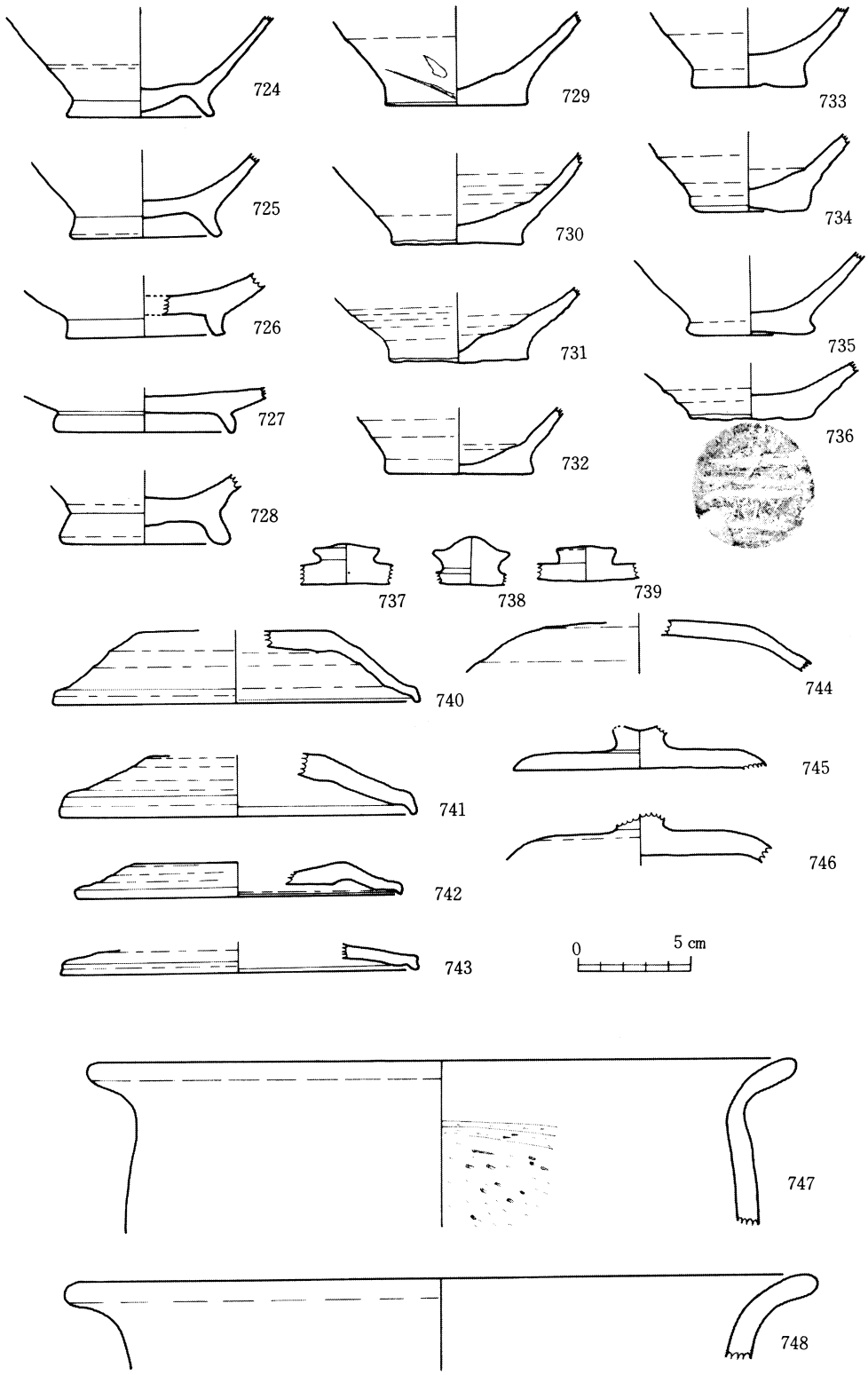
第111図　土師器(2)　(皿・坏)


690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
0
5 cm

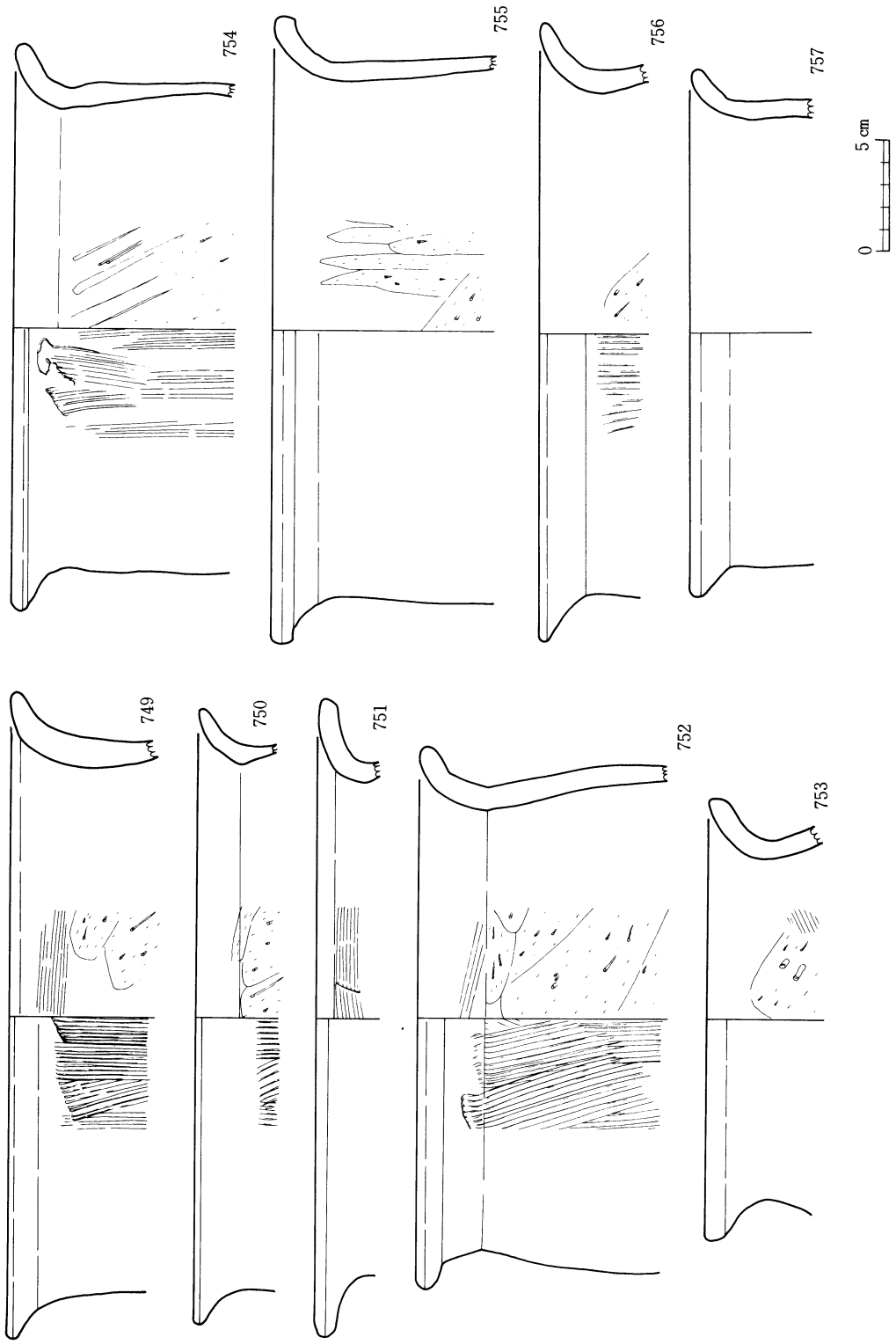
第112図　土師器(3)　(坏)



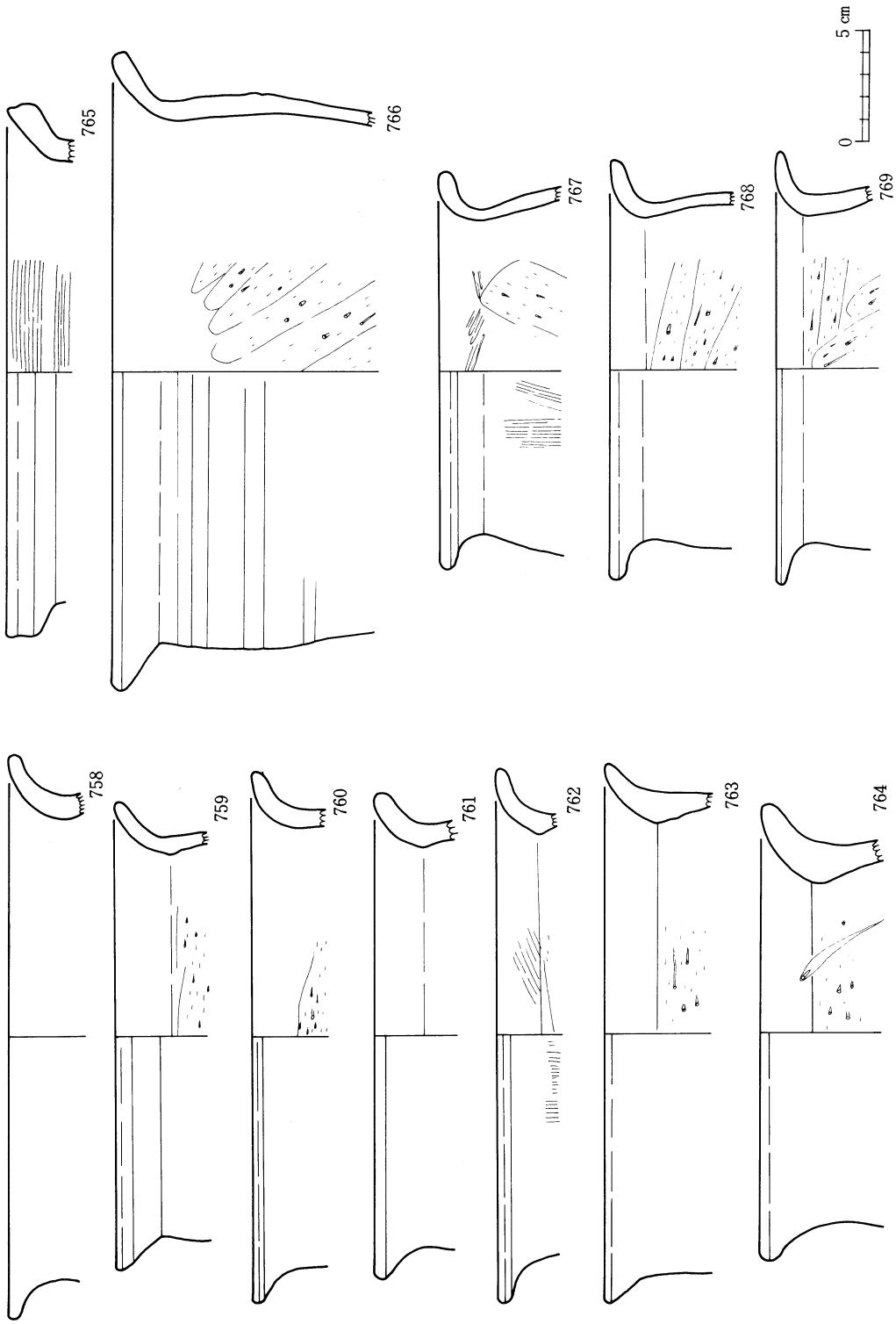
第113図　土師器(4)　(坏・埦)



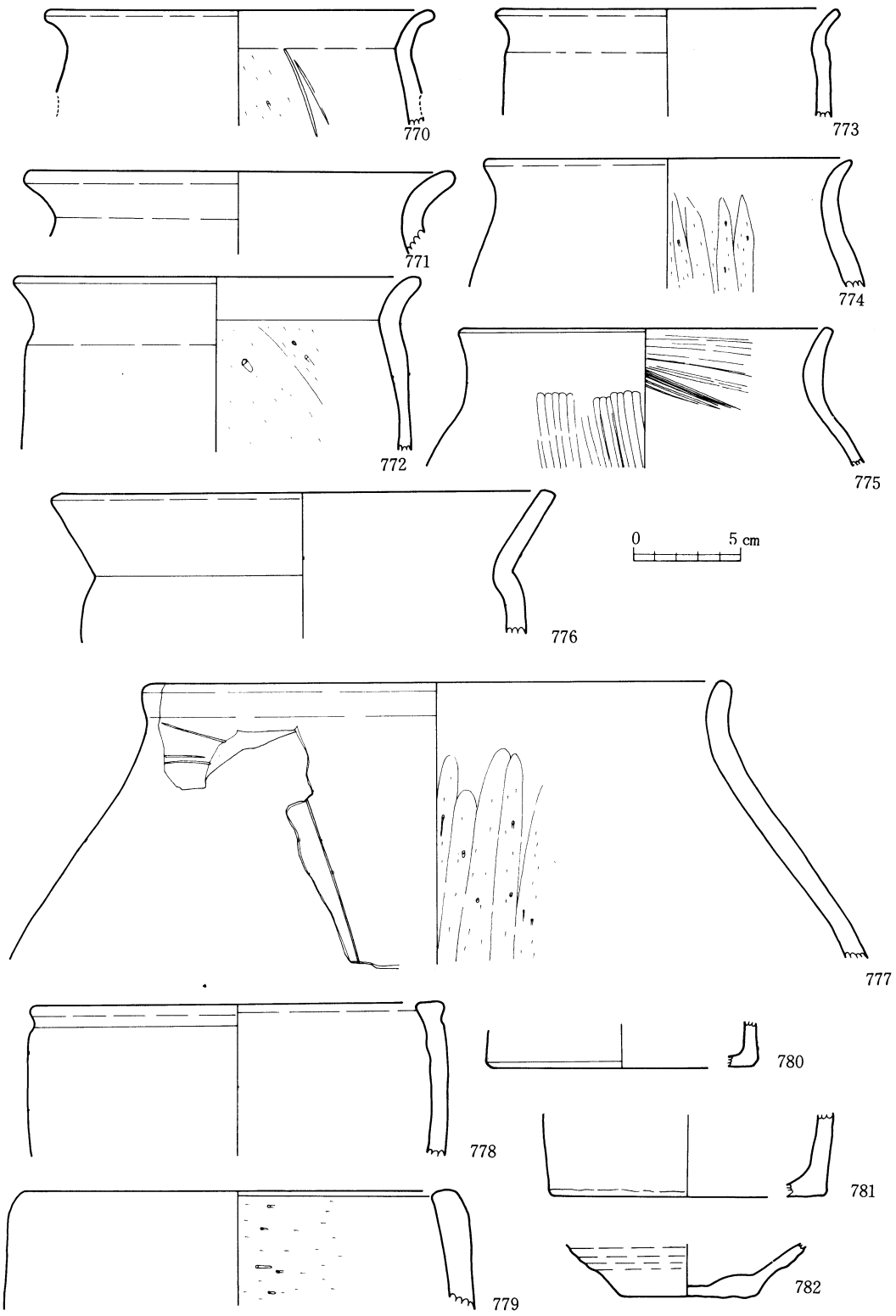
第114図　土師器(5)（埦・蓋・甕）



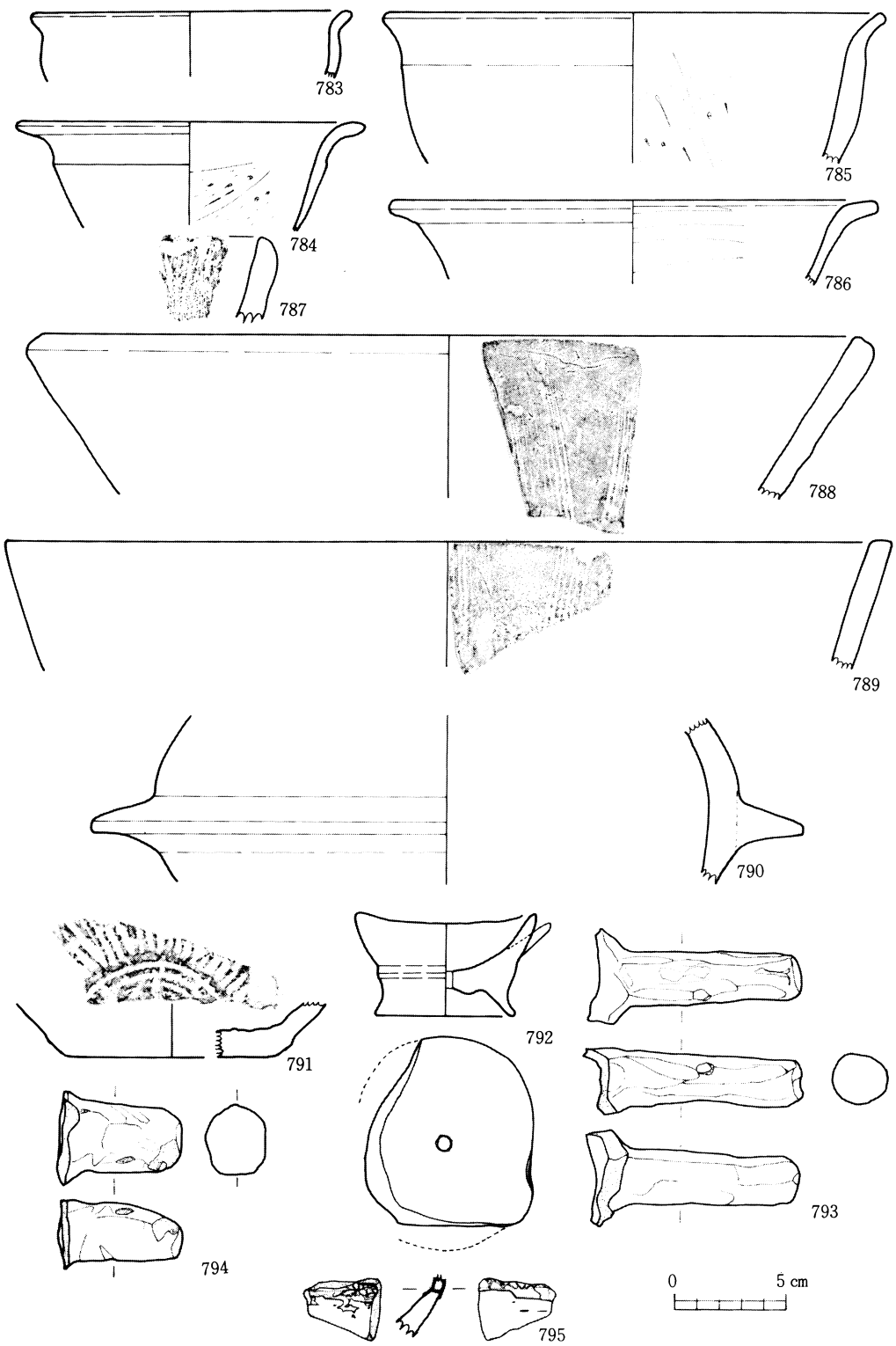
第115図　土師器(6)（甕）



第116図　土師器(7)（甕）



第117図　土師器(8)（甕・甑）



第118図　土師器(9)

図番	器　種	出土区・層	図番	器　種	出土区・層	図番	器　種	出土区・層
636	小　皿	9・10J－1	669	小　皿	17E－1	702	坏	24G－J－1
637	〃	28－G	670	大　皿	21J－1	703	〃	36D－1
638	〃	17F－1	671	〃	21J－1	704	〃	15G－1
639	〃	37D－1	672	〃	21J－1	705	〃	32E－1
640	〃	14H－1	673	〃	29F－1	706	〃	12G－1
641	〃	12－15G	674	〃	33I－1	707	〃	12～15G－1
642	〃	18F－1	675	〃	12G－1	708	〃	15F－1
643	〃	18E－1	676	〃	30I－1	709	〃	25C
644	〃	14I－1	677	〃	29I－1	710	埦	29G
645	〃	14H－1	678	〃	18K－1	711	〃	30G
646	〃	17E－1	679	〃	25I－1	712	高台付埦	20H　№1
647	〃	12I－1	680	坏	12G－1	713	〃	13I－1
648	〃	18C－1	681	〃	12G－1	714	〃	13D－1
649	〃	15K－1	682	〃	12G－1	715	〃	20E－1
650	〃	14J－1	683	〃	12G－2	716	〃	17J－2
651	〃	18D－1	684	〃	12G－1	717	〃	22～23G－1
652	〃	12～15G－1	685	〃	21J－1	718	〃	22H－1
653	〃	13G－1	686	〃	12G－1	719	〃	23H－1
654	〃	14I－2	687	〃	12G－1	720	〃	27G～K
655	〃	15H－1	688	〃	13G－1	721	〃	19K－1
656	〃	17E－1	689	〃	12G－1	722	〃	15I－2
657	〃	13P	690	〃	12G－1	723	〃	19I－1
658	〃	15H－1	691	〃	12G－1	724	〃	18K－2
659	〃	15G－1	692	〃	30E	725	〃	24C－1
660	〃	12G－1	693	〃	H7・№7	726	〃	15I－2
661	〃	14H－1	694	〃	20J－1	727	〃	22B－1
662	〃	18D	695	〃	20J－1	728	〃	27F
663	〃	23C－1	696	〃	23H－1	729	埦	19J－2
664	〃	14F－1	697	〃	13F	730	〃	29D－1
665	〃	19D－1	698	〃	不　明	731	〃	29D－1
666	〃	表　採	699	〃	13D－1	732	〃	29G－1
667	〃	18G－1	700	〃	17K－1	733	〃	25D－1
668	〃	14H－1	701	〃	12G－1	734	〃	29G－1

第9表　土師器出土地区表(1)

図番	器　種	出土区・層	図番	器　種	出土区・層	図番	器　種	出土区・層
735	埦	30F　№2	756	甕	25E－1	777	大　甕	28E－3
736	〃	20D～L－1	757	〃	23I－1	778	甑	16K－2
737	つまみ	13I－2	758	〃	12G－1	779	〃	29G－1
738	〃	20I－1	759	〃	25E－1	780	不　明	15I－1
739	〃	15I－2	760	〃	25C－1	781	〃	25H－1
740	蓋	16I－2	761	〃	25C－1	782	〃	28E－2
741	〃	28H－1	762	〃	12G－1	783	鉢	29G－1
742	〃	12G－1	763	〃	19H－1	784	〃	18J・アゼ
743	〃	13D－1	764	〃	18I－2	785	〃	28E－2
744	〃	13D－1	765	〃	18H－1	786	〃	22I
745	〃	12I－1	766	〃	30F	787	布　痕	7・8H－1
746	〃	13I	767	〃	13G－1	788	すり鉢	36A－1
747	甕	24～25E－2	768	〃	21J－1	789	〃	33D－1
748	〃	24～25E－2	769	〃	24D－1	790	ナ　ベ？	25I－1
749	〃	13D－1	770	〃	12G－1	791	すり鉢？	23A－1
750	〃	13D－1	771	〃	13I－1	792	耳　坏	22J
751	〃	AI－2	772	〃	25J－1	793	把　手	24C－1
752	〃	AK－1	773	〃	28G－1	794	把　手	25G－1
753	〃	20～23H－1	774	〃	12G－1	795	不　明	23A－1
754	〃	18J－アゼ	775	〃	15I－1			
755	〃	19K－2	776	〃	24.25E－2			

第10表　土師器出土地区表(2)

(2)黒色土器　(第119図，796～822)

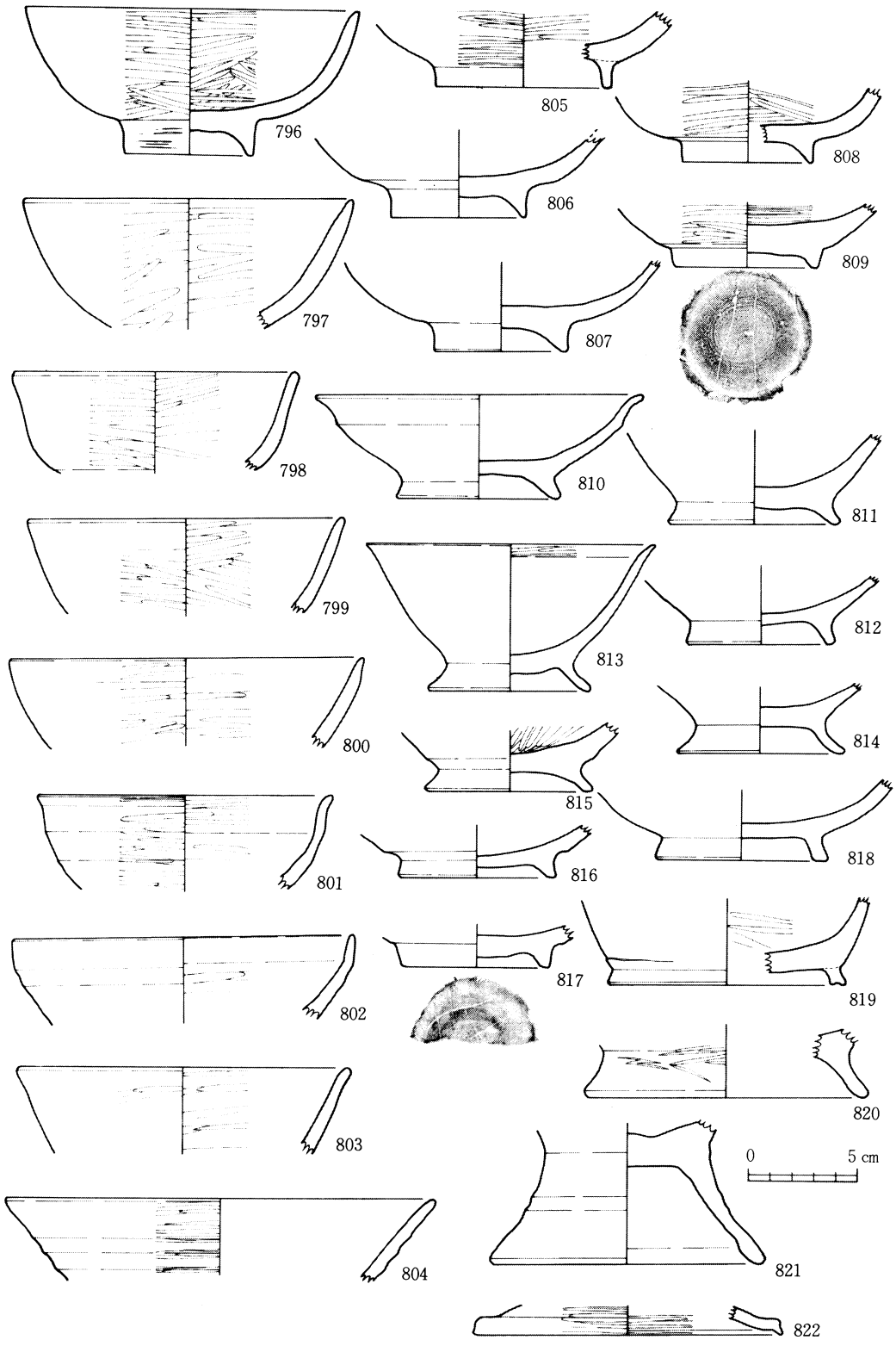
これには内外とも黒くなったもの，内側だけ黒くなったもの（内黒土師器）と，黒くはしていないが両面ともヘラで研磨して光沢を呈しているものとがある。器種は埦が多く，他に坏，蓋，脚台がある。

ほとんど図示したものは,埦であり,内黒土師器である。一片，両面とも，黒色の高台部破片があったが，図示できなかった。

外側の色調は，淡褐色ないし淡赤褐色である。胎土はよく精選されている。内・外面にヘラミガキを施し，高台部は，内・外面とも横ナデされている。底部は一部にヘラ切り痕を残すものもあるが，ほとんどナデである。**796**は，直立した高台部から，体部が内弯して口縁部まで一気に立ち上がる。**797**の埦部も，これに類似する。**805**～ **809**は，**796**と同様の高台部をなす 。**798**～ **801**は，内弯する体部が，口縁部でわずかに外反する。**802**は，逆に口縁部が内側に屈折して，直口となる。**803**・ **804**は，坏であろう。**809**は，底部に窯印を有す。同じ窯印のものが，他に一点みうけられた。**810**は，内・外面ともナデ調整され，内弯する体部が，内側にわずかに屈曲し，外面に稜をつくり，口縁部で外反する。高台部は，外方へ開く。**812**・**813**は，外方へ開く高台部で，内面ヘラミガキ，外面横ナデである。**813**は，器高が高く，高台部も，長く薄くなり，大きく外方へ開く。**814**・ **815**の高台部も，それに似る。**817**は，底部に窯印をもつ。**818**の高台は，角張って，接地面に平坦面をつくる。**819**は高台付坏である。外面は，横ナデで調整され，接地平坦面に凹線をもつ。**820**は，外反した，高い高台部で，外面の一部に，ヘラミガキがみられる。**821**は，脚台で，脚の内，外面は，横ナデ・色調は黄白色を呈す。**822**は，蓋である。体部が屈曲し，内側へ稜を有し，口縁部は，わずかに外へ張り出して，つまみ出される。

図番	器　種	出土区・層	図番	器　種	出土区・層	図番	器　種	出土区・層
796	高台付埦	33Ⅰ－2	805	高台付埦	13Ⅰ－2	814	高台部	24G－1
797	埦・体部	13G－1	806	〃	18Ⅰ	815	〃	23B－1
798	〃	13Ⅰ－1	807	〃	24H	816	〃	12Ⅰ－1
799	〃	16F－2	808	〃	28B～J－1	817	〃	21J－1
800	〃	14H－1	809	〃	14H－1	818	〃	12E－1
801	〃	27K－1	810	〃	12G－1	819	高台付坏	18H－1
802	〃	13Ⅰ－2	811	〃	19Ⅰ－2	820	高台部	Ⅰ－1
803	坏	30H－1	812	〃	19Ⅰ	821	脚台部	29F－1
804	〃	23Ⅰ－P2	813	〃	13E	822	蓋	18Ⅰ－1

第11表　土師器出土地区表(3)


796
805
808
806
809
797
807
798
810
811
799
812
813
800
814
815
801
818
816
802
817
819
820
803
0
5 cm
804
821
822

第119図　黒色土器

(3) 須恵器

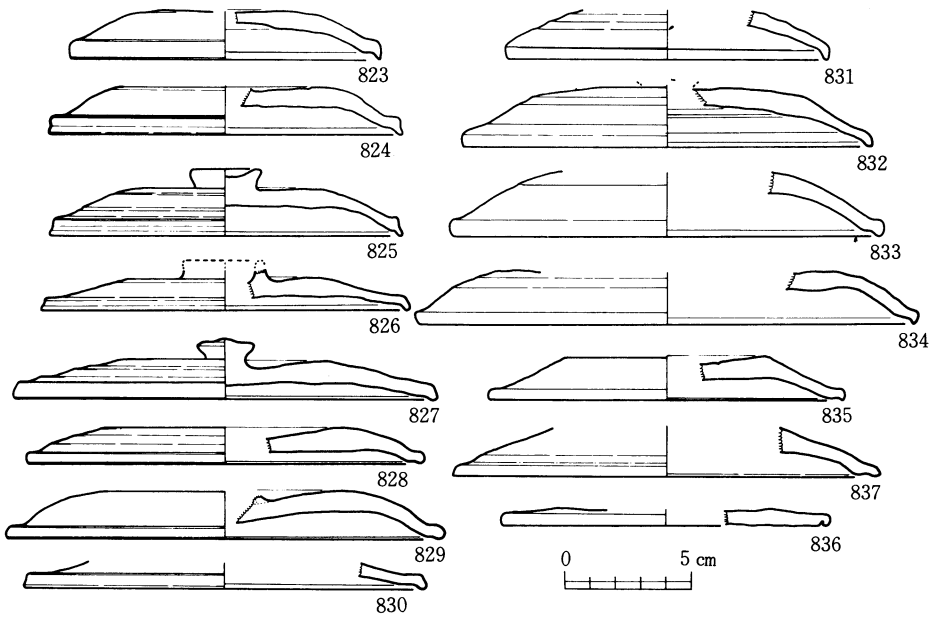
坏（蓋と身）・皿・高坏・壺・甕・鉢などがある。

①坏蓋（第120図823～837）

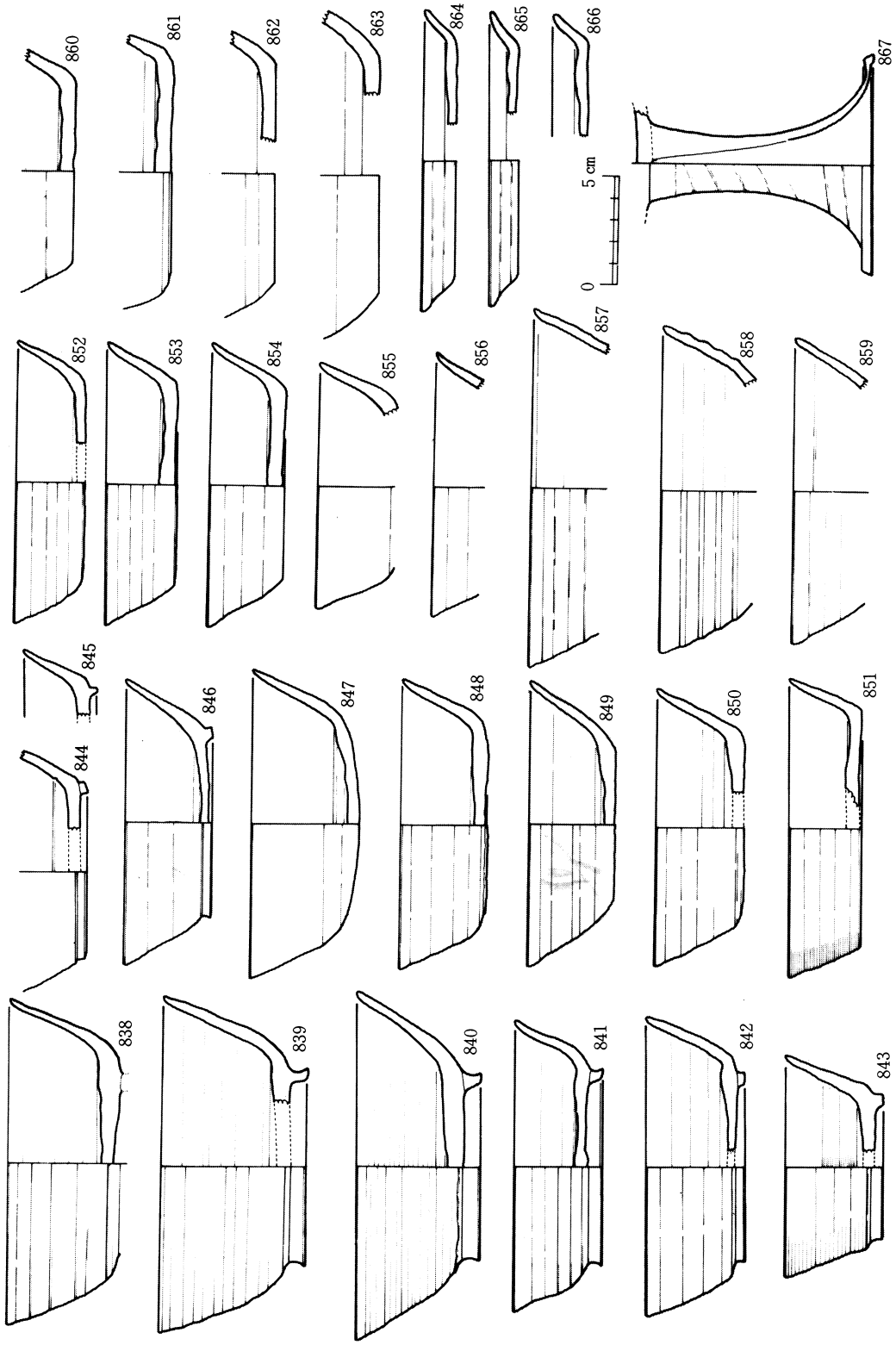
口径の大きさは13cm～19.7cmで，器高にもバラツキがみられる。天井部はほぼ水平あるいはわずかに窪みがみられる。口縁端部は下方へ屈曲させ段を有すが，内側にかえりの付くものはみられずわずかに稜が付く。　口縁部先端は下方あるいは斜め下方につまみ出され口縁端部が三角を呈すもの（823～ 827・ 830）があり（824・825）は口縁部先端がさらに外反を呈す。また，口縁端部が丸味をおびる（828・ 829），口縁端部が内側に屈曲する（831・ 836），体部から口縁部へ直線的につまみ出される（837）がある。蓋の天井部外面は雑なヘラ削り調整がみられる。（824～ 827・ 829）はつまみを有し，なかでも（825）はつまみの頂部が凹みを呈し，（827）は宝珠様のつまみを付す。特記事項として（826・ 828・ 829・ 832・ 833 835）があげられ，内側天井部は研磨された痕跡がみられ，いわゆる転用硯である。この中でも（832）は内側天井部に「朱」が付着し，朱墨用の硯として用いられたものがうかがわれる。

②坏身（第121図838～863）

坏身の形態には高台を付す（838～ 846）と高台を伴わない（847～ 854）の二者がある。口径の大きさや高さには大小の差がみられる。高台付きの坏身については，腰部でゆるやかに屈曲するものが大半であるが，（842～ 845）は屈曲の度合が著しい。口縁部はゆるやかに外反し，ハの字形の貼付高台を付す。高台の場所は底部端に付し，高台の接地面はほぼ水平あるいは外側端部でわずかに浮いている。手法的には，マキアゲ・ミズビキ整形の後，高台を後補



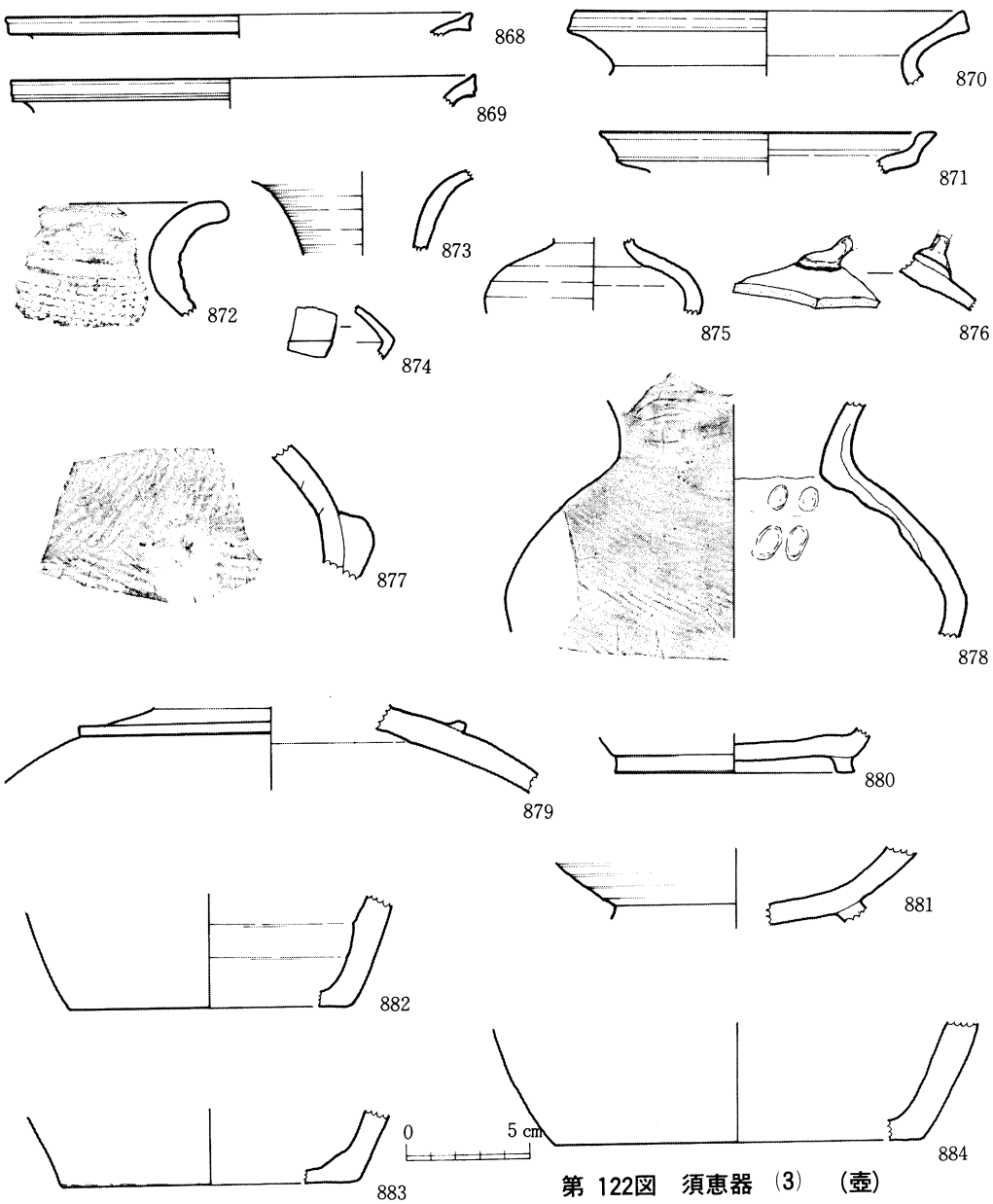
第 120図　須恵器（1）　（坏蓋）



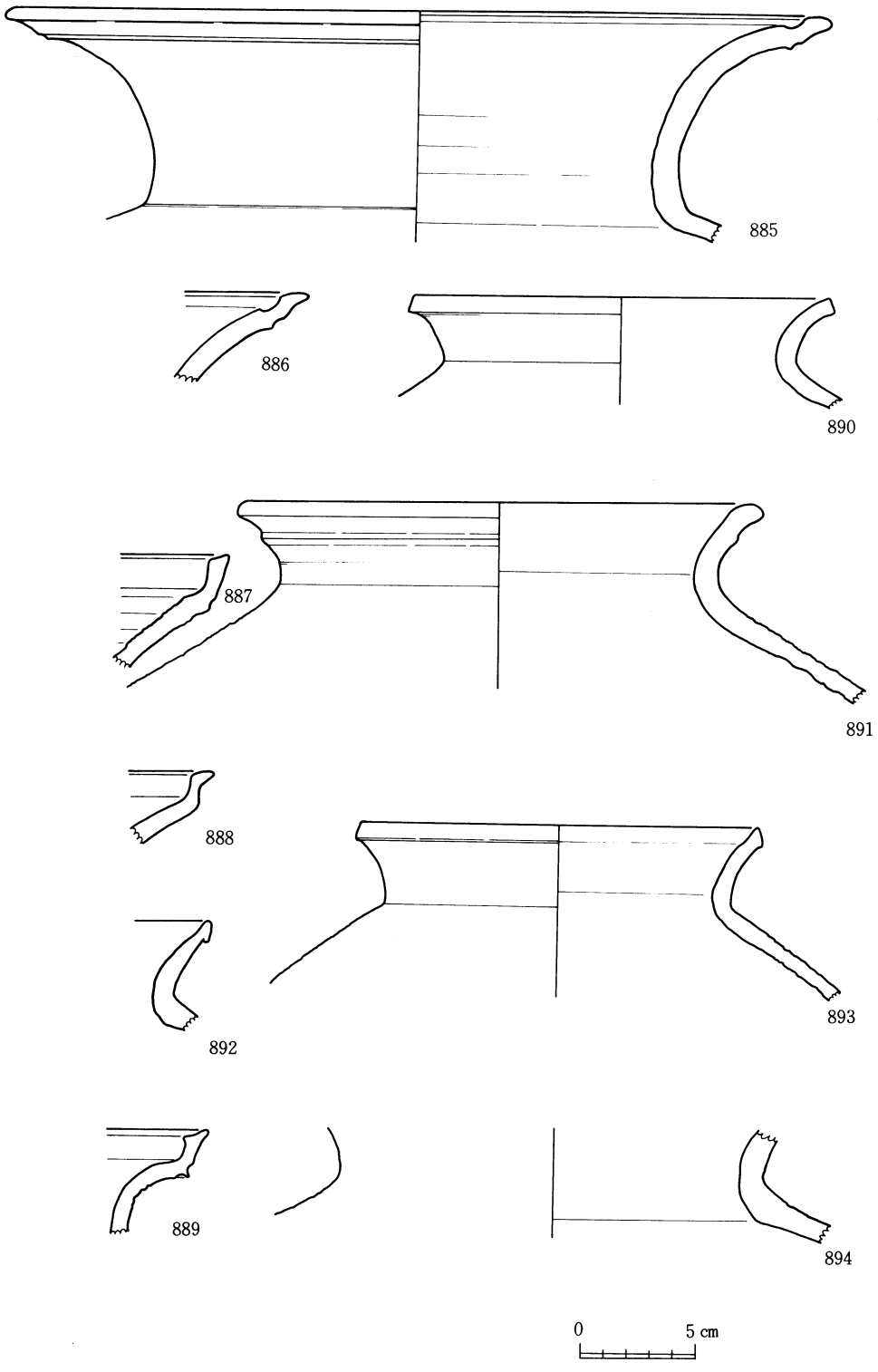
第121図　須恵器(2)　(坏身・皿・高坏)

するもので，高台は回転ヘラ削り調整がみられる。（**840**・**846**）を除いては器面に自然釉がかかっている。（**838**）は器面全体にまんべんなく灰色釉がかかり，さらに黒色班が胡麻状にみられる。（**840**）は胎土・焼成・色調とも異質といえ，胎土には石英・長石・砂粒を多量に含み器面はザラザラした感触をうける。焼成はやや軟弱で，色調は暗灰色を呈す。さらに(**841**)の高台付根・口縁部・外底面は金色に輝き，留意すべき坏身である。（**846**）の体部には火襷らしき痕跡がみられる。

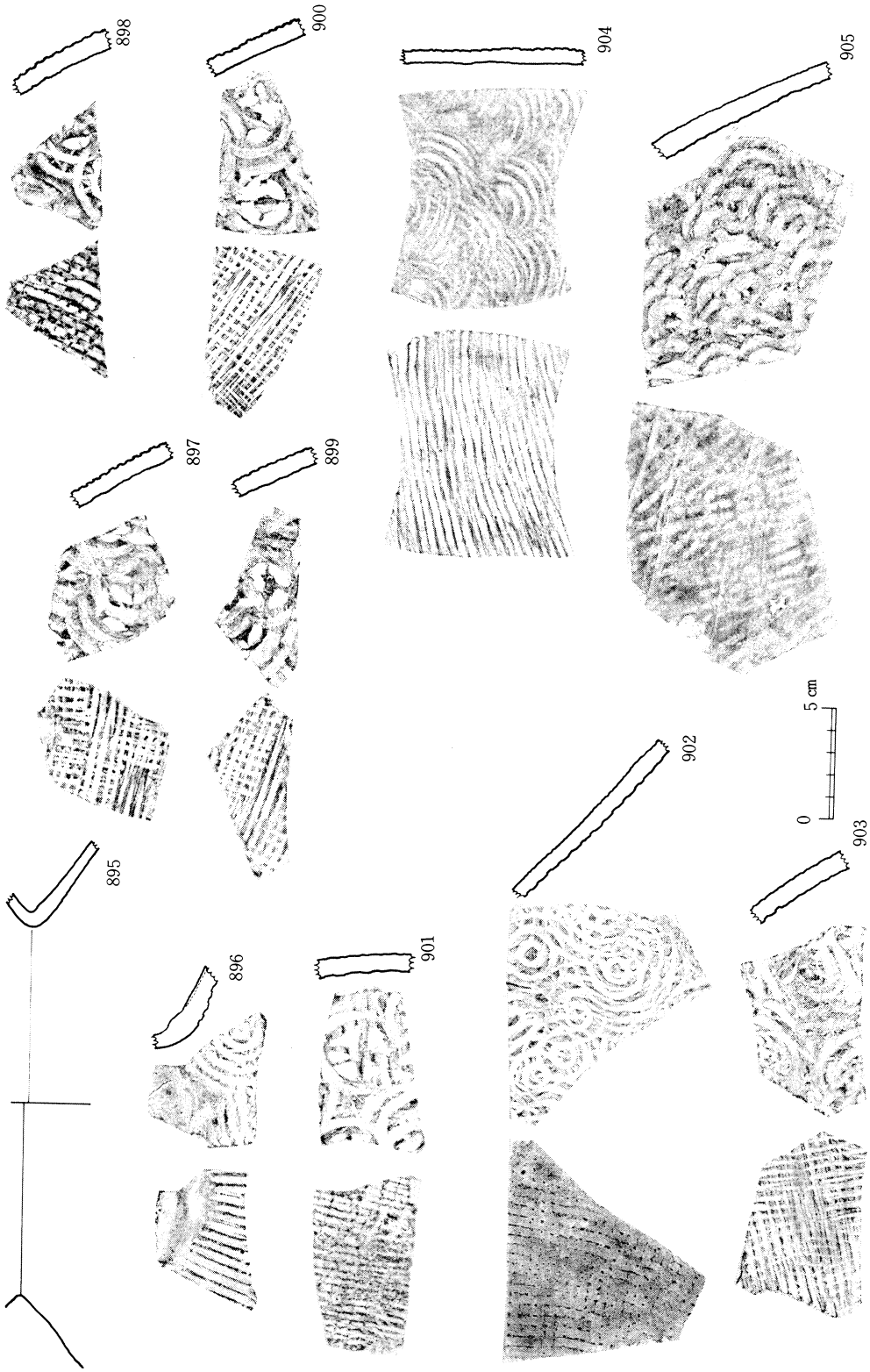
高台を伴わない坏身については，　前者との著しい変化はみられないが，高さが低くなる傾向にある。底部は平底で，回転ヘラ切り未調整の痕跡が明瞭に残る。なお，（**847**）は丸底気



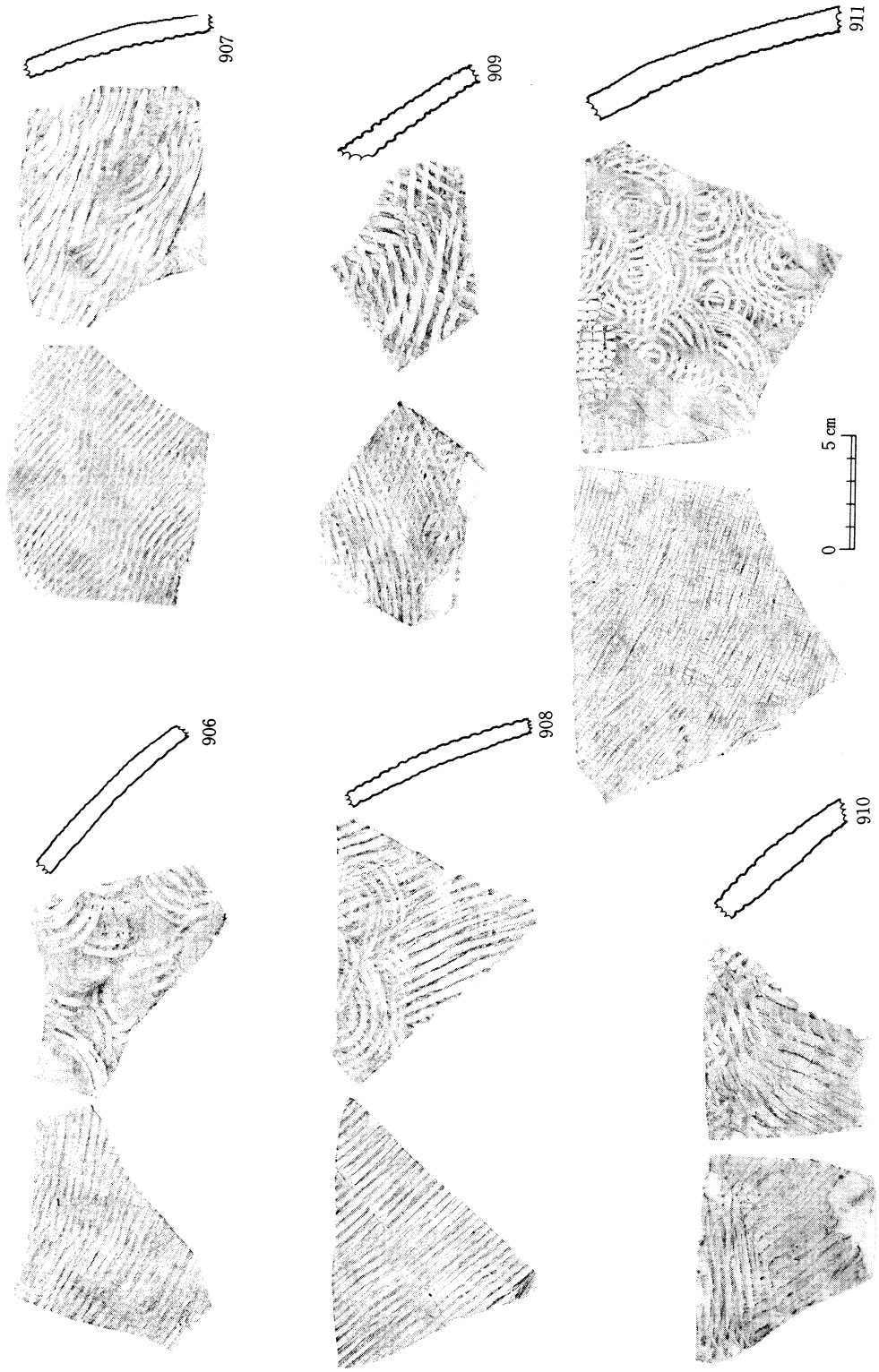
第 122図　須恵器 (3)　(壺)



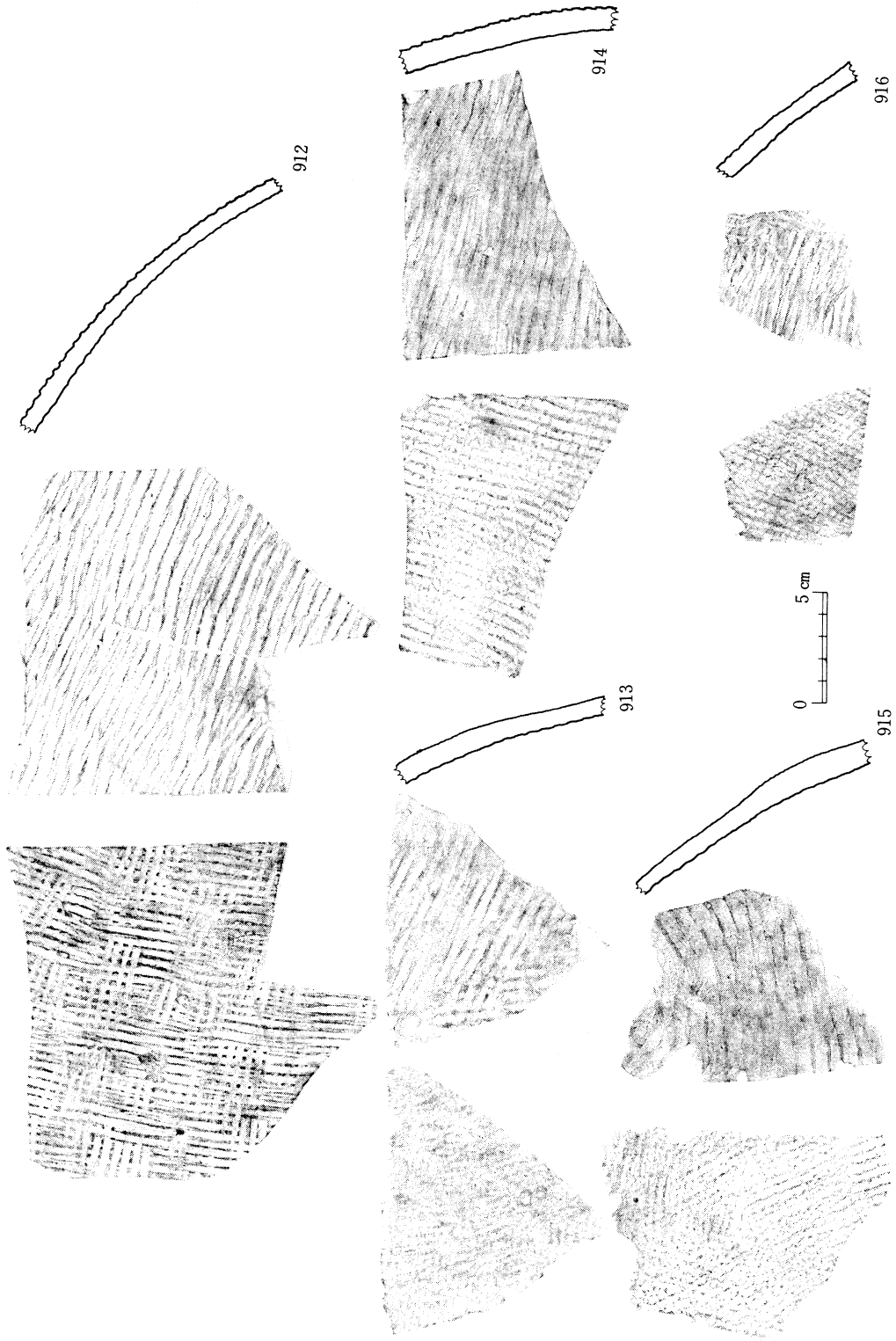
第123図　須 恵 器(4)　(かめ口縁)



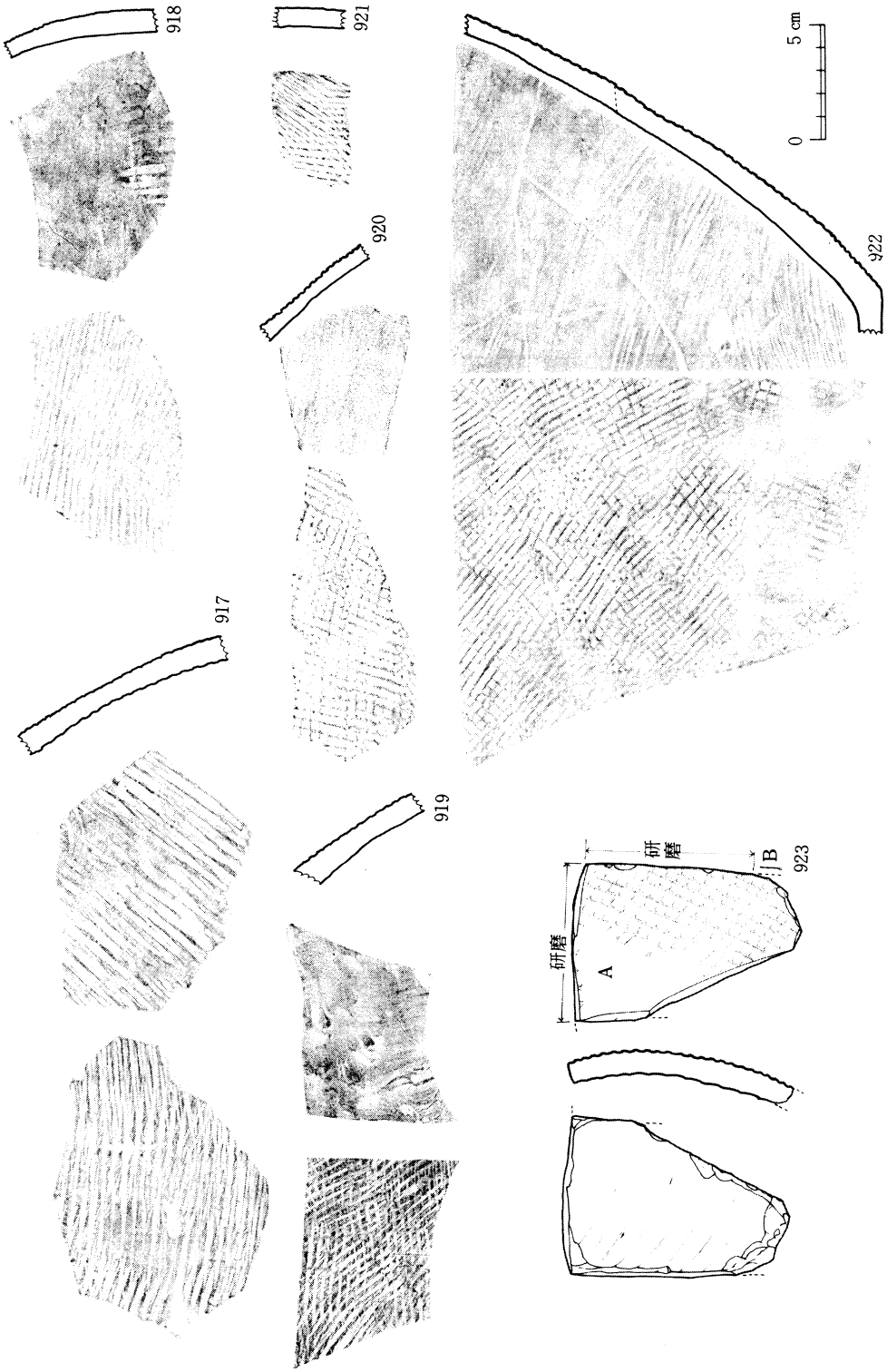
第124図　須 恵 器(5)　(かめ)



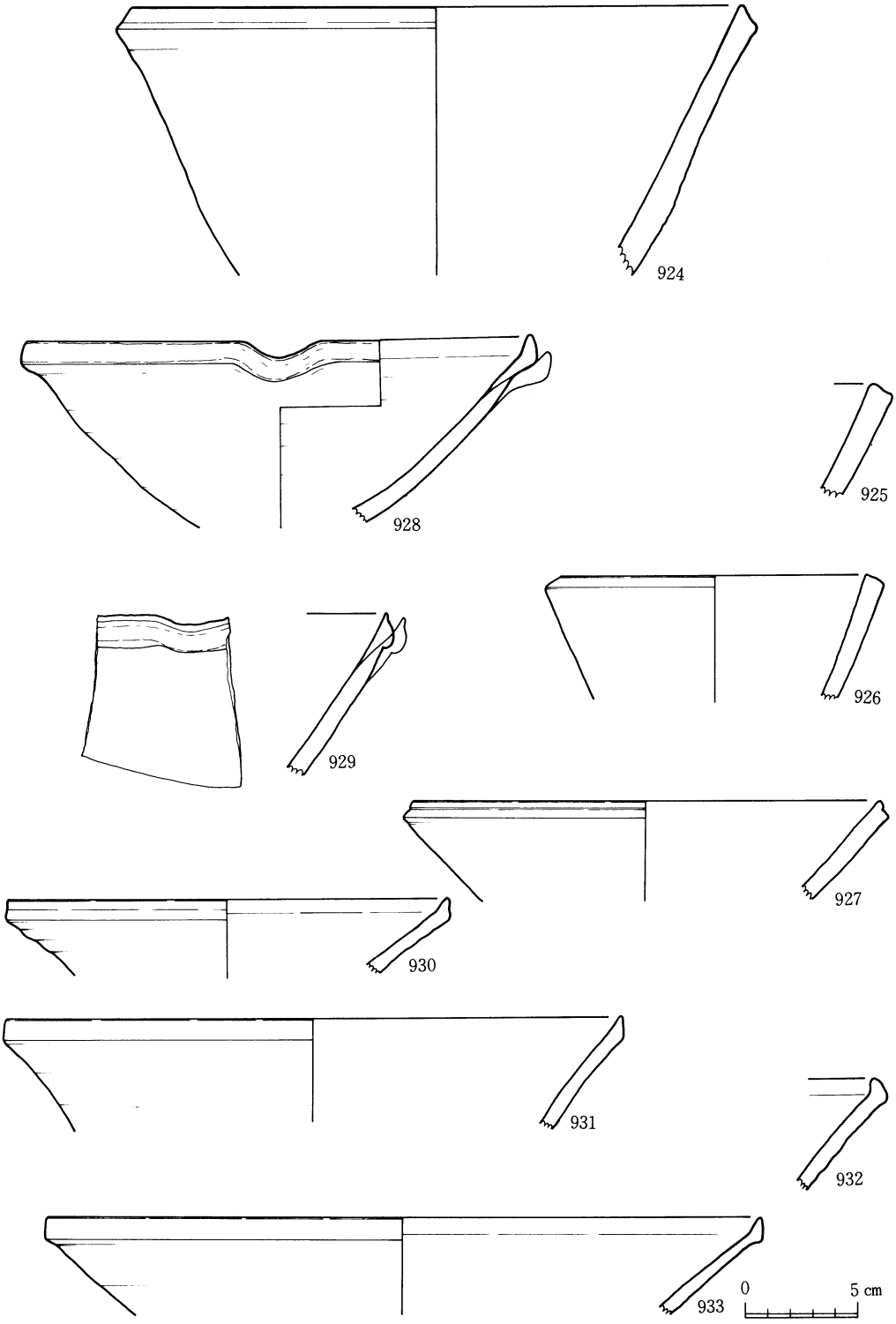
第125図　須 恵 器(6)　(かめ)



第126図　須 恵 器(7)　(かめ)



第127図　須 恵 器(8)　(かめ)



第128図　須 恵 器(9)　(鉢)

味である。(849) の体部には火襷らしい痕跡がみられる。（ 855～ 859）は坏身口縁部片，（ 860～ 863）は高台の付かない坏身底部片である。

③皿（第 121図 864～ 866）

皿の口径は坏の大きさに比して大差はない。（ 864）は口径が14cm，（ 865）は13.7cmを測る。口縁部は外反する。底部は平底で，やや上げ底気味な (865) もみられる。

④高坏（第 121図 867）

高坏の脚部で坏部は欠落している。脚部はラッパ状に開き，端部でやや斜めにつまみ出しを行い内外ともに明瞭な稜を生す。脚体部には整形時の指腹圧痕が明瞭に残る。

⑤壺（第 122図 868～ 884）

小片の為，器形などは定かではないが，大型・小型に大別される。（ 868～ 870）は頸部から口縁にかけ大きく外反し，口縁端部は小さく内行し，さらに外反する。（ 871）は頸部から

図面番号	器種	出土区・層	口径 cm	高さ cm	底部径 cm	備　考
823	蓋	12－F－1	12.3			
824	〃	18－H－1	14.1			転用硯
825	〃	12－I－1	14.1	2.2		転用硯
826	〃	22－L－1	14.6			転用硯？
827	〃	30－F－1	16.8	2.4		
828	〃	19－I	15.7			土坑1転用硯
829	〃	15－D－1	17.3			転用硯
830	〃	10－I－1	16.1			
831	〃	12－F－1	12.7			
832	〃		16.2			転用硯(朱墨)
833	〃	13－D－1	17.1			転用硯
834	〃	16－D	19.8			Pit 1
835	〃	17－C－1	14.1			転用硯
836	〃	9－1	13			Pit 1
837	〃	9・10－C D－1	17.1			
838	坏	12－G－1	15.1			
839	〃	21－I－1	16.1	6.7	9.3	
840	〃	28－F－1	16.2	5.8	8.7	(№1)？
841	〃		13.5	4.1	9.2	金粉
842	〃	14－E－1	13.8	4.6	8.7	
843	〃	30－F－1	10.3	4.5	6.7	
844	〃	12－G－1			8.2	

図面番号	器種	出土区・層	口径 cm	高さ cm	底部径 cm	備　考
845	坏	12－H－1				
846	〃	12－G－1	13.2	4	8.8	
847	〃	12－G－1	4.2	5		
848	〃	18－E－1	13.4	4		
849	〃	19－I－1	13.2	4		土坑1
850	〃	15－F－1	12.8	4.1		
851	〃	16－E－1	13.8	3.4		
852	〃	13－D－1	13.1	3.2		
853	〃	12－G－1	13.1	3.3		
854	〃	12－G－1	13.1	3.5		
855	〃	17－I－1	11.4			
856	〃	28－G－1	12.3			
857	〃	20・23G・H－1	16.7			
858	〃	H－3北東	15.1			
859	〃	28－F－1	14.2			
860	〃	13－E－1			8.7	
861	〃	13－H－1			9.5	
862	〃	13－G－1			10.2	
863	〃	11－G－1			11	
864	皿	20・23G・H－1	14	1.5	11	
865	〃	22－I	13.8	1.4	10.8	Pit 2
866	〃	19－G－1		1.7		

第12表　須恵器一覧表(1)

図面番号	器種	出土区・層	口径	高さ	底部径高さ	備考
867	高坏				10.2	
868	壺	22－I	19.1			Pit 1
869	〃	28－E－1	19			
870	〃	31－E－1	16			
871	〃	22－J－1	13.7			
872	〃	32－B－1				
873	〃(小型)	14－G				Pit 2
874	〃	試掘1				
875	〃	33－E－1				
876	壺	9・10 J－1				
877	〃	26－G－1				
878	〃	28－G				土坑
879	〃	12－G－1				
880	〃	20－J－1			9.8	
881	〃	25－E－1				
882	〃	20・23G・H－1			11.5	
883	〃	24－G－1			12.3	
884	〃	12－H－1				
885	〃	26－G－1	36			
886	〃	13－D－1				
887	〃	19－I－1				
888	〃	18－J－あぜ				
889	〃	2～4D－1				
890	〃	30－E－1	18.5			
891	甕	13－D－1	23			
892	〃	30－F－1				
893	〃	22－G－1	17.9			
894	〃	24－B－1				
895	〃	29－F－1				
896	〃	28－F－1				
897	〃	18－J－1				車輪文叩き
898	〃	13－H－2				〃
899	〃	12－G－1				〃
900	〃	22－J－1				〃

図面番号	器種	出土区・層	口径 cm	高さ cm	底部径高さ cm	備考
901	甕	12－G－1				
902	〃	21－J－1				
903	〃	28－G－1				
904	〃	13－I－1				
905	〃	19－G－1				
906	〃	25－I－1				
907	〃	19－K－1				
908	〃	30－G－1				
909	〃	21－E－1				
910	〃	24－G－1				
911	〃	22－F－1				
912	〃	13－H－1				
913	〃	13－D－1				
914	〃	23－B－1				
915	〃	23－B－1				
916	〃	14－B－1				
917	〃	24・25－E－1				
918	〃	25－I－1				
919	〃	24－I－1				
920	〃	25－I－1				
921	〃	34－a－1				
922	〃	12－J－1				土坑1
923	〃	24－D－1				猿面硯
924	鉢	33－B－1	27.5			
925	〃	25－E－1				
926	〃	13－L－1	13.2			
927	〃		21.3			
928	〃	15－H	23			土坑1
929	〃	18－F－1				
930	〃	12～15－G－1	20			
931	〃	12－G－1	27.8			
932	〃	36－C－1				
933	〃	18－E	32			Pit 3
934	〃	17－E－1				

第13表　須恵器一覧表(2)

大きく外反し垂直気味に屈曲し，さらに端部で大きく外反する。（873～ 875）は小型壺である。（876・ 877）の肩部・胴部には把手が付されている。底部は貼り付けヘラ削り高台の（880・ 881）と平底の（882～ 884）がある。

⑥甕（第 123～ 127図）

長頸と短頸の広口壺がある。（885）は口径36cmの広口壺で（886）同様，頸部から垂直気味に大きく外反し，口縁部から口縁端部にかけ屈曲し，さらに外反する。口縁部に凹線が施されている。（887・ 889）は口縁部で外反し，口縁端部は垂直に屈曲している。さらに（889）は屈曲部に舌状の帯が廻らされている。（890～ 893）は短頸壺である。外面には格子目叩きと平行線状叩き（904～ 911・ 917，918）の二種類がある。内面には同心円叩き（891～894 892・ 906），同心円の中心部に⊕の印をみるいわゆる車輪文（897～ 901），同心円と平行線状の組合せ（907～ 910），同心円と平行線状・格子目の叩き（911），平行線状叩き（912～922)がある。なお（895）は無文でミズビキによる調整痕がみられる。（920～ 922）の体部断面には縦長に稿状の互層がみられ，留意すべき胎土といえる。

⑦硯

転用硯（第 120図 826・ 828・ 829・ 832・ 833・ 835）　須恵器の蓋の項で述べたので省略する。

猿面硯（さるづら）（第 127図 923）

須恵器の甕の破片を利用したもので，外面は格子目，内面は平行線状の叩きがみられる。破片の為・原形をとどめていないが，図のＡ・Ｂにおいて丁寧に研磨がおこなわれている。なお内面は研磨痕がみられず，未使用の硯と想定される。

⑧鉢（第 128図 924～ 933）

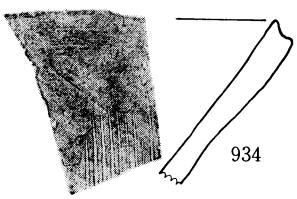
鉢は，スリ鉢・こね鉢に大別される。

スリ鉢（924・ 925），（924）は焼成が弱く白色を呈し，（925)は灰色で堅固である。

こね鉢（926～ 933），器形は体部から口縁部へかけて直線的に移行し，口縁端部が平坦となる（925～ 927）と，わずかに外反し，若干上位へつまみ出し三角形を呈す（928～ 933）がある。又，こね鉢には（928・ 929）の片口のあるものもある。（931～ 933）の口縁部には暗灰色を呈する帯状のしみこみの痕跡が巡らされ，他の鉢と異質のものと思われる。

(4)　陶器（第 129図 934）

スリ鉢の残片である。口縁部は直行し，平坦な口唇部に凹線が廻らされている。



第 129図　陶器

(5) 磁器

磁器も多く出土しており，青磁と白磁に分かれる。分類は西ノ平遺跡とあわせて行なった。

①青磁

埦が4種類，皿が2種類出土している。その数は埦が 210点，皿が34点みられた。なおここではⅠ類からⅤ類だけの数字である。

ここでの分類はⅠ～Ⅹ類に分けた。Ⅰ類は越州窯系青磁，Ⅱ類は同安窯系青磁，Ⅲ類～Ⅹ類までが竜泉窯系青磁である。成岡遺跡の埦と皿は下記のとおりに出土した。

類……	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	
埦の数	8	25	119		66		26		69	5	……計 318点
皿の数		24	10				16				……計　50点

Ⅰ類

Ⅰ類は越州窯系青磁で8点出土している。図に上げたのはそのうちの4点である（ **935**～ **938**）。全体として施釉が少なく淡緑色を呈している。磁胎は灰褐色である。高台は幅が広く浅い（ **937**・ **938**）。とくに **937**は高台部が上げ気味である。

Ⅱ類

Ⅱ類は同安窯系青磁である。埦は25点　皿は24点出土している。図に上げたのは **939**～ **946**が埦で，**984**～ **994**が皿である。この類は同安窯系青磁で内体面・外体面に櫛描文を有するものである。釉色は青褐色を呈し，磁胎は灰褐色・灰色である。埦は高台が高く露胎である。露胎部は外体部の下部までみられる（ **945**・ **946**）。内面体部と内面見込みの界は沈線状のくびれがみられる。皿は上げ底気味で露胎である。釉色は青褐色を呈し，磁胎は灰褐色・灰色であり，櫛描文もみられる。

Ⅲ類

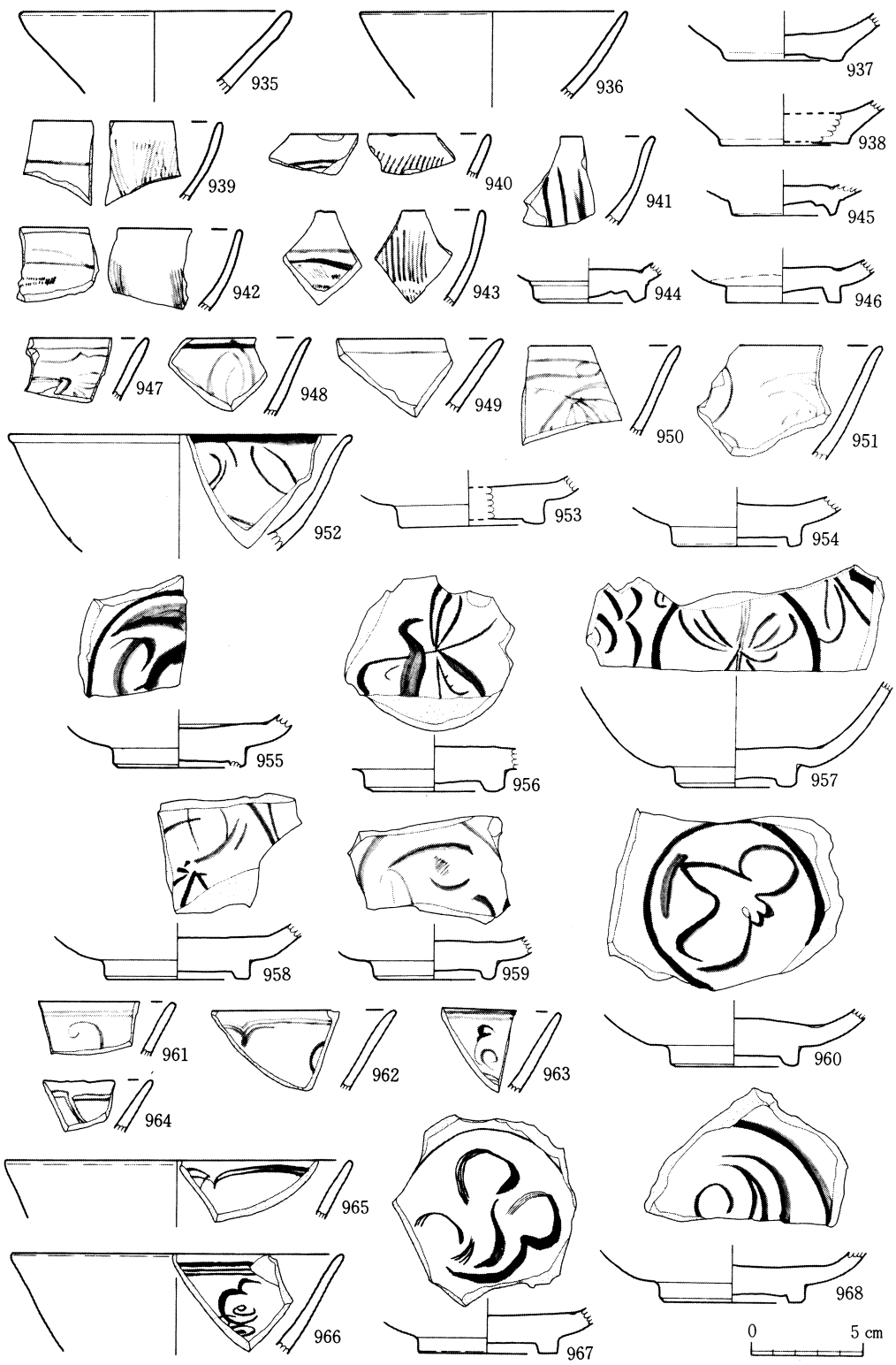
Ⅲ類は竜泉窯系青磁の中で内面花文・内面雲文・無文と分けそれぞれａ，ｂ・ｃに分けた。

Ⅲ類は埦が 119点，皿が10点出土し， **947**～ **971**が埦で，皿は **995**～ **999**である。　その中で内面花文は **947**～ **960**（ａ類），内面雲文があるものは **961**～ **968**（ｂ類），無文は **969**～ **971**（ｃ類）を図に示した。

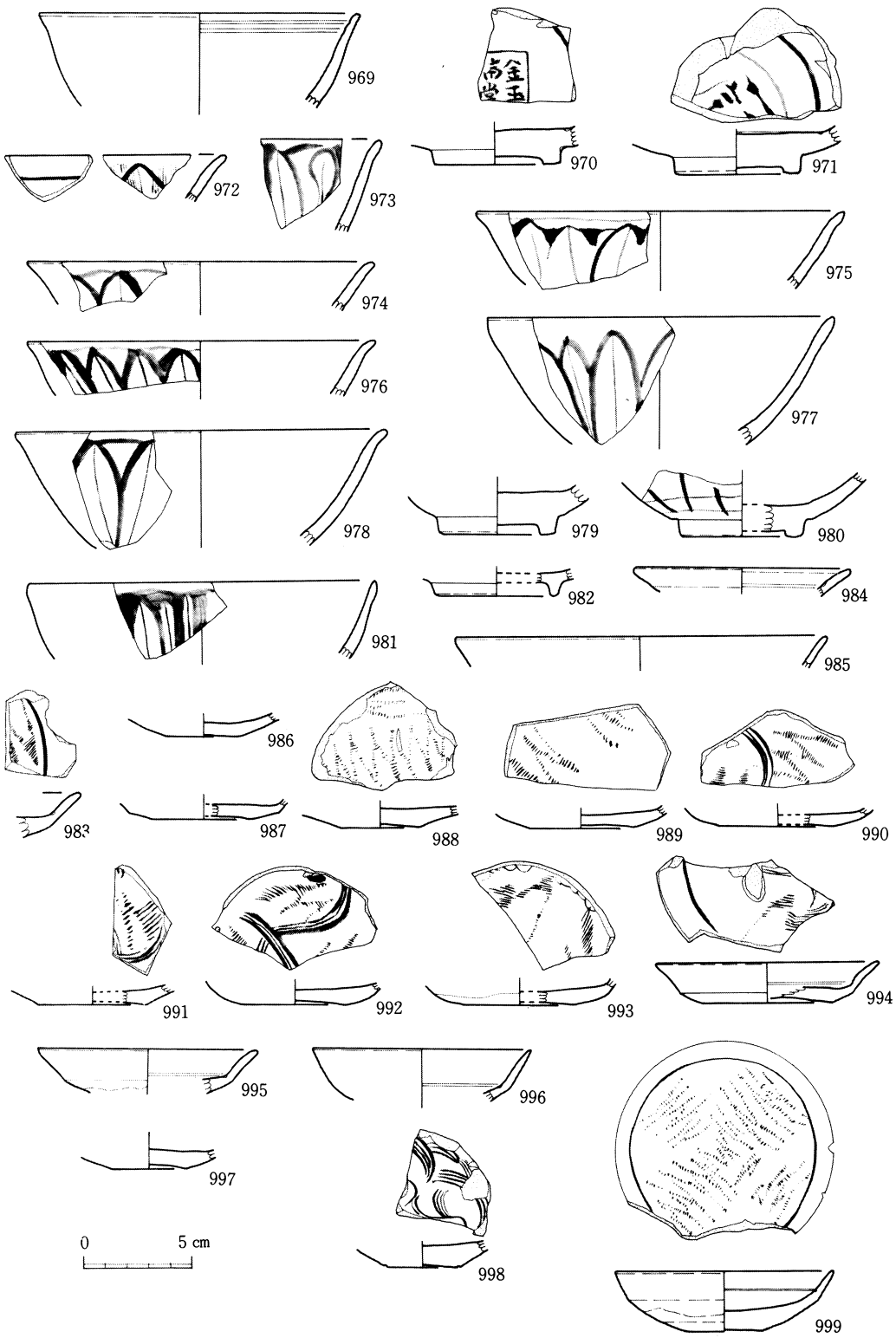
埦は釉色が緑褐色を呈し，磁胎は灰褐色・灰色である。高台は高く，施釉も高台までみられる。皿の磁胎・釉色は埦と同様であり，底は上げ底気味である。

Ⅴ類

Ⅴ類は竜泉窯系青磁の鎬蓮華文である。埦のみ66点出土し， **972**～ **980**に一部を図に上げた。釉色は **981**が緑色， **978**・ **980**が暗緑褐色， **972**・ **973**が青褐色，他は緑褐色を呈している。高台は高く，外底見込みは露胎である。施釉は高台まであり，外体面は鎬蓮華文を施している。 **972**は鎬蓮華文の他に櫛描文がみられる。 **972**～ **978**の鎬蓮華文は明確となっているが，**981**は鎬蓮華文がくずれて角が丸味をもっている。内面は見込み部と内体面の界は明確な折れ線がつく。



第130図　青　磁(1)　(埦1・2・3a・3b類)



第131図　青　磁(2)　(埦3c・5　Ⅲ2・3類)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
935	13G－1	碗	1	983	18C－1	皿	2	961	20B－1	碗	3		14K－1	碗	3
936	35F－1 15J－溝	碗	1	985	33G－2	皿	2	962	13G－1	〃	3a		14G－1	〃	3b
937	26G－1 18H－1	碗	1	987	24G－P1	皿	2	963	34A－1	〃	3		15J－P2	〃	3
938	30I	碗	1	988	24J－1	皿	2	964	16・17D－1	〃	3		15G－1	〃	3b
	20～23G－1	碗	1	989	14J－溝	皿	2	965	13I－1	〃	3		15H－土1	〃	3a
	20K－1	碗	1	990	14J－2	皿	2	966	24G－1	〃	3		15F－1	〃	3a
	23A－1	碗	1	991	18B－1	皿	2	967	24G－1	〃	3a		15D－1	〃	3
	23J－1	碗	1	992	28J－1	皿	2	968	16C～F－1	〃	3		15M－土1	〃	3b
939	32I－1	碗	2	993	12G－1	皿	2	969	16D－1	〃	3c		15I－1	〃	3a
940	29G－1	碗	2	994	13D－1	皿	2	970	20A－1	〃	3c		15J－1	〃	3a
941	29F－1	碗	2		34C－1	皿	2	971	12F－1	〃	3c		15D－1	〃	3a
942	24B－1	碗	2		34C－1	皿	2		9F－1	〃	3a		16M－P3	〃	3
943	30F－1	碗	2		38d－1	皿	2		12G－1	〃	3a		16～26表採	〃	3a
944	35F－1	碗	2		32E－1	皿	2		12H－1	〃	3a		16～26表採	〃	3a
945	26G－1	碗	2		12～15G－1	皿	2		12F～G－1	〃	3b		17K－1	〃	3a
946	16D－1	碗	2		12～15G－1	皿	2		12F～G－1	〃	3b		17G－1	〃	3a
	23A－1	碗	2		13G－1	皿	2		12F～G－1	〃	3b		18C－1	〃	3b
	38B－1	碗	2		13G－1	皿	2		12G－1	〃	3a		18～19FG	〃	3b
	25C－1	碗	2	986	33B－1	皿	2		12～15G－1	〃	3a		18H－土3	〃	3a
	25C－1	碗	2	947	13D－1	碗	3a		13F	〃	3b		18E－1	〃	3a
	31C－1	碗	2	948	14F－1	〃	3a		13J－1	〃	3a		18E－1	〃	3a
	18D－1	碗	2	949	13G－1	〃	3b		13D－1	〃	3a		18～19FG	〃	3a
	18E－1	碗	2	950	13D－1	〃	3a		13H－1	〃	3b		18E－1	〃	3a
	30E－1	碗	2	951	13G－1	〃	3a		13F－1	〃	3a		18F－1	〃	3a
	15F－1	碗	2	952	28E－P5	〃	3a		13K－1	〃	3a		19D	〃	3a
	18～19FG	碗	2	953	16D－1	〃	3a		13G－1	〃	3b		19J－2	〃	3a
	24G－1	碗	2	954	23J－1	〃	3a		13K－1	〃	3b		19C～F－1	〃	3
	35G－1	碗	2	955	24D－1	〃	3a		13I－2	〃	3b		19J－2	〃	3a
	12H－1	碗	2	956	20B～J－1	〃	3a		13J－1	〃	3b		19I－2	〃	3a
	14H－1	碗	2	957	24G－1	〃	3b		14J－溝	〃	3a		19J－2	〃	3a
	17H－1	碗	2	958	24J－1	〃	3a		14I－1	〃	3a		21～22I－1	〃	3b
	14K－1	碗	2	959	14H－1	〃	3a		14K－1	〃	3		22D－1	〃	3a
984	表採	皿	2	960	25I－1	〃	3a		14D－1	〃	3a		24E－1	〃	3a

第14表　青磁出土地区表(1)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	24CF－1	碗	3a		試－1	碗	3		13G	碗	5		27G－1	碗	5
	24B－1	〃	3a		試－2	〃	3a		9・10CD	〃	〃		30F－1	〃	〃
	25I－1	〃	3a		表採	〃	3a		13G－1	〃	〃		31D－1	〃	〃
	25C－1	〃	3		表採	〃	3		13H－1	〃	〃		31E－1	〃	〃
	27F－1	〃	3a	995	29D－1	Ⅲ	3		13H－1	〃	〃		31E－1	〃	〃
	27I－1	〃	3c	996	25I－1	〃	〃		13I－1	〃	〃		31H－1	〃	〃
	28E－P8	〃	3	997	24I－1	〃	〃		13L－1	〃	〃		33B－1	〃	〃
	28G－1	〃	3a	998	18J－1	〃	〃		13L－1	〃	〃		35C－土	〃	〃
	28B－1	〃	3	999	23F－1	〃	〃		12－15G	〃	〃		35C－土	〃	〃
	28F－1	〃	3		13F－1	〃	〃		14E－1	〃	〃		35D－1	〃	〃
	29E－2	〃	3b		14F－1	〃	〃		14F－土坑	〃	〃		35F－1	〃	〃
	29E－1	〃	3a		17J－土1	〃	〃		14H－1	〃	〃		35G－1	〃	〃
	29G－1	〃	3b		20E－1	〃	〃		14H－1	〃	〃		34A－1	〃	〃
	29E－1	〃	3		35D－1	〃	〃		14H－2	〃	〃		36C－1	〃	〃
	30D－1	〃	3a	972	32F－1	碗	5		14I－1	〃	〃		36D－1	〃	〃
	31G－1	〃	3a	973	15G－1	〃	〃		14K－1	〃	〃		36D－1	〃	〃
	31G－1	〃	3	974	13L－1	〃	〃		15EF－2	〃	〃		37a－1	〃	〃
	32C－P9	〃	3	975	15K－2	〃	〃		15F－1	〃	〃		37A－1	〃	〃
	32E－1	〃	3a	976	13L－1	〃	〃		15G－1	〃	〃		38a－1	〃	〃
	32E－1	〃	3a	977	12L－1	〃	〃		15H－土	〃	〃		38A－1	〃	〃
	32E－1	〃	3a	978	24B－1	〃	〃		15I－1	〃	〃		38A－1	〃	〃
	32E－1	〃	3a	979	20B－J	〃	〃		16D－土	〃	〃		38B　P－1	〃	〃
	32B－1	〃	3a	980	25H－1	〃	〃		17M－1	〃	〃		表採	〃	〃
	33C－1	〃	3b		9F－1	〃	〃		18F－1	〃	〃		〃	〃	〃
	34C－1	〃	3a		12F－1	〃	〃		18・19FG	〃	〃		〃	〃	〃
	34F－1	〃	3a		12G－1	〃	〃		18H－土	〃	〃	1130	19K－P6	〃	7a
	35D－1	〃	3		12G－1	〃	〃		18H－土	〃	〃	1131	15I－1	〃	7b
	36B－1	〃	3a		13D－1	〃	〃		18H－1	〃	〃	1132	36B－1	〃	7b
	36A－1	〃	3b		13D－1	〃	〃		18I－1	〃	〃	1133	34G－1	〃	7b
	36F－1	〃	3		13D－1	〃	〃		19JK－1	〃	〃		12E～G－1	〃	7
	37C－1	〃	3a		13F－1	〃	〃		23C－1	〃	〃		12F－1	〃	7a
	37C－1	〃	3a		13F－1	〃	〃		23J－1	〃	〃		12I－1	〃	7b
	38C－1	〃	3c		13・14F	〃	〃		24・25E－2	〃	〃		13H－1	〃	7b

第15表　青磁出土地区表(2)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	13F－1	碗	7b		36A－土坑	皿	7		29H－1	碗	9		25G－1	碗	9b
	14I－1	〃	7b	1134	15H－1	碗	8a		31C－1	〃	〃		17G－1	〃	9
	16G－1	〃	7b	1135	35D－1	〃	9a		15I－1	〃	〃		29D－P8	〃	9
	18C	〃	7a	1136	29F－1	〃	〃		18H－1	〃	〃		24I－1	〃	9b
	18J－1	〃	7b	1137		〃	〃		22B－1	〃	〃	1150	21・22I－1	〃	10
	18～19FG	〃	7b	1138	32F－1	〃	〃		17H－1	〃	〃	1151	32C－1	〃	〃
	19B－1	〃	7b	1139	35D－1	〃	〃		25J－1	〃	〃	1152	36F－1	〃	〃
	19K－1	〃	7b	1140	18C－1	〃	〃		24G－1	〃	〃	1153	17K－1	小碗	
	20J－1	〃	7b	1141	14J－1	〃	9b		20A－1	〃	〃	1157		盤	
	24G～J－1	〃	7b	1142	18I－1	〃	〃		12F－1	〃	〃	1158	34A－1	〃	
	29E－1	〃	7b	1143	19K－1	〃	9a		23J－1	〃	〃	1159	18･19FG－1	〃	
	31E－1	〃	7b	1144	26G－1	〃	9b		20B－1	〃	〃	1160	14F－1	壺	
	33H－1	〃	7	1145	24I－1	〃	〃		33B－1	〃	9b		24H－1	〃	
	34B－1	〃	7b	1146	36F－1	〃	〃		16D－1	〃	〃		9D－1	〃	
	37A－1	〃	7b	1147	23A－1	〃	〃		36E－1	〃	〃		9・10C・D－1	〃	
	37A－1	〃	7	1148	15H－1	〃	〃		17～19C－1	〃	9b		23A－1	〃	
	38a－1	〃	7b	1149	33B－1	〃	〃		19H－1	〃	〃		16D－1	〃	
	表採	〃	7b		25I－1	〃	9		24B－1	〃	9		9F－1	〃	
1154	12G－1	皿	7		表採	〃	9a		14I－1	〃	9b		12～15G－1	〃	
1155	31C－1	〃	〃		30F－1	〃	9		24I－1	〃	9		19J－2	〃	
1156	26G－1	〃	〃		21G～P－1	〃	9		19H－1	〃	9b	1161	31E－1	香炉	
	9F－1	〃	〃		17A－1	〃	9		19C－1	〃	9				
	12G－1	〃	〃		22J－1	〃	9		18F－1	〃	9b				
	13L－1	〃	〃		24J－1	〃	9		14K－1	〃	〃				
	14F－1	〃	〃		18I－2	〃	9		17G－1	〃	〃				
	14E－1	〃	〃		31G－1	〃	9		22L－1	〃	〃				
	22K－1	〃	〃		32E－1	〃	9		33D－1	〃	〃				
	26G－1	〃	〃		32F－1	〃	9		16～26　表採	〃	〃				
	28J－1	〃	〃		24J－1	〃	9		12G－1	〃	9				
	28G－1	〃	〃		12～15G－1	〃	9		22D－1	〃	9b				
	31E－1	〃	〃		34C－1	〃	9		22G－1	〃	9				
	31D－1	〃	〃		36C－1	〃	9		13L－1	〃	9b				
	35G－1	〃	〃		38d－1	〃	9		19H－1	〃	〃				

第16表　青磁出土地区表(3)

②白磁（第132図）

平安～鎌倉時代までの白磁は，碗と皿に分けられる。

碗　（1000～1018）碗は6種類出土している。1b類1000は高台外面を直に，内面を斜に削り出されたものである。体部下半には篦削りの痕を残す。内底見込みに段を有する。磁胎は灰白

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
1000	25C－1	碗	1b′		35C－1	碗	1c	1026	15I－1	皿	2		33E－1	碗	4
1001	25C－1	〃	1c		35D－1	〃	1c		14H－1	碗	3b		36F－1	〃	4
1002	31D－1	〃	1c		36a－1	〃	1c		12L－1	〃	3b	1030	15F－P_1	皿	4
1003	23A－1	〃	1c		36D－1	〃	1c	1027	24B－1	皿	3	1031	19J－1	〃	4
1004	21J－1	〃	1c		37A－1	〃	1c	1028	15EF－1・2	〃	3	1032	24C－1	〃	4
1005	24H－1	〃	1c		38a－1	〃	1c	1029	16E－1	〃	3b	1015	30F－1	碗	5
1006	25J－1	〃	1c	1019	22J－1	皿	1b′		13F－1	〃	3	1016	35G－1	〃	5
1007	18H－土4	〃		1008	19a－1	碗	2		13G－1	〃	3	1017	16～17D－1 18E－1	〃	5
	30C－1	〃	1b′	1009	18J－P_1	〃	2		15D－1	〃	3		14D－1	〃	5
	12I－1	〃	1c	1010	14E－1	〃	2		15F－1	〃	3		25J－1	〃	5
	13J－1	〃	1c	1011	23A－1	〃	2		16A－1	〃	3		26H－1	〃	5
	13F－1	〃	1c	1012	32F－1	〃	2		12J－1	碗	4		29F－1	〃	5
	14F－1	〃	1c	1013	9・10C,D－1	〃	2		12J－1	〃	4		31J－1	〃	5
	14J－1	〃	1c	1014	14H－1	〃	2		13G－1	〃	4		32F－1	〃	5
	14H－1	〃	1c		13G－1	〃	2		14F－1	〃	4	1018	19C－1	〃	6
	15H－1	〃	1c		13G－1	〃	2		14I－1	〃	4		10・12D－1	〃	6
	16・18F－1	〃	1c		15H－土1	〃	2		14J－1	〃	4		12F－1	〃	6
	17G－1	〃	1c		15H－2	〃	2		14H－1	〃	4		12J－1	〃	6
	17H－1	〃	1c		18H－土1	〃	2		14K－1	〃	4		14F－土1	〃	6
	18C－1	〃	1c		21K－1	〃	2		14・15F－1	〃	4		15E－P_4	〃	6
	19H－1	〃	1c		23A－1	〃	2		15E－1	〃	4		15F－1	〃	6
	19J－1	〃	1c		24D－1	〃	2		15F－1	〃	4		18H－土1	〃	6
	22B－1	〃	1c		30F－1	〃	2		15I－1	〃	4		21I－1	〃	6
	23F－1	〃	1c		31C－1	〃	2		16F－1	〃	4		24F－1	〃	6
	24B－1	〃	1c		32F－1	〃	2		17H－1	〃	4		32B－1	〃	6
	24I－1	〃	1c		36B－P_2	〃	2		17K－1	〃	4		32E－1	〃	6
	28F－2	〃	1c		38B－1	〃	2		21F－1	〃	4		33C－1	〃	6
	29J－1	〃	1c	1020	29F－1	皿	2c		22C－1	〃	4		33E－1	〃	6
	29F－1	〃	1c	1021	32H－1	〃	2		23F－1	〃	4		33G－1	〃	6
	32C－1	〃	1c	1022	32E－1	〃	2		28G－1	〃	4		36B－P_2	〃	6
	33H－1	〃	1c	1023	14R－1	〃	2		31E－1	〃	4		36C－土1	〃	6
	34D－2	〃	1c	1024	35F－1	〃	2		32E－1	〃	4		36D－1	〃	6
	35A－1	〃	1c	1025	35F－1	〃	2		32P－1	〃	4		36F－1	〃	6

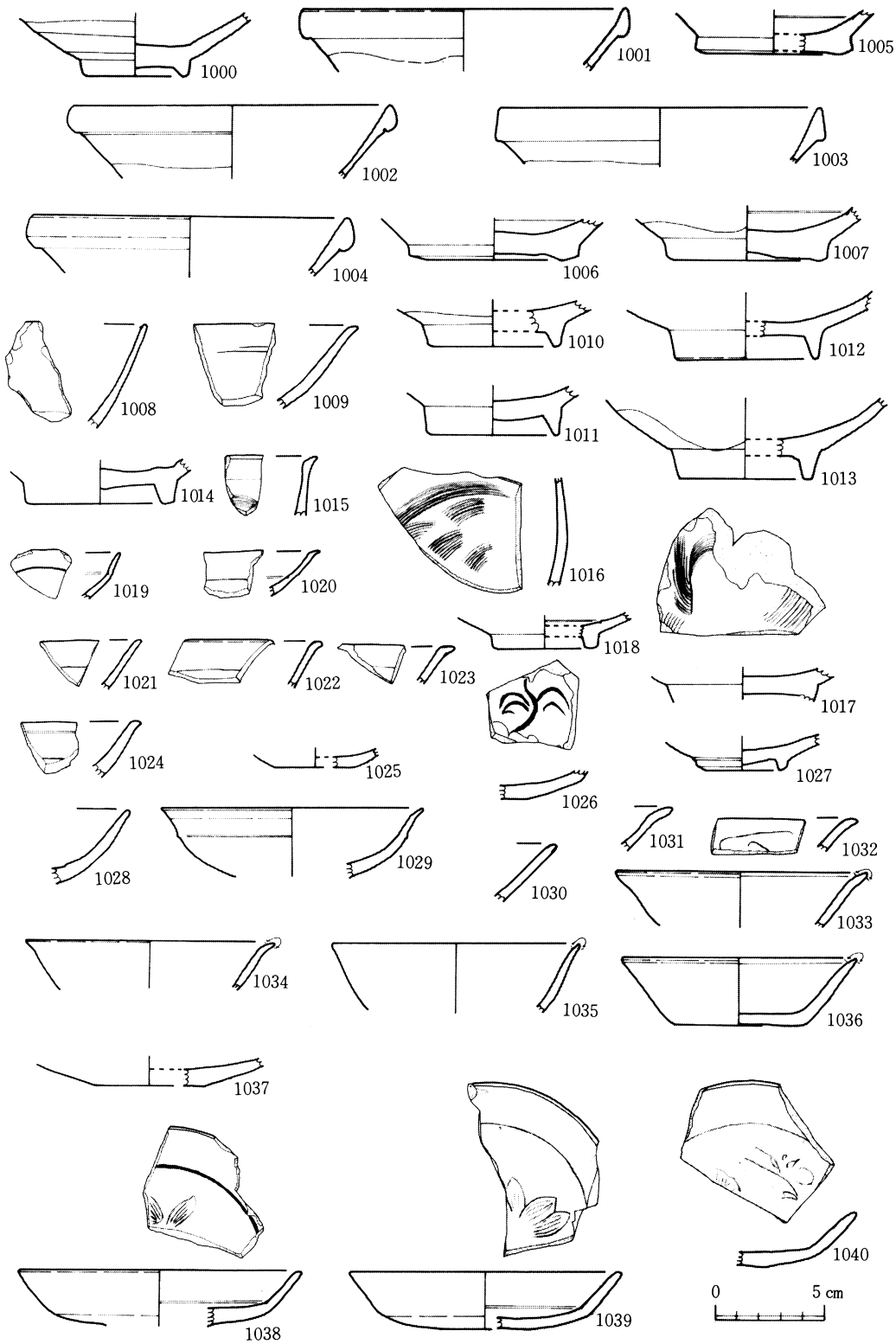
第17表　白磁出土地区表(1)

色で光沢のある黄色味を帯びた釉は，体部下半には施釉されず，貫入をみる。1c類1001～1007は口縁部・底部に分けられる。復元口径14.5cm内外である。口縁部は玉縁をもつものである。磁胎は灰白色で，黒粒を含む。いずれも光沢のある白色で体部外面下半には施釉されない。底部は，見込みに沈線状の段を有する。高台は幅広で浅く削り出してある。磁胎・釉色は前者に類似し，1007は高台脇まで施釉する。　2類1008 ～ 1013は口縁部と底部である。口縁部は，外開きのもの，外反させ先端を平らにするものである。底部高台は，高く削り出されている。磁胎は灰白色で青味を帯びたものや，灰白色釉を施す。1008・1010～1013は体部下半には施釉しない。1013は見込みに沈線を施す。1008・1012には貫入をみない。3b類1014は断面台形状を呈する。磁胎は灰白色で乳白色釉を施す。見込みの部分の釉を円形にかきとってあり，内底見込みに段を有する。5類1015～1017は内面に櫛目による有文をもつものである。1015は口縁部を「く」字状に外反させている。磁胎は灰白色で黄緑色釉を施す。6類1018は高台が小さく器肉が薄い。磁胎は白色で黄灰色の総釉である。見込みに一条の沈線をもち，貫入を見る。

皿（1019～1040）皿は7種類出土している。1b′類1019は胴部付近から口縁部に外傾する。見込みは胴部屈曲部付近から成る。薄い器肉をもち貫入が入る。磁胎・釉は1000に類似する。2類1020～1026は口縁部と底部片である。口縁部はいずれも「く」字状に外反し，全体的に器肉は薄い。1020・1024の見込みは1019に類似する。1024は内器面口縁部，1022・1023は内器面体部にそれぞれ沈線を施す。磁胎は灰白色，淡緑色釉を施す。1025・1026の磁胎は白色・灰白色を呈し，釉は青味を帯びたもの，くすんだ緑色を施す。1025の器形は1026に似る。見込みには花文様を施し，いずれも貫入をみ，平底を呈す。3a類1027は小さな高台をもつ。磁胎は灰白色で黒粒を含む。見込みでは釉を円形にかきとっている。外面体部下半には施釉されない。3b類1028・1029の口縁部は外反し，磁胎は白色で，白色釉を施す。見込みは釉がかきとってある。1029は外面体部に沈線をもつ。4類1030～1032は外反する口縁をもつ。磁胎は灰白色で，1032のみ白色である。前者は淡緑色釉，後者は白色釉が施され内面に沈線文様が描かれる。1031に貫入をみる。6類1033～1036は口縁部が口禿となり，平底へ続く。図面に矢印を施す。磁胎は灰白色で黒粒を含むものもある。1035は白色の磁胎に白色釉を施す。7類1037～1040は磁胎は灰白色で光沢のある淡緑色釉，灰色釉がかかり1037・1038は貫入をみる。体部中間で「く」字状に立ちあがり，見込みはその屈曲部から始まる。見込みには花文様を描き，貫入をもみる。

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	表採	碗	6		18I－2	碗	7	1171	33H－1	碗	10		17L－土坑	碗	10
1033	38A－P_1	皿	6	1037	17A－1	皿	7		15I－1	〃	10		29G－1	〃	10
1034	36B－P_2	〃	6	1038	18C－1	〃	7		15I－1	〃	10		31E－1	〃	10
1035	15H－P_1	〃	6	1039	14・15EF－1	〃	7		15I－1	〃	10		32E－1	〃	10
1036	15G－1	〃	6	1040	15・14F－1	〃	7		16－17D－1	〃	10		32F－1	〃	10
	12H－1	碗	7	1170	16－17D－1	碗	9		17C－1	〃	10		34C－1	〃	10

第18表　白磁出土地区表(2)


1000
1001
1005
1002
1003
1004
1006
1007
1008
1009
1010
1012
1011
1013
1014
1015
1016
1019
1020
1018
1021
1022
1023
1017
1024
1025
1027
1026
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1040
1038
1039
0
5 cm

第132図　白　磁

(6)古銭（第 133図）

古銭は２点出土した。１つは「開元通寶」で無背，肉太である。径2.3cm，量目2.40gを計る。１つは「熙寧元寶」で無背，径2.4cm，量目2.40g を計る。

(7)緑釉土器（第 134図）

施釉土器は７点出土した。**1041**は薄手の軟質の坏で，内外面に緑釉を施すが剝落が著しい。微細貫入をみる。**1042**はやや硬質に焼き上ったもので内外に緑釉を施釉する。**1043**～**1045**までは還元気味に焼成されたもので，**1045**が濃い緑色を呈するほかは，薄い緑色を呈す。なお**1045**の見込み底には２条の沈線と曲線の沈線文がみえる。**1046**は軟質で見込みに３条の沈線が巡る。緑釉は底部以外にかかる。**1047**は見込みの沈線内にのみ緑釉が残存するが，他は剝落したものである。底部にはかからない。

(8)墨書土器（第 134図）

1048～**1063**までが墨書土器である。墨書された土器の器形は坏，皿である。

墨書は文字，記号，戯画と思われるものであるが，判読不明なものが多い。これらのうちで**1051**は坏の胴部に口縁部に向け「用」と墨書する。**1049**，**1054**には「ↄ」，**1058**には「⊗」印を墨書する。**1050**，**1060**，**1063**は戯画か記号の類であろう。

他は細片や剝落のため判読不明である。

(9)土製品（第 134図）

土製品には紡錘車，土錘，ふいご口がある。**1064**は紡錘車で坏の底部の再利用に見られるが，孔の周縁に胎土が盛り上っていることから，焼成前に穿孔して焼成したもので，紡錘車として頭初より焼成したものであろう。**1065**～**1071**は中央部がふくらみ，両端がすぼまる形の土錘で，長軸の中心部に孔を穿つ。長軸は3.5cm前後の細身のもの（**1065**～**1067**）と，長軸4.5cm前後のやや太身のものがある。**1072**，**1074**はふいご口残欠である。中央部に孔がある円筒状のもので表面に鉄滓が付着している。全体の形状は不明である。

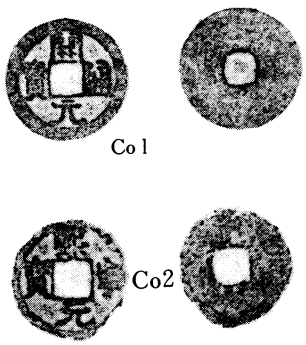
(10)石製品（第 135図）

石製品には石鍋，滑石製品，砥石，軽石製品がある。

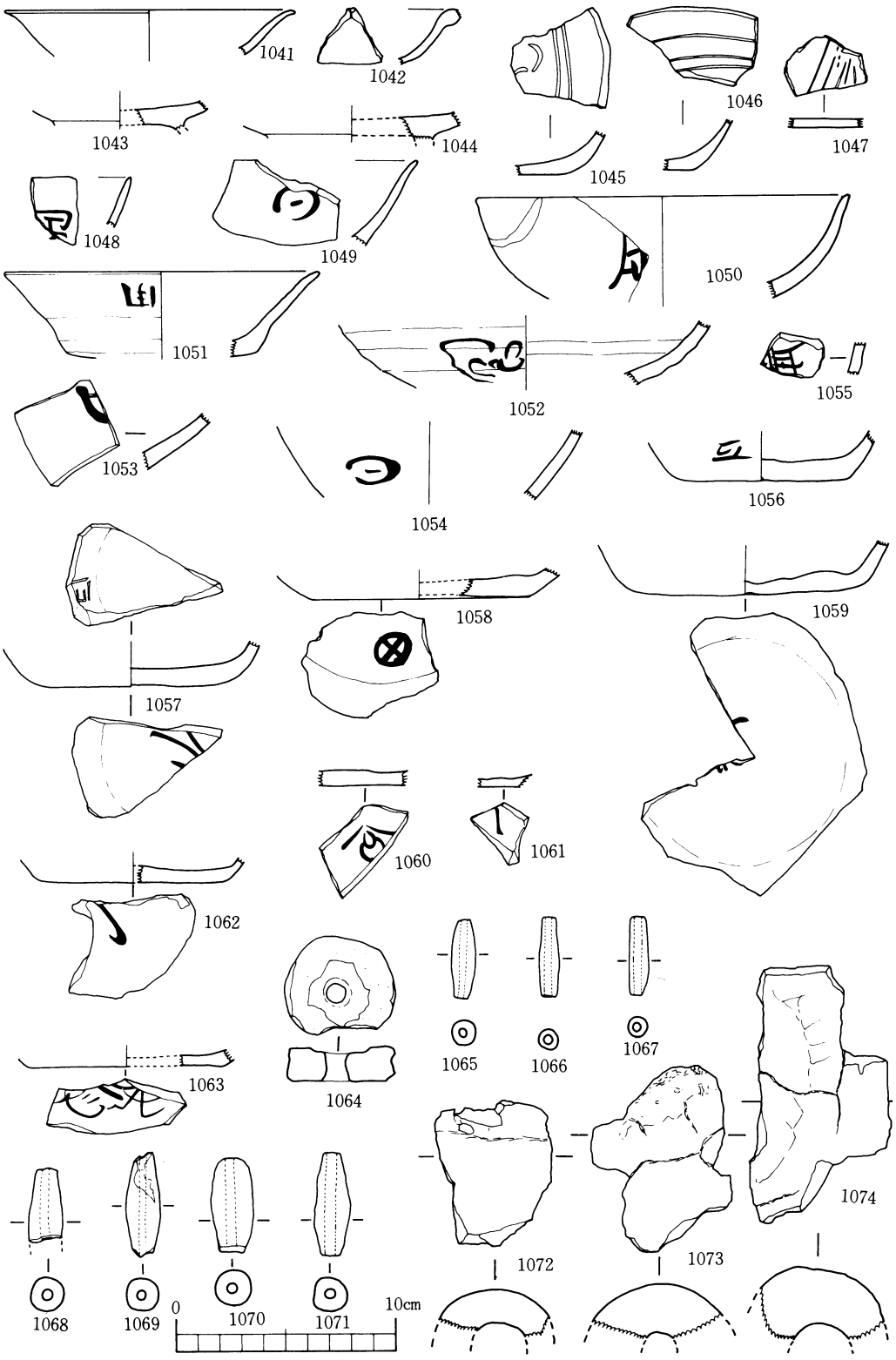
S25～S31が滑石製石鍋である。このうちS26は復元口径26cm，同器高7.5cm，同底径19cmを測り，肩部に鍔状突帯をもつ平底の滑石製石鍋で，器面には縦位にノミ痕が観察されるとともに煤が付着している。

その他の石鍋の復元口径はS25（21.7cm），S27（26cm）S28（21.9cm），S29（15.4cm）を測る。S30，S31は石鍋の残欠，S33～S36は滑石製石製品で，S35，S36には穿孔がある。S37～S40までは砥石でS37，S38は凝灰岩を利用したものである。S39は頁岩，S40はシルト岩である。

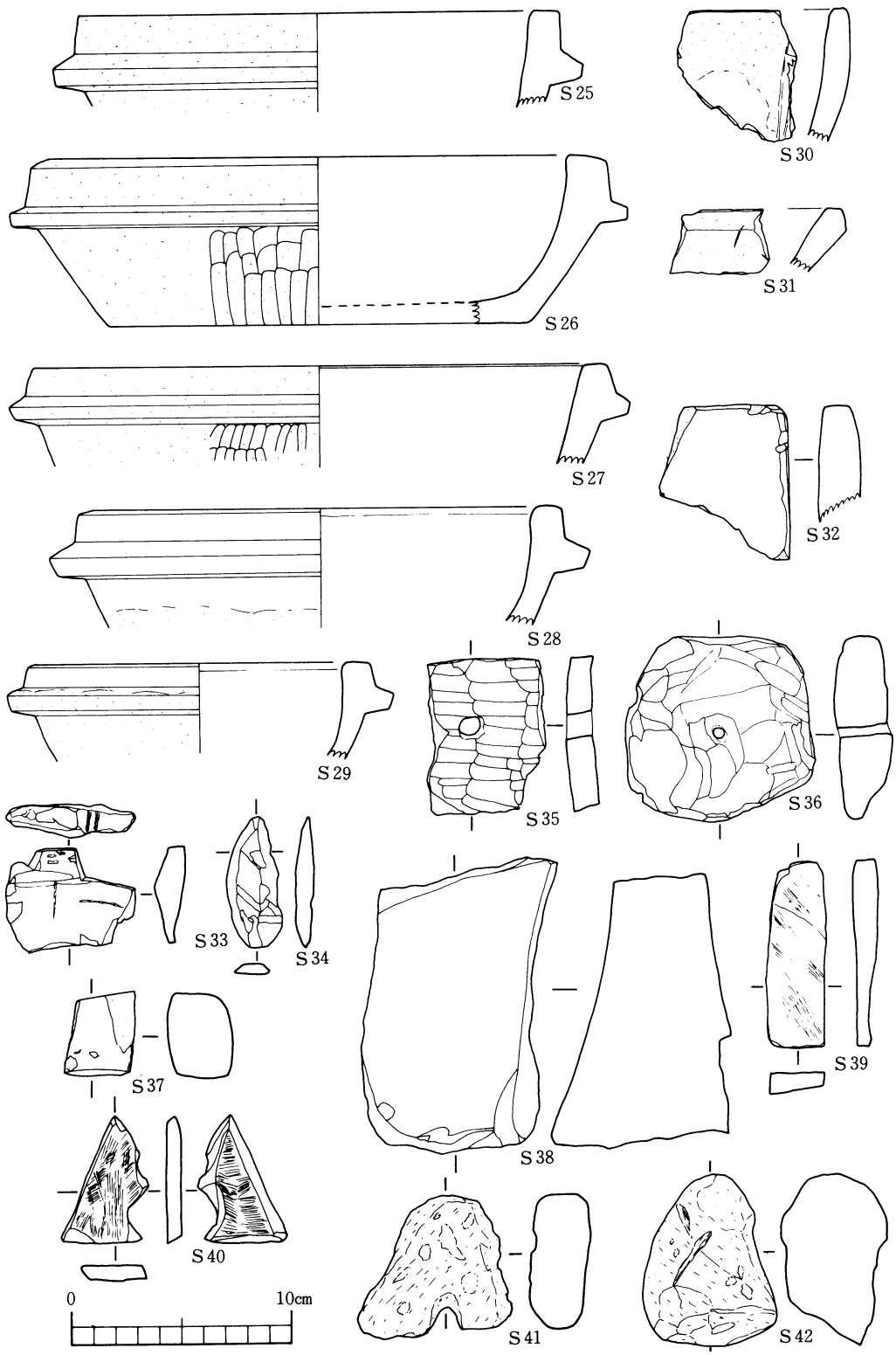
S41，S42は軽石を加工しているが，形状，用途ともに不明である。



第 133図　古銭拓影



第134図　緑釉土器・墨書土器・土製品


S25
S30
S26
S31
S27
S32
S28
S29
S35
S36
S33
S34
S37
S39
S38
S40
S41
S42
0
10cm

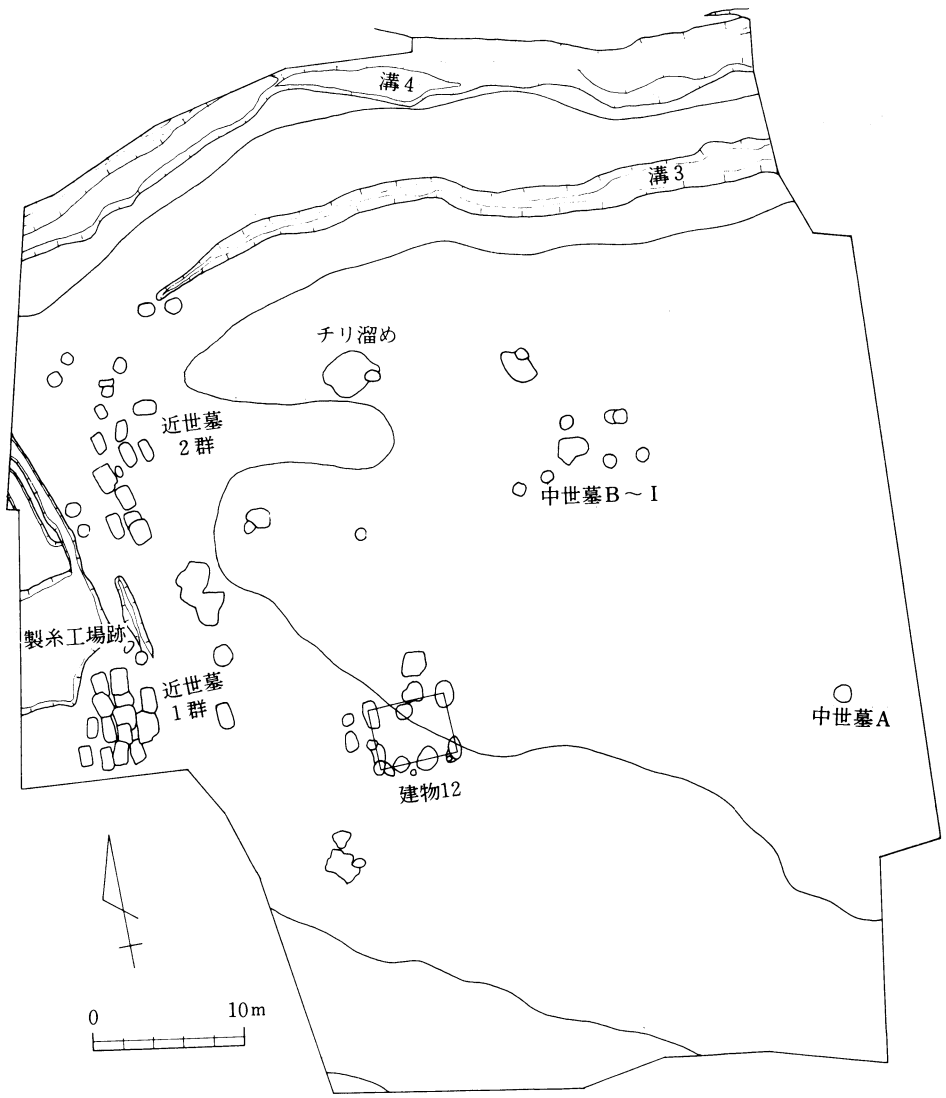
第135図　石 製 品

第６章　室町・安土桃山時代

この時代の遺構としては，墓坑９基と性格不明の土坑数基が検出された。

１．中世墓

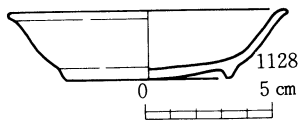
中世の墓坑としたものは，人骨は認められなかったが副葬品と思われる古銭（洪武通宝）と数珠等を検出したもの１基と，副葬品は検出されなかったが骨粉状のものが残っていた円形の土坑８基である。



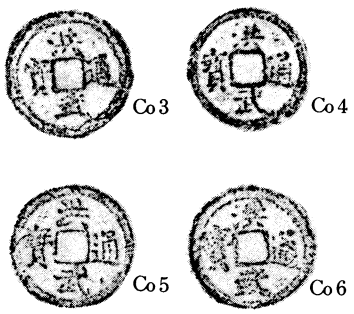
第 136図　室町時代以降の遺構配置図

(1) 墓坑A

17K・L区に検出されたもので，上面で 1.2m ～ 1.3m を測る略円形を呈する。深さ約40cmで約20cm幅の平坦な段をもったのち，20cmの落ち込みをもつ。底は長径60cm，短径50cmの楕円形を呈する。中の埋土は黒褐色を呈し，墓坑の中位にほぼ水平の状態に白磁の完形品が検出された。また，段上には人頭大の角礫１個が置かれていた。中央の落ち込みには古銭「洪武通宝」が４枚，環状の銅製品が３個，数珠が 227個散乱していた。人骨は検出されなかったが，これらの出土遺物から中世の墓坑と判断した。



第 137図　中世墓A出土の白磁

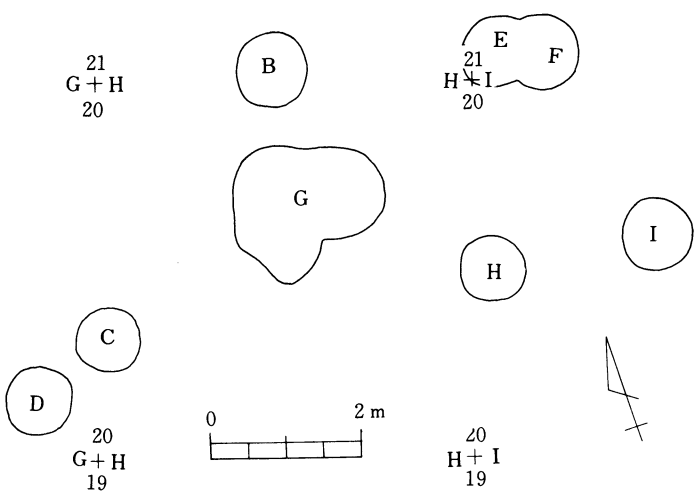


第 138図　古銭拓影

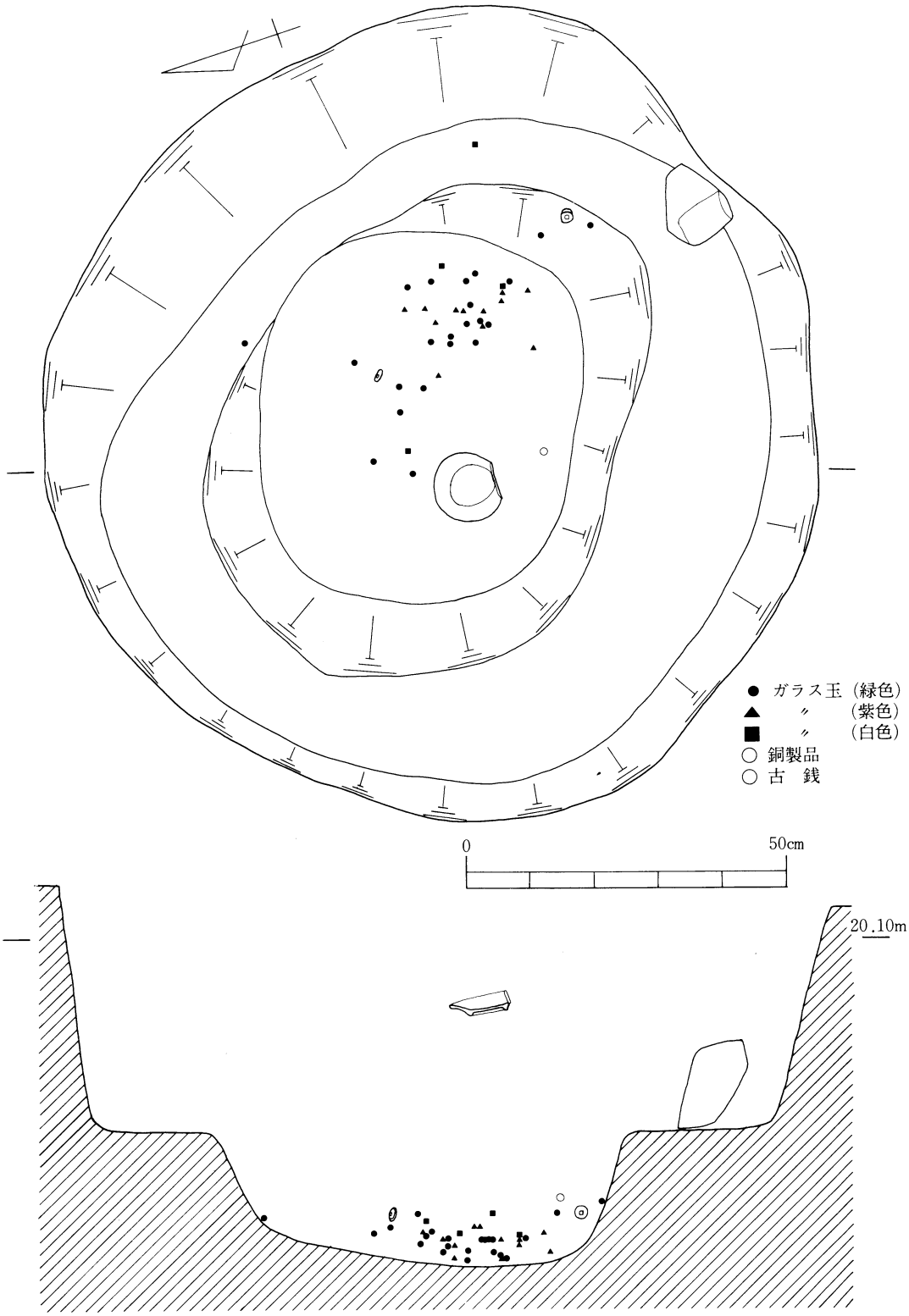
出土遺物で，**1128**は白磁の皿である。口径11cmを測り，磁胎は白色で，光沢のある白釉がかかる。畳付周辺は露胎で，外底には目砂が付着している。古銭４枚はすべて洪武通宝で，Co３は外径2.46cm，厚さ0.15cm Co４は外径2.36cm，厚さ0.16cm，Co５は外径2.43cm，厚さ0.17cm，Co６は外径2.38cm，厚さ0.15cmを測る。Co５の背上に「浙」の字がある。環状の銅製品のうち２個は 1.2mmの銅線を径 8.2mmの環状にしたものである。もう１個は 2.5mm幅の板状銅板を環状にしてあるが，半分品である。数珠はガラス製で，総数 227個のうち，緑色 101個，紫色95個，白色28個，青色３個出土した。大部分の径は２～５mmであるが，白色１個は９mm，青色１個は 9.8mmと大ものが２個あった。

(2)墓坑B～I

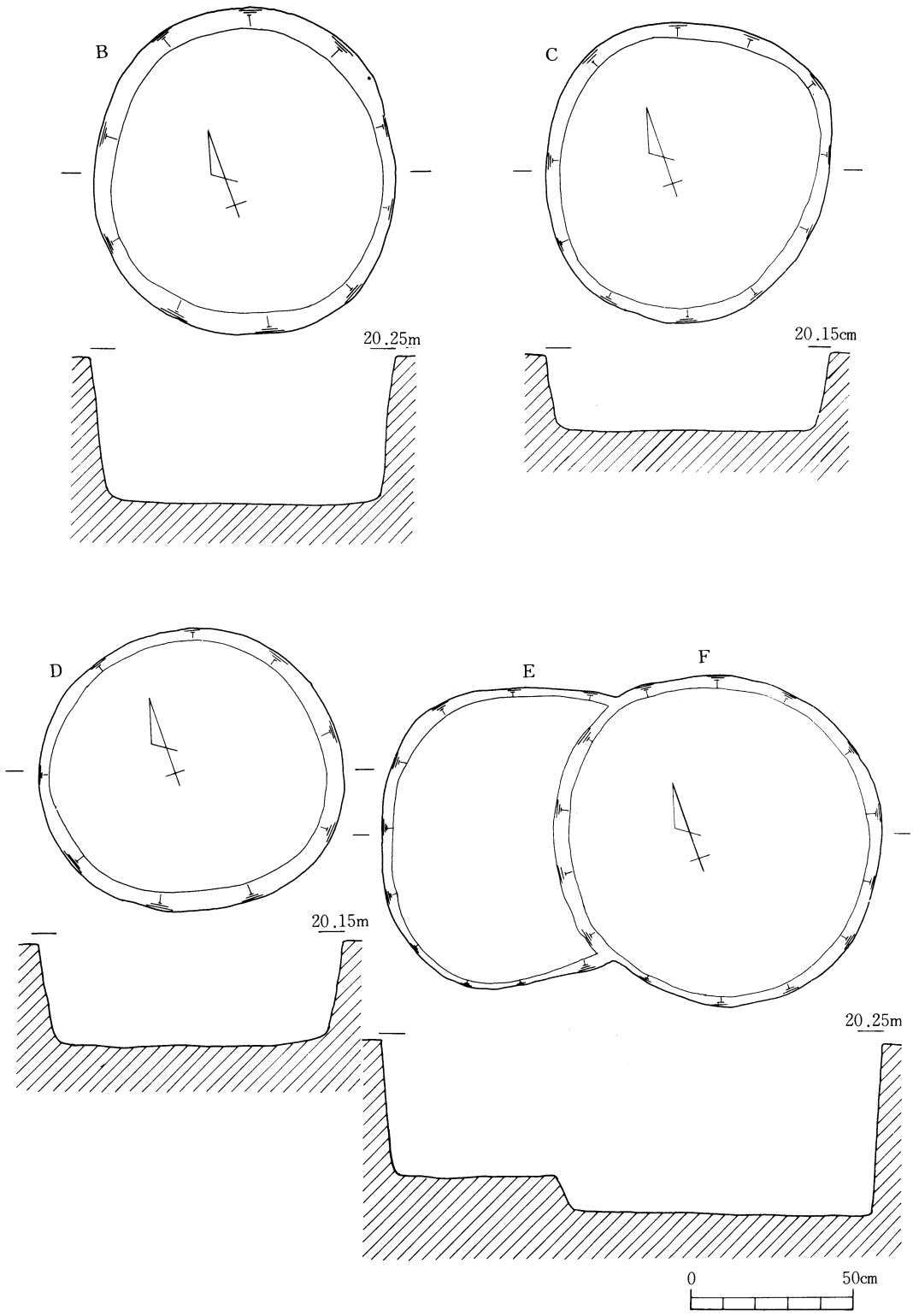
20H・I付近に検出された円形の土坑で，土坑内に骨粉らしきものが残っていることから墓坑とした。墓坑B～F，H・Iは，径が90～ 100cmの円形を呈し，深さ25～60cmの浅い墓坑である。墓坑Gは，２基以上の墓坑が切り合っていると思われるが，深さが一定のため切り合いは不明である。いずれも遺物は検出されなかった。



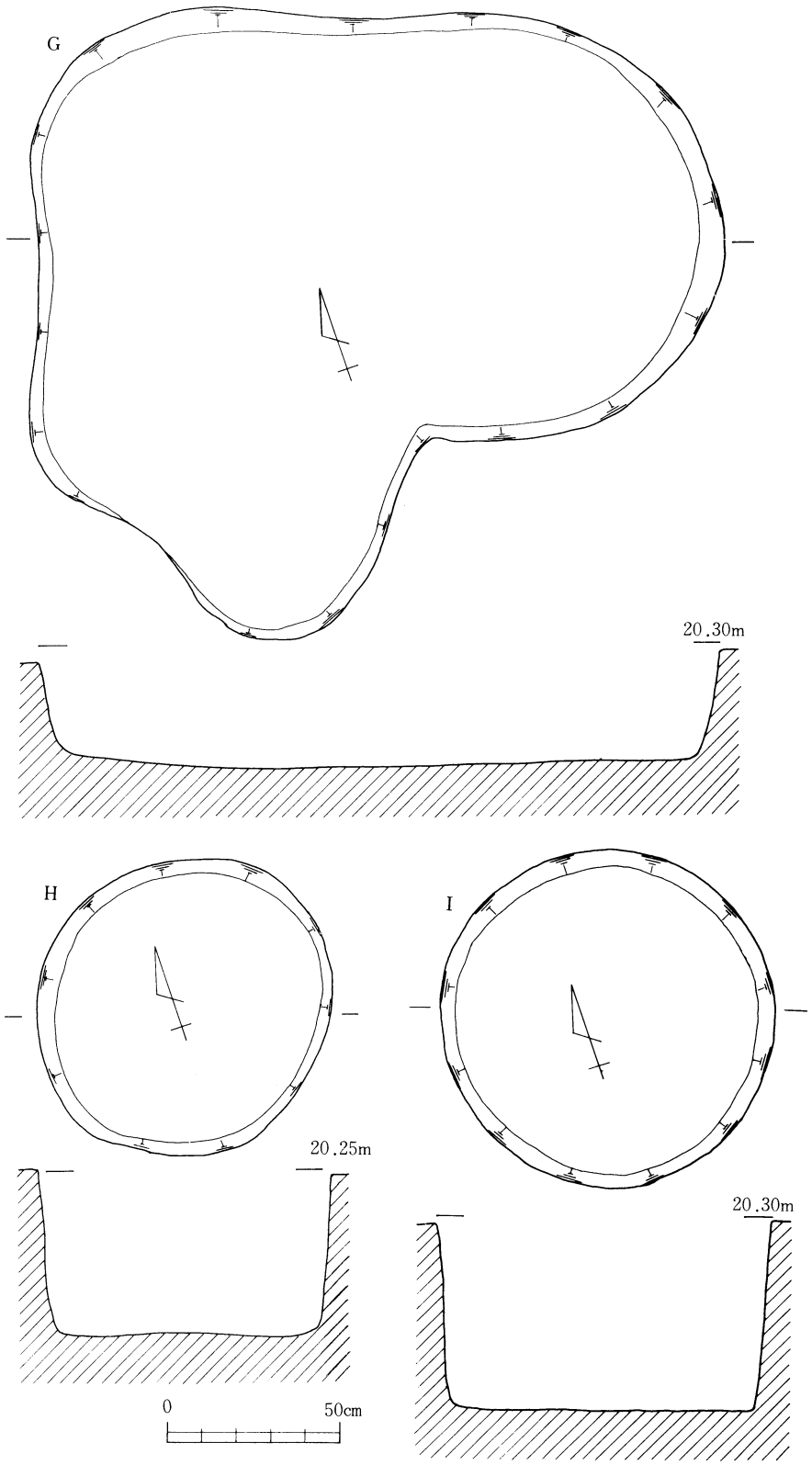
第 139図　中世墓B～I配置図



第140図　中世墓A



第141図　中世墓B～F

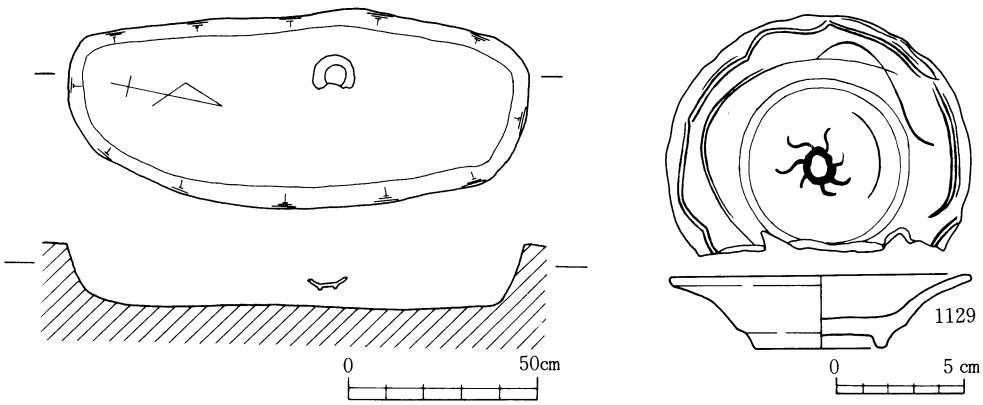


第142図　中世墓Ｇ～Ｉ

2 土坑

土坑L

36A・B区に検出されたもので，長径 120cm，短径50cm，深さ15cmを測る長楕円形を呈する。埋土中に青磁が出土した他は何も検出されなかった。青磁（1129）は皿で，青緑色を呈し，全面に貫入がみられる。周縁を稜花様につくり，内側面に2～3条の沈線文をめぐらす。



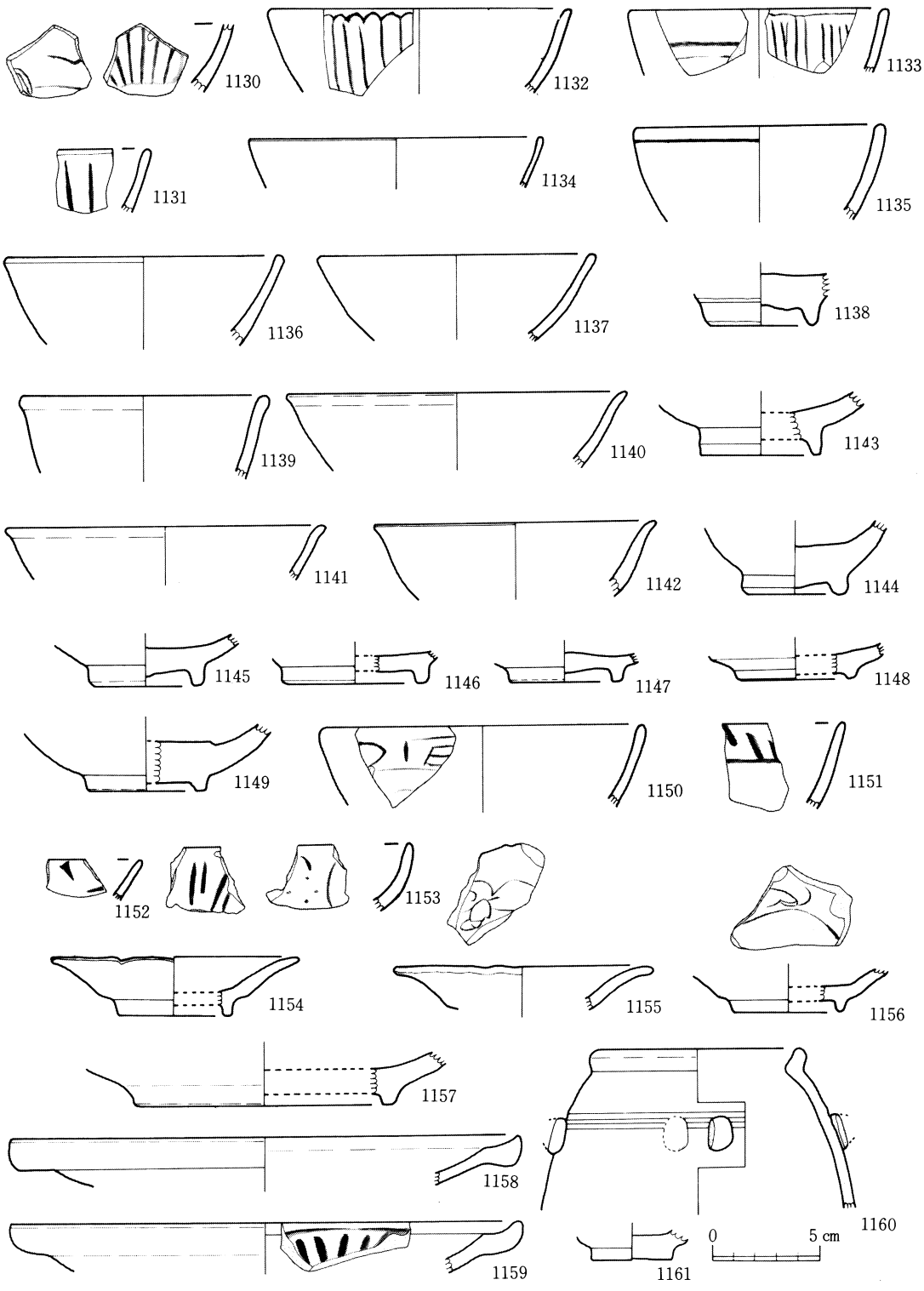
第 143図　土坑L とその出土遺物

3　攪乱層出土の遺物　（第 144図）

室町時代の青磁は，器形によって碗・小碗・皿・盤・壺・香炉に分けられる。

碗　（1130～1152）　碗は5種類出土している。7類は文様によって2つに分けられる。7a類1130は磁胎が灰白で灰色釉を施す。体部には蓮弁文を浮き出している。7b類1131～1133は復元口径12cm～14cmで外傾する口縁部をもつ。磁胎は灰白色で光沢のある緑色釉を施す。いずれも体部には篦先による線描蓮弁文をもつ。また1133は内器面に2条の沈線をもつ。8類1134～1138は口縁部が直口する器形をもつ。1135は若干内弯気味である。1134・1135は光沢のある緑色釉で，1134の器肉は薄く，磁胎は灰白色である。1135の口縁直下には凹線が施される。1136・1137は灰色の磁胎をもち，前者は光沢のある灰色釉，後者は灰黄色釉となる。1134・1136に貫入をみる。1138は細くて高い高台をもち，器肉が厚い。磁胎は白黄色で光沢のにぶい黄味を帯びた釉を施す。9類1139～1142は口縁部，1144～1149は底部である。口縁部はいずれも外反し，磁胎は灰白色で，1140は茶褐色を呈し，前者は緑色釉，後者は茶褐色釉となる。底部はいずれも断面四角の高台をもつもので，1143～1145・1149は腰部にかけて膨らみをもつ器形である。外底は露胎で，磁胎は致密で灰色を呈す。1143・1147は見込みに一条の沈線を施し，1149は凹線状にかきとられ見込みと体部との境に段を有する。いずれも貫入が入る。10類1150～1152はいずれも内弯気味の器形をもつ。磁胎は灰白色で光沢のある緑色釉を施す。口縁下に雷文帯を施し，1150・1151で貫入をみる。

小碗（1153）　1153は口縁部が内弯し，口唇部は丸く仕上る。磁胎は白黄色，光沢のある黄


1130
1132
1133
1131
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1140
1143
1141
1142
1144
1145
1146
1147
1148
1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
0
5 cm

第144図　青　　磁

緑色の施釉となる。内面には凹線文，外器面には沈線文を施す。

皿（1154～1156）　復元口径11.5cm内外の小型皿である。1154は磁胎が灰黒色で，２次的に火を受けたらしく，にぶい光沢で黄味を帯びている。口唇部には波状文の陰刻を有す。1155は灰白色の磁胎で，青味を帯びた釉が厚めにかけられている。体部内器面には花文様を施すが判然としない。1154と同種の口唇部をもつ稜花皿である。1156は磁胎・釉・文様ともに1154に類似する。

盤（1157～1159）　推定口径は23.3cm前後である。1158・1159は口縁部を「く」字状に折りまげ，先端ではさらに立ち上る器形である。1159の内面体部には蓮弁文が描かれる。磁胎はともに灰白色で，貫入のある緑色釉となる。1157は磁胎・釉ともに前者に似る。総釉で外器面体部に蓮弁文を施す。

壺（1160）　推定口径10cmである。肩部に２本の沈線が入れられ，四耳がつけられるものである。胎土は灰黄色で，内面には黄味を帯びたもの，外面には暗緑色の釉がかかる。

香炉（1161）　磁胎は灰白色で，高台は光沢のある灰色釉を施した上げ底気味の底部である。

(2)白磁　（第 145図）

胎土は白色を呈し，釉は薄く光沢のある灰白色・黄白色釉を施す。文様・高台・器形等により３つに分けられる。８類（1162～1164）は口縁部が直行する小碗1163，　外反する1162は碗である。釉は総釉のもので，1164は見込みに一条の界線を施し界線中に草花文をもつ。外器面体部下半は露胎である。９類は小さな高台をもつ小碗である。高台が部分的に抉り取られた1167～1170がある。うち1170は８角形の稜をもつ器である。また抉りをもたない1166もある。総釉のものと体部下半が露胎のものがある。10類は口縁部が外反し，総釉で，畳付は露胎である。1174はやや大形の合子蓋である。縁辺に菊座をめぐらし，甲は素文である。胎土・釉ともに純白で光沢をもち，福建省徳化窯製品とみられる。

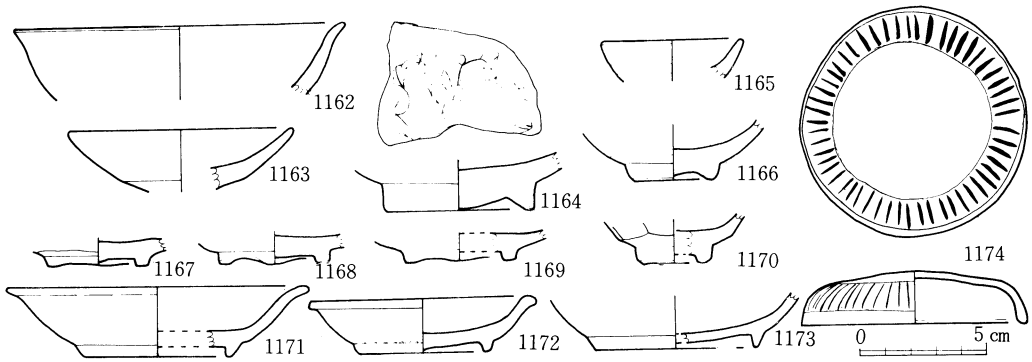
(3)染付・天目　（第 146図）

染付1175～1178は，皿である。1175は端反り口縁である。磁胎は白く，淡青色の釉で貫入をみる。口縁部内外面に一条の界線を描く。1176の磁胎は白色，内器面から外底にいたるまで淡青色の釉が施され，貫入をみ高台においては釉をかき取ってある。見込みの二重円圏文中に文様を描き高台脇にも二重の界線が施される。1177・1178は碁笥底皿である。光沢のある淡青色の施釉をみるが，底部付近の一部には施釉されない所もある。1177・1178は見込み界線を有し前者はその界線中に草文を，外面胴部付近に，界線を巡らし，後者は界線中に「寿」の文字を描く。1179は天目碗である。胎土はきめ細かで，若干上げ底風の底部である。見込みに光沢のある黒色厚手の釉が施される。釉は外器面底部付近には施釉されない。

(4)陶器　（第 147図）

甕1180，摺鉢1181・1182等が数点出土している。甕は茶褐色・灰黒色を呈し致密で砂粒を含む胎土で，硬く焼きしめられている。中には黄緑色の自然灰釉を生じた常滑焼もある。1181は口縁部に断面三角形の突帯をもつ片口の鉢片である。内器面に数条のかき目を施し，黒灰色の

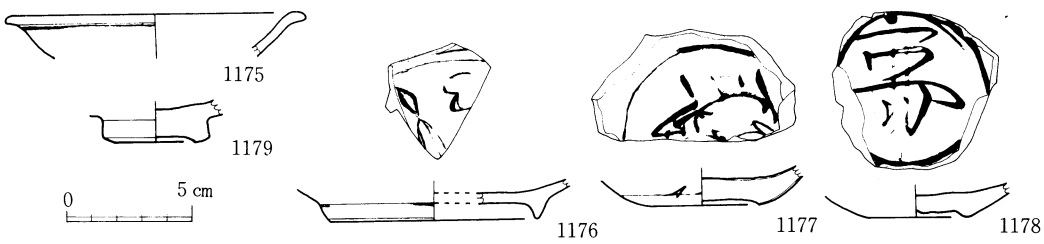
自然灰釉がかかる。**1182**は胎土に小礫を含み硬く焼きあげられた備前焼である。口縁部は直立し，内面に数条の櫛目のかき上げを施す。器面には黄味がかった茶褐色の胡麻を生じている。



第 145図　白磁

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
1162	26Ⅰ－1	碗	8	1167	18C－盛	小碗	9		15Ⅰ－1	皿	10
1163	20D－2	小碗	〃	1168	13H－1	〃	〃		31E－1	〃	〃
1164	16D－1	碗	〃	1169	37d－1	〃	〃		17C－1	〃	〃
	17G－1	〃	〃	1170	16・17D－1	〃	〃		16・17D－1	〃	〃
	30C－1	〃	〃		29G－1	〃	〃		29G－1	〃	〃
	26H－1	〃	〃		表　採	〃	〃		15Ⅰ－1	〃	〃
	30F－1	〃	〃	1171	33H－1	皿	10		34C－1	〃	〃
	24A－1	〃	〃	1172	32E－1	〃	〃	1174		合子蓋	
	24C～F－1	〃	〃	1173	16・17D－1	〃	〃				
1165	25D－1	小碗	9		32F－1	〃	〃				
1166	21J－1	〃	〃		15Ⅰ－1	〃	〃				

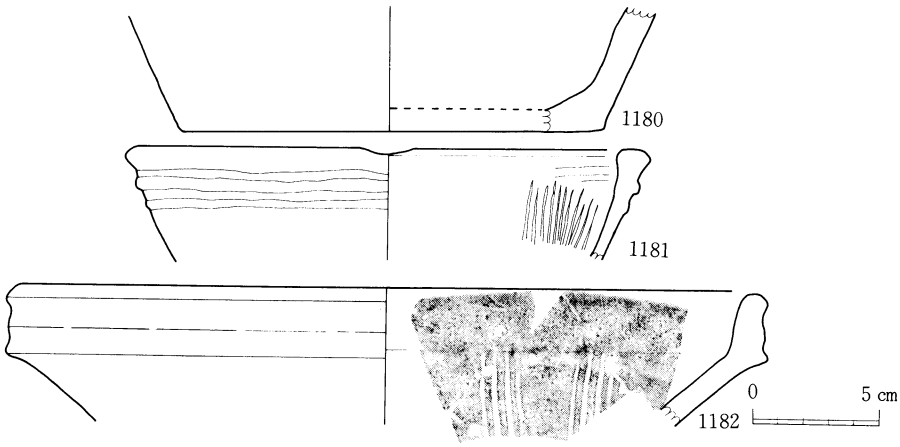
第19表　白磁出土地区表



第 146図　染付・天目

番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考
1179	16K－2	碗	天目	1176	31E－1	皿	染付		24C－1		染付		38D－1		染付
	34F－1	〃	〃	1177	16～17D－1	〃	〃		30E－1		〃				
	32F－1	〃	〃	1178	25G－1	〃	〃		31C－1		〃				
	21E－1	〃	〃		13H～J		〃		33C－1		〃				
1175	22E・土坑	皿	染付		16E－1		〃		37A－1		〃				

第20表　染付・天目出土地区表



第 147図　陶器（甕・摺鉢）

番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考	番号	出土区	器種	備考
1180	35A－1	甕	備前		37d－1	甕	常滑		30F－1	甕			21D－1	摺鉢	備前
	33E－1	〃			33B－1	〃	〃		23F	〃			23C～D－1		
	24J－1	〃			24A－1	〃			29G－1	〃					
	33C－1	〃			22B－1	〃			18I－2	〃					
	19E－1	〃			32G－1	〃			22B－1	〃					
	34F－1	〃			25G－1	〃			12G－1	〃					
	13D－1	〃			22F－1	〃		1181	18I－1	摺鉢					
	33E－1	〃			16J－2	〃		1182	16F－1	〃	備前				
	33B－1	〃	常滑		16・17D－1	〃			31C－1	〃	備前				

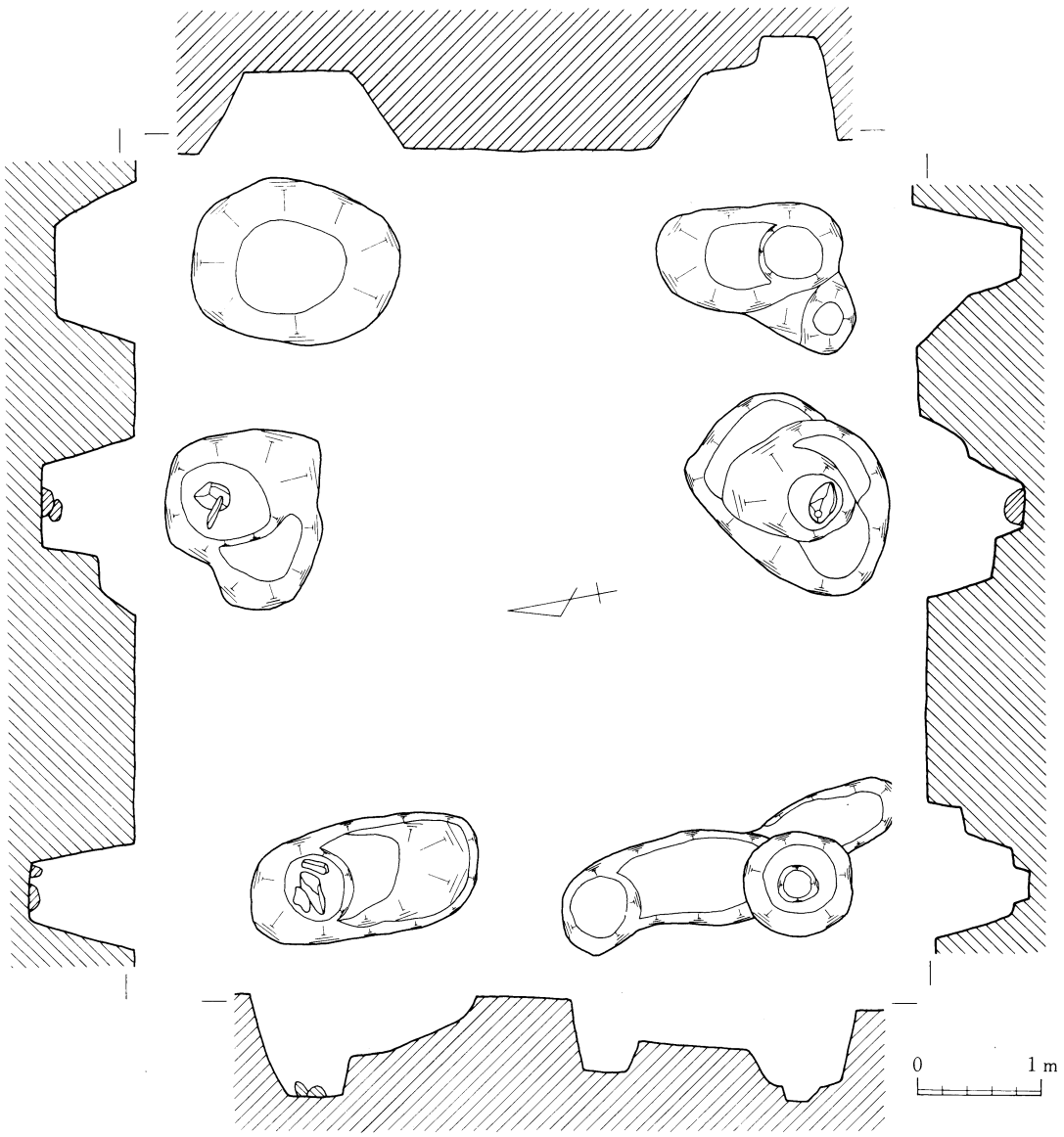
第21表　陶器出土地区表

第7章　江戸時代

江戸時代の遺構は，掘立柱建物１基，溝状遺構２条，墓28基が検出され，攪乱層には全体にわたって近世遺物が出土した。

１掘立柱建物12

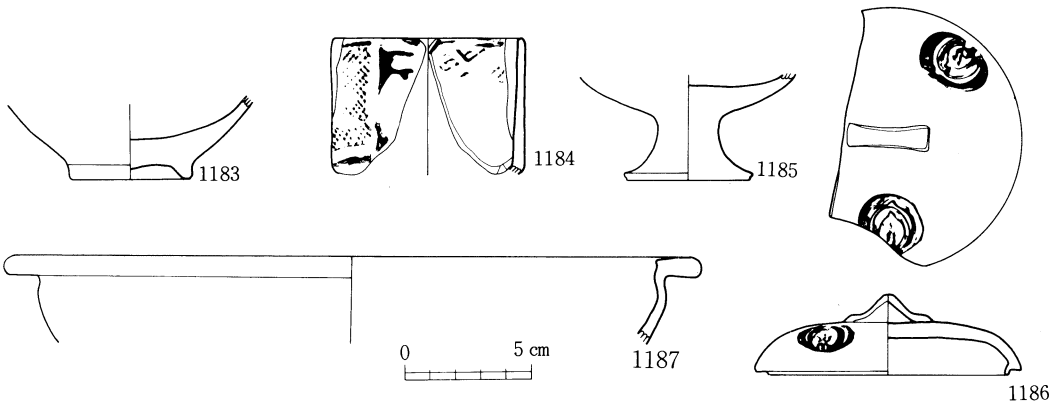
16・17E・F区に検出されたもので，南北方向に１間（４m），東西方向に２間（５m）の掘立柱建物である。柱穴の直径は80～ 120cm，深さは60～90cmを測る。柱穴のうち３基には，根石がある。



第 148図　掘立柱建物12

柱穴内には，柱穴の埋土中に磁器，陶器片が出土した。**1183**は黒褐釉を施す薩摩焼，**1184**は磁器染付の筒形碗で，胴部には窓絵，見込み口縁部には松皮文を呉須で画く。**1185**は薩摩焼の高坏で褐釉がかかる。**1186**は磁器蓋で，紐を中心に圏線と3対の文様を画く。

1187は薩摩焼の甕で内外とも褐釉がかかるが，焼成は良くない。



第 149図　掘立柱建物12の出土遺物

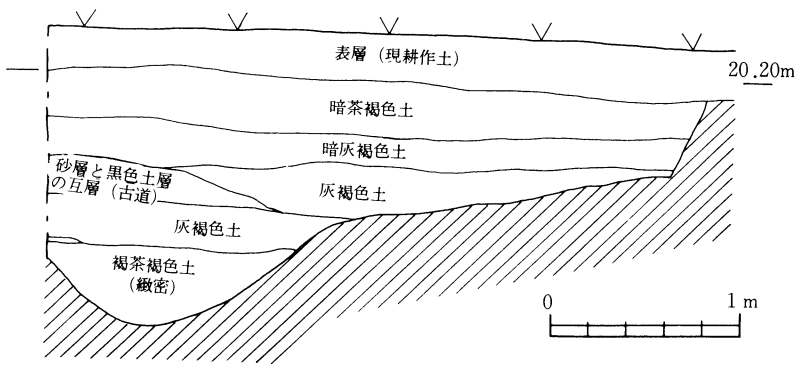
2．溝状遺構

(1)溝状遺構 3

22C区から24J区へ東西方向に続いている近世の遺構である。22C区から22D区にかけてはゆるやかな傾斜をもって下降するが，22E区から西側はやや平坦となって，用地外へ延びている。上幅は0.5m ～ 2.5m，底幅 0.3m ～ 1.5m を測り，深さ約 0.7m を残すU字溝である。埋土は暗茶褐色を呈し，近世の遺物を多く包含する。

(2)溝状遺構 4

遺跡を2分する農道の下に検出された溝状遺構で，23A区から23J区にかけて延びている。両端は用地外に延びる。25I区付近では，上幅約3m，下幅1m の幅広い形状を呈す。底のレベルにはほとんど変化がない。溝は段になっており，段と同じ面の溝上には砂層と黒色土層の互層があり，その表面は酸化鉄によって固くなっている。これは近世の古道と思われるが，東側にある現在の掘り切りへの登り口に続いている。底の埋土は致密な褐茶褐色土である。埋土中には近世以降の遺物が数多く包含されている。



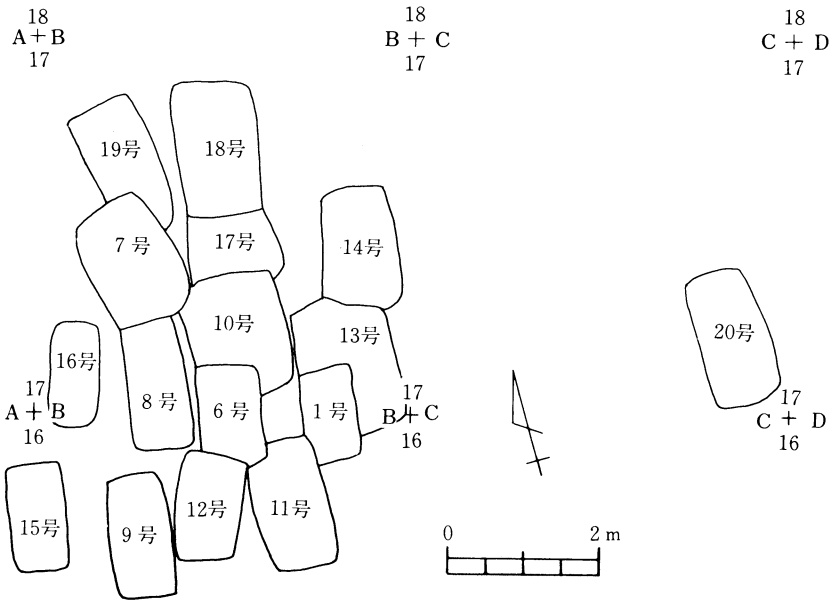
第 150図　溝状遺構 4 断面図

3　近世墓

（第 151～ 153 図）

近世墓は，墓石を伴う墓と，墓坑で，他に，安山岩の立石を同岩の板石で囲むものが一基検出された。

このうち墓石は本来墓坑につくものであったが，後世の移動等により，墓石と墓坑の明確な関連は把握できなかった。



第 151図　近世墓 1 群配置図

ただし，墓坑 1 群と第 153図の墓石は同一地域であり，本来は一体のものとみてよいであろう

また墓坑 2 群（19，20－B区）の墓石は失なわれていた。

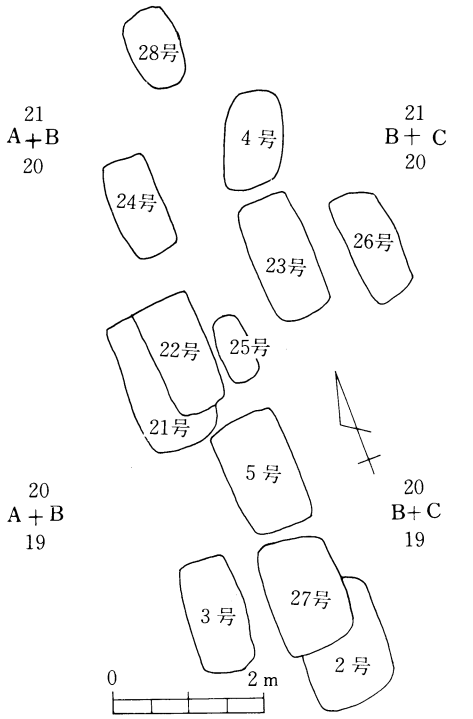
これ等のことから，近世墓は19，20－B区の 1 群と，17，18－B区の 1 群とに分けられる。

(1)　墓石（第153図）

墓石は凝灰岩を使用したもので，発掘時点ではすでに倒壊し，現位置を示すものか確定は困難であった。

このことは墓石を除き，その下を発掘しても墓坑の重なり合いや，墓石の移動により埋葬部の墓坑と一致しなかったことからも是認されよう。

従って本項では墓石に刻まれた年代を記述していくが，ただ，近世墓標以外に他の墓石がないことから，埋葬部の墓坑とはほぼ一致する時代とみてよいであろう。



第 152図　近世墓 2 群配置図

台座は40～45cm前後の凝灰岩を使用し，中心部には径8cm前後の柄穴を穿つ。墓標は凝灰岩を同様に使用し，正面あるいは裏面に戒名，俗名や死亡年月日を刻む。

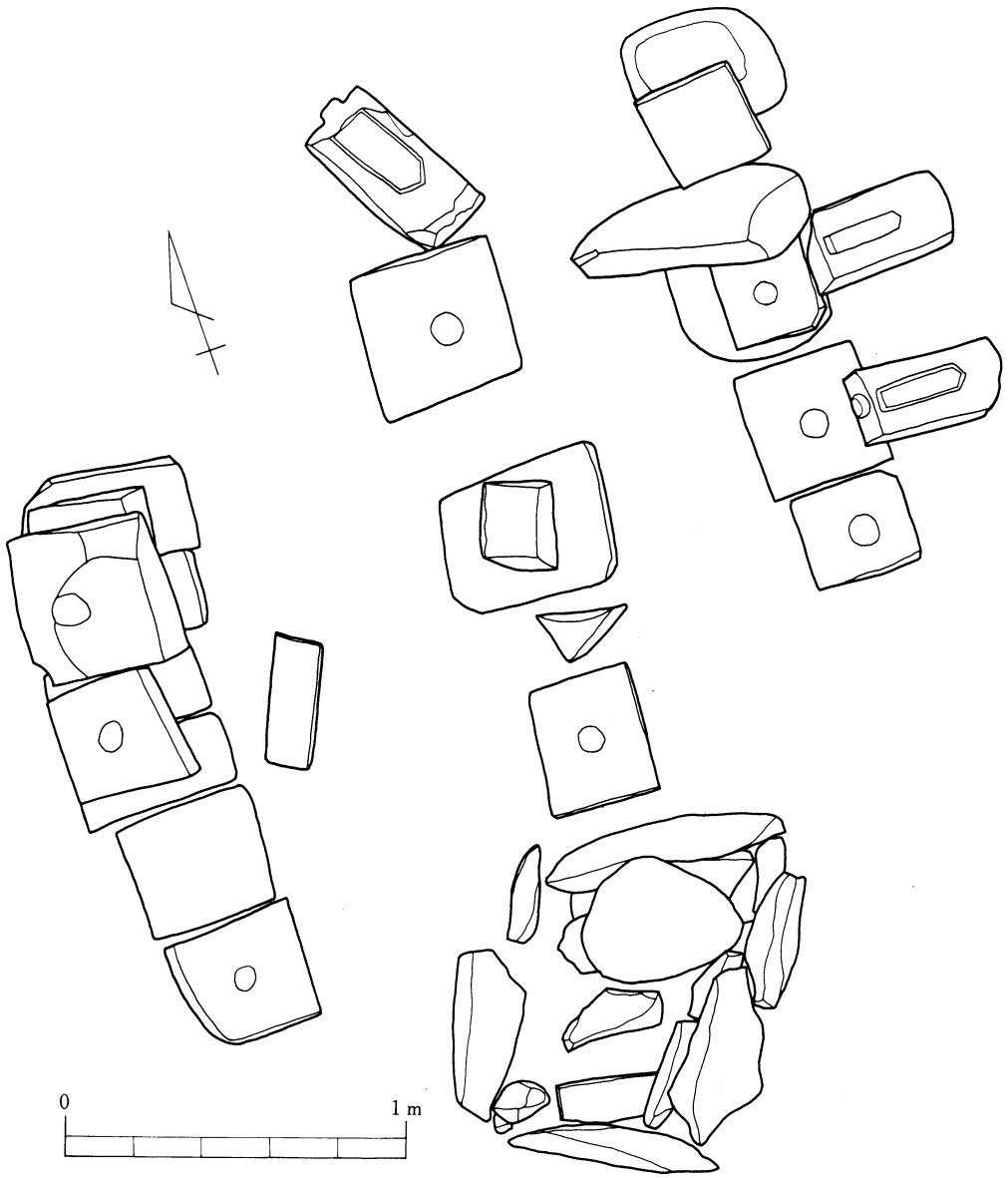
1つには正面中央部に「良積得定門」，右に「正徳二壬辰年」，左側に「三月七□」。

1つは「玄秋□門」，右に「文化七庚午」，左に「七月八日」と刻み，墨を入れてある。

1つは「江□定門」，右に「寛政八」，左に「八月廿六日」，裏面には「小屋敷元，仲右エ門」と刻む。

その他に「寛政九年　秋山　信女　八月□三日」，裏面に「小屋敷　金兵衛母」。

「文化九壬申　□翁　定門　正月十九日」，裏面に「小屋敷元　父　金兵衛」



第153図　近世墓2群の墓石平面図

「安永三年　壽松信士　□□十六日」と刻むものがある。

ちなみに正徳２年は西暦1712年であり，文化９年は1812年であることから，少なくとも1700年代までは溯ることができる。

また俗名とともに「小屋敷元」と居住地を刻んでいるが，本遺跡を含む地域を，土地の人々は「コヤシキモト」と呼んでいることから，当地に葬られた人々の居住地が知れる。

墓石のほか，Ｂ－17，18区には長軸 105cm，短軸90cmの平面形が矩形になった安山岩の板石で囲まれた１隅に安山岩質の一枚石を立石するものが検出された。

この石囲いの下には何らの遺構も検出されなかったが，墓石に代る１つの墓かとも考えられる。

(2)墓坑

１．１号墓坑（第 154図）

17—Ｂ，16－Ｂ区に検出されたもので，11号墓坑，13号墓坑と切合う。

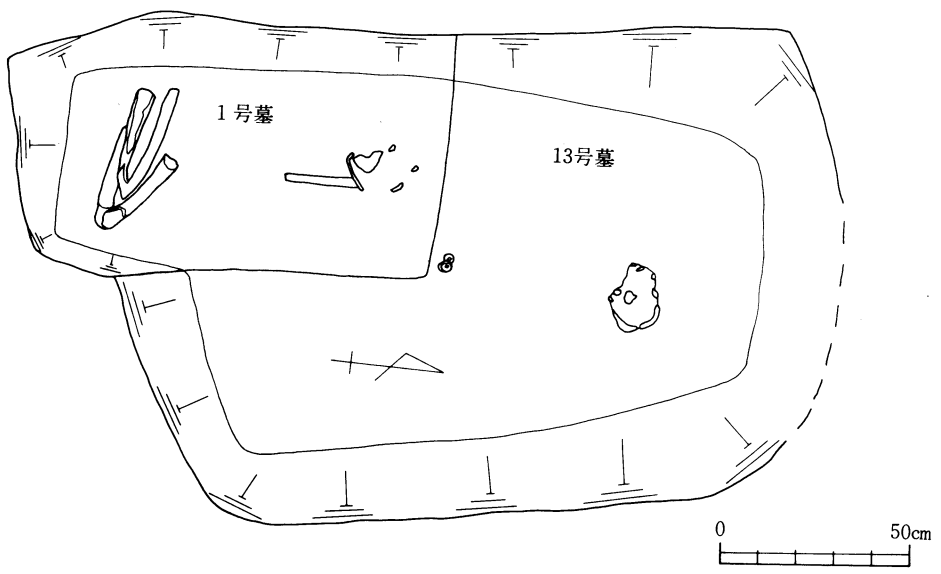
長軸113cm，短軸65cm，深さ 120cmを測る平面形，長方形を呈し，長軸はＮ－13°－Ｅにとる

人骨は頭蓋，四肢骨，大腿骨等であるが遺存度はあまりよくない。頭位は北である。

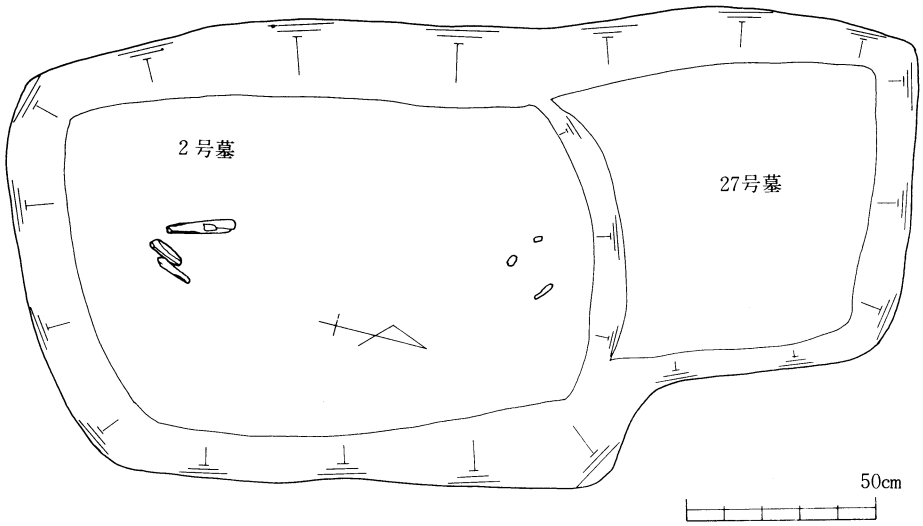
副葬品は検出されなかった。

２．２号墓坑（第 155図）

19－Ｂ区に検出されたもので，27号墓坑と重複す。切合いの観察では，27号墓坑後と考えられる。長軸 159cm，短軸 121cm，深さ 118cmを測る平面形，隅丸方形で，長軸はＮ－1°－Ｗにとる。埋葬人骨の遺存度は極めて悪く，一部の骨が検出されたにすぎない。



第 154図　１・13号墓



第 155図　2・27号墓

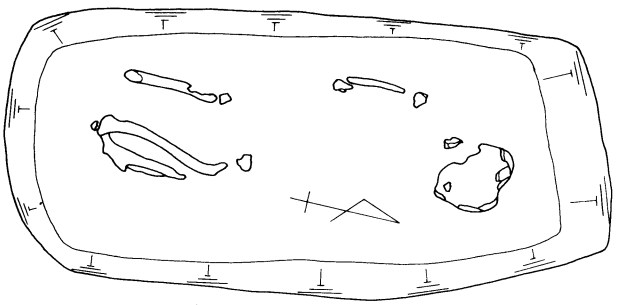
3．3号墓坑（第 156図）

19－B区に検出されたものである。

長軸 159cm，短軸75cm，深さ86cmを測る。平面形は長方形を呈す。長軸はN－3°－Eにとる。

頭位は北であり，頭蓋，大腿骨等が遺存していた。

副葬品は検出されなかった



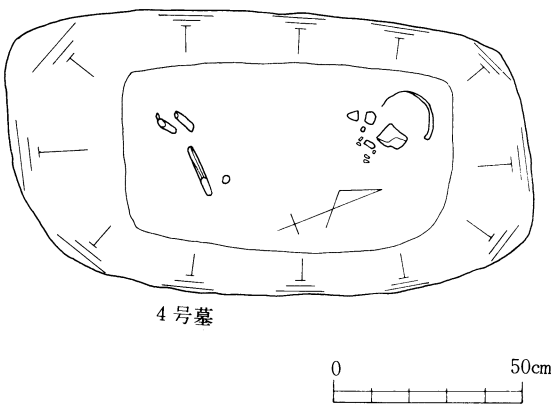
4．4号墓坑（第 156図）

20－B区に検出された。

長軸 136cm，短軸 75 cm，深さ44cmを測る。平面形は隅丸方形を呈し，長軸はN－20°－Eにとる。

頭位は北にとる。

副葬品は「寛永通宝」7枚であった。



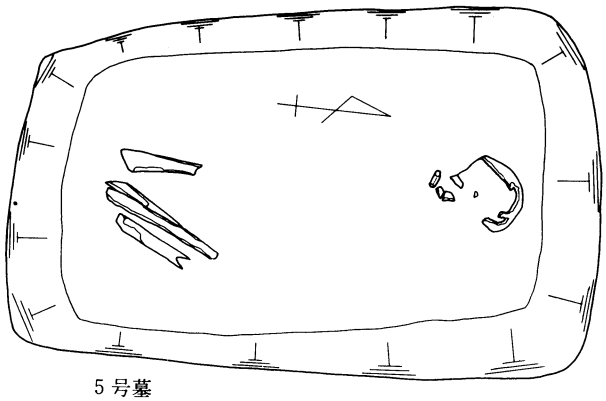
第 156図　3・4号墓

5．5号墓坑（第 157図）

19，20－B区に検出されたもので，長軸 156cm，短軸96cm，深さ92cmを測る。平面形は長方形を呈し，長軸はN－3°－Wにとる。

頭位は北にあり，頭蓋，四肢骨等が検出されたが，遺存度はあまり良くない。

副葬品は出土しなかった。



5号墓

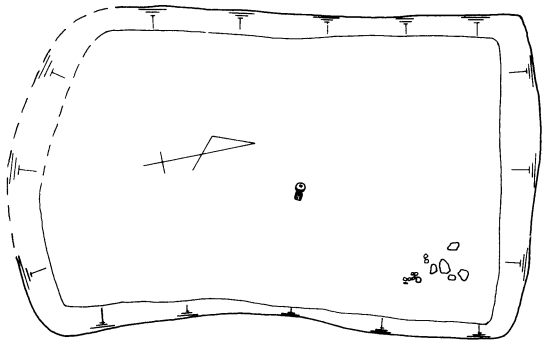
6．6号墓坑（第 157図）

16，17－B区に検出されたもので，長軸 139cm，短軸80cm，深さ32cmを測り，浅い墓坑である。

長軸はN－4°－Eにとる

遺存状態は著しく悪く，頭蓋と歯が検出されたのみである。頭位は北である。

「寛永通宝」7枚と，扇子が副葬されていた。



6号墓

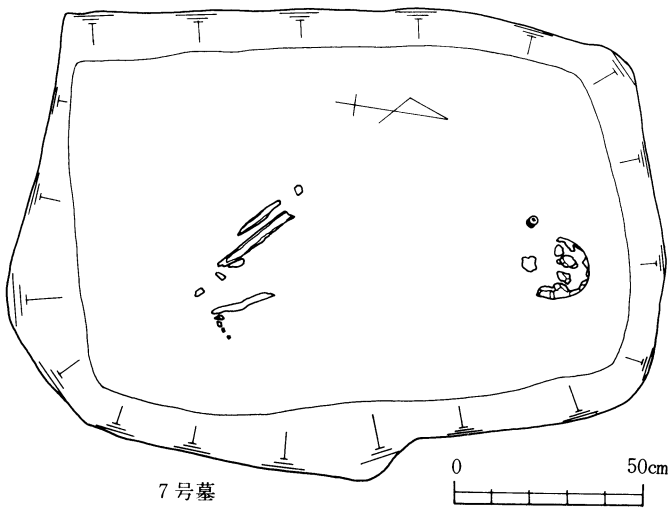
7．7号墓坑（第 157図）

17－B区に検出されたもので，長軸 173cm，短軸124cm，深さ132cmを測る。

平面形は長方形を呈する。

長軸はN－6°－Wにとる。

頭位は北にとり，「寛永通宝」7枚を副葬し，他に木棺片・釘が認められた。



7号墓

第 157図　5・6・7号墓

8．8号墓坑（第 158図）

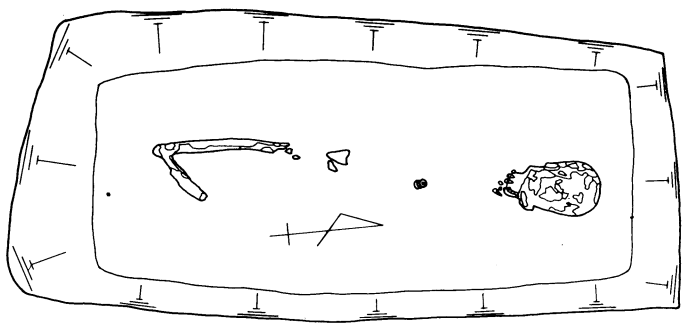
16，17－B区に検出されたもので，長軸 175cm，短軸80cm，深さ 145cmを測る。

平面形は長方形を呈する。

長軸はN－13°－Eにとる。

遺体は頭位を北にとり，大部分が遺存するが，変形やひずみが著しい。

「寛永通宝」7枚を副葬する。



8号墓

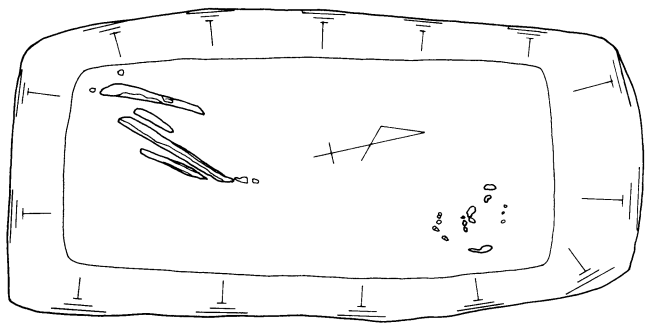
9．9号墓坑（第 158図）

16－B区に検出されたもので，東側に12号墓坑が隣接する。

長軸 167cm，短軸81cm，深さ 132cmを測る。平面形は長方形を呈し，主軸はN－12°－Eにとる。

頭位は北にとる。

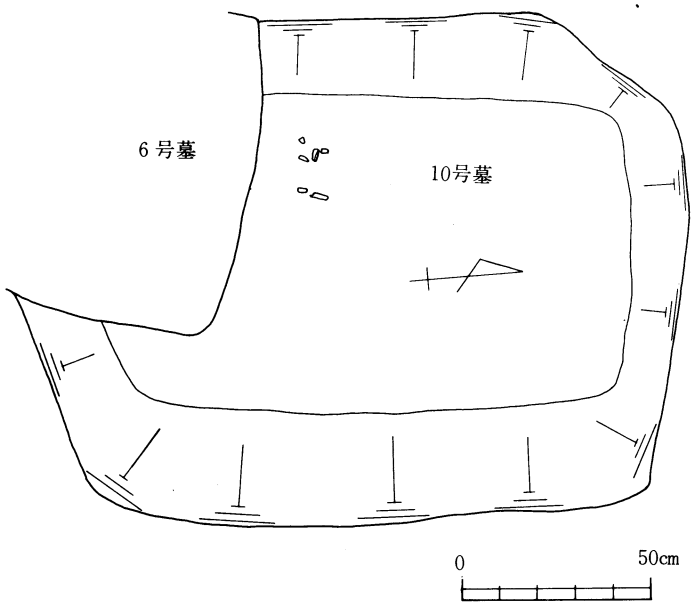
副葬品は認められなかった。



9号墓

10．10号墓坑（第 158図）

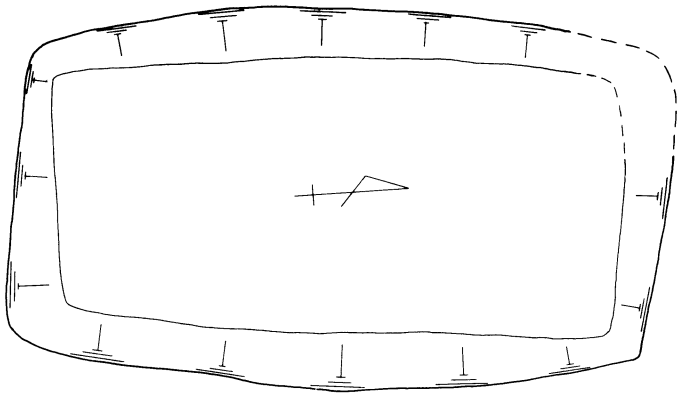
16－B区に検出されたもので，6号，17号墓坑と重複す。6号が10号を切っていることがわかる。長軸は不明，短軸 134cm，深さ114cmを測る。長方形を呈する。長軸はN－4°－Eにとり，「寛永通宝」7枚を副葬し，頭位は北にとる。



第 158図　8・9・10号墓

11．11号墓坑（第 159図）

17－B区に検出されたもので，12，6，1号墓坑が西と北に隣接する。長軸172cm，短軸101cm，深さ70cmを測り，平面形は長方形を呈し主軸はN－7°－Eにとる。骨は検出されなかった。「寛永通宝」2枚を副葬する。

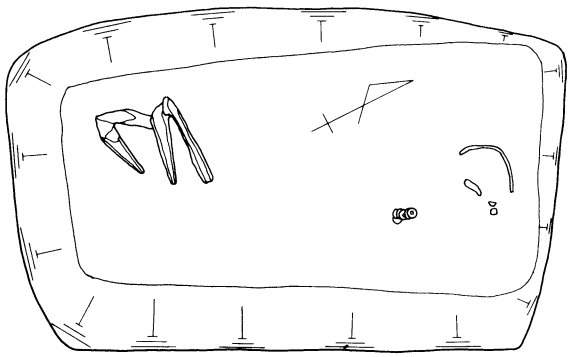


11号墓

12．12号墓坑（第 159図）

16－B区に検出された。東，西，北に11，9，6号が隣接し，6号と重複する

長軸 143cm，短軸91cm，深さ 126cmを測る長方形を呈する。主軸はN－26°－Eにとる。頭位は北であるが遺存度は良くない。「寛永通宝」7枚を副葬する。



12号墓

13．13号墓坑（第 154図）

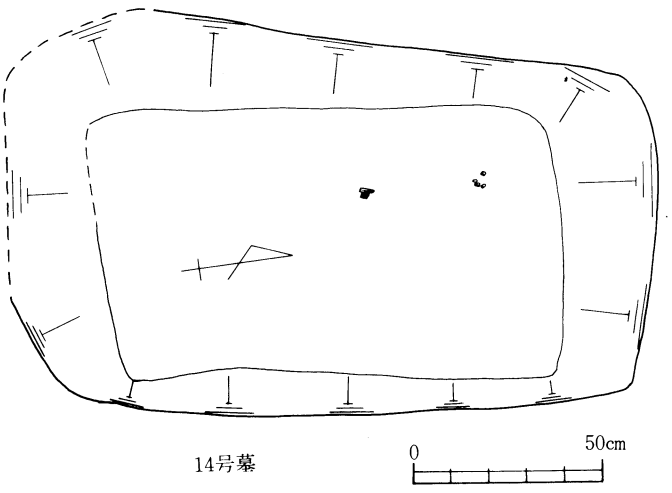
16，17－B区に検出された。1，14号と重複する。

長軸は推定 191cm，短軸 126cm，深さ 126cmを測り平面形，長方形を呈する。

長軸はN－8°－Eにとる

頭蓋のみが遺存し，頭位は北である。

「寛永通宝」7枚を副葬する。

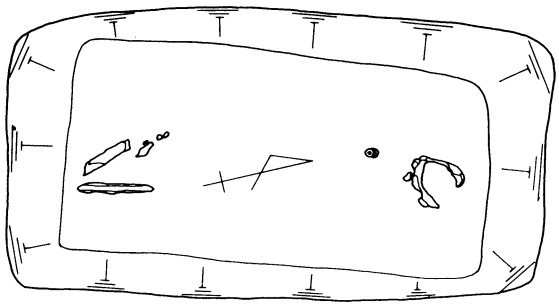


14号墓

第 159図　11・12・14号墓

14．14号墓坑（第 159図）

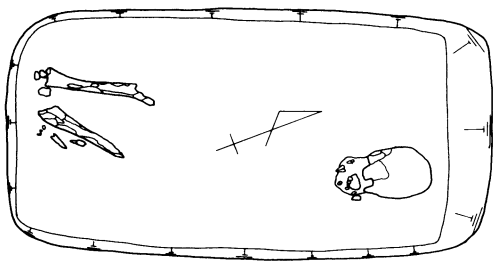
17－B区に検出したもので，南縁で13号墓坑と重複する。長軸は推定 171cm，短軸 100cm，深さ 105cmを測る。平面形，長方形で長軸はN－12°－Eにとる。歯3個を検出した。歯の位置から頭位は北，「寛永通宝」7枚と，青銅製キセルを副葬する



15号墓

15．15号墓坑（第 160図）

16－B区に検出した。長軸 142cm 短軸77cm，深さ 118cmを測る。平面形は長方形で長軸はN－12°－Eにとる。頭位は北，副葬品に「寛永通宝」7枚があった。



16号墓

16．16号墓坑（第 160図）

16，17－B区に検出した。長軸128cm，短軸67cm，深さ 142cmを測る平面形，長方形の墓坑である。主軸はN－22°－Eにとり，頭位は北である。副葬品は出土しなかった。

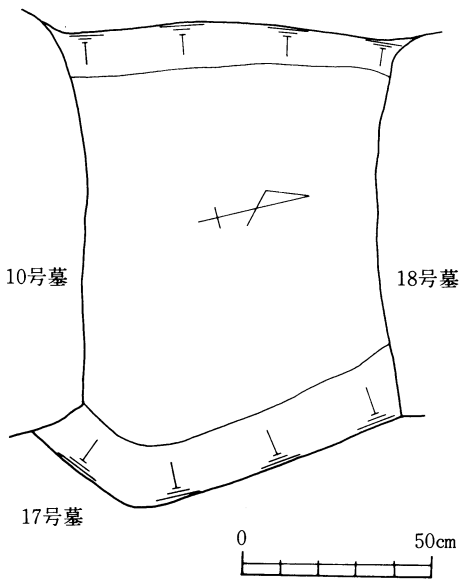
17．17号墓坑（第 160図）

17－B区に検出されたもので，南北に10，18号墓坑と重複する。短軸 127cm，深さは15cmと浅いものである。長軸はN－13°－Eにとる。人骨は検出されなかった。

副葬品は「寛永通宝」2枚である

18，18号墓坑（第 161図）

17－B区に検出されたもので南縁は17号墓坑と重複する。



第 160図　15・16・17号墓

長軸 178cm，短軸 112cm，深さ 158cmを測り平面形，長方形を呈す。

長軸はN－1°－Eにとる。

人骨は頭骨がわずかに遺存する。

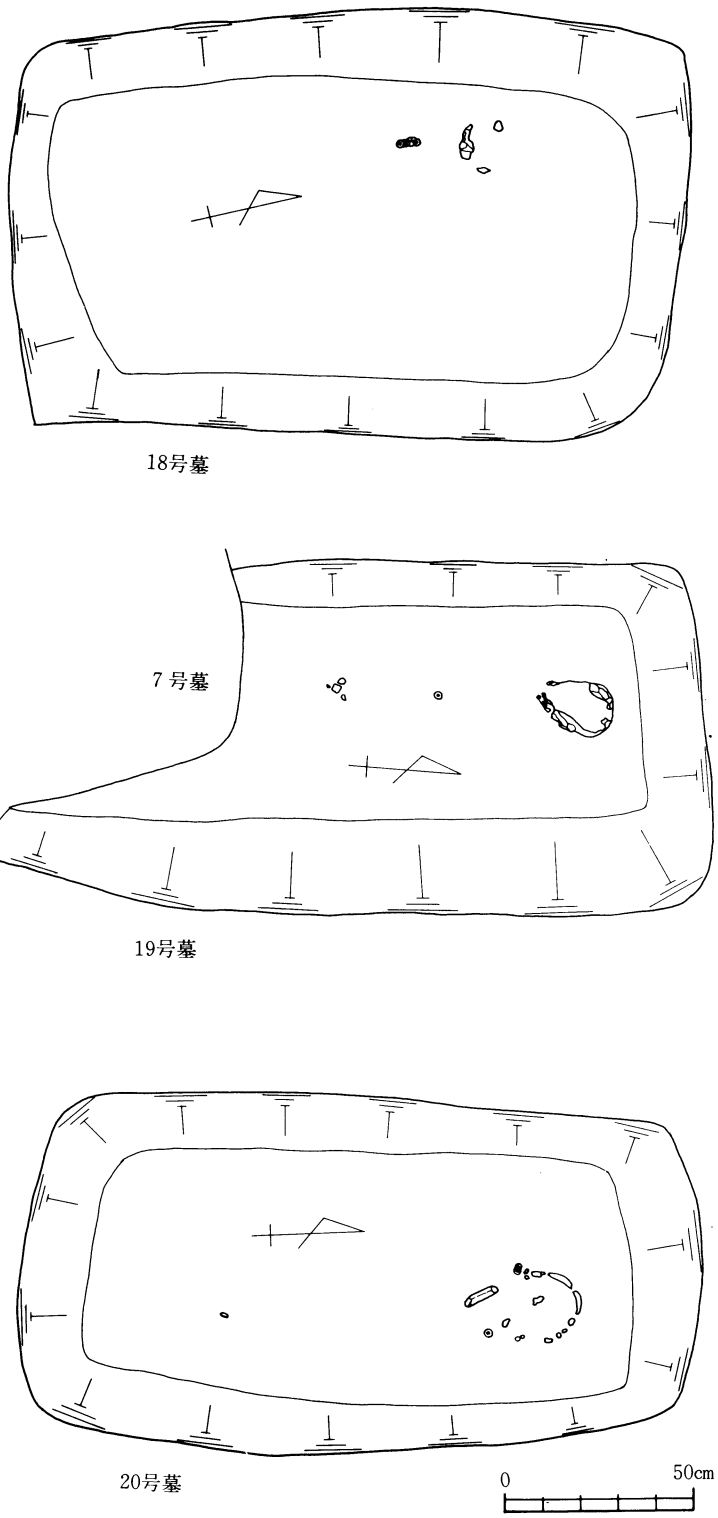
頭位は北で，「寛永通宝」5枚を副葬する。

19．19号墓坑（第161図）

17－B区に検出されたもので，南縁は7号墓坑と重複する。長軸推定125cm，短軸94cm深さ78cmを測り平面形，長方形を呈す。長軸はN－4°－Wにとる。頭位は北で，「寛永通宝」6枚を副葬する。

20．20号墓坑（第 161図）

17－C区に検出されたもので，他の墓坑群とは東に離れている。長軸180cm，短軸95cm深さ79cmを測り，平面形は長方形である。



第 161図　18・19・20号墓

長軸はN－1°－Wにとり，頭位は北で，「寛永通宝」6枚を副葬する。

21．21号墓坑（第 162図）

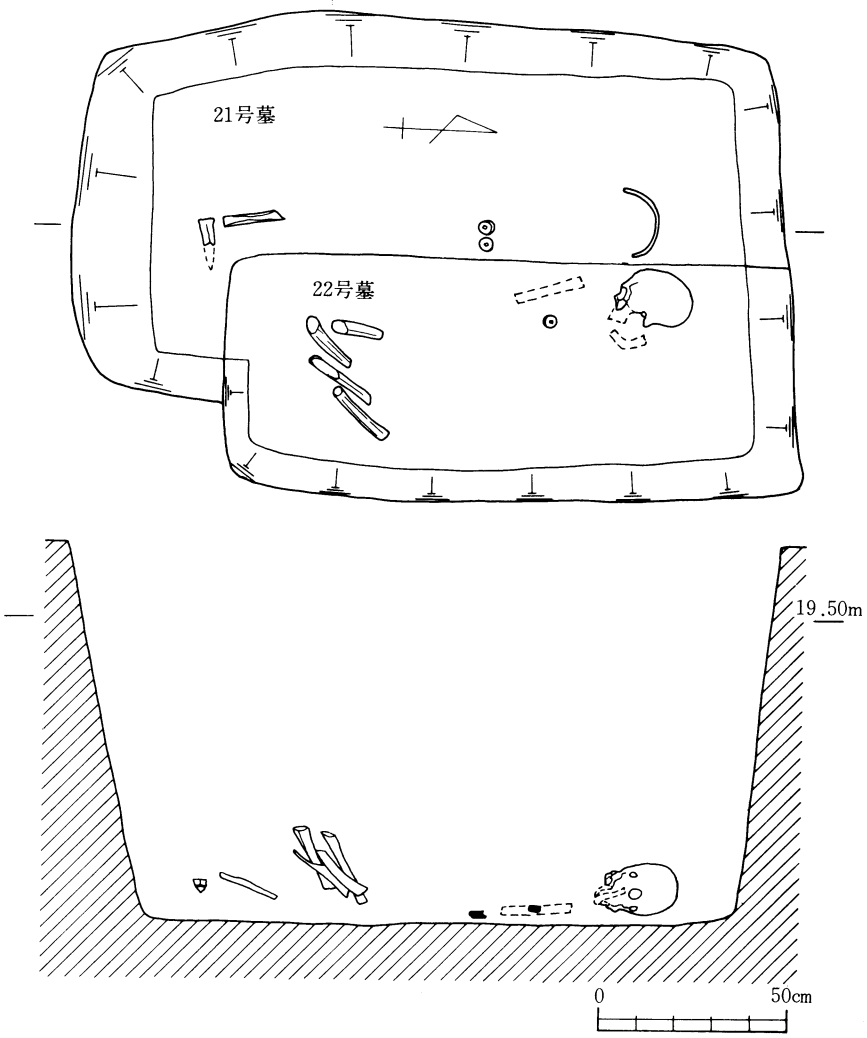
20－B区に検出されたもので，東側約半分は22号墓坑と重複する。長軸 188cm，短軸99cm，深さ 100cmを測る。平面形は長方形を呈し，長軸はN－2°－Wにとる。

頭位は北で，「寛永通宝」6枚を副葬していた。

22．22号墓坑（第 162図）

20－B区に検出されたもので，21号墓坑と重複する。切合い関係から22号墓坑が21号墓坑を切っていることが観察される。長軸 156cm，短軸68cm，深さ 100cmを測る。平面形は長方形で長軸はN－4°－Eにとる。

頭位は北で，「寛永通宝」7枚が副葬されていた。



第 162図　21・22号墓

23．23号墓坑（第163図）

23－B区検出で長軸 168cm，短軸84cm，深さ 122cmで平面形，長方形を呈し，長軸はN－3°－Wにとる。

頭位は北で，「寛永通宝」6枚を副葬していた。

24．24号墓坑（第 163図）

20－B区に検出されたもので長軸 133cm，短軸64cm深さ87cmを測る。

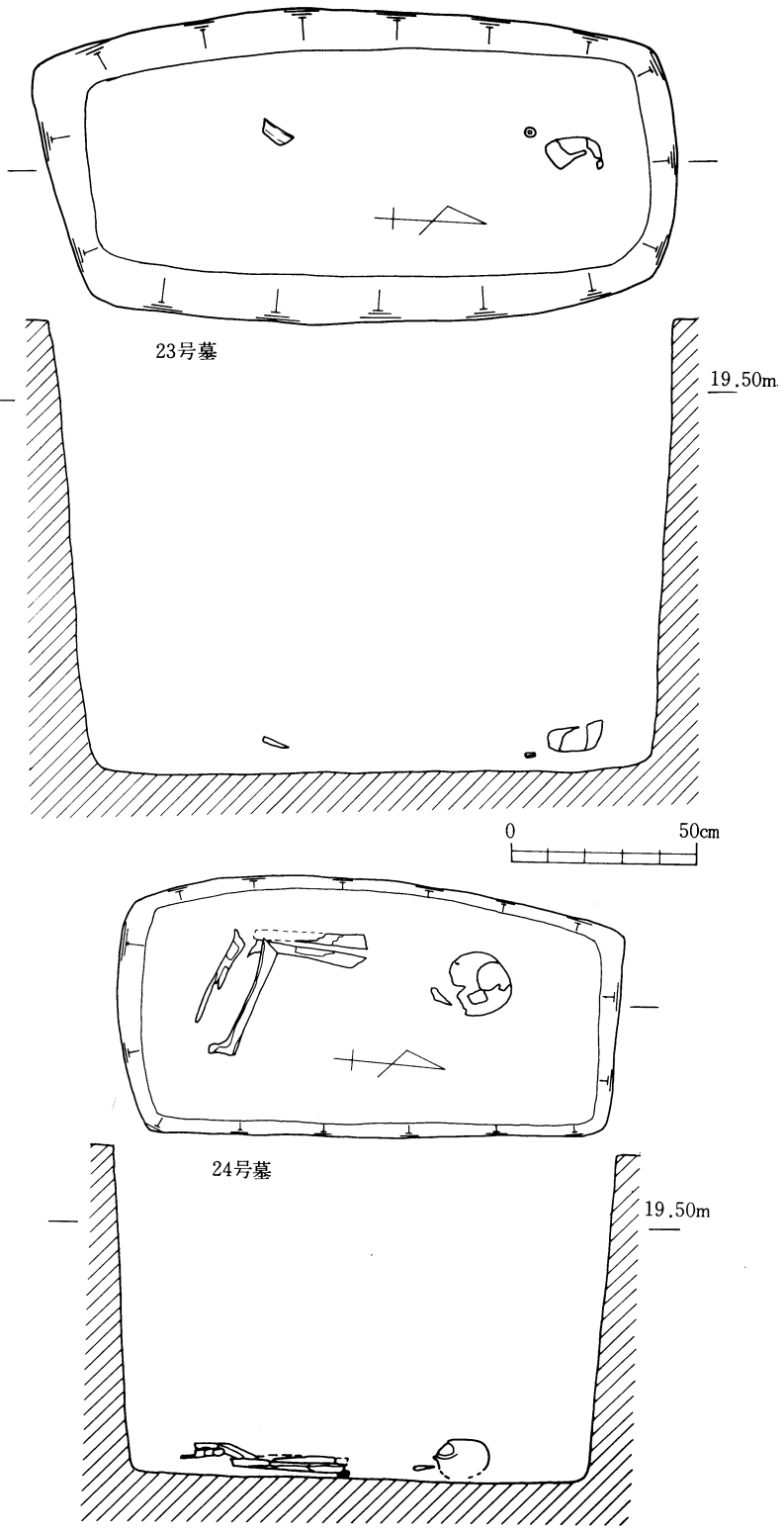
平面形は長方形を呈し，長軸はN－3°－Wにとる。

頭位は北で，副葬品は「寛永通宝」7枚であった。

25．25号墓坑（第 164図）

20－B区に検出したもので，長軸90cm，短軸45cm，深さ45cmと小形の墓坑で，人骨は検出されなかった。

「寛永通宝」7枚を副葬する。



第 163図　23・24号墓

26．26号墓坑（第164図）

20－B区に検出された。長軸 155cm，短軸68cm，深さ95cmを測る平面形，隅丸方形の墓坑で，長軸はN－5°－Wにとる。

頭位は北で，「寛永通宝」4枚が副葬されていた。

27．27号墓坑（第155図）

19－B区に検出されたもので，2号墓坑と重複する。2号墓坑で切られている。

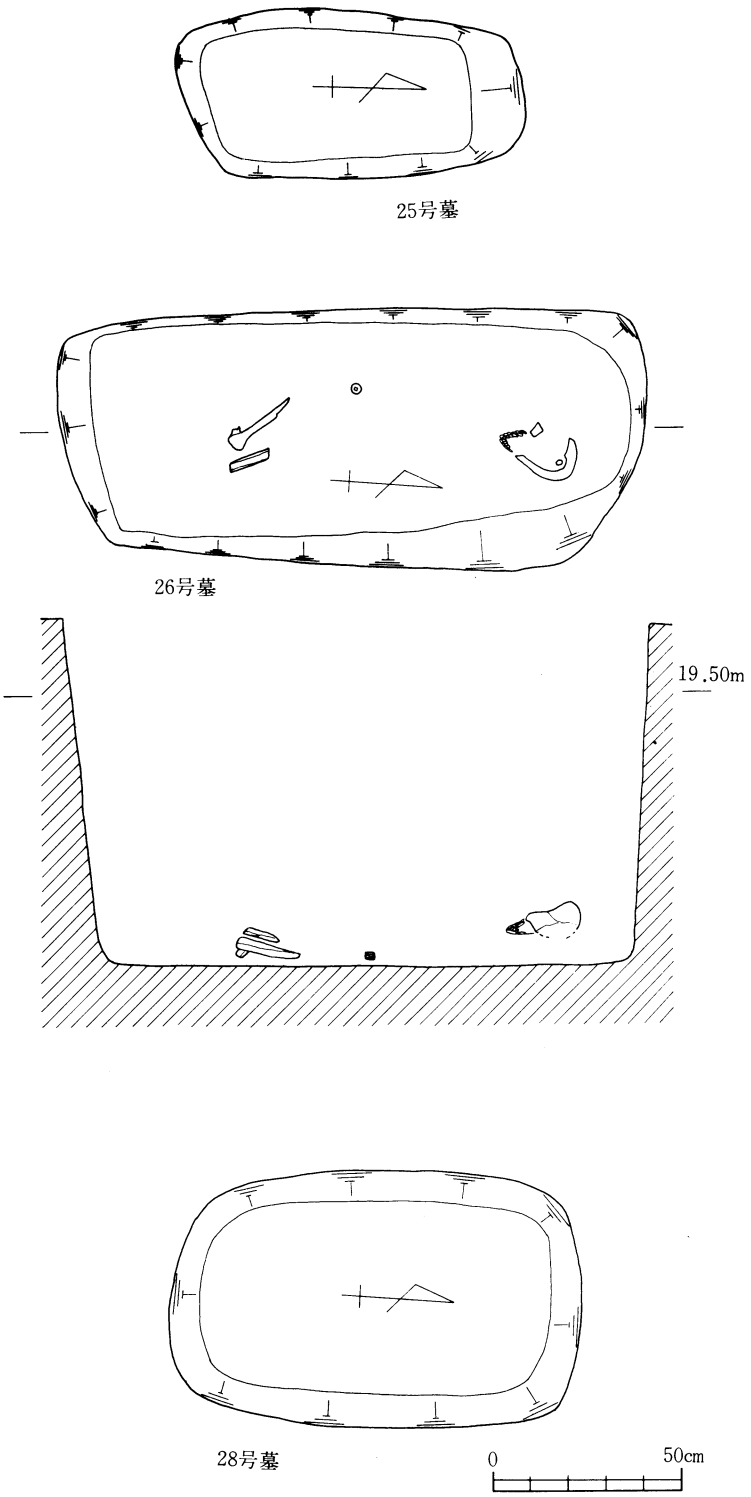
長軸76cm，短軸98cm深さ36cmを測り，平面形，方形を呈す。長軸はN－1°－Wにとる。

人骨，副葬品とも検出されなかった。

28．28号墓坑（第164図）

21－B区に検出されたもので長軸 109cm，短軸68cm，深さ55cmを測り，平面形は隅丸方形を呈す。長軸はN－4°－Wにとる。

人骨，副葬品とも検出されなかった。



第 164図　25・26・28号墓

(3)副葬品

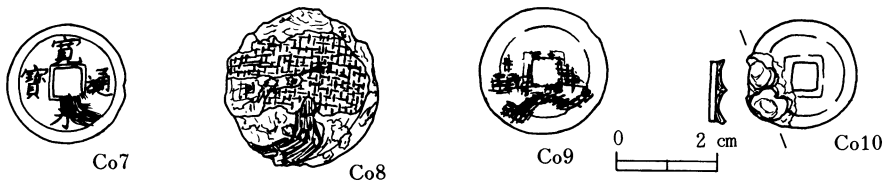
①古銭（第 165・166図，第22表・第23表）

墓坑内より副葬品として古銭 119枚と，古銭に付着した数珠２個が出土した。

このうち第 165図にみるように古銭の表面に布が付着したものと数珠が付着したものが認められた。この布はおそらく埋葬時に副葬した古銭を入れる袋ではなかろうか。

古銭はすべて「寛永通宝」で径は表示する通り2.18cm～2.54cmで，背に「文」，「元」のものもある。

なおこの古銭は１つの墓坑に２～７枚を，ほぼ胸元に副葬していた。枚数は２，４，５，６，７枚とあるが，主体は７枚である。



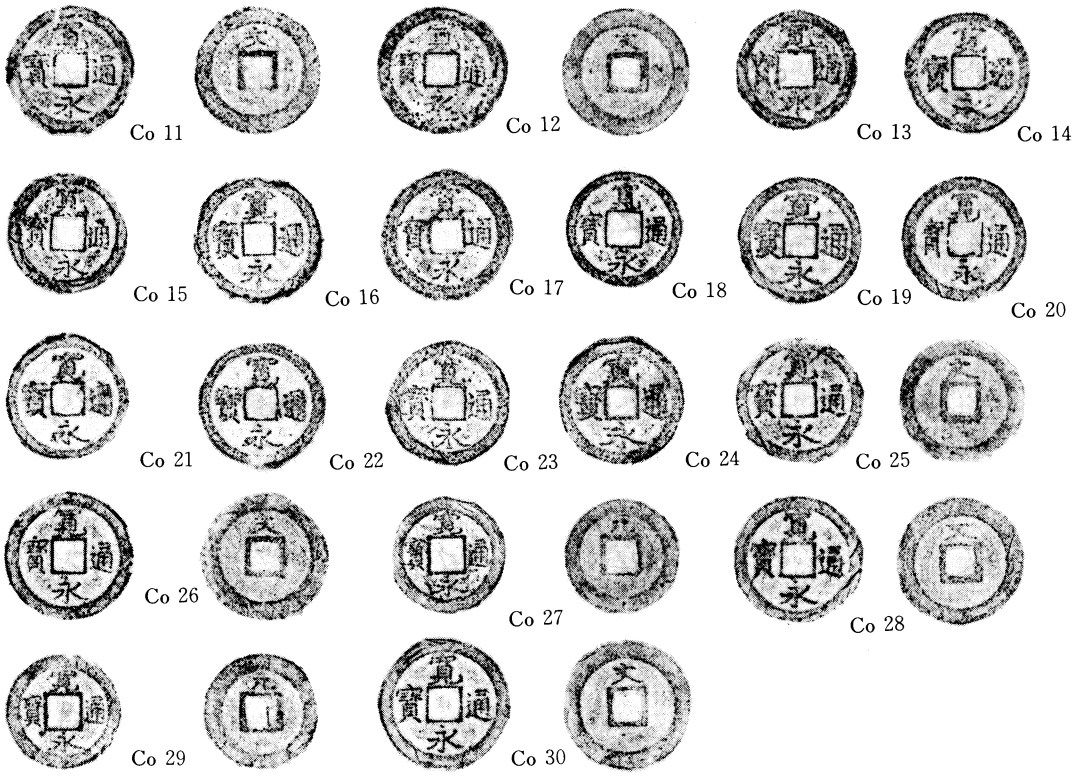
第 165図　古銭実測図

番号	図　番	墓　坑	外径(cm)	外縁厚さ(cm)	備　考	番号	図　番	墓　坑	外径(cm)	外縁厚さcm	備　考
1		4	2.43	0.13		21		7	2.35	0.16	腐食が進む
2		4	2.50	0.12		22		8	2.41	0.16	
3		4	2.31	0.12		23		8	2.38	0.14	
4		4	2.30	0.11		24	Co8	8			布目あり
5		4	2.18	0.12		25		8	2.34	0.16	腐食が進む
6		4	2.18	0.11		26		8	2.53	0.17	腐食が進む
7		4	2.28	0.11		27		8			腐食が進む
8	Co25	6	2.52	0.14	背上に「文」	28		10	2.38	0.12	
9		6	2.43	0.13		29		10	2.54	0.17	
10		6	2.50	0 15		30		10	2.46	0.14	
11		6	2.34	0.14		31		10	2.36	0.13	
12		6	2.45	0.12		32		10	2.48	0.1	腐食が進む
13		6	2.54	0.12		33		10	2.14	0.12	腐食が進む
14		6	2.40	0.13		34		10	2.20	0.18	
15		7	2.41	0.14		35		11	2.43	0.14	
16		7	2.35	0.14		36		11	2.44	0.15	
17		7	2.48	0.14		37	Co26	12	2.55	0.14	背上に「文」
18		7	2.42	0.10		38		12	2.31	0.12	
19		7	2.45	0.14		39		12	2.49	0.16	
20		7	2.34	0 14		40		12	2.34	0.12	

第22表　墓坑出土古銭一覧表（その１）

番号	図　番	墓坑	外径(cm)	外縁厚さ cm	備　考	番号	図　番	墓坑	外径(cm)	外縁厚さ m	備　考
41		12	2.45	0.16		81		20	2.56	0.14	
42		12	2.32	0.14		82		20	2.32	0.12	
43		12	2.38	0.12		83		20	2.35	0.14	
44	Co11	13	2.4	0.13	背上に「文」	84		21	2.31	0.14	
45	Co12	13	2.54	0.14		85		21	2.31	0.14	
46	Co13	13	2.35	0.11		86		21	2.46	0.14	
47	Co14	13	2.42	0.16		87		21	2.54	0.14	
48	Co15	13	2.54	0.14		88	Co10	21	2.18	0.12	布目残る
49	Co16	13	2.48	0.14		89		21			腐食が進む
50	Co17	13	2.47	0.12		90		22	2.43	0.13	
51	Co27	14	2.38	0.12	背上に「元」	91		22	2.44	0.12	
52		14	2.40	0.14		92		22	2.33	0.11	
53		14	2.46	0.12		93		22	2.43	0.14	
54		14	2.56	0.13		94		22	2.30	0.12	
55		14	2.33	0.12		95		22	2.46	0.14	半欠
56		14	2.42	0.12		96		22	2.30	0.12	半欠
57	Co7	14	2.30	0.10	ヒモ付着	97		23	2.48	0.13	
58		15	2.36	0.11		98		23	2.30	0.13	布目あり
59		15	2.44	0.12		99		23	2.45	0.14	〃
60		15	2.43	0.14		100		23	2.61	0.23	布目あり，腐食が進む
61		15	2.30	0.11		101		23	2.33	0.18	〃
62		15	2.48	0.13		102		23	2.50	0.34	〃
63		15	2.46	0.16		103	Co18	24	2.29	0.11	
64		15	2.31	0.14	磨滅している	104	Co19	24	2.50	0.13	
65		17	2.32	0.13	背上に「文」	105	Co20	24	2.46	0.13	
66		17	2.43	0.14		106	Co21	24	2.50	0.12	
67	Co29	18	2.26	0.12	背上に「元」	107	Co22	24	2.45	0.13	
68		18	2.36	0.15		108	Co23	24	2.50	0.14	
69		18	2.31	0.11	半欠	109	Co24	24	2.34	0.13	
70		18	2.48	0.15	腐食が進む	110		25	2.52	0.15	
71		18		0.15	腐食が進む	111		25	2.45	0.11	
72	Co28	19	2.55	0.14	背上に「文」	112		25	2.51	0.14	
73		19	2.28	0.12	背上に「元」	113		25	2.46	0.14	
74		19	2.54	0.16		114		25	2.30	0.12	
75		19	2.43	0.14		115		25	2.35	0.12	
76		19	2.29	0.12		116		25	2.30	0.10	
77		19	2.38	0.15		117		26	2.33	0.12	
78	Co30		2.54	0.14	背上に「文」	118		26	2.38	0.14	
79		20	2.55	0.14		119		26	2.34	0.15	
80		20	2.51	0.15		120	Co9	26	2.52	0.14	数珠が付着

第23表　墓坑出土古銭一覧表（その2）



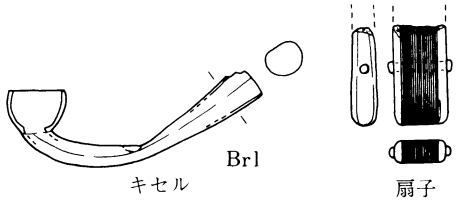
第 166図　古銭拓影(2/3)

②キセル（第 167図）

青銅製のもので全長6.6cmを測る雁首である。

③扇子（第 167図）

竹製，ウルシ塗りのもので要部のみである



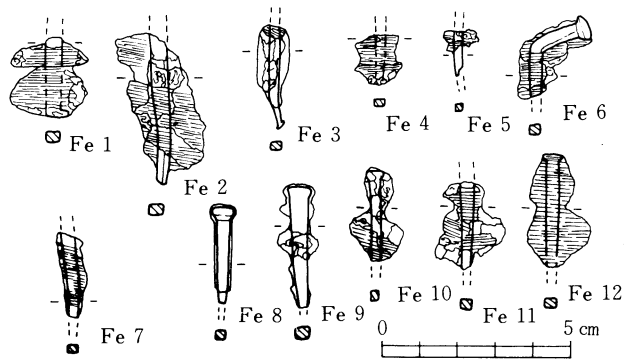
第 167図　キセル・扇子実測図

④鉄釘（第 168図）

棺に使用した鉄製の和釘である。

番号	墓坑	種類	備　考
1	7号	釘	木片付着
2	10〃	〃	木片付着
3	16〃	〃	
4	16〃	〃	木片付着
5	16〃	〃	木片付着
6	22〃	〃	木片付着
7	22〃	〃	木片付着
8	23〃	〃	
9	23〃	〃	
10	23〃	〃	木片付着
11	23〃	〃	木片付着
12	24〃	〃	木片付着

第24表　鉄釘一覧表



第 168図　鉄釘実測図

4攪乱層出土の遺物

遺物は近世の溝3及び溝4の周辺とA～G－16～20区を中心にⅠ層を中心に出土し，器種は碗・皿・鉢・高坏・摺鉢・茶家・茶家蓋・甕・壺等である。これ等は染付磁器を中心とした伊万里焼系と，いわゆる黒薩摩焼と呼ばれる薩摩焼に大別される。

(1)碗類（第169，170図）

碗類のうち1198，1199，1204が陶器，1205の土師器を除けば他はすべて磁器である。器形は碗形，端反，筒形に分類できる。以下文様を主に記述しことわりのないものは全て染付である

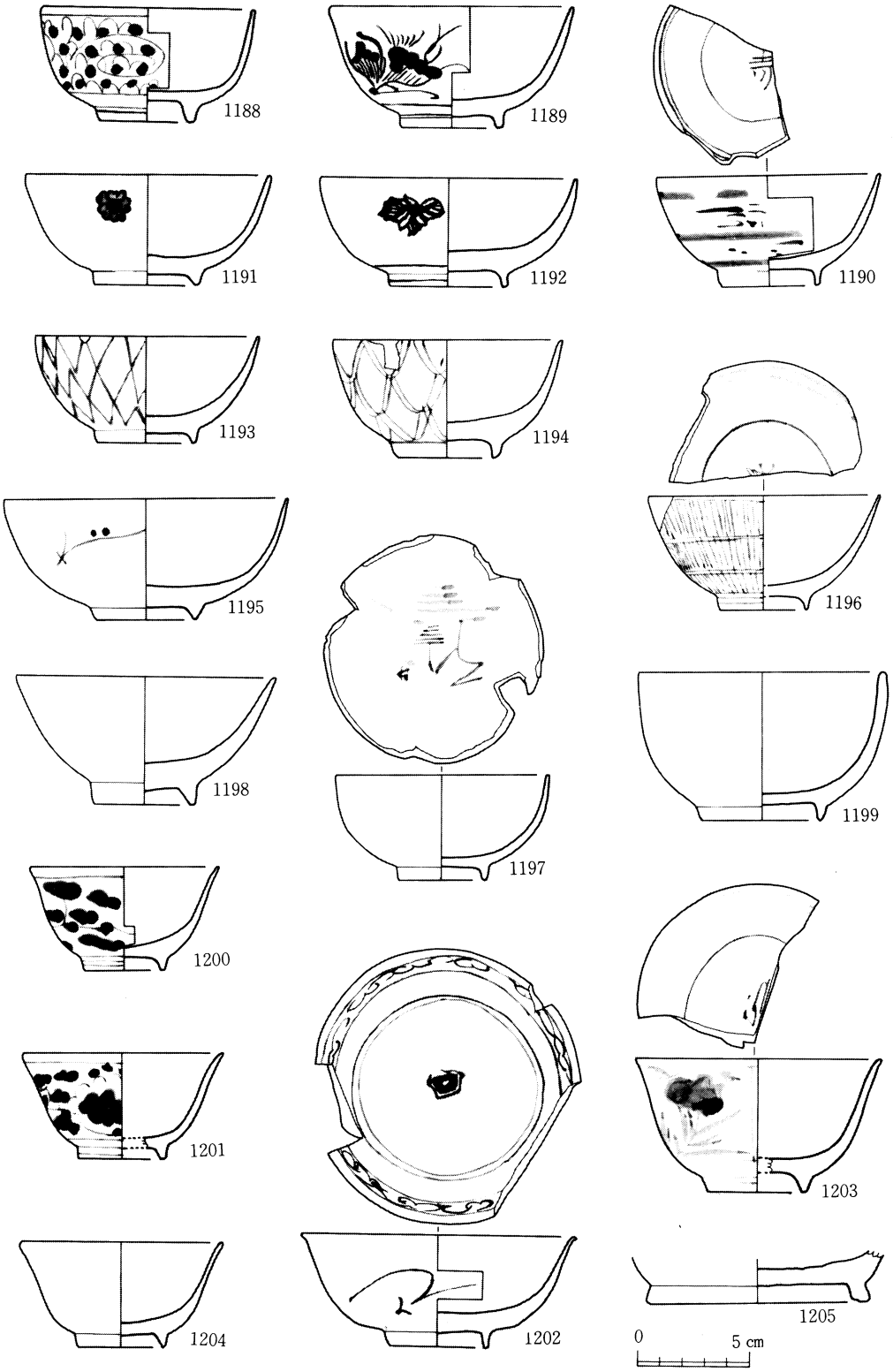
1188は2条の圏線で囲んだ中に唐草文を画く。口縁は口はげ手である。1189は唐草文，草花文，圏線の組合せである。1190は3条の圏線内に海浜を図案化する。1191，1192，は五弁花，蔦のこんにゃく判，1193，1194は一重，二重の綱目文，1195は松葉文で内外とも粗い貫入がはいる。1196は格子状文，1197は見込みに海浜を鉄釉で画く。内外面とも微細貫入がはいる。1198，1199は刷毛目碗である。1200，1201は唐草文と圏線の組合せである。1202は胴部に松葉見込みには唐草文と五弁花文のくずれた文様を画く。1203は縦位に区画された中に草花文，見込みに洲浜状の文様を画く。1204は白薩摩焼，1205は土師器である。1206～1209は筒形碗で，1206，1207は雪持笹文，1208は唐草文，1208は見込み五弁花を画く陶器で内外とも貫入がは入る1197，1204は薩摩焼（白物）で1209は還元焼成，1204は二次的に火を受けたものと思われる。

(2)皿類（第 170図）

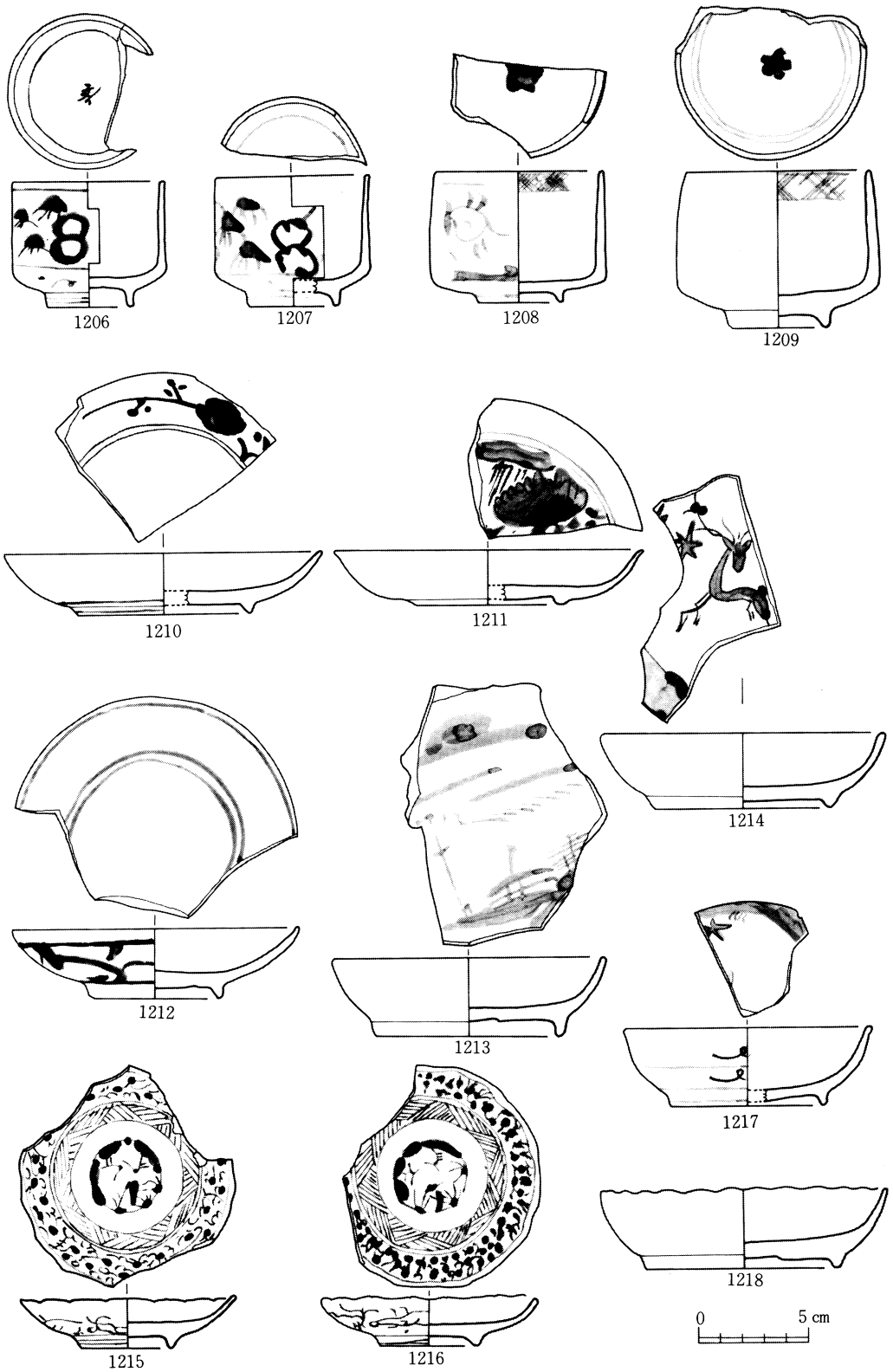
皿はすべて磁器皿である。1210は見込み口縁部に梅花文を濃い呉須で画く。1211は見込み底に草花文を画く。底部は碁笥底状を呈し，畳付部に砂粒が付着する。1212は胴部に太目の圏線と唐草文を画くが発色が悪い。1213は見込み底に海浜を画くものの1212同様発色が悪い。1214は見込み底に細線で縁取りした鹿と楓を達者に画く。1215，1216は見込み口縁部に唐草文，見込み底にたすき文と，松竹文の圏文，胴部に唐草文を画く稜花皿である。1217は1214と同一文様の皿，1218は口縁部に鉄釉を施し，内外とも貫入のは入る稜花皿である。

番号	口径	器高	底径	器種	出土区	層	番号	口径	器高	底径	器種	出土区	層	番号	口径	器高	底径	器種	出土区	層
1188	9.6	5.1	4.3	碗	26－G	1	1198	11.6	5.8	4.6	碗	13－D	1	1208	7.7	6.0	4.9	碗	13－E	1
1189	11.0	5.5	4.6	〃	24－J	〃	1199	11.1	6.6	5.6	〃	16－E	〃	1209	8.4	7.1	4.6	〃	17－A	〃
1190	10.0	5.0	4.5	〃	26－G	〃	1200	8.4	4.6	3.6	〃	25－H	〃	1210	14.5	2.8	8.0	皿	12－E	〃
1191	11.0	5.0	4.6	〃	8－H	〃	1201	9.0	4.8	4.0	〃	25－E	〃	1211	14.1	2.5	6.8	〃	25－H	〃
1192	11.5	4.9	5.3	〃	15－D	〃	1202	12.7	5.0	4.6	〃	15－D	〃	1212	13.1	3.2	6.1	〃	16－L，P	〃
1193	10.0	4.8	4.6	〃	15－D	〃	1203	11.0	6.0	4.5	〃	25－E	〃	1213	12.5	3.6	8.5	〃	25－D	〃
1194	10.2	5.3	4.8	〃	12F～G	〃	1204	9.1	4.7	4.6	〃	16－F	〃	1214	13.0	3.4	8.2	〃	12－F	〃
1195	12.8	5.4	4.6	〃	15－D	〃	1205			10.0	〃	12－G	〃	1215	9.9	2.3	4.2	〃		
1196	10.3	5.1	4.6	〃	15－D	〃	1206	7.0	5.7	4.0	〃	15－D	〃	1216	9.9	2.2	4.5	〃	18－A	1
1197	9.6	4.6	4.0	〃	13－D	〃	1207	7.0	6.0	4.2	〃	20－A	〃	1217	11.4	3.6	7.2	〃	表　採	

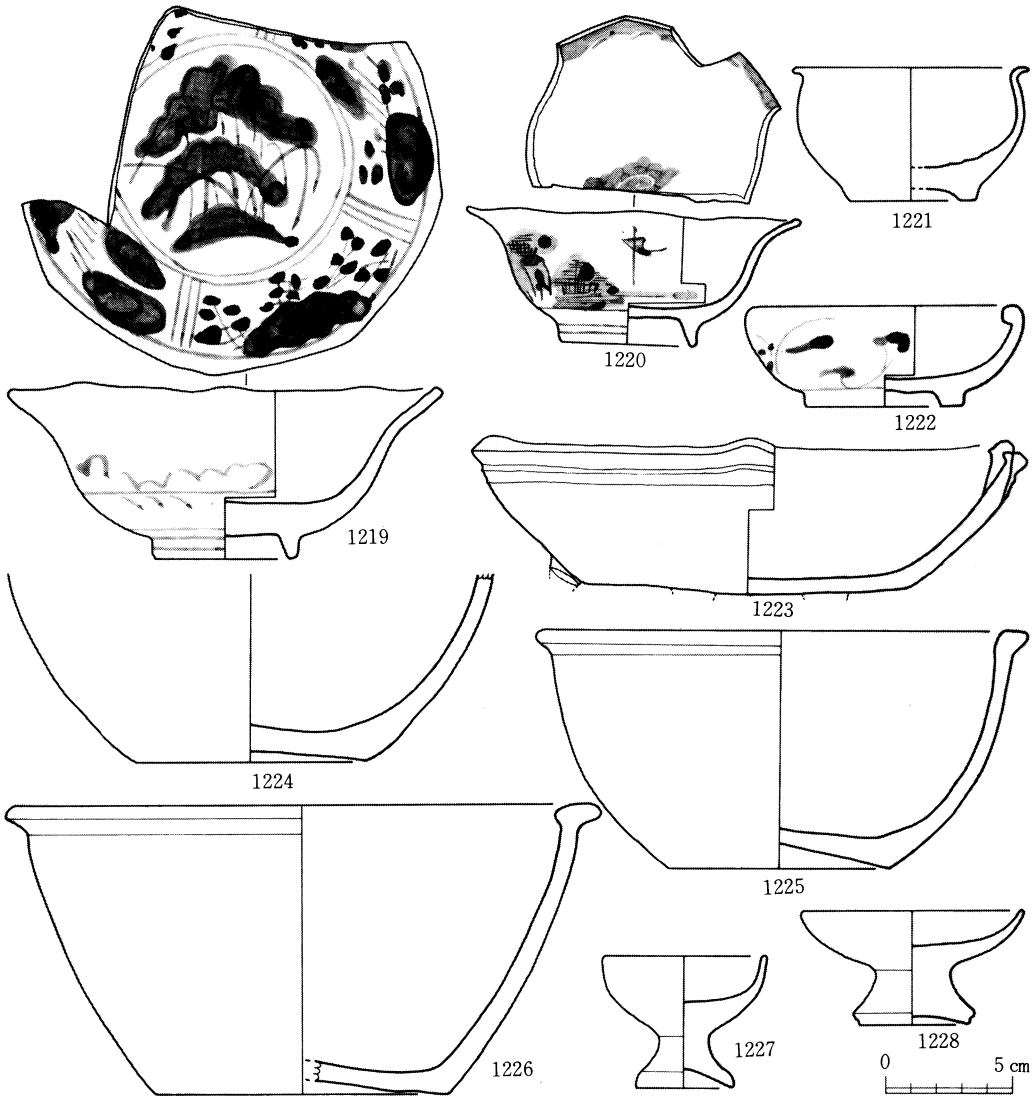
第25表　碗類・皿計測表　（単位　cm）


1188
1189
1190
1191
1192
1193
1194
1195
1196
1197
1198
1199
1200
1201
1202
1203
1204
1205
0
5 cm

第169図　碗　　類(1)


1206
1207
1208
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
0
5 cm

第170図　碗　　類(2)・皿



第 171図　鉢・高坏

(3)鉢・高坏（第 171図）

鉢は染付磁器と陶磁に類別される。**1219**は八角の口縁をもち外反する器形である。

胴部及び高台には各々２条の圏線が呉須で巡る。胴部の圏線の上下には緑釉で簡略化された唐草文を描く。見込みは縦位に３本の緑釉で区画し，４面を作り，磯浜文と草木様文を対に画き，見込中央部には雪持笹を２条の圏線内に画く。文様のうち枝，笹部は緑釉，他は呉須を濃く塗り描いている。高台畳付に釉はかからない。

1220はやや小ぶりの角鉢で，胴下位，高台際，高台に１条の圏線を巡らし，胴部には磯浜を画く。見込み中央部には雲文，口唇部には雲文様のものを画く，濁りの濃い呉須を用いる。

高台際には釉はかからない。

1221，1222は小鉢で，1221は口縁部が外反し薄手である。釉は口縁部のみに褐釉がかかる。見込みには重ね焼の痕がみられる。1222は口縁部が丸く内側に捻返されたもので，高台際の他は還元焼成のため灰色に近い。胴部には1条の圏線と唐草文を呉須で画く。内外とも粗い貫入がみられる。1223～1226までは薩摩焼の鉢である。1225は3脚付で口縁部は4ケ所内側につまみ出しがある。1223は無釉，1224～1226は褐釉が内外面とも施されている。

1227，1228は高坏で，1227は脚裾部を除き白釉がかかる。1228は陶器で白濁釉がかかる。

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器種	出土区	層	番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器種	出土区	層	番号(cm)	口径(cm)	器高(cm)	底径	器種	出土区	層
1218	13.0	3.6	8.8	皿	14－D	1	1221	9.3	5.2	5.0	鉢	20－F	1	1224	－	－	9.0	鉢	17－A	1
1219	17.2	6.8	5.7	鉢	12－I	〃	1222	11.0	4.0	6.3	〃	9,10－E,F	〃	1225	19.4	9.4	8.7	〃	25－C	〃
1220	13.2	5.3	5.4	〃	20－F	〃	1223	22.0	6.1	12.8	〃			1226	23.5	11.4	11.5	〃	8－D	〃

第26表　皿，鉢計測表　（単位　cm）

(4)摺鉢（第 172図）

摺鉢は1235の瓦器質を除き他はすべて薩摩焼である。1229～1234は薩摩焼の摺鉢で内面には下位から上位にかけて4～6条前後のかき目が施されている。1230は片口，1232には口縁部に注口が付けられる。1233は口径12cmを測る小型の摺鉢である。1235は見込み底及び見込み胴部に6条単位のかき目が施されたものである。

(5)茶家・茶家蓋（第 172図）

茶家は器形から小形，大形に分類できる。小形の茶家は略球形を呈し，3足が付き，1足は注口部直下をややずれた位置に付けて，こぼれが伝い落ちるのを防いだという。

1239，1240は大形のもので，甘酒注と俗称するものである。蔓取付部は注口内にあることを特徴とする。いずれも褐釉が施されている。1241～1245が茶家蓋1246～1248が山茶家蓋である

(6)甕（第 173図）

1249は復元口径28.2cmを測り，口縁部は外反し水平となる。肩部につまみ出しによって造られた2条の突帯が巡る。1250は復元口径16.9cmを測る瓦器質の甕で，丸くすぼまる口縁部をもち，肩部に1条の稜が巡る。1251は復元口径36.4cmを測る。反外する口縁部は水平になり，口縁部下に幅1cmの段を造り出している。

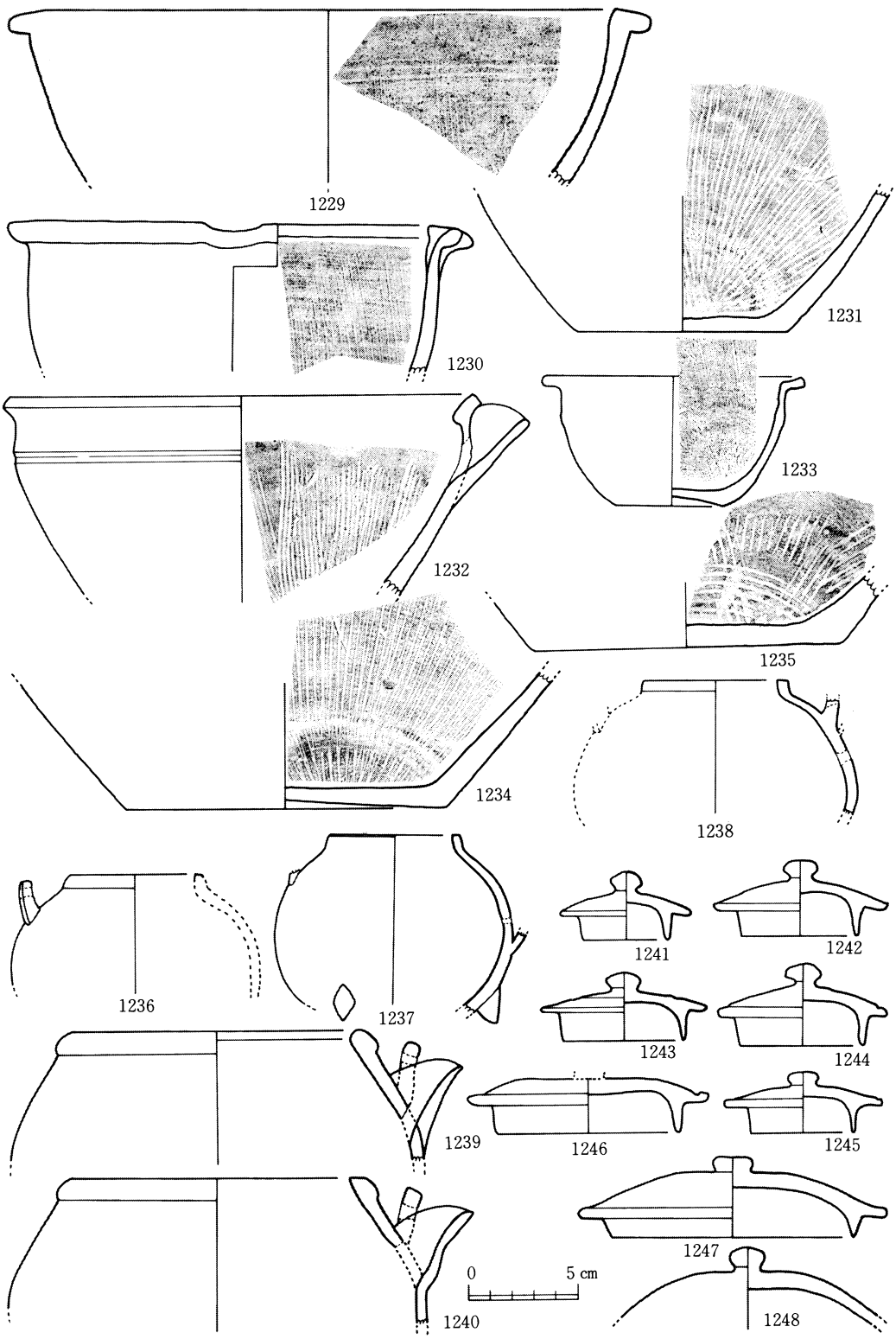
1252～1254までは底部である。1250の瓦器質を除き他は薩摩焼の甕である。

(7)徳利・壺（第 173図）

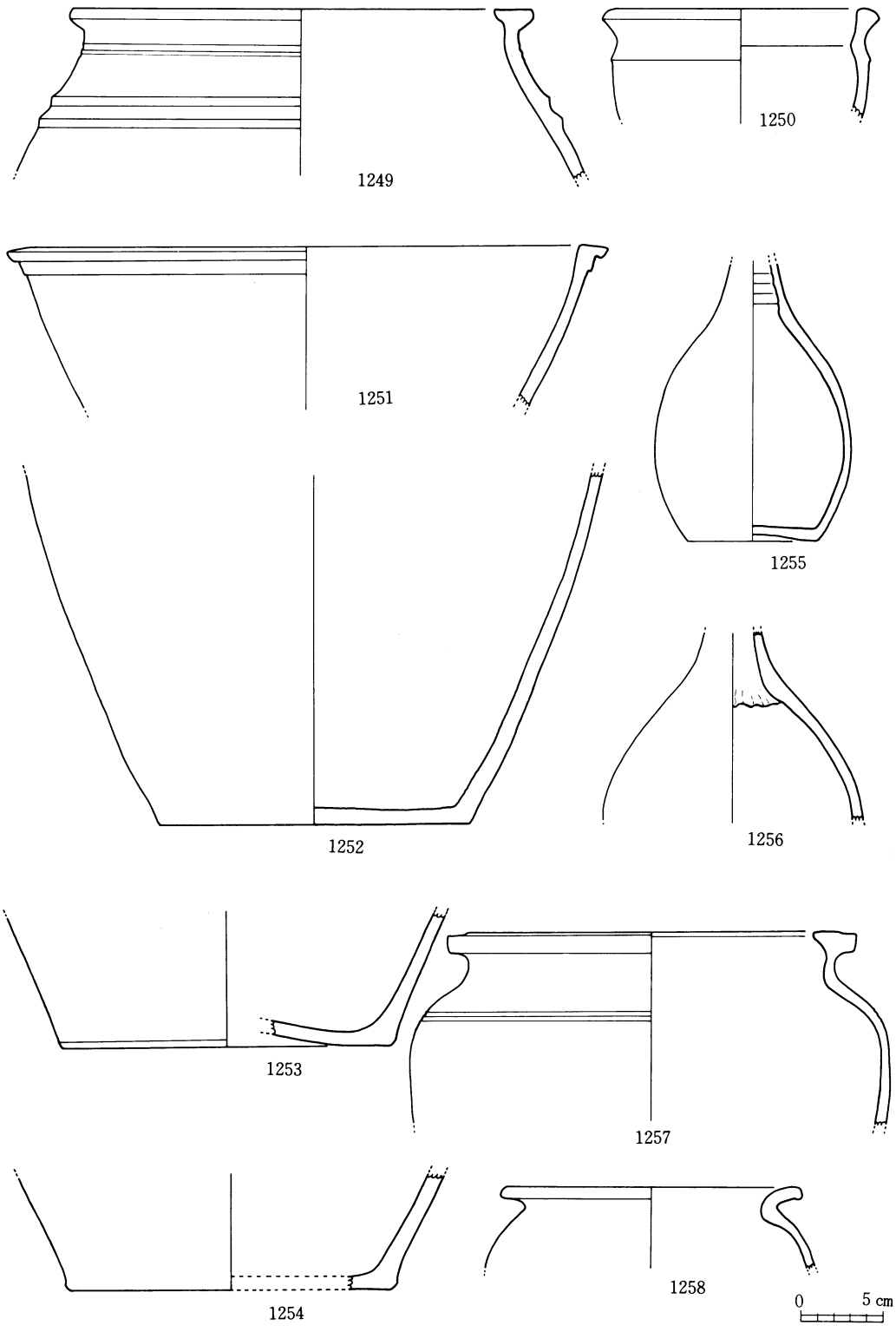
1255，1256は薩摩焼の徳利であるが，口縁部，あるいは底部を欠くため全体の形状，法量は不明である。釉は褐釉が全体に施されてはいるものの，ピンホールや灰かぶりがみられ，製品としては良くない。

1257は薩摩焼の壺である。復元口縁直径25cmを測る。外反する口縁部は水平で，肩部がやや張る器形である。平坦な口縁部には貝目痕が観察される。

1258は瓦器質の壺で復元口径18.1cmを測る。



第172図　摺鉢・茶家・茶家蓋

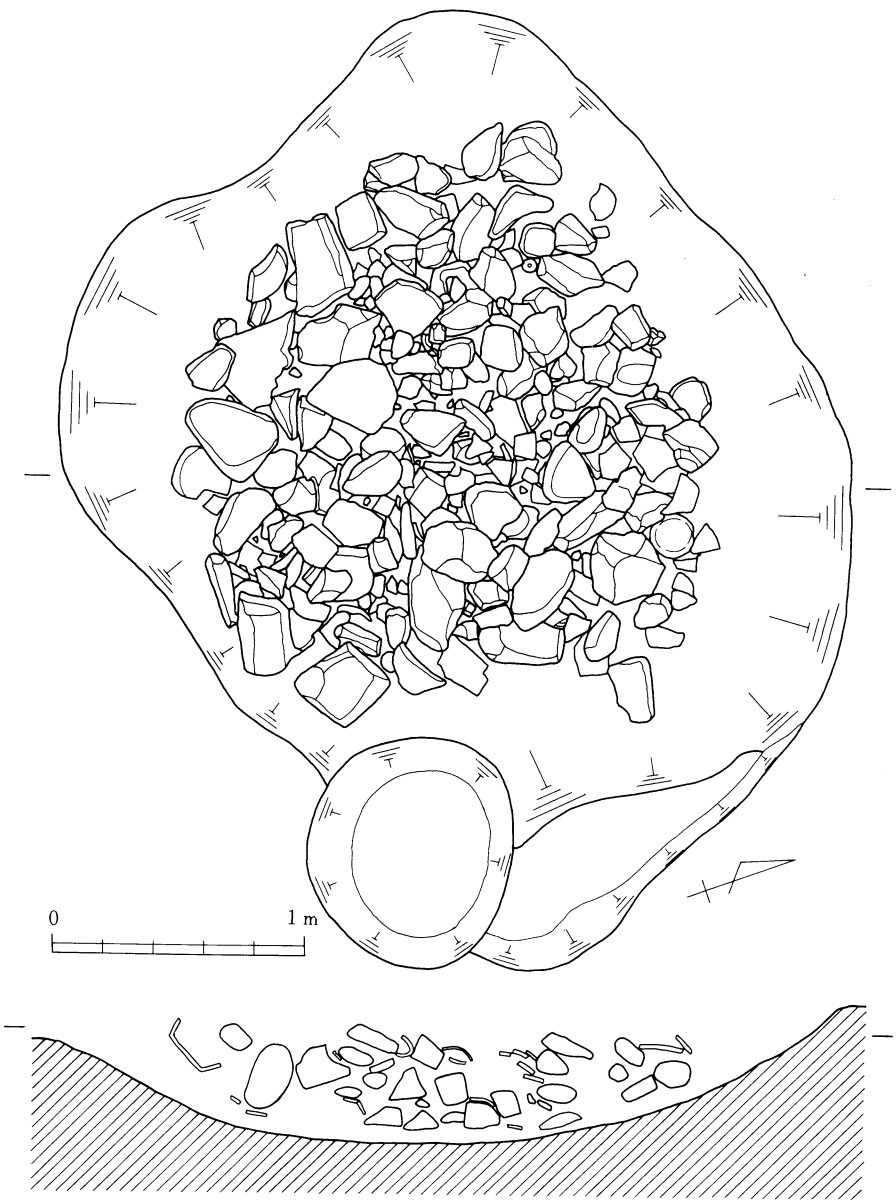


第 173図　甕・徳利・壺

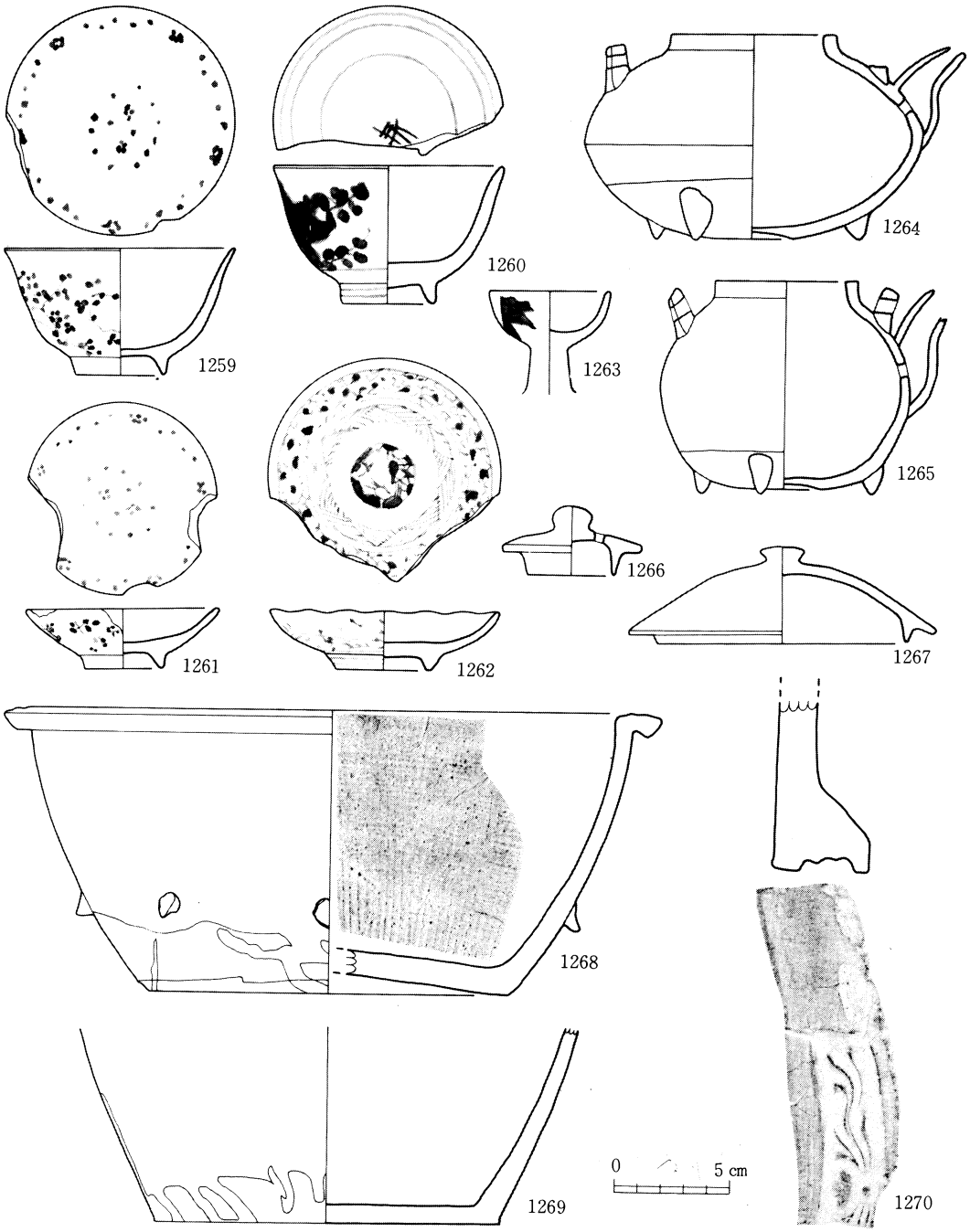
第８章　明治・大正時代

１チリ溜め

21Ｅ区に検出された長径 3.6m，短径 3.1m，深さ40cmの土坑である。土坑内には多量の石をはじめ，近世～近代の染付，甕・スリ鉢・茶家等の陶器，土師器の破片，ガラス製品，瓦，腐食した鉄製品等が出土した。



第 174図　チリ溜め



第 175図　チリ溜め出土遺物

2製糸工場跡

17・18A区付近に検出された土坑は，南北に8m で，西側は用地外にのびるものである。この坑内周辺からは焼け粘土が検出され，多量の瓦・金クソなどが出土した。出土した遺物から遺構の性格は決めかねるが，地元の方からこの位置に大正時代の頃まで製糸工場のあったことを知らされた。

第9章　まとめ

年表でみるように，成岡遺跡では旧石器時代から明治・大正時代まで長期にわたって生活が営まれていた。以下，時代を追ってまとめてみよう。

1.旧石器時代

ナイフ形石器文化（剝片尖頭器・台形石器）と細石器文化（細石核・細石刃）の二文化の石器が出土している。細石核には加治屋園タイプのもの，舟野タイプのもの，小さな礫を用いたものの3種がある。この3タイプのものがどのようなつながりをみせるのかは，次回の本調査に待ちたい。今回は概要のみで，詳細な報告は省略した。

2.縄文時代

早期から晩期までの遺物が出土したが，出土数は少ない。

早期は手向山式土器・石坂式土器・前平式土器・円筒系土器が出土している。後期は市来式土器・鐘ケ崎式土器・御領系の土器が出土している。晩期はⅡ式（黒川式）土器・Ⅲ式（夜臼式）土器が出土しており，他時期のものが少量であるのに対し，多く出土しており，特に晩期Ⅱ式の出土は多い。ほぼ全面に出土しているが，特に34C区・36D区周辺には集中して出土している。

時　代	生活時期	生活跡	主な出土遺物
旧石器			細石刃・細石核
縄文 早期			
縄文 前〃			
縄文 中〃			
縄文 後〃			
縄文 晩〃			
弥生 前期			
弥生 中〃			
弥生 後〃			
古墳 前期		竪穴住居	土師器・須恵器
古墳 後〃		竪穴住居	土師器・須恵器 砥石・鉄器
飛鳥			
奈良			
平安		土坑・掘立柱建物・溝	墨書土器・転用硯 緑釉土器
鎌倉		竪穴住居	
室町		墓	磁器・数珠
安土・桃山			
江戸		建物・溝 道路・墓	陶磁器・寛永通宝
明治		製糸工場	
大正		製糸工場	
昭和		製糸工場	

第27表　年表

石器は石匙1，局部磨製石斧2，磨製石斧1，凹み石5，敲石2がある。

3.弥生時代

弥生式土器は磨耗したものが1点だけある。逆L字状口縁となる中期のものである。

4.古墳時代

竪穴住居跡16基，土坑1が検出され，多くの土器が出土している。

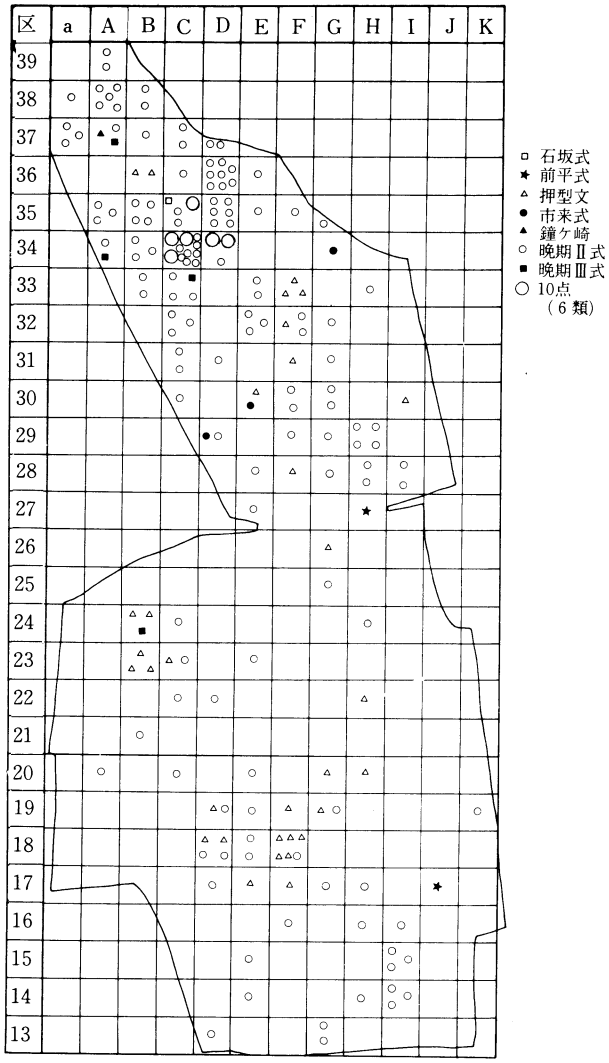
竪穴住居跡はほとんどが方形プランをしており，中央付近が堅くなっている。そして，その

中央部には灰・炭が堆積しており，ここに焼土があるものもあることから，中央炉の存在が予想できる。どの住居跡も主柱穴が確認できなかったことから，掘り込みがないか，あるいは浅い柱穴の存在を考えねばならない。床面に完形品などがあり，住居廃棄時のものと思われるが，4号住居跡は多量の土器が投げこまれており，住居埋没までの土器廃棄場として使われたことが予想される。

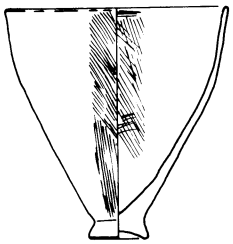
土師器には甕形土器・壺形土器・坩形土器・鉢形土器・高坏形土器・蓋形土器・手づくね土器がある。甕形土器はほとんどがくの字状口縁をもつもので，直立のものは少ない。壺形土器は丸底である。坩形土器は平底で，丹が塗られる。鉢形土器には多くの種類がある。高坏形土器は椀形の坏部と，筒部と裾部の境がはっきりしない脚部とから成り，丹塗りである。蓋形土器は大型のもの1点のみである。手づくね土器は甕形と鉢形がある。

須恵器はすべて古式のもので，坏身・坏蓋・壺・はそう・把手付椀・甕などがある。

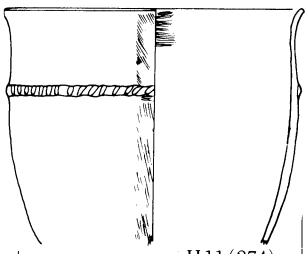
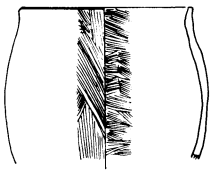
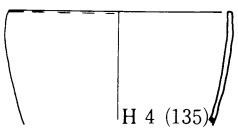
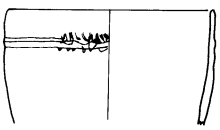
他に砥石・ふいごの羽口などが出土している。



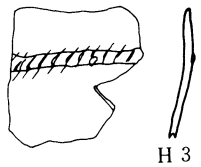
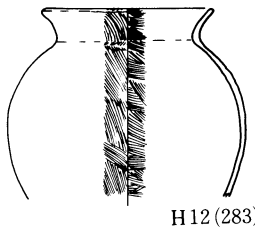
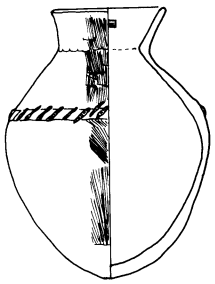
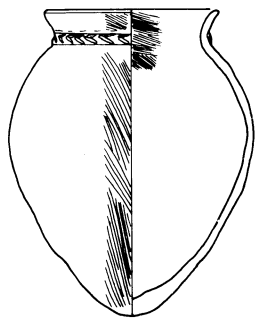
第 176図　縄文式土器出土区図

器種	類	実　測　図	器　　形	整　　形
かめ形土器	Ia₁類	 H4(115)	やや外反ぎみの口縁で，低い脚台がつく	外面・内面ともななめあるいは縦方向のハケナデ

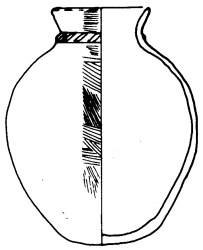
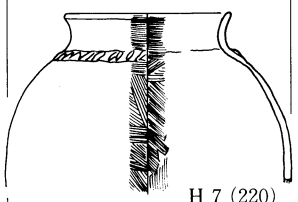
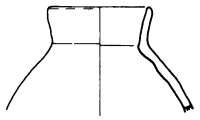
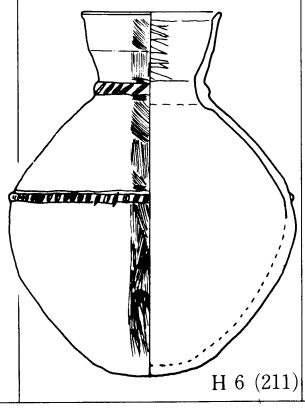
第 177図　古墳時代の土師器分類図(1)

器種	類	実　測　図	器　形	整　形
かめ形土器	Ⅰa₂類	 34B区(352)	くの字状に外反する口縁をもち長胴形を呈す。口縁直径17cm，高さ17.5cmと小型で，低い脚台がつく。	ヘラケズリを主体とする粗い整形で，表面の凹凸が目立つ。口縁付近はヘラナデ，底部付近もヘラナデで仕上げる。
	Ⅰb類	 H11(274)	くの字状に外反する口縁部をもち，頸部付近に板押圧のある貼り付け突帯を有す。	外面はななめ方向のハケナデ。内面は頸部より上が横方向のハケナデ，下がヘラナデ。
	Ⅰc類	 H13(311)	内弯ぎみの器形で，端部付近は外反する。	外面はななめ方向あるいは縦方向のハケナデ。内面はななめ方向あるいは横方向のハケナデ。
	Ⅰd類	 H15(344)	外反しているが，端部付近は直立する。	外面はハケナデを主とするが，一部ヘラナデ。内面はハケナデ。
	Ⅱa類	 H 4 (135)	内弯する口縁部。	外面はななめ方向のハケナデ。内面は縦方向のこまかいハケナデ。
	Ⅱb類	 23C区(355)	内弯する口縁部をもち，口縁下部にヘラ引き，あるいはヘラ押しで突帯様のもようをつける。	外面・内面ともていねいなヘラナデ。

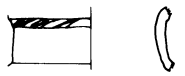
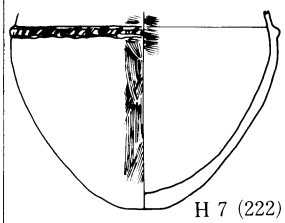
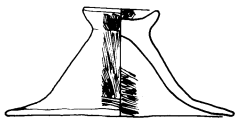
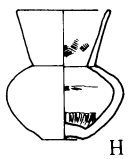
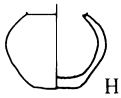
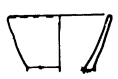
第 178図　古墳時代の土師器分類図(2)

器種	類	実測図	器形	整形
かめ形土器	Ⅱc類	 H 3 (102)	内弯する口縁部をもち，口縁下部にヘラキザミのある突帯が貼り付けられる。	外面・内面ともヘラナデ
	Ⅲ類	 H12(283)	くの字状に外反する口縁部で，丸みをもつ長胴形を呈する。	外面・内面ともななめ方向のハケナデで仕上げ，器壁がうすい。
	脚Ⅰ		浅い脚である。	
	脚Ⅱ類	 H12(285)	深い脚である。	外面はハケナデ，内面はヘラナデである。
壺形土器	Ⅰa類	 H 6 (203)	外へまっすぐ開く口縁部をもち，胴部になめ方向の板押圧のみられる突帯が貼り付けられる。底部は丸底である。	外面はななめ方向，あるいは縦方向のハケナデ。内面はヘラナデであるが一部ハケ目が残る。
	Ⅰb₁類	 H 4 (140)	外へまっすぐ開く口縁部をもち，頸部に矢形の板押圧がみられる突帯を貼りつける。底部は丸底である。	外面はななめ方向あるいは縦方向のハケナデ。内面は頸部から上が横方向のハケナデ，下が横方向のヘラナデ。

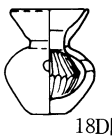
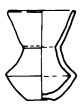
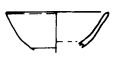
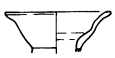
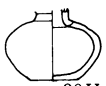
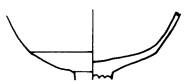
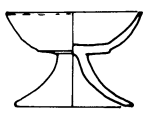
第 179図　古墳時代の土師器分類図(3)

器種	類	実測図	器形	整形
壺形土器	Ⅰb₂類	 H 5 (186)	外へ開く口縁部をもち，頸部に左下がりの板押圧のある突帯が貼り付けられる。やや安定した丸底である。	外面は上半が横方向あるいはななめ方向のハケナデ，下半がヘラナデ。内面はヘラナデ。
	Ⅰc類	 H 7 (220)	やや外へ開く口縁部をもち頸部に左下がりの板押圧のある突帯が貼りつけられる。丸みをもっている。	口縁付近は内外ともヘラ横ナデ。胴部は内外とも粗いハケナデで薄く仕上げている。
	Ⅰd類	 17Ⅰ (366)	外へ開くがやや内弯ぎみの口縁で，頸部に格子状のきざみのある突帯がつく。穿孔あり。	外面はハケナデの上をヘラナデ。内面はていねいなヘラナデ。
	Ⅱ類	 H12 (292)	やや外へ開くが直立ぎみの口縁で，肩は張らず，なで肩となる。	内面・外面ともていねいなヘラナデ。
	Ⅲ類	 H 6 (211)	端部が外反するが，やや内弯ぎみにまっすぐ立ちあがる口縁で，頸部および胴部に板押圧のある突帯が貼り付けられる。高さ39cmと大型である。	外面は底部付近がヘラナデの他はハケナデ。内面はヘラナデ。

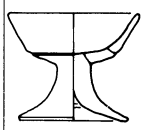
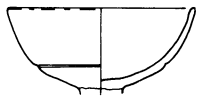
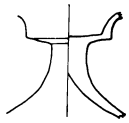
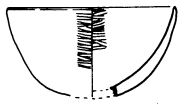
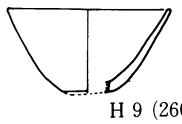
第 180図　古墳時代の土師器分類図(4)

器種	類	実　測　図	器　形	整　形
壺形土器	Ⅳ類	 H14(326)	頸部から外へまっすぐ開き，口縁端が強く外反する。頸部にヘラ押し突帯	外面・内面とも横方向のていねいなヘラナデ。
	底Ⅰ		丸底。	
	底Ⅱ類	 H 7 (222)	安定した丸底。胴部になめ方向の板押圧のある貼り付け突帯。	外面はこまかいハケナデ内面はヘラナデ。
	底Ⅲ類	 H14(327)	丸底であるが，底部の広さが広い。	外面はハケナデ。内面はヘラナデ。
蓋形土器		 H 4 (148)	台付鉢を逆にした形態をしており，口縁直径25cmと大型である。	外面・内面ともハケナデ。
坩形土器	Ⅰ類	 26D区(368)	外反する長い口縁部をもつ小型丸底壺。	横方向のヘラナデ。
	Ⅱa類	 H 5 (180)	開きながらまっすぐのびる口縁部。上半部に最大径をもつ丸みのある胴部であげ底ぎみの平底。	外面はヘラ研磨のあと丹塗り。内面はヘラナデとハケナデ。
	Ⅱb類	 H 7 (224)	aよりやや高い胴部で安定した平底。	外面はヘラ研磨のあと丹塗り。内面はヘラナデ。口縁部と胴部を接合。
	Ⅲa類	 H 9 (252)	やや内反ぎみに端部へ向かう口縁。	外面は横ナデのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデ。

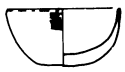
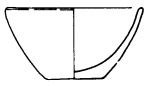
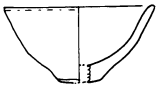
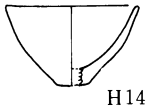
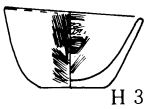
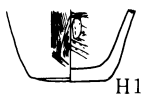
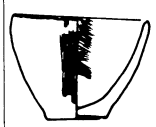
第 181図　古墳時代の土師器分類図(5)

器種	類	実測図	器形	整形
坩形土器	Ⅲb類	 18D区(374)	最大径がやや高い胴部と，頸部からまっすぐ立ち，やや内反ぎみに立ちあがる口縁から成る。肩部に孔がある。	外面は横方向のヘラミガキのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデで，口縁部のみ丹塗り。
	Ⅲc類	 H9 (254)	aよりやや小型。	内外とも丹塗り。
	Ⅲd類	 36AP－2(373)	最大径が中央付近にあり，どっしりした器形。	内外ともヘラナデ。
	Ⅳ類	 H9 (255)	やや内反ぎみに端部へ向かう口縁。肩部がややくぼみ胴上半と下半の間に稜をもつ。ややあげ底。	外はヘラ研磨のあと丹塗り口縁，胴上半，胴下半の3部分を接合。
	Va類	 H9 (251)	内弯ぎみで外へ開き，端部が外反する。	ヘラミガキのあと内外とも丹塗り。
	Vb類	 H12(296)	強く外へ反っている口縁。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデ。
	Vc類	 30HP1(369)	安定した平底で，頸部から直立し，口縁は強く外へ折れる。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデ。
	Ⅵ類	 H7 (223)	外へ短かく反る口縁で肩部に最大径がある。底はややあげ底。	外面は横方向のヘラナデのあと丹塗り。内面もヘラナデ。
高坏形土器	Ⅰ類	 H13(317)	ボール状坏部のたちあがりと底との間は段をもつ。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はていねいなヘラナデ。
	Ⅱa類	 H2 (93)	浅い坏部のたちあがりと底部境にはくぼみ。すその広がる脚部。	坏部の立ちあがりと底部，脚部の3つを接合。外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はヘラナデ。

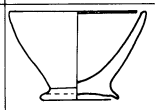
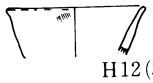
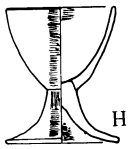
第 182図　古墳時代の土師器分類図(6)

器種	類	実測図	器形	整形
高坏形土器	Ⅱb類	 H 8 (243)	aよりやや深く脚部に裾部と筒部がある。	坏部の立ちあがりと底部，脚部の3つを接合，外面はこまかいヘラナデのあと丹塗り。内面の一部にハケ目。
	Ⅱc類	 H15 (347)	広くて深い坏部。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はヘラナデ。
	Ⅲ類	 H 9 (268)	坏部は平坦な底部と強く外反する口縁部からなる。脚部は広がる裾部。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面はヘラナデと，裾部がハケナデ。
	Ⅳ類	 H 5 (192)	坏部はゆるやかに外反して広がる。	外面はヘラミガキのあと丹塗り。内面は口縁付近がハケナデ，他はヘラナデ。
	脚Ⅰ類	 20A区 (397)	脚部の筒部と裾部の境に4個の穿孔がある。	外面は縦方向のヘラナデ。つくりが粗い。
	脚Ⅱ類	 H 6 (214)	裾が広がる脚部で小型。	外面はヘラミガキで丹塗り。内面は裾部がハケナデ，他はヘラナデ
鉢形土器	Ⅰa類	 H 3 (113)	外へまっすぐ開きながらのびるもので丸底である。	内外ともヘラ横ナデ。
	Ⅰb類	 H 9 (260)	外へまっすぐ開きながらのびるもので，やや深い。丸底である。	外はヘラたてナデ，内はていねいなヘラ横ナデ。
	Ⅰc類	 H 7 (225)	外へまっすぐ開きながらのびるもので，底部近くでやや屈折する。丸底である。	外はヘラナデ，内はハケ横ナデ。

第 183図　古墳時代の土師器分類図(7)

器種	類	実測図	器形	整形
鉢形土器	Ⅱa類	 H2 (98)	内反ぎみの形で不安定な平底	外面は横方向のヘラナデのあと丹塗り。内面は横方向のヘラナデ。
	Ⅱb類	 H11 (282)	内反ぎみの形で不安定な平底aに比べてやや深い。	外面はあらいハケナデ。内面は上がハケナデ，下がヘラナデ。
	Ⅲa類	 H 9 (263)	内反ぎみの形で安定した平底	外面はハケナデのあとヘラミガキ。内面はヘラナデ。
	Ⅲb₁類	 H14 (335)	内反ぎみに外へ開く形で，平底。	外面・内面ともていねいなナデ。
	Ⅲb₂類	 H14 (334)	内反ぎみに外へ開く形で，平底。b₁類に比べて深い。	外面・内面ともていねいなナデ。
	Ⅲc類	 H 9 (258)	口縁部はヘラびきで内へ反る平底。	手づくねづくり。あらいナデ。
	Ⅳa類	 H12 (301)	外へ開きながらまっすぐのびる。平底。	内外面ともヘラミガキのあと丹塗り
	Ⅳb類	 H 3 (110)	外へ開きながらまっすぐのびる。平底。	内外ともハケナデ。
	Ⅳc類	 H14 (336)	安定した平底で，外へ開きながらまっすぐのびる。	外面はこまかいハケナデ。内面はヘラナデ。底に繊維状圧痕
	Va₁類	 H 2 (97)	内反ぎみの器形で，ややあげ底。	外面は上がハケナデ，下がヘラナデ。内面は指ナデ。
	Va₂類	 H11 (281)	内反ぎみの器形で，あげ底。a₁より深い。	外面はていねいな縦方向ハケナデ。内面は横方向ヘラナデ。

第 184図　古墳時代の土師器分類図(8)

器種	類	実測図	器形	整形
鉢形土器	Vb類	 H 7 (226)	外へ開きながらまっすぐ伸び低い脚台がつく。	外面は横方向のヘラナデのあと丹塗り。内面は横方向のヘラナデ。
	Ⅵ類	 H 8 (234)	まっすぐ立ちあがる口縁である。	外面・内面ともヘラナデ。
	Ⅶ類	 H12 (304)	外へまっすぐのび，端部が外反する。	外面はハケナデのあとヘラナデ。内面はヘラナデ。
	Ⅷ類	 H 8 (240)	裾の広がる台のつくグラス状鉢。	外面と鉢部内面はていねいなヘラナデ。脚部内面はハケナデ。鉢部と脚部は貼りつけ。丹塗り。

第 185図　古墳時代の土師器分類図(9)

竪穴住居跡とそれぞれの遺物出土は下表のとおりである。

住居	形	主軸方向	規模	出土遺物					
				甕	壺	坩	高坏	鉢	その他
1	正方形	N 9 度W	3.6m×3.6m	Ⅰa		Ⅳ	Ⅱ	Ⅳa	須恵器
2	長方形	N 7 度E	3.9m×4.2m	Ⅰa	ⅠbⅡ	Ⅱ	Ⅱa	ⅡaⅤa₁Ⅵ	
3	正方形	N 9 度E	5.0m×5.0m	Ⅱc		Ⅲa	Ⅱ	ⅠaⅡbⅣb	砥石
4	長方形	N 5 度E	4.4m×4.3(+α)m	ⅠaⅠbⅡa	Ⅰb₁	ⅡⅣ	ⅠⅡⅢ	Ⅰ～Ⅳ	蓋
5	〃	N 7 度W	4.3m×4.7m	Ⅰb	ⅠbⅠdⅡ	Ⅱ	ⅡⅣ		須恵器
6	〃	N24度W	3.3m×3.6m	Ⅰ	Ⅰa・Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	○	砥石
7	方形	N10度W	4.0m×5.4m	Ⅰa	Ⅰc	ⅡbⅥ	Ⅱ	ⅠcⅢaⅤb	
8	正方形	N19度E	4.5m×4.7m	ⅠaⅠb	Ⅰ		Ⅱb	ⅥⅧ	
9	〃	N56度E	5.3m×5.3m	○	Ⅰd	ⅢⅣⅤ	ⅡⅢ	ⅠⅢⅣ	匙・鉄器
10	台形		(2.3m+5.3m)×4m	Ⅰb					須恵器
11	正方形	N 7 度E	4.3m×4.3m	Ⅰb	Ⅰb₁		Ⅱ	ⅡbⅤa₂	
12	長方形	N71度E	5.0m×5.8m	ⅠaⅠbⅢ	Ⅱ	ⅡⅣⅤ	Ⅱ	ⅣaⅦ	須恵器・砥石
13	〃	N26度E	2.5(+α)m×2.8(+α)m	ⅠaⅠcⅢ		Ⅲc	ⅠⅡ		
14	〃		4.8(+α)m×6(+α)m	ⅠaⅠb	ⅡⅣ	ⅡbⅣ	○	ⅢbⅣc	ふいご口
15	〃	N 4 度W	3.5m×4.0m	ⅠaⅠd			Ⅱc		須恵器
19		N 6 度E		Ⅰa				○	

第28表　竪穴住居跡一覧表

5.奈良～安土桃山時代

ほぼ全域にこの時代の遺物が出土し，柱穴をはじめ竪穴住居，土坑，溝状遺構などが検出された。出土遺物からすると，その中心は平安時代後半から鎌倉時代前半と思われ，遺構もその時代を主体としているようである。

掘立柱建物は11棟をまとめたが，この他にも多くの建物があったらしいことは，柱穴の検出

	形	主軸方向	規　模	出　土　遺　物
掘立1		N10度W	2間×3間	
2		N19度W	2間×2間	
3		N10度W	2間×5間	土師器（坏・埦・甕）
4		N14度W	3間×3間	土師器（皿・坏・蓋・甕）
5		N38度W	3間×？	土師器(坏・甕)内黒土師器埦・須恵器甕
6		N26度W	2間×3間	土師器（坏・埦・甕）
7		N25度W	2間×2間	
8		N1度E	2間×2間	土師器（坏・甕）
9		N30度E	2間×2間	土師器（坏・甕）
10		N9度E	1間×3間	土師器（坏・鉢・甕）
11		N3度E	2間×2間	土師器（坏・甕）須恵器（坏蓋）
竪穴16	方形		2.4m×3.0m	土師器（坏・埦・甕）内黒土師器（埦）
17	隅丸方形		2.7m×2.7m	土師器（坏・甕）
18	隅丸方形		2.4m×3.2m	土師器（皿・坏）内黒土師器（埦）白磁
土坑A	だ円形		0.5m×0.7m	土師器（甕）
B	略円形		0.9m×1.0m	土師器（坏・埦）
C	だ円形		0.7m×1.1m	土師器（坏・甕）須恵器（甕）
D	略円形		2.2m×2.5m	土師器（坏・甕）
E	略円形		1.9m×2.0m	土師器（皿・坏・甕）須恵器（壺）
F	だ円形		1.1m×1.8m	土師器（皿・坏・埦・甕）
G	円形		直径 1.5m	土師器（坏・甕）
H	長だ円形		1.0m×2.6m	土師器(坏・鉢・甕)内黒埦，須恵壺など
I	円形		直径 0.8m	土師器（坏・甕）内黒土師器（埦）
J	円形		直径 3.1m以上	土師器（坏・埦・甕）青磁（壺）
K	隅丸方形		2.1m×？	土師器(皿・坏・埦・甕・蓋)須恵器坏蓋
L	だ円形		0.5m×1.2m	青磁（皿）
墓坑A	円形		直径 1.2m	白磁（皿）洪武通宝4，ガラス玉
溝2				土師器・黒色土器・須恵器・磁器・石鍋

第29表　主な遺構とその出土遺物

数からみて十分考えられることである。11棟の建物のうち10棟はその規模がわかっている。1間×3間が1棟，2間×2間が5棟，2間×3間が2棟，3間×3間が1棟，2間×5間が1棟である。建物の向きは一定しておらず，磁北に対し西に傾くものが大半であるが，その角度は10度から59度と差が大きい。東に傾くものは3棟あるが，これは南側に集中し，その傾き度は似ている。出土遺物は少なく，土師器が主体である。底部切り離しがヘラ切りのものと糸切りのものとある。ヘラ切りのものは3・5・6・10のものに出土,糸切りのものは4・8・9・11のものに出土している。これらの建物は遺物からみれば平安時代後半～鎌倉時代前半のものと思われる。

竪穴住居跡は南側で3基検出され，いずれも3m前後しかない小型の方形あるいは隅丸方形住居である。壁際に多くの柱穴が巡ったり，溝が巡ったり，四隅に柱穴があったりすべて同じ様式ではないが，ほぼ類似した様相をしており，深いというのも共通している。中には炉跡など検出されなかったが，18号住居跡の近くでは周囲に焼土があり，屋外炉の可能性がある。埋土中の遺物からこの3基は鎌倉時代のものと思われるが，この時期の竪穴住居跡は栗野町山崎B遺跡でも検出されており，形態・規模など似ている。

土坑は多く検出されており，その時期は平安時代前期から室町時代まで長期間にわたっている。室町時代のものは1基で青磁の皿が出ているが共伴資料はない。土坑AからKまではほとんどが平安時代のものと思われ，床面上に土師器の皿・坏・椀・甕などが多く出土している。須恵器や青磁などと共伴するものもあり，今後の分類，編年上の好資料となろう。

溝状遺構が2本あり，2号は弧状に巡るものである。溝状遺構は本県でも弥生時代中期以降各地でみつかっているが，平安時代までくだるのは初めての検出例である。西ノ平遺跡でもみつかっており，平安時代後半～鎌倉時代前半における集落構成をみるに好資料といえよう。今後，遺物の検討により個々の遺構から全体の構成へと考えを進めていかねばならない。

室町時代頃の墓坑も9基検出され，大半は出土遺物がなかったが，墓坑Aには洪武通宝4枚ガラス玉 220個以上が床面近くにあり，埋土中には白磁皿もあった。白磁皿の年代より16世紀頃のものと思われるが，このように多数のガラス玉が出土したのは県内でも初めてであり，この墓坑に埋葬された人の職業等が検討されねばならない。

遺物の中には緑釉土器・転用硯・墨書土器・輸入磁器など庶民のものとは考えられないようなものもはいっている。また九州では樺万丈窯しか検出されていない中世須恵器窯であるが，ここでは甕・鉢などの出土が目立つ。甕の中には亀山焼（岡山県）に似たものが，鉢の中には魚住焼（兵庫県）に似たものがある。今後，胎土分析などによって生産地を確めることも課題のひとつであろう。

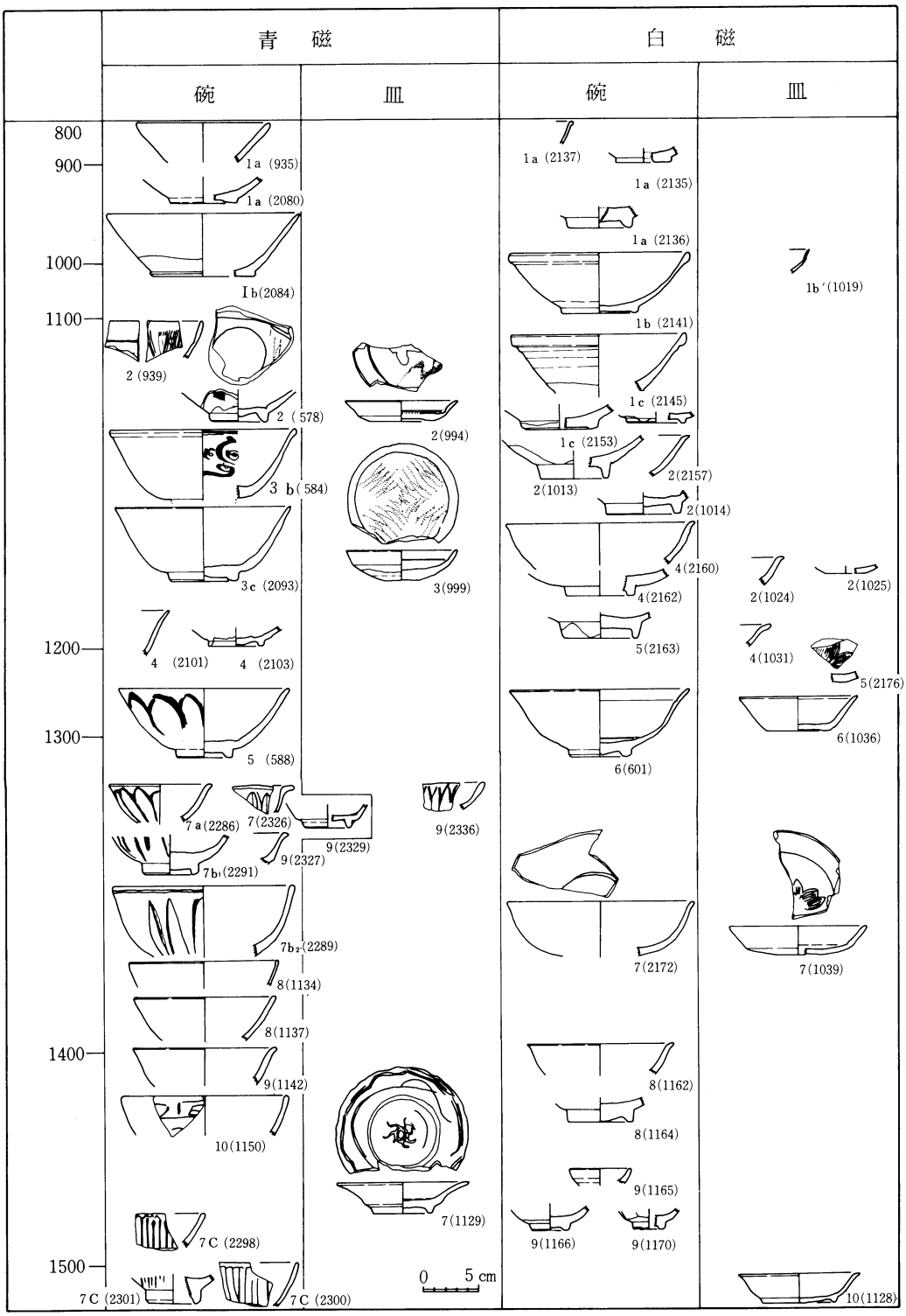
6.江戸時代

23A区あたりから24・25K区付近にかけて掘り切りの道路があり，その南側に溝・建物・墓などがある。溝は23B区あたりから24K区にかけて続いており，V字状を呈している。西端は浅くなっておわっており，東側は台地端へ延びている。建物は掘立柱建物が1棟まとまっただ

けであったが，多くの遺物が出土したことから他にも建物のあったことを予想できる。農道下に巨石のあったことなどから礎石建物の存在が予想され，建物および遺物の年代は墓石から考え，江戸時代中頃のものを主体としているといえよう。多くの墓坑が検出された。ここでは表を参照してほしい。

番号	区	墓坑					人骨		副葬品		板材	釘
		形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸	性別	年令	古銭	その他		
1	16・17B	長方形	113	65	120	N13° E	女性	熟年				
2	19B	隅丸方形	159	121	118	N 1° W	不明	不明				
3	19B	長方形	159	75	86	N 3° E	男性	壮年				
4	20B	隅丸方形	136	75	44	N20° E	—	小児	7			
5	19・20B	長方形	156	96	92	N 3° W	男性	熟年				
6	16・17B	〃	(139)	80	32	N 4° E	男性	壮年	7	扇子		
7	17B	〃	173	124	132	N 6° W	不明	熟年	7		○	○
8	16・17B	〃	175	80	145	N13° E	不明	熟年	6			
9	16B	〃	167	81	132	N12° E	男性	熟年				
10	17B	〃	(117)	134	114	N 4° E	不明	不明	7			○
11	16B	〃	172	101	70	N 7° E			2			
12	16B	〃	143	91	126	N26° E	男性	熟年	7			
13	16・17B	〃	(191)	126	126	N 8° E	男性	熟年	7			
14	17B	〃	(171)	100	105	N12° E	不明	壮年	7	キセル		
15	16B	〃	142	77	118	N12° E	不明	熟年	7			
16	16・17B	〃	128	67	142	N22° E	女性	壮年				○
17	17B	不明	(77)	127	15	N13° E			2			
18	17B	長方形	178	112	158	N 1° E	不明	不明	5			
19	17B	〃	(125)	94	78	N 4° E	男性	壮年	6			
20	17C	〃	180	95	79	N 1° E	不明	熟年	6			
21	20B	〃	188	99	100	N 2° E	不明	熟年	6			
22	20B	〃	156	68	100	N 4° E	女性	熟年	7		○	○
23	20B	〃	168	84	122	N 3° W	男性	熟年	6			○
24	20B	〃	133	64	87	N 3° W	女性	熟年	7		○	○
25	20B	楕円	90	45	25	N 5° W			7			
26	20B	隅丸方形	155	68	95	N 5° W	—	小児	4			
27	19B	長方形	76	98	36	N 1° W						
28	21B	隅丸方形	109	68	55	N 4° W						

第30表　墓坑一覧表


青　磁
白　磁
碗
皿
碗
皿
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1a (935)
1a (2080)
Ib(2084)
2 (939)
2 (578)
2(994)
3 b(584)
3c (2093)
3(999)
4 (2101)
4 (2103)
5 (588)
7a(2286)
7(2326)
9(2329)
9(2327)
9(2336)
7b1(2291)
7b2(2289)
8(1134)
8(1137)
9(1142)
10(1150)
7C (2298)
7C (2301)
7C (2300)
7(1129)
0　5 cm
1a (2137)
1a (2135)
1a (2136)
1b (2141)
1c (2145)
1c (2153)
2(1013)
2(2157)
2(1014)
4(2160)
4(2162)
5(2163)
6(601)
7(2172)
8(1162)
8(1164)
9(1165)
9(1166)
9(1170)
1b′(1019)
2(1024)
2(1025)
4(1031)
5(2176)
6(1036)
7(1039)
10(1128)

第186図　磁器分類図

Ⅳ　西ノ平遺跡の調査

第１章　概　要
第２章　旧石器時代
第３章　縄文時代
第４章　古墳時代
第５章　奈良～鎌倉時代
第６章　室町・安土桃山時代
第７章　江戸時代
第８章　まとめ

第1章　概　　要

成岡遺跡との間には幅80mほどの狭く，そして短かい谷水田があり，バイパスの路線は，この谷尻に近い所を通っている。この谷水田から約10mあがった所には矢武者神社という小さな神社がある。この神社と遺跡との間には幅約5m，深さ約3m位の落ち込みがあり，現況は山林であるが，古くは道路であったらしい。一方，字西ノ平と字上ノ原は道路を境界として分かれているが，元々はひと続きの傾斜した台地であり，いつの時代にか削平および盛土をほどこして，現在のような段をつくったようである。現在，上ノ原が安定した平坦地をなしているのに対して，この遺跡はいくつかの段をもっている。今回の調査面積は約5,200㎡だった。

西ノ平遺跡の標高は約22m～27mで，この高さの段はバイパス用地の約40m西を基部として東へ長く延びている。遺跡は現在高でそれぞれ1m～2.5mほどの違いをもつ3つの段があるが，元来はゆるやかな傾斜地であったらしく，それぞれの段違いの場所では上の層が欠けている。つまり，アカホヤ層堆積後の削除があったらしい。

遺跡は旧石器時代から江戸時代まで長期にわたって使用されているが，特に平安時代から室町時代頃にかけては繰り返し使用されている。

旧石器時代の遺物は少量のみであるが，この中には南九州独得の細石刃剝離技法をもつ細石核が含まれている。

縄文時代の遺物は早期から晩期まで多時期にまたがるが，それぞれの時期では出土量が少なく，わずかに1・2片という時期も多い。晩期にはいくらか増えているが，遺構などは検出されていない。土器のほかに石鏃・石匙・石斧・叩き石などの石器や軽石製岩偶もある。

弥生時代の遺物は全くない。古墳時代の遺物は散在しているが，住居跡などの遺構は検出されなかった。

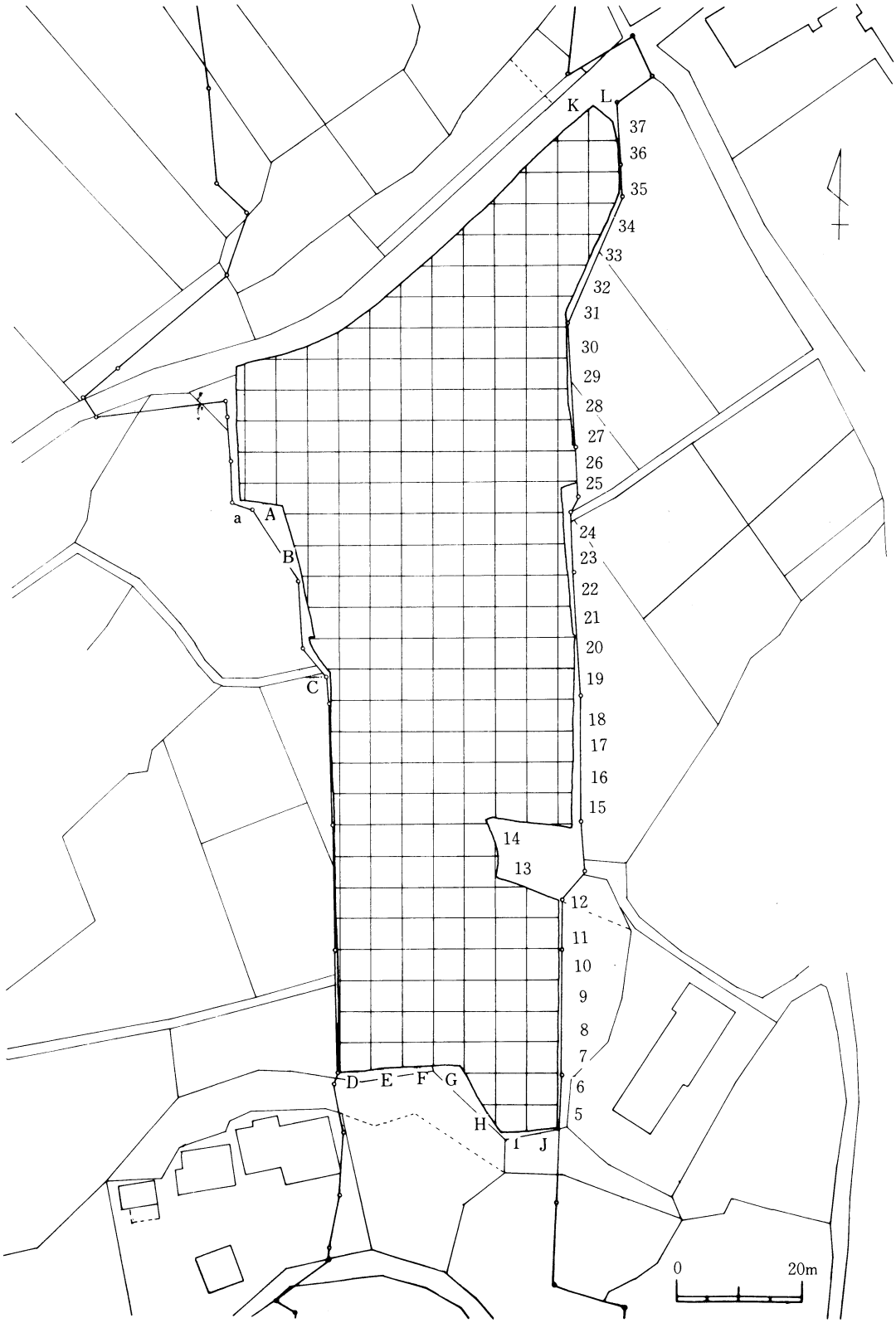
奈良時代末から平安時代にかけては，遺跡の北半を中心に掘立柱建物などがあり，墨書土器を含む多くの土師器，須恵器などとともに硯・焼塩壺・緑釉土器・青磁・白磁・帯金具などの当時の出土品としては貴重なものも多く出土している。

鎌倉時代には南端近くで規模の大きい，そして整然とした建物や，土坑，溝などが作られている。この集落には土師器・黒色土器の他に青磁・白磁・青白磁なども多く含まれており，付近に土師器・古銭などが積み重なった地鎮の跡もある。

室町・安土桃山時代の遺物も青磁・白磁・染付などが出土しており，火葬跡や墓坑からは洪武通宝も出土している。

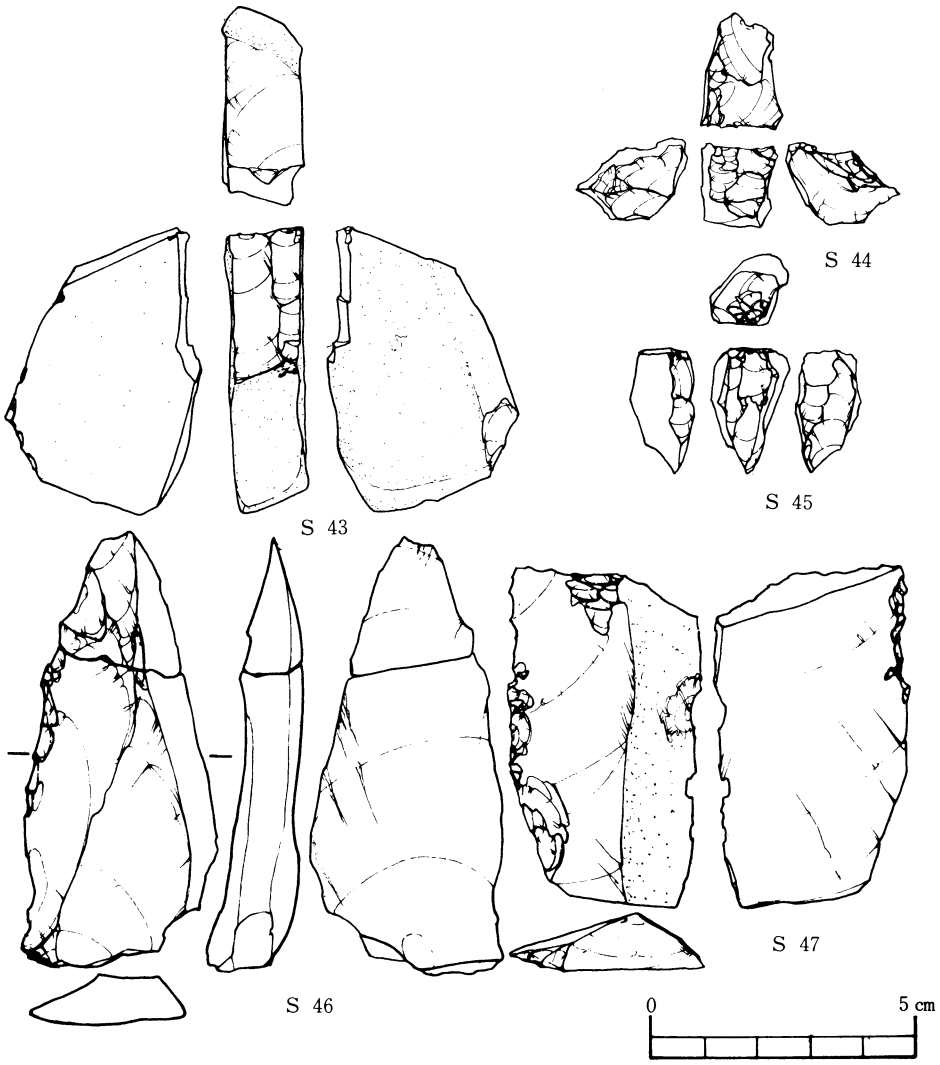
江戸時代には中央付近（17～23区あたり）で建物，墓などが作られている。建物は礎石を使ったものもあったらしいが，ほとんどは掘立柱建物で，柱穴の中に礎板状の石を敷いたものもある。墓坑は6基あって，墓石から中頃のものと思われ，ほとんどに人骨が残っている。周辺からは多くの陶磁器が出土した。

これ以降，この地は生活跡として使われることはなく，現在まで畑になっていた。



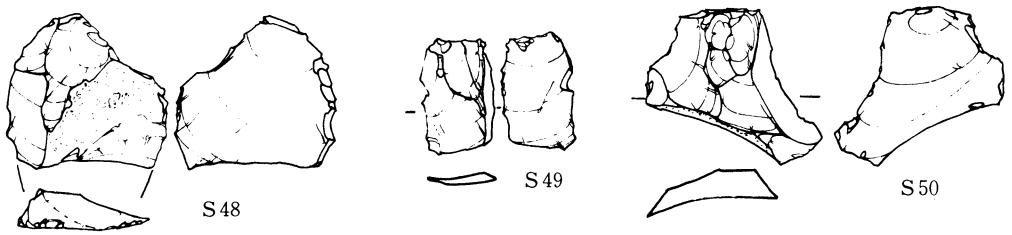
第187図　西ノ平遺跡グリッド配置図

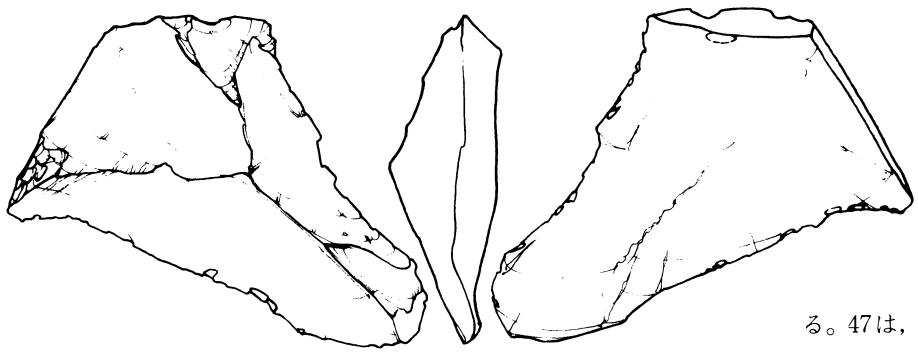
第2章　旧石器時代

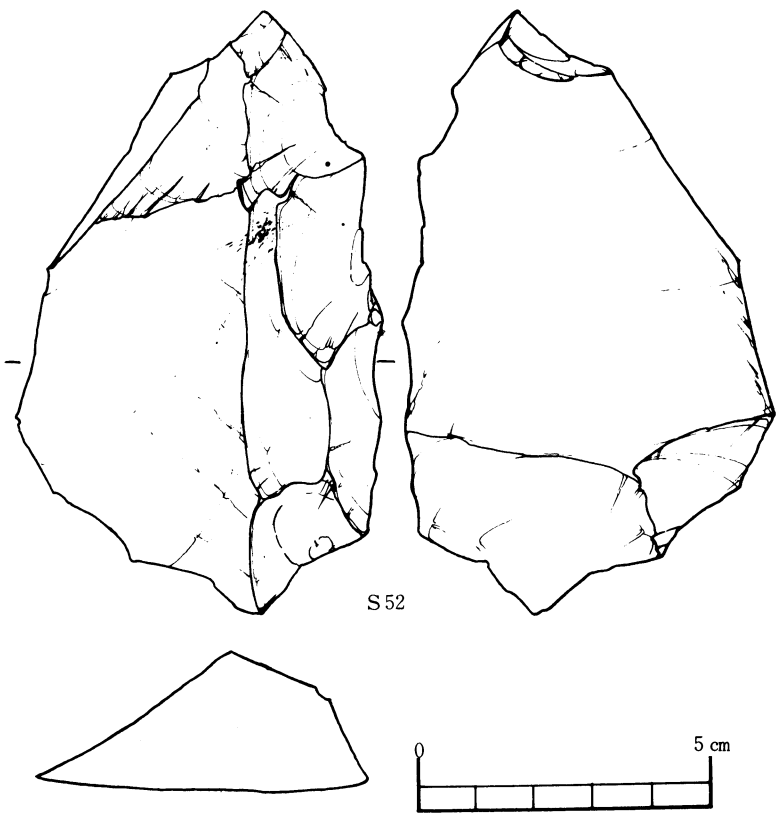


第188図　旧石器時代の石器(1)

43は凝灰岩質頁岩の扁平礫を利用し,石核調整は打面形成に一回の加撃がなされ,その他の面では，背面の下端部の一部に行われるだけで他の部分は礫面をそのまま残す「加治屋園型細石刃核」である。44・45は，黒曜石を用い，45はローリング作用を受けたと思われ磨耗が激しい。44の石核調整剥離は，数回の粗い剥離で側面形成の後に打面形成が行われた様相がある。素材には扁平な角礫を用いたと思われ一部に礫面を残している。46は軟質の安山岩を利用したナイフ形石器で剥片の端部と右側辺を目的部としている。背面の調整は主として主要剥離方向より行っている。この種の石器は、指宿市小牧3A遺跡で出土している。47は硬質安山岩,49は黒曜石,48はメノウ、50は頁岩、51はチャートをそれぞれ利用し、石材が豊富であったことがうかがえ







る。47は，側辺に削器的な機能があり，48では右側辺より切(折)断面にかけて刃部が設けられ，削器の一種と思われる。49の下端部には多くの刃こぼれがある。52は，46の石材と同一であり，石核的な用途も充分考えられる資料である。

本遺跡の旧石器文化は，豊富な石材を背景としたナイフ形石器文化と細石器文化の重複したものと考えられる。

第189図　旧石器時代の石器(2)

第3章　縄文時代

(1)　土　　器

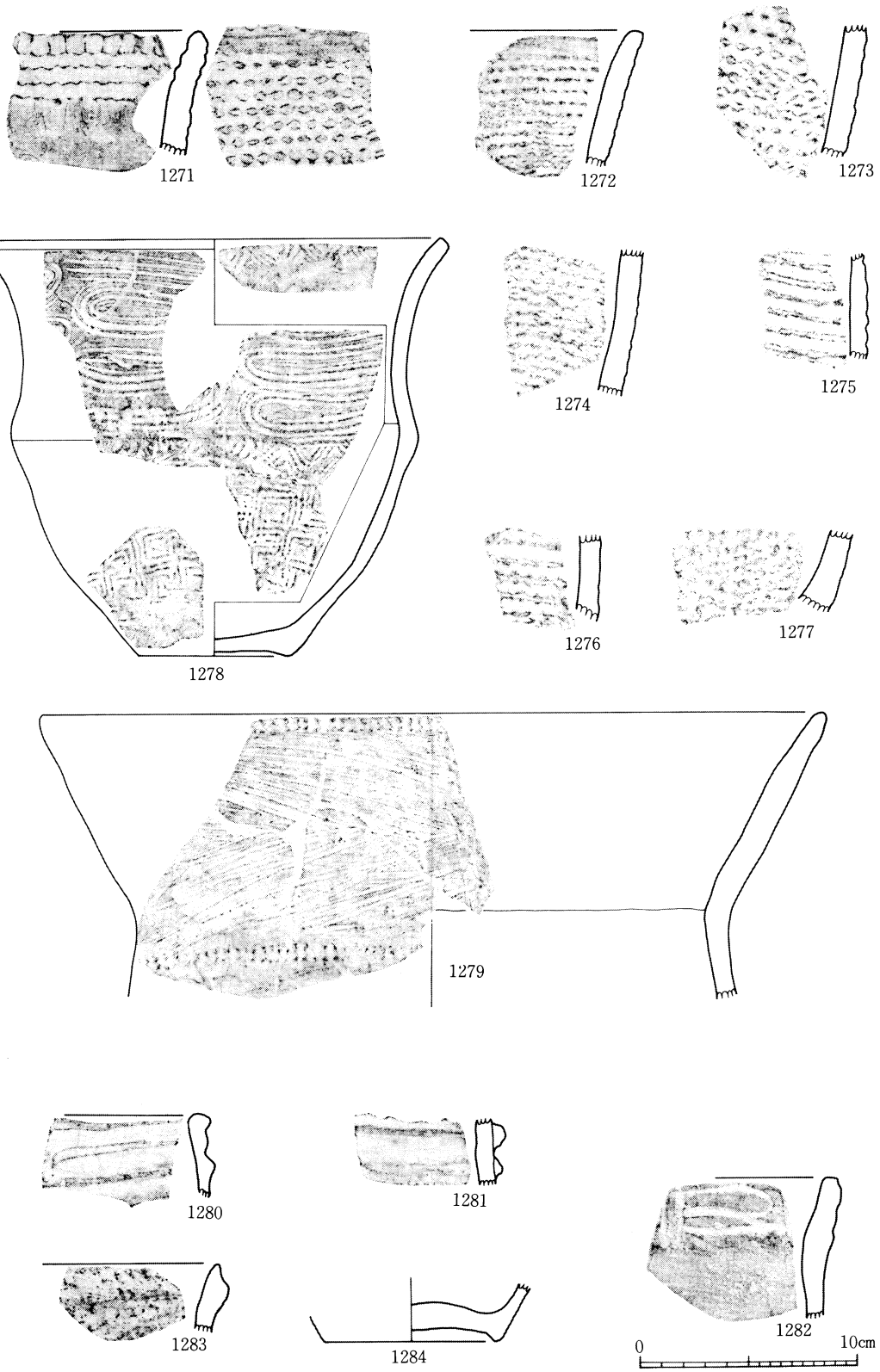
土器は押型文土器（手向山式も含む）・塞ノ神B式・南福寺式・出水式・北久根山式類似・晩期Ⅱ式が出土した。出土状況は晩期Ⅱ式が北と南に分かれ，23，24－F区と8・9－D区に集中している。押型文土器（手向山式も含む）は12・13－D・E・Hに集中している。手向山式は1個体だけで完形である。早期の土器は他に塞ノ神B式が出土している。中期の土器は，南福寺が出土している。後期の土器は出水式や北久根山式類似（市来式にも類似しているが胎土で考えた）が出土している。晩期の土器は晩期Ⅱ式の深堀タイプ（**1298～1300**）と黒川タイプ（**1310～1315**）の甕形土器が出土している。

番号	出土区	層	特　　徴	型　式
1271	6 J	3	押型文土器である。口縁部で外反する。押型は楕円文を外面に山形文を内面上部に施している。また，内面口縁部には刻目を施している。胎土は長石，石英等を含み，焼成もよい。色調は茶褐色を呈す。	
1272	5 J	2	押型文土器である。外面だけ押型を施している。押型文は楕円で小さい。施文調整が悪く部分的には欠けている。胎土は長石，石英を含み，焼成もよい。色調は茶褐色を呈す。早期。	
1273	7 J	3	押型文土器である。胴部で楕円押型の施文である。中央部は施文の重なりがみられる。焼成は良い。胎土は小礫が混入している。色調は茶褐色を呈す。早期。	
1274	13H	3	押型文土器である。楕円押型の施文である。施文調整は悪い。胎土は小礫が混入し，色調は暗茶褐色を呈す。早期。	
1275	9 R		押型文土期である。胎土は石英，長石を含み，焼成は良い。器面調整も良い。色調は茶褐色を呈す。早期。	
1276	6 J	3	押型文土器である。楕円押型の施文である。胎土は小礫が混入し，焼成も悪い。色調は黒褐色を呈す。早期。	
1277	13H	3	押型文土器の底部近くである。施文は楕円押型文で，焼成が悪い。胎土は良く，色調は茶褐色を呈す。早期。	
1278	13－E 12－D 12－E	3	押型文土器である。器形は口縁部が外反し，肩部で「く」字状に折れ，底部は上げ底である。口唇部，口縁内面は山形押型文を施し，口縁部から肩部にかけては4条の櫛歯状沈線を施し，肩部から胴部にかけては山形押型文と枡形を重ねた状態の押型文を施している。底部までには施文していない。胎土は石英・長石を含む。焼成は良い。色調は暗茶褐色を呈す。早期の土器である。	手向山
1279	7 F	古道	貝殻文土器の円筒土器である。頸部で外反し，口縁端部に貝殻腹縁による刺突連続文を施す。口縁部は，沈線を交錯し，頸部は貝殻腹縁による刺突を施す。胴部は沈線の交錯がみられる。胎土は小礫混りで，長石・石英を含む。焼成は良い。内面は貝殻調整痕がみられる。早期の土器である。	塞ノ神B
1280	25 F	2	深鉢の土器である。波状口縁で，沈線と突帯の組み合せ施文である。器面調整は良い。胎土・焼成共に良い。色調は茶褐色を呈す。中期。	南福寺
1281	8 G	1	深鉢である。2本の突帯がみられる。胎土は良い。焼成も良い。器面調整は悪い。茶褐色を呈す。中期の土器と思われる。	
1282	32 J	P1	深鉢の土器である。口縁部は外反し，若干厚味をもつ。文様は沈線を縦に2本，横にS字状の沈線を施す。器面調整は荒い。茶褐色を呈し，胎土・焼成共に良い。後期の土期である。	出　水
1283	12 F	3	深鉢の土器である。肥厚した断面三角形の口縁部である。口縁部には斜状の刻目を施している。器面調整が悪い。胎土は長石・石英等を含み，茶褐色の色調である。後期の土器である。	北久根山?
1284	26 E	P4	深鉢の底部である。上げ底で胎土は細砂を使い良い。器面調整は貝殻腹縁の条痕が残っているが良い調整である。内面は黒色を呈し，外面は茶褐色を呈す。後期。	
1285	21 D	2	浅鉢の口縁部である。精製土器で，内側が黒色，外側が灰茶褐色を呈する。口縁部は肥厚し，頸部で外反し長い。胎土は細砂を使用し，黒褐色を呈する。焼成は良い。晩期である。	晩期Ⅱ式
1286	13 H・I	1	浅鉢の口縁部である。精製土器で，黒色を呈する。口縁端部は肥厚し，外反する土器である。胎土は細砂を使い良い。晩期の土器である。	〃
1287	25－26 －G	2	浅鉢の口縁部である。口縁端部は肥厚し，頸部から外反する。黒色研磨土器であるが，精製された表面は部分的に剝げている。黒褐色を呈し，胎土も同じである。焼成も良い。晩期。	〃
1288	22 I	1	浅鉢の頸・肩部である。頸部・肩部とも「く」字状に折れ曲っている。黒色研磨土器であり，胎土も良い。色調は黒色を呈す。焼成も良い。晩期である。	〃
1289	22 F	1	浅鉢の頸・肩部である。頸部・肩部とも「く」字状に折れ曲っている。黒色研磨土器であり，胎土も良い。色調は器面・胎土とも黒色を呈す。焼成も良い。晩期である。	〃
1290	18 G	1	浅鉢の肩・胴部である。肩部は「く」字状に折れ，黒色研磨土器である。器面も胎土も黒色で焼成も良い。晩期である。	〃
1291	12 E	1	浅鉢の肩・胴部である。肩部は「く」字状に折れる。黒色研磨土器であるが，器面は茶褐色を呈し，胎土は黒色を呈する。晩期である。	〃

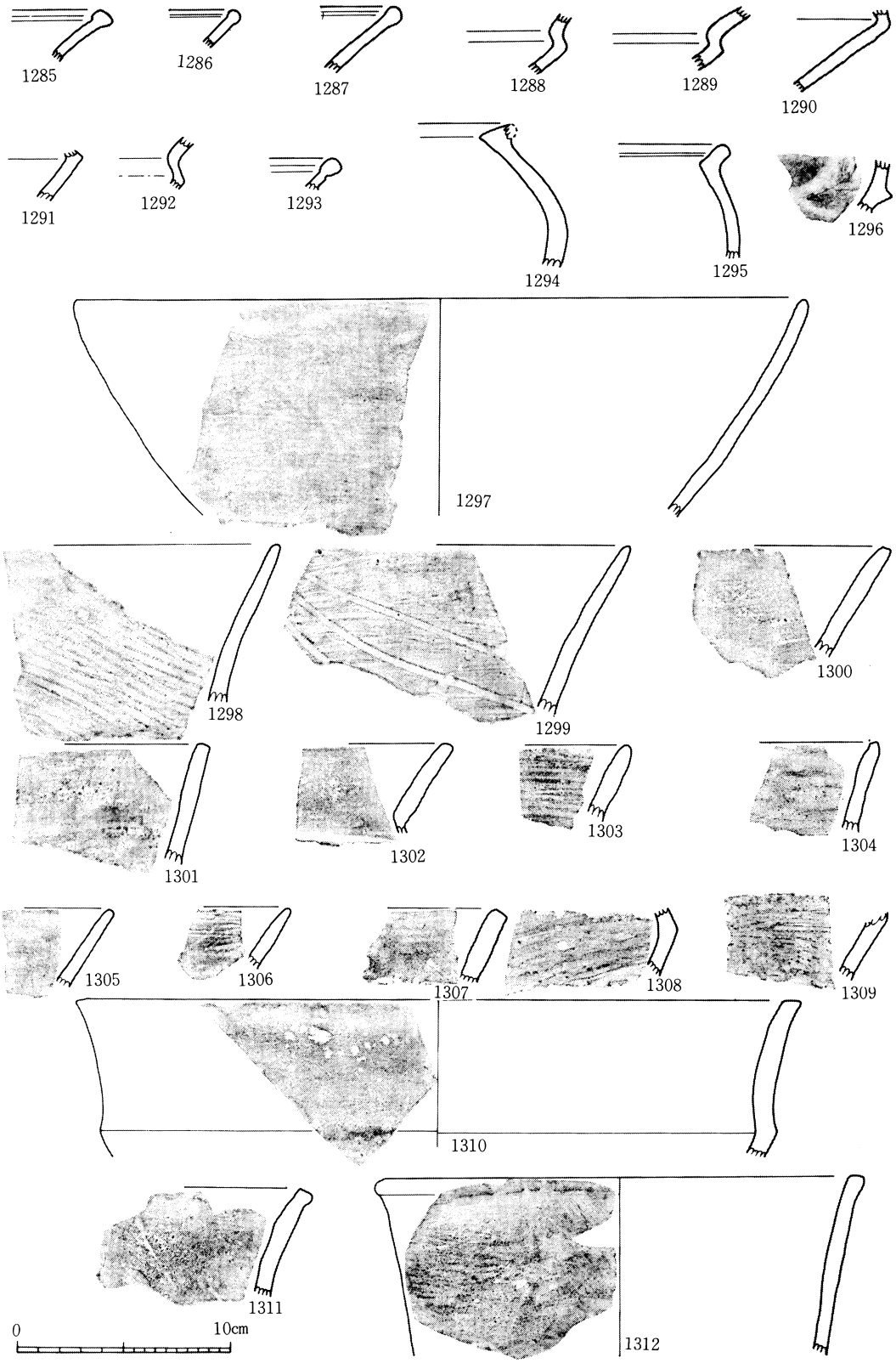
第31表　縄文式土器一覧表　(1)

番号	出土区	層	特　　徴	型　式
1292	9 D	P3	浅鉢の頸・肩部である。黒色の胎土であるが，器面調整が悪く，器面色調も茶褐色を呈する。胎土は良い。肩部と頸部で「く」字状に屈折している。	晩期II式
1293	17 F	1	浅鉢の口縁部である。黒色研磨土器で頸部から口縁部までは短く，口縁部は肥厚して外反する。胎土は黒色である。	〃
1294	8 F	2	浅鉢の口縁～胴部にかけてである。口唇部は欠けており，口縁端部は不明である。頸部は「く」字状に屈折し，胴部では弯曲する。黒色研磨土器であり，器面調整は暗灰褐色を呈す。晩期。	〃
1295	25 E	2	浅鉢の口縁～胴部にかけてである。口縁部は肥厚し，頸部は「く」字状に折れ，胴部は弯曲する。口縁部は短かい。黒色研磨土器の胎土をしているが，器面は茶褐色で研磨がみられる。小礫混入。晩期。	〃
1296	表採		浅鉢の胴部である。黒色研磨土器で突帯が付いている。黒色を呈し，胎土は良い。焼成も良い。晩期。	〃
1297	23 F	2	浅鉢である。内側は黒色研磨されているが，外側は篦目状痕がみられる。胎土・焼成ともに良い。これと類似しているのは，鹿児島市の加治屋園遺跡に出土している。晩期。	〃
1298	24 F	2	鉢形土器の口縁部である。外面は貝殻条痕仕上げで斜状に施している。若干外反する器形である。胎土は茶褐色を呈し，焼成もよい。晩期。	〃
1299	23 F	2	鉢形土器の口縁部である。外反する口縁で沈線の文様を施している。器面調整は篦目状の条痕がつく。茶褐色を呈し，焼成は良い。礫石原式の様式をもつ。晩期。	〃
1300	26 E	2	鉢形土器の口縁部である。外反する器形で器面調整は篦目調整痕である。茶褐色の色調を呈する。	〃
1301	23 F	2	研磨土器である。直口するもので黒色の胎土である。鉢形土器と思われる。	〃
1302	14 F	1	鉢形土器の口縁である。頸部で「く」字状に屈折する。胎土は精製土器のものであり，黒色である。焼成も良い。	〃
1303	8 D	2 b	研磨土器であるが研磨調整はよくない。外反する口縁部である。茶褐色を呈し，焼成は良い。鉢形土器と思われる。	〃
1304	8 D	2 b	鉢形土器の口縁部である。外反する口縁で，器面は貝殻条痕の調整がみられる。暗茶褐色を呈している。焼成は良い。小礫混入。晩期。	〃
1305	8 G	1	研磨土器である。外反する口縁部で，胎土は黒色と茶褐色がみられる精製土器である。焼成は良い。鉢形土器と思われる。	〃
1306	23 F	2	鉢形土器の口縁部である。外反するもので，器面調整は外側が篦目調整痕で，内側が研磨されている。胎土は石英・長石を含み，焼成は良い。色調は暗茶褐色を呈す。	〃
1307	23 F	P3	鉢形土器の口縁部である。刷毛目調整痕が器面にあり，黒褐色を呈する。胎土も黒褐色である。	〃
1308	11 I	土坑	鉢形土器の肩部である。「く」字状に屈折する器形で，茶褐色を呈す。胎土は黒色で，石英が混入されている。	〃
1309	9 F	3	鉢形土器の肩部である。「く」字状に屈折する。器面調整は板目条痕がみられる。胎土・焼成は良い。晩期。	〃
1310	10 D	2	鉢形土器の口縁～肩部である。若干外反する器形で，肩部では「く」字状に折れる。器面調整は篦ナデ調整である。茶褐色を呈し，胎土・焼成は良い。晩期。	〃
1311	9 E	2	鉢形土器の口縁部である。若干外反する器形で，篦ナデ調整である。胎土は石英・長石を含み，焼成は良くない。晩期。	〃
1312	24 C	1	鉢形土器の口縁部である。若干外反する器形である。内側の器面調整は篦研磨で外側は荒い。口縁端部は肥厚する。暗茶褐色を呈し，焼成・胎土は良い。晩期。	〃
1313	21 G	2	鉢形土器の口縁部である。直口する器形で口唇部にリボンが付き，口縁部端は肥厚する。器面調整は篦で行っており，内面の調整が良い。外面は暗茶褐色で，内面は黄茶褐色を呈す。胎土・焼成は良い。晩期。	〃
1314	24 F	1	鉢形土器の口縁部である。直口する器形で，器面調整は内側が篦の丁寧な調整で，外側は荒い。胎土・焼成は良い。色調は外側が暗茶褐色で，内側が茶褐色を呈する。晩期。	〃
1315	27 H	2	鉢形土器のリボン部である。外側が暗茶褐色で，内側が黄茶褐色を呈し，篦調整である。胎土・焼成は良い。晩期。	〃
1316	9 I	2	鉢形土器の頸部である。器面調整は篦ナデ調整である。胎土は黒褐色を呈し，礫が混入している厚手の土器である。晩期。	〃
1317	22 C	2	鉢形土器の肩部である。「く」字状に折れる器形である。胎土は小礫が混入され，焼成は良い。茶褐色を呈す。	〃
1318	表採		鉢形土器である。直口する器形で胴部が若干張る。器面調整は荒い篦調整である。胎土・焼成は良い。茶褐色を呈す。	〃
1319	23 F	2	鉢形土器の底部で平底である。底の中央部は薄い茶褐色を呈し，小礫が混入する胎土である。底部の作り方は，粘土帯を巡らして中央部を埋めている。晩期。	〃
1320	23 E	2	鉢形土器の底部であり平底である。茶褐色をし，小礫混入の胎土である。焼成も良い。粘土帯を巡らして中央を埋め込む作り方である。晩期。	〃
1321	24 E	2	鉢形土器の底部で平底である。円盤貼り付け状の底部で高い。茶褐色を呈し，胎土は小礫が混入されている。焼成は良い。晩期。	〃
1322	25 J	2	鉢形土器の底部である。赤茶褐色を呈し，小礫混入の胎土である。焼成は良くない。作り方は粘土帯を巡らして中央を埋め込む形である。晩期	〃
1323	17 F	2	鉢形土器の底部である。茶褐色を呈し，小礫混入の胎土である。焼成は良い。円盤貼り付け状の底部の作り方である。晩期。	〃
1324	9 E	3	平底の底部である。茶褐色を呈している。焼成は良く，内面の調整は良くない。胎土は長石，石英を含む。	〃

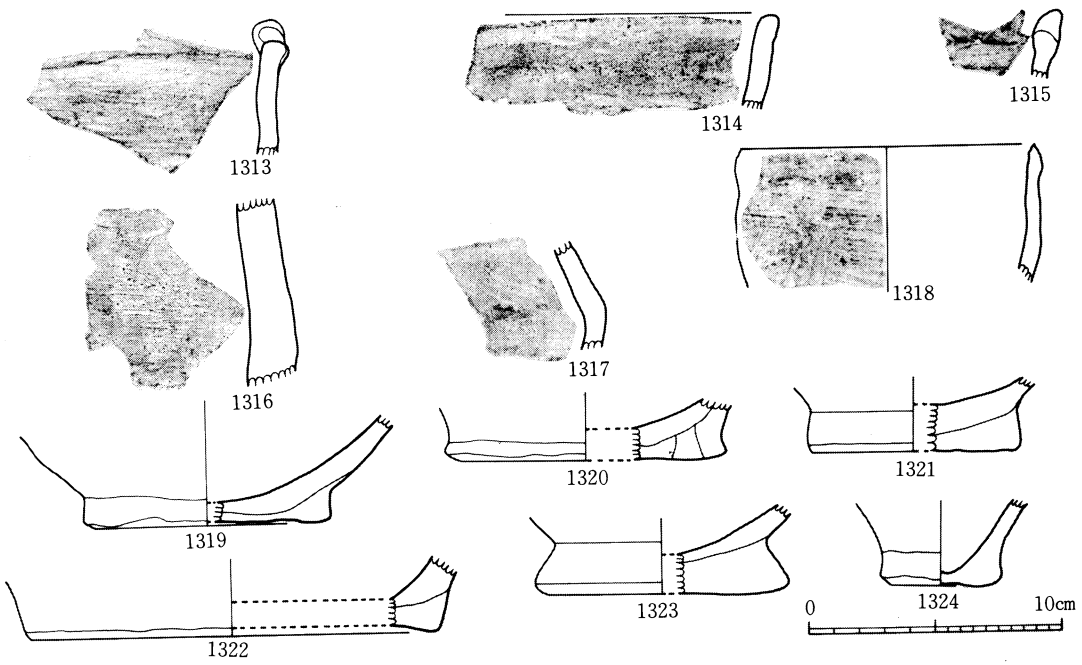
第32表　縄文式土器一覧表　(2)



第190図　縄文式土器(1)



第191図　縄文式土器(2)



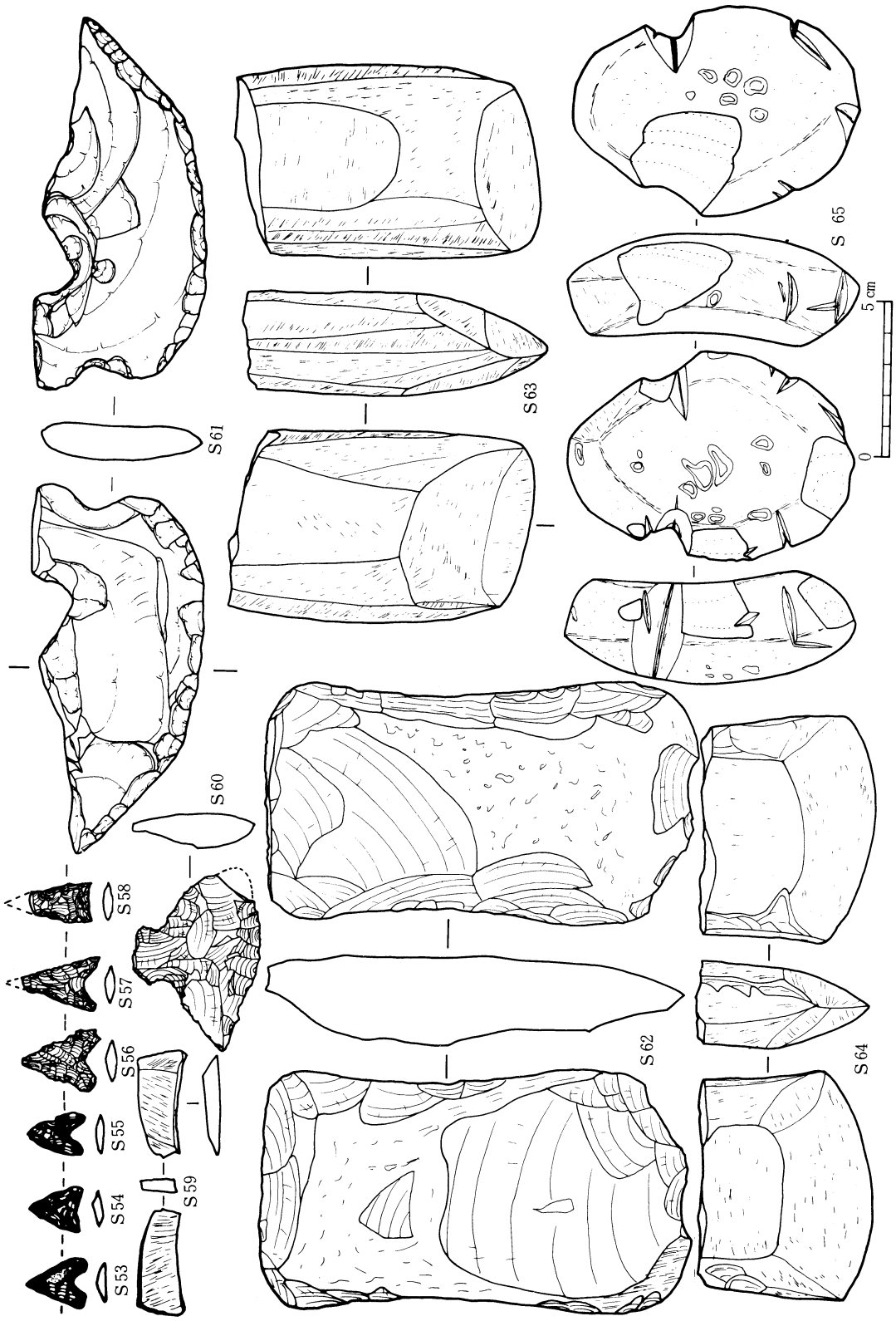
第192図　縄文式土器（3）

(2) 石器

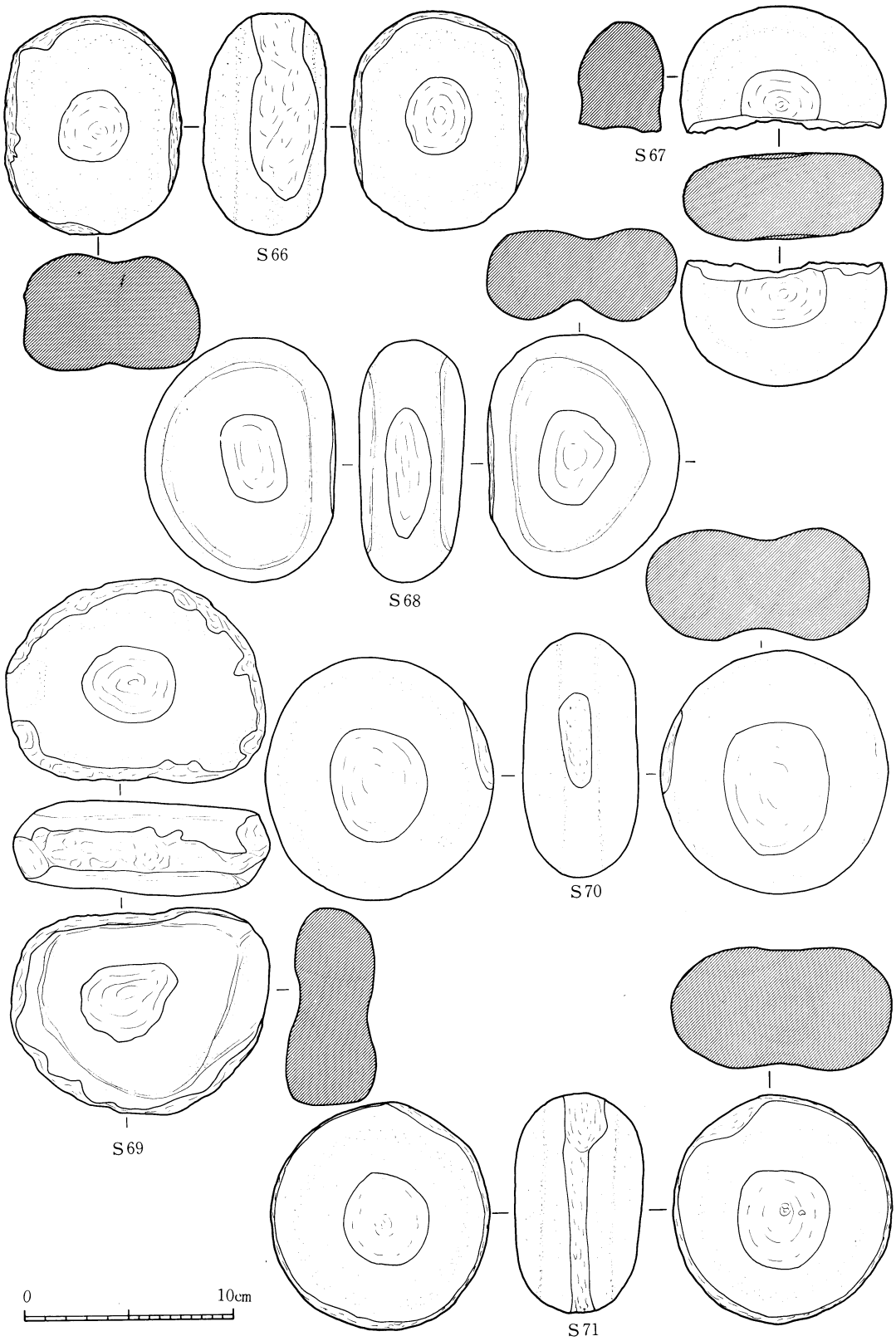
石器は石鏃，石匙，局部磨製石斧，凹石，敲石や，磨研石器，軽石加工品が出土した。磨研石器は片刃状のものである。軽石加工品は5～6ケ所に切り込みを入れた状態で2,3面のすり面もみられる。一見岩偶状であるが確実な要素はない。

番号	出土区	層	石材	特徴	番号	出土区	層	石材	特徴
S53	9D		黒曜石	凹基式剝片石鏃	S66	22P	1	砂岩	凹石
S54	11D	3	玄武岩	凹基式石鏃	S67	30J	2	安山岩	凹石
S55	29D	3	黒曜石	凹基式石鏃	S68	15J	1	凝灰岩	凹石
S56	29K	1	黒曜石	凹基式石鏃	S69	21D	1	安山岩	凹石
S57	10D		石英	凹基式石鏃	S70	32I	1	安山岩	凹石
S58	表採		チャート	平基式石鏃	S71	26I	3	溶結凝灰岩	凹石
S59	9D	1	玄武岩	磨製石器	S72	11F	2	〃	凹石
S60	11F	3	黒曜石	石匙	S73	29H	2	安山岩	敲石
S61	9E	3	玄武岩	石匙	S74	24D	1	安山岩	敲石
S62	表採		凝灰岩	局部磨製石斧	S75	21R	2	玄武岩	敲石
S63	25F	D-8	砂岩	磨製石斧	S76	22E	2	安山岩	敲石
S64	23J	3	安山岩	磨製石斧	S77	1HD 23C	2	安山岩	敲石
S65			軽石	軽石加工品(岩偶?)	S78	26E	2	安山岩	敲石

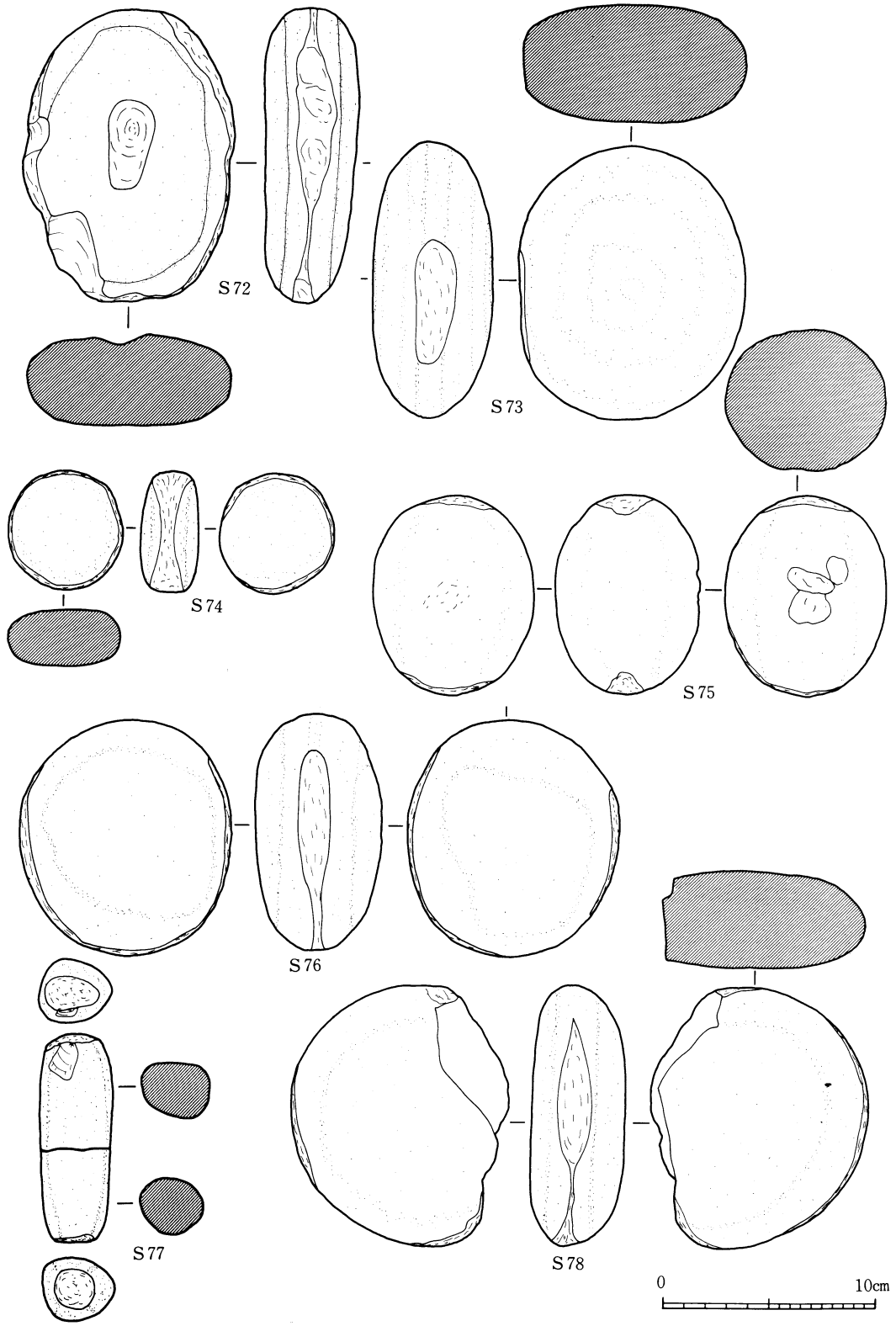
第33表　石器一覧表



第193図　石器(1)



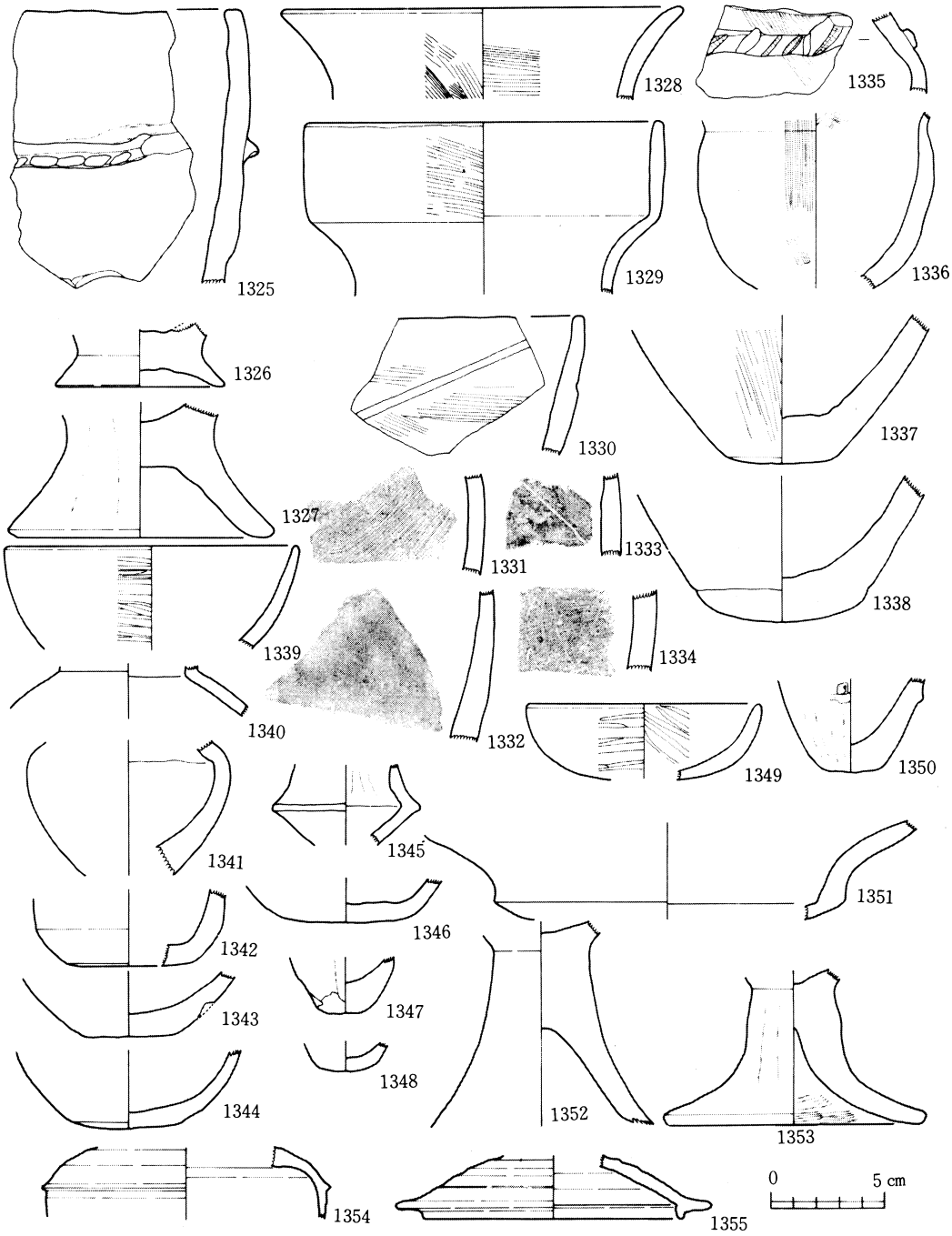
第194図　石器(2)



第195図　石器(3)

第4章　古墳時代

古墳時代の土師器・須恵器がほぼ全域に散在しているが，その出土数は少なく，遺構もなかった。土師器には甕形土器・壺形土器・坩形土器・手づくね土器・鉢形土器・高坏形土器が，



第 196図　古墳時代の土師器・須恵器

須恵器には坏蓋がある。

甕形土器（1325～1327）はまっすぐのびる口縁で，口縁下部には三角突帯が貼り付けられる。整形は外面・内面とも粗いヘラナデで凹凸が目立つ。底には低い脚台が貼り付けられる。

壺形土器（1328～1338）も小破片のみが出土している。1328は口縁直径が17cmと広く，外反する口縁である。内外ともハケナデで仕上げる。1329は複合口縁で，頸部から外へ反って，口縁はまっすぐ立ちあがる。外面はななめ方向のハケナデ，内面はていねいなヘラナデで仕上げている。1330は壺の胴部と思われるが，一条の凹線が巡っている。外面はハケナデ，内面はハケナデのあとヘラナデで仕上げる。1331～1334も壺の胴部と思われるが，それぞれにヘラ様のもので線刻画が描かれる。1331は1本の曲線がある。1332は縦横各2本の直線がかかれている。1333は内面に×印がある。1334は曲線や直線が複雑に描かれている。1335は肩部に板押圧のある突帯が貼り付けられる。1336は口縁が外反する小壺で，丸底である。底部は小さな平底のものと，丸底がある。ハケナデとヘラナデがある。

坩形土器（1339～1344）は内弯ぎみの口縁で，胴部は丸みをもつ。底は安定した平底で，現在剝脱が目立つが丹塗りの土器である。

1345～1348は手づくね土器である。1345はソロバン玉状の器形をしている。1346～1348は丸底で広いものと狭いものとがある。

鉢形土器は内外面ともていねいにヘラナデした浅く広いもの（1349）と，小型の深鉢状のもので口縁付近にヘラ押しのあるものがある。

高坏形土器（1351～1353）は立ちあがりが強く外反する浅い坏部のものと，丹塗りで筒部と裾部の境がはっきりしない脚部とがある。

須恵器の坏部は天井部が平たく，天井部と口縁部の境が明瞭なもの（1354）と，天井部につまみがつき，口縁部が下にのびるもの（1355）とがある。Ⅰ式とⅥ式である。

これらは4世紀から7世紀までのものを含んでいる。

図番	種　類	出土区	層	1335	壺形土器	32 I	1	1346	手づくね土器	32 J	2
1325	甕形土器	30 J	P-11	1336	〃	31 I	2	1347	〃	31 K	2
1326	〃	27 H	2	1337	〃	30 I	P-4	1348	〃	25 G	2
1327	〃	32 I	2	1338	〃	23 C	1	1349	鉢形土器	32 J	
1328	壺形土器	24 F	2	1339	坩形土器	表採		1350	〃	11 D	ミゾ
1329	〃	30 G	P-6	1340	〃	9 H	1	1351	高坏形土器	28 H	2
1330	〃	15 E	2	1341	〃	表採		1352	〃	15 E	1
1331	〃	12 G	2	1342	〃	33 I	1	1353	〃	26 H	2
1332	〃	24 E	2	1343	〃	8 D	20	1354	須恵器坏蓋	16 I	1
1333	〃	26H・I・J	2	1344	〃	23 F	2	1355	〃	9 F	2
1334	〃	28 H	2	1345	手づくね土器	28 G	P-17				

第34表　古墳時代の土師器・須恵器出土地区表

第５章　奈良～鎌倉時代

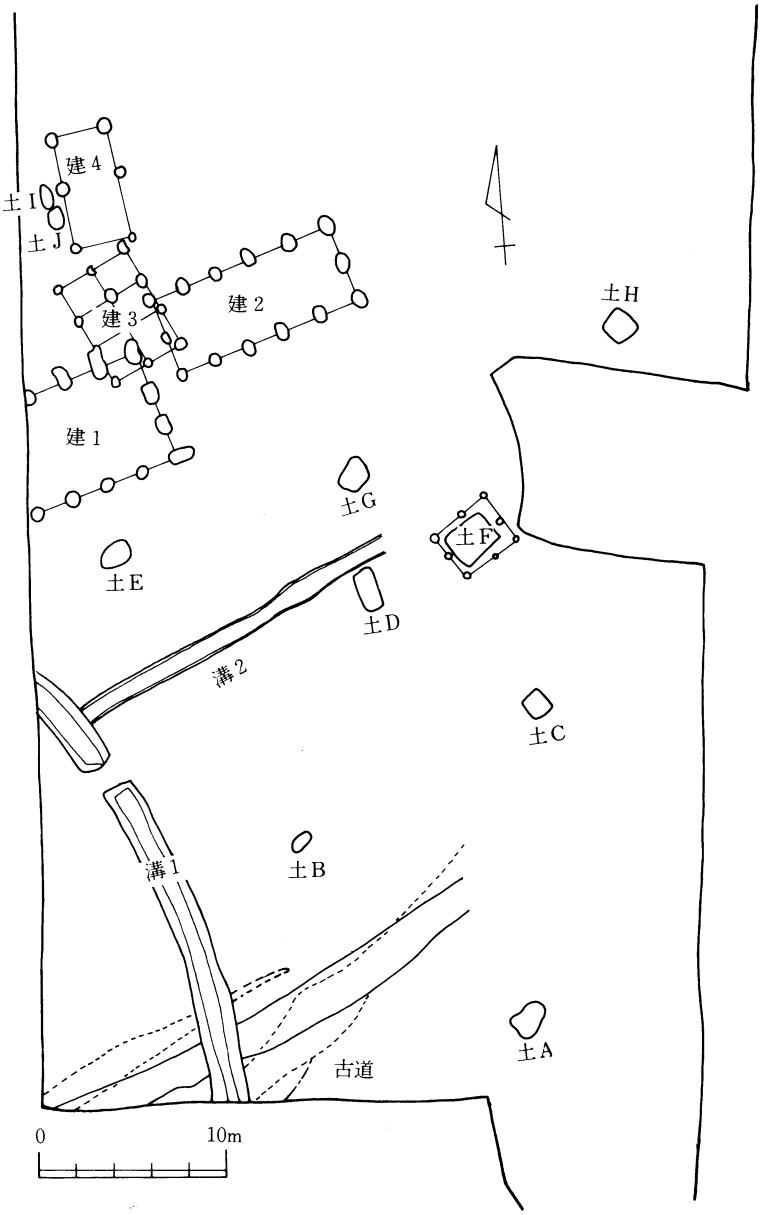
本遺跡の主体をなす時期で，ほぼ全体に遺構が広がり，遺物の散布もみられる。遺構は主として北半に平安時代，南半に鎌倉時代のものがある。

１．掘立柱建物

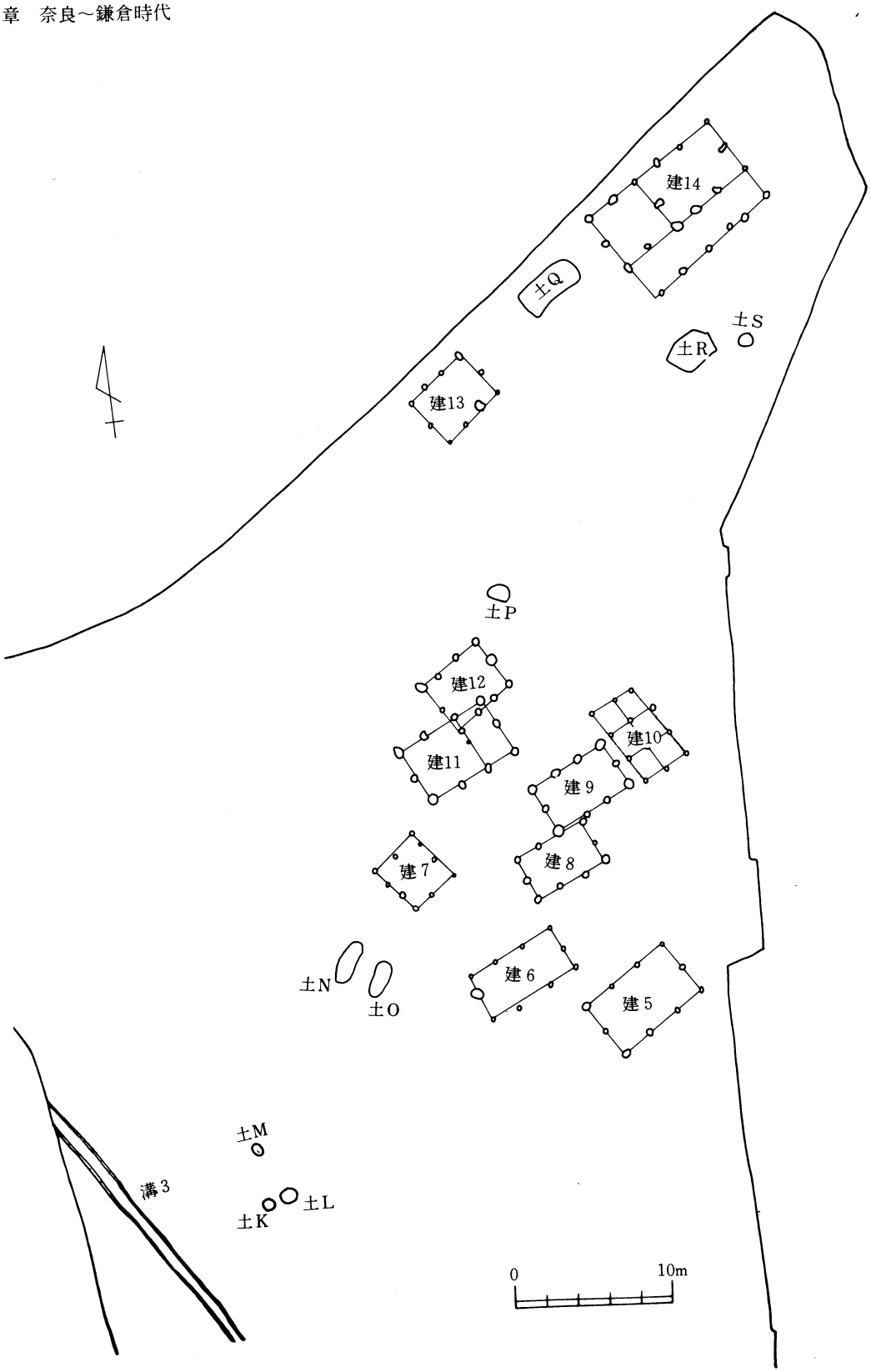
(1)掘立柱建物１

13～15Ｃ～Ｅ区にあるが，西側が用地外に延びている。南北方向に柱間３間，東西方向に柱間５間以上ある東西に長い建物で，主軸方向はＮ４度Ｗである。それぞれに直径20cm～30cmを測る柱痕跡があり，その柱間隔はすべて２ｍである。掘り方は0.8ｍ～0.9ｍの円形であるが，いくつかはだ円形である。掘り方は下から数層に地固めがしてあり，柱も周囲を固めている。柱の下にはすべて礎板状の石が置かれているが，100kgを越える石や，逆に小さい石を数個並べたものもある。掘立柱建物３より新しく，柱のなかには重複したものもある。遺物は少ない。

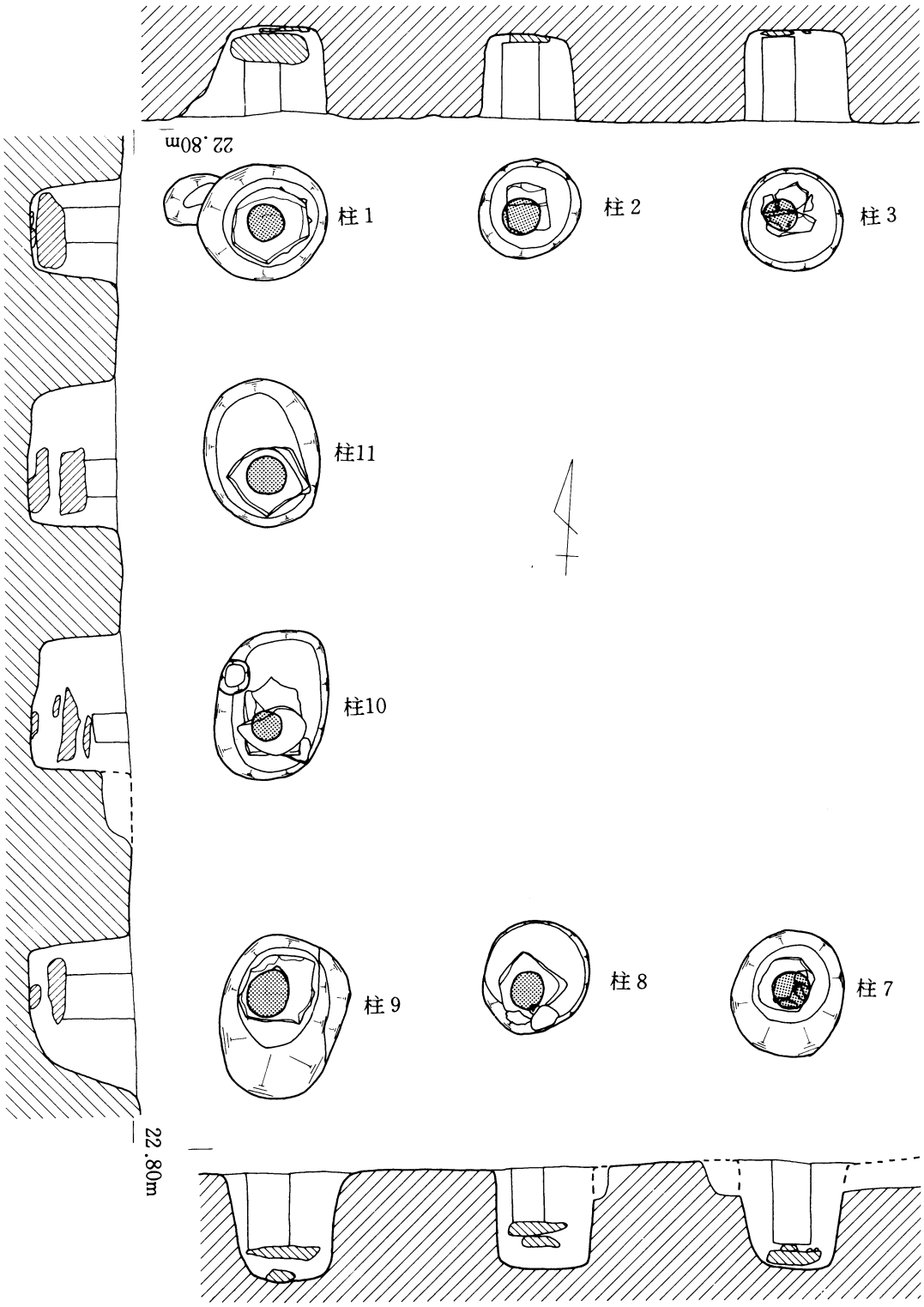
土師器の坏は底切り離しが糸切りで，口縁直径6.5cm，高さ2.4cmを測る。



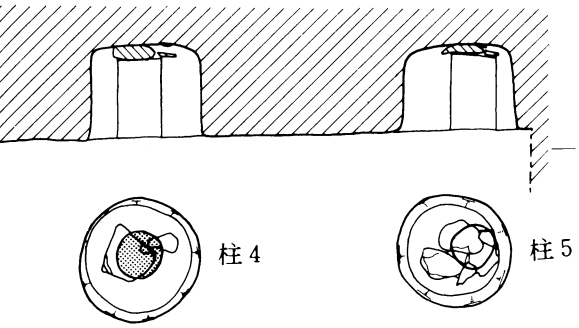
第197図　奈良～鎌倉時代の遺構配置図（南半）



第198図　奈良～鎌倉時代の遺構配置図（北半）

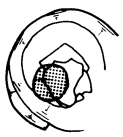


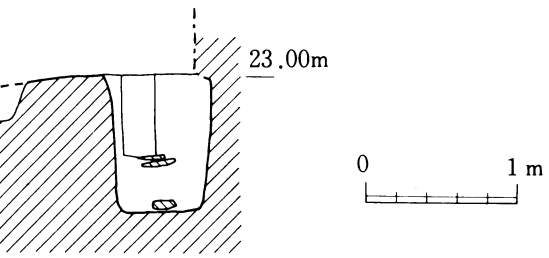
第199図　掘立柱建物1

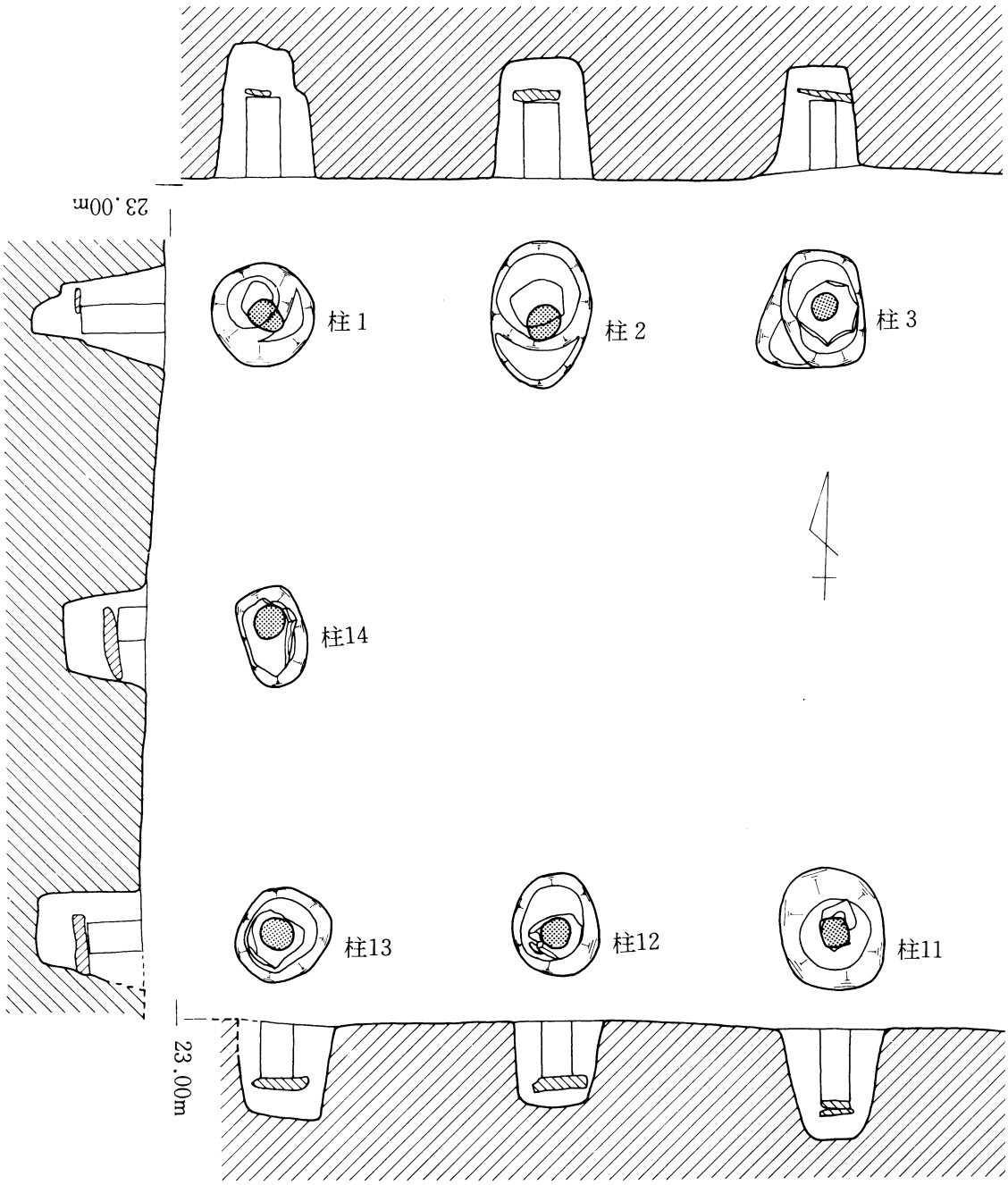


柱4

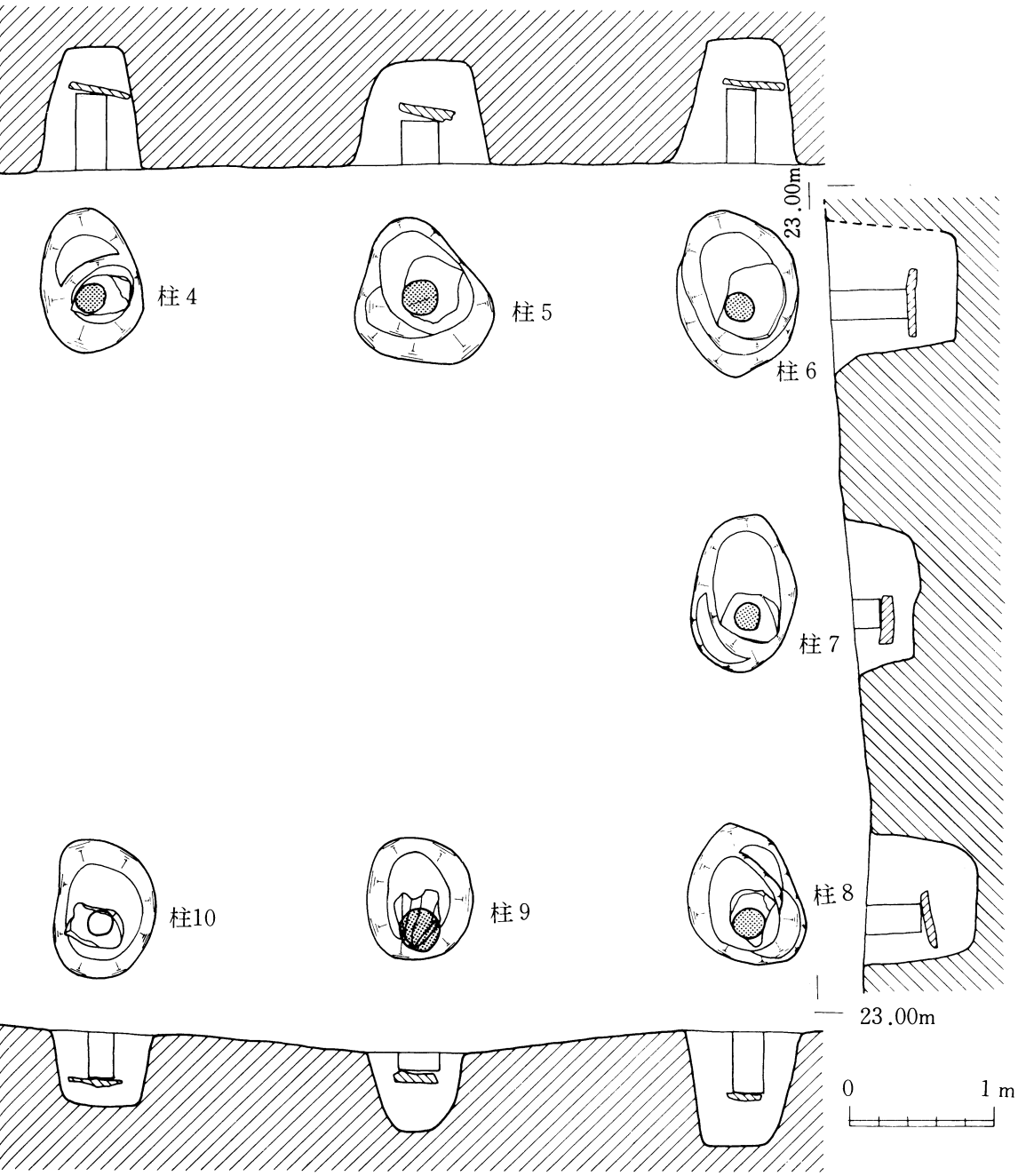
柱5

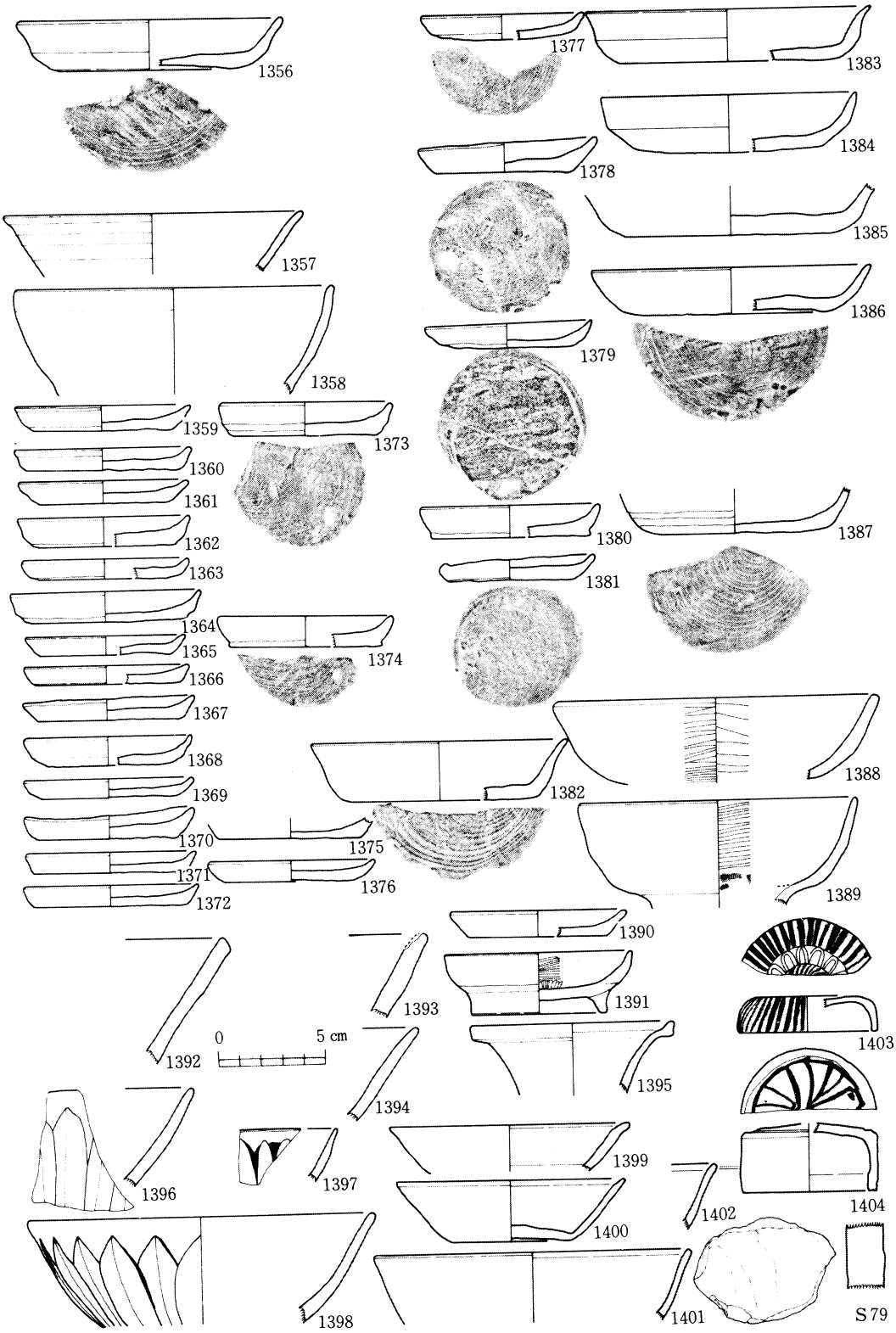

柱6





第200図　掘立柱建物2

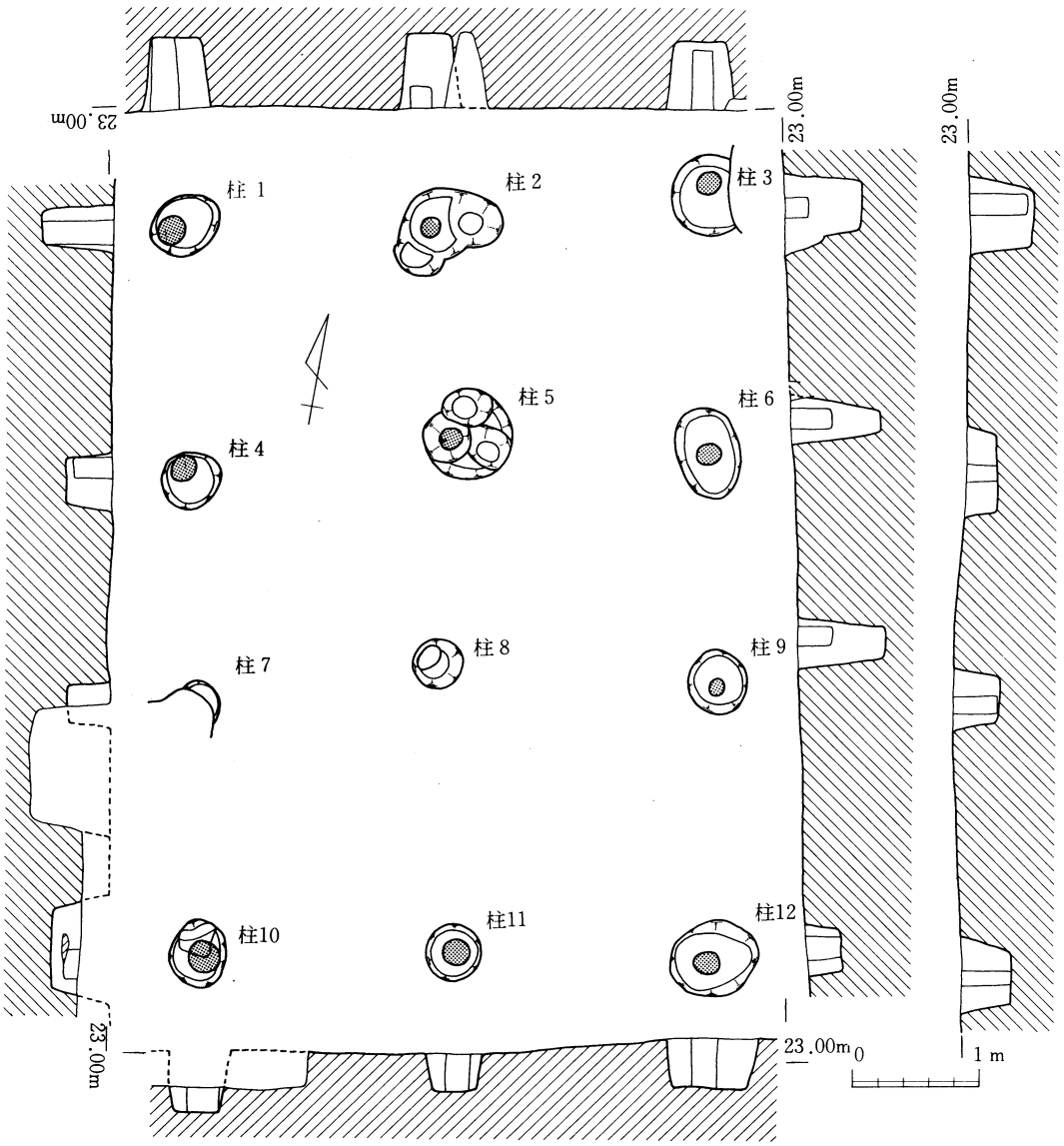

23.00m
柱4
柱5
柱6
柱7
柱8
柱9
柱10
23.00m
0
1m



第201図　掘立柱建物1（1356～1358）と2（1359～1404）の出土土器

(2)掘立柱建物２

15・16Ｅ～Ｇ区にある柱間が南北方向に２間，東西方向に５間の建物で，主軸方向はＮ２度Ｅである。それぞれに直径15cm～25cmを測る柱痕跡があり，その間隔は 2.0m～ 2.2mある。つまり，南北方向が 4.4m，東西方向が10.4mである。掘り方は直径が 0.6m～ 1.0mある円形で，数層の叩き締めをしている。柱の下にはすべて礎板状の石が置かれており，大きな石を使ったものや，小さな石を数個並べたものがある。ほとんどの柱穴の中には多くの土器がはいっており，完形品のものも多い。また地表面にも土師器皿，黒色土器皿，青磁埦，白磁皿などが多量に包含されていた。



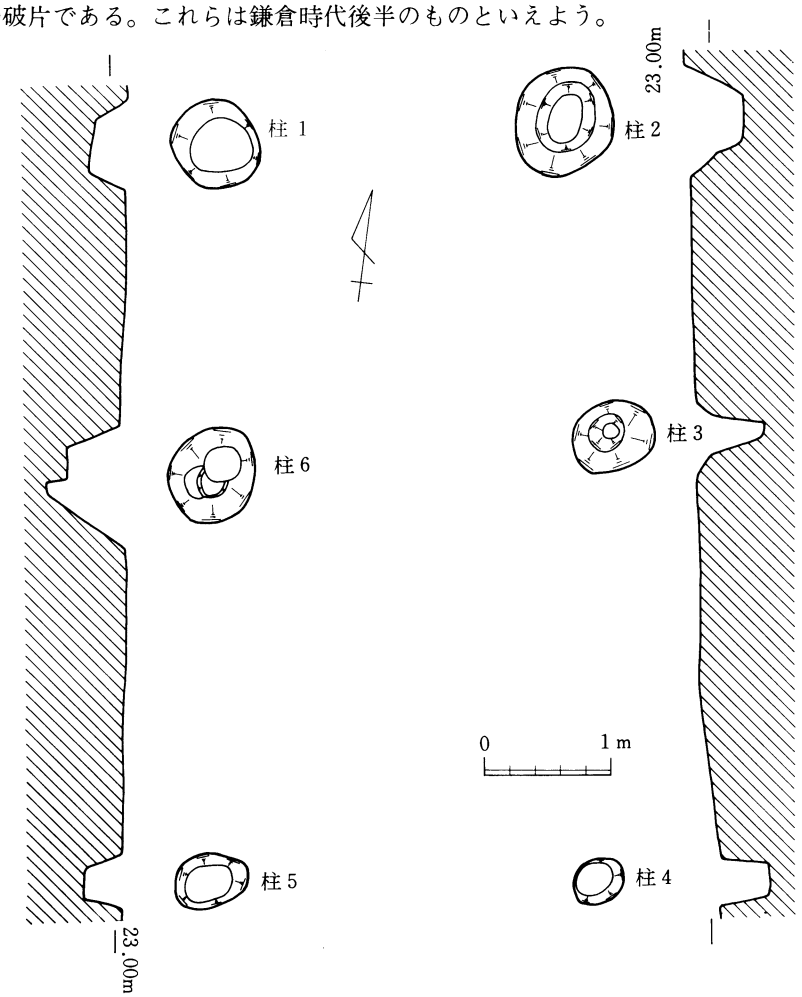
第 202図　掘立柱建物３

遺物の多くは土師器小皿（**1359**～**1381**）で，口縁直径が８cm前後，高さが１.5cm前後を測るものが多い。底部切り離しは糸切りである。**1381**は側面をつまんで，耳皿風に仕上げている。土師器坏（**1382**～**1387**）も底部切り離しは糸切りで，口縁直径10cm，高さ３cmの小さいものと，口縁直径12～13cm，高さ２.5cmのやや大きいものとがある。口縁は外反する。**1382**は黒色のス痕が多く付着しており炉明用の器として使われている。黒色土器（**1388**～**1391**）には内面のみ黒い内黒の椀と，内外黒い皿がある。椀は口縁直径13cm，深さ４cmと深いものである。皿は口縁直径８cm，高さ１.2cmのものと，口縁直径９cm，高さ２.7cmの台付のものとがある。須恵器（**1392**～**1395**）には口縁断面が矩形となるこね鉢，まっすぐ外へ開く坏，口縁直径９.5cmを測る複合風口縁の壺がある。こね鉢は内面がハケナデ，外面がヘラナデ仕上げをしており，軟質である。青磁（**1396**～**1398**）は外面にしのぎ蓮弁のある椀と小椀がある。白磁（**1399**～**1402**）は口縁部の釉がかきとられる口はげ口縁のもので，皿と椀がある。**1403**は青白磁の合子蓋である。天井部から口縁にかけて蓮花文が描かれる。**1404**も天井部に蓮花文のある青白磁の壺蓋である。**S79**は石鍋の破片である。これらは鎌倉時代後半のものといえよう。

(3)掘立柱建物３

15・16Ｄ・Ｅ区にある南北の柱間３間，東西の柱間２間の総柱建物で，主軸方向はＮ12度Ｗである。それぞれに直径15cm～20cmの柱痕跡があり，その間隔はほぼ２ｍずつである。つまり南北方向が６ｍ，東西方向が４ｍある。柱穴内には遺物は少ないが，柱３に古銭２（字不明），柱12に皇宋通宝２が，それぞれ柱の根元にあった。

土師器皿（**1405**）の底部切り離しは糸切りで，図化した３点の他に外面にしの



第203図　掘立柱建物４

ぎ蓮弁のある青磁埦が出土している。掘立柱建物1より古いが，鎌倉時代のものであろう。

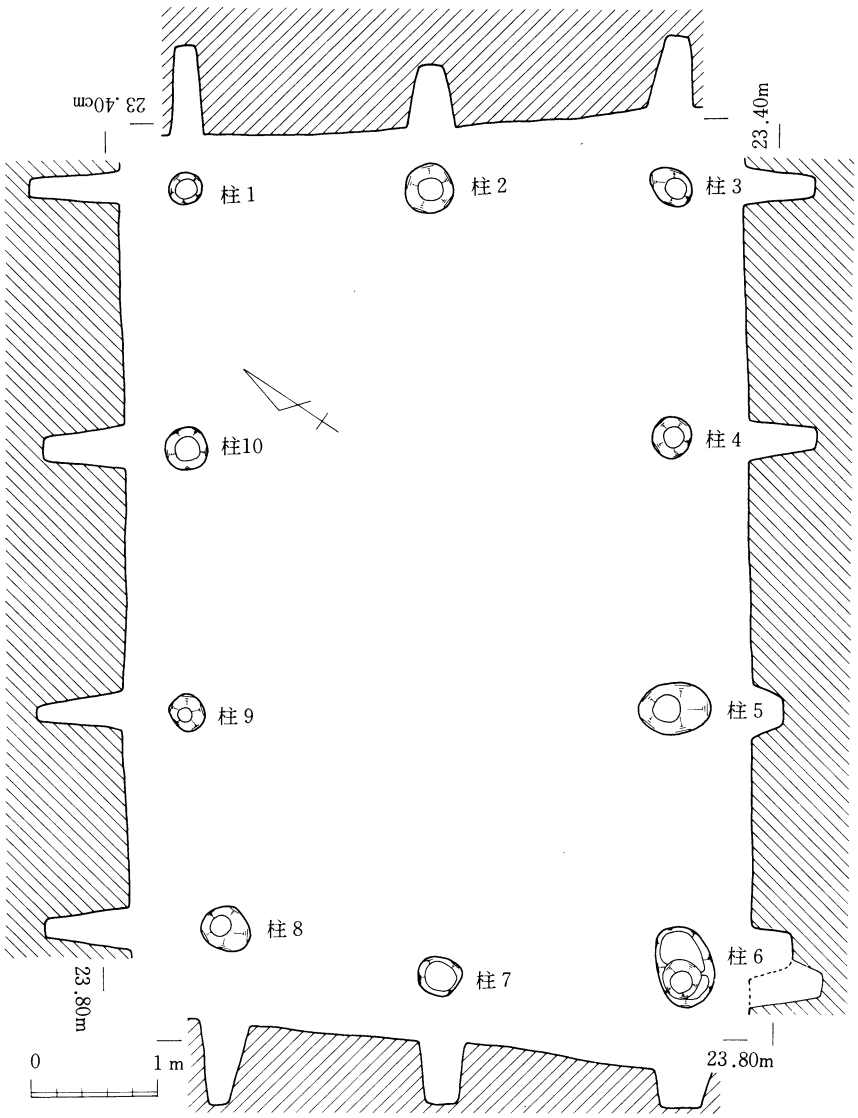
(4)掘立柱建物4

16・17D区にある南北方向の柱間2間，東西方向の柱間1間の建物で，主軸方向はN11度Wである。柱間隔は南北方向に2.4m＋3.6mで6m，東西方向に3mある。それぞれの柱穴は直径40cm～70cmと大きく，深さ30cm～50cmを測る。遺物の出土は少ない。

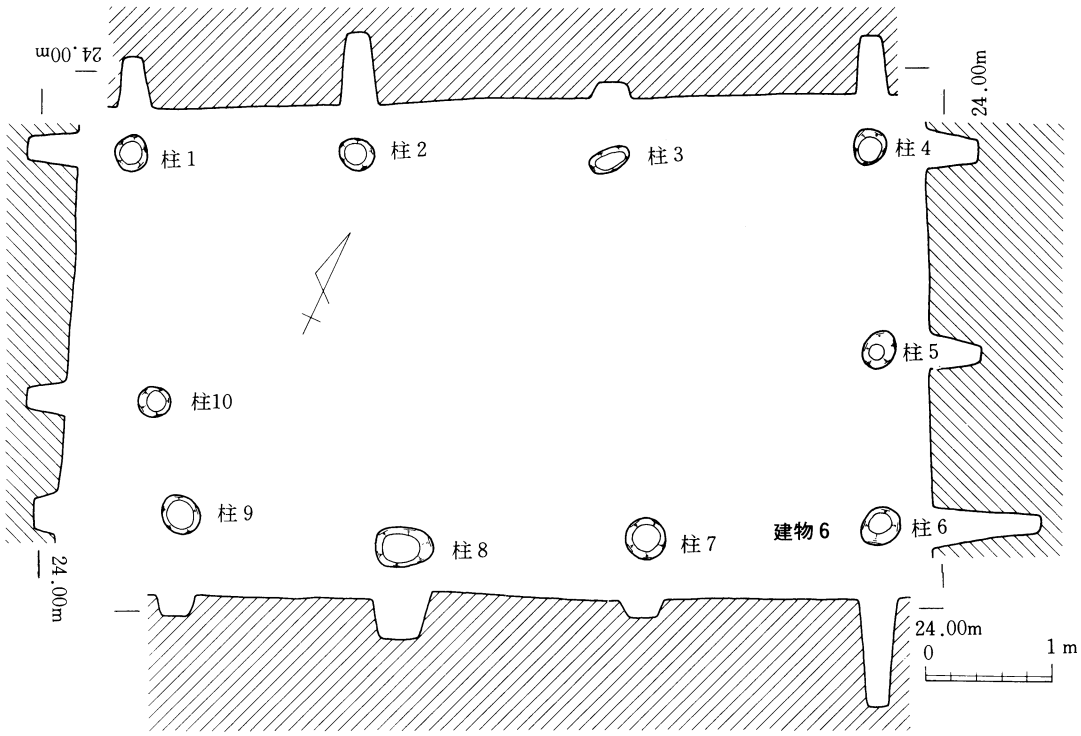
1408は須恵器鉢の底で，安定した平底である。外は横方向のヘラナデ，内面は横方向のハケナデで仕上げられる。こまかい土を使っているため軟質であるが，焼成良好である。黒灰色を呈している。鎌倉時代のものである。

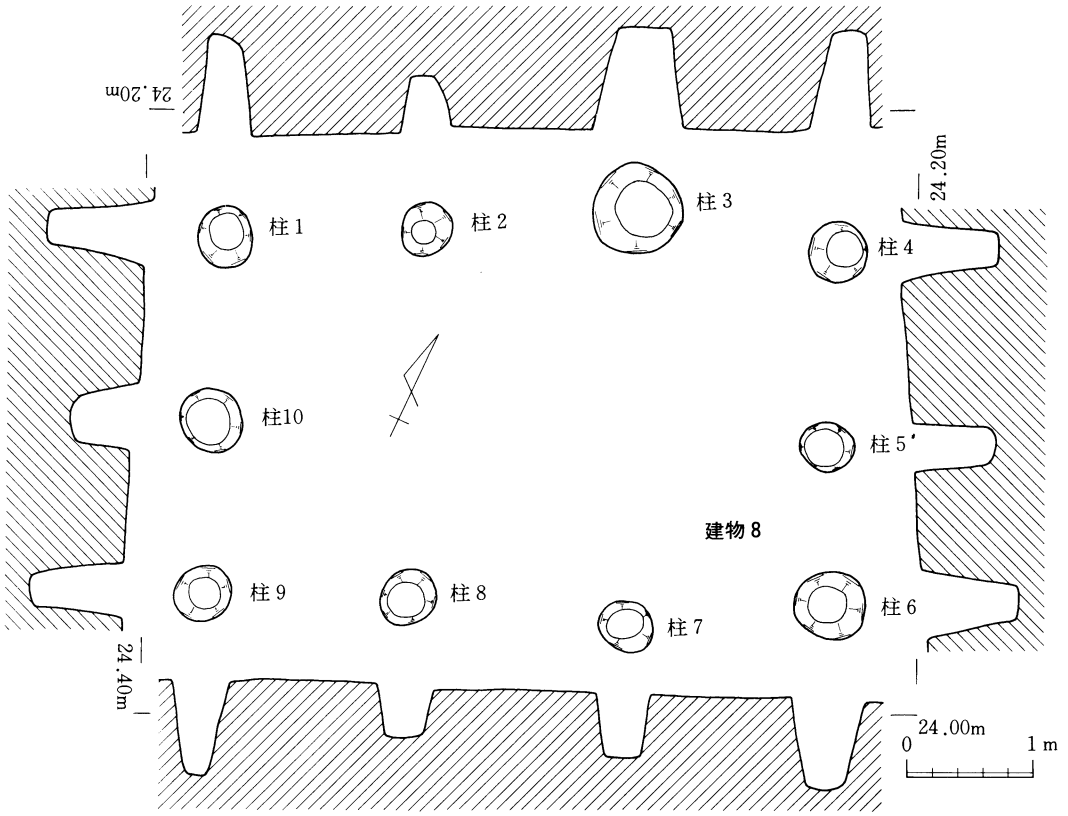
(2)掘立柱建物5

24・25I・J区にある南北方向の柱間2間，東西方向の柱間3間の建物で，主軸方向はN34度Wである。柱間隔は1.8m～2.0mで，南北方向が3.6m，東西方向が6mある。それぞれの柱穴は直径が30cm～40cm，深さが30cm～70cmある。10本の柱穴中，7本の柱穴に遺物がはいっているが，すべて小破片であり，図化できるものは少な



第204図　掘立柱建物5





第205図　掘立柱建物6と掘立柱建物8

い。

1409は土師器皿，**1410**は内黒土師器椀である。図化しなかった中に糸切り底の土師器坏，字は不明だが墨書のある内黒土師器椀がある。

(6)掘立柱建物6

25・26H・I区にある南北方向の柱間2間，東西方向の柱間3間の建物で，主軸方向はN25度Wにある。柱間隔は北側が1.7m＋2.1m＋2.0mで5.8m，南側が1.8m＋1.9m＋1.9mで5.6mある。西側は2.0m＋0.9mで2.9m，東側は1.6m＋1.4mで3.0mある。それぞれの柱穴は直径が25cm～30cmあり，深さが10cm～80cmある。柱穴内には遺物がほとんどなく，わずかに4つの柱穴に細片があるのみであった。

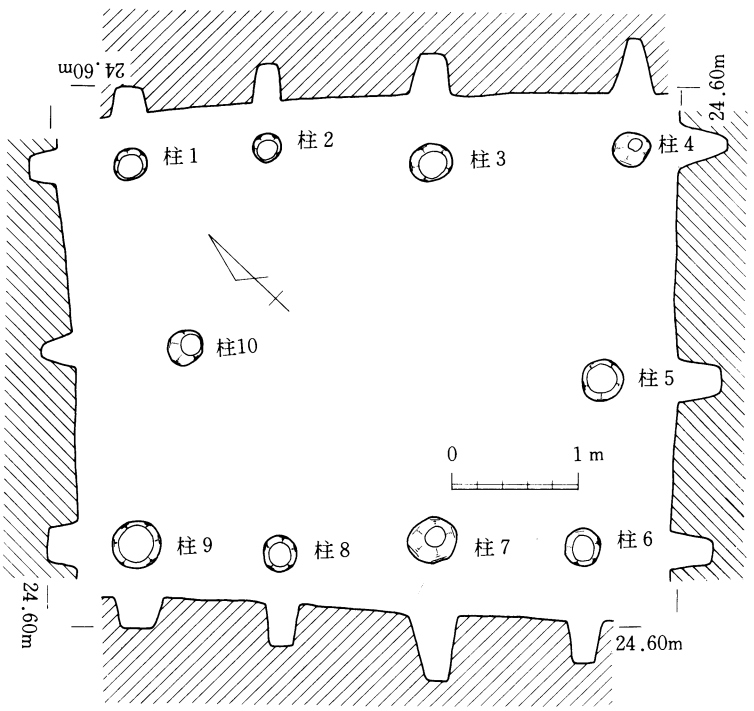
(7)掘立柱建物7

26・27F・G区にある南北方向の柱間2間，東西方向の柱間3間の建物で，主軸方向はN44度Wにある。柱間隔は北側が1.1m＋1.3m＋1.6mで4.0m，南側が1.2m等間隔の3.6mである。西側は1.5m等間隔で3.0m，東側は1.8m＋1.4mで3.2mである。西側の中央柱が内側へはいり込んでいる。それぞれの柱穴は直径が20cm～35cmあり，深さは20cm～50cmある。柱穴内には遺物がほとんどなく，わずかに3つの柱穴に細片があるのみであったが，柱6の中には銅製帯金具があった。

1411と**1412**は土師器坏である。底部の切離しはヘラ切りである。この建物は平安時代のものであろう。

(8)掘立柱建物8

26・27H・I区にある南北方向の柱間2間，東西方向の柱間3間の建物で，主軸方向はN25度Wである。柱間隔は東西方向が1.6m等間隔の4.8m，南北方向が1.5m等間隔の3.0mである。それぞれの柱穴は直径が40cm～70cm，深さが40cm～80cmある。すべての柱穴に土器がはいっており，完形品もある。



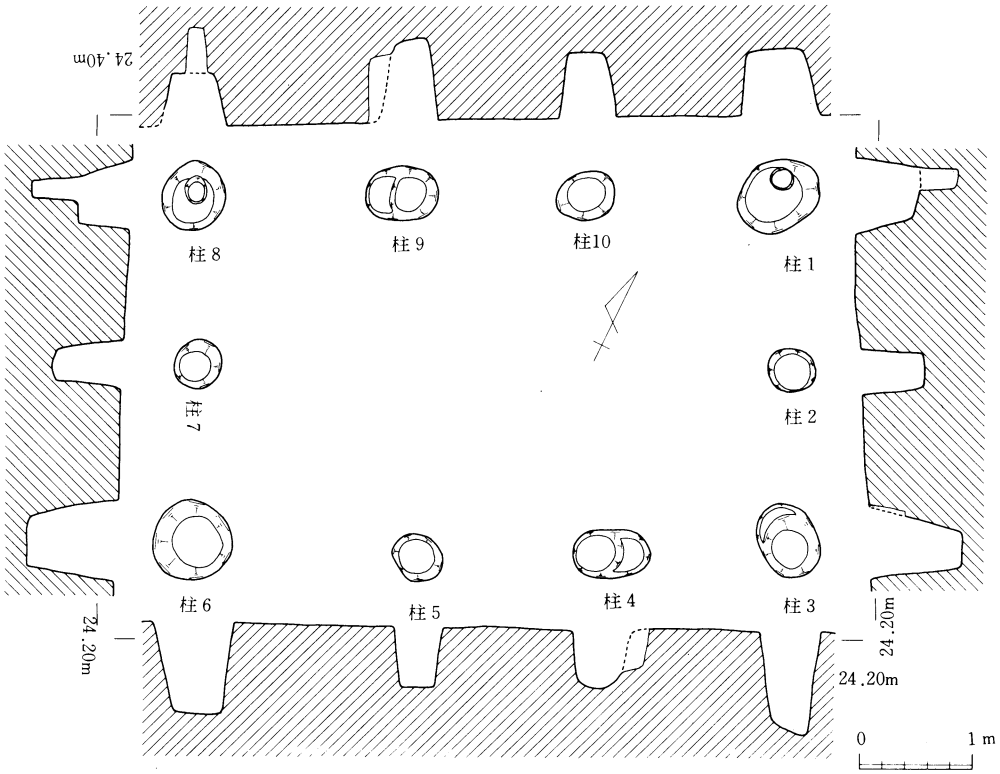
第206図　掘立柱建物7

1413は土師器皿である。**1414**～**1418**は底部

切り離しがヘラ切りの土師器坏である。**1414**は口縁直径16.5ｍ，底部直径 7.5cm，高さ５cmの深い坏である。口縁部は外へ開きながらまっすぐ伸びている。**1415**は丸みをもっている。**1419**は口縁部がくの字状に強く屈折する土師器甕で，内外ともに粗い整形がしてある。小型である。**1420**は口縁直径が23cmもある鉢に近い大型の土師器埦である。土師器の胎土は白色石粒を多く含む砂質の胎土で黒雲母・石英なども多く含まれている。特に甕の胎土は粗い。**1421**と**1422**は内面をていねいにミガいた研磨土器で，内面は赤くしていることから朱の塗られた可能性もある。**1421**は口縁直径13.5cmを測る台付皿である。坏の深さ1.4cm,高さ 2.2cmを測る。**1422**は坏か埦で，高台が付いている。**1423**は内外とも黒色をした土師質の埦で，口縁端部が内側へ反っている。外面の仕上げは横方向のヘラケズリである。**1424**・**1425**は外へまっすぐ開く口縁をもつ内黒土師器埦である。**1426**は内面に朱を塗った埦である。**1427**～**1430**は須恵器甕の破片である。内面のタタキは円心円文あるいは円孤であるが，**1430**は同心円が３つ整然としている。**1428**は円弧にまざって車輪文のタタキがみられる。外面のタタキは**1427**と**1429**が小さい格子叩キ，**1428**が平行線，**1430**が正格子である。焼成良好で堅致である。この他に柱１からは字が不明だが墨書のかかれた土師器坏が出土している。

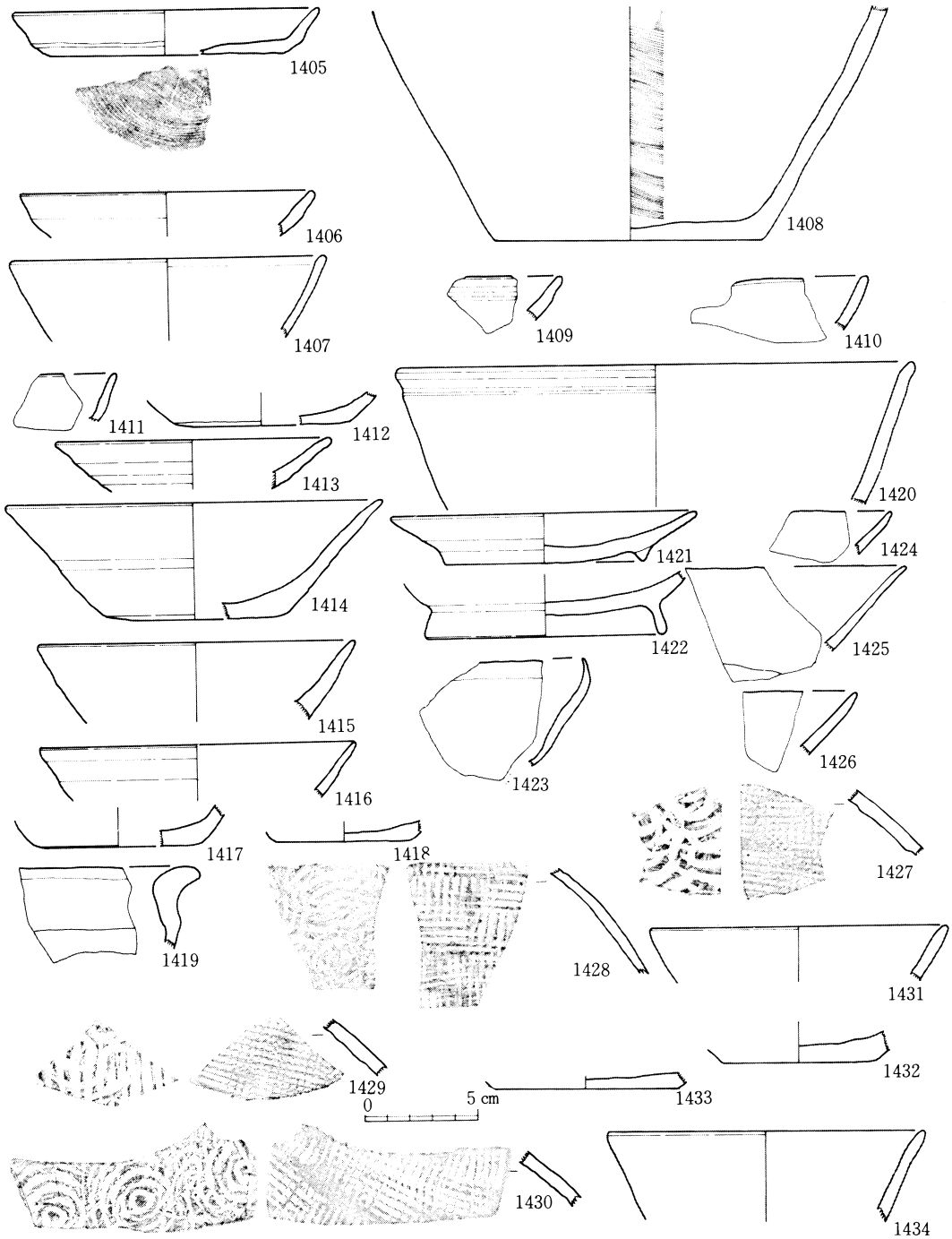
(9)掘立柱建物９

27・28 H～Ｊ区にある南北の柱間２間，東西の柱間３間の建物で，主軸方向はN28度Wである。柱間隔は南北方向が1.6m 等間隔で3.2m，東西方向が1.8m 等間隔で5.4m である。



第207図　掘立柱建物９

1431・1432は土師器坏で，底部切り離しはヘラ切りである。**1433**は須恵器の高台のない坏身，**1434**は土師器埦である。この他に柱１より字は不明であるが，墨書のある土師器坏が，柱６からは薄い鉄片が出ている。これらは平安時代前半のものであろう。



第208図　掘立柱建物３～掘立柱建物９の出土土器

⑽　掘立柱建物10

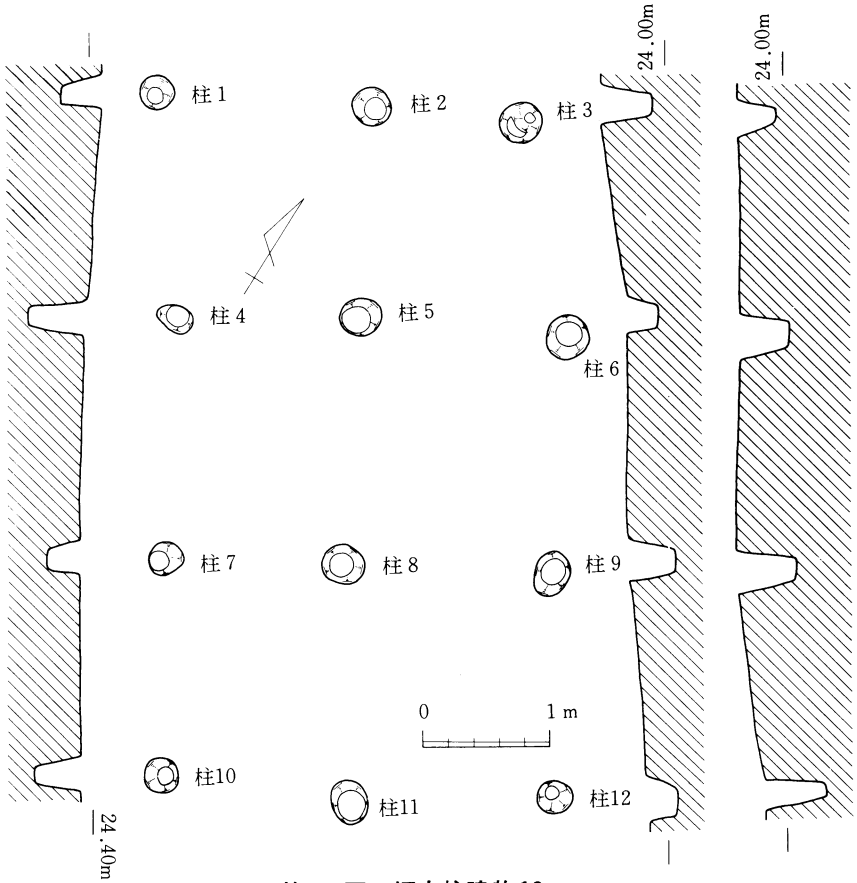
28・29Ⅰ・J区にある南北方向の柱間3間，東西方向の柱間2間の総柱建物で，主軸方向はN31度Wである。柱間隔は東西方向が北から 1.7m ＋ 1.1m で 2.8m，1.4m ＋ 1.7m で 3.1m，1.4m ＋ 1.7m で 3.1m，1.5m ＋ 1.6m で 3.1m ある。南北方向は西から 1.7m ＋ 2.0m ＋ 1.7 mで 5.4m，1.7m ＋ 1.9m ＋ 1.9m で 5.5m，1.7 m＋ 1.9m ＋ 1.7m で 5.3m ある。それぞれの柱穴は直径が30cm前後，深さが20cm～50cmある。柱穴のなかには3本を除いて遺物がはいっているが，細片が多い。

1435が土師器皿，**1436・1437**が土師器坏で，底部の切り離しは糸切りである。**1438**は内黒土師器の坏で，内面・外面ともヘラミガキがされている。

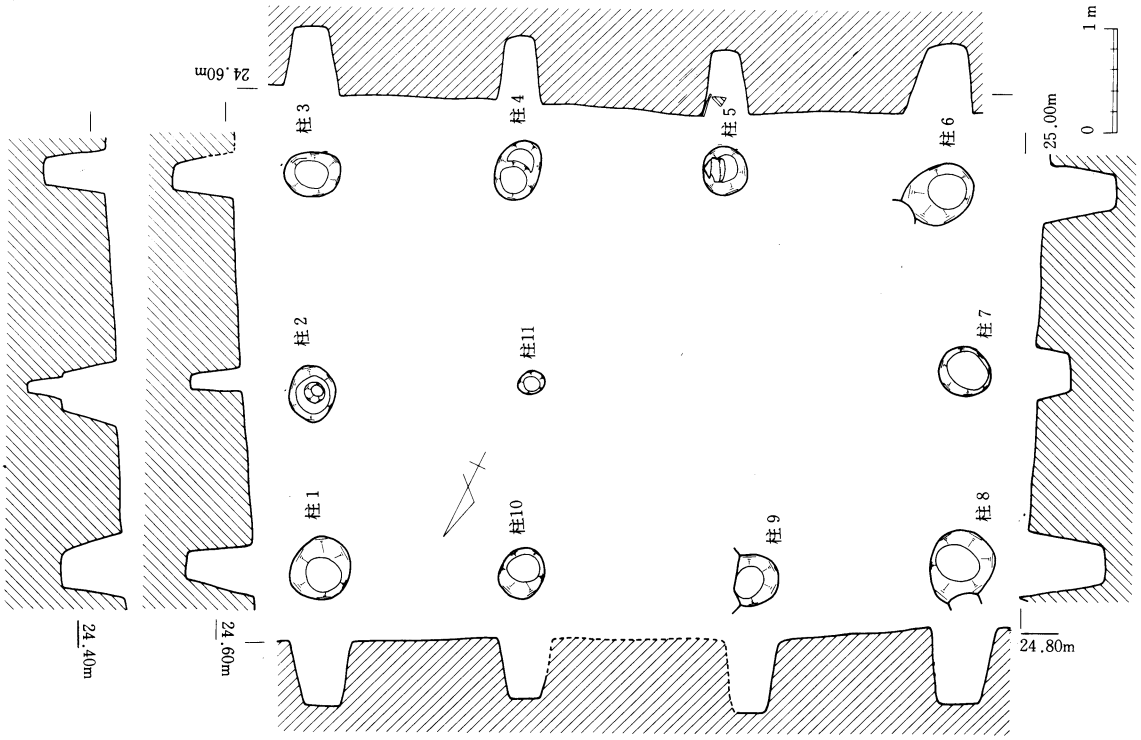
⑾　掘立柱建物11

27～29G・H区にある南北方向の柱間2間，東西方向の柱間3間の建物で，東から2列目には中央に柱がある。主軸方向はN62度Wを測る。柱間隔は南北方向が 1.8m 等間隔の 3.6m，東西方向が北側は 1.8m ＋ 2.2m ＋ 2.0m で 6.0m，南側は 1.9m ＋ 2.1m ＋ 2.0m で 6.0m ある。それぞれの柱穴は直径が20cm～60cm，深さが30cm～80cmある。柱5は途中に礫があり，須恵器甕の大破片を押さえている。すべての柱穴に遺物がある。

1439は土師器坏で，底部はヘラによる切り離しのあと，板でていねいにナデている。**1440～1442**は土師器埦で，口縁部がやや外反するものと，まっすぐ伸びるものとがある。口縁直径が14cm，高さ5cm～5.5cmある。**1443・1444**は内面ヘラケズリのある土師器甕である。**1445・1446**は内黒土師器埦である。須恵器



第209図　掘立柱建物10



第210図　掘立柱建物11

（**1447**～**1449**）は坏身・坏蓋・甕がある。甕は大きな破片で，外面・内面とも条痕タタキである。外面は赤茶褐色を呈している。この他に柱9で「作」の墨書がある土師器坏が出土している。これらの遺物は平安時代前期のものと思われる。

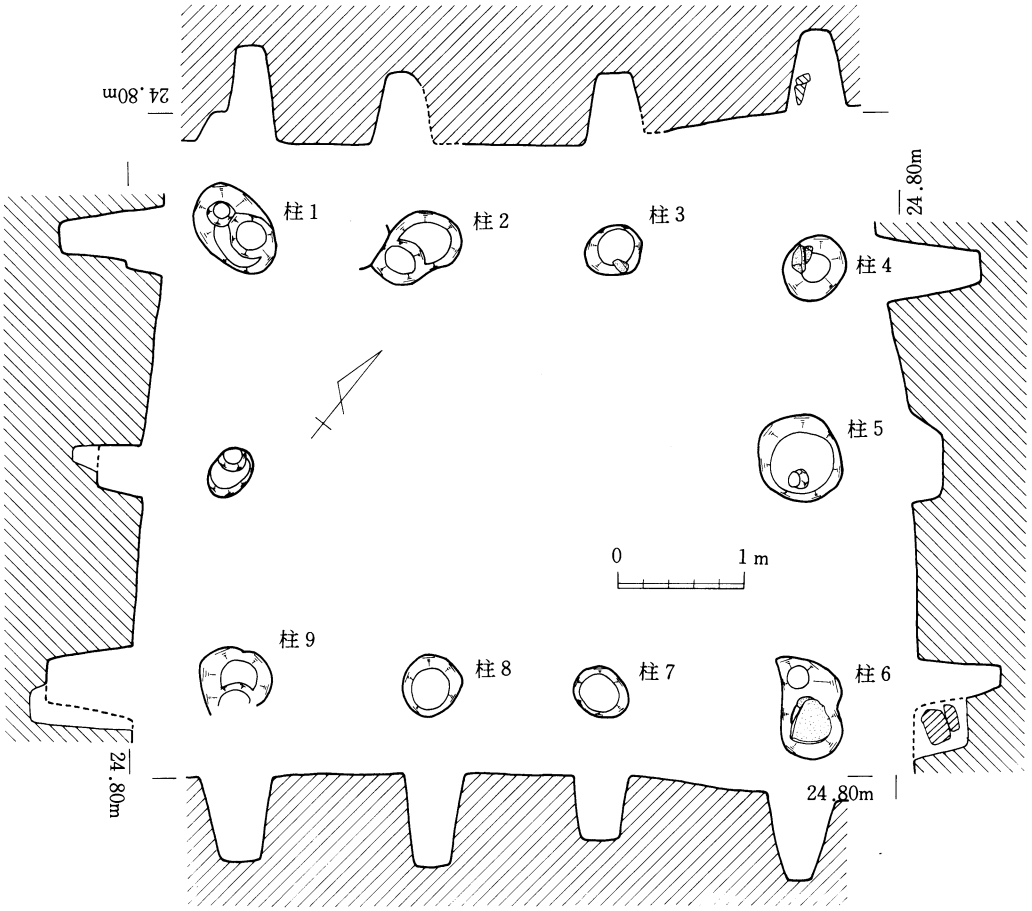
⑿掘立柱建物12

28・29G・H区にある南北方向の柱間2間，東西方向の柱間3間の建物で，主軸方向はN39度Wにある。柱間隔は東西方向が 1.4m＋ 1.4m＋ 1.6mで 4.4m，南北方向が 1.6m等間隔の 3.2mである。それぞれの柱穴は直径が40cm～70cm，深さが40cm～70cmある。柱4は埋土途中に礫が2個重なっている。柱穴の中には3本を除いて土器がはいっている。

土師器坏（**1450**～**1453**）の底部切り離しはヘラ切りで，そのあとを板状のもので，ていねいにナデている。土師器椀（**1454**）はやや小型である。土師器甕（**1455**～**1457**）は強く外反する口縁部をもち，内面の頸部以下はヘラケズリで仕上げている。**1457**の外面は粗いハケナデで仕上げている。須恵器（**1458**～**1461**）は坏蓋と坏身がある。坏蓋は口縁端部が短く下へ折れている。坏身は口縁がまっすぐ外へ開いており，底部に高台は付かない。内面・外面ともひだすき様の痕跡がみられる。

⒀掘立柱建物13

32・33G・H区にある南北方向の柱間2間，東西方向の柱間3間の建物で，主軸方向はN39度



第211図　掘立柱建物12

である。柱間隔は南北方向の西側が 1.9m＋ 1.5mで 3.4m，東側が 1.8m＋ 1.5mで 3.3mである。東西方向は 1.4m＋ 1.4m＋ 1.6mで 4.4mである。それぞれの柱穴は直径が30cm～40cm，深さが20cm～80cmある。柱穴内には２つの柱穴だけ遺物がはいっている。

1462は土師器坏で，底部の切り離しは糸切りである。

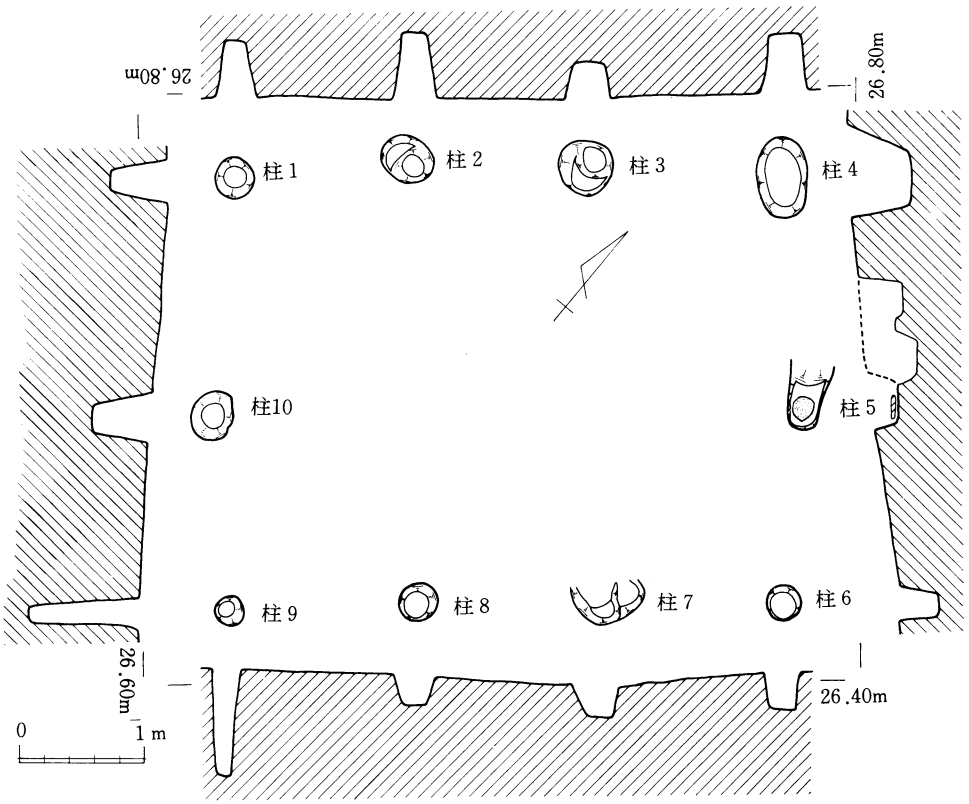
⑭掘立柱建物14

34～36H～K区にある南北方向の柱間２間，東西方向の柱間５間の建物で，南側にひさしが１間延びる。西から３本目の柱列には中央に柱があり，間仕切りと思われる。ひさしの部分は下屋にあたる部分であろう。柱間隔は東西方向が 1.7m～ 2.2mで総長 9.8m，南北方向が２m等間隔で４mある。ひさし部分は約 2.0m張り出しており，上屋の柱列とは並びが一致しない。それぞれの柱穴は直径が18cm～24cm，深さが15cm～30cmある。約半数の柱穴に遺物がはいっているが，破片は小さい。

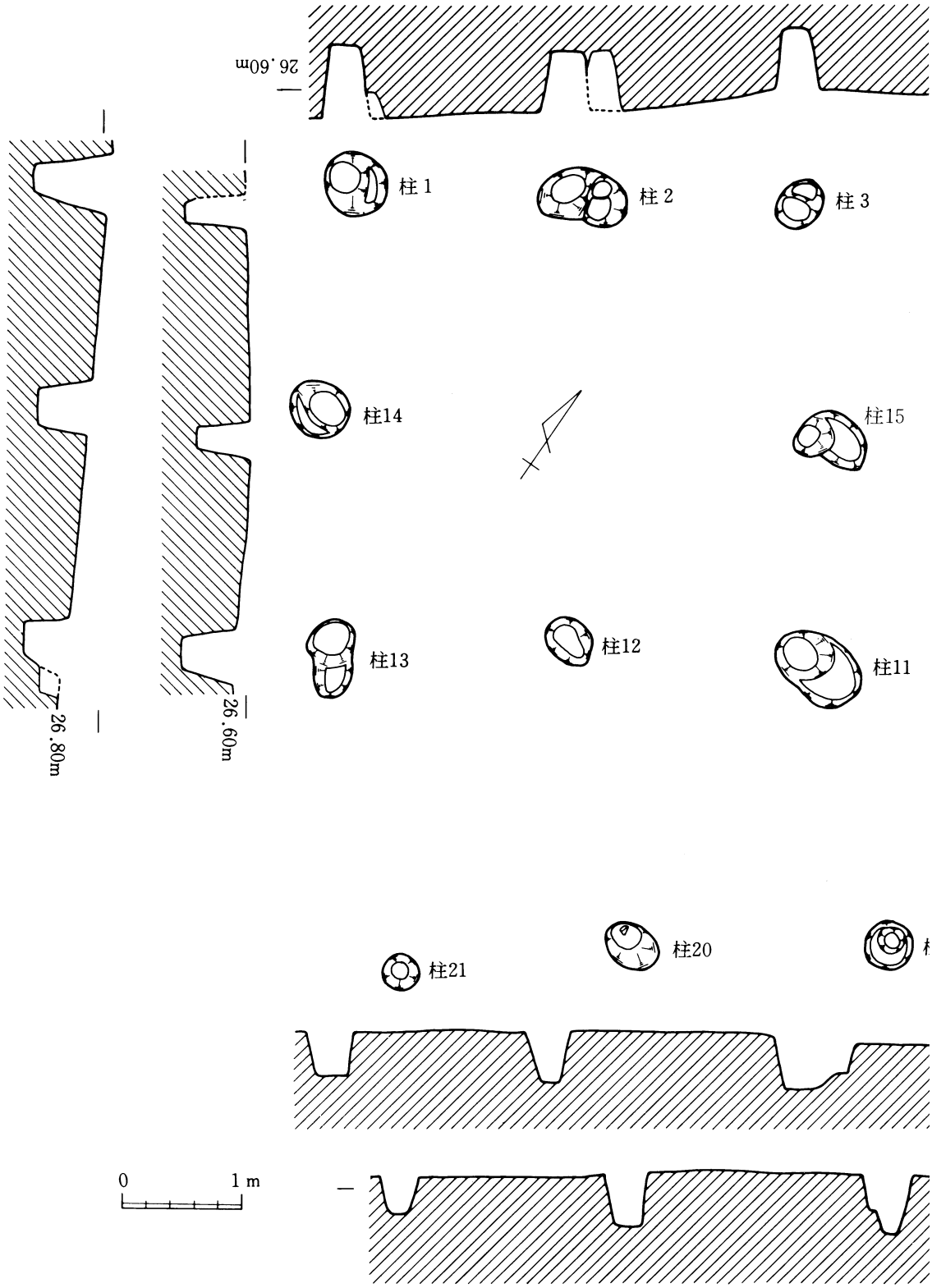
1463～**1466**は土師器皿で，口縁直径が８cm～９cm，高さが 1.1cm～ 1.5cmある。底部の切り離しは糸切りである。**1467**は土師器甕で，内面の頸部から下はヘラケズリである。**1468**と**1469**

は土師器埦で，口縁部は端部が外反している。底部は高台でなく，高くしている。**1470**は青白磁の小型壺である。口縁端には釉がかからず，外面に凹線文がある。これらの遺物は平安時代後半のものと思われる。

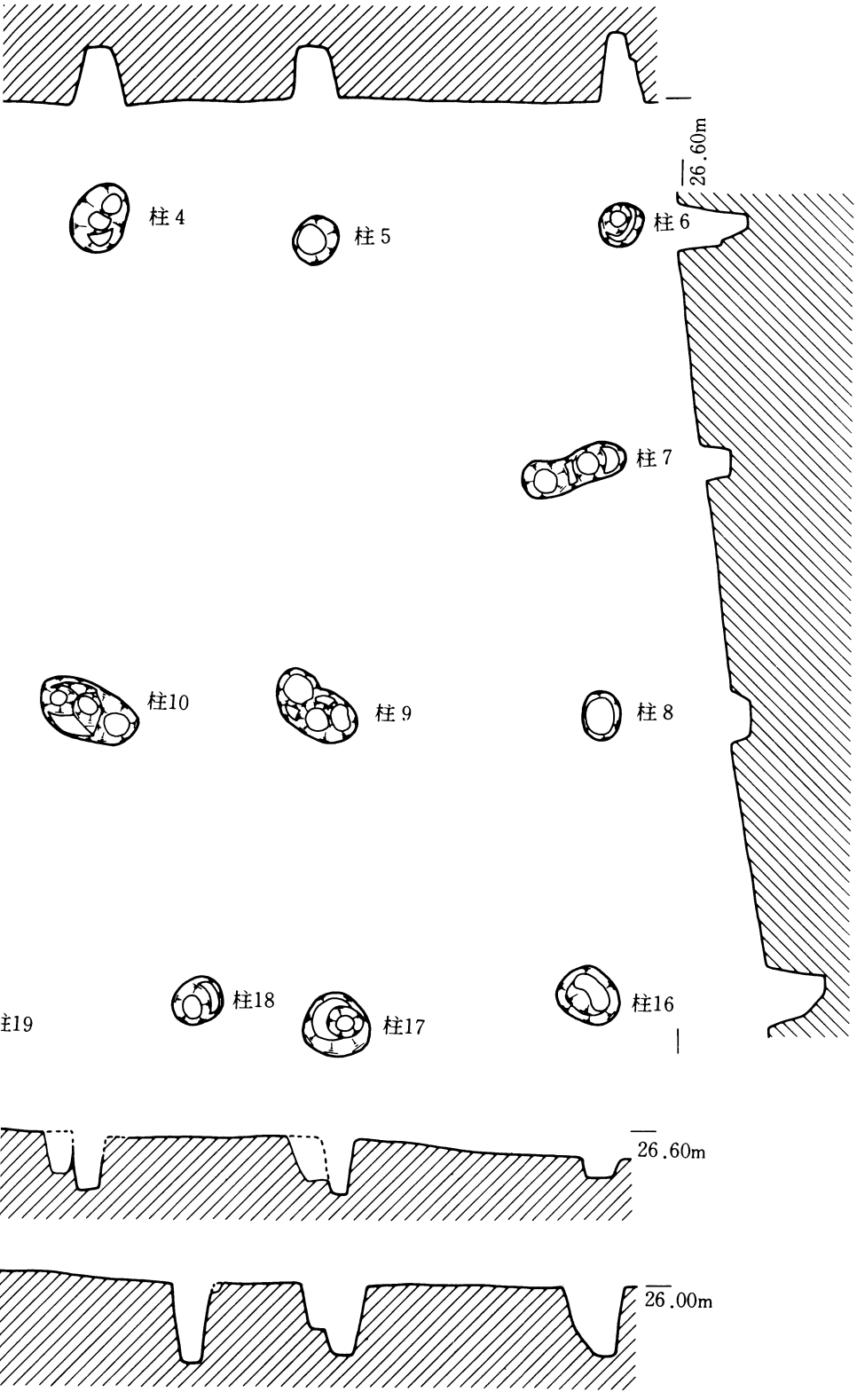
14棟の掘立柱建物は大きく３時期に分けられる。Ⅰ期は６～９，11・12で主軸方向が一定しない。平安時代前期である。Ⅱ期は５・10・13・14で主軸方向が西へ30度～40度ぶれるものである。土師器皿・坏の底部切り離しが糸切りとなる平安時代後期のものである。Ⅲ期は鎌倉時代のもので，１～４が該当する。主軸方向は磁北周辺にある。

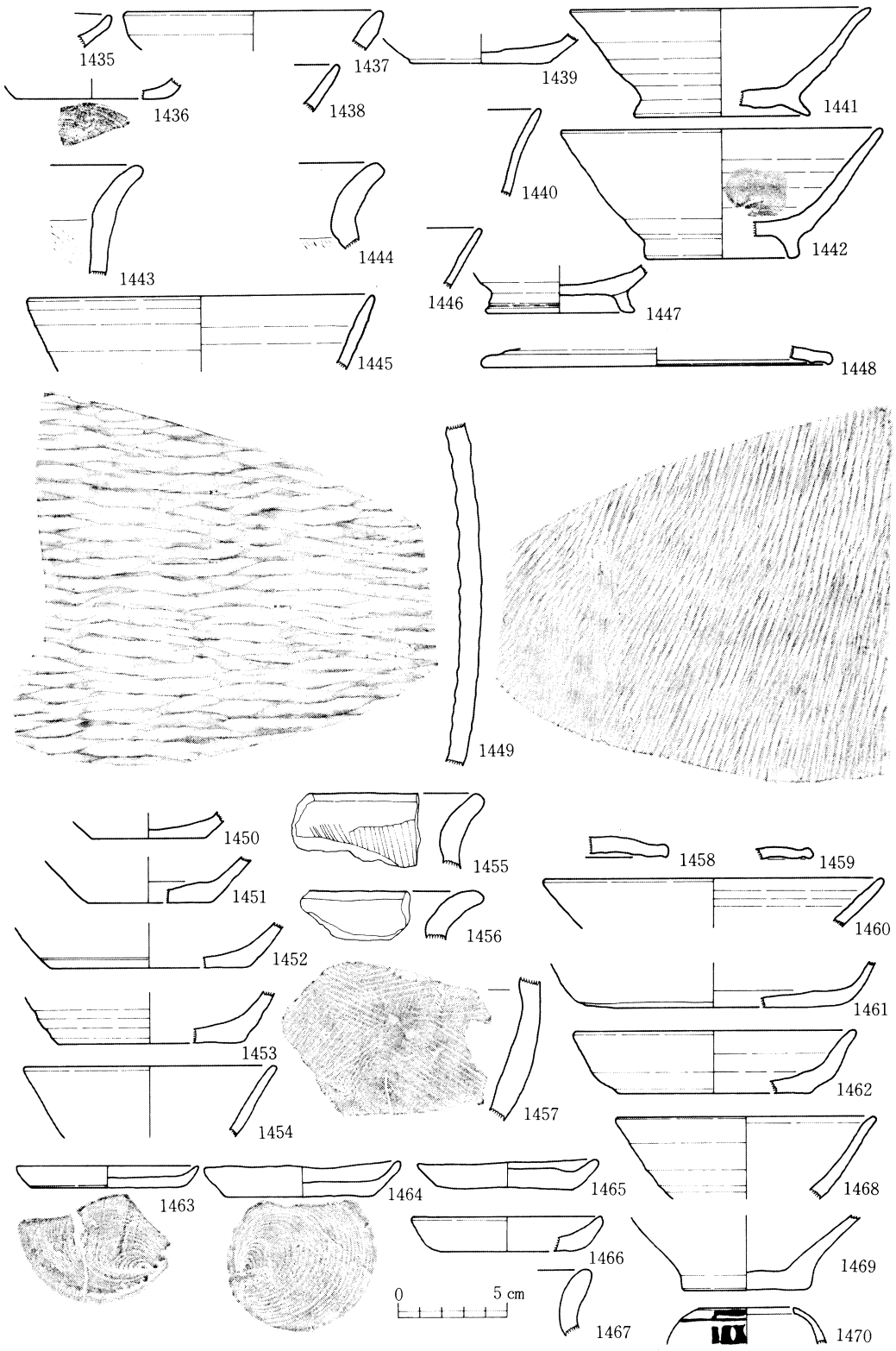


第212図　掘立柱建物13



第213図　掘立柱建物14


26.60m
柱4
柱5
柱6
柱7
柱10
柱9
柱8
柱18
柱17
柱16
26.60m
26.00m



第214図　掘立柱建物10～掘立柱建物14の出土土器

2, 土　　坑

全域に円形，方形，だ円形をした多くの土坑があり，土器を含むものもある。10G・H区付近では複数の土坑が切りあっている。ここではそれらの中で深いものや，土器を多く含むものを取りあげ土坑A～土坑Sと整理番号をうったが，括弧がきで土坑番号もつけている。

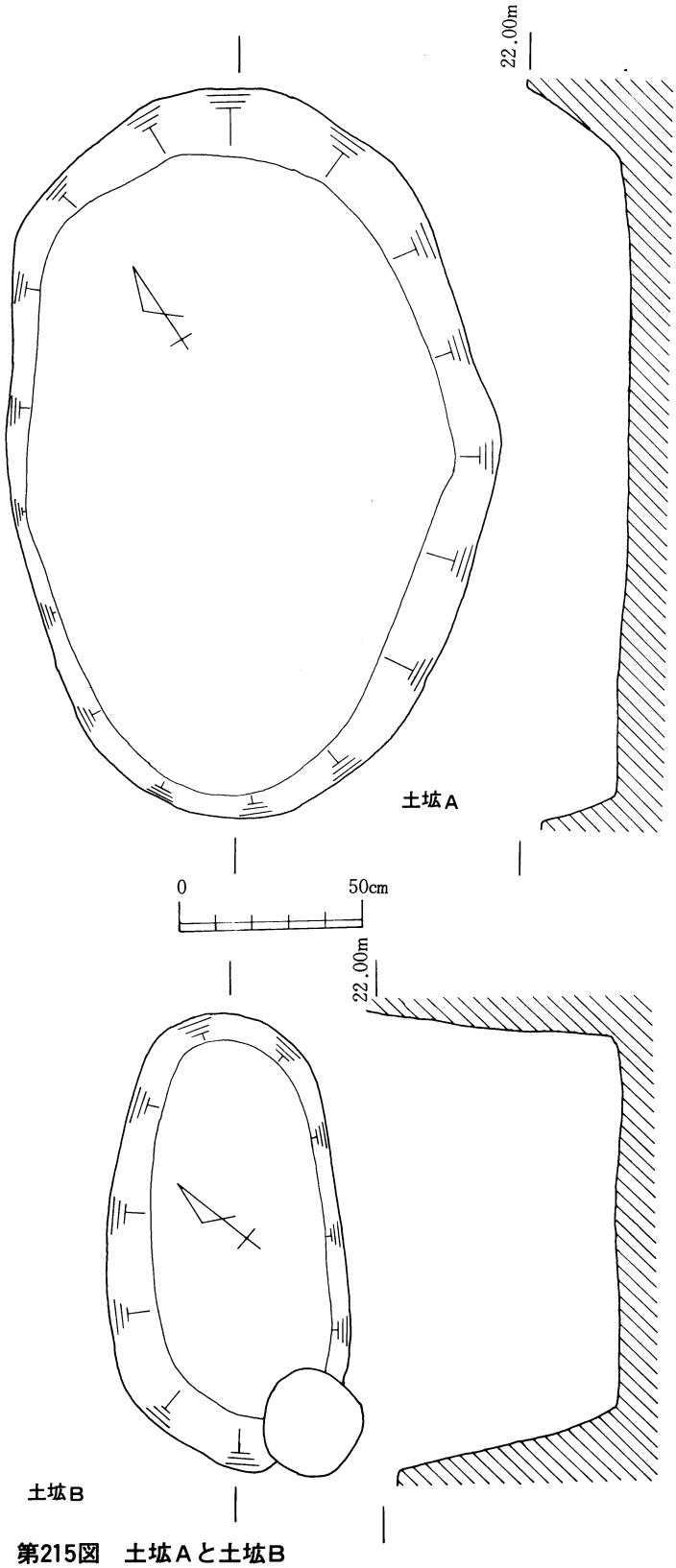
(1)土坑A（8Ⅰ区土坑1）

8H・Ⅰ区にあるだ円形の土坑で，長径200cm，短径 140cmを測り，深さ25cmを残している。

土器はなかったが，床面近くに開元通寶と紹聖元寶が1枚づつ近くにあった（第237図参照）。

(2)土坑B（10F区土坑1）

10F区にある長径 125cm，短径65cmを測るだ円形の土坑で，深さ 65 cmを残している。土師器皿（**1471・1472**）・坏・甕黒色土器皿（**1473**）・椀（**1474・1475**），須恵器甕（**1476**）などが出土している。皿・坏の底部はヘラ切りである。



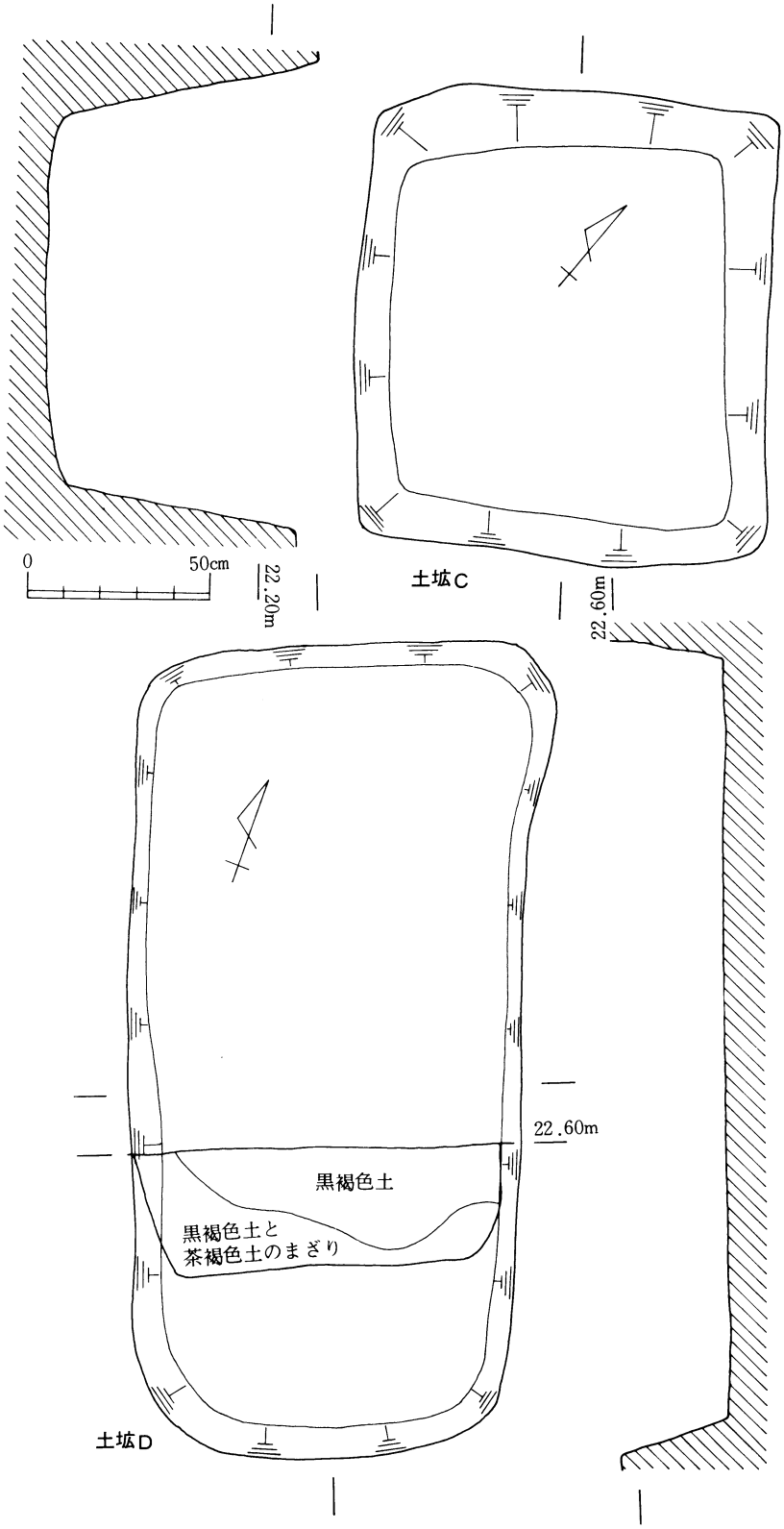
第215図　土坑Aと土坑B

(3)土坑C（11Ⅰ区土坑1）

11Ⅰ区にある115cm×130cmの方形土坑で，深さ70cmを残している。土師器坏・甕（**1477**）・黒色土器椀・須恵器の坏蓋（**1478**）が出土している。坏の底部切り離しはヘラ切りで，坏蓋の口縁端はわずかに下へ折れ曲がっている。

(4)土坑D（12G区土坑1）

12・13G区にある110cm×225cmの隅丸方形土坑で，深さ30cmを残している。埋土は上に黒褐色土，下に黒褐色土と茶褐色土のまざり土がある。土師器坏・椀（**1479**）・甕（**1480**・**1481**），青磁椀，滑石などがあり，坏の底部は糸切りである。

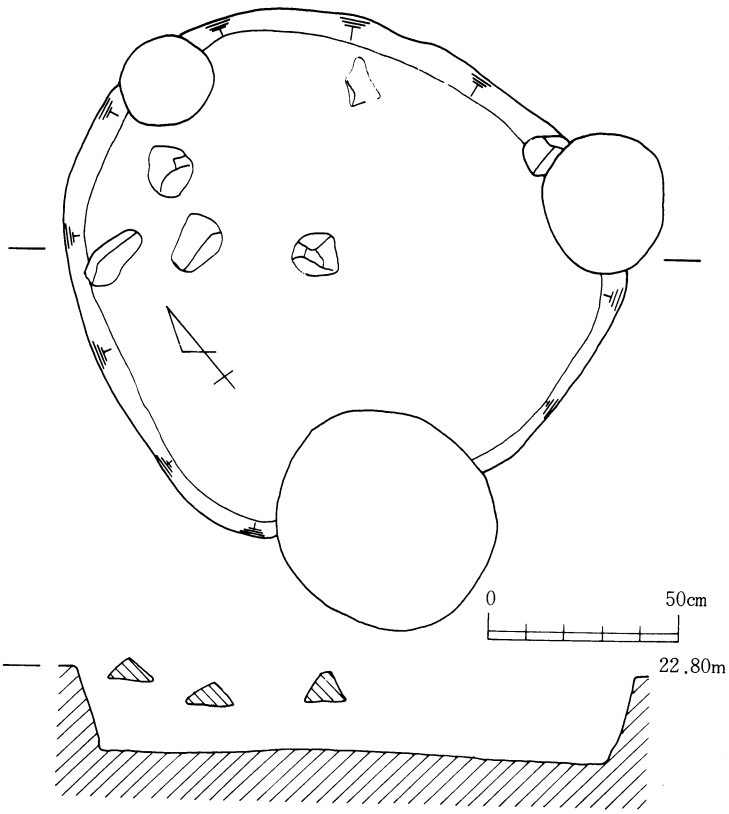


第216図　土坑Cと土坑D

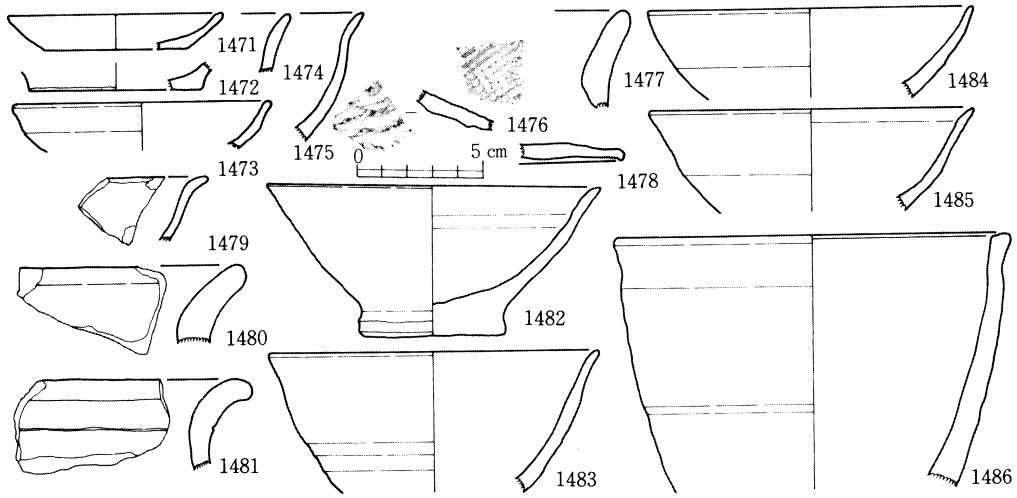
(5)土坑Ｅ（13Ｄ区土坑１）

12・13Ｄ区にある直径が140cmの略円形土坑で，深さ20cmを残している。埋土上部に６個の礫がある。

土師器坏（**1484**）・埦（**1482・1485**）・甕，内黒土師器埦（**1483**），須恵器鉢が出土している。**1482**は口縁直径13cm，高さ６cm，底部直径６cmを測り，充実高台である。内面・外面とも整形はていねいである。須恵器鉢は灰がかった淡茶褐色を呈し，焼成は良好である。外へ開きながら，まっすぐ伸び，口縁部近くがくぼんでいる。



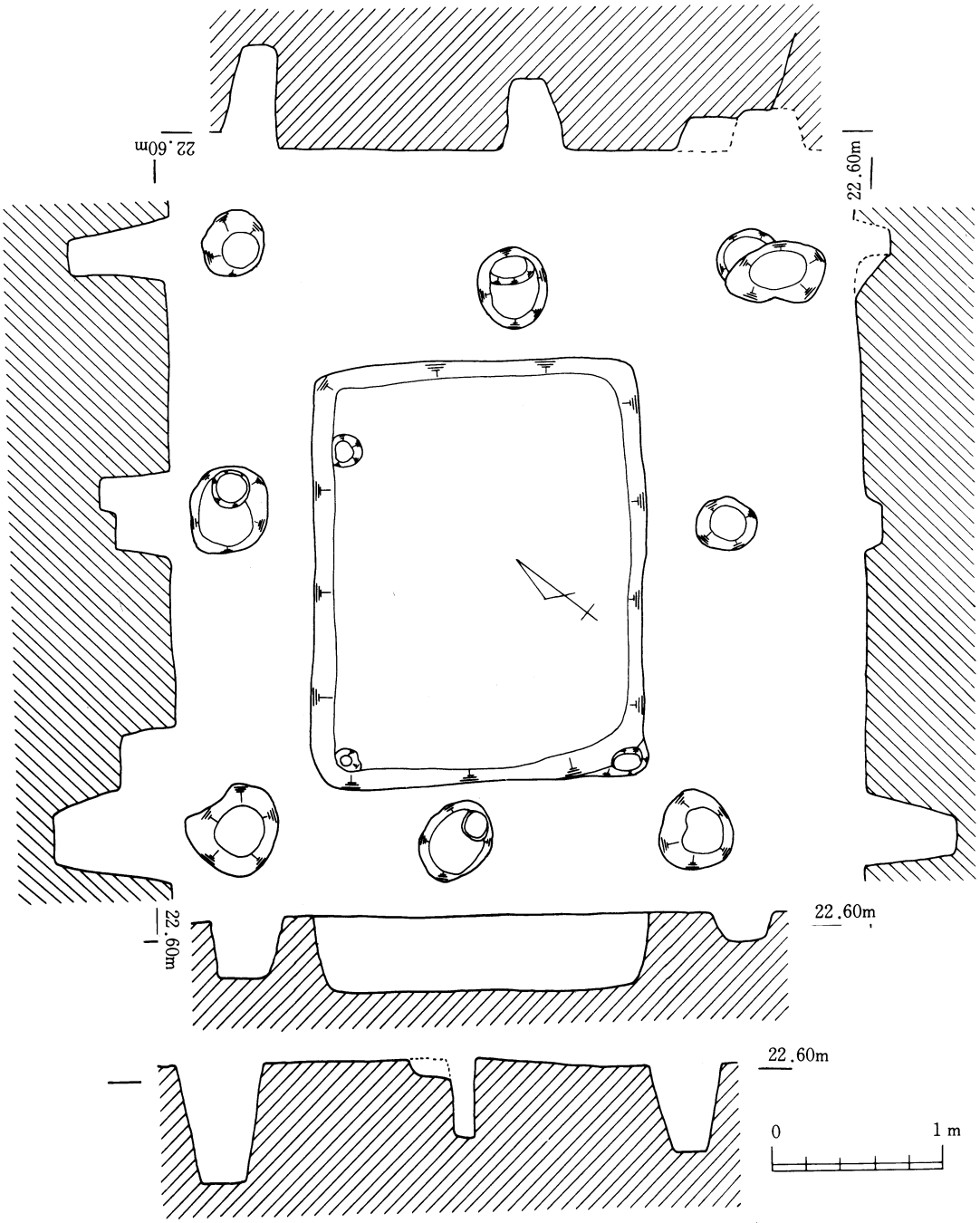
第217図　土坑Ｅ



第218図　土坑Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの出土土器

(6)土坑F（13H区土坑1）

13H区にある190cm×250cmの方形土坑で,深さ40cmを残している。土師器坏（**1487・1488**），須恵器甕（**1489**），青磁碗，白磁皿（**1490・1491**）が出土している。青磁はしのぎ蓮弁の碗，白磁は口はげ皿である。この土坑の隅には小さい穴が3個ある。また土坑を囲むようにして柱



第219図　土坑F（縮尺：1/40）

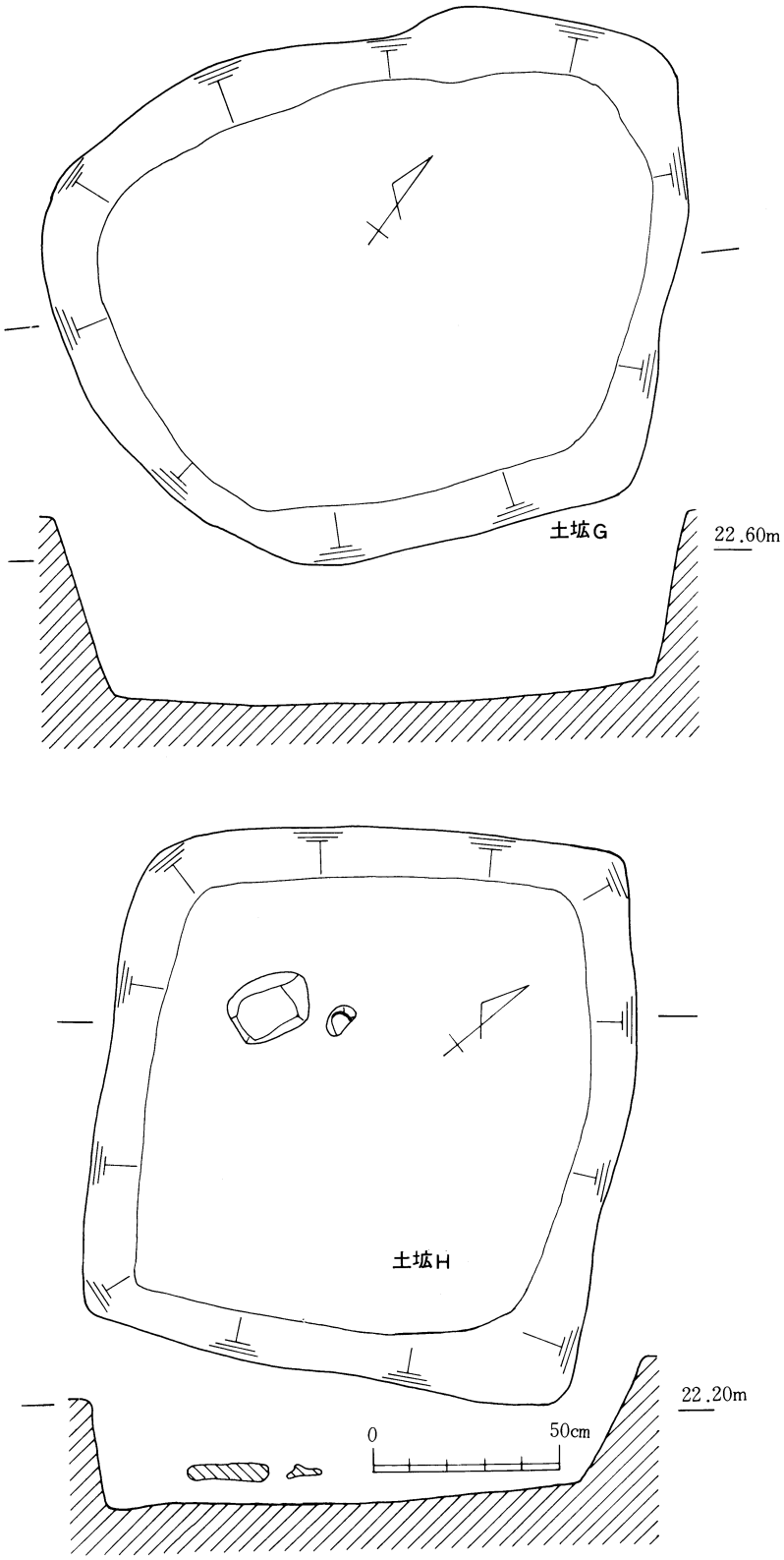
間が２間×２間の掘立柱建物がある。柱間隔は140cm～160cmあり，2.8m×3.4mである。

(7)土坑G（14G区土坑１）

13・14G区にある140cm×170cmのだ円形土坑で，深さ45cmを残している。土師器の坏（**1492・1493**）・甕，須恵器甕（**1494・1495**）が出土している。坏の底部切り離しはヘラ切りで，**1493**の底には墨書がみられる。**1494**は外面が大きい正格子タタキ，内面が円弧タタキである。

(8)土坑H（15J区土坑１）

15J区にある１辺が145cmの正方形土坑で，深さ30cmを残している。西隅に大きな扁平石と土師器埦があった。土師器埦（**1496**）・甕・須恵器坏（**1497**）が出土している。埦は高台のつくもので，口縁直径16cm，高さ7.5cm，高台直径9.5cmを測る。坏も直径10.5cmの高台が付くものである。



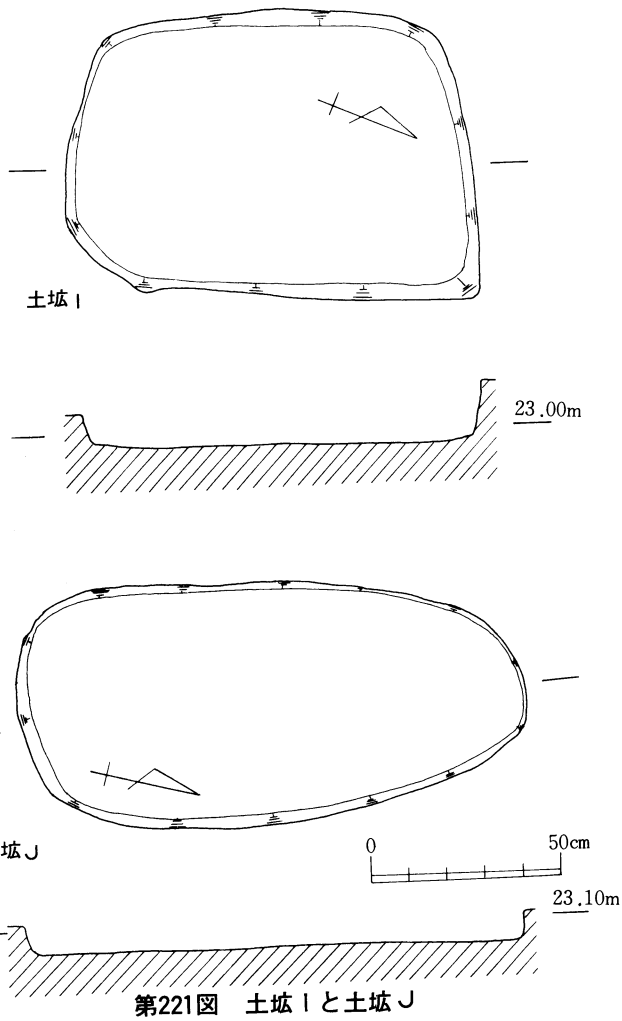
第220図　土坑Gと土坑H

⑼土坑Ｉ（16Ｄ区土坑１）

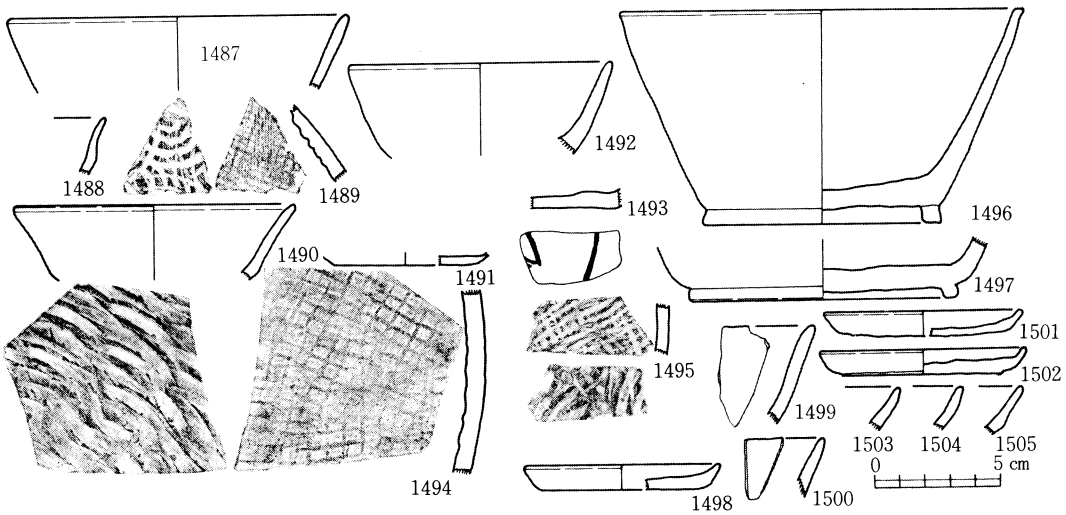
16Ｄ区にある75cm×105cmの隅丸方形土坑で，深さ15cmを残している。遺物は少なく小破片が多い。土師器皿・坏（**1500**），内黒土師器埦（**1499**）が出土している。埦は内面・外面ともていねいにヘラミガキをしている。

⑽土坑Ｊ（17Ｄ区Ｐ２）

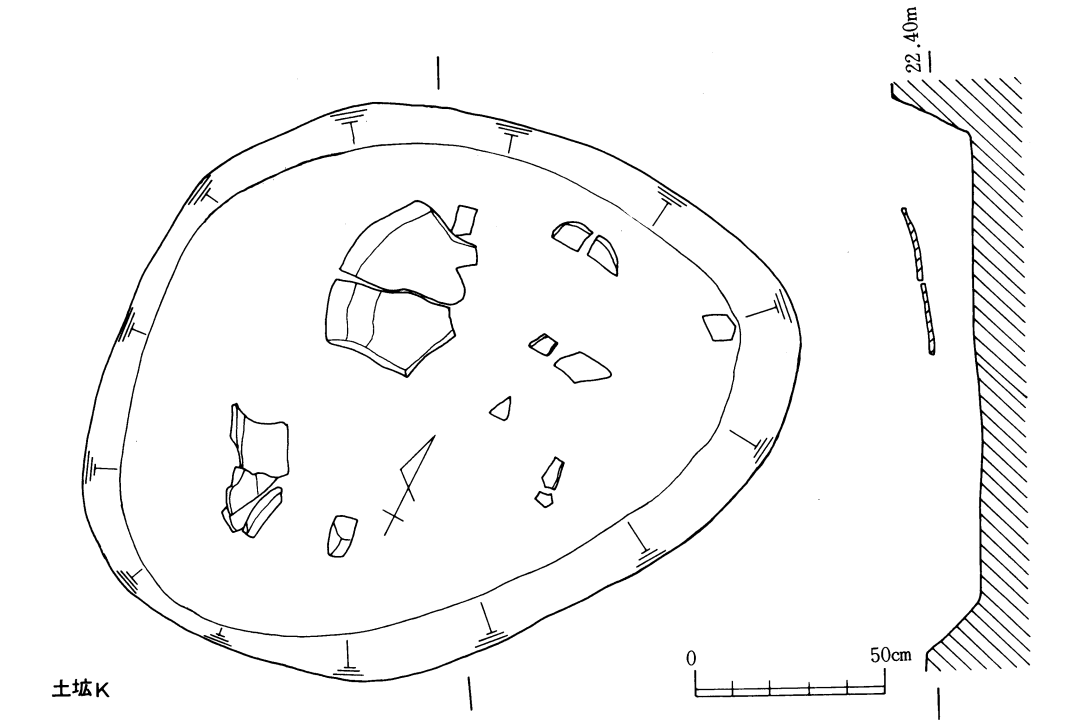
16・17Ｄ区にある長径135cm，短径65cmのだ円形土坑で，深さ10cmを残している。土師器皿（**1501**・**1502**）・坏（**1503**～**1505**）が出土している。皿は口縁直径が８cm，高さ１cm，底部直径が６cmある。底部切り離しはヘラ切りで，**1501**はその上を板状のものでナデている。内面は繊維状のものでナデている。坏も低いもので，**1505**は外に屈曲部がある。**1503**は外面に墨書らしきものがあるが，はっきりしない。

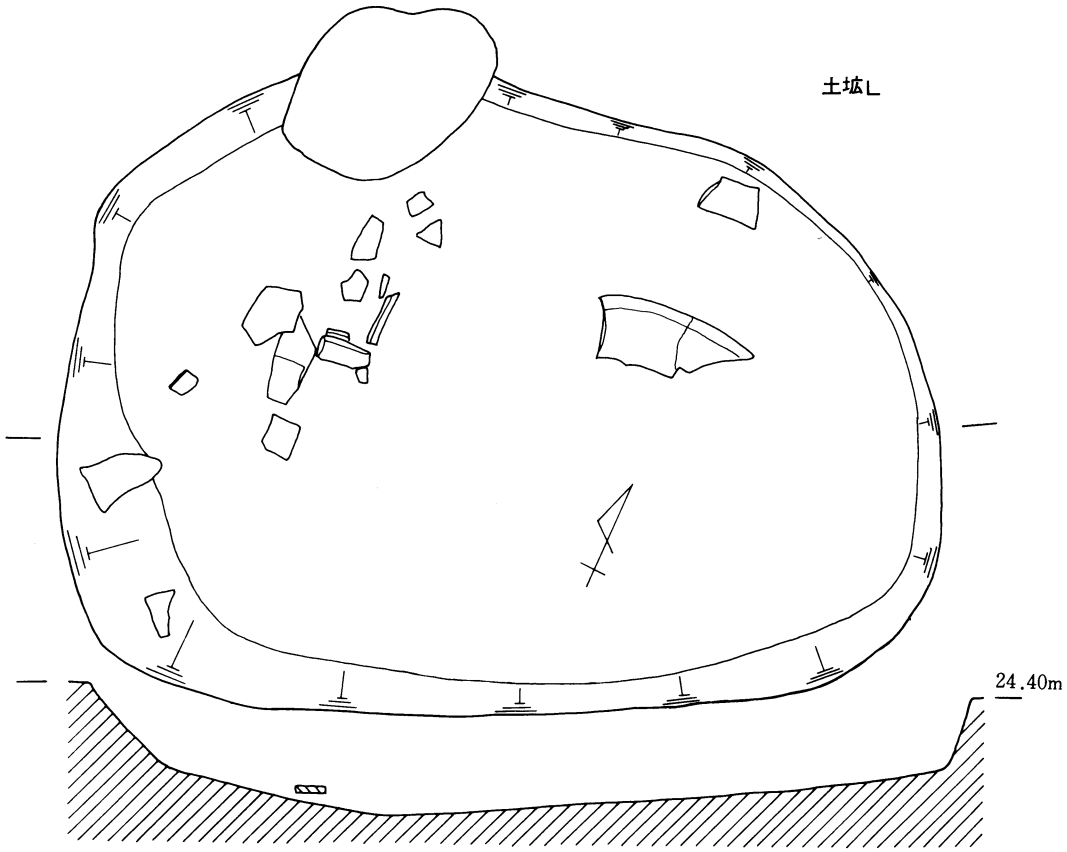


第221図　土坑Ｉと土坑Ｊ



第222図　土坑Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊの出土土器





第223図　土坑Kと土坑L

⑾土坑K（22E区P-1）

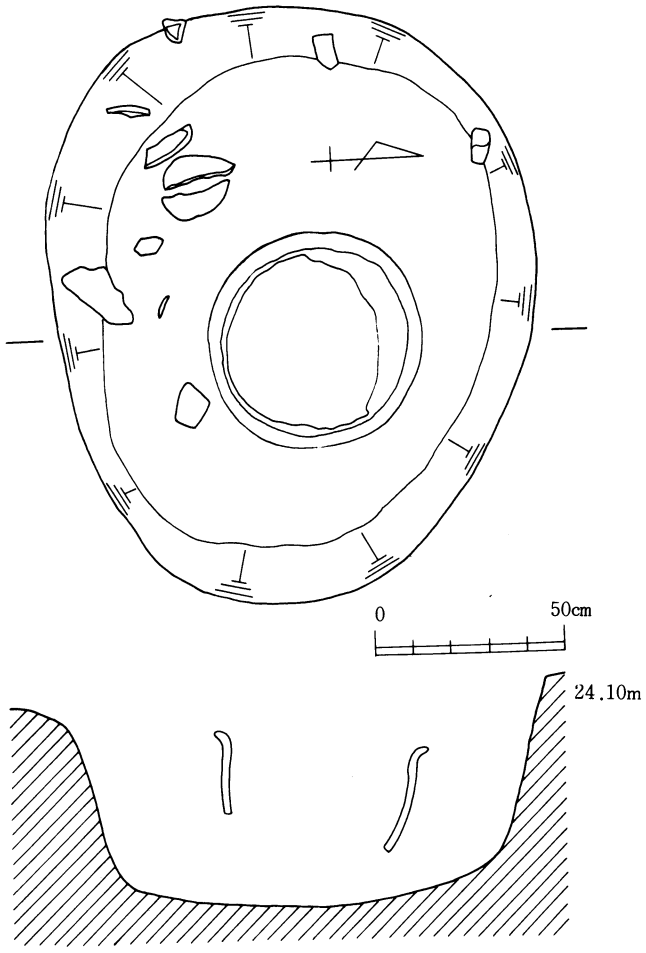
22E区にある長径 190cm，短径 150cmのだ円形土坑で深さ15cmを残している。中には土師器鉢・甕・坏などがあった。

坏（1506）はゆるやかに外反する口縁部をもつ。鉢（1507）は口縁直径21cm，高さ10.5cmと大型で，安定した丸底を呈している。外面は横方向のヘラナデ，内面は頸部から上が横方向のヘラナデ，下が横方向のヘラケズリで仕上げる。茶色粘土など小石を多く含んでおり，乳白色を呈している。やや軟質に焼ける。外面にはススが，内面にはこげ目がついている。甕（1508）はくの字状に外反する口縁部をもち，長胴形の器形をしている。口縁直径20.5cmと小型である。外面は上が横方向のヘラナデ，下が縦方向のヘラナデである。内面は口縁部が横方向のヘラナデ，胴部が横方向のヘラケズリである。胎土・色・焼成度などは鉢と同じである。外面にはススが付着し，内面には頸部までこげつきがみられる。

⑿土坑L（23E区P-3）

22・23E区にある長径 230cm，短径 170cmのだ円形土坑で，深さ30cmを残している。床面には甕などの大きな破片がある。

土師器坏（1509）は胴部で屈曲して，口縁部がやや外へ反るものである。土師器椀（1510）の高台は端部が丸みをおびており，安定している。直径9cmを測る。土師器甕（1512・1513）は口縁部がくの字状に外反するものである。1512は口縁直径26.5cmと大型で，外面は口縁近くが横方向のヘラナデ，胴部が縦方向のハケナデで仕上げている。内面は口縁部が横方向のハケナデ，胴部が縦方向のヘラケズリで仕上げる。1513は口縁直径29.5cmと大型で，外面は横方向のヘラナデ，内面は口縁部が横方向のヘラナデ，下半



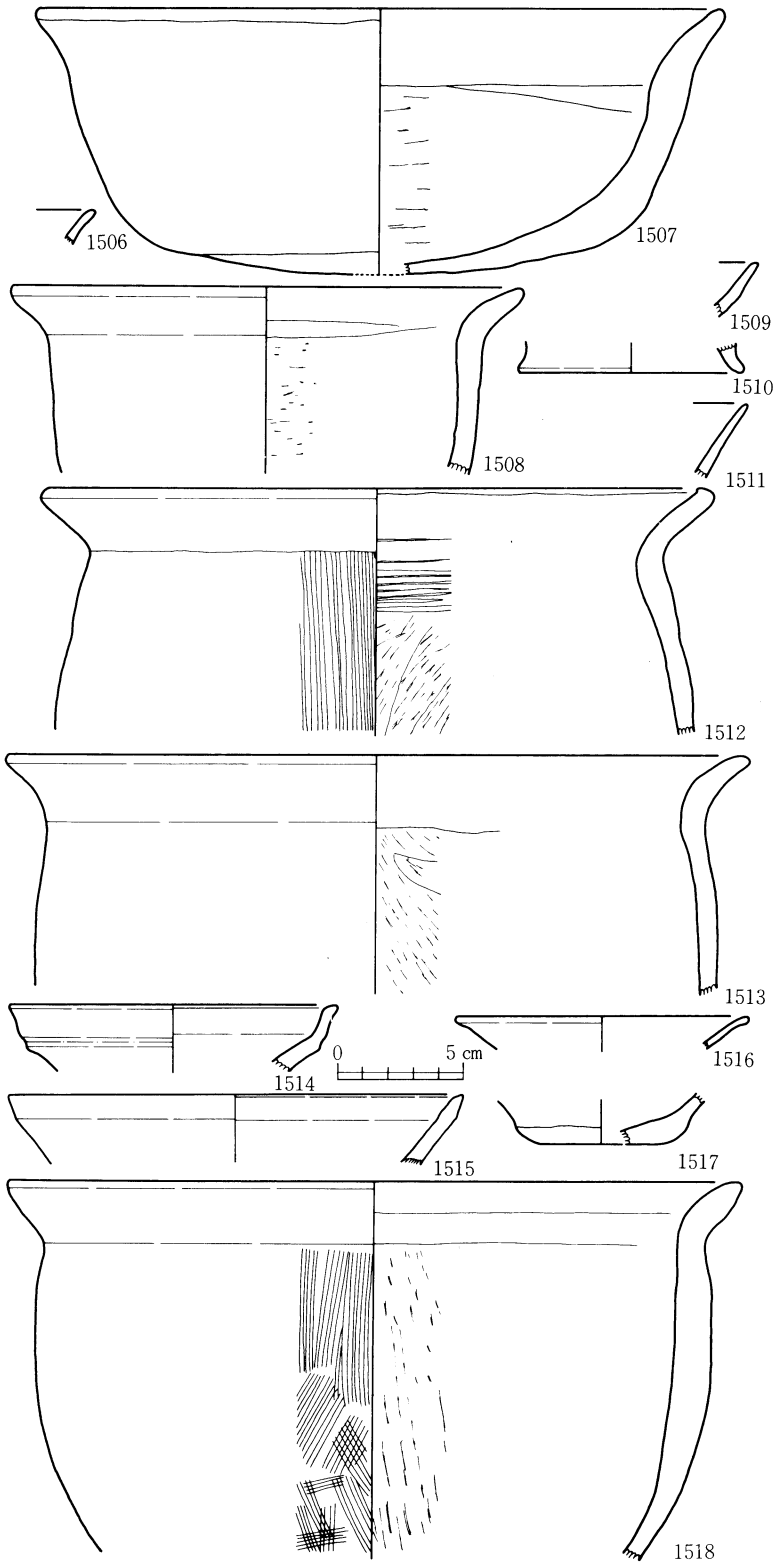
第224図　土坑M

部が縦方向のヘラケズリで仕上げる。須恵器坏（**1511**）は外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁である。須恵器壺（**1514**）の口縁部は直径13 cmを測るもので，頸部から外へ反って，端部が上方へ伸びる。この屈曲部には凹線が巡っている。内面には青や緑の自然灰釉が付着している。

⑬土坑M（23E区P－1）

23E区にある長径が155cm，短径が130cmのだ円形土坑で，深さ60cmを残している。ほぼ中央付近に底の欠けた甕が，口縁部を上にして座っており，周囲には炭や灰が多く堆積している。こうした状態は先の土坑Kや土坑Lにも共通している。他の土器も周辺にあるが，この甕に接合できる破片はなく，最初から底の抜けた状態で置かれたらしい。

土師器坏（**1515**～**1517**）は口縁部が途中で屈曲して，まっすぐ伸びるものと，外反す



第225図　土坑K・L・Mの出土土器

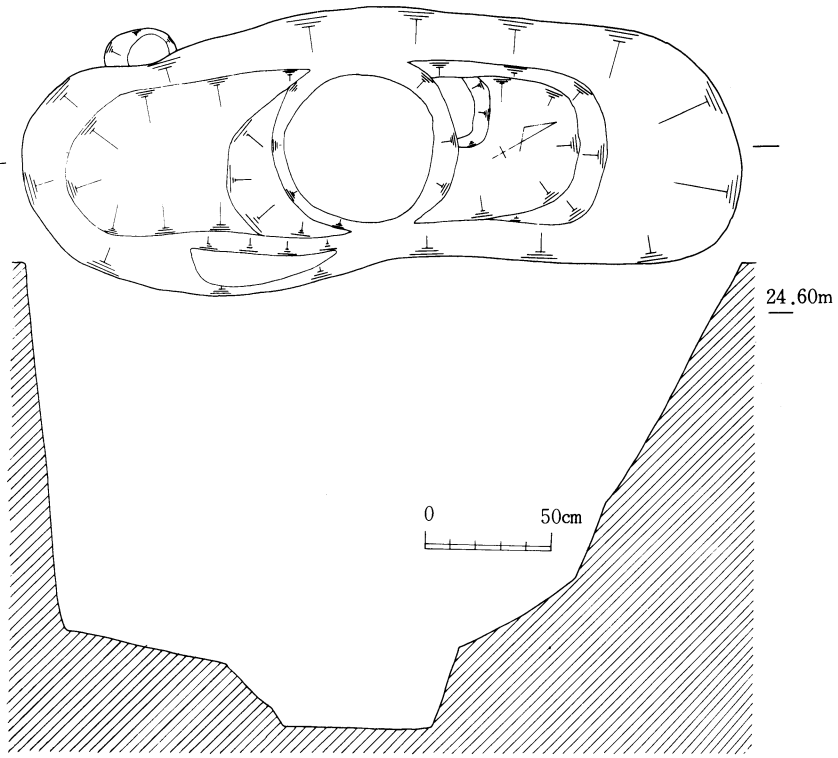
るものとがある。屈曲するものは内側も口縁部でわずかに外へ折れている。**1515**は内面をヘラでていねいにミガいている。底部近くでやや外へふくらみ，丸みをもった底をしている。底部の切り離しはヘラ切りである。土師器甕（**1518**）は底部を欠いているものの，上半部は完全な破片である。口縁直径が29cmで丸みをもった器形をしており，口縁部も丸みをもっている。外面の口縁付近は横方向のヘラナデ，胴部は縦あるいはななめ方向のハケナデで仕上げている。内面は口縁付近が横方向のヘラナデ，胴部が割合にていねいなヘラケズリで仕上げる。外面は頸部あたりまでススが付着しており，内面も頸部付近にこげつきがまわっている。小石粒を多く含む砂質の胎土を用い，焼成は良好である。明るい茶褐色を呈している。

⑭土坑N

25・26F区にある長径 285cm，短径 100cmの長だ円形土坑で，もっとも深い所は 185cmを残している。北側はゆるやかに落ちて，途中で段をもっているが，65cm位の所までいく。ここからゆるやかに下降する段がある。この範囲は50cm四方であり，西側で浅くくぼむ所がある。ここから急傾斜で落ちており，ほぼ中央に直径70cmほどのもっとも深い面がある。一方，南側は急傾斜で落ちて，深さ 150cmほどの所に60cm四方の平坦に近いテラスをつくる。ここからゆるやかに最下面へと落ちている。東側と西側も急傾斜で下面に達しているが，東側には60cmほど下に棚状の段がある。主軸方向はN31度Eで土坑Oとほぼ並行している。土坑内にはほとんど土器が含まれていない。

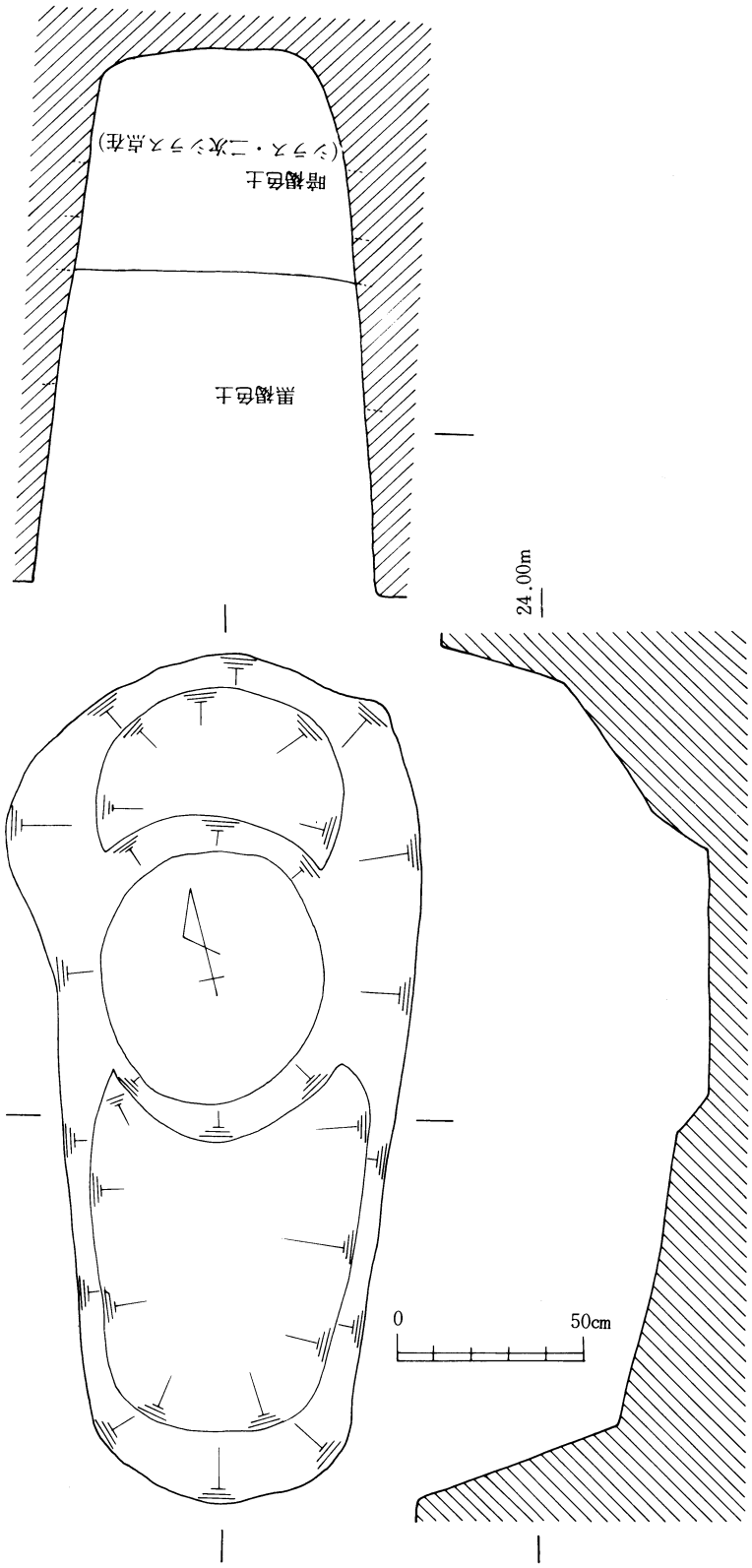
⑮土坑O

25F・G区にある長径 225cm，短径　90cmの長だ円形土坑で，もっとも深い所は 150cmを残している。主軸方向はN12度Eと土坑Nとほぼ並行している。北側は10cmほどの所までは急に落ちており，そこからゆるやかにおちている。最下面は長径85cm短径70cmのだ円



第226図　土坑N（縮尺：1／60）

形の落ち込みとなっている。南側は20cmの所まで急傾斜で落ち，そこに65cm×75cmの方形テラスをつくる。そこから急傾斜で最下面に落ちている。埋土は2層に分かれ，上半部が黒褐色土，下半部がシラスや二次シラスのまざった暗褐色土である。土坑内には遺物がほとんどないが，緑釉土器の細片が上部から出土している。



第227図　土坑O

⑯土坑P（30H区土坑1）

30H区にある長径130cm，短径95cmのだ円形土坑で，深さ50cmを残している。西端には深さ110cmの円形ピットがあるが，土坑との関係は不明である。

土師器甕（**1519**）は口縁直径29.5cmを測り，やや内反ぎみに立ちあがり，端部がやや肥

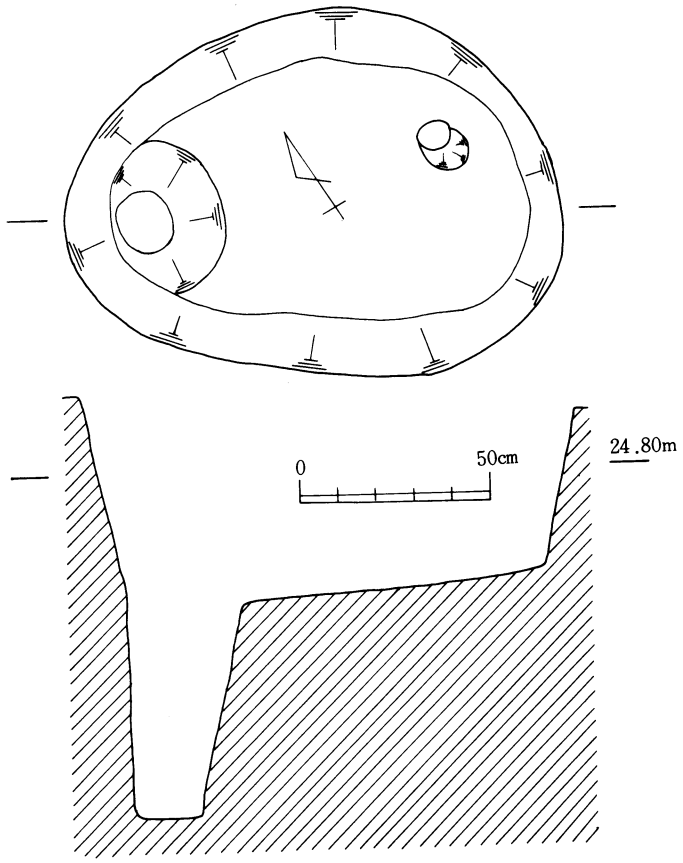
厚している。内面も口縁付近がややくぼんでいる。外面は横方向のヘラナデで仕上げ，内面は口縁付近がヘラナデで，下のほうは横方向のヘラケズリである。土師器坏（**1520・1521**）の底部切り離しはヘラ切りと糸切りがある。**1522**は土師器埦の高台で，外へ踏んばっている。直径は 7.5cmある。この他に外面・内面とも条痕タタキのある須恵器甕も出土している。

⑰土坑Q（34Ⅰ区土坑1）

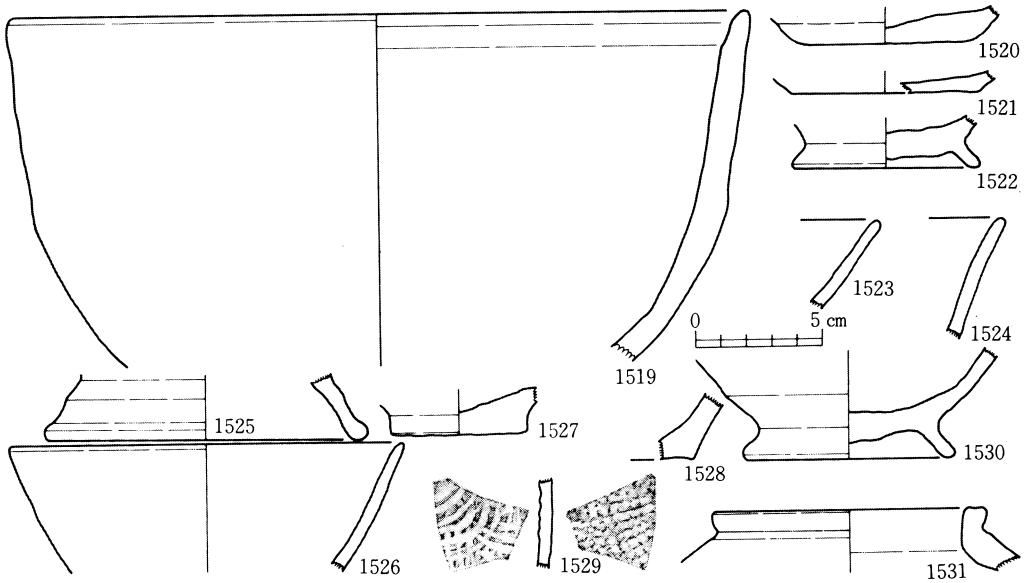
34Ⅰ区にある 1.8m× 4.0mの長方形土坑で，深さ5cmほどと浅い。埋土中には土器がほとんどはいっていない。

⑱土坑R（33K区土坑1）

33J・K区にある 520cm× 410cmの方形土坑で，深さ35cmを残している。複雑なつくりになっており，西側と南側・北側の三方は一

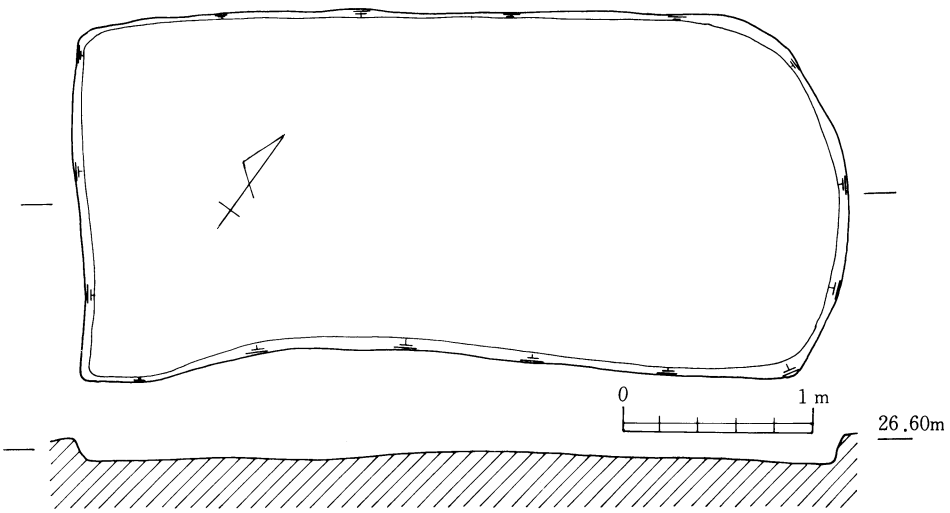


第228図　土坑P



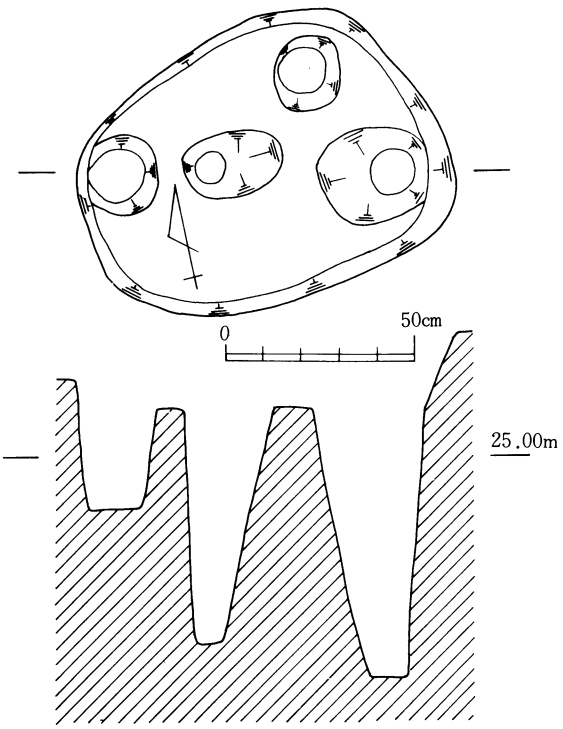
第229図　土坑P・R・Sの出土土器

段ベッド状に高くなっており，北東隅はさらに高くなっている。土坑内には5本の柱穴があるが関連は不明である。埋土は3つに分かれており，上からにごった黄みがかった茶褐色土，黒褐色土，暗褐色土である。下の2層には炭が多量に含まれている。埋土中に土師器坏・埦・鉢・甕，須恵器甕が含まれている。



第230図　土坑Q

土師器坏（**1524・1526**）はまっすぐ外へ開くものと，丸みをもつものとがある。両方とも口縁内面は端部付近が黒くなっており，灯明皿の代わりに使われたか，焼成時のものかと思われる。土師器埦（**1525・1527・1530**）は底部が高くなった充実高台のものと，高台付きのものとがある。充実高台は直径 5.5cmで高さは1cmほどしかない低いものである。高台は直径が8cmで，高さ 1.5cmのものと，直径が13cmで，高さ 2.5cmの大型のものとがある。土師器の鉢（**1528**）の底部は安定した平底で，内面・外面ともていねいなナデ整形である。内黒土師器埦（**1523**）は内面がきれいにヘラミガキされ，光沢を呈している。須恵器甕（**1529**）は 外面が格子の,内面が同心円文のタタキである。

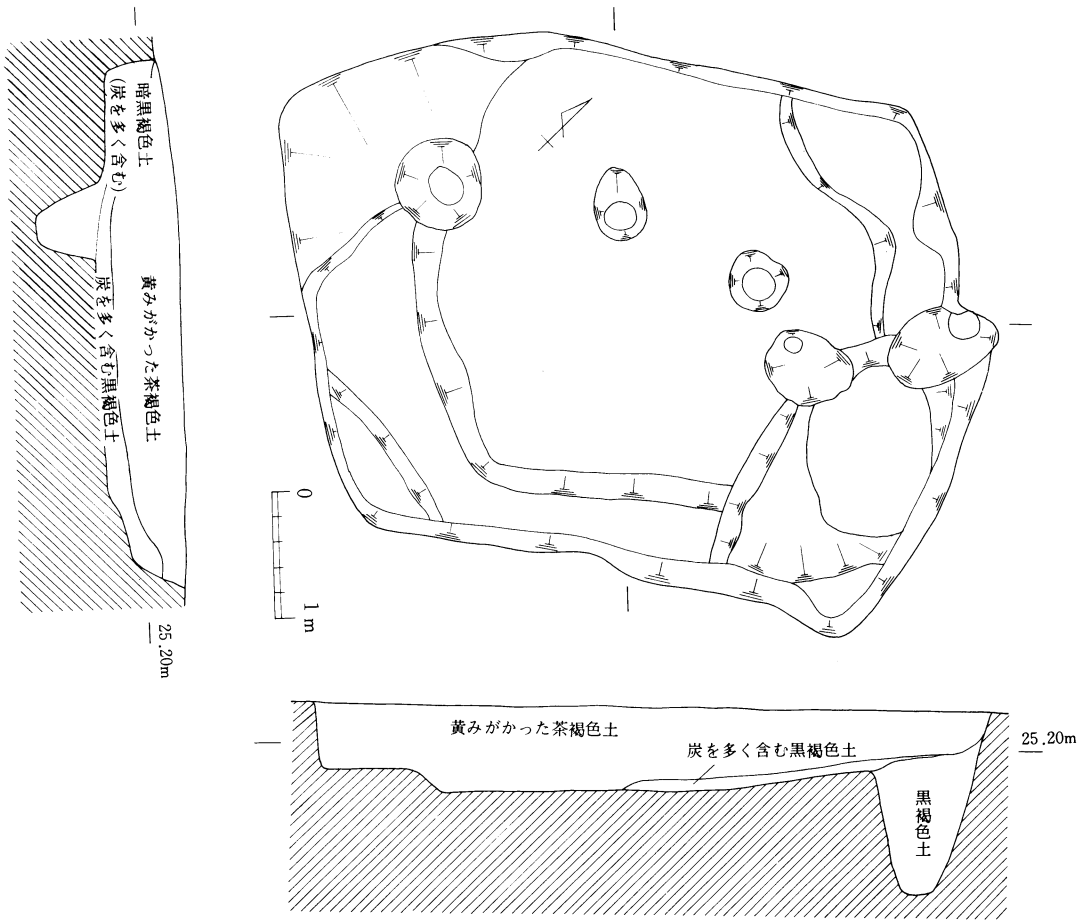


第231図　土坑S

⑲土坑S（33K区土坑2）

33K区にある長径 100cm，短径70cmのだ円形土坑で深さ15cmを残している。土坑中に4つの深い柱穴があるが，関連性は不明である。遺物は少ない。

土師器坏・甕，須恵器壺（**1531**）が出土している。須恵器壺は直口壺で立ち上がりは 0.8cmと短かい。口縁端は平たいが，中央がややくぼんでいる。頸部から肩部へは外へ開いている。黒雲母などの微石を多量に含んでおり，割に細かい胎土である。黒っぽい茶褐色を呈しており，焼成は良好である。



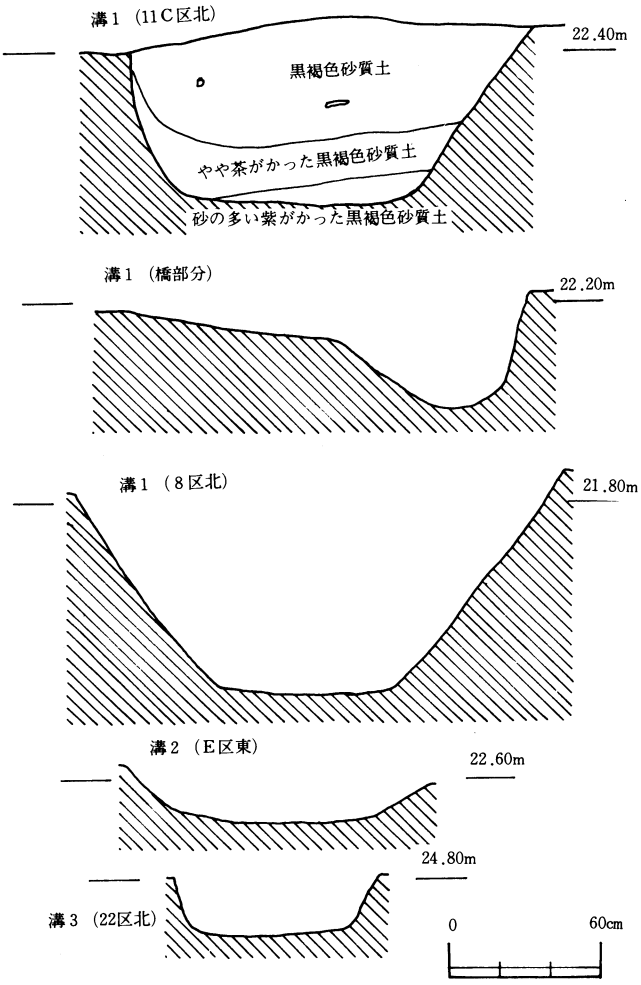
第232図　土坑R（縮尺：1/60）

３　溝状遺構

南北方向に流れる溝が２本，東西方向に流れる溝が１本ある。

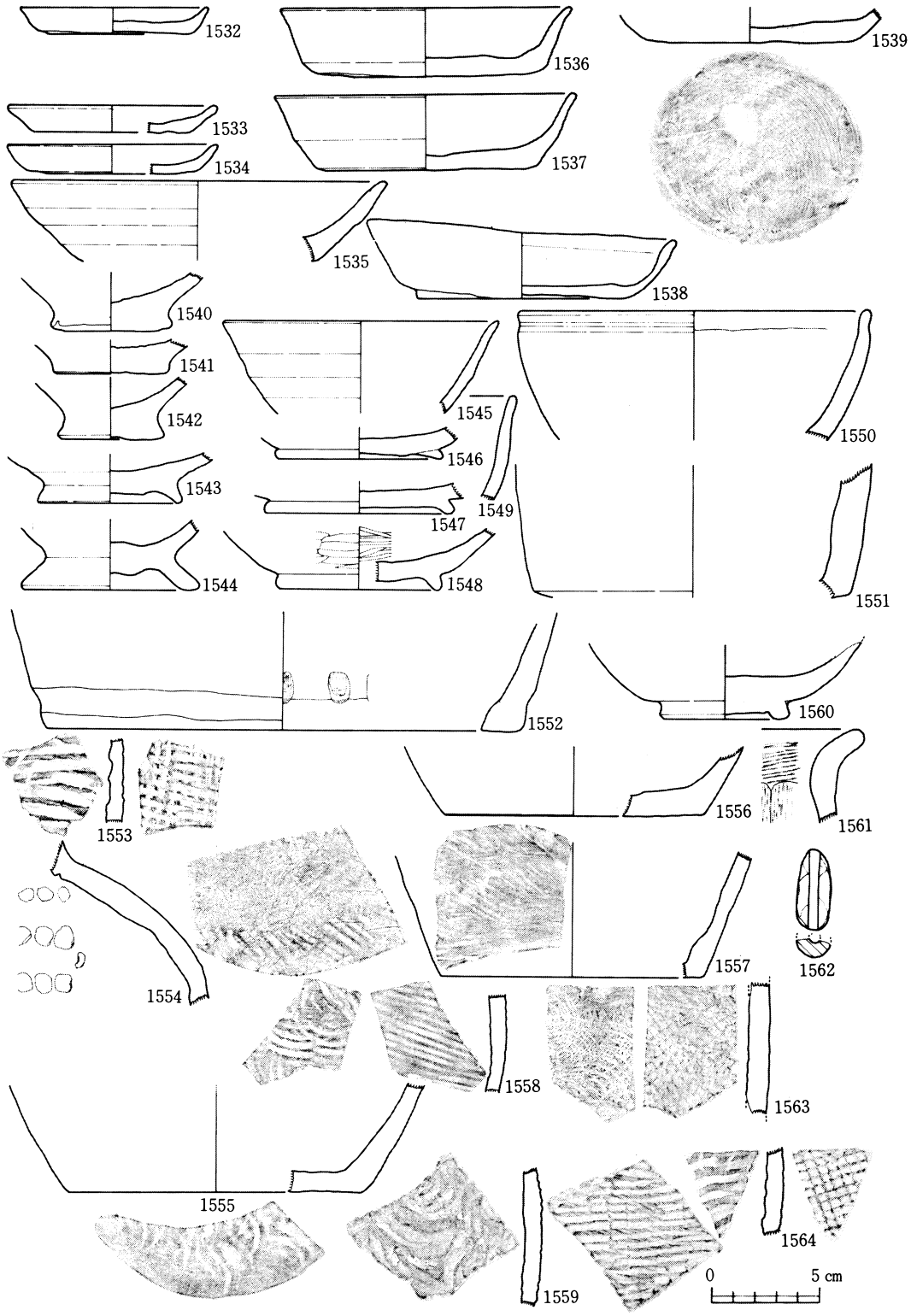
(1)　溝状遺構 1

７Ｅ・Ｆ区から，８Ｅ区，９Ｅ区，10Ｄ・Ｅ区，11Ｄ区と北上し，12・13Ｃ区で用地外へ抜ける幅 1.8m の溝状遺構である。深さは80cm～ 100cmを残しているが，10Ｄ区と11Ｄ区の境付近で，急に50cmほど浅くなり，陸橋の様相を呈している。この部分が長さ120cmほどある。完全に上がるのではなく，東側は60cmほどの幅で50cm位の深さがあり，オーバーフローした水を流すようなくふうをしている。溝の底は二次シラス層あるいは砂礫層にまで達しており，埋土も３～４層に分かれる。最下層は砂も多く含んでおり，流水もあったようである。遺物も多く出土している。



第233図　溝状遺構１・２・３の断面図

土師器には皿（1532～1534）・坏（1535～1539）・埦（1540～1544）・鉢（1550）壺（1551）・こしき（1552）・甕（1561）がある。皿は口縁直径が９cm～10cmで底部切り離しは糸切りである。坏も底部切り離しは糸切りで，口縁直径は14cm，高さ 3.5cmを測る。埦は高くした充実高台と，高台付のものがある。鉢は口縁端部付近にくぼみがあり，鉄鉢形を呈する。壺とこしきは類似した器形をしている。甕はくの字状に外反する。内黒土師器（1545～1549）は埦のみである。口縁部はまっすぐ伸びるものと，端部がやや外反するものとがある。高台はごく浅いものと，普通のものがある。内面はヘラミガキで仕上げるが，外面もきれいにミガいて光沢を呈するものもある。須恵器には壺（1554～1557）・甕（1553・1558・1559・1563・1564）がある。壺の肩部は自然灰釉がかかり，胴部に格子タタキがみられる。底部は安定しており，やや外開きで立ち上がる。1555は底部に同心円タタキがある。青磁碗（1560）は内面に花文のある竜泉窯系のものである。1562は紡錘状の土錘である。



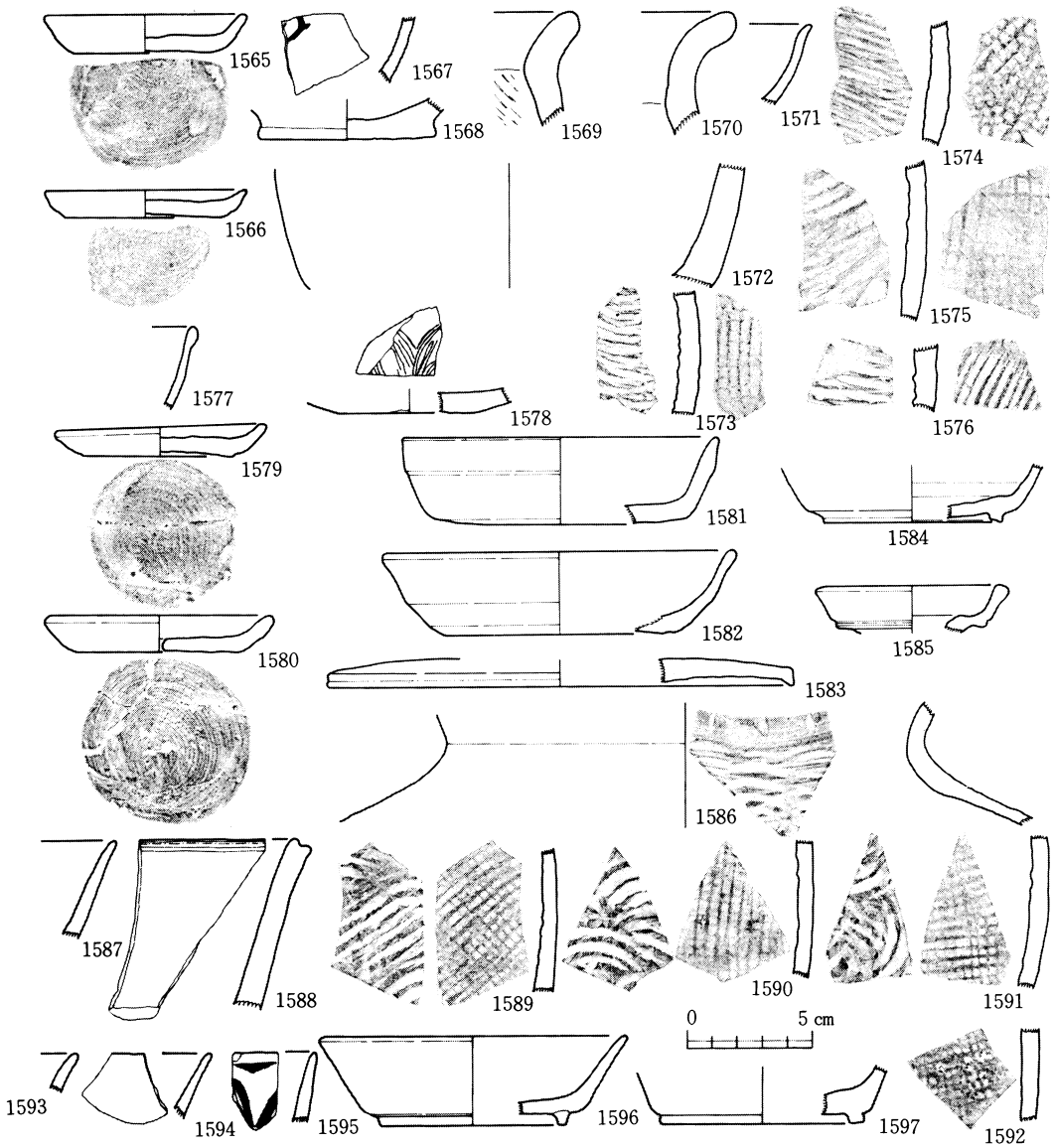
第234図　溝状遺構1出土の土器

(2)溝状遺構２　(第235図　1565～1578)

11Ｄ区で溝状遺構１と交わっており，ここから11・12Ｅ区，12Ｆ区，12・13Ｇ区とだんだん浅くなり東端は不明である。11Ｄ区でも深さ10cmと浅く，幅は約１ｍである。土師器皿（**1565・1566**）・坏（**1567・1568**）・甕（**1569・1570**），内黒土師器椀（**1571**），須恵器壺（**1572**），須恵器甕（**1573～1576**），白磁椀（**1577**）・皿（**1578**）が出土している。**1567**は墨書がある。

(3)溝状遺構３　(第235図　1579～1586)

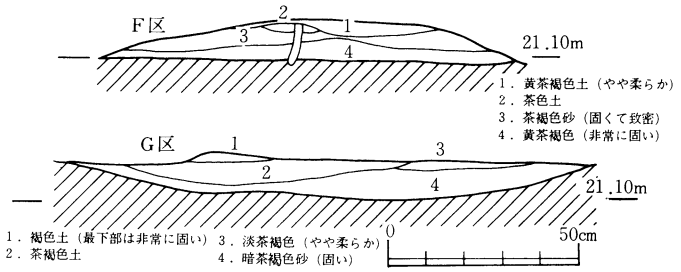
南端は不明であるが，21Ｄ区から22Ｃ・Ｄ区，23Ｃ区と北上し，24Ｂ区で用地外へ抜ける。幅約80cm，深さ約20cmを測る。土師器皿，坏，須恵器坏・壺・蓋・甕などが出土している。



第235図　溝状遺構２・３および古道出土の土器

4.古道

南側に東西方向の道路跡がある。数層に堅土面があり、少なくとも3時期に分かれる。7D区あたりから9I区付近に向かっているが，東側は検出不能であった。ほぼ並行しているが，時期によりやや方向を異にしている。



第236図　古道の断面図

古道上からいくらかの遺物が出ているが具体的に時期を決めるものはない。ただ溝状遺構1に切られていることから，鎌倉時代以前のものであることは確かである。

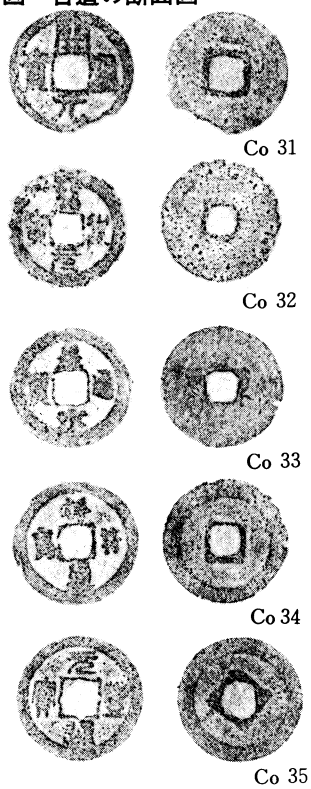
5.土器集積遺構

(1)土器集積遺構1号（1598～1607）

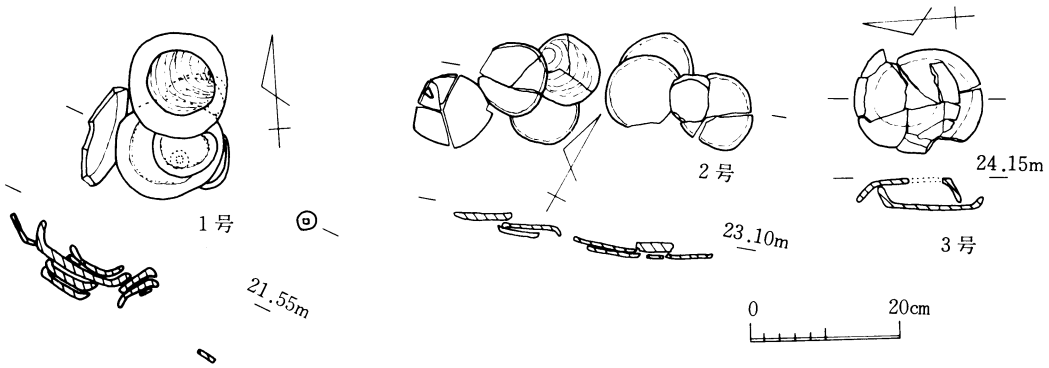
7・8F区にあって，土師器皿が5枚，土師器坏5枚がほぼ50cm四方の間に重なりあっており，最上部の皿1枚と坏1枚は蓋をしている。坏の中に皇宋通寶と祥符通寶が各1枚あり，付近に元豊通寶が1枚あった。底部は糸切り離しである。

(2)土器集積遺構2号（1608～1616）

19G区に土師器皿7枚と，埦の底1枚が45cmの間に並んで置かれており，正位のものが6枚，逆位のものが1枚ある。底部の切り離しはすべて糸切りである。



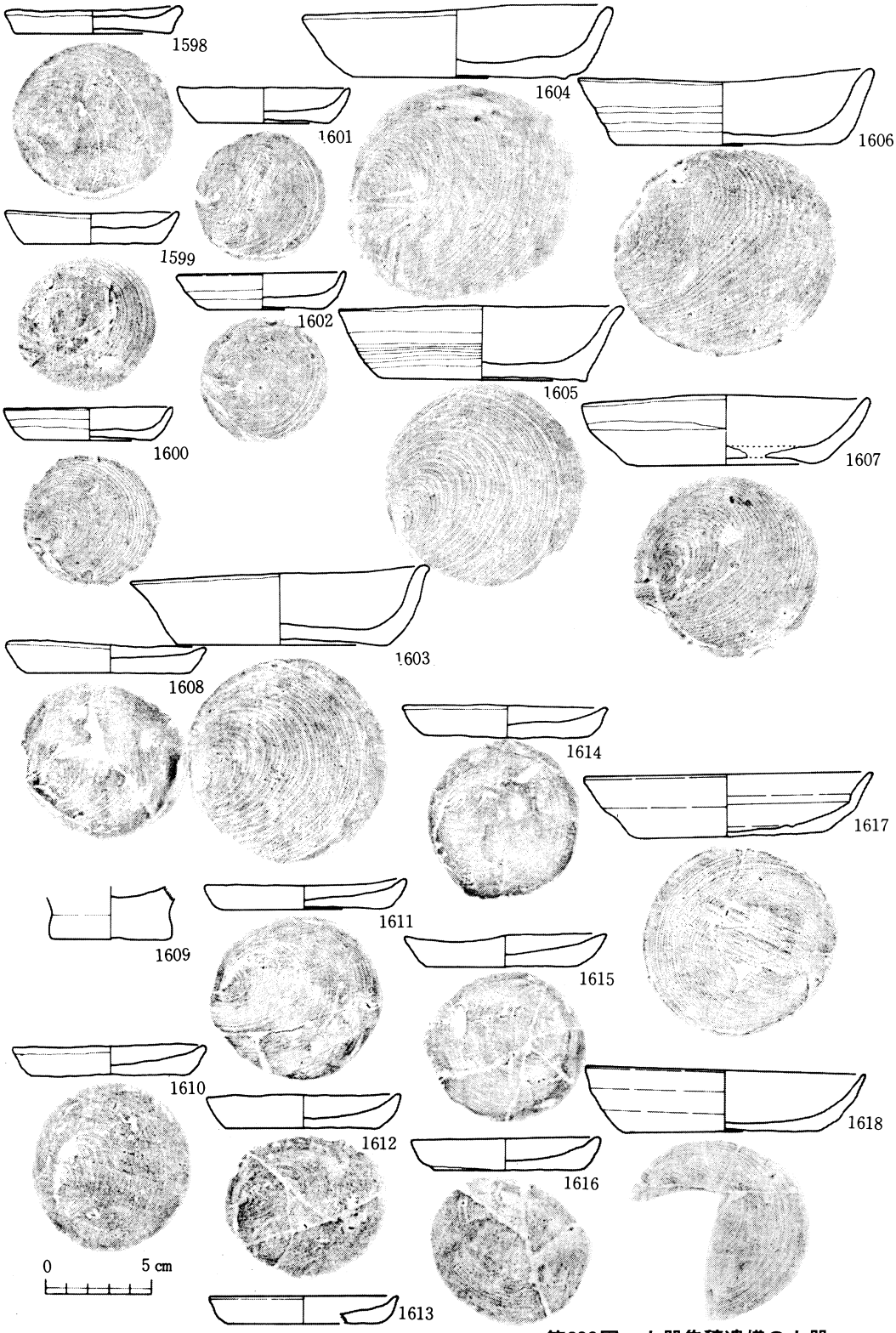
第237図　土坑Aと土器集積遺構1の古銭



第238図　土器集積遺構

(3)土器集積遺構3号(1617・1618)

27K区に合わさった2枚の土師器坏があり，ともに底部の切り離しは糸切りである。



第239図　土器集積遺構の土器

6.柱穴出土の遺物

建物としてまとまった柱穴以外にも，柱穴から多くの遺物が出土した。ここではその一部を図化した。

土師器には皿（1619～1621），坏（1622～1624），蓋（1625），埦（1626～1628），小甕（1630），甕（1631・1632）などがある。皿は3点とも糸切り底である。坏はすべてヘラ切り底で，1624の底には墨書がある。蓋は須恵器の模倣である。埦は大形のものと，小形のものがあり1626の高台は高い。1629は外面に線刻がある。甕はまっすぐ伸びるものと外反するものがある。内面はヘラケズリである。

内黒土師器埦（1633～1636）は丸みをもっており，高台が付く。1636は底部にヘラ描きがある。1637は内外ともきれいにヘラミガキしており，底部切り離しは糸である。

須恵器には蓋（1638～1641），坏（1642～1644），鉢（1645），壺（1646），甕（1647・1648）がある。1639は硯に転用しており裏に朱が付いている。1648の内側には格子タタキがある。1649は常滑焼の甕である。

青磁（1650）は外面にしのぎ蓮弁のある竜泉窯系のものである。

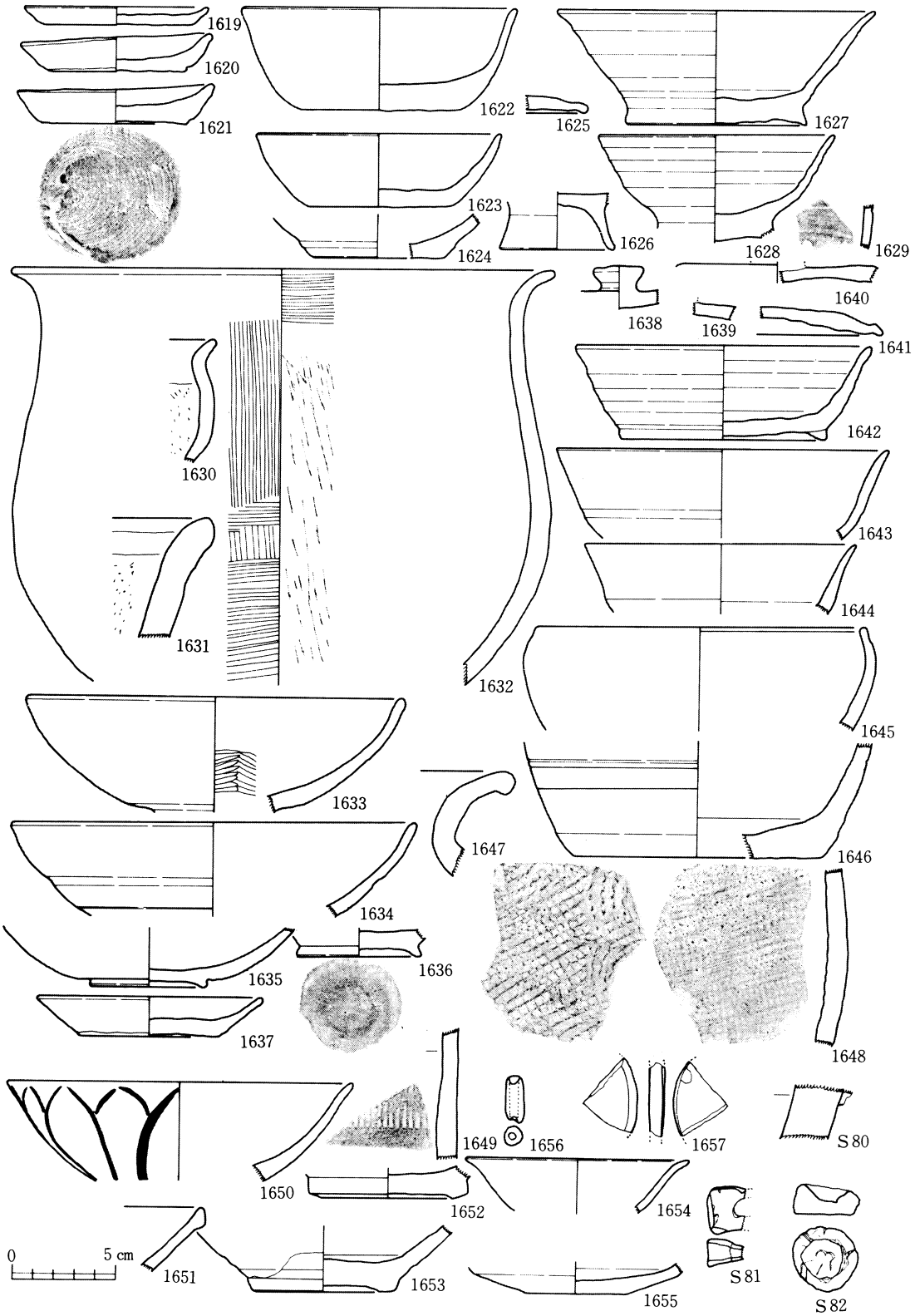
白磁は口縁が玉縁となる埦（1651～1653），口はげの皿（1654），底部の釉をかきとった皿（1655）がある。玉縁口縁の底は低い高台で釉がかからない。

土製品には土錘（1656）と円板状土製品（1657）がある。

石製品には石鍋（S80）と滑石製品（S81・S82）がある。石鍋は直径が約20cmで縦方向の突起がついている。S81は穿孔のある小型品で，S82は容器形をしたものである。

図番	種　類	出土区	柱番	図番	種　類	出土区	柱番	図番	種　類	出土区	柱番
1619	土師器　皿	15E	5	1633	内黒土師器　埦	29I	7	1647	須恵器　甕	10J	5
1620	〃　〃	33G	3	1634	〃　〃	23E	15	1648	〃　〃	14H	3
1621	〃　〃	35K	1	1635	〃　〃	24F	9	1649	常滑焼　〃	6I	1
1622	〃　坏	12I	2	1636	〃　〃	23E	7	1650	青磁　碗	15D	2
1623	〃　〃	32K	3	1637	研磨土器　皿	29I	12	1651	白磁　〃	18H	1
1624	〃　〃	31H	2	1638	須恵器　坏蓋	14GB	1	1652	〃　〃	30G	1
1625	〃　蓋	29H	5	1639	〃　〃	30J	1	1653	〃　〃	25J	3
1626	〃　埦	24F	4	1640	〃　〃	23D	1	1654	〃　皿	16E	8
1627	〃　〃	29H	5	1641	〃　〃	24B	1	1655	〃　〃	21K	4
1628	〃　〃	23F	5	1642	〃　坏身	27C	2	1656	土錘	30J	10
1629	〃　線刻	27H	3	1643	〃　〃	22G	15	1657	円板状土製品	28G	1
1630	〃　小甕	28G-D	6	1644	〃　〃	29I	8	S80	石鍋	7I	3
1631	〃　甕	27C	1	1645	〃　鉢	29H	8	S81	滑石製品	26I	6
1632	〃　〃	29H	5	1646	〃　壺	25F	1	S82	〃	28H	4

第35表　柱穴出土の遺物出土地区表



第240図　柱穴出土の遺物

7.攪乱層出土の遺物

遺構に伴う遺物の他に表層および包含層から多くの遺物が出土した。土器には土師器・黒色土器・須恵器・陶器・磁器・緑釉土器が，石製品に石鍋・滑石製品・砥石が，土製品にふいご口・るつぼ・有孔円板・土錘などがあり，他に古銭・青銅製品もある。

(1)土師器

①小皿　(第 241図，第 242図，第 243図，**1658～1713**)

淡褐色ないし黄灰色の色調を呈し，胎土に，わずかに砂粒を含む。器面，内外は横ナデ，内底はナデによって調整される。**1658・1659**は，ヘラ切り底，**1660～1712**は，糸切り底，**1713**は高台付小皿である。糸切り底では，底面に糸切り痕とともに，大部分，板目を残している。口径9㎝前後の小皿（**1660～1668**，**1702**，**1703**，**1711**，**1712**）と，口径8㎝前後の小皿（**1669～1700**，**1704～1710**）がある。

②大皿　(第 243図，**1714～1722**)

色調は淡褐色ないし黄灰色を呈し，胎土は，少量の砂粒を含む。内・外面は横ナデ，内底はナデで調整される。**1714～1717**は，底面にヘラ切り痕をもつが，ナデにより，その痕跡が消され，また，**1714**は，内面，内底面，底面と，ヘラミガキされている。**1718**は，底面が磨滅し，ヘラ切り底か，糸切り底かは不明，**1719～1722**は，底面に，糸切り痕と板目を残している。ヘラ切り底のものは，器高が高く，口縁部が外反する。

③坏　(第 244図，第 245図，第 246図，第 247図，**1723～1770**)

黄灰色ないし，淡赤褐色の色調を呈す。胎土は，よく精選されているが，わずかに砂粒を含む。内・外面は横ナデ，内底はナデにより調整される。**1723～1732**はヘラ切り底，**1733～1763**は，底面に，糸切り痕と板目をもつもの，**1764～1770**は高台付坏である。ヘラ切り底の坏は，全体に器高が高く，口径が大きい割に底径が小さく，ゆえに，口縁部と体部が直線的に大きく外反する。糸切り底の坏では，**1733**，**1736**，**1744**のように，口径が大きく（14cm前後）器高の低いものと，**1739～1742**のように，口径が大きく（14cm前後）器高の高い（3.3cm～3.5cm）もの，**1745～1751**のように，口径が小さく（12cm前後）器高の低いもの，**1758**，**1761**のように口径小さく（11cm～12cm）器高の高いものと，それぞれを中心として，4つにグルーピングできよう。**1764**は，まっすぐ立ち上がった体部が，口縁部でわずかに外反する。**1765**，**1766**は高台付坏の高台部。**1767**，**1768**は，坏部が，やや外弯気味に，大きく開き，低い高台を貼り付けている。**1769**，**1770**は，その口縁部破片であろう。

④埦　(第 247図，第 248図，**1771～1799**)

黄灰色ないし淡赤褐色の色調を呈し，胎土に少量の砂粒を含む。器面，内・外面を横ナデ，内底面がナデによって，調整される。**1771～1783**においては，底面はすべて，ヘラ切り痕を残し，その大部分は，ヘラ切り離しの後，軽くナデられている。**1789～1799**の高台部分は，大部分，横ナデのみで調整される。

1772は，ヘラ切離しのためか，底部と体部の境が丸味をおび，内弯気味に立ち上がった体部

が，中位で，かるく外反して，口縁部に至る。1771・1773は，体部下位が肥厚し，底部から，若干，立ち上がったのちに，内弯する体部を形成する。1774～1783では，さらに明確に高台状に，底部が肥厚している。1778は，体部が，中位で，屈曲し，外弯して立ち上がり口縁部に至る。1798・1799は，器壁の薄い，高い高台である。

⑤蓋　（第249図　1800～1806）

色調は淡赤褐色で，胎土にわずかに砂粒を含む。器面，内・外面を横ナデ，1802～1806では天井部内面をナデ，天井部外面はヘラケズリされている。1803・1804では，ヘラケズリの後ナデによって調整される。1803は，外方にやや開いて，1804は直立気味に，つまみ出しされている。1805は内弯して，1806は外反して，口縁部を形成する。

⑥甕（第249図，　第250図，　第251図，1807～1823）

色調は，黄灰色ないし淡褐色，淡赤褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。調整は，口縁部外面は，例外なく横ナデ，口縁部内面は，横ナデのものが大部分だが，横方向に粗いハケ目を施すものもある。頸部下，胴部外面は，横ナデないし縦方向への粗いハケ目，内面は，一般にヘラケズリされる。底部は不明。なお、石英，長石を含むものが多い。

1807は大型甕で頸部にしまりがなく，厚手である。1808は頸部が肥厚し，内側に稜をつくって外反する。1810は，水平に近いぐらいに口縁部が外折し，頸部下内面に横方向に荒いハケ目を有する。1811は，頸部がしまり，頸部外側に段をもつ。1811だけが，胴部外面，横方向にハケ目を施す。1812は，かるく外反した口縁部に，肩の張らない胴部をもつが，外面を縦方向に内面も頸部付近より，胴上半部にかけて，ヘラミガキされている。1813は，外面が頸部下より縦方向に，規則正しく，ヘラナデされる。1816は，頸部から口縁部にかけて肥厚して，外反する。肩の張らない器形で，1819と共通する器形である。1820は，内面，頸部下に，一部ヘラミガキがみられる。1821は口縁部内面を，1822は，頸部下より胴部内面を，それぞれ，ヘラナデされる。1823は，頸部下外面に，格子目の叩き痕をもち，内面はヘラミガキされている。

⑦鉢　（第251図　1824～1830）

黄灰色ないし淡褐色の色調を呈し，胎土に砂粒を含む。石英，長石をよく含む。

1824は，内弯する胴部が，口縁下で，稜をつくって外弯し，やや肥厚した口縁部をつくる。口縁部は横ナデ，胴部外面は，縦方向ハケ目，内面はヘラケズリされる。1825は，口縁部がかるく外折する。胴部外面，口縁部内面と横方向に粗いハケ目を施す。1826は，胴部外面を，縦方向のハケ目の後に，横方向にヘラミガキしている。1827～1830は，小型鉢である。1827は外面に煤が付着し，1828は，取手の痕跡を残す。1829は，表裏とも横ナデ，外面は，黒変している。

⑧その他　（第251図，第252図，1831～1851）

1831は，外面に，縦方向の平行線状に，内面に重弧状に，叩き痕を残す。淡赤褐色で，金雲母微細片を含む細砂土から成り，焼成良好の無頸壺である。1832・1833は，短頸壺で，1832は黄灰色，1833は淡赤褐色を呈し，器面は，ナデ調整，胎土は砂粒を含んでいる。1834は，小型の

頸部がしまり，長い口縁部が外反する壺で，淡赤褐色で，胎土にわずかに砂粒を含み，内・外面横ナデしている。**1835**は，小壺の胴部。淡赤褐色を呈し，器面横ナデ，胎土は，わずかに砂粒を含む。**1836**は，直口する口縁部で，色調は黄灰色，器面は内・外ともに横ナデされているが，内面にヘラケズリの痕跡をのこす。胎土に砂粒を多く含み，甑と思われる。**1837**～**1840**は叩き痕をもつ胴部破片である。**1837**・**1838**は，格子目の叩き痕をもつ，**1837**は淡赤褐色，**1838**は暗黄灰色を呈し，内面は双方ともヘラケズリされ，胎土には砂粒を多く含んでいる。**1839**は平行叩きを施し，淡赤褐色で胎土に砂粒を含んでいる。**1840**は，平行叩きを縦位に施した口縁部で**1831**の無頸壺に類似する。**1841**～**1846**は底部破片である。**1841**は淡褐色で，内面と外面の胴部下位に，ヘラケズリがみられる。砂粒を多く含む。**1842**は，淡褐色で，胎土に石英砂とともに砂粒を多く含む。内面は放射状にヘラミガキしており，外面は，下半でヘラケズリ，上半で横ナデされる。**1841**～**1843**の胴部は丸味をもって立ち上がる一方，**1844**・**1845**は胴部が直立する底部である。**1844**は黄灰色を呈し，胴部の立ちあがりにヘラケズリを施している。胎土は砂粒を多く含み，胴部器壁に比べると薄手の底になる。**1845**は，淡褐色，胎土に砂粒を含む。**1846**は，円盤状の底部で，外端面を削って，大きく刻目を施している。色調は黄褐色で，胎土は，石英砂をおもに，砂粒を多く含む。**1847**・**1848**は，把手である。**1847**は黄灰色で，胎土に石英，長石など砂粒を多く含む。**1848**は，黄白色で，やや軟質，胎土は，細砂土で，石英砂が若干入る。**1849**～**1851**は，内面に布目圧痕をもつ土器片である。色調は淡赤褐色で，胎土に少量の砂粒を含む。**1849**は，外面，ヘラケズリされ，**1850**は，ナデ調整される。

図番	器　種	出土区層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	図番	器　種	出土区層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
1658	小　皿	8A-3b	7.2	5.2	1.5	1691	小　皿	17D-2	8	6.6	0.9
1659	〃	25E-2	8	6	1.4	1692	〃	16E-2	8	7	1
1660	〃	27J-2	8	6.1	0.9	1693	〃	16E-1	ナシ		
1661	〃	25J-2	9.2	(6.4)	1.5	1694	〃	16E-2	8.2	(7)	1
1662	〃	35J-2	8.9	7.3	1.6	1695	〃	15F-2	7.8	6.4	0.9
1663	〃	27J-2	8.9	(6.6)	1.8	1696	〃	16F-2	8.2	7	1
1664	〃	16F-2	8.9	(6.7)	1.5	1697	〃	16F-2	8	7.2	0.9
1665	〃	25J-2	9.3	(7.3)	1.6	1698	〃	16F-2	8	7	1
1666	〃	21H-I-2	8.7	(7.6)	1.4	1699	〃	16F-2	7.4	7	0.9
1667	〃	16E-2	8.6	6.4	1.1	1700	〃	16F-2	8.2	7	1
1668	〃	15E-2	8.7	7.6	0.9	1701	〃	11F-1	6.4	6	1.3
1669	〃	23F-2	7.8	5.7	1.5	1702	〃	11F-2	8.2	6.4	1.6
1670	〃	21D-2	8	5.8	1.4	1703	〃	16F-1.2	8.2	7.4	1.7
1671	〃	表　採	7.9	6.3	1.2	1704	〃	17E-2	7.8	6.4	1.1
1672	〃	16F-2	7.4	6.3	1.2	1705	〃	16D-2	7.9	6.6	1.1
1673	〃	表　採	7.5	(6.8)	1.2	1706	〃	16D-2	8.2	7.2	1.1
1674	〃	15E-2	8.2	6.1	1	1707	〃	16F-2	8	6.6	1
1675	〃	17D-2	8.2	6.3	0.9	1708	〃	16F-2	7.8	6.6	1
1676	〃	16E-2	9	7.5	1.6	1709	〃	16F-2	7.8	6.2	1
1677	〃	16E-2	7.9	5.9	1	1710	〃	16F-2	8	7	1
1678	〃	16G-2	7.8	6.4	1	1711	〃	16F-2	8.4	7.2	1
1679	〃	16F-2	8.3	7.3	0.9	1712	〃	16F-2	8.6	7.5	1
1680	〃	16F-2	7.8	6.4	1	1713	〃	17D,D14	9.4	7	3.4
1681	〃	15E-2	8	6.6	0.9	1714	大　皿	31I-2	12.6	9.4	2.4
1682	〃	16E-2	8	6.4	1.1	1715	〃	23E-2	14	(10)	2.7
1683	〃	15E-2	7.9	6.4	1.1	1716	〃	表　採	15.3	(11.2)	2.5
1684	〃	16E-1	7.8	(6.8)	1.1	1717	〃	26K-2	13	(9)	1.6
1685	〃	16F-2	8.2	7	1.1	1718	〃	16E-2	(11.8)	(9.2)	2.0
1686	〃	16F-2	8	6.6	1.2	1719	〃	17E-2	(11.8)	(9.2)	2.0
1687	〃	17E-2	7.8	(6.2)	0.9	1720	〃	17D-2	12.5	9.2	2.0
1688	〃	15E-2	8.4	7	0.7	1721	〃	15E-2	(12.0)	(9.0)	2.1
1689	〃	11G-2c	7.8	7	1	1722	〃	19G-2	(13.0)	(10.0)	2.1
1690	〃	7D-2b	6.4	6	1.1	1723	坏	15H-1	(13.6)	(7.2)	(4.6)

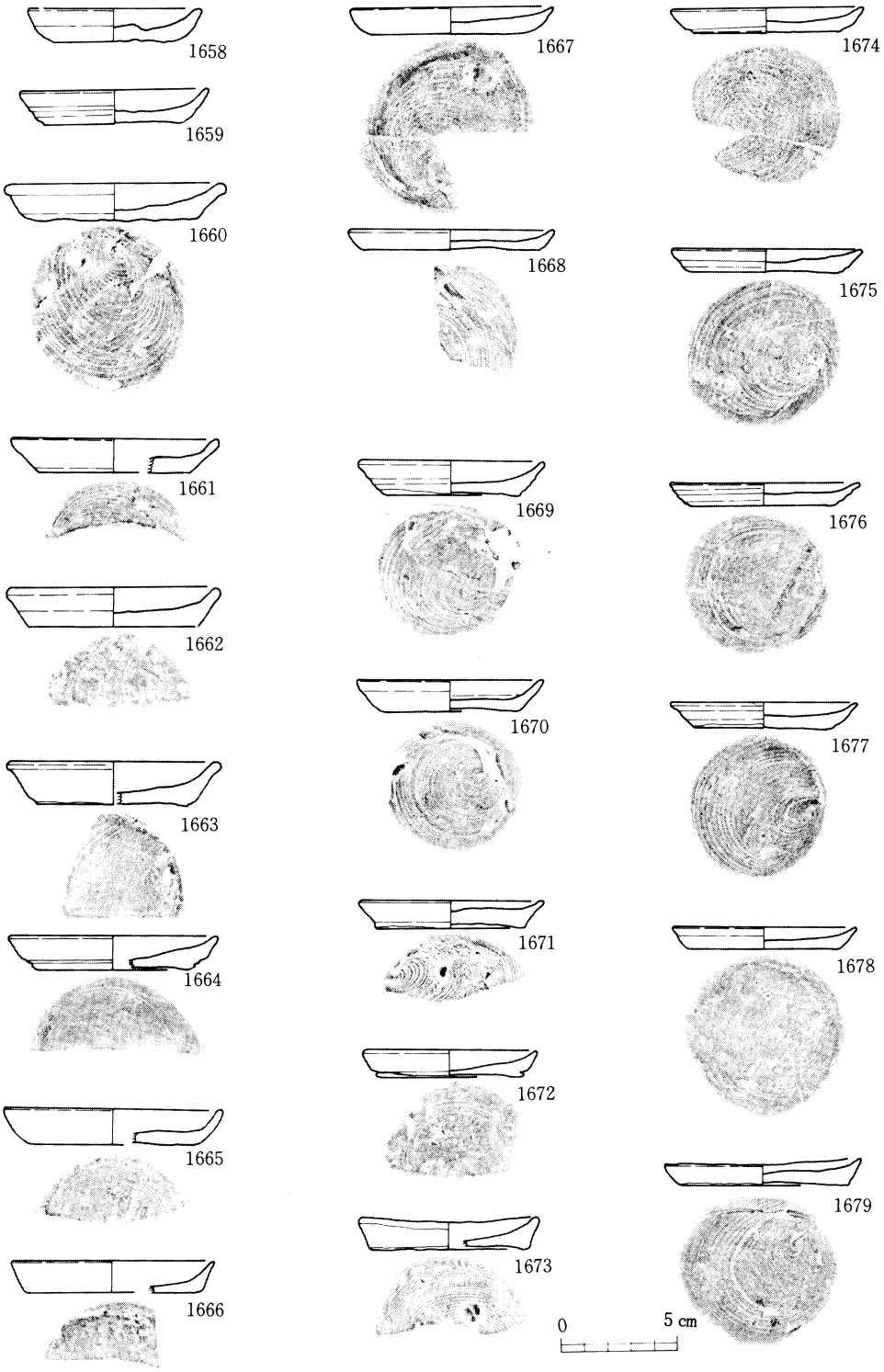
第36表　土師器出土地区及び計測表(1)

図番	器　種	出土区層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	図番	器　種	出土区層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
1724	坏	30F-2	(15.6)	(8.2)	(4.1)	1757	坏	8E-2b	12.0	7.8	3.0
1725	〃	27H-2	11.6	6.0	4.4	1758	〃	8G	11.6	7.8	3.5
1726	〃	10E-1	12.7	6.0	4.1	1759	〃	7E-2c	12.7	9.5	3.4
1727	〃	9E-2	13.7	6.8	4.1	1760	〃	31G-2	12.7	8.7	3.3
1728	〃	31F-2	14.3	8.8	4.0	1761	〃	21H-1	12.1	7.8	3.3
1729	〃	22C-2	(13.6)	(8.0)	3.9	1762	〃	8G-2	11.4	7.0	3.3
1730	〃	27H-2	13.7	7.1	4.0	1763	〃	27K-2	14.0	10.1	3.6
1731	〃	15H-1	13.6	6.6	3.5	1764	高台付坏	24D-2	15.8	10.0	6.7
1732	〃	25F-2	13.4	5.5	5.9	1765	〃	29F-1	—	8.2	—
1733	〃	22F-1	13.8	10.3	2.5	1766	〃	31I-2	—	(9.3)	—
1734	〃	16F-2	(13.0)	(9.8)	2.4	1767	〃	27I-2	13.6	6.0	3.3
1735	〃	23I-2	13.1	9.1	3.0	1768	〃	27K-2	12.2	6.2	4.0
1736	〃	35I-2	14.1	9.4	2.75	1769	〃	12E-1	15.4	—	—
1737	〃	18D-2	12.7	8.5	2.7	1770	〃	28H-2	15.4	—	—
1738	〃	16E-2	12.6	7.5	2.9	1771	埦	29F-2	12.2	6.0	5.5
1739	〃	30F-2	12.8	8.8	3.4	1772	〃	25F-2	12.6	6.0	5.0
1740	〃	26J-2	13.5	9.6	3.2	1773	〃	26G-2	12.2	5.8	5.3
1741	〃	22H-2	13.4	8.4	3.2	1774	〃	9H	11.5	6.0	5.5
1742	〃	28J-2	13.8	9.4	3.7	1775	〃	9F-2c	11.9	5.0	5.4
1743	〃	17D-2	(13.8)	(8.4)	2.6	1776	〃	26G-2	12.7	5.2	5.1
1744	〃	8G-1	(14.2)	(9.0)	2.9	1777	〃	11E-3	13.1	5.4	5.1
1745	〃	16F-2	12.4	8.4	2.1	1778	〃	12D-2		5.0	
1746	〃	12F-2	12.8	8.8	2.4	1779	〃	10D-1		5.6	
1747	〃	17D-2	11.9	8.7	2.7	1780	〃	28H-2		6.2	
1748	〃	16D-2	12.8	8.7	2.4	1781	〃	19I-2		7.0	
1749	〃	18D-2	12.1	8.8	2.3	1782	〃	27H-2		6.0	
1750	〃	22J,K-2	12.2	8.8	2.6	1783	〃	33H-2		5.0	
1751	〃	表　採	(13.0)	(9.2)	2.4	1784	〃	11D-1	10.8		
1752	〃	36K-1	(12.2)	(8.8)	2.8	1785	〃	23E-2	12.4		
1753	〃	18P-2	11.9	9.2	2.9	1786	〃	11D-2	12.4		
1754	〃	27,28G-2	11.6	7.9	3.0	1787	〃	22C-2	14.4		
1755	〃	17D-2	11.6	9.1	2.4	1788	〃	11D-1	13.6		
1756	〃	27J-2	(13.4)	9.4	3.8	1789	〃	29I-2	14.4	7.0	5.7

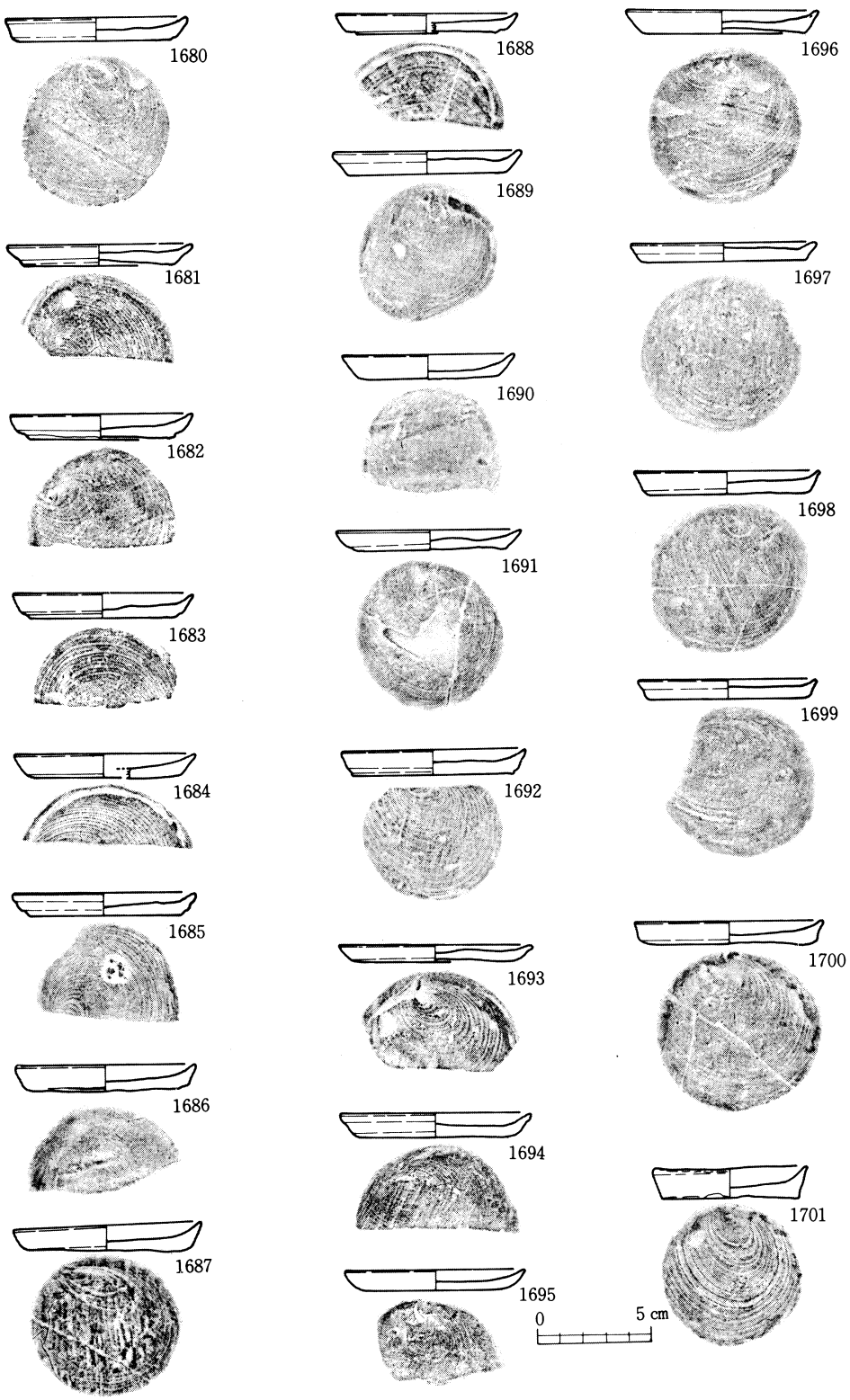
第37表　土師器出土地区及び計測表(2)

図番	器　種	出土区層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	図番	器　種	出土区層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
1790	高台付埦	10I-2	15.0	—	—	1823	甕	23F-2	(16.5)	—	—
1791	〃	29H-2	—	7.0	—	1824	鉢	31K-2	(29.4)	—	—
1792	〃	8F-2c	—	7.2	—	1825	〃	27J-2	(23.2)	—	—
1793	〃	30H,I-2	—	7.0	—	1826	〃	31F-2	(22.5)	—	—
1794	〃	29G-2	—	7.0	—	1827	〃	10F-1	(18.2)	—	—
1795	〃	31I-2	—	7.0	—	1828	〃	23F-2	(12.7)	—	—
1796	〃	8I-2	—	7.0	—	1829	〃	28H-2	(11.2)	—	—
1797	〃	27H-2	—	8.0	—	1830	〃	27,28G-2	(9.2)	(6.6)	(6.5)
1798	〃	25H-2	—	7.0	—	1831	無頸壺	22C-2	18.2	—	—
1799	〃	9D-2	—	8.8	—	1832	短頸壺	25I-2	12.0	—	—
1800	蓋	11E-1	—	—	—	1833	〃	26I-2	9.4	—	—
1801	〃	24E-2	—	—	—	1834	壺	9D-2c	9.0	—	—
1802	〃	22C-2	—	—	—	1835	〃	8F-2c	—	—	—
1803	〃	8G-2	13.4	8.0	1.6	1836	甑？	28H-2	19.0	—	—
1804	〃	21C-2	(15.0)	(8.0)	2.3	1837	胴・破片	31J-1	—	—	—
1805	〃	31H-2	(14.6)	(9.8)	2.3	1838	〃	13G-3	—	—	—
1806	〃	31H-2	(13.2)	(10.0)	2.1	1839	〃	16D-2	—	—	—
1807	甕	11E-2	(36.8)	—	—	1840	〃	10E-2c	—	—	—
1808	〃	29F-2	(30.0)	—	—	1841	底　部	29J-1	—	(7.4)	—
1809	〃	21D-2	(28.0)	—	—	1842	〃	23C-2	—	(6.0)	—
1810	〃	24D-2	(27.0)	—	—	1843	〃	23H-2	—	(11.0)	—
1811	〃	31F-2	(23.2)	—	—	1844	〃	27,28G-2	—	(14.4)	—
1812	〃	31I-1	(23.8)	—	—	1845	〃	11G-2c	—	(19.8)	—
1813	〃	23B-1	(27.0)	—	—	1846	〃	26I-2	—	(13.6)	—
1814	〃	30J-2	(25.4)	—	—	1847	把　手	30F-1	—	—	—
1815	〃	27G-2	(26.8)	—	—	1848	〃	8C	—	—	—
1816	〃	23D-2	(25.4)	—	—	1849	布痕土器		—	—	—
1817	〃	30K-1	(25.5)	—	—	1850	〃		—	—	—
1818	〃	30H-2	(26.0)	—	—	1851	〃		—	—	—
1819	〃	8B-3	(22.8)	—	—						
1820	〃	29I-2	(23.5)	—	—						
1821	〃	27J-2	(27.2)	—	—						
1822	〃	31F-2	(20.5)	—	—						

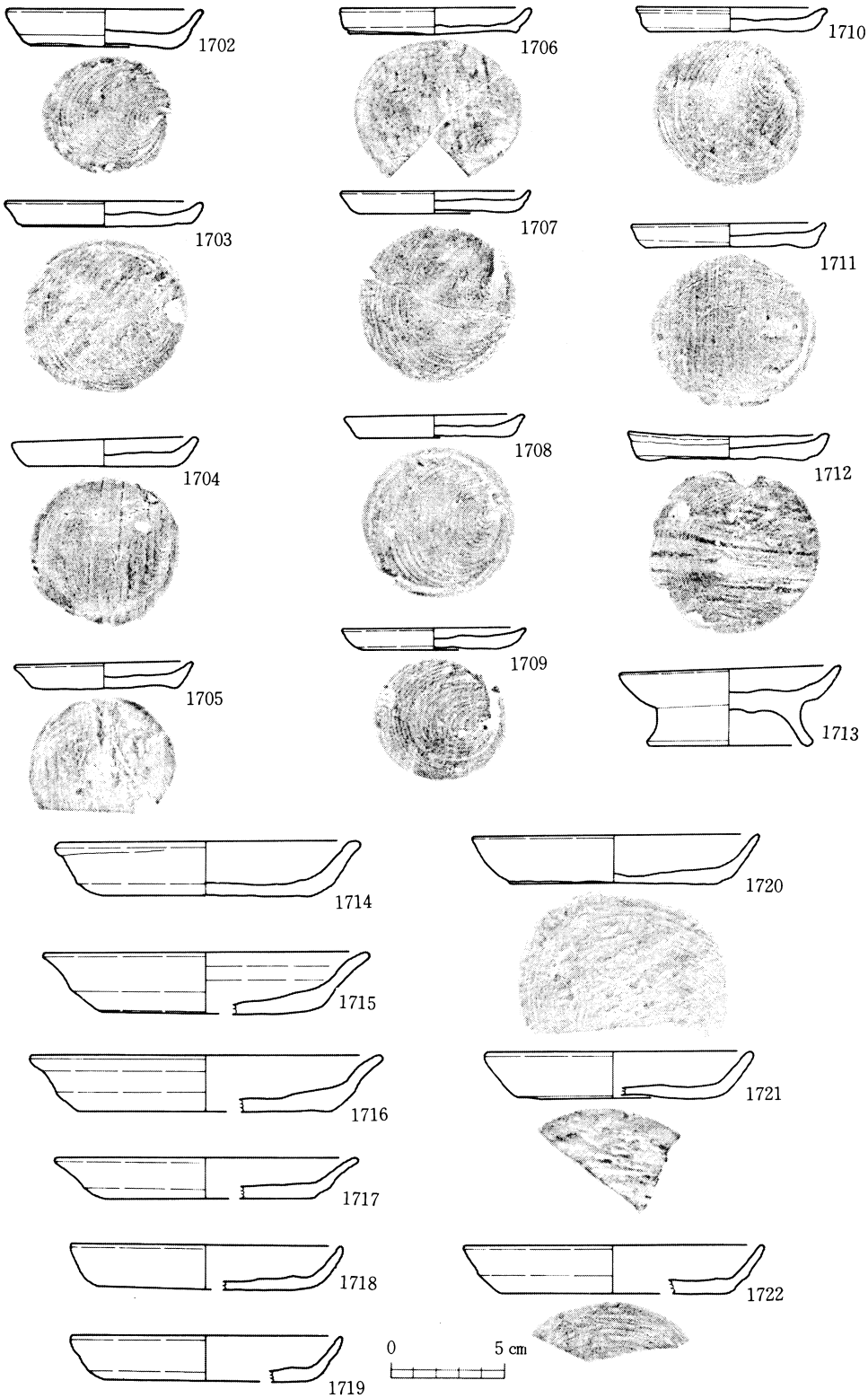
第38表　土師器出土地区及び計測表(3)


1658
1659
1660
1661
1662
1663
1664
1665
1666
1667
1668
1669
1670
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1677
1678
1679
0
5 cm

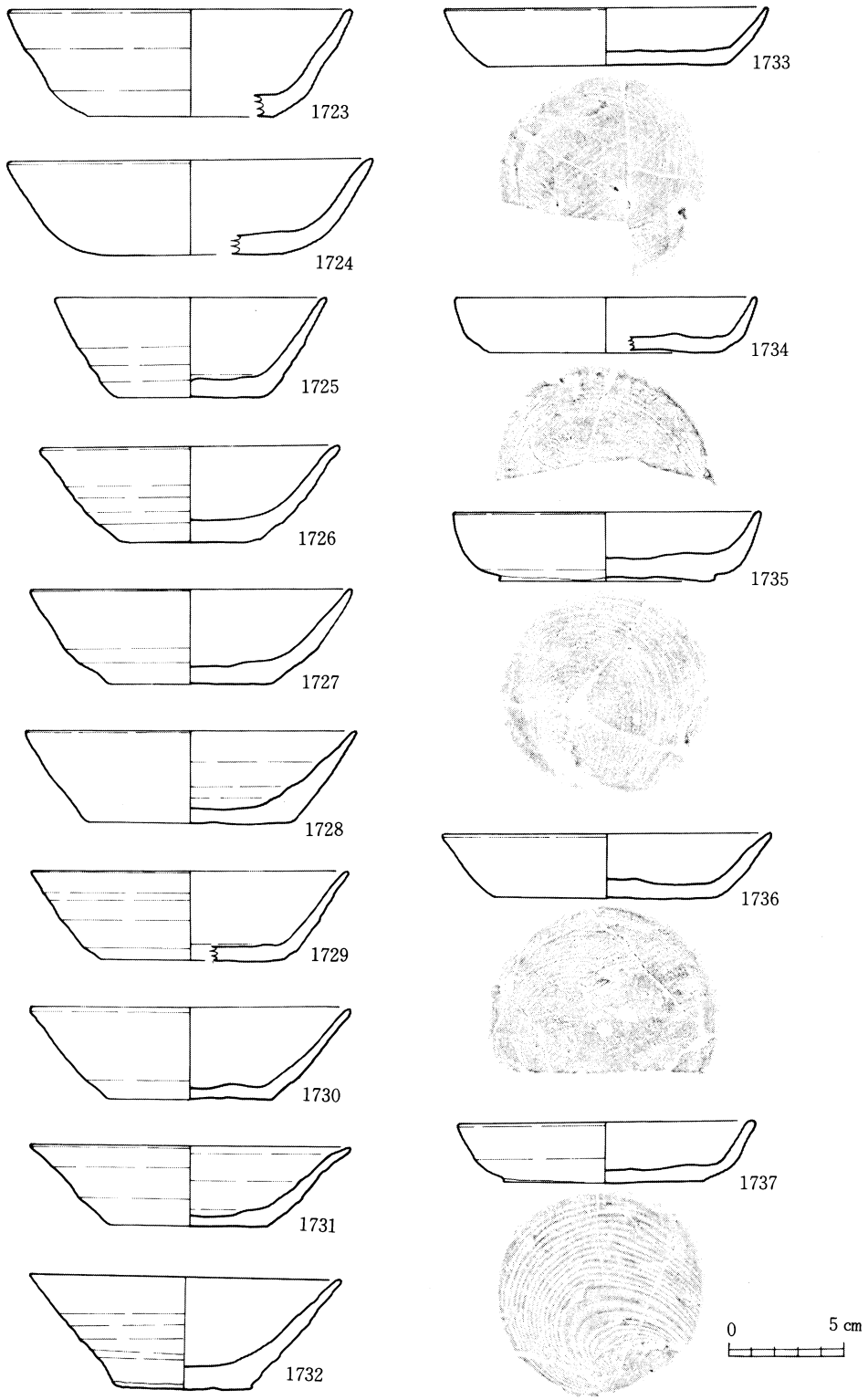
第241図　土師器(1)（皿）


1680
1681
1682
1683
1684
1685
1686
1687
1688
1689
1690
1691
1692
1693
1694
1695
1696
1697
1698
1699
1700
1701
0
5 cm

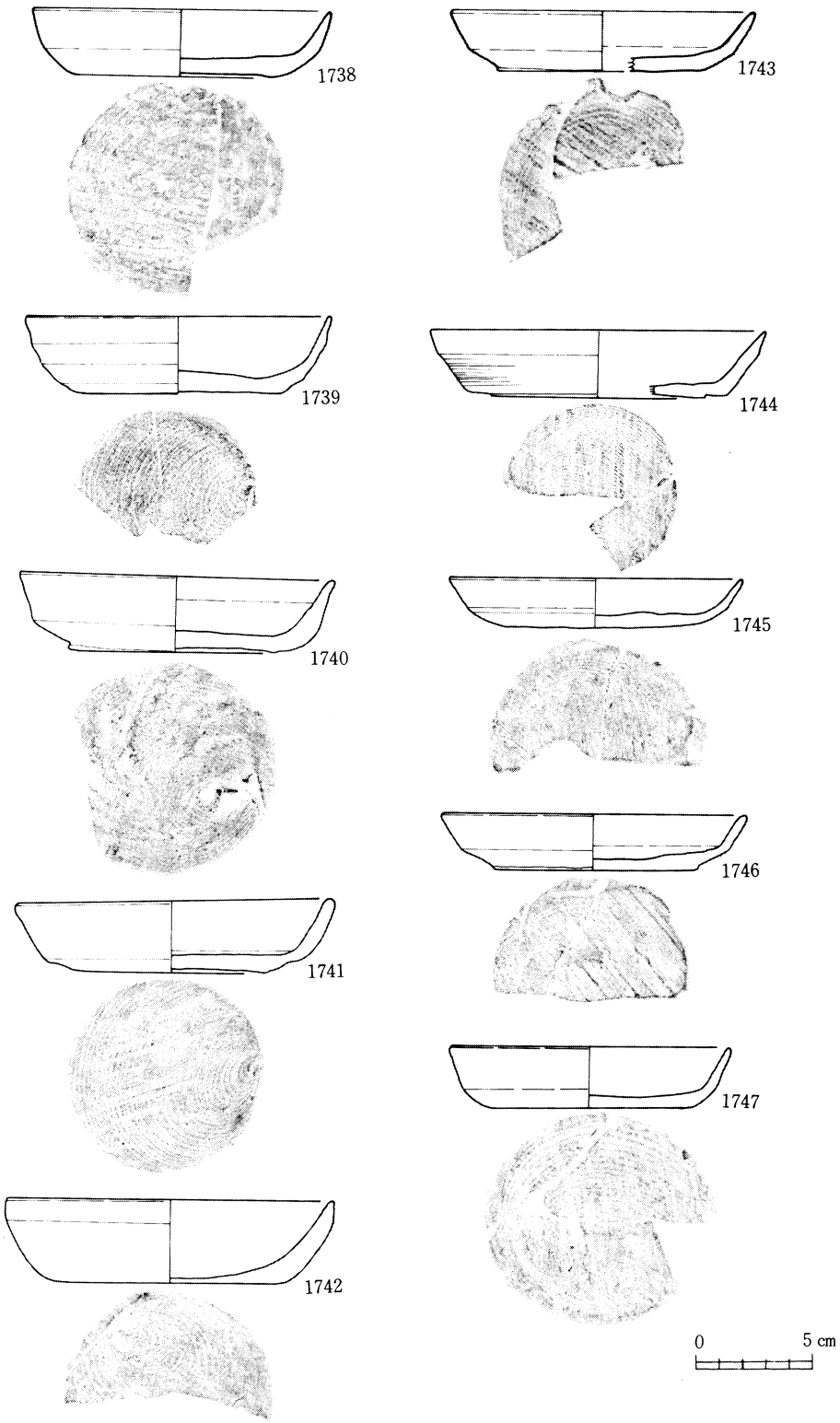
第242図　土師器(2)　(皿)


1702
1703
1704
1705
1706
1707
1708
1709
1710
1711
1712
1713
1714
1715
1716
1717
1718
1719
1720
1721
1722
0
5 cm

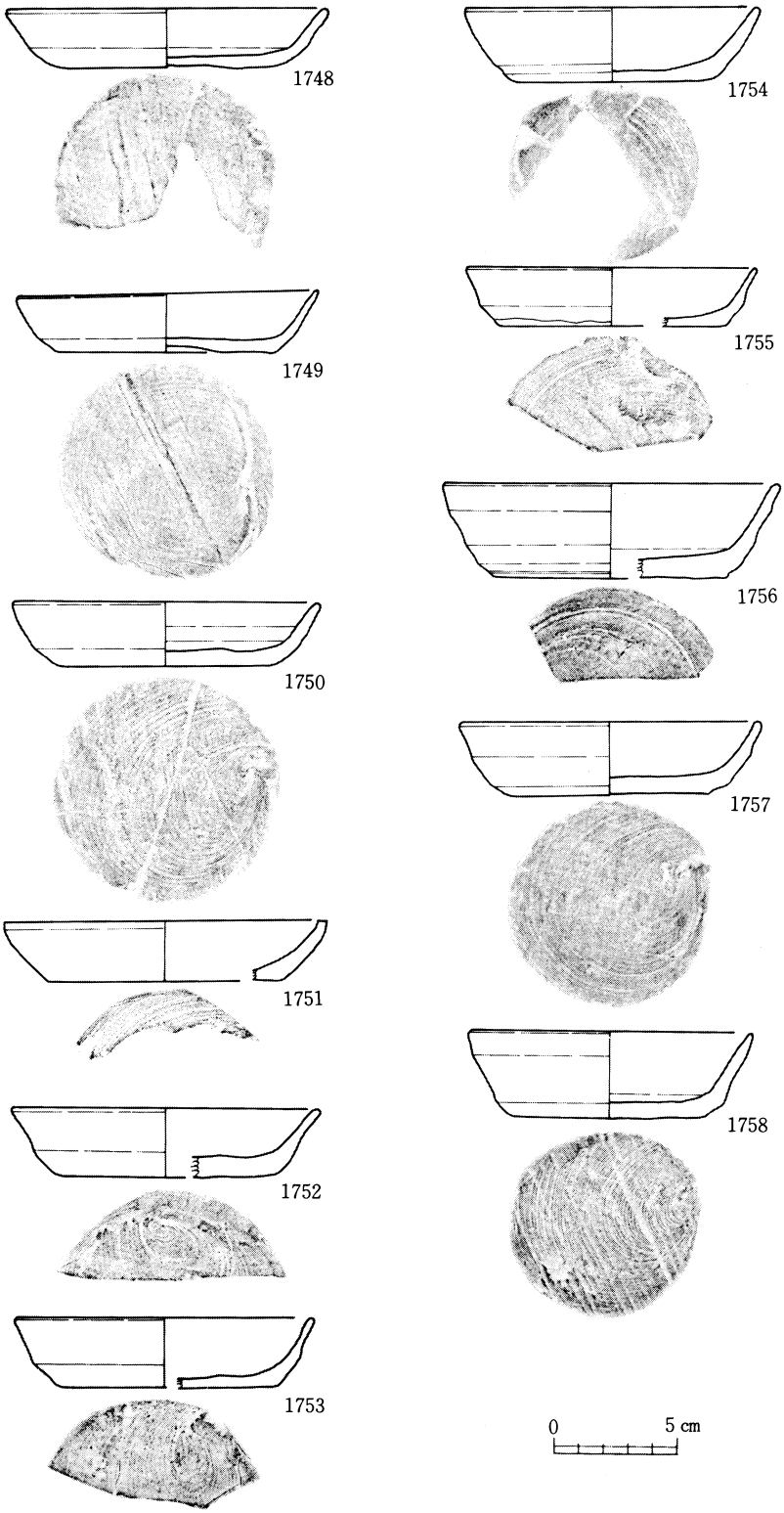
第243図　土師器3)（Ⅲ）


1723
1724
1725
1726
1727
1728
1729
1730
1731
1732
1733
1734
1735
1736
1737
0
5 cm

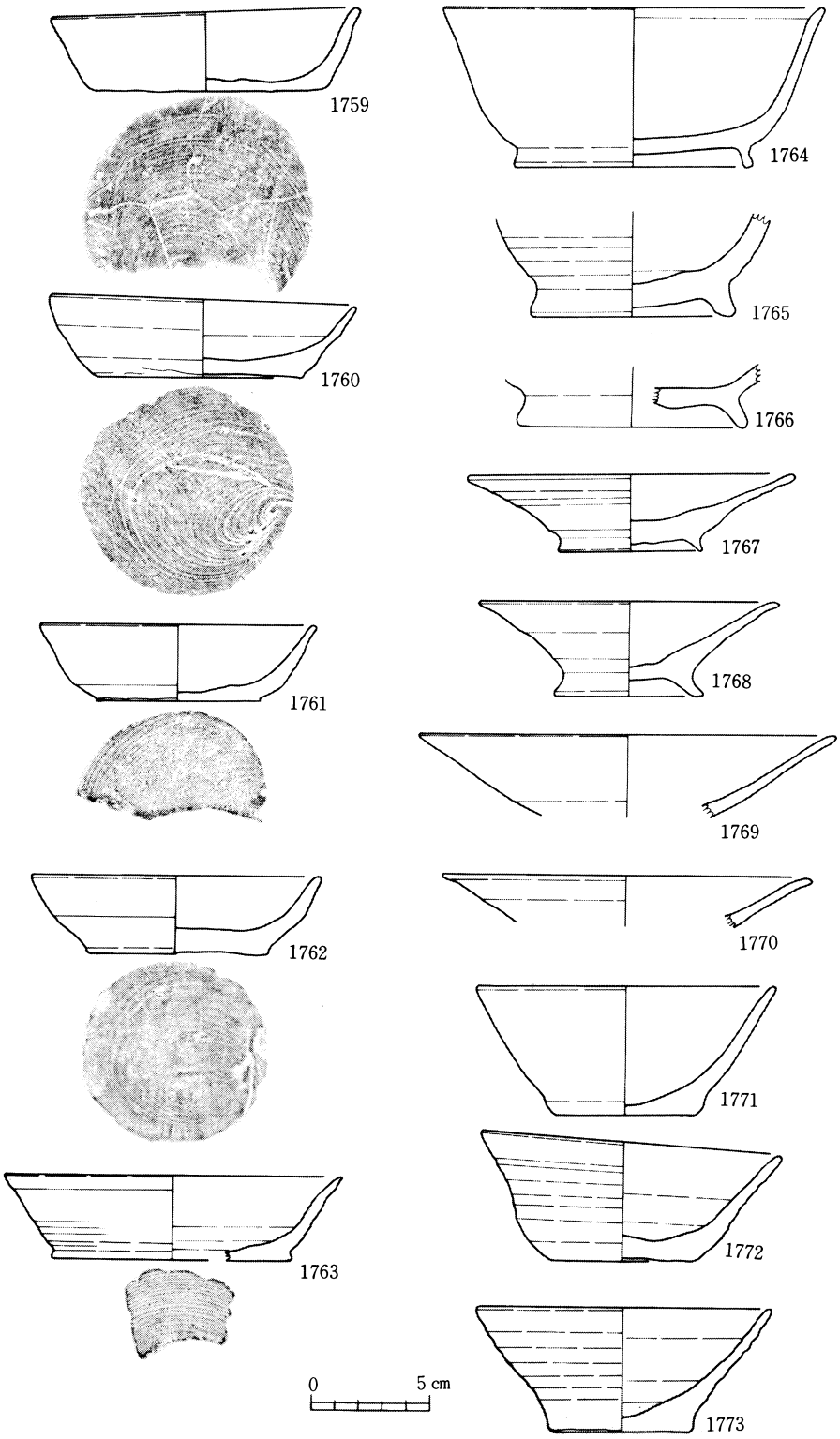
第244図　土師器(4)（坏）



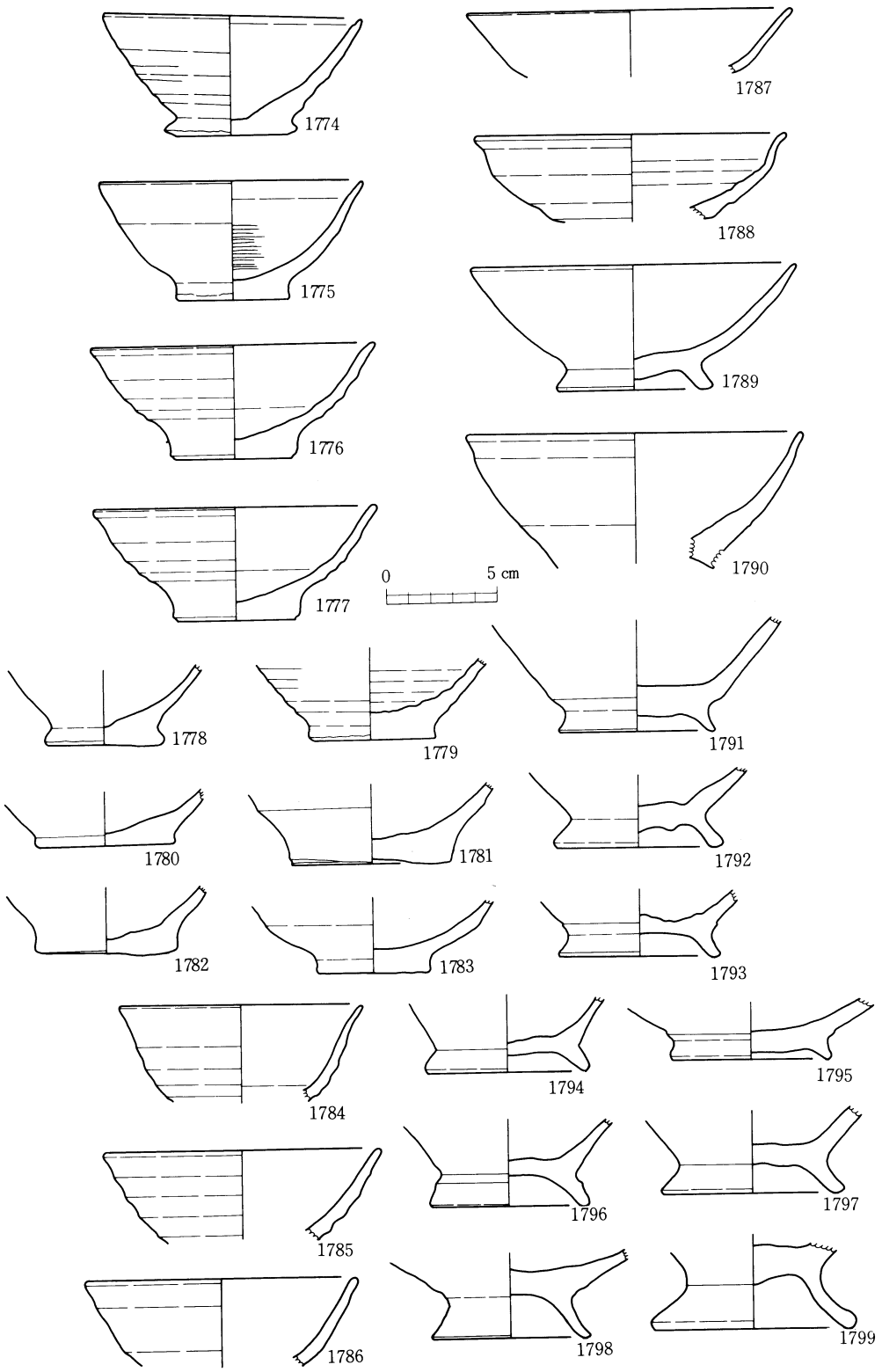
第245図　土師器(5)（坏）



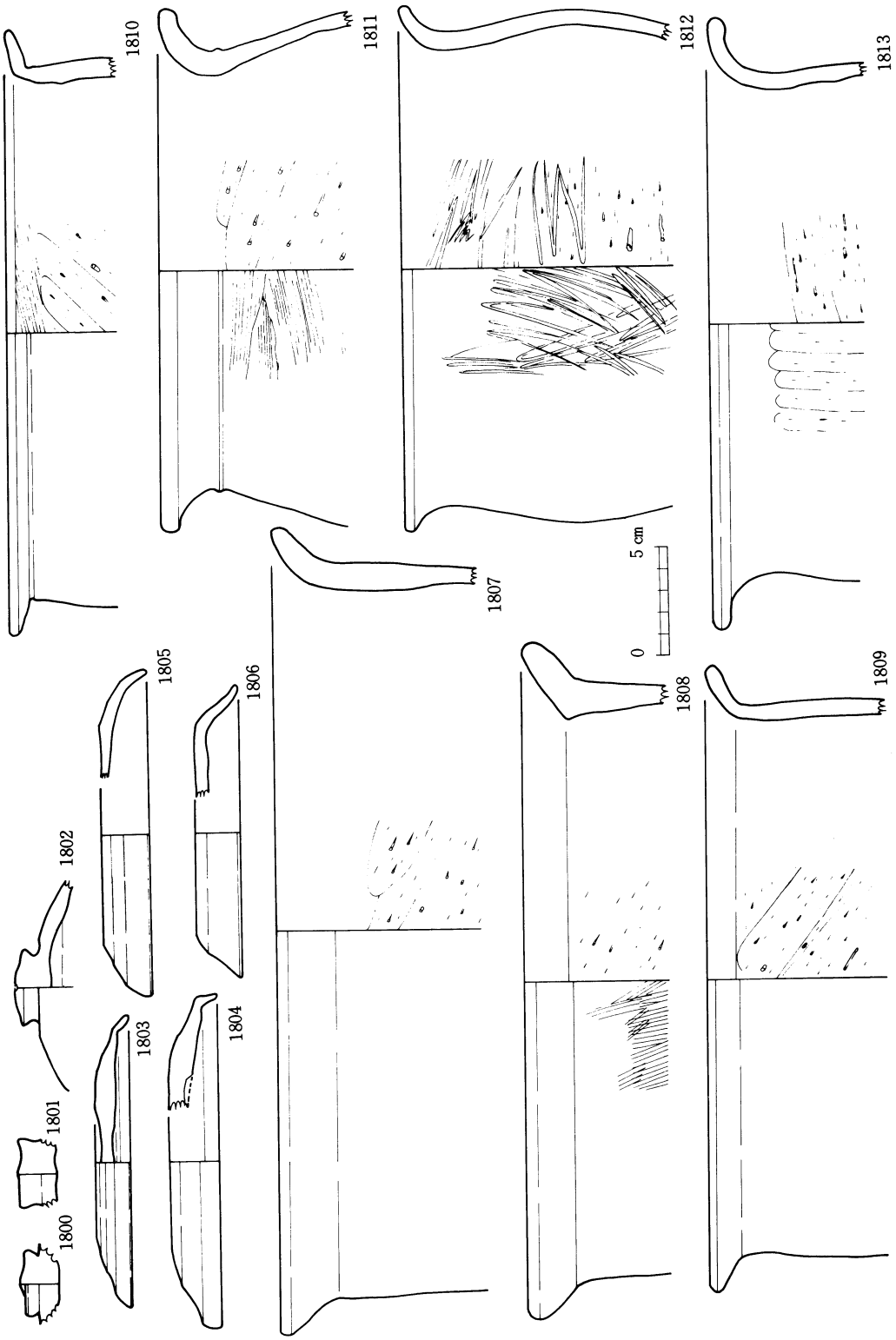
第246図　土師器(6)（坏）



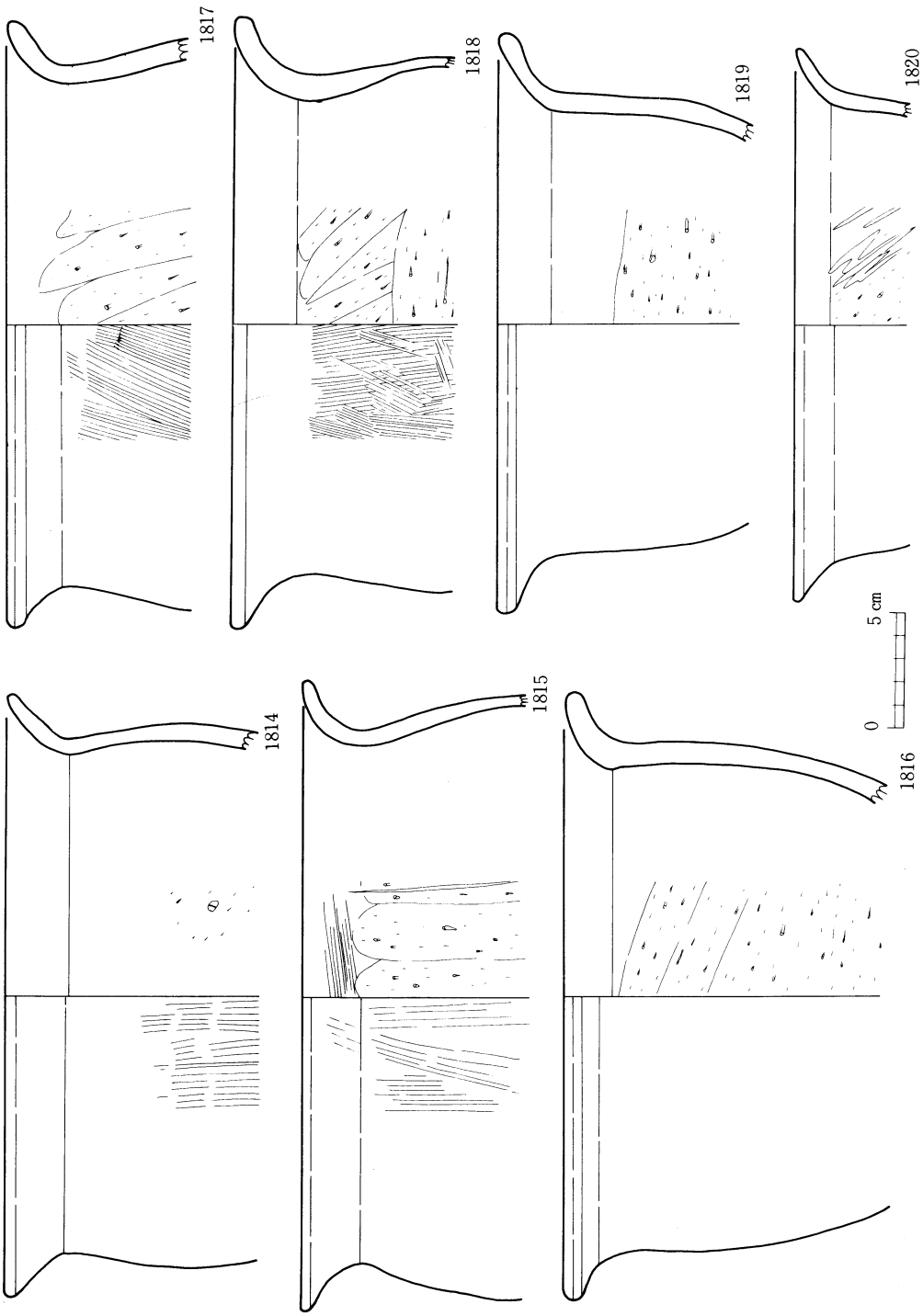
第247図　土師器(7)（坏・埦）


1774
1775
1776
1777
0
5 cm
1778
1779
1780
1781
1782
1783
1784
1785
1786
1787
1788
1789
1790
1791
1792
1793
1794
1795
1796
1797
1798
1799

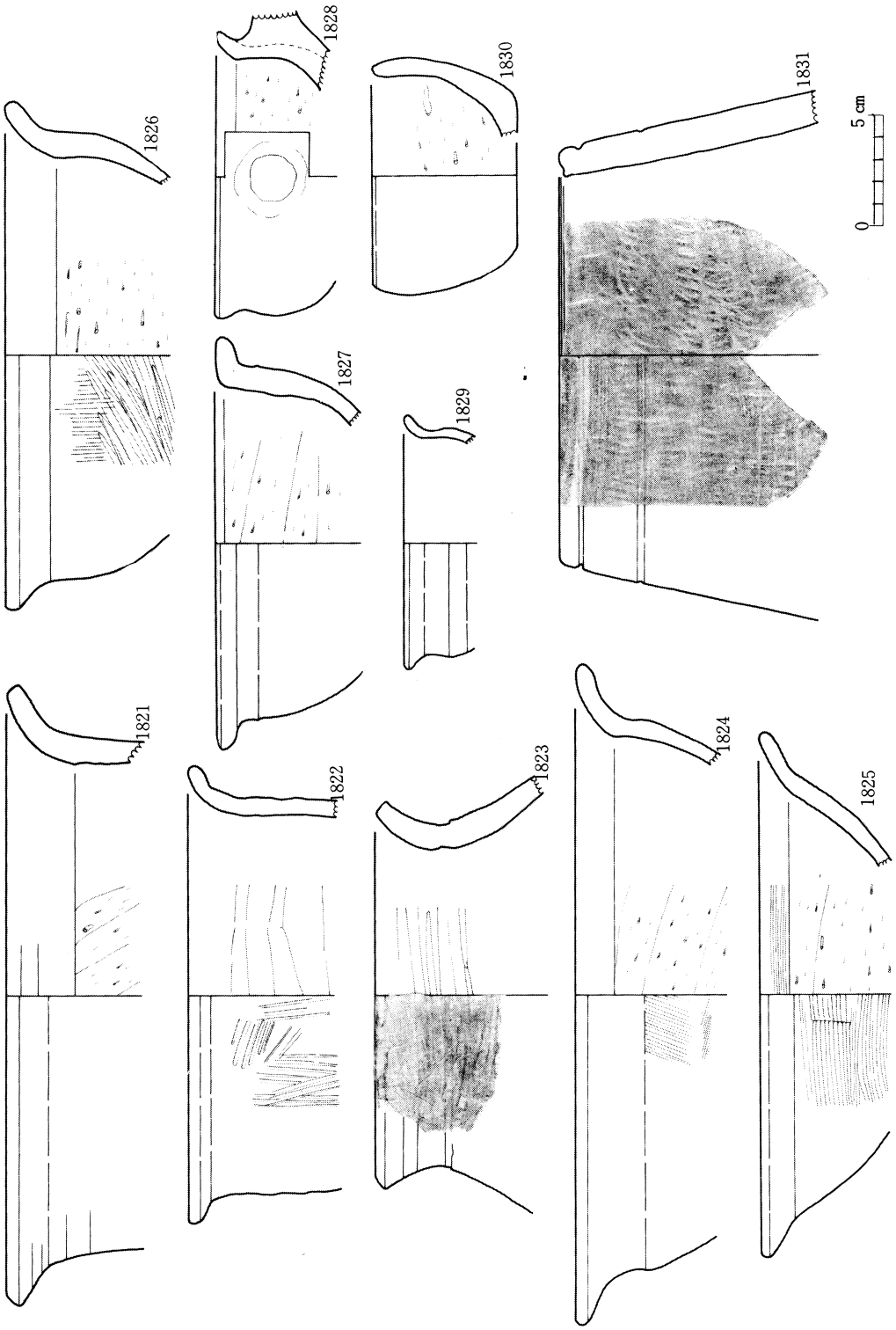
第248図　土師器(8)（埦）



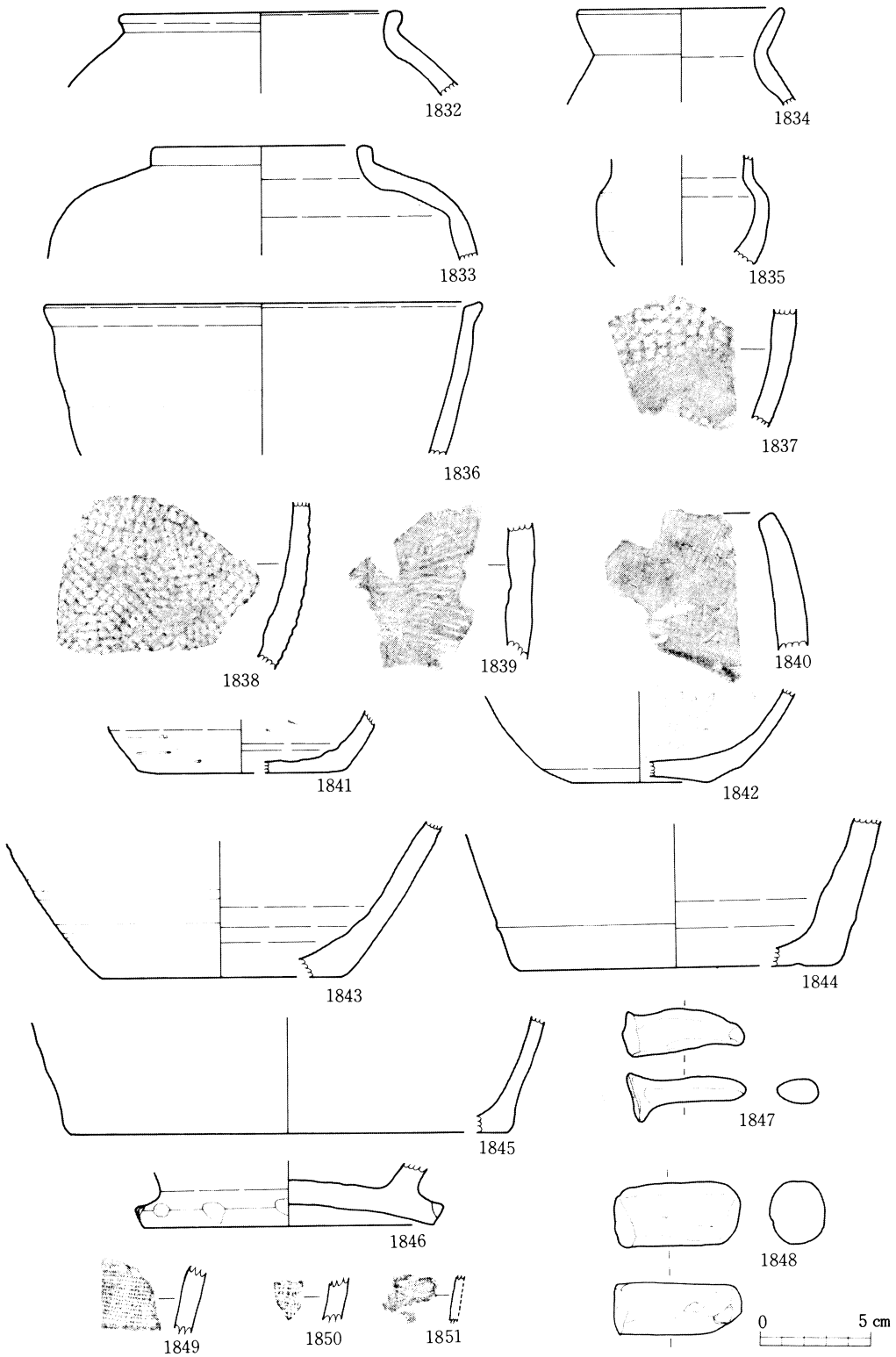
第249図　土師器(9)（蓋，甕）



第250図　土師器(10)（甕）



第251図　土師器(11)（甕・鉢）



第252図　土師器(12)（壺など）

(2)黒色土器

黒色土器の仲間には内面・外面とも黒く研磨したもの，内面のみ黒いもの，内面・外面ともていねいに研磨したもの，内面のみ赤く研磨したものがある。器形としては皿・坏・椀などの小型品のみである。

①小皿　（第253図，1852～1871）

内，外面とも黒色で，ヘラミガキされ，胎土はよく精選されて，砂粒をほとんど含まない。底面もヘラミガキされているが，確認される範囲では，すべて糸切り底であった。口径は，9cm前後が最も多い。口縁端部は，すべて，先に行くに従って細く，ひき出され，やや丸味をもつ。内・外面，ヘラミガキされるが，内面と，底面が特に顕著で，側面には横ナデを残すものもある。内底面でのヘラミガキは，一方向性をもつ。

②坏　（第253図　1872）

内黒土器で，外面は黄灰色を呈し，胎土はよく精選されていて，わずかに砂粒を含む。内面は放射状にヘラミガキがされ，外面は横ナデされる。口径が大きく，底径は小さい。内弯気味の大きく開いた器体である。

③椀　（第253図，第254図　1873～1885，1888～1897）

ほとんどが，内黒土器で，椀部内，外面はヘラミガキされ，高台部の内・外面は横ナデされている。外面は，一般に黄灰色を呈する。胎土は，よく精選されていて，ほとんど砂粒を含まない。

1873～1878は，図上復元を含めて，完形として図化したものである。ヘラミガキは，横方向に行なわれている。1873～1876は，低い高台が直立して，体部から口縁部まで，内弯して立ち上がる。1877・1878は，外方に開く低い高台に，内弯して立ち上がった体部が，内側に稜をつくって，外方に屈曲し，口縁部に至る。1877は，口縁下 1.6cmから，1878は，口縁下 3.7cmから，体部下半を，黒色となしており，器形の違いと，何らか，関係をもつものであろうか。

1879～1885は，椀部で，1879～1882は，口縁部が，体部から内弯して立ちあがるもの，1883・1884は，わずかに外反する。1885は，器高が高く，外弯気味に開く椀である。1885は，また，外面を調整している。

1888～1897は，高台部分で，1873～1878の高台部分と比べて，高い。1897を除いて，内黒土器で，1897は，内・外面とも黒色を呈している。1889・1894は，高台付坏の高台部分の可能性もある。1893は，特に高く，段を有している。1895・1896は，底面に，十字状の沈線を施してあり，窯印であろう。他に3・4点，見受けられた。1897は，底部中央に，穿孔を施してある。

④高台付坏　（第 254図　1886・1887　）

内面は黒色，外面は淡赤褐色を呈し，胎土に，わずかに砂粒を含む。器高が低く，体部から口縁部へ，外弯気味に大きく開く，土師器にも，同じ器形のものが見られる。坏部内面が，放射状にヘラミガキされ，外面及び高台部は横ナデによって調整される。

⑤底部　（第 254図　1898・1899）

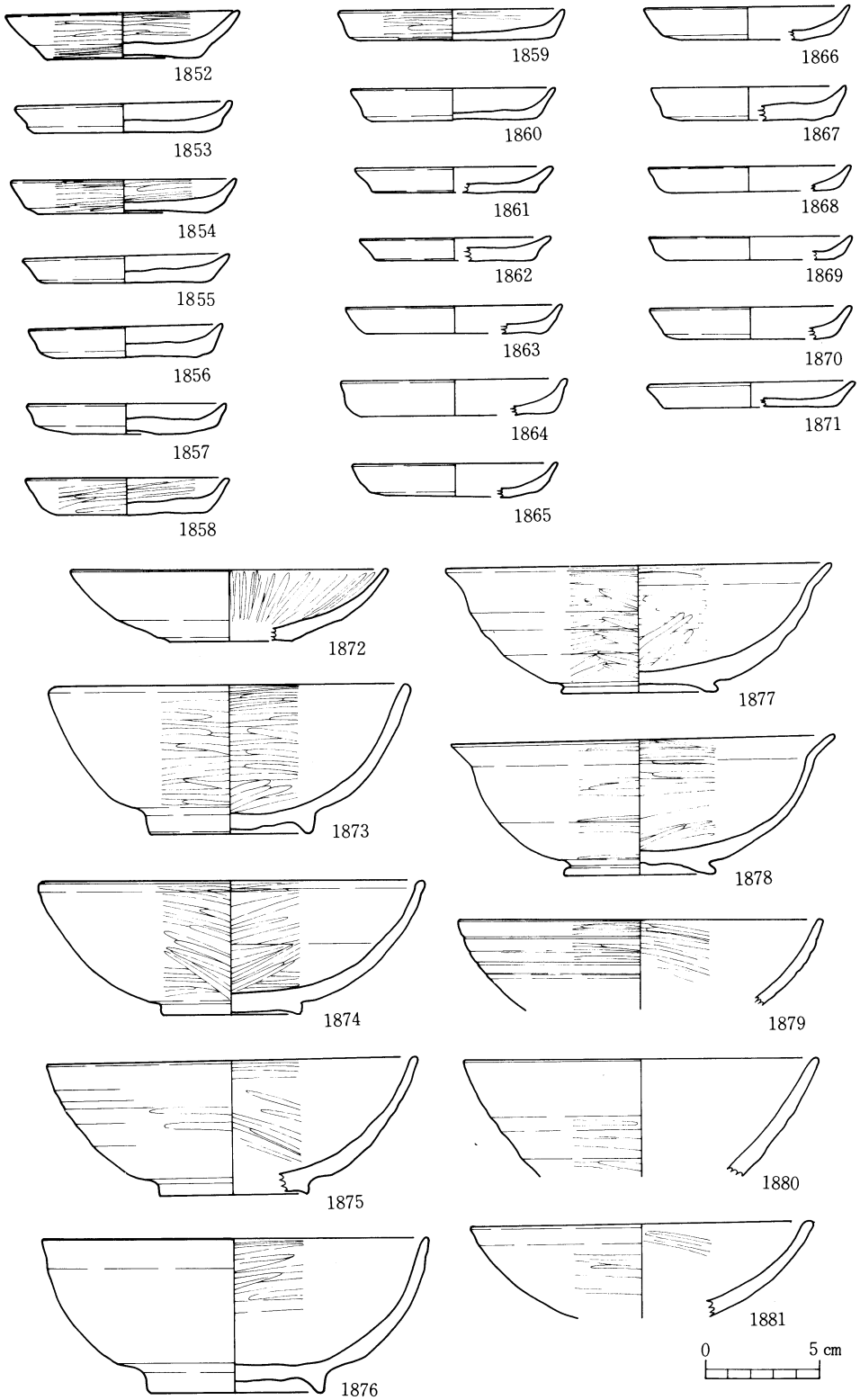
器形は不明であるが，平底の底部で，内面黒色，外面黄灰色を呈す。胎土は，わずかに砂粒を含み，内面ヘラミガキ，外面横ナデによって調整される。

⑥内朱土器　（第254図，1900～1903）

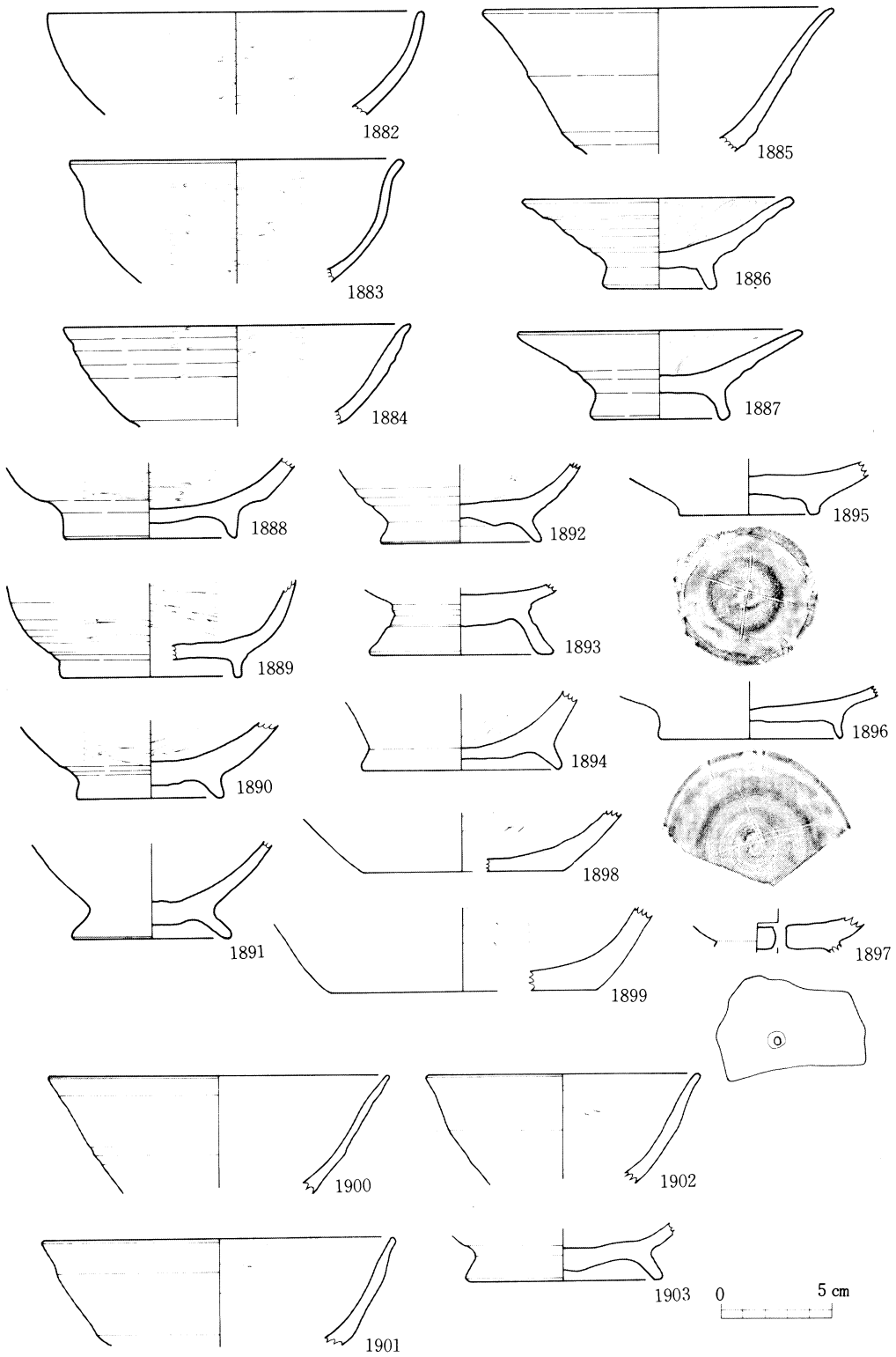
内面に，黒色土器と同じ手法で，赤色顔料を塗り込めたもので，外面は黄灰色，胎土は，わずかに砂粒を含む。内面をヘラミガキ，外面を横ナデによって，調整している。1900～1902は埦部，1903は高台部分である。1901のみ，内面も横ナデされている。

図番	器　種	出土区層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	図番	器　種	出土区層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
1852	小　皿	23F-2	10.1	6.8	2.1	1878	埦・埦部	8 J-2	17.0	6.4	6.0
1853	〃	16G-2	9.2	7.0	1.3	1879	〃	29K-1	(16.8)	—	—
1854	〃	16E-2	9.8	7.2	1.5	1880	〃	26F.G-1	(15.4)	—	—
1855	〃	不　明	9.0	7.0	1.2	1881	〃	27J-2	(14.8)	—	—
1856	〃	16F-2	8.6	6.6	1.4	1882	〃	25H-2			
1857	〃	15E-2	8.8	4.8	1.4	1883	〃	9 B			
1858	〃	10D-1	8.8	6.8	1.7	1884	〃	27K-2			
1859	〃	16G-2	9.8	8.8	1.4	1885	〃	28H-2			
1860	〃	16F-2	8.8	7.2	1.5	1886	高台付坏	29D-1			
1861	〃	16F-2	(8.6)	(7.2)	1.2	1887	〃	28J-2			
1862	〃	16F-2	(8.4)	(7.0)	1.0	1888	高台部分	22F-2			
1863	〃	16F-2	(9.2)	(7.6)	1.2	1889	〃	17F-1			
1864	〃	16G-2	(9.8)	(8.4)	1.6	1890	〃	30H.I-2			
1865	〃	16F-2	(8.8)	(7.0)	1.5	1891	〃	33 I-2			
1866	〃	16F-2	(9.2)	(7.0)	1.6	1892	〃	28 I-2			
1867	〃	16E-2	(8.4)	(6.0)	1.5	1893	〃	7 F-2			
1868	〃	15E-1	(8.8)	(7.4)	1.1	1894	〃	11F-2			
1869	〃	15E-2	(8.8)	(7.2)	1.1	1895	〃	9 I-2			
1870	〃	16F-2	(8.6)	(7.0)	1.5	1896	〃	9 E-2b			
1872	〃	16F-2	(8.8)	(7.4)	1.1	1897	〃	8 F-1			
1873	坏	9 D	12.8	5.2	3.2	1898	〃	24D-2			
1874	高台付埦	8 G-1	15.4	7.2	6.6	1899	〃	29H-1			
1876	〃	25F-2	16.6	6.0	5.9	1900	内朱土器 埦	26C-2			
1877	〃	27G-2	(16.2)	(6.4)	6.0	1901	〃	33J-1			
1878	〃	16F-2	16.8	7.6	6.8	1902	〃	29F-2			
1877	〃	9 G-1	17.0	6.8	5.6	1903	〃	29F-2			

第39表　黒色土器出土地区及び計測表


1852
1853
1854
1855
1856
1857
1858
1859
1860
1861
1862
1863
1864
1865
1866
1867
1868
1869
1870
1871
1872
1873
1874
1875
1876
1877
1878
1879
1880
1881
0
5 cm

第253図　黒色土器(1)


1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900
1901
1902
1903
0
5 cm

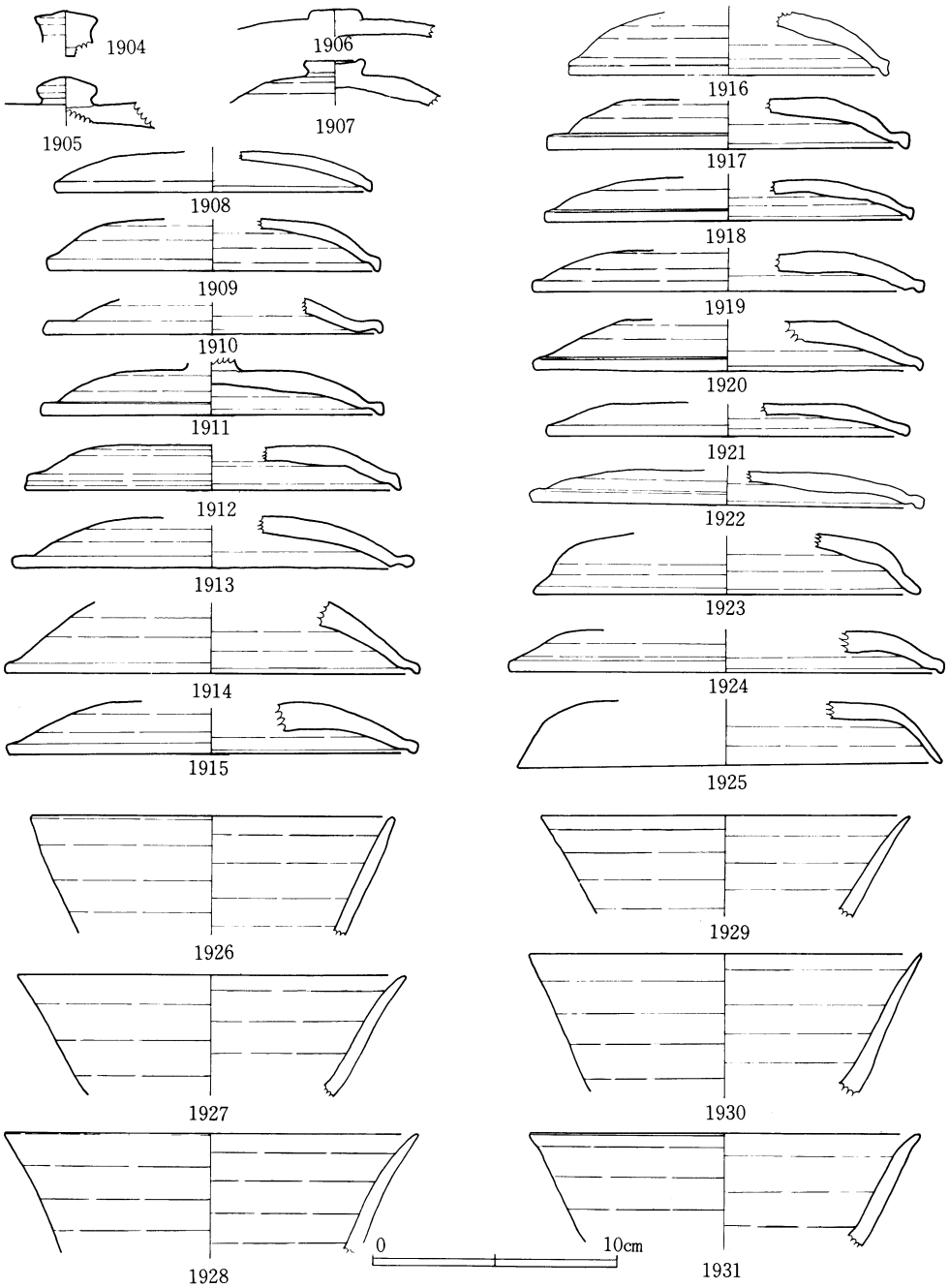
第254図　黒色土器(2)

(3)須恵器

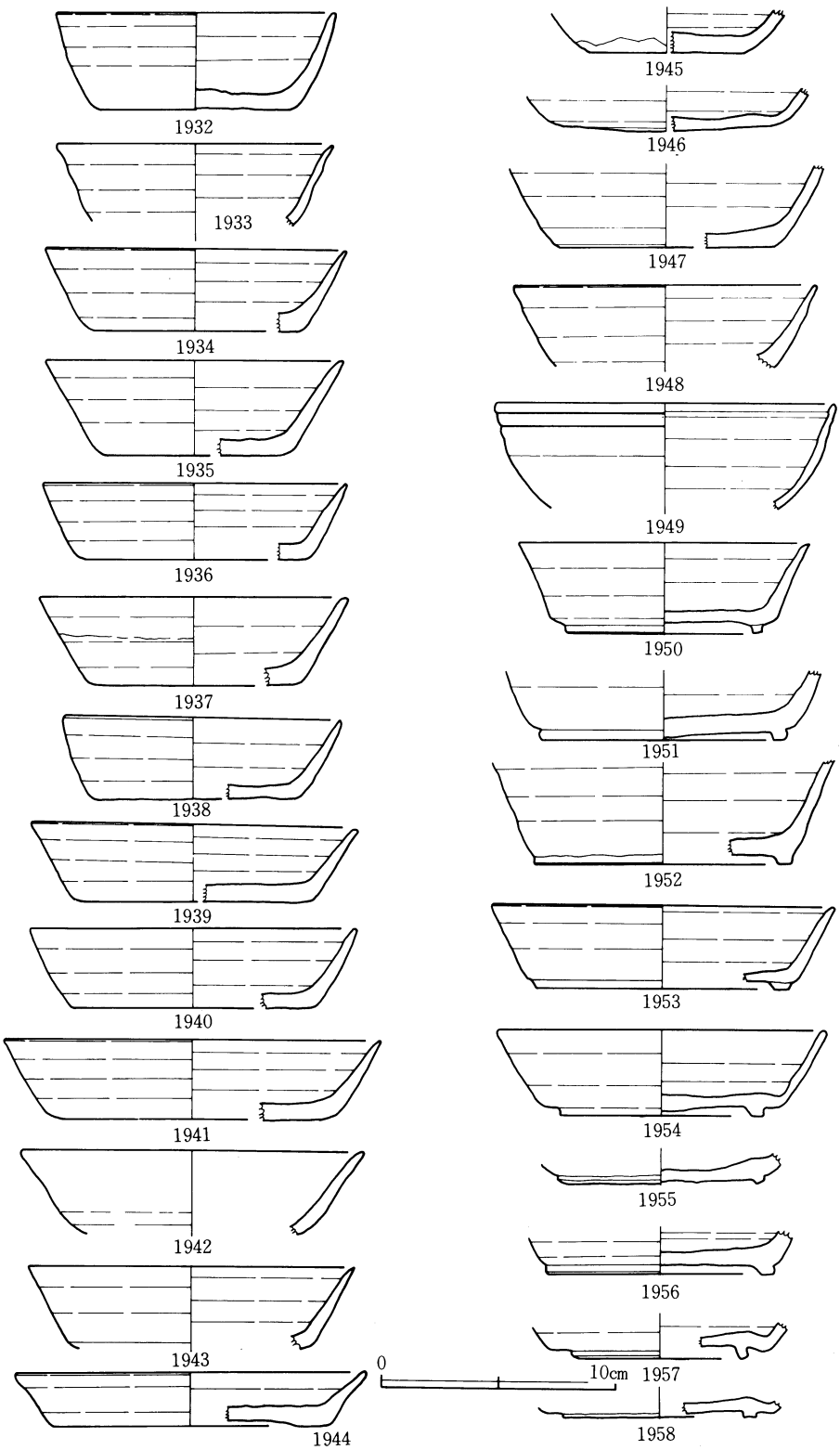
須恵器には坏蓋・坏身・壺・甕・鉢がある。

①坏蓋　　(第255図)

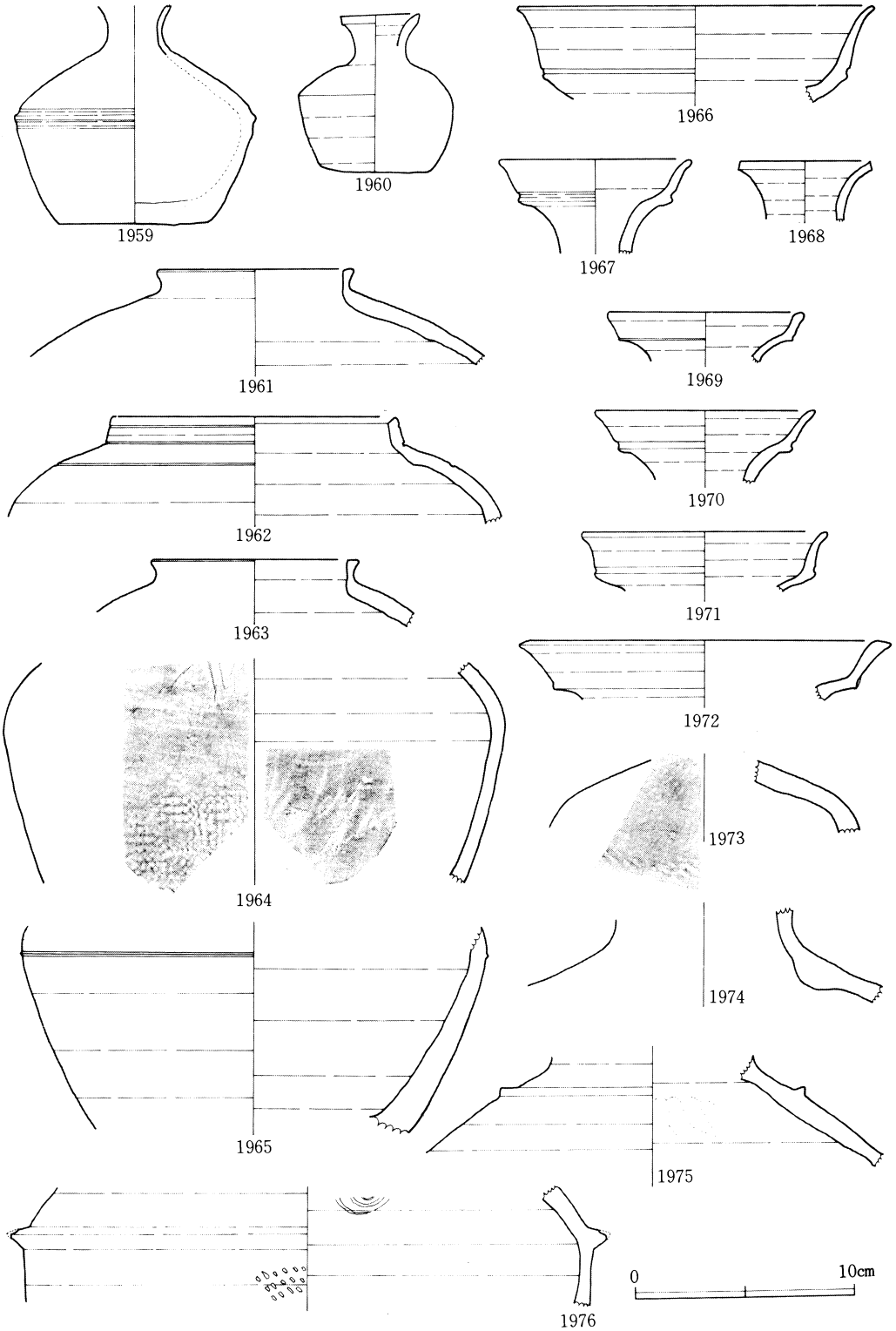
1904・1905は宝珠様のつまみを有する坏蓋片である。**1906**のつまみは円板状にハリツケた簡単なものである。**1907**はつまみをハリツケた後ナデ調整を施し上を凹形にしている。**1908**は天



第255図　須恵器(1)（坏蓋・坏身）



第256図　須恵器(2)（杯身）


1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
0
10cm

第257図　須恵器(3)（壺）

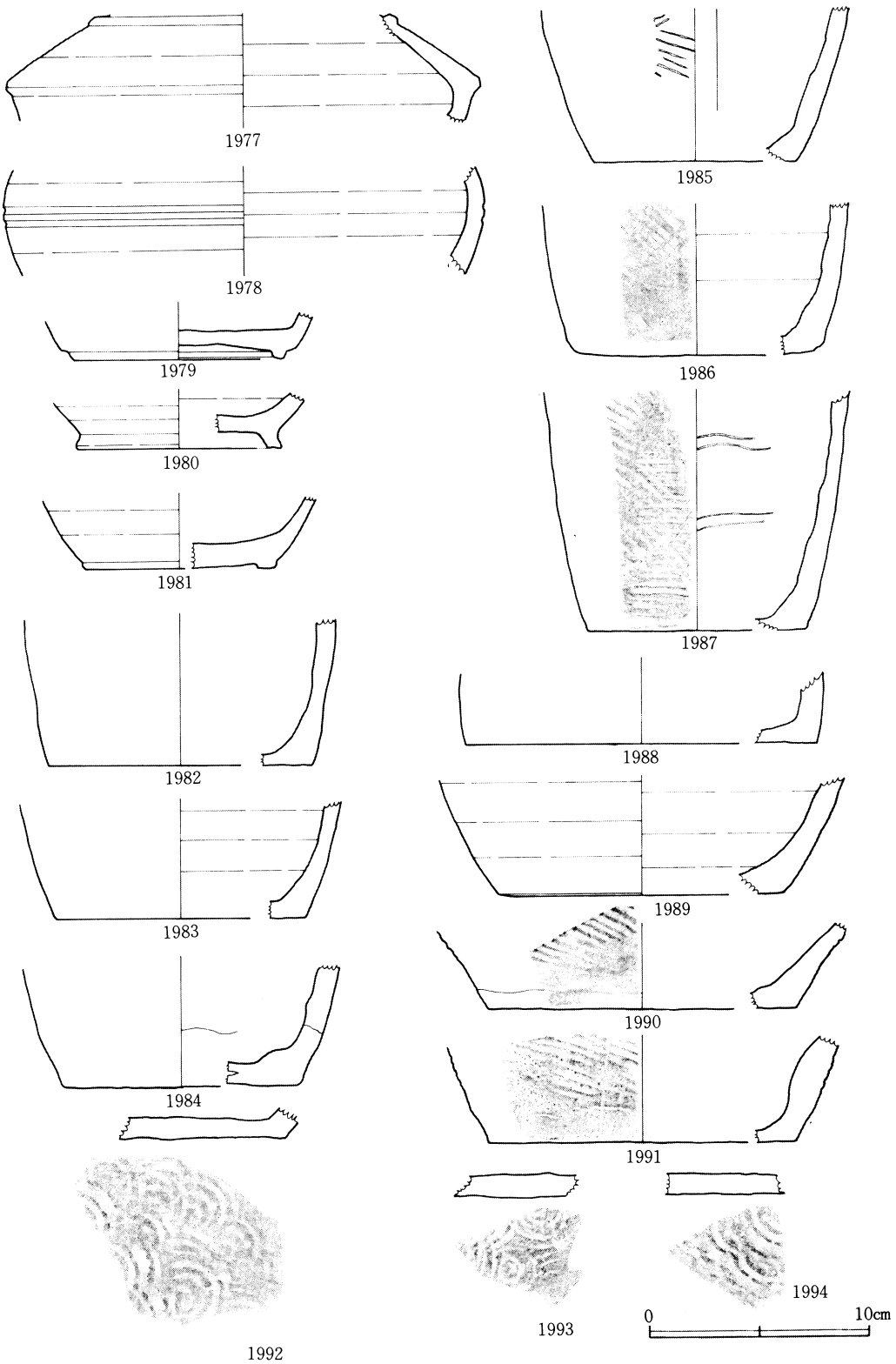
井部からなだらかな曲線で下方に開き口縁部をつくる。口縁部は内弯し，端部内側がわずかに段をもつ。径２～３㎜の砂粒があるが焼成は良好である。**1909・1912**は口縁部が外反し，端部近くで水平気味になり，屈曲して下方に下がり端部になる。端部は丸い。外面は天井部近くが回転ヘラ削り，口縁部は回転ナデ調整である。**1911**は天井部の中央がわずかに低く，口縁部は外反し端部近くで水平になり，下方に屈曲して端部になる。外面は天井部が回転ヘラ削りの後回転ナデ調整，口縁部の内外面は回転ナデ調整である。**1913・1919**は端部近くの口縁部内側ではっきりとした稜ができている。**1914**は他と比べて深い。**1923**は口縁部が外反し，端部内側には他のような凹みはない。天井部は回転ヘラ削り，口縁及び内面は回転ナデ調整である。焼成はやや軟質。**1925**は水平な天井部から外反気味に口縁部になる。天井部外面は回転ヘラ削り，口縁部は自然釉がかかっている。内面は回転ナデ調整。焼成は良好である。

② **坏身**（第255図・第256図）

1926は口縁部が外反して伸びるが端部近くで少し口がすぼむ。内外面とも回転ナデ調整である。**1927・1928・1929・1930**は口縁部が外反したまま直行する。共通して外側は青灰色で，内側は黄褐色であるが，その中で**1928**と**1930**は口縁端部から約５㎜の内面も青灰色である。胎土はち密であり，内外面とも回転ナデ調整である。**1931**は口縁の端部が外に開く。**1932**は口縁部が内弯気味に立ち上がる。底部はヘラ削りの後ナデ調整，口縁部及び内面は回転ナデ。これは火襷文様がある。**1934**は焼成がやや軟質である。**1936**も火襷文様がある。**1944**は口径は大きいが浅い。口縁は外反し外側に開く。底部は回転ヘラ切りの後回転ナデ調整，内側はナデ調整，口縁部は内外面とも回転ナデ調整である。**1945**は土師器様の色調を呈している。底部は回転ヘラ切りで口縁部外面も回転ヘラ削りであるが，部分的に静止ヘラ削りが施されている。　内側は底部がナデ，口縁部は回転ナデ調整である。**1949**は深い器形であり，口縁部は内弯気味に立ち上がり端部近くで外反する。端部近くの外面に２条，内面に１条の凹線がある。調整は口縁部下半が回転ヘラ削り，上半及び内面は回転ナデである。**1950**は口縁が外反し，底部にハリツの高台がある。**1951**は底部が厚く，その中央部が下がっている。**1957**は底部と口縁部の境の部分が下がっており，高台の外側が溝状になっている。

③ **壺**（第257図・第258図）

1959は口縁部上半を欠損するがほぼ完形である。体部中央に上下二条の凹線のある肩があり，底部及び体部下半は回転ヘラ削り，他は回転ナデ調整である。**1960**も小型の完形壺である。体部上半に肩をもつ。**1961**は口縁が短く直立し，端部が水平になった短頚壺である。肩に近い部分は外側の格子タタキがナデによって消されている。内側は回転ナデによってタタキ痕は消されている。**1962**は口縁が内弯し，端部は内に向いている。口縁部及び口縁と胴部の境それに肩に近い部分に計３本の凹線がある。内外面とも回転ナデ調整。**1964**は上半に肩をもつ胴部である。最終的にはナデによって調整されているが部分的にタタキ目が残っている。**1965**は外面が回転ヘラ削りの後ナデ調整，内面は回転ナデ調整である。胴部の張り出した部分に凸線がある。**1966**は口頚部が「くの字」状になって外反している。内外面とも回転ナデ調整である。**1974**は

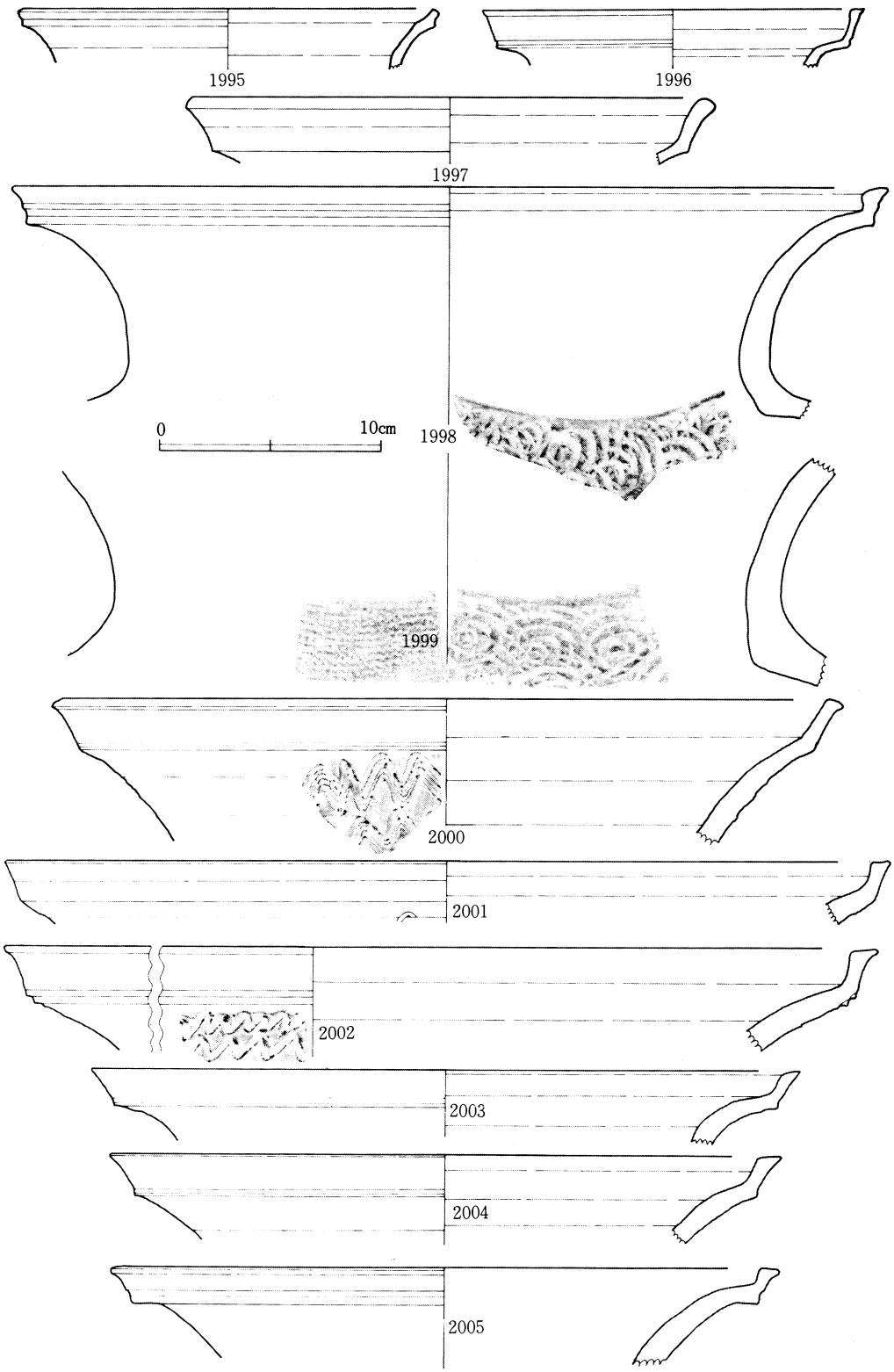

1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
0
10cm

第258図　須恵器(4)（壺）

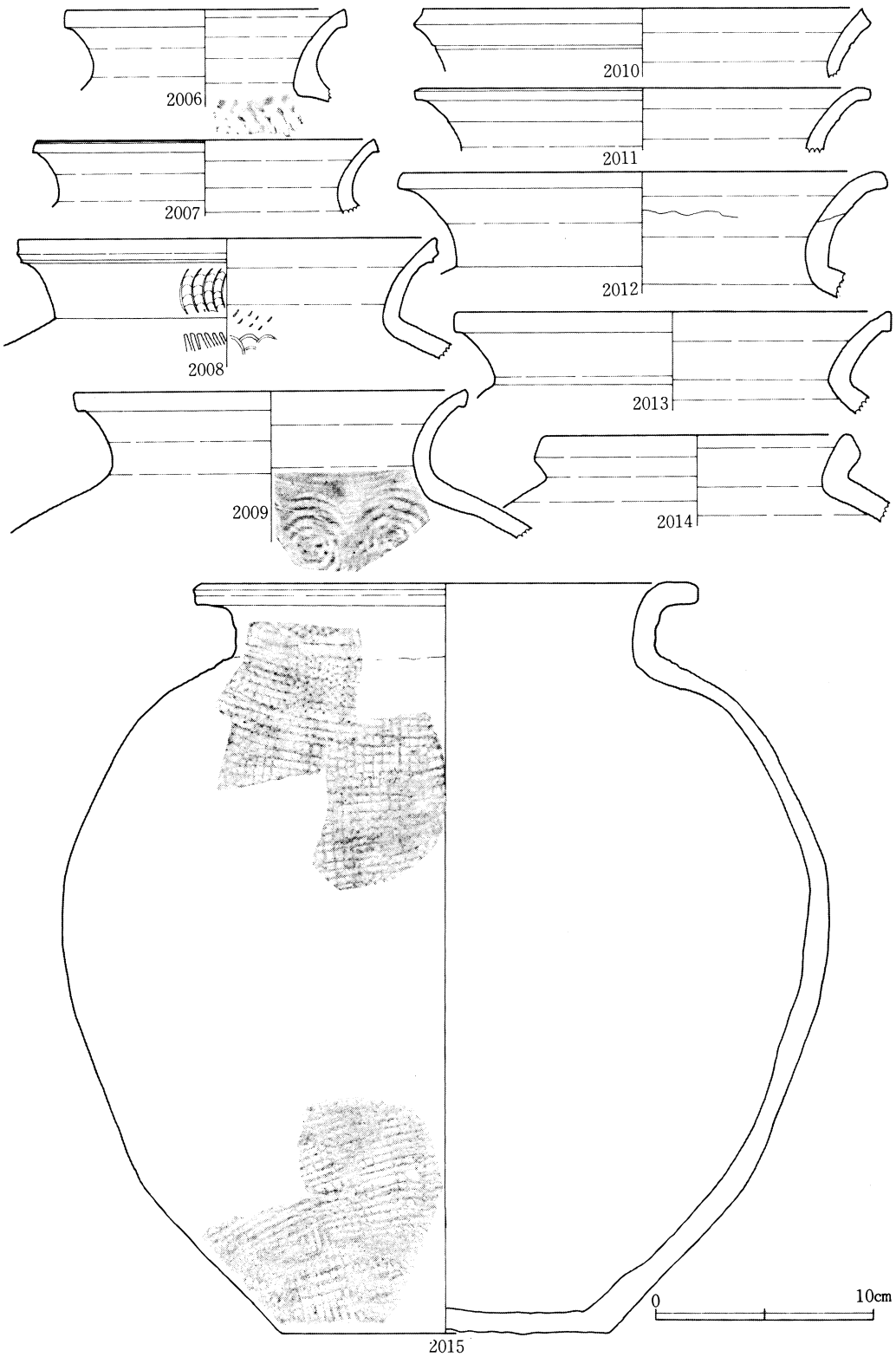
緑色の自然釉がかかっている。1975は肩上部にハリツケの凸帯がある。1976も胴部に断面三角形のハリツケ凸帯があり，タタキ目はナデ調整によってほとんど消されている。1977はほぼ直角状に屈曲した肩部で，その上部にも断面三角形のハリツケ凸帯がある。内面上部にタタキ痕が残っている。1980は高台の中央が凹状になっている。1981は土師器様の色調を呈し，低い高台がつき底部中央が下がっている。1982は底部がうすく胴部は直立に近い立ち上がりである。内外面ともタタキ目をナデにより消している。1983は外面が回転ヘラ削り，内面は回転ナデ調整であり，底部の残部は少いがタタキ痕が外側にある。1984は内面に輪積み痕が残ってナデ調整がある。外面はタタキの後ナデ調整。1988は底部が広く胴部は内弯気味に直立して立ち上がっている。1989は胴部が広い角度で立ち上がり，内外面とも回転ナデ調整，底部は回転ヘラ削りの後，回転ナデ調整が施されている。1990は土師器様の色調を呈し，胴部の立ち上がりは外側に広い。外面は平行タタキ，底部に近い部位及び底部はナデ調整，内側はナデ調整が行なわれている。1992・1993・1994は底部片であり，外面に同心円タタキがある。いづれも底径は不明であるが，1992はヘラ削りされた胴部が若干残っている。

③ **甕**　（第259図～265図）

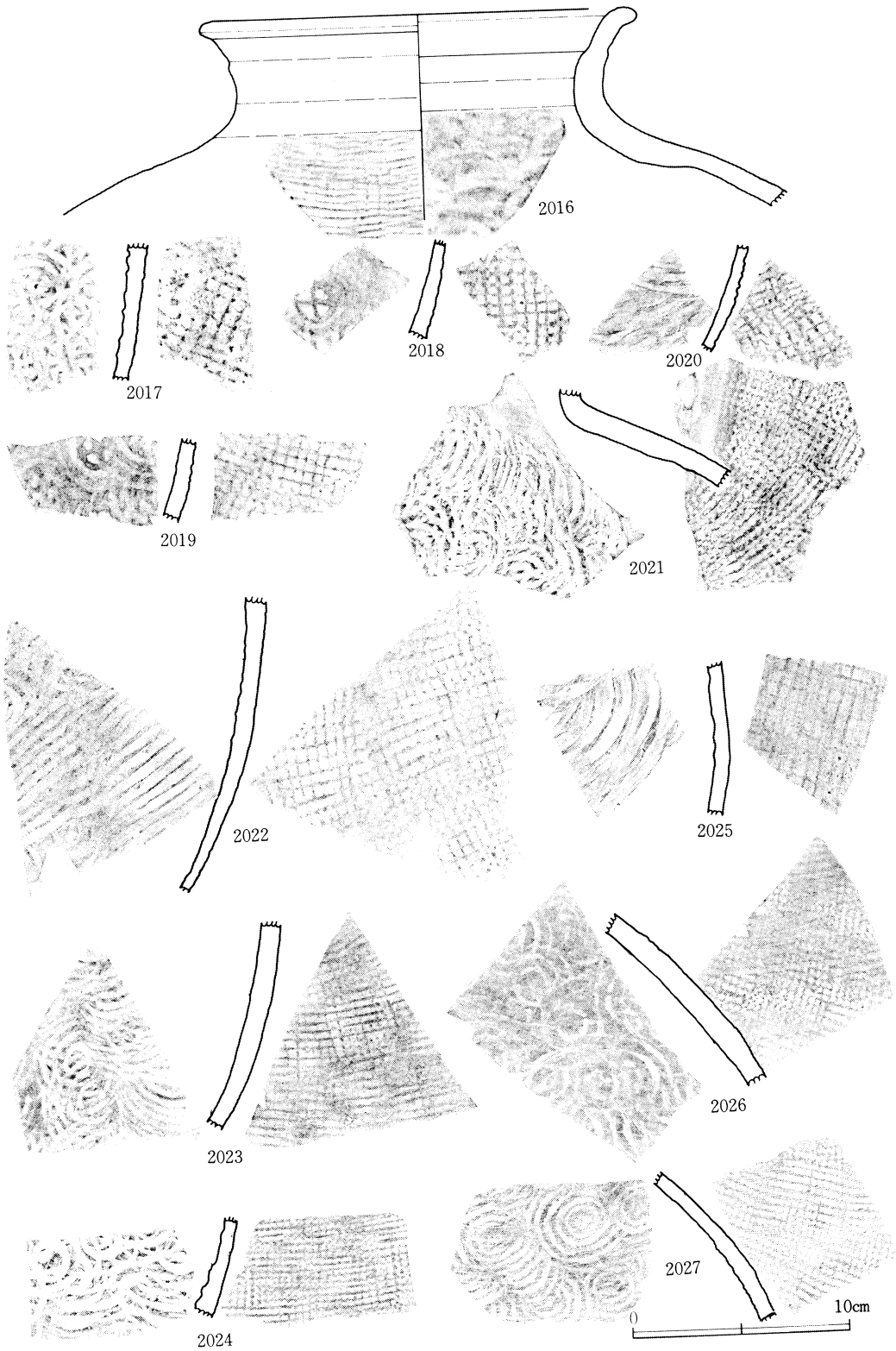
1995は口縁が外反して立ち上がり，端部近くで垂直になる。内外面とも回転ナデ調整。1996は口縁部が「くの字」状になり，その部分に凹線がある。1997は口縁上半が厚く，端部は丸い。1998は口頸部が大きく外反し，その後直角に立ち上がる。口縁には２条の凹線がある。胴部は水平気味に張り出す。外面は平行タタキの後ナデ調整，内面は口頸部がナデ調整で，胴部が同心円タタキ目がある。1999もほぼ同形の大形甕である。2000は外反する口頸部に,波状文が,施されている。2001も口頸部に波状文をもつが小片であるため文様の全体は不明である。2002は口径が約51cmと大きく，口頸部の上部にハリツケによる２条の凸線をもつ。内外面とも回転ナデ調整で，口頸部に波状文がある。2003・2004・2005は「くの字」状に外反する口頸部が屈曲して立ち上がる部分に１条の凹線をもつ。2006から2013の口頸部は短く外反し，「くの字」状にならない。2008は口頸部の屈曲した部分に断面三角形のハリツケ凸線があり，頚部はタタキ目を回転ナデ調整により消している。胴部は外側が平行タタキ，内側が同心円タタキである。2009の胴部外側は格子タタキの後ナデ調整を行なっている。内側は同心円タタキである。2012は口頸部内部に輪積みの痕跡が残っている。2014は口縁が短く外反し，その中央部が厚くなり，端部は丸い。口縁部はハリツケであり，内外面とも回転ナデ調整である。2015は亀山焼である。球形に近い胴部から外反する短い口頸部が垂直気味に立ち上がり，すぐに外側に水平に伸びて端部になる。外面は格子タタキが全面に施こされ，口頸部のみナデが行なわれている。器壁断面には特徴のあるシマ模様が見られる。2017から2054は甕の胴部片である。甕の胴部はタタキ技法により整形されており，外面と内面がそれぞれ格子タタキと同心円タタキ・格子タタキと平行タタキ・平行タタキと同心円タタキ・平行タタキと平行タタキの組み合せがある。2017・2018・2019は外面が格子タタキで内面は車輪文である。車輪文はこの３点のみである。2042・2054は底部である。



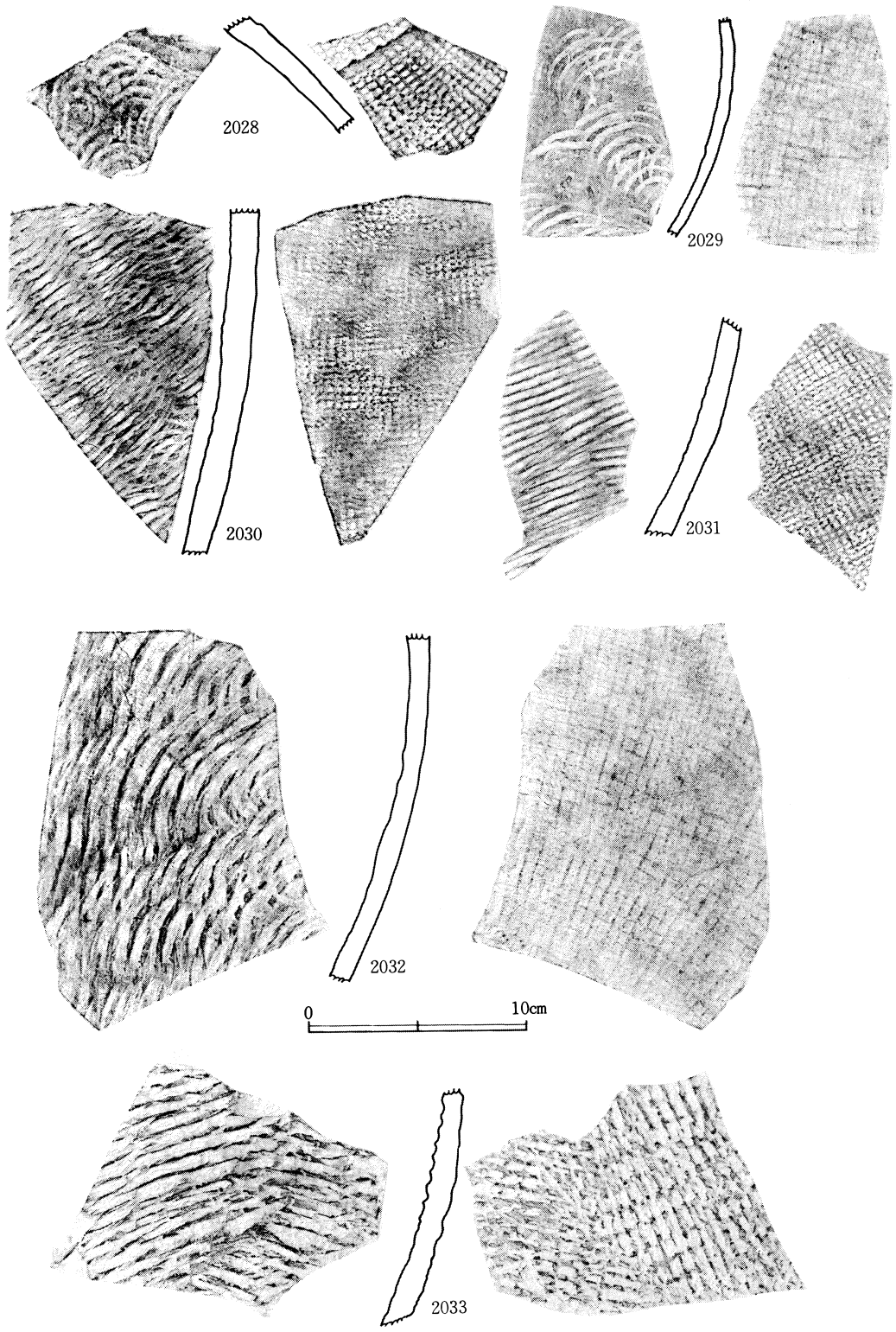
第259図　須恵器(5)（甕の口縁）



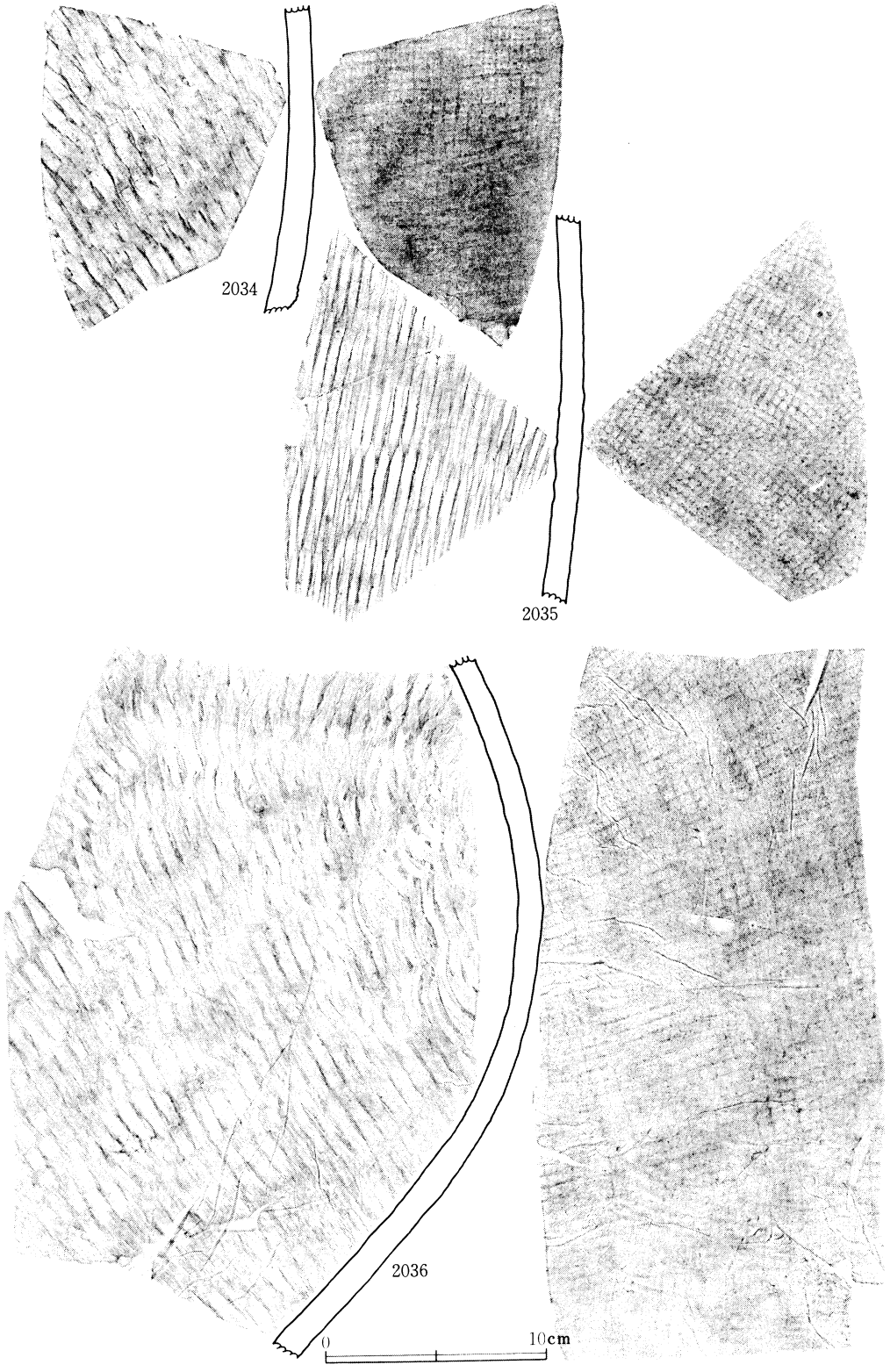
第260図　須恵器(6)　(甕)


2016
2017
2018
2020
2019
2021
2022
2025
2023
2026
2024
2027
0
10cm

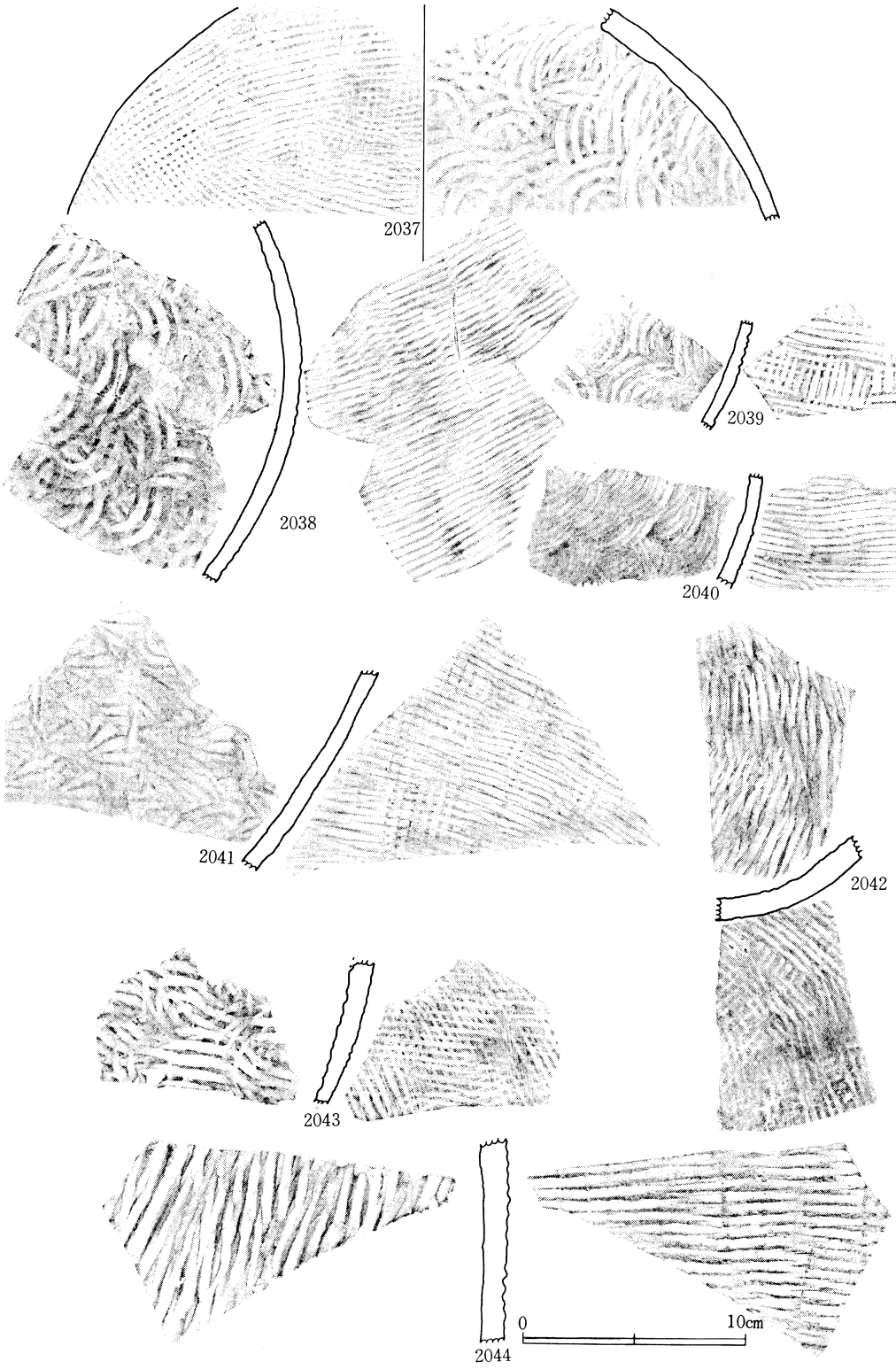
第261図　須恵器(7)（甕）



第262図　須恵器(8)　(甕)



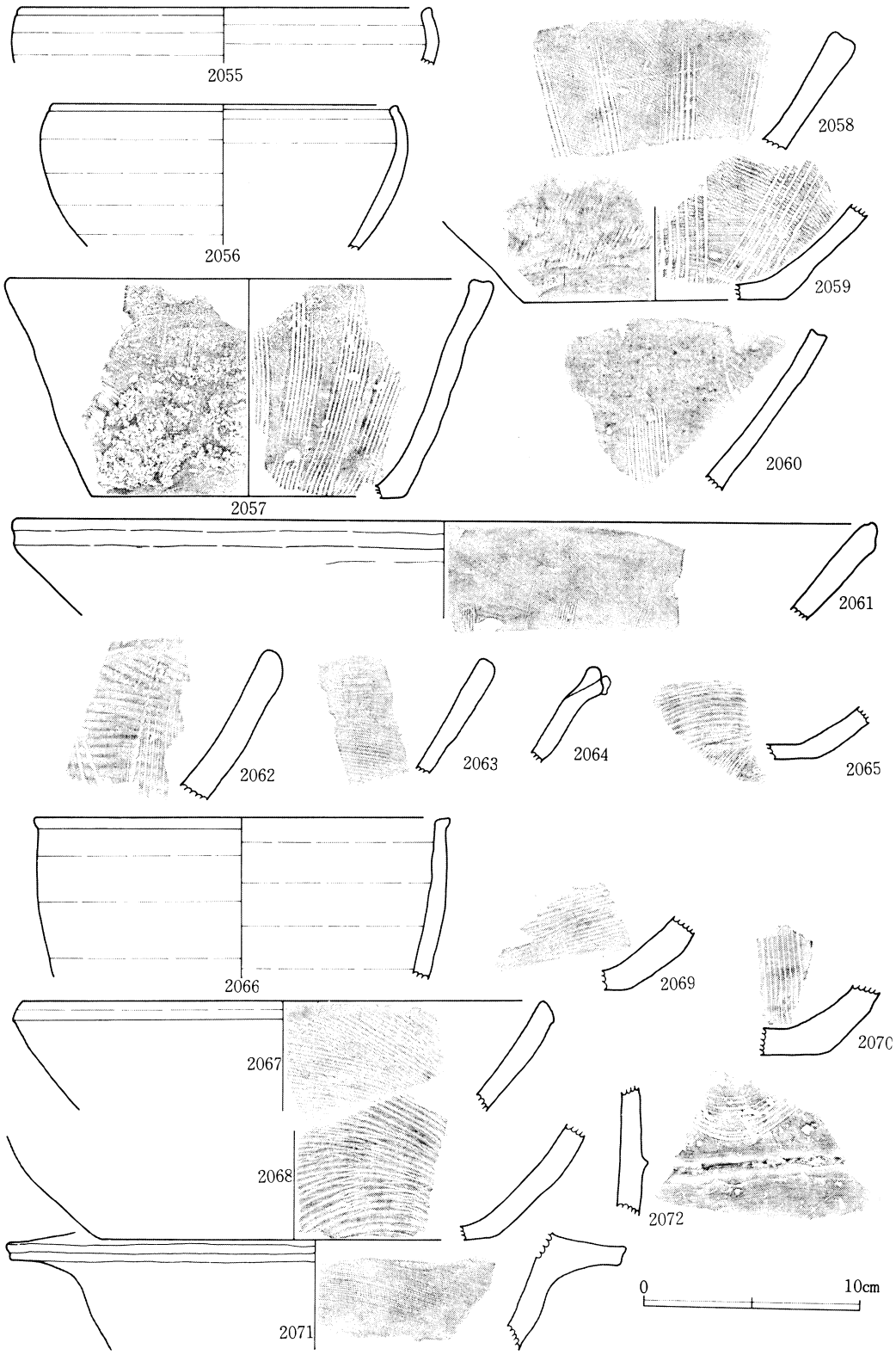
第263図　須恵器(9)（甕）



第264図　須恵器(10)（甕）



第265図　須恵器(11)（甕）



第266図　須恵器(12)　(鉢)

④ **鉢等**　（第266図）

2055・2056は鉄鉢である。**2056**は口縁部が内弯して立ち上がり，体部はなめらかな曲線を描く。最大径より下は外面が回転ヘラ削り，内面は斜め方向のナデ調整であり，その上部は内外面とも回転ナデ調整である。**2057**は口縁上部が開き端部は広く平らになる擂鉢で，単位７本の条線がある。**2059**はハケ目の後，単位６本の条線が施されている。外面にもハケ目調整が残る。**2061**は内面がナデ調整の後，条線が施されており，外面は輪積み痕を約４cmおきに指で押し，その後ナデ調整をしている。**2064**は片口の部分であり内外面ともナデ調整である。**2065**は，内面にハケ目が施されており，器壁断面は**2015**の甕と同一であり亀山焼と思われる。**2066**は体部が垂直に立ち上がり，内外面とも回転ナデ調整である。**2068**は器壁断面にシマ模様があるが，**2065**とは異なる。**2071**は，内面に細いハケ目調整が施されている。全体の器形は不明である。**2072**は胴部に断面三角形のハリツケによる凸線と８条の波状条線がある。

番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考	番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考
1904	蓋	22D-2					1926	坏	24E-2	14.9			
1905	〃	30H-2					1927	〃	9E-1	16			
1906	〃	25H-2					1928	〃	29F-2	17			
1907	〃	28H-1					1929	〃	27H-2	15.1			
1908	〃	24D-2	12.9				1930	〃	28J-2	16			
1909	〃	30K-1	13.4				1931	〃	9H-2	16			
1910	〃	表採	13.9				1932	〃	30K-1	15.7			火襷
1911	〃	26H-2	14				1933	〃	24D-2	11.9			
1912	〃	31K-1	15.4				1934	〃	24D-2	12.7	3.6	8.6	
1913	〃	21D-1	16.1				1935	〃	24D-2	12.6	4.1	7.5	
1914	〃	24D-2	17				1936	〃	23H-2	12.9	3.3	9.5	火襷
1915	〃	24D-2	16.7				1937	〃	8F-2	13.1	3.8	8.8	
1916	〃	12F-1	13				1938	〃	24D-2	11.8	3.5	8.5	
1917	〃	26JK-2	14.6				1939	〃	23K-2	13.9	3.3	9.5	
1918	〃	27J-2	14.9				1940	〃	21C-1	13.9	3.5	10.1	
1919	〃	23P-2	15.8				1941	〃	31S-2	16	3.5	11.3	
1920	〃	33H-2	15.6				1942	〃	17H-1	14.5			
1921	〃	21C-2	14.5				1943	〃	31G-1	12.6	4.1	7.3	
1922	〃	26J-2	15.7				1944	〃	8D-2	14.9	2.3	11.6	
1923	〃	27K-1	15.6				1945	〃	10J-2			6.5	
1924	〃	24G-2	17.6				1946	〃	9I-2			8.8	
1925	〃	22D-2	17.3				1947	〃	24K-1			9	

第40表　須恵器一覧表(1)　　（単位　cm）

番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考	番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考
1948	坏	26H-2	12.8				1981	壺	24D-2			13	
1949	〃	23D-2	14.3				1982	〃	23C-1			12	
1950	〃	25G-2	12.3	3.9	8.3		1983	〃	25I -2			11.4	
1951	〃	8 G-2			10.2		1984	〃	22G-2			10.9	
1952	〃	27H-2			10.9		1985	〃	24F-2			9.2	
1953	〃	23F-2	14.5	3.6	10.7		1986	〃	21C-1			11.5	
1954	〃	30J-2	13.9	3.7	8.6		1987	〃	24G-2			10	
1955	〃	10J -2			8.1		1988	〃	8 E-2			16	
1956	〃	24-D-2			9.5		1989	〃	10F-2			13	
1957	〃	23G-1			7		1990	〃	30H-1			12	
1958	〃	90-2C			8.2		1991	〃	14区以南			14	
1959	壺	29G-2			6.8		1992	〃	8 J -2				
1960	〃	25G-1	3.6	7.1	5		1993	〃	26H-I-2				
1961	〃	24D-2	8.9				1994	〃	22E-1				
1962	〃	21C-2	13				1995	甕	22E-2	19			
1963	〃	24D-2	9.4				1996	〃	29J -2	17.1			
1964	〃	26C-2					1997	〃	27I -2	23.8			
1965	〃	26H-2					1998	〃	12-1	39.4			
1966	〃	30J -2					1999	〃	30F-1				
1967	〃	31J -1	8.7				2000	〃	9E-2C	35.6			
1968	〃	表　採	5.9				2001	〃	9G-2C	39.8			
1969	〃	6 H-1	8.9				2002	〃	27G-1	50.8			
1970	〃	30J-K-2	10				2003	〃	34J -2	32			
1971	〃	33H-2	11.1				2004	〃	8F-2C	30.3			
1972	〃	8 I -1	16.9				2005	〃	8G-2C	30.1			
1973	〃	17E-2					2006	〃	22C-2	12.9			
1974	〃	27H-2					2007	〃	8 E-21	15.5			
1975	〃	24G-2					2008	〃	24E-2	19.1			
1976	〃	24F-2					2009	〃	8G-2C	18			
1977	〃	7 D-2					2010	〃	22E-1	20.1			
1978	〃	24F-2					2011	〃	表　採	20.8			
1979	〃	22E-2			9.6		2012	〃	70-2	21.9			
1980	〃	8DE-2			9.2		2013	〃	21E-1	20			

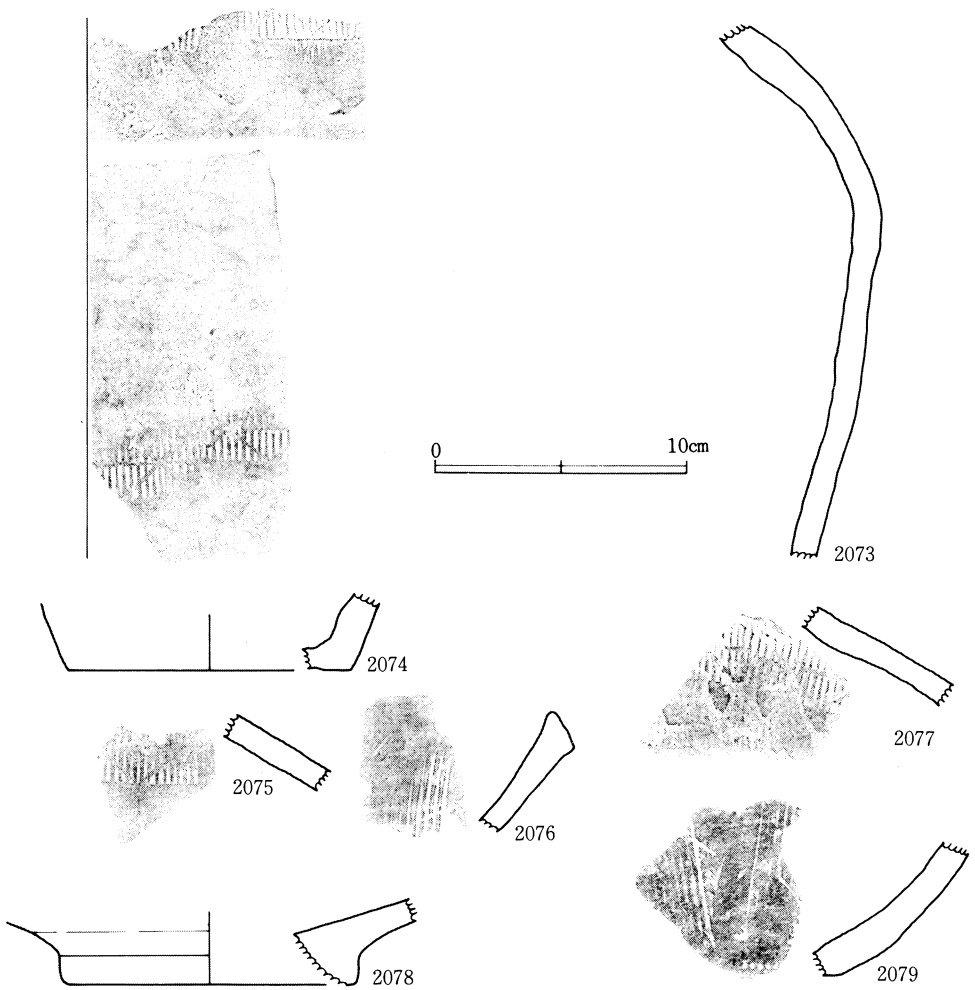
第41表　須恵器一覧表(2)　　(単位　cm)

番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考	番号	種	出土区層	口径	高さ	底径	備考
2014	甕	27F-2	14				2047	甕	13H-2				
2015	〃	17D-2	23	34.4	15	亀山焼	2048	〃	32I -1				
2016	〃	10D-2	20				2049	〃	24H-2				
2017	〃	8E-2					2050	〃	30F-2				
2018	〃	13E-1					2051	〃	30F-2				
2019	〃	22D-1					2052	〃	11F-2				
2020	〃	23IP1					2053	〃	表　採				
2021	〃	30I -2					2054	〃	27I -2				
2022	〃	7D-2b					2055	鉄鉢	31G-2	19			
2023	〃	31G-2					2056	〃	25J -2	15			
2024	〃	29J -2					2057	擂鉢	28F-2	22.5	10	14.3	
2025	〃	21C-1					2058	〃	22D-1				
2026	〃	表　採					2059	〃	17F-1			12.1	
2027	〃	11F-1					2060	〃	24H-1				
2028	〃	26H-2					2061	〃	17F-9	39.8			
2029	〃	25E-1					2062	〃	16G-1				
2030	〃	31H-1					2063	鉢	18D-1				
2031	〃	28H-1					2064	〃	17J -1				
2032	〃	8H-3					2065	〃	25I -2				亀山焼
2033	〃	23D-1					2066	〃	28F-1	19.2			
2034	〃	11F-3					2067	〃	16G-2	24.2			
2035	〃	31I -1					2068	〃	15H-1			18	
2036	〃	9I -3					2069	〃	18H-1				
2037	〃	31I -2					2070	擂鉢	25, 26G				
2038	〃	31I -2					2071	不明	表　採	28.6			
2039	〃	29G-2					2072	不明	29E-2				
2040	〃	26H-2					2073	甕	表　採				常滑焼
2041	〃	9H-2					2074	壺	21F-1			11.2	
2042	〃	29J -1					2075	甕	6J -2				常滑焼
2043	〃	10D-1					2076	擂鉢	23D-2				備前焼
2044	〃	KM59					2077	甕	17D-2				常滑焼
2045	〃	10I -1					2078	壺	10J -1			11.6	
2046	〃	31K-1					2079	擂鉢	24D-2				

第42表　須恵器一覧表(3)・陶器一覧表　　(単位　cm)

(4)陶器　　(第267図)

2073は常滑焼の大甕である。最大腹径は63cmあり，なだらかな曲線で肩部を形成している。外面は茶褐色を呈し，肩の上部は自然釉が粒状に付着している。肩の上部と下部にそれぞれ同一の押印文様がある。内面は暗褐色を呈し，輪積み痕をふさぐように粘土をすり付けナデている。**2075**及び**2077**も同様の押印文様が外面にあり，肩部の上部に相当する破片と考えられる。**2074**は胴部が直立に近い立ち上がりであり、外面は回転ヘラ削りが施され，内面はナデ調整が行なわれている。**2076**は備前焼の擂鉢である。口縁は内弯気味に立ち上がり，上部になるほど厚くなる。口縁の断面は三角形状になる。内外面とも細いハケ目調整が行なわれ，内面には条線がある。条線の単位は不明。**2078**は高台の部分である。外面は回転ヘラ削りによって整形されている。胎土は密であり焼成は堅緻である。**2079**は内弯状に立ち上がる擂鉢である。内外面ともナデ調整が行なわれ，内面には，条線が施されている。条線の単位は不明である。胎土は粗いが焼成は堅緻である。



第267図　陶器

(5) 磁器

磁器には青磁・白磁・青白磁がある。

① 青磁

碗は６種類に分かれる。１類は直線的に外へ開く口縁部をもつもので，胎土・底の違いなどによって２つに分ける。a は蛇の目高台をもつもので，黄緑色を呈する。b は平底・高台付きのもので，口縁は玉縁状を呈するものがある。２類は内面・外面ともクシ描き文などが描かれるもので，内底と立ちあがりの境に段を有する。３類は内反ぎみの器形をしており，低い高台が付く。内面に花文のあるもの（a 類），雲文のあるもの（b 類），無文のもの（c 類）がある。４類は口縁がやや外反し，内底部の釉がかきとられるもので，高台部分は露胎である。５類は内反ぎみの器形をしており，高台は低い。高台内面には釉がかからず，体部外面に片彫りによるしのぎ蓮弁がみられる。蓮弁の間にクシ描きのあるものもある。６類は蓮弁が丸くなり口縁はやや外反する。畳付部分を除き釉がかかっている。**2119**は内底部の釉が一部とけている。

皿は４種類に分かれる。１類は直線的に外へ開く口縁部をもつが，やや外反するもの（b）もある。底部付近は露胎となる。２類は安定した平底から外へ開き，屈曲して上方へ立ち上る。下半部は露胎で，内面にくし描き文がかかれる。灰色がかった釉がかかっている。３類も２類

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
2080	28I -2	碗	1 a		15E-2	碗	1 b		36K-2	碗	2		22H-2	碗	3
2081	24J -2	〃	〃		23I -1	〃	〃		表　採	〃	〃		23B-1	〃	〃
2082	11E-1	〃	〃		24F-1	〃	〃		9G-2a	〃	〃		24I -1	〃	〃
2083	8G-2	〃	〃		26G-2	〃	〃	2089	9 G-1	〃	3 a		27J -2	〃	〃
	9D-2	〃	〃		27G-1	〃	〃	2090	30H-1	〃	〃		29D-2	〃	〃
	11D-溝	〃	〃		29H-2	〃	〃	2091	11D-1	〃	〃		29・30G-2	〃	〃
	12E溝	〃	〃		表　採	〃	〃	2092	7F-1	〃	〃		29H-1	〃	〃
	12F-p6	〃	〃	2088	8D~G-1	〃	2		7G-1	〃	〃		29J -2	〃	〃
	23E-2	〃	〃		7H-1	〃	〃		7G-1	〃	〃		29K-1	〃	〃
2084	25J -2	〃	1 b		8E-2b	〃	〃		7J -1	〃	〃		30G-1	〃	〃
2085	25H-2	〃	〃		9H-2	〃	〃		8D-2b	〃	〃		30H-1	〃	〃
2086	10I -2	〃	〃		13G-1	〃	〃		8·10F-2	〃	〃		30H-1	〃	〃
2087	14H-1	〃	〃		13HI-2	〃	〃		8G-1	〃	〃		34I -1	〃	〃
	8F-2	〃	〃		16F-2	〃	〃		9D-2c	〃	〃	2093	9G-1	〃	3 c
	9D-2	〃	〃		18I -1	〃	〃		11N-1	〃	〃	2094	17D-2	〃	〃
	9E-1	〃	〃		26J -2	〃	〃		12G-2	〃	〃	2095	7F-1	〃	〃
	9J -1	〃	〃		26J -2	〃	〃		12E溝	〃	〃	2096	9D-1	〃	〃
	11D-溝	〃	〃		35K-1	〃	〃		13HI-2	〃	〃	2097	26DE	〃	〃

第43表　青磁出土地区表(1)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	5H-1	碗	3c		25D-1	碗	3c		表　採	碗	3c		28K-2	碗	4
	5H-1	〃	〃		25G-2	〃	〃	2098	24D-2	〃	4		29G-1	〃	〃
	8F2c	〃	〃		25I -1	〃	〃	2099	28I -2	〃	〃		30D-1	〃	〃
	8·10F2	〃	〃		25I -1	〃	〃	2100	8D-2a	〃	〃		30F-2	〃	〃
	8·10F2	〃	〃		26B-2	〃	〃	2101	23D-2	〃	〃	2105	17G-1	〃	5
	9I -2	〃	〃		26B-2	〃	〃	2102	25G-2	〃	〃	2106	17F-2	〃	〃
	10D-2	〃	〃		26HI-2	〃	〃	2103	28I -2	〃	〃	2107	17D-2	〃	〃
	12D-1	〃	〃		26HI-2	〃	〃	2104	8F-1	〃	〃	2108	7D-2c	〃	〃
	12F-1	〃	〃		26HI-2	〃	〃		8DE-2	〃	〃	2109	17E-2	〃	〃
	12F-1	〃	〃		26JK-2	〃	〃		8F-2c	〃	〃	2110	30I -1	〃	〃
	13G-1	〃	〃		27D-1	〃	〃		9D-2b	〃	〃	2111	16G-2	〃	〃
	13G-1	〃	〃		27F-1	〃	〃		9E-2c	〃	〃	2112	16G-2	〃	〃
	13H-1	〃	〃		27F-1	〃	〃		9E-2c	〃	〃	2113	17F	〃	〃
	13H-1	〃	〃		27F-1	〃	〃		11D-1	〃	〃	2114	9D-2b	〃	〃
	14D-1	〃	〃		27H-2	〃	〃		15E-2	〃	〃	2115	21J-P12	〃	〃
	14D-1	〃	〃		27H-2	〃	〃		15G-1	〃	〃	2116	10F-2c	〃	〃
	14D-1	〃	〃		27I -1	〃	〃		16H-1	〃	〃	2117	22JK-2	〃	〃
	14D-1	〃	〃		27I -1	〃	〃		17D-2	〃	〃		表　採	〃	〃
	14F-1	〃	〃		28I -1	〃	〃		17E-1	〃	〃		7E-2	〃	〃
	14F-1	〃	〃		27K-1	〃	〃		18D-2	〃	〃		7F-2	〃	〃
	16F-2	〃	〃		30Kp2	〃	〃		21J -1	〃	〃		7H-1	〃	〃
	16F-2	〃	〃		33H-2	〃	〃		22I -1	〃	〃		8D-3	〃	〃
	18I -1	〃	〃		35J -2	〃	〃		23E-1	〃	〃		8DE-2	〃	〃
	18I -1	〃	〃		36J -2	〃	〃		23J -1	〃	〃		〃	〃	〃
	21J -1	〃	〃		表　採	〃	〃		24F-2	〃	〃		8DG-1	〃	〃
	21K-2	〃	〃		南地区表　採	〃	〃		24I -1	〃	〃		8E-1	〃	〃
	21K-2	〃	〃		表　採	〃	〃		25H-2	〃	〃		8F-1	〃	〃
	22D-2	〃	〃		〃	〃	〃		25K-1	〃	〃		〃	〃	〃
	22H-1	〃	〃		〃	〃	〃		26D-1	〃	〃		〃	〃	〃
	22K-2	〃	〃		〃	〃	〃		26K-2	〃	〃		8G-1	〃	〃
	23E-2	〃	〃		〃	〃	〃		27H-1	〃	〃		〃	〃	〃
	23E-2	〃	〃		南地区表　採	〃	〃		27J -1	〃	〃		〃	〃	〃
	24I -1	〃	〃		表　採	〃	〃		27・28G-2	〃	〃		〃	〃	〃

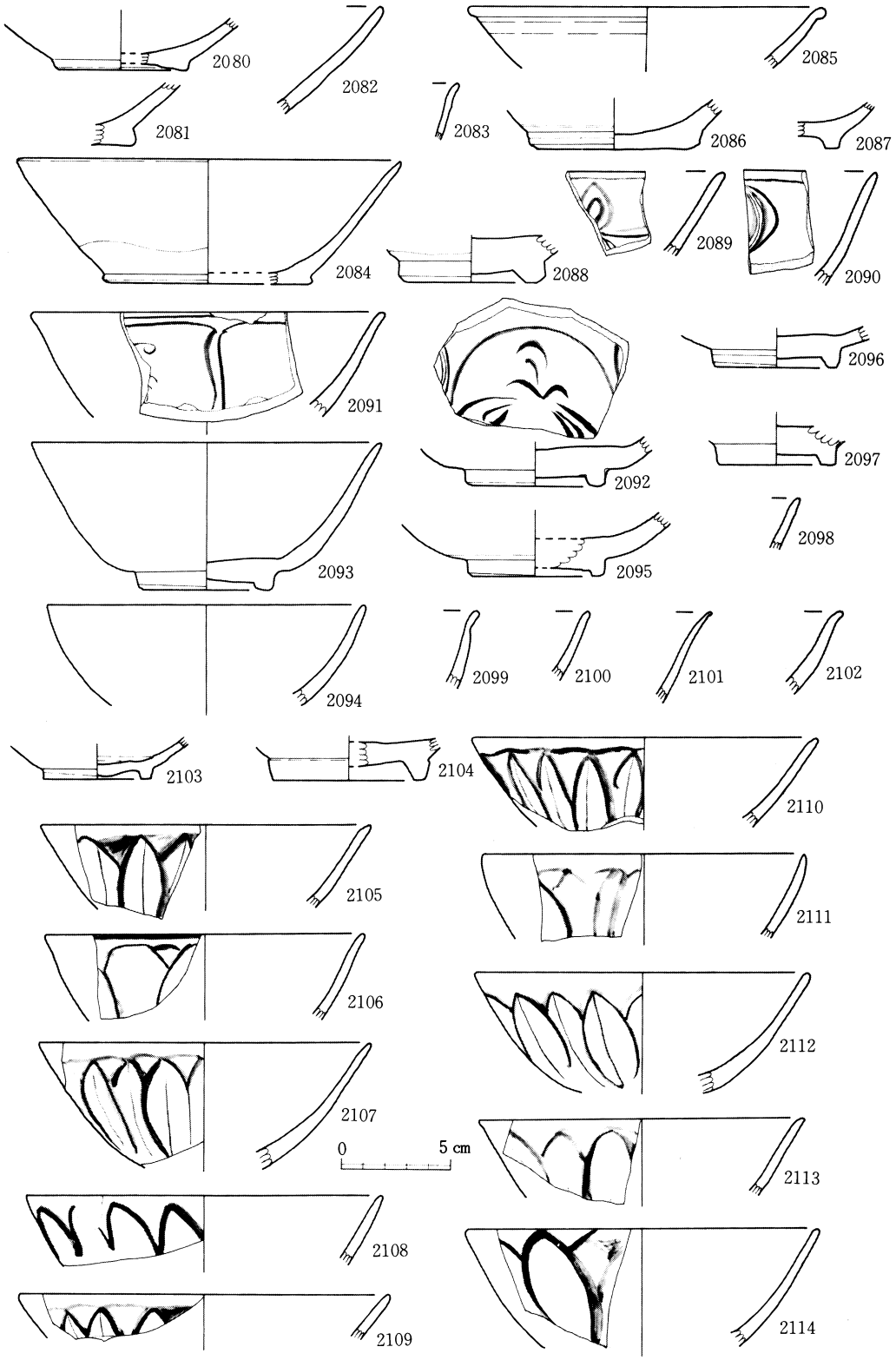
第44表　青磁出土地区表(2)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	8 G-1	碗	5		12F-P6	碗	5		16E-2	碗	5		17G-1	碗	5
	〃	〃	〃		12F-1	〃	〃		〃	〃	〃		17H-1	〃	〃
	8 H-1	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	9D-2b	〃	〃		〃	〃	〃		16F-2	〃	〃		17J	〃	〃
	〃	〃	〃		12F-P9	〃	〃		〃	〃	〃		18D-1	〃	〃
	9E-2c	〃	〃		12G-2	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	9F-2c	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	9 G-1	〃	〃		12H-1	〃	〃		〃	〃	〃		18D-2	〃	〃
	9 H-2	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	9H-P6	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		18E-1	〃	〃
	9 H-1	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	9 I -1	〃	〃		13E-1	〃	〃		〃	〃	〃		18E-2	〃	〃
	9 J -1	〃	〃		13F-2	〃	〃		16G-1	〃	〃		18I -1	〃	〃
	9 J -2	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		19H-1	〃	〃
	10D-2	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		20H-2	〃	〃
	〃	〃	〃		14F-1	〃	〃		16G-2	〃	〃		〃	〃	〃
	〃	〃	〃		〃	〃	〃		16H-1	〃	〃		20I -1	〃	〃
	〃	〃	〃		〃	〃	〃		16I -1	〃	〃		21D-1	〃	〃
	10E-1	〃	〃		〃	〃	〃		16J -1	〃	〃		21F-1	〃	〃
	〃	〃	〃		15D-1	〃	〃		17D-2	〃	〃		21G-1	〃	〃
	10E-2c	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		21H-1	〃	〃
	〃	〃	〃		15E-1	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	10G-1	〃	〃		15E-2	〃	〃		17E-1	〃	〃		〃	〃	〃
	10H-2	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	10I -1	〃	〃		〃	〃	〃		17E-2	〃	〃		21I -1	〃	〃
	〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		21J -1	〃	〃
	10I -2	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	11D-1	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		22E-1	〃	〃
	〃	〃	〃		15F-1	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	11F-1	〃	〃		〃	〃	〃		17F-1	〃	〃		〃	〃	〃
	〃	〃	〃		15D-畦	〃	〃		〃	〃	〃		22F-1	〃	〃
	11F-2	〃	〃		16D-2	〃	〃		17F-2	〃	〃		22G-1	〃	〃
	12F-P6	〃	〃		16E-1	〃	〃		17G-1	〃	〃		〃	〃	〃

第45表　青磁出土地区表(3)

番号	出土区層	器種	類	番品	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	22H-2	碗	5		26H-2	碗	5		31E-2	碗	5		表　採	碗	5
	22HI-2	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	〃	〃	〃		26I -2	〃	〃		31F-2	〃	〃		〃	〃	〃
	22I -1	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
	23E-2	〃	〃		〃	〃	〃		31G-1	〃	〃		〃	〃	〃
	23F-1	〃	〃		〃	〃	〃		31K-1	〃	〃		〃	〃	〃
	23G-1	〃	〃		26J -2	〃	〃		32K-1	〃	〃		〃	〃	〃
	23・24G-2	〃	〃		26J・K-2	〃	〃		33H-1	〃	〃	2118	11E-P7	〃	6
	23H-1	〃	〃		27・28D-2	〃	〃		33H-2	〃	〃	2119	10E-1	〃	〃
	〃	〃	〃		27H-1	〃	〃		33J -1	〃	〃		9 I -1	〃	〃
	22I -1	〃	〃		27I -1	〃	〃		34K-1	〃	〃		12D-1	〃	〃
	23J -1	〃	〃		〃	〃	〃		34K-2	〃	〃	2120	16D-1	皿	1 a
	〃	〃	〃		27J -1	〃	〃		〃	〃	〃	2121	27・28G-2	〃	〃
	24D-1	〃	〃		27K-2	〃	〃		35J -1	〃	〃	2122	32J -1	〃	1 b
	〃	〃	〃		28D-1	〃	〃		35K-1	〃	〃	2123	27K-1	〃	2
	22C-1	〃	〃		28E-2	〃	〃		35K-2	〃	〃	2124	24G-2	〃	〃
	23B-1	〃	〃		28E-1	〃	〃		35L-2	〃	〃	2125	29-30G-2	〃	〃
	23C-1	〃	〃		〃	〃	〃		36J -1	〃	〃	2126	11F-1	〃	〃
	24F-2	〃	〃		28G-1	〃	〃		36J -2	〃	〃	2127	9 F-1	〃	〃
	24H-2	〃	〃		28H-2	〃	〃		36K-1	〃	〃	2128	36J -2	〃	〃
	〃	〃	〃		28I -1	〃	〃		〃	〃	〃	2129	31K-1	〃	3
	〃	〃	〃		28I -2	〃	〃		36K-2	〃	〃	2130	11G-1	〃	〃
	〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃	2131	31F-2	〃	4
	24J -1	〃	〃		28J -2	〃	〃		36L-2	〃	〃	2132	25J -2	〃	〃
	24J -2	〃	〃		28K-1	〃	〃		〃	〃	〃	2133	30H-1	〃	〃
	25D-1	〃	〃		29C-1	〃	〃		37L-1	〃	〃		9 I -2	〃	〃
	25I -2	〃	〃		29D-2	〃	〃		37N-1	〃	〃				
	25J -1	〃	〃		29H-1	〃	〃		表　採	〃	〃				
	〃	〃	〃		29J -2	〃	〃		〃	〃	〃				
	17K-1	〃	〃		30D-1	〃	〃		〃	〃	〃				
	26D-1	〃	〃		30G-2c	〃	〃		〃	〃	〃				
	26G-2	〃	〃		30HI-1	〃	〃		〃	〃	〃				
	26H・I-2	〃	〃		30I -1	〃	〃		〃	〃	〃				

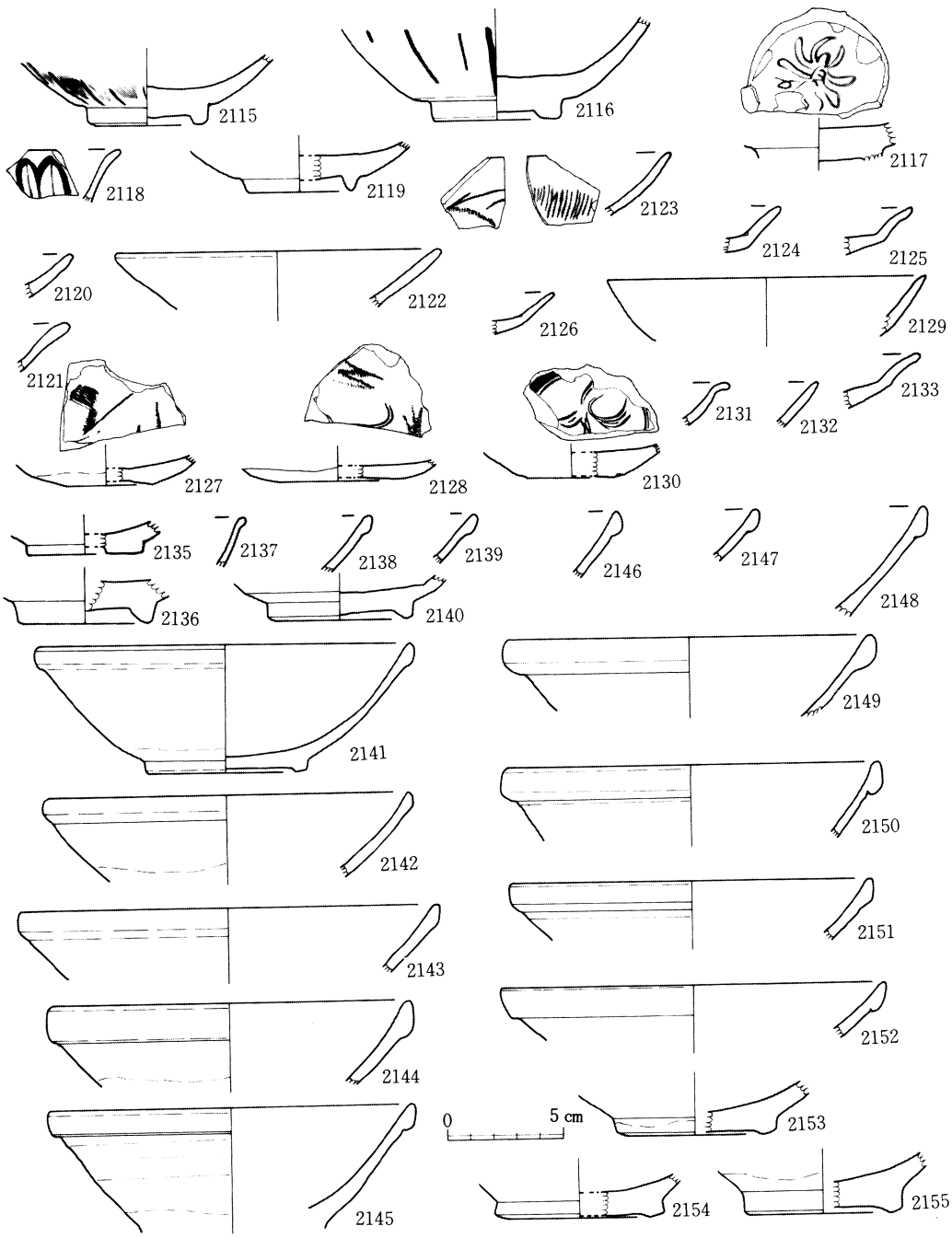
第46表　青磁出土地区表(4)


2080
2081
2082
2083
2084
2085
2086
2087
2088
2089
2090
2091
2092
2093
2094
2095
2096
2097
2098
2099
2100
2101
2102
2103
2104
2105
2106
2107
0
5 cm
2108
2109
2110
2111
2112
2113
2114

第268図　青磁(1)

に似た器形をしており，内底部にくし描き文が描かれる。やや明るい緑色釉がかかる。４類は外反する口縁をもち，底部付近は露胎である。内面かきとり皿である。

皿１～４類はそれぞれ埦１～４類に対応するもので，１類が越州窯系，２類が同安窯系、３類～６類が龍泉窯系のものである。



第269図　青磁(2)・白磁(1)

②　白磁

埦が７種類ある。１類は口縁部が玉縁状となるもので，胎土，玉縁の形態等によって３種に分けられる。２類は端反り口縁，３類は直立口縁で胴下半部は露胎である。４類は外反する口縁で低い高台をもつ。５類は内底部にクシ描きがあり，６類は口はげ口縁である。７類も外反する口縁で，下半部は釉がかからない。皿は４種類ある。１類は下半部が露胎である。２類は外底部の釉がかきとられる。５類は内底部に蓮花文が描かれ，６類は口はげ口縁である。

③　青白磁

壺・合子蓋・壺蓋がある。蓋は天井部に蓮花文などが描かれている。

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
2135	11F-2c	碗	1 a		9 E-1	碗	1 c		23F-2	碗	1 c	2160	23K-2 24I -2	碗	4
2136	9 D-2	〃	〃		10F-2c	〃	〃		〃	〃	〃	2161	18D-1	〃	〃
2137	23E-1	〃	〃		10D-1	〃	〃		23H-1	〃	〃	2162	16H-1	〃	〃
2138	8DE-2	〃	1 b		10D-2	〃	〃		23J -1	〃	〃		16J -2	〃	〃
2139	9E-2 b	〃	〃		10D-1	〃	〃		24D-2	〃	〃		17J -1	〃	〃
2140	8H-3b	〃	1b′		10D-2	〃	〃		24E-2	〃	〃		22H-1	〃	〃
2141	8D-2b 7E-2b 8G古道跡 9 F-2	〃	1 b		12F-1	〃	〃		24H-1	〃	〃		24J -2	〃	〃
					12G-2	〃	〃		25K-2	〃	〃		28D-2	〃	〃
2142	23E-2	〃	〃		13F-2	〃	〃		26H-2	〃	〃	2163	35J -2	〃	5
2143	24C-2	〃	〃		14D-1	〃	〃		26H-2	〃	〃		26HI-2	〃	〃
2144	28K-2	〃	1 c		15E-2	〃	〃		26HI-2	〃	〃		10D-1	〃	〃
2145	20 -1	〃	〃		16E-2	〃	〃		26JK-2	〃	〃	2164	15J -2	〃	6
2146	21F-1	〃	〃		16F-2	〃	〃		28D-1	〃	〃	2165	14D-1	〃	〃
2147	9E-2c	〃	〃		17D-1	〃	〃		28I -1	〃	〃	2166	9 E-2	〃	〃
2148	22F-2	〃	〃		17E-2	〃	〃		29F-1	〃	〃	2167	23H-2	〃	〃
2149	23F-2	〃	〃		17H-1	〃	〃		表　採	〃	〃	2168	8 F-1	〃	〃
2150	30K-1	〃	〃		17K-1	〃	〃		〃	〃	〃		15D-2	〃	〃
2151	21I -1	〃	〃		19H-1	〃	〃	2156	28D-1	〃	2		7 D-1	〃	〃
2152	25～26G	〃	〃		19H-1	〃	〃	2157	10F-2c	〃	〃		7 E-1	〃	〃
2153	8E-2b	〃	〃		19J -1	〃	〃		16G-1畦	〃	〃		8D-2c	〃	〃
2154	22D-1	〃	〃		21C-1	〃	〃		表　採	〃	〃		8 G-1	〃	〃
2155	9G-2c	〃	〃		22D-2	〃	〃		〃	〃	〃		8 G-1	〃	〃
	8 F-1	〃	〃		22F-2	〃	〃	2158	21D-1	〃	3 a		8 H-1	〃	〃
	9 I -1	〃	〃		22G-1	〃	〃	2159	32H-2	〃	3 c		9DG-1	〃	〃
	9 H-2	〃	〃		22K-1	〃	〃		11J -1	〃	〃		9G-2c	〃	〃

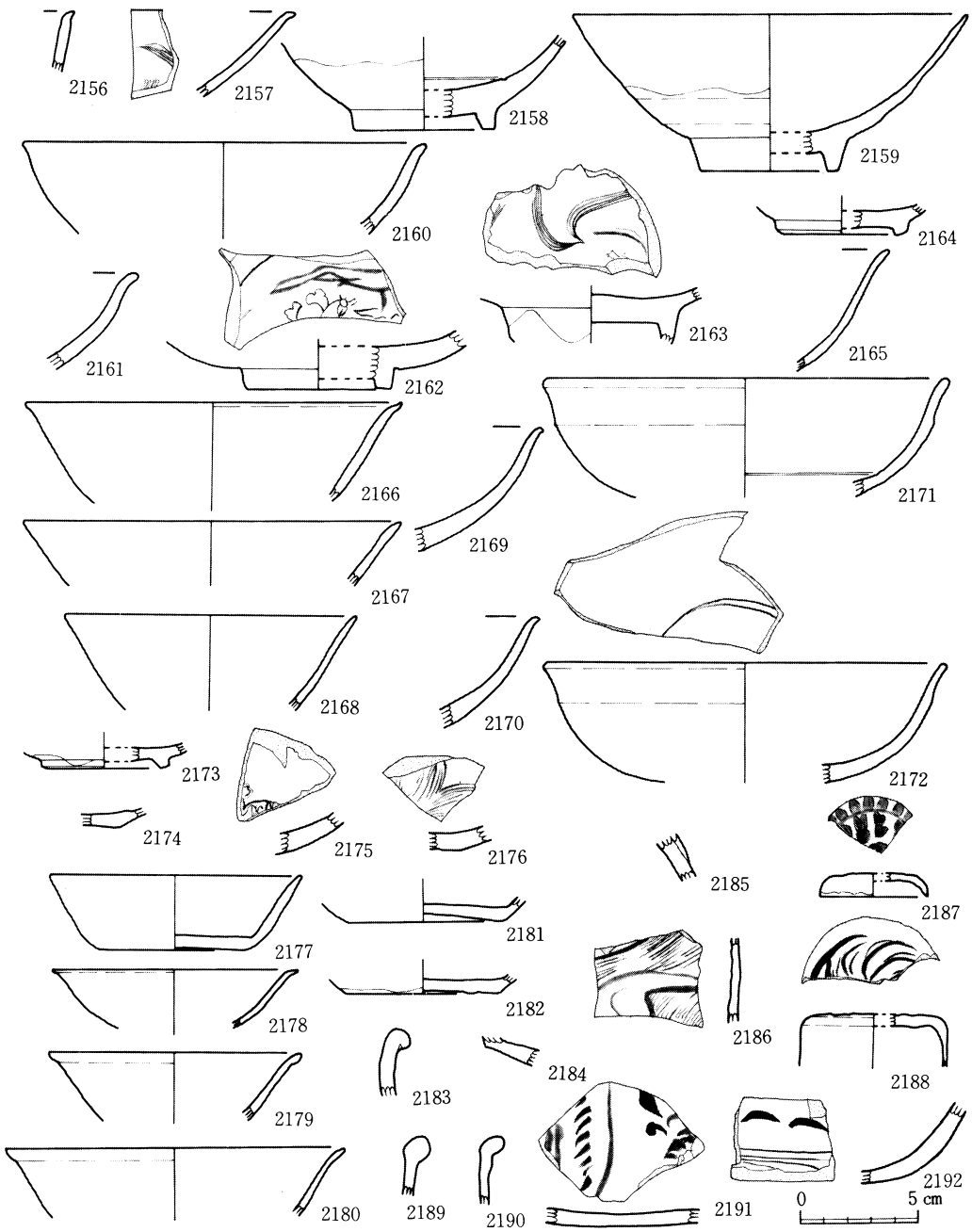
第47表　白磁出土地区表(1)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	10G-2c	碗	6		17F-1	碗	6		33H-1	碗	6		8D·E-2	四耳壺	
	10G-2c	〃	〃		17G-1	〃	〃		34J-2	〃	〃		9J-2	〃	
	11F-1	〃	〃		17H-1	〃	〃		35K-2	〃	〃		15E-2	〃	
	12D-1	〃	〃		18D-2	〃	〃		35L-2	〃	〃		16F-2	〃	
	12E-溝	〃	〃		18I-1	〃	〃		36J-1	〃	〃		17E-1	〃	
	12F-1	〃	〃		19H-1	〃	〃		36J-2	〃	〃		23F-2	〃	
	12G-2	〃	〃		〃	〃	〃		36L-1	〃	〃		23J-1	〃	
	12H-1	〃	〃		20I-1	〃	〃		36L-2	〃	〃		24J-2	〃	
	13E-1	〃	〃		〃	〃	〃		37L-2	〃	〃		25I-2	〃	
	13F-1	〃	〃		20以南表採	〃	〃		表採	〃	〃		26I-1	〃	
	13F-2	〃	〃		21J-1	〃	〃		〃	〃	〃		31E-2	〃	
	13K-2	〃	〃		22J-2	〃	〃		〃	〃	〃		36J-1	〃	
	14D-1	〃	〃		23・24G-2	〃	〃		〃	〃	〃	2186	17I-1	青白磁壺	
	14F-1	〃	〃		23I-1	〃	〃	2169	24I·P-1	〃	7		10F-1	〃	
	15D-1	〃	〃		23J-1	〃	〃	2170	〃	〃	〃		11F-1	〃	
	15E-1	〃	〃		24D-1	〃	〃	2171	〃	〃	〃		16G-1	〃	
	15E-2	〃	〃		24J-1	〃	〃	2172	〃	〃	〃		17D-2	〃	
	15E-2	〃	〃		25・26G-2	〃	〃		10F-2c	〃			17I-1	〃	
	15E-2	〃	〃		25J-2	〃	〃	2173	22J-2	皿	1c		18D-1	〃	
	16D-1	〃	〃		26H-2	〃	〃	2174	22K-2	〃	2		18I-1	〃	
	16D-2	〃	〃		26J-2	〃	〃	2175	KM59-表	〃	〃	2187	28K-2	合子蓋	
	16E-2	〃	〃		27C-2	〃	〃		28J-2	〃	〃	2188	15D-1	壺蓋	
	16F-1	〃	〃		27・28G-2	〃	〃		35D-1	〃	〃		17D-2	〃	
	16F-2	〃	〃		27J-1	〃	〃	2176	12E-溝	〃	5	2189	29G-2	褐釉陶器大皿	
	16F-2	〃	〃		〃	〃	〃	2177	17E-1	〃	6	2190	29I-1	〃	
	16G-1	〃	〃		28F-1 31G-1	〃	〃	2178	17D-1	〃	〃	2191	26I-2	〃	
	16G-2	〃	〃		28H-2	〃	〃	2179	11F-1	〃	〃	2192	26K-P6	〃	
	〃	〃	〃		28I-2	〃	〃	2180	38I-1	〃	〃		21G-1	〃	
	16I-1	〃	〃		29E-1	〃	〃	2181	35L-2	〃	〃		24E-2	〃	
	15G-1	〃	〃		29F-1	〃	〃	2182	19H-1	〃	〃		25G-1	〃	
	17D-2	〃	〃		29K-1	〃	〃	2183	28D-1	青磁四耳壺			26H-2	〃	
	17E-1	〃	〃		〃	〃	〃	2184	24J-1	〃			8F-1	壺	
	〃	〃	〃		32I-1	〃	〃	2185	15J-2	〃			33I-1	〃	

第48表　白磁出土地区表(2)

(6)褐釉陶器

口縁部が玉縁状を呈する盤で，灰緑色の釉がかかっているが，外面底部は露胎である。内底部には飴釉で半月形，横線などの文様が描かれている。童子山窯のものである。



第270図　白磁(2)・青白磁・褐釉陶器

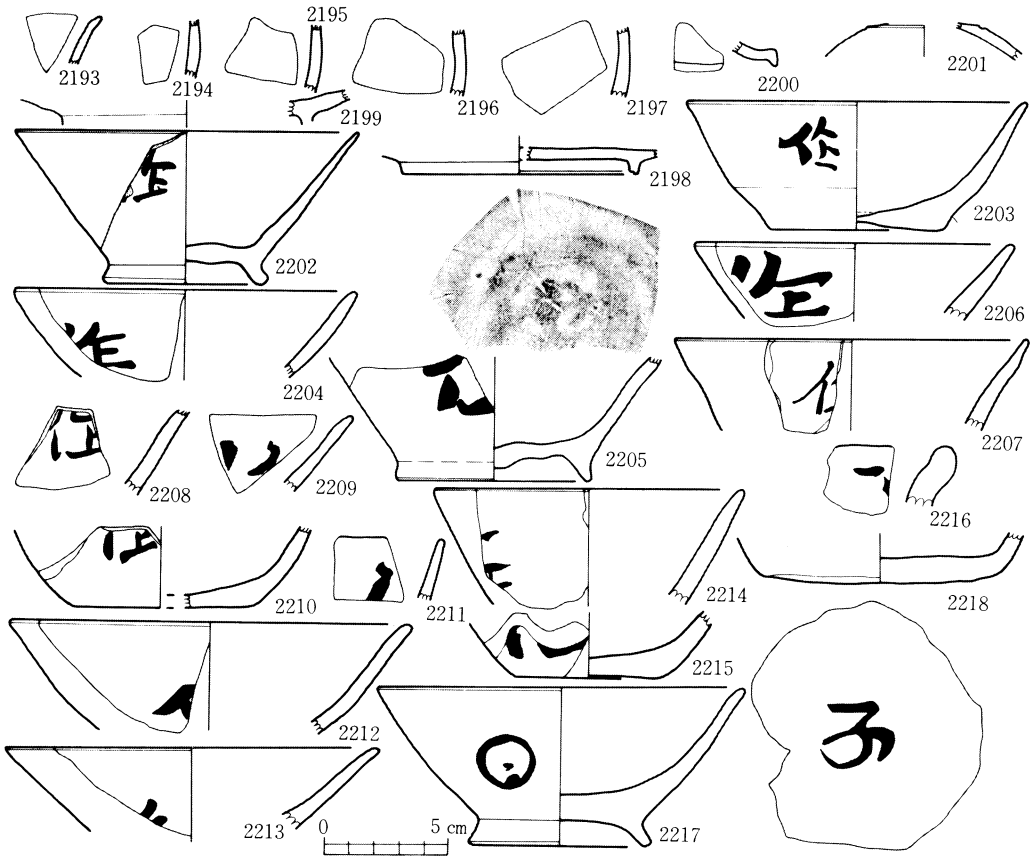
(7)　緑釉土器（第271図）

施釉土器のうち緑釉土器８点，二彩土器１点が出土した。

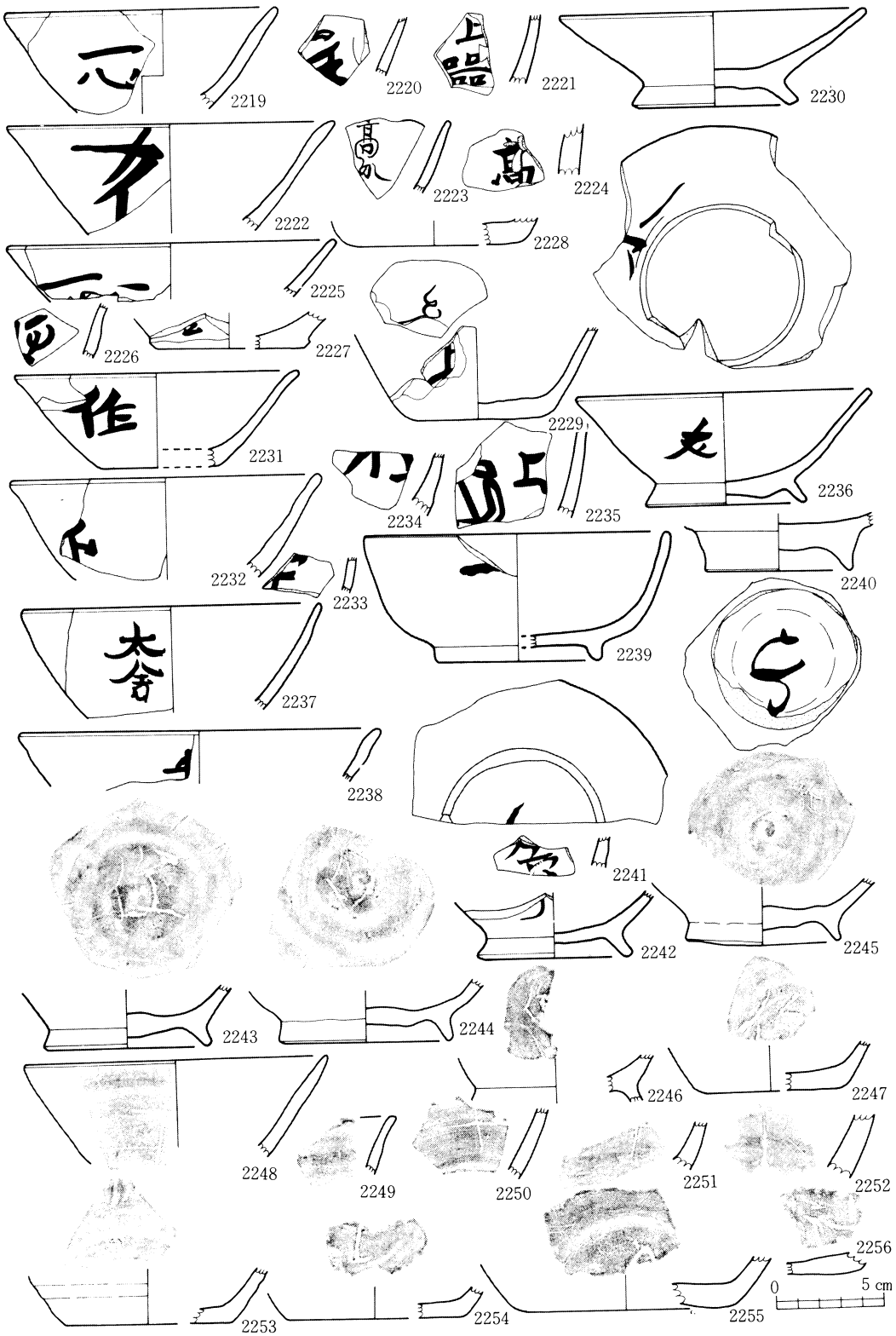
2193は口唇部が舌状にすぼまる埦で，白色の胎土は土師質に焼ける。内外とも緑釉が薄くかかる。**2194**～**2197**は，埦破片である。胎土は**2193**と同様，内外に緑釉がかかる。色調はやや淡い緑色を呈する。**2198**，**2199**はそれぞれ復元底径9.3cm，10cmを測る皿である。いずれも胎土は白色で，土師質に焼ける。発色の良い緑釉が全体にかかり，微細貫入が入る。ことに**2198**の緑釉は良く胎土にもなじみ，光沢のある緑釉皿となっている。**2200**は器種が詳らかでない緑釉土器である。胎土，施釉，微細貫入，いずれも上記のものと同一である。**2201**は壺かと考えられる二彩土器で，白釉部に鉄釉で文様を画く。胎土は白色でやや硬質に焼けている。

(8)　墨書土器・刻書土器（第271図，272図）

墨書土器100点刻書土器15点が出土した。多くは「作」字が書かれてあり，「日」「子」「高分」「太舎」などと読めるもののほか，判読不能なものも多い。**2202**～**2242**は墨書土器で，そのうち**2231**～**2242**は内黒土師器，**2243**～**2256**は刻書土器である。墨書土器のうち**2202**～**2216**，**2231**～**2234**は「作」およびそれと推定される文字が書かれている。「作」字の２画目の縦画を短く丸めること，７画目の横画が５画目の縦画を乗せる形で書くのが特徴である。**2203**は**2202**



第271図　緑釉土器・墨書土器



第272図　墨書・刻書土器

と同様な筆致で埦の胴部に墨書する。底部は厚さが不均等なため焼成時に収縮して変形し，一部に割れを起こす。**2205**には「作」の刻書も付される。**2207**は細字で他と筆致が異なる。**2216**は甕の口縁内面に墨書する。**2218**は坏の外底に「子」，**2217**は「日」と推定され，**2219**は「一心」，**2223**は「高分」，**2224**は「高」と読め，**2221**は「作器」と思われる。内黒土師器の中で**2231**は「作」の周囲が黒色化する。**2232**は内面に丹が塗付され，**2236**はヘラ削りが施されている。**2235・2239**は外面ヘラ削りである。**2237**は明快に「太舎」と墨書する。刻書土器は見込み面の「作」字が極めて多く，焼成前に刻書され，胎土の盛り上りおよび焼成時の収縮による線の接着が見られる。書風は墨書土器とほぼ同様であるが，筆致は微妙に異なる。**2248**～**2252**は外面に「土」「十」「｜」，**2253**～**2256**は内面にハネまたは折レの文字あるいは記号を刻んでいる。

遺物番号	出土区層	種類	器形	備　考	遺物番号	出土区層	種類	器形	備　考	遺物番号	出土区層	種類	器形	備　考
2202	27K-2	土師	埦	作		26I -2	土師		作		15I -2	土師		高
2203		〃	〃	〃		26H-2	〃		〃		10G-3直上	〃		
2204	28H-2	〃	坏	〃		26FG-1	〃		〃		28K-2	〃		
2205	31J-P3	〃	〃	〃	2217	7D-2d	〃	埦	日		10I -2	〃	埦	
2206	26K-2	〃		〃	2218	9D-2c	〃	坏	子		26J -2	〃	〃	
2207	27H-2	〃		〃	2219	29-30G-1	〃		一心		30J -2	〃	〃	
2208	27G-P2	〃	坏	〃	2220	29I -2	〃				10E-1	〃	〃	
2209	31H-2	〃	〃	〃	2221	29F-2	〃		作器？		22J -1	〃	坏	
2210	30G-2	〃	〃	〃	2222	26F-P2	〃	坏			31I -2	〃	〃	
2211	31I -2	〃	〃	〃	2223	28H-P4	〃	〃	高分		8I-P4	〃	〃	
2212	29G-P1	〃	埦	〃	2224	32I -2	〃	〃	高		21C-1	〃	〃	
2213	8F-2c	〃	坏	〃	2225	27H-2	〃	〃			27H-P5	〃	〃	
2214	29I -2	〃	〃	〃 (No.1)	2226	29H-P13	〃	〃	日？		28J -2	〃		
2215	33J -1	〃	〃	〃	2227	12E-3直上	〃	〃			27J -2	〃		
2216	33H-2	〃	カメ	〃	2228	21C-1	〃	〃			26J -2	〃		
	29H-P6	〃	坏	〃	2229	16K-1	〃	〃			26J -2	〃		
	27G-2	〃	埦	〃	2230	29I -2	〃	埦	No.1		26J -2	〃		
	29I -2	〃	坏	〃		27H-2	〃	坏			29-30G-2	〃		
	35J -2	〃	〃	〃		27H-P10	〃	〃			25G-2	〃		
	30H-2	〃		〃		27F-P3	〃	〃			25I -2	〃		
	10H-1	〃		〃		26H-2	〃	埦	日		25H-2	〃		
	31I -1	〃		〃		9D-3直上	〃		日？		28H-2	〃		
	26I -2	〃		〃		26I -2	〃		日？		29G-2	〃		
	〃	〃		〃		36K-2	〃	カメ	日？		29G-2	〃		

第49表　墨書・刻書土器出土地区表(1)

遺物番号	出土区層	種類	器形	備　考	遺物番号	出土区層	種類	器形	備　考	遺物番号	出土区層	種類	器形	備　考
	12E	土師				27G-2	内黒	埦	作	2244	23D-2	土師	埦	作 刻書No.2
	D-2C	〃	カメ			27H-2	〃	〃	〃	2245	34K-2	〃	〃	〃 刻書
2231	31I -1	内黒	坏	作		25C-2	〃	〃	〃	2246	31J-P3	〃	坏	〃 〃
2232	26I -2	〃	埦	〃		13H-P8	〃	〃	作？	2247	25H-2	〃	〃	〃 〃
2233	31J-P4	〃	坏	〃		15F-P4	〃	〃	扌	2248	23J -2	〃		〃
2234	31 G-2	〃	埦	〃		27D-2	〃	〃		2249	22F-1	〃		〃 〃
2235	36 K-2	〃	〃	上？		25J-P6	〃	〃		2250	23F-2	〃		〃 〃
2236	27 K-2	〃	〃			29G-2	〃			2251	23H-1	〃		〃 〃
2237	29 F-2	〃	〃	太舎		26J -2	〃			2252	24E-2	〃		〃
2238	26 F-2	〃	〃	扌？		26FG-2	〃			2253	30F-2	〃	坏	〃
2239		〃	〃			17F-2	〃			2254	9D-2c	〃	〃	〃
2240	29I -2	〃	〃			建1-P4	〃			2255	27I -2	〃		〃
2241	26 J-2	〃	〃			26I -2	〃		作(丹)	2256	12E-3直上	〃		〃
2242	26 K-2	〃	〃		2243	28J -2	土師	埦	作 刻書No.2		25E-1	〃	カメ	〃
	29I -2	〃	〃	作										

第50表　墨書・刻書土器出土地区表(2)

(9) 陶硯（第273図）

硯は須恵質の円面硯２面と，須恵器蓋を転用した硯３面，合計５面出土した。

2257は復元径 9.8cmを測る須恵質の円面硯で，稜をもった外縁から，台脚に至る部位にも稜が巡る。台脚部は欠損しているが，残存部に幅1.4cmの透し部分が認められる。矩形の透しであろう。海部の深さは３mmを測る。**2258**は復元径11.6cmを測る須恵質の円面硯で，中央部が高くなり陸部，外周に海部がある。台脚は欠損するが，残存部に縦位のヘラ刻目があることから，透しのある台脚を持つものと思われる。**2259**～**2261**は須恵器蓋の転用硯である。陸部として使用した個所には磨耗部がみられ，また朱墨がわずかに付着しているのが認められる。

(10) 紡錘車（第273図）

2262～**2266**が土師器及び土師質の紡錘車で径5.6～7.2cmを測る。中央に孔を穿つが，**2263**は孔の両側に円形の窪みがある。**2262**，**2263**は土師器坏の転用，**2264**～**2266**は頭初より紡錘車として製作されたものである。

(11) 土錘（第273図）

2267～**2275**が土錘で全長3.5～4.5cm，幅1.1～1.7cmを測る。中央部がふくらむものと細身とがあり，縦位に孔を穿つ。いずれも土師質である。

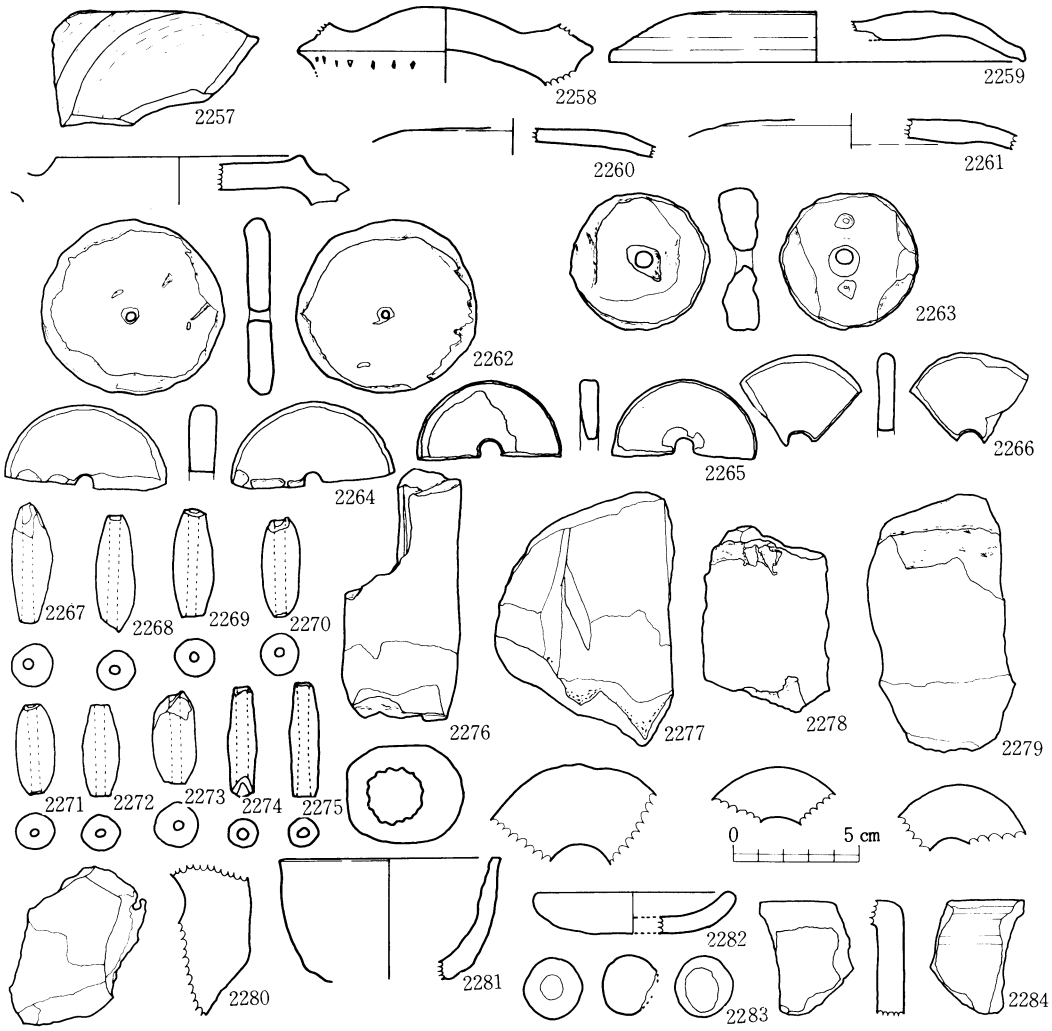
(12) ふいご口・坩堝（第273図）

2276～**2280**がふいご口で，土師質に焼けたものである。全長及び幅は不明であるが，中央部には孔があり，**2276**を除く他のふいご口の端部にはかなくそが付着し使用されたことがわかる。

2281，**2282**は坩堝で，器面には自然吹出釉が厚くかかる。器種は坏と皿である。

⑬　土弾・その他（第273図）

2283は径23cmを測る球形の土弾，**2284**は土師質に焼けるが，器種，用途は不明である。



第273図　土製品

遺物番号	出土区層	種類	備考	遺物番号	出土区層	種類	備考	遺物番号	出土区層	種類	備考	遺物番号	出土区層	種類	備考
2262	32J-1	紡錘車		2268	17E-1	土錘		2274	9G-1	土錘		2280	29D-1	ふいご羽口	
2263	16HI-2	〃		2269	30G-1	〃		2275	10E-1	〃		2281	29F-2	ルツボ	
2264	27J-2	〃		2270	11G-1	〃		2276	30G-2	ふいご羽口		2282	27F-1	〃	
2265	25H-P6	〃		2271	9G-2	〃		2277	8E-1	〃		2283	29H-3		No.1
2266	24I-2	〃		2272	31F-2	〃		2278	27E-1	〃		2284	28C-2		
2267	7D-2c	土錘		2273	10G-2	〃		2279	23C-1	〃					

第51表　土製品出土地区表

⑭ 石製品（第274図，275図）

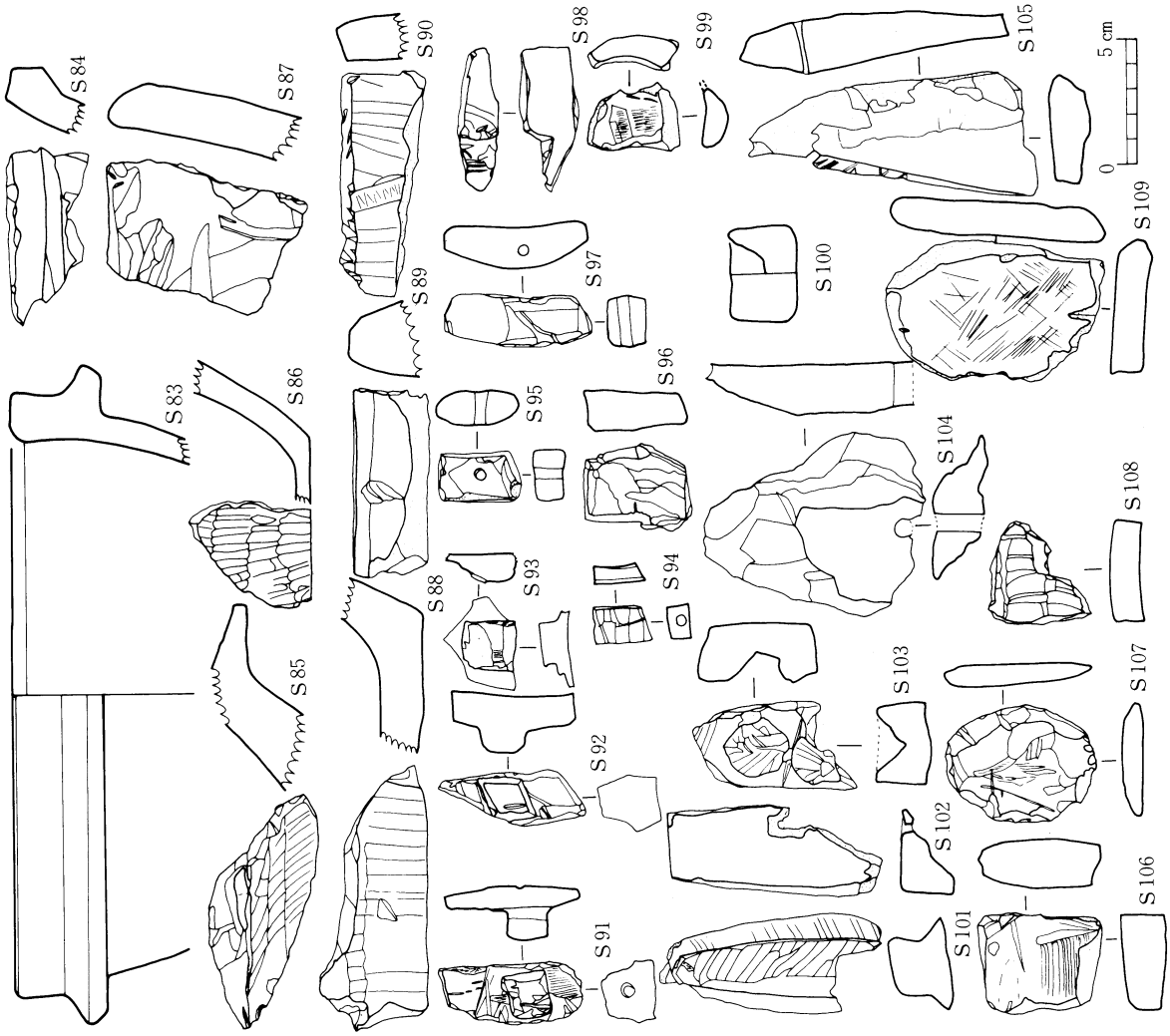
石製品には滑石製石鍋，滑石製有孔鈕付製品，同製有孔方形板等のほか，砥石が出土した。

S 83～S 90は滑石製石鍋である。このうちS 83は復元口径23.9cmを測り，断面が台形状の鍔状突帯が巡る。器面には煤が付着する。ノミ痕は縦位にある。

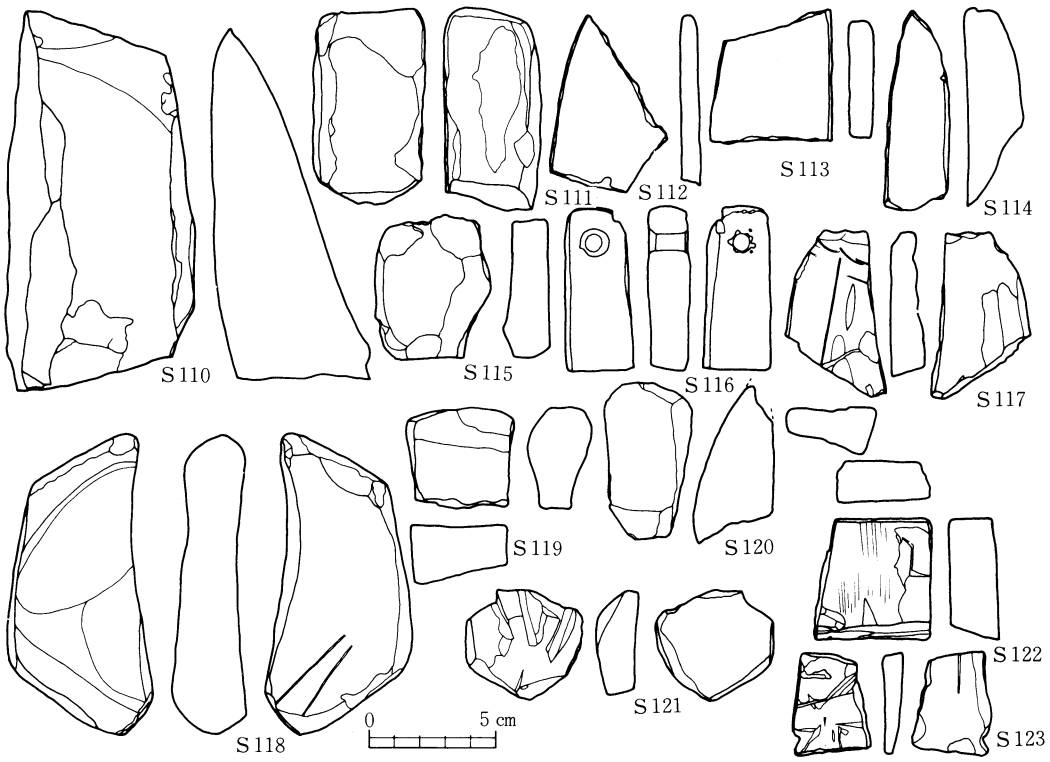
S 84は口縁部断面が三角形を呈するもので，煤が付着する。S 85～S 90は石鍋片である。

S 91は鈕に孔を穿つ有孔鈕付製品，S 92，S 93は鈕に孔の無いものである。S 94，S 95は長方形のものに孔を穿つ有孔方形板である。その他は円板状あるいは長方形に仕上げた製品である。ことに S 104 には中央部に孔を穿つが，この孔より欠損する。

S 110～S 123は砥石である。このうちS 110～S 117までは砂岩，S 118～S 121が凝灰岩，S 122，S 123がシルト岩である。形状は棒状，板状等があるが，端部に孔を穿つもの（S 116），放射状に数条の切込み溝を有するもの（S 121）もある。



第274図　石製品(1)—滑石製品



第275図　石製品（2）―砥石

遺物番号	出土区層	種類	備考	遺物番号	出土区層	種類	備考	遺物番号	出土区層	種類	備考	遺物番号	出土区層	種類	備考
S 83	16G -1	滑石	石鍋	S 93	23D -2	滑石	ツマミ	S 105	32I -2	滑石		S 115	8E-2C		砥石
S 84	31G -1	〃	〃	S 95	35A -1	〃		S 106	22J -2	〃		S 116	7D-2b		〃
S 85	20K -1	〃	〃	S 97	9G -1	〃		S 107	28B -2	〃	円盤	S 117	22JK-2		〃
S 86	31I -1	〃	〃	S 98	8-10F·2	〃		S 108	11F -1	〃		S 118	25G -2		〃
S 87	37M-2	〃	〃	S 99	26I -2	〃		S 109	5	〃	円盤	S 119	11P		〃
S 88	27I -2	〃	〃	S 100	9E·2- B	〃	容器	S 110	26E -2		砥石	S 120	8F-2c		〃
S 89	24G -2	〃	〃	S 101	9D -1	〃	舟	S 111	24F -2		〃	S 121	29D -2		〃
S 90	22E -2	〃	〃	S 102	27I-2-No.2	〃	〃	S 112	26H -2		〃	S 122	28H -2		〃
S 91	21F -2	〃	ツマミ	S 103	4D-2b	〃	〃	S 113	23D -2		〃	S 123	28·29C		〃
S 92	9I -1	〃	〃	S 104	10F -2	〃		S 114	10F-2C		〃				

第52表　石製品出土地区一覧表

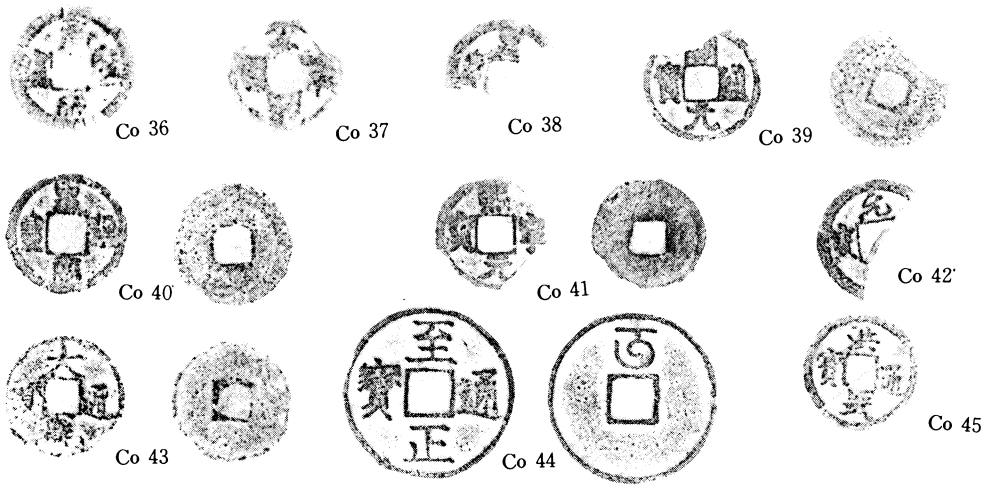
⑮ 古銭（第276図）

Co36～Co38は建物3に出土したものである。Co36, Co38は「皇宋通寶」で径2.6cmを測る。書体は篆書体である。Co39は径2.4cmを測る隷書体の「開元通寶」。Co40は径2.5cmを測る篆書体の「皇宋通寶」。Co41は径2.3cmを測る楷書体の「熙寧元寶」である。

Co42は半欠であるが，残存部から「元祐通寶」で書体は行書体である。Co43は径2.3cmを測るもので楷書体の「大観通寶」である。

Co44は径3.4cmを測る「至正通寶」で背上に「𠂉」がある。Co45は無背の「洪武通寶」である。

他に古銭片が出土したが判読不可能であった。

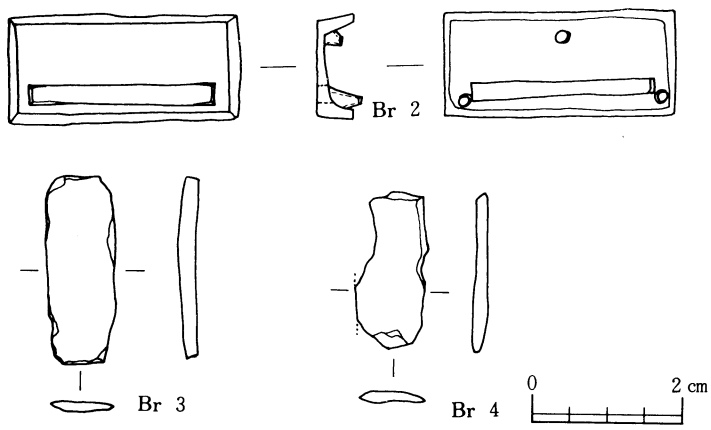


第276図　古　銭

⑯ 帯金具および青銅製品（第277図）

Br 2 は建物 7の柱 6 にあった銅製帯金具である。横 3 cm，縦1.4cmを測る横長の巡方で，下方に横 2.4cm，縦0.2 cmの透し穴がある。やや裏側が広がっている。裏面の三方に鋲足を取り付けた表金具である。

顕著ではないが，表面の一部に黒漆膜が残っている。Br 3 が25H区の包含層から，Br 4 が27 I 区の包含層から出土した銅製品で，長さ 2.5cm，幅 0.8cmほどを測る。似た形をしており，裏面は平坦で，表面はややふくらんでいる。



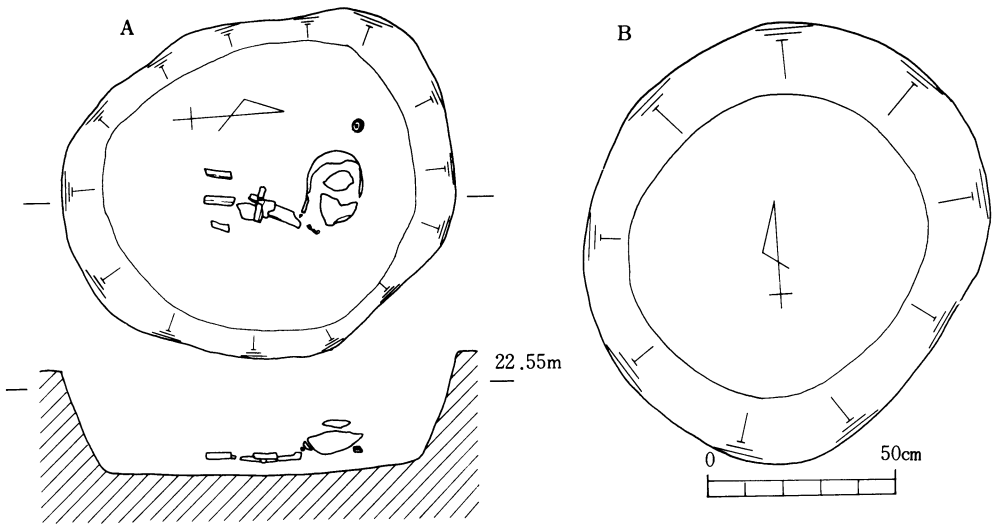
第277図　帯金具および青銅製品

第６章　室町・安土桃山時代

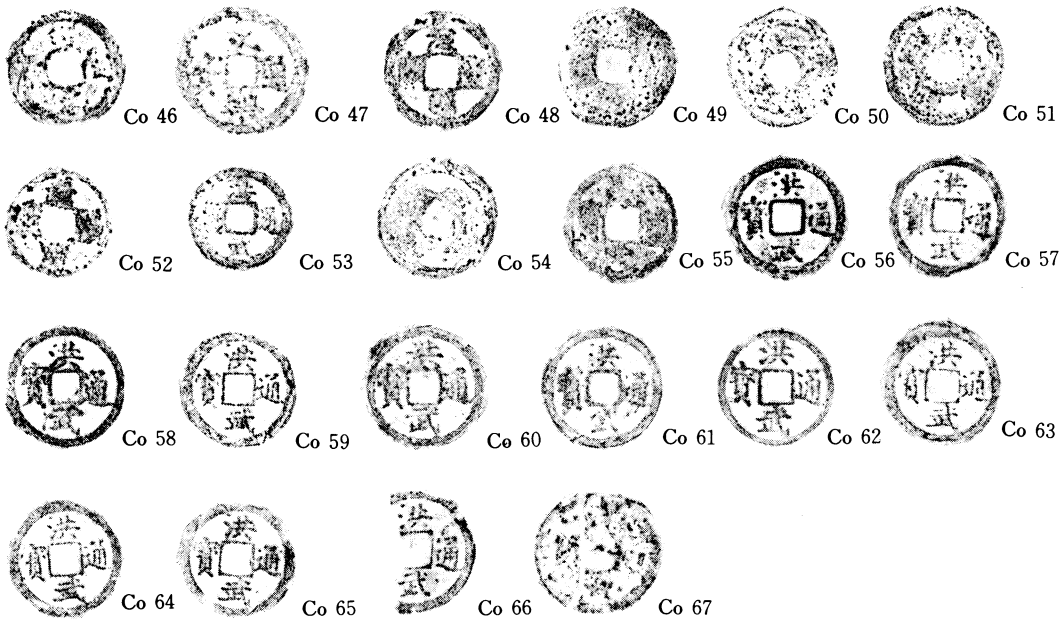
この時代の遺構は墓坑・火葬遺構が検出された。遺物は，遺構に伴う古銭・青磁，攪乱層出土の青磁・白磁・染付等がある。また，21D 区からは「氏神」として祭られていた自然石の下の土中に中世の石塔が埋っていた。

1　中世墓坑

中世墓坑としたものは，副葬品に「洪武通宝」をもつものである。



第278図　中世墓Ａ・Ｂ



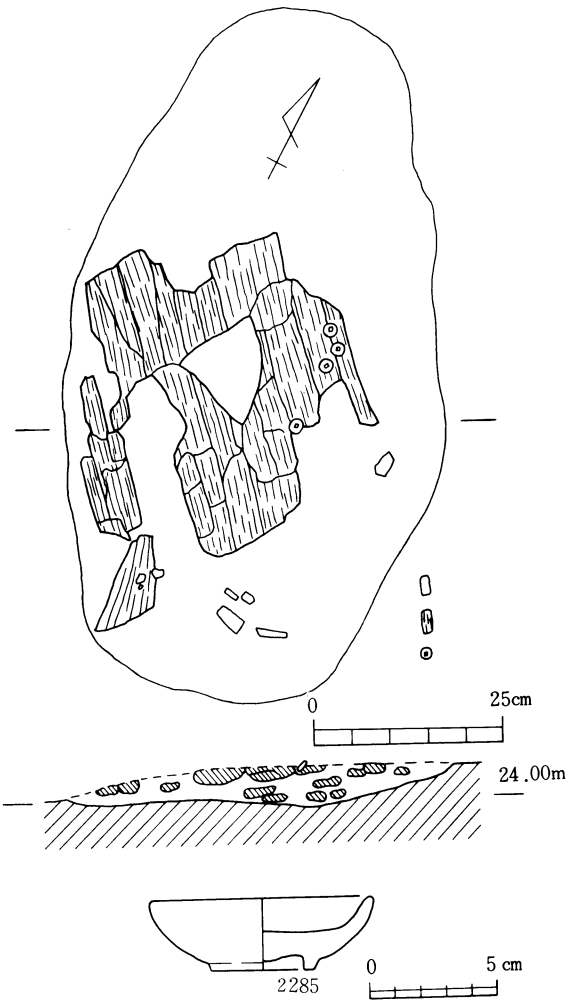
第279図　古銭拓影 (2/3)

(1)　**中世墓坑Ａ（１号人骨）**

25Ｊ区に検出されたもので，長軸 150cm 短軸90cm，深さ30cmを測る。平面形は円形に近い楕円形を呈し，長軸は南北にとる。人骨の残存は良くなかったが，頭位を北にとり，上肢骨と下肢骨が重なり合う状態で出土したことから座棺で埋葬されたものと思われる。古銭を10枚（Co46～Co55）副葬してあり，「元豊通宝」１枚，「紹聖元宝」１枚，「洪武通宝」２枚，「永楽通宝」１枚，「朝鮮通宝」１枚を判読できたが，残り４枚は腐蝕が進んでいた。

(2)　**中世墓坑Ｂ（３号人骨）**

26Ｅ区に検出された。長軸 117cm，短軸 100cm，深さ40cmを測る平面形が円形に近い楕円形を呈する。人骨の保存状態は悪く，残存量が少なかった為，実測は行わなかった。副葬品は，「洪武通宝」が５枚検出された（Co56～Co60）。木片の付着した鉄釘が11本出土しており，木棺であったらしい。



第280図　火葬遺構とその出土遺物

２　火葬遺構（２号人骨）

25・26K 区に検出された火葬場跡である。木材を十字に組んで焼いたらしく，木炭がならんだ状態で50cm四方に残っており，周囲に炭・灰が点在していた。人骨は，木炭の間に小片となって多数散乱していた。「洪武通宝」が７枚（Co61～Co67）と青磁の碗が副葬されていた。

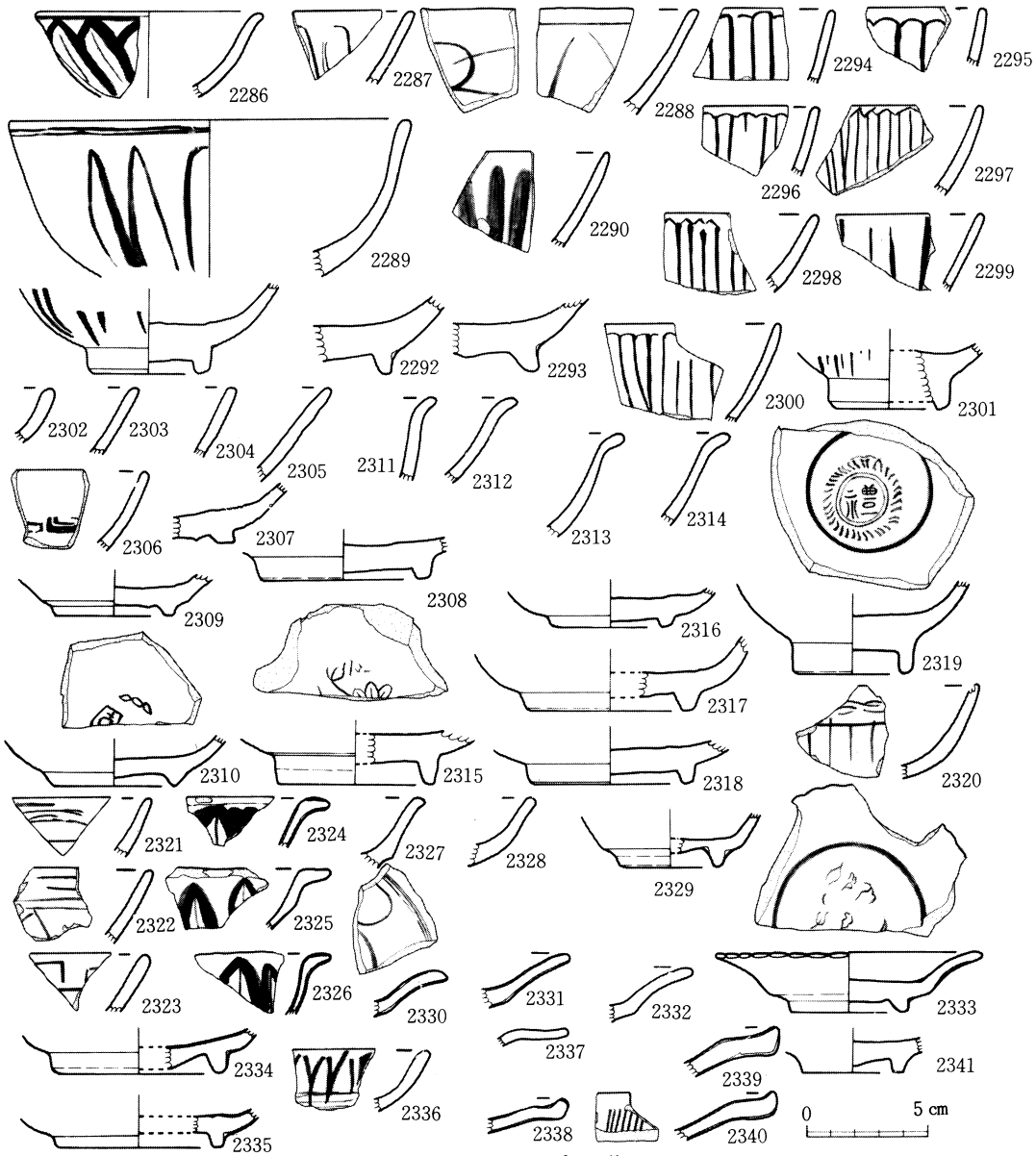
３　攪乱層出土の遺物

(1)　**層塔**

21D 区に出土した石塔は，層塔の一部と思われるもので，「相輪」が２個，「笠」が６個，「軸部（塔身）」が５個，「基壇」が３個である。これらは１個所に積み上げられた状態で，樹根がからんでいたので，現位置にあったのが崩れたのか，移動されたものかは不明である。相輪は上部を欠いていた。笠はわずかに弓なりを呈しており，幅は，40cmが２個，他は44cm，46cm，54cmを測る。軸部（塔身）は四角柱を呈し，側面の四方に墨で「ア」（胎蔵界大日如来）の種子（梵字）を書いてある。これらを復元すると３重か５重の層塔となり，造立年代は鎌倉時代後期～南北朝時代と推定される。

(2) 磁器

青磁碗は外面に蓮花文のあるもの（7類），無文で内反するもの（8類），無文で外反するもの（9類），雷文帯をもつもの（10類）がある。青磁小碗も外面に蓮花文のあるもの（7類），



第281図　青　磁

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
2286	14·15E-P6	碗	7a		11E-1	碗	7a	2291	13F-2	碗	7b-1		25G-1	碗	7b-1
	8D-E2	〃	〃		表　採	〃			21J-1	〃	〃		26D-1	〃	〃

第53表　青磁出土地区表(1)

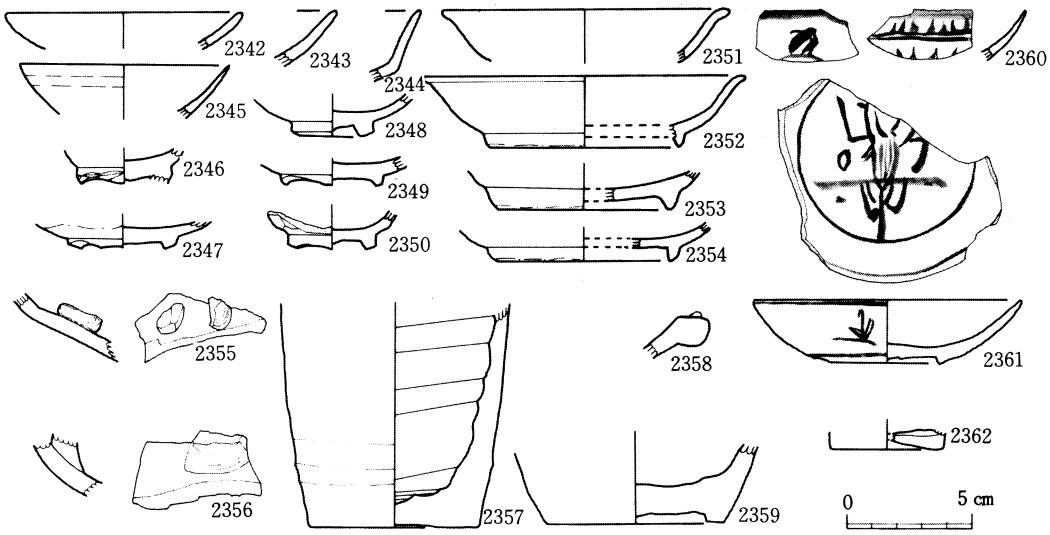
番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
2287	31E-2	碗	7b-2		18I -1	碗	7 c	2308	25K-1	碗	8 b		23J -1	碗	8 b
2288	23C-2	〃	〃		21B-1	〃	〃	2309	35L-1	〃	〃		24H-1	〃	〃
2289	23C-1	〃	〃		21G-1	〃	〃	2310	21D-1	〃	〃		24J -2	〃	〃
2290	24H-1	〃	〃		21G-土2	〃	〃		6 J -2	〃	〃		25E-1	〃	〃
2292	21I -1	〃	〃		21I -1	〃	〃		6 J -2	〃	〃		25G-1	〃	〃
2293	16K-1	〃	〃		21J -1	〃	〃		7 H-1	〃	〃		25H-1	〃	〃
	13E-1	〃	〃		21J -2	〃	〃		7 J -1	〃	〃		25H-2	〃	〃
	15G-1	〃	〃		21K-1	〃	〃		7 J -2	〃	〃		25J -1	〃	〃
	15H-1	〃	〃		21G-1	〃	〃		8 D-1	〃	〃		25J -1	〃	〃
	16HI-2	〃	〃		23H-2	〃	〃		8 F-1	〃	〃		26H-2	〃	〃
	21J -1	〃	〃		23F-1	〃	〃		8 J -1	〃	〃		26J -1	〃	〃
	23J -2	〃	〃		24D-1	〃	〃		9 G-1	〃	〃		26J -2	〃	〃
	24I -1	〃	〃		24H-1	〃	〃		9 J -2	〃	〃		27H-2	〃	〃
	27K-1	〃	〃		25I -2	〃	〃		10G-1	〃	〃		27I -1	〃	〃
	28K-1	〃	〃		25K-1	〃	〃		11F-1	〃	〃		27J -1	〃	〃
	29H-2	〃	〃		26G-1	〃	〃		11J -1	〃	〃		28K-2	〃	〃
	29H-2	〃	〃		27C-1	〃	〃		12E-1	〃	〃		29F-1	〃	〃
	35J -1	〃	〃		27F-2	〃	〃		12G-2	〃	〃		29K-1	〃	〃
2294	27E-2	〃	7 c		28K-1	〃	〃		13D-1	〃	〃		29K-1	〃	〃
2295	17E-1	〃	〃		29C-1	〃	〃		14E-2	〃	〃		30D-2	〃	〃
2296	33H-2	〃	〃		29F-2	〃	〃		14F-1	〃	〃		30H-1	〃	〃
2297	29C-1	〃	〃		30H-1	〃	〃		14F-1	〃	〃		31F-2	〃	〃
2298	27C-1	〃	〃		30J -2	〃	〃		15G-1	〃	〃		34H-1	〃	〃
2299	27H-1	〃	〃		37L-1	〃	〃		15K-1	〃	〃		表　採	〃	〃
2300	37L-1	〃	〃		表　採	〃	〃		17E-1	〃	〃		表　採	〃	〃
2301	18E-1	〃	〃		〃	〃	〃		17I -1	〃	〃		〃	〃	〃
	7 G-2	〃	〃		〃	〃	〃		17J -1	〃	〃		表　採	〃	〃
	9 J -2	〃	〃	2302	8 I -1	〃	8 b		18E-1	〃	〃		〃	〃	〃
	10D-2	〃	〃	2303	23H-2	〃	〃		18I -1	〃	〃		〃	〃	〃
	12D-1	〃	〃	2304	9 I -1	〃	〃		18F-1	〃	〃	2311	35L-1	〃	9 a
	12D-1	〃	〃	2305	10F-1	〃	〃		22F-2	〃	〃	2313	15H-1	〃	〃
	12E-1	〃	〃	2306	21H-1	〃	〃		23E-1	〃	〃	2314	8 J -1	〃	〃
	12I -2	〃	〃	2307	9 H-2	〃	〃		23J -1	〃	〃	2328	25G-2	〃	〃

第54表　青磁出土地区表(2)

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
	6J-1	碗	9b		10J-2	碗	9b		25I-2	碗	9b	2326	16E-2	小碗	7
	7J-1	〃	〃		10J-溝	〃	〃		26B-1	〃	〃	2325	29D-2	〃	〃
	9J-2	〃	〃		12D-1	〃	〃		26G-1	〃	〃	2327	16F-2	〃	9
	20H-1	〃	〃		12G-1	〃	〃		26FG-1	〃	〃	2329	15E-2	〃	〃
	24F-1	〃	〃		13E-1	〃	〃		26H-1	〃	〃		16F-2	〃	〃
	24J-1	〃	〃		14F-1	〃	〃		26HI-2	〃	〃	2330	31K-1	皿	7
	25D-1	〃	〃		15D-2	〃	〃		26K-2	〃	〃	2331	25J-2	〃	〃
	25E-1	〃	〃		16D-1	〃	〃		26E-2	〃	〃	2332	26B-1	〃	〃
	27I-2	〃	〃		16D-2	〃	〃		27H-1	〃	〃	2333	26B-1	〃	〃
	28I-1	〃	〃		16H-1	〃	〃		27H-2	〃	〃	2334	9G-2	〃	〃
	29E-1	〃	〃		17E-1	〃	〃		27I-2	〃	〃		9D-1	〃	〃
	30I-1	〃	〃		17E-2	〃	〃		27I-2	〃	〃		9G-1	〃	〃
	31G-2	〃	〃		17F-1	〃	〃		27D-1	〃	〃		11D-1	〃	〃
	33H-1	〃	〃		17J-1	〃	〃		28H-1	〃	〃		12D-1	〃	〃
	33J-1	〃	〃		17L-2	〃	〃		29H-1	〃	〃		12E-1	〃	〃
	35J-1	〃	〃		18H-1	〃	〃		29H-2	〃	〃		13F-2	〃	〃
	35K-1	〃	〃		19I-1	〃	〃		29J-2	〃	〃		14D-1	〃	〃
	35K-1	〃	〃		20H-2	〃	〃		29K-1	〃	〃		24G-1	〃	〃
	35K-1	〃	〃		20E-1	〃	〃		30K-1	〃	〃		24L-1	〃	〃
	37L-1	〃	〃		21G-1	〃	〃		31G-P3	〃	〃		28C-1	〃	〃
	表　採	〃	〃		21G-1	〃	〃		33C-1	〃	〃		29C-1	〃	〃
2312	16K-1	〃	9a		22I-1	〃	〃		33D-1	〃	〃		29G-1	〃	〃
2315	16DE	〃	〃		22F-2	〃	〃		33I-1	〃	〃		29J-1	〃	〃
2316	15F-1	〃	〃		23I-1	〃	〃		33I-1	〃	〃		20以南表採	〃	〃
2317	29E-1	〃	〃		23J-1	〃	〃		表　採	〃	〃		表　採	〃	〃
2318	26I-1	〃	〃		23E-2	〃	〃	2320	29D-2	〃	10	2335	〃	〃	8
2319	10I-1	〃	〃		24H-2	〃	〃	2321	30K-1	〃	〃	2336	13E-1	〃	9
	5J-2	〃	〃		24C-2	〃	〃	2322	以南表採	〃	〃	2337	9G-2c	盤	
	8H-1	〃	〃		25D-1	〃	〃	2323	28E-2	〃	〃	2338	21I-1	〃	
	8G-1	〃	〃		25D-1	〃	〃		26P-2	〃	〃	2339	25J-2	〃	
	9G-1	〃	〃		25E-1	〃	〃		32I-1	〃	〃	2340	20I土-2	〃	
	10D-溝	〃	〃		25G-2	〃	〃		表　採	〃	〃	2341		香炉	
	10I-1	〃	〃		25H-1	〃	〃	2324	16D-2	小碗	7				

第55表　青磁出土地区表(3)

と無文で内弯するもの（９類）がある。青磁皿も稜花皿などがある。他に青磁は盤・香炉がある。白磁は高台に抉りのある坏・皿（９類）と外反する口縁をもつ皿がある。褐釉陶器の壺・盤がある。染付は碁笥底の皿で，天目小碗もある。



第282図　白磁・染付・陶器・天目

番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類	番号	出土区層	器種	類
2342	表採 KM-65	小碗	9		30F-1	小碗	9		9 H-1	染付			34K-2	陶器	
2343	31K-1	〃	〃	2351	15E-1	〃	10		10J -1	〃		2355	22G-2	〃	
2344	24H-2	〃	〃	2352	12J -1	〃	〃		32J -2	〃		2356	15K-1	〃	
2345	表採 KM-58	〃	〃	2353	8 H-1	〃	〃		表　採	〃		2357	22G-2	〃	
2346	26K-2	〃	〃	2354	22G-1	〃	〃		23E-1	陶器		2358	15F-1	〃	
2347	24H-2	〃	〃		6 J -1	〃	〃		24G-1	〃			9G-2a	〃	
2348	12J -1	〃	〃		7 D-1	〃	〃		25J -1	〃			12D-1	〃	
2349	16J -2	〃	〃		9 H-2	〃	〃		28H-2	〃			12G-1	〃	
2350	22I -1	〃	〃		16G-2	〃	〃		35K-1	〃			13E-1'	〃	
	14F-1	〃	〃		16K-1	〃	〃	2359	22F-1	〃			17D-1	〃	
	22C-1	〃	〃		26D-1	〃	〃		7 G-1	〃			18I -1	〃	
	23G-1	〃	〃		27K-1	〃	〃		7 G-2	〃			29J -1	〃	
	24G-1	〃	〃		28F-1	〃	〃		7 G-2	〃			表　採	〃	
	25E-1	〃	〃		KM-64	〃	〃		32I -1	〃			〃	〃	
	26K-1	〃	〃	2360	23I -1	染付			34I -1	〃		2362	27F-1	天目	
	28C-1	〃	〃	2361	26A-1	〃			34I -2	〃			10F-2c	壺	
	29K-1	〃	〃		8 J -1	〃			33H-2	〃			23G-1	〃	

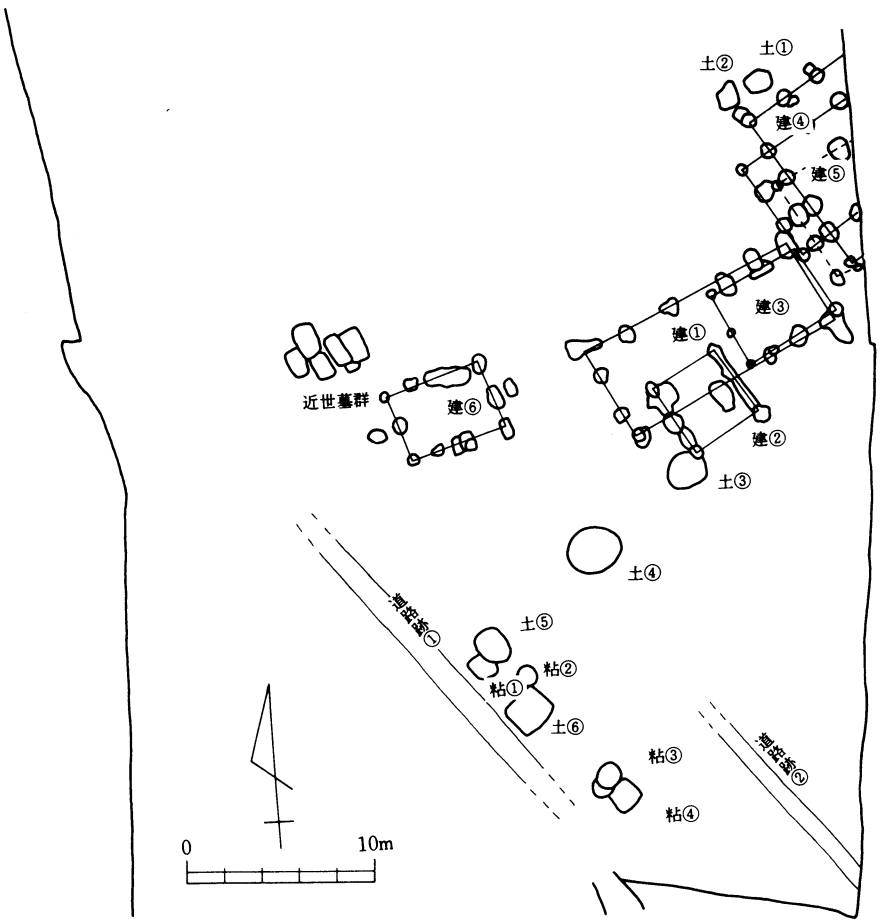
第56表　白磁・染付・陶器・天目出土地区表

第7章　江戸時代

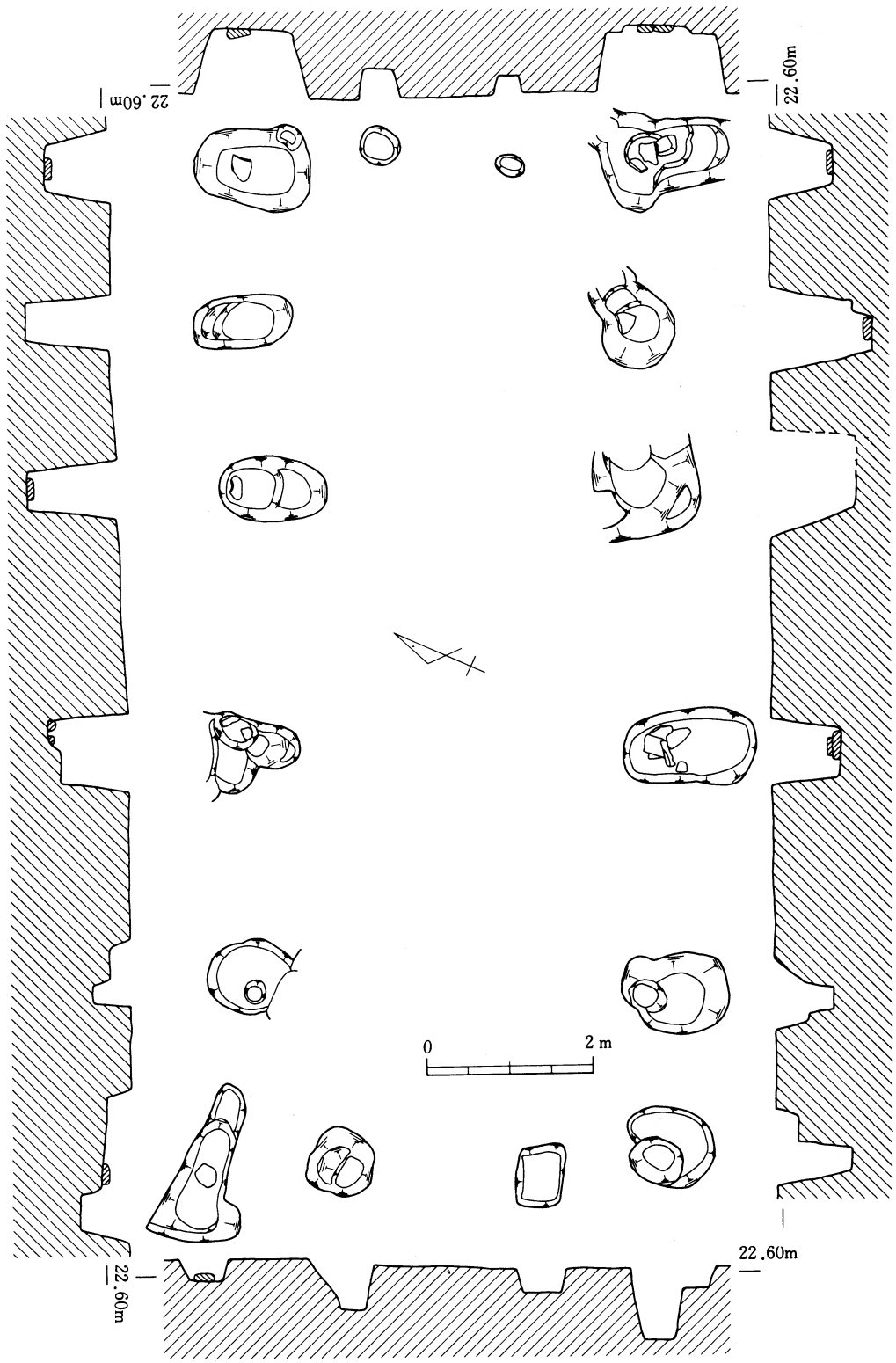
遺構は，掘立柱建物，かまど，粘土貼り遺構，土坑，墓坑が検出されたが，建物は礎石を用いたものもあったと思われる。遺物は，これらの遺構周辺のIc層に多数散布していた。

1　掘立柱建物

掘立柱建物は，20～22G ～K 区付近に 6 棟検出された。20～22G ～K 区の建物は重複して柱穴が切り合っているが新旧関係は確認できなかった。17～23F ～K 区付近には多数の柱穴が検出され，この他にも掘立柱建物があったことが予想される。



第283図　江戸時代の遺構配置図



第284図　掘立柱建物①

(1)　掘立柱建物①

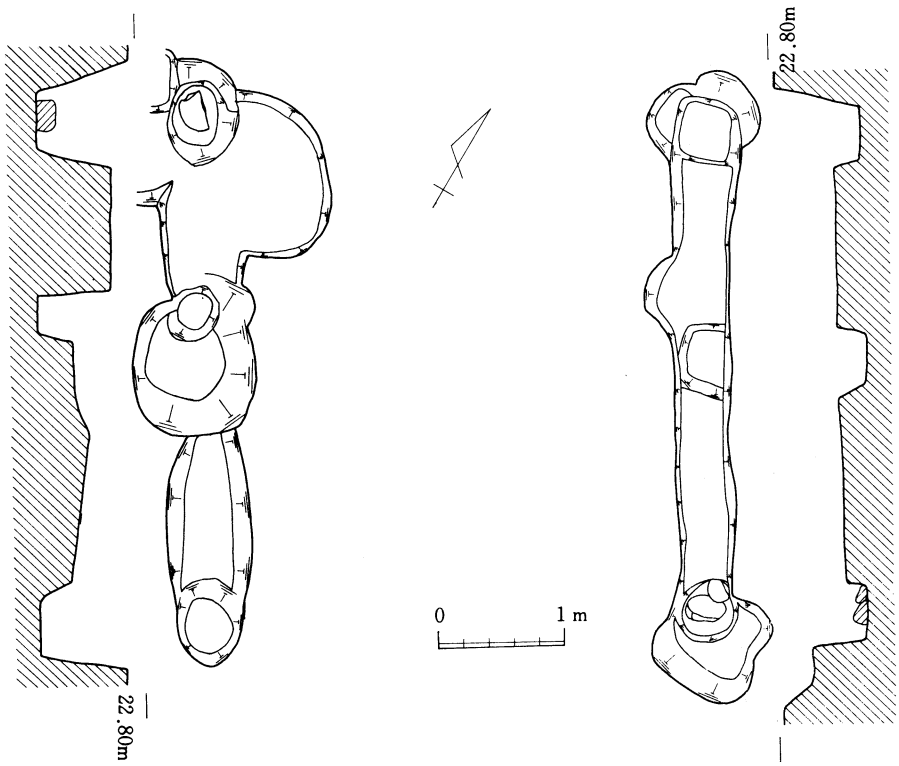
20・21H～K区に検出された，主軸をN28°Wにもつ掘立柱建物である。柱間は南北方向に3間，東西方向に5間で，柱間隔は西側が 1.5m＋2.2m＋1.8mの5.5m，東側が1.7m＋1.6m＋1.7mの5m，東西方向は2m＋3.2m＋2.8m＋2m＋2mの12mである。柱穴の直径は東西方向のものは1m前後であるが，南北方向のものは30cm前後を測る。深さは浅いもので15cm，深いもので110cmある。7本の柱穴には根石がある。柱穴には近世の陶磁器等が出土し，建物内の西端にはかまどが検出された。

(2)　掘立柱建物②

掘立柱建物①と南西部で一部重複する。主軸をN31°Wにもち，柱間は南北方向に2間，東西方向に1間で，柱間隔は南北方向が2m＋2mの4m，東西方向が4mを測る。柱穴の直径は50cm前後で，深さは70cmほどである。南北方向の柱穴間には幅50cm～70cm，深さ30cm～50cmの溝を掘り込んである。

(3)　掘立柱建物③

掘立柱建物①と重複しており，主軸は掘立柱建物①と同じN28°Wである。柱間は南北方向に2間，東西方向に3間で，柱間隔は南北方向が2m＋2mの4m，東西方向が 1.4m＋2m＋

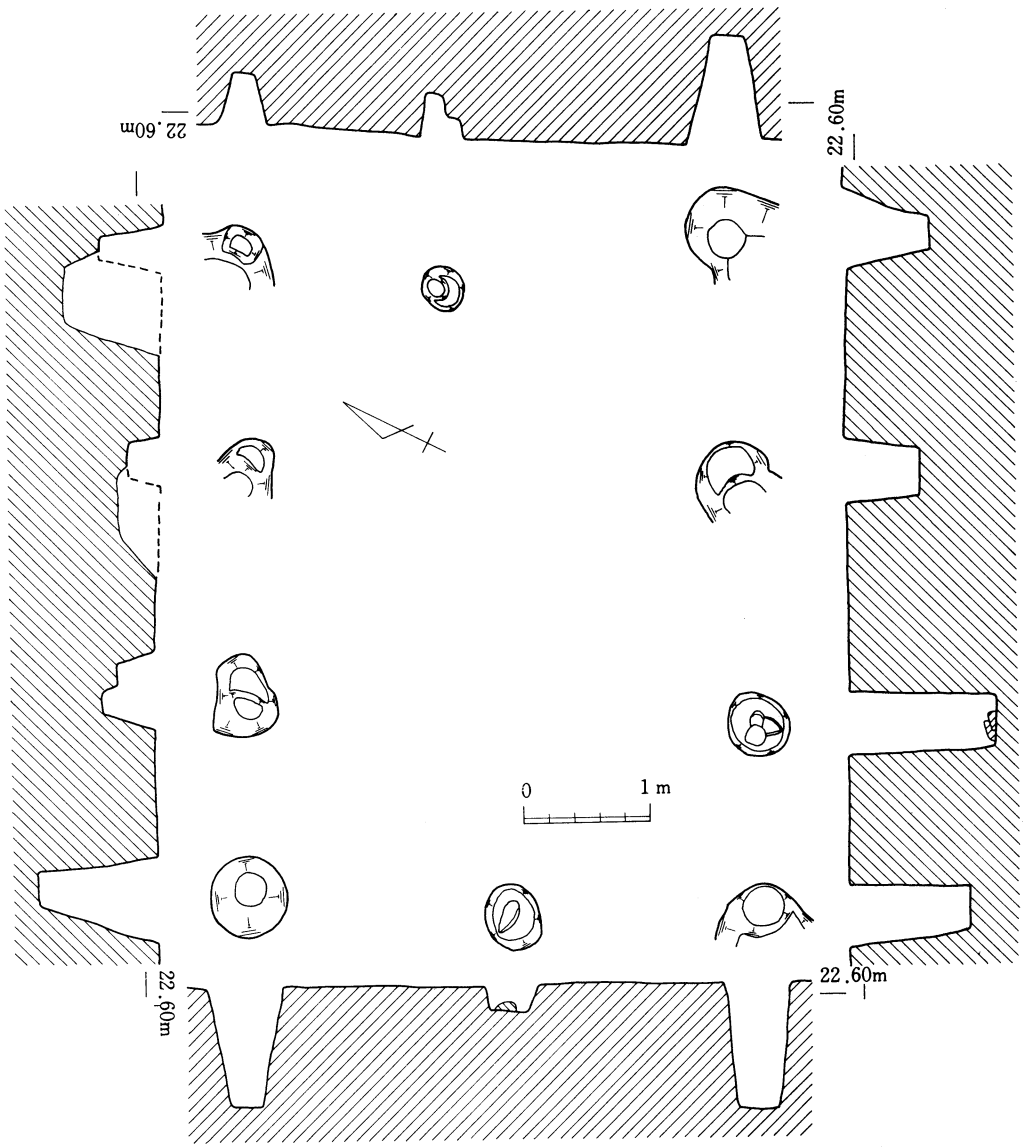


第285図　掘立柱建物②

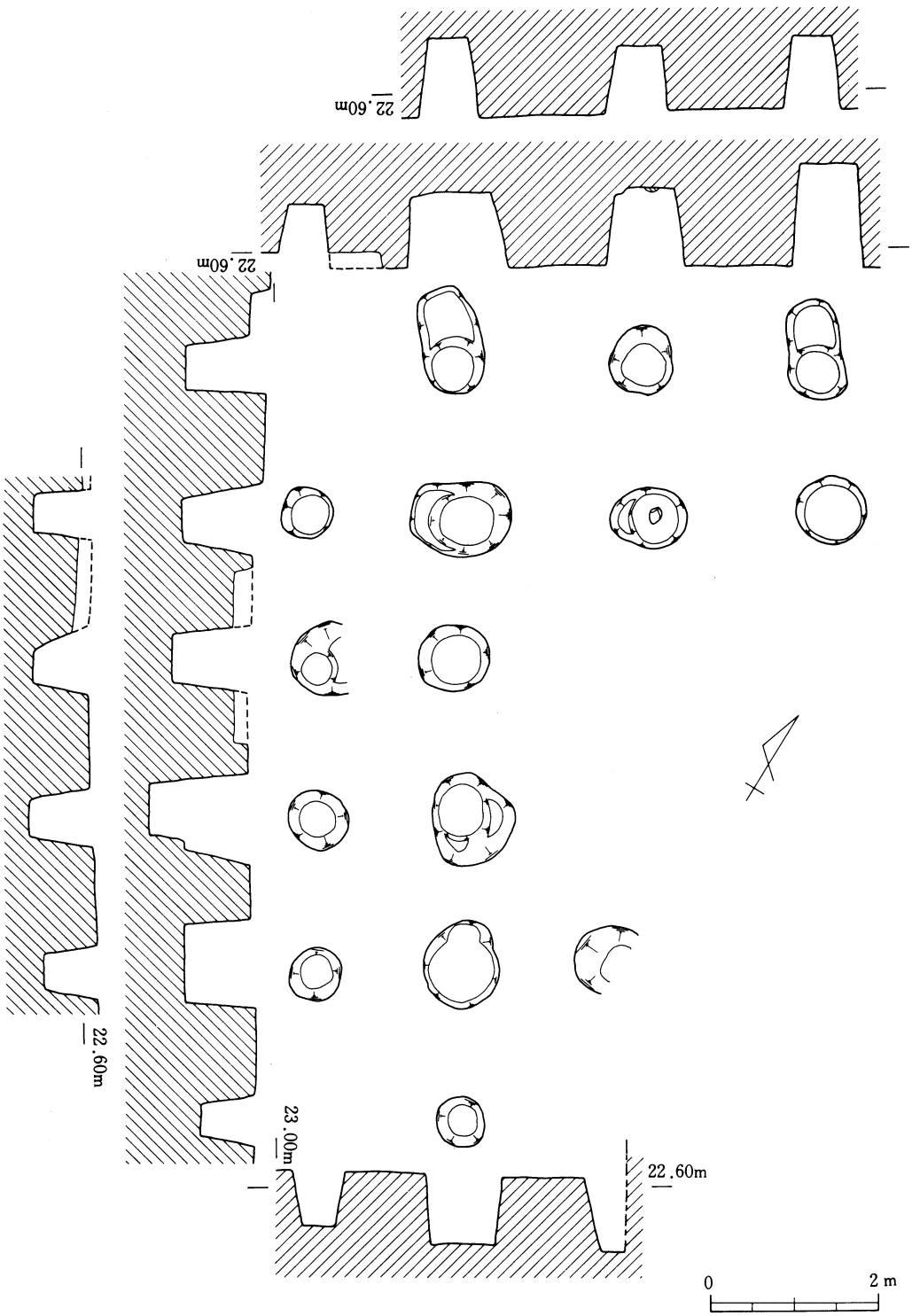
1.8mの 5.2mを測る。柱穴の直径は35cm～70cm，深さ40cm～ 120cmである。柱穴のほとんどは掘立柱建物①と切り合うが新旧関係は確認できなかった。

(4) 掘立柱建物④

21～23J・K区に検出された主軸をN 31° Wにもつ掘立柱建物である。柱間は南北方向に3間で，東西方向は用地外に延びるため不明である。北側，南側，西側にはひさしが出ている。柱間隔は西側が 1.8m平均の 5.4mで， 1.6mのひさしが出ている。北側の柱間隔は2m平均で 1.8mのひさしが出る。柱穴の平面形はほぼ円形を呈し，直径は60cm～90cm，深さは60cm～120cmを測る。柱穴のなかから陶磁器などが出土した。



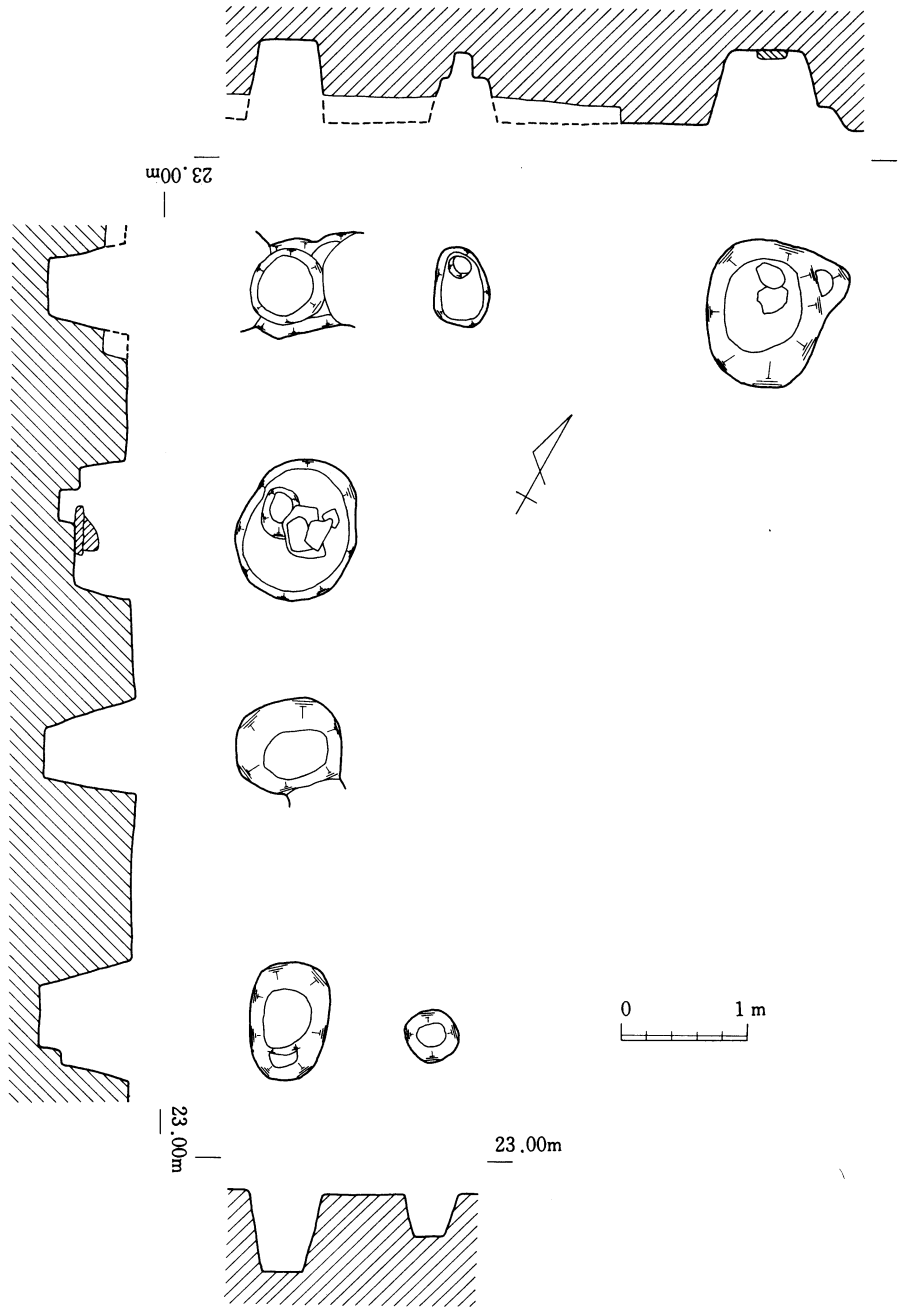
第286図　掘立柱建物③



第287図　掘立柱建物④

(5) 掘立柱建物⑤

掘立柱建物④に重複して検出された，南北方向に３間で，東西方向は東側が用地外にのる。主軸はN 28° Wを測る。柱間隔は西側が 1.8m ＋ 1.8m ＋ 2.2m の 5.8m で，北側は 1.3m ＋ 2.4m ＋？を測るがしっかりしない。柱穴の直径は40cm～ 100cm，深さは40cm～80cmを測る。

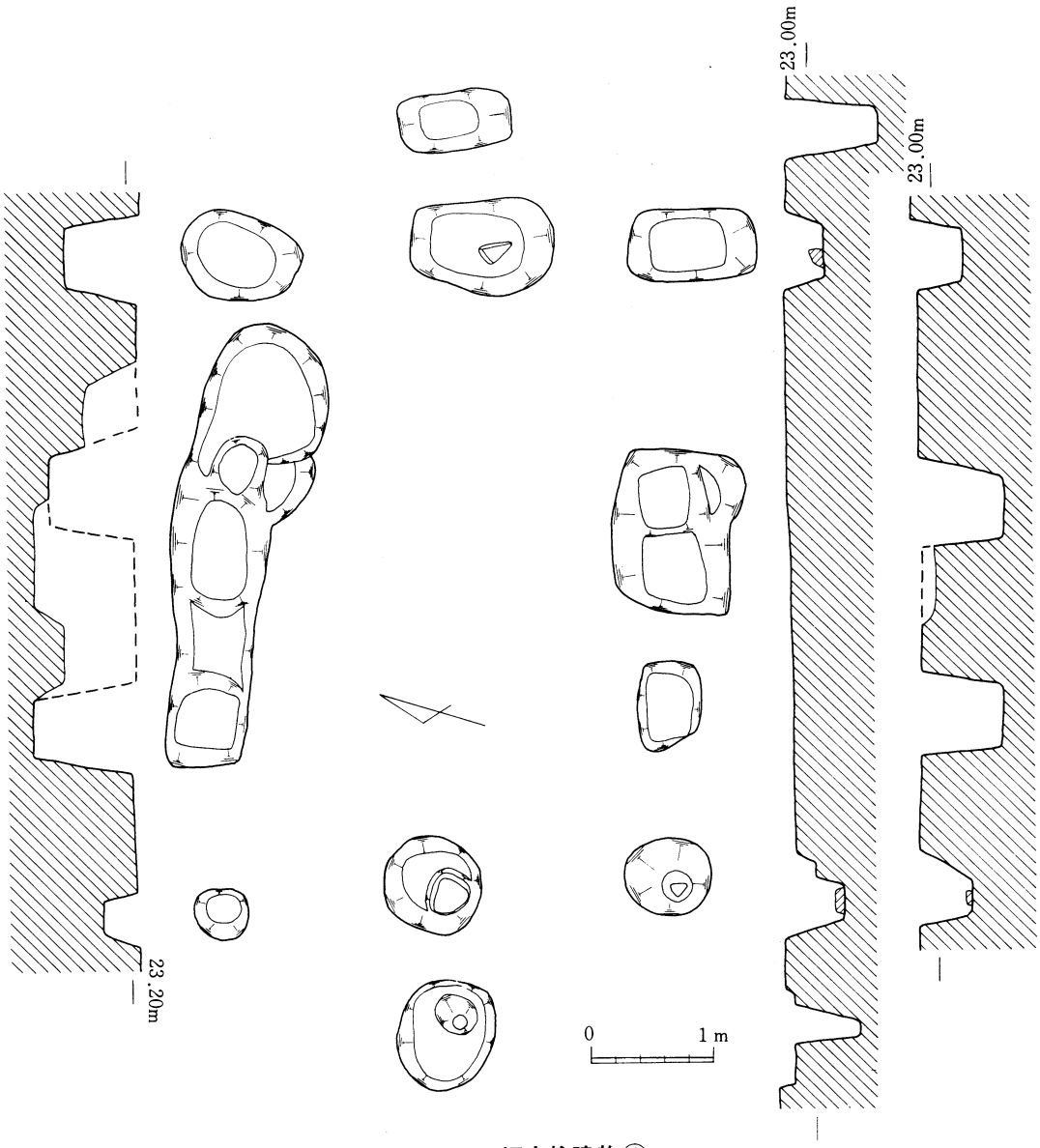


第288図　掘立柱建物⑤

柱穴の2本には根石が複数個ある。柱穴の中には遺物は含まれていなかった。

(6) 掘立柱建物⑥

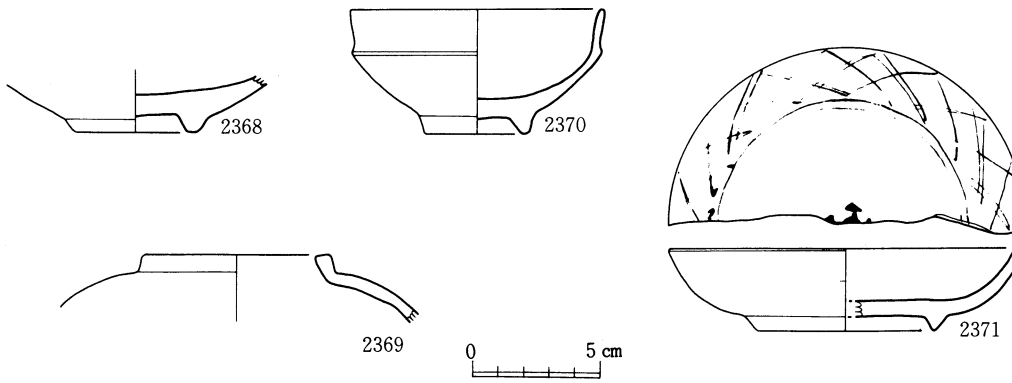
19・20F・G区に検出された主軸をN 18° Wにもつ掘立柱建物である。柱間は南北方向に2間，東西方向に3間あり，柱間隔は南北方向に 1.9m ＋ 1.9m の 3.8m，東西方向に 1.6m ＋ 1.6m ＋ 2.1m の 5.3m を測る。梁間には棟持ちと考えられる柱穴が東西にそれぞれ1本ある。柱穴の平面形は円形あるいは方形を呈し，直径は40cm～70cm，深さは40cm～80cmを測る。柱穴内には遺物は検出されなかった。



第289図　掘立柱建物⑥

2　掘立柱建物の出土遺物

掘立柱建物跡の柱穴中より出土したもので，**2368**は磁器染付皿，**2369**は陶器壺であり，掘立柱建物①，**2370**は白濁釉のかかる碗，**2371**は磁器染付皿で，掘立柱建物跡④に出土した。**2371**は見込みに斜格子，圏線，五弁花文，裏面に圏線及び松葉文を画く。



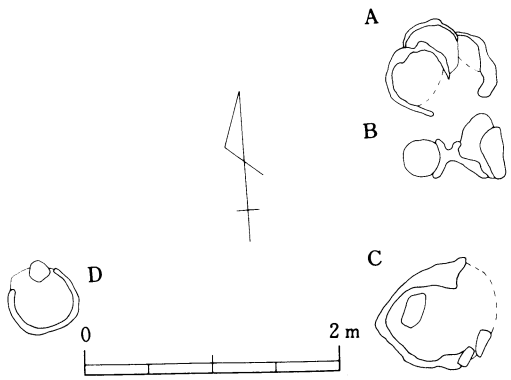
第290図　掘立柱建物①・④の出土遺物

3　かまど

20H・I 区に炉壁に粘土を用いたかまど4基，18F・G区に石組みのかまど1基が検出された。かまどA～Cは掘立柱建物①内に位置するが，かまどD・Eは，これをとり囲む建物を検出することができなかった。

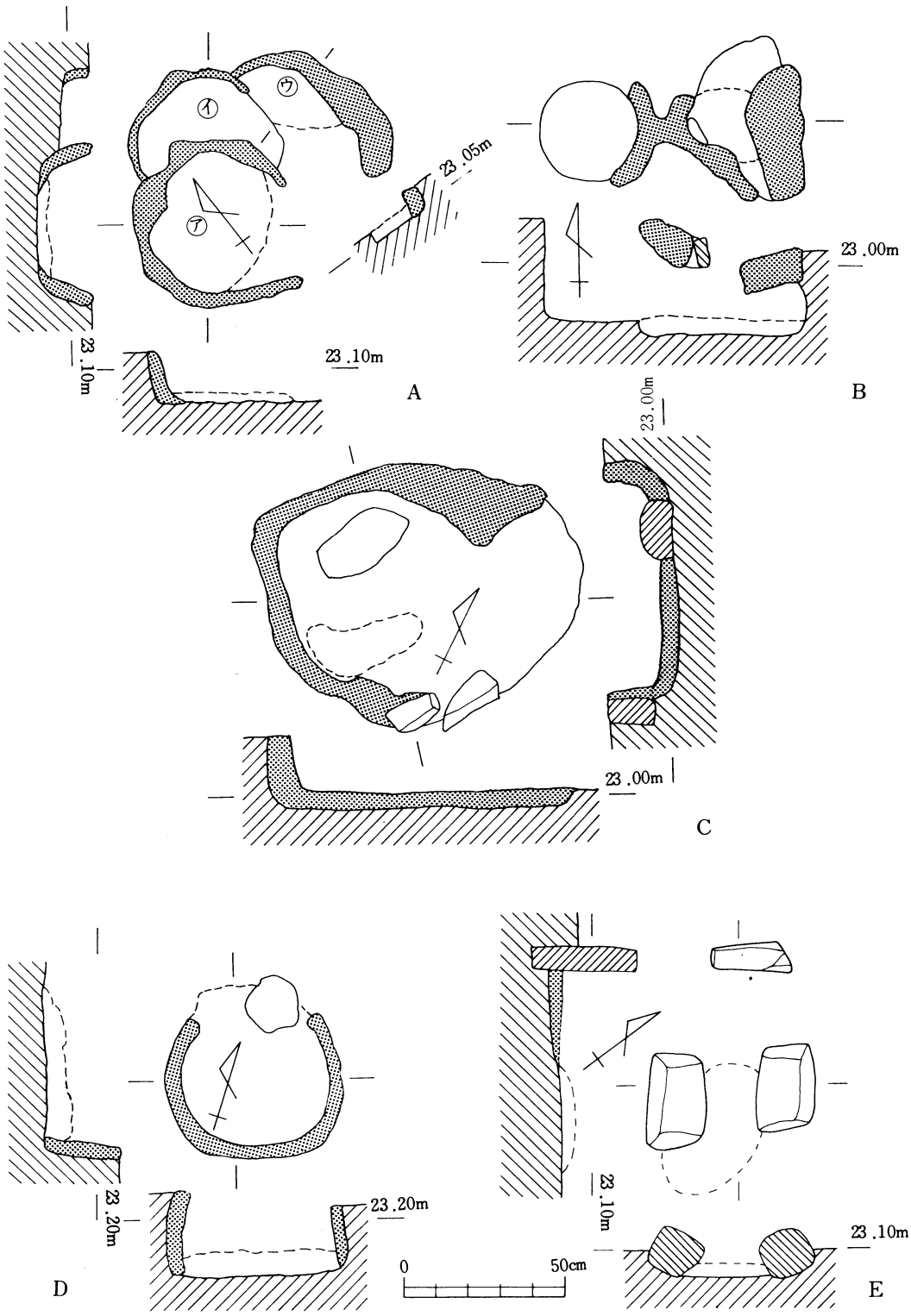
かまどA～Cは22I 区に検出され，掘立柱建物①の西端に位置しており，南北方向にならんでいる。

かまどAは，炉壁に切り合いがみられ，3回にわたって移動して使用したことが考えられる（㋐㋑㋒）。㋐のたき口は南東側にあり，炉壁の粘土は火を受けて赤変している。かまどBは，かまどAの南50cmの位置にある。たき口は東側で，かまどとトンネルで通じている。かまどは柱穴状の円形を呈する。かまどCは，たき口を東側にもち，長さ 100cm，幅80cmを測る。かまど内には20cm大の礫があり，床面には焼土・炭・灰が堆積している。かまどDはかまどA～Cの西3mのところにある。平面形は円形を呈し，直径は50cmを測る。たき口は北西側にあり，炉壁は袋状を呈している。床面には炭が10cmほど堆積していた。



第291 図かまどA～D配置図

かまどEは，18F・G区に検出された石組みのかまどである。たき口は南西側で，側面と後方には角礫を置いてある。床面には焼け土と炭が堆積していた。



第292図　かまどA～E実測図

4　粘土貼り遺構

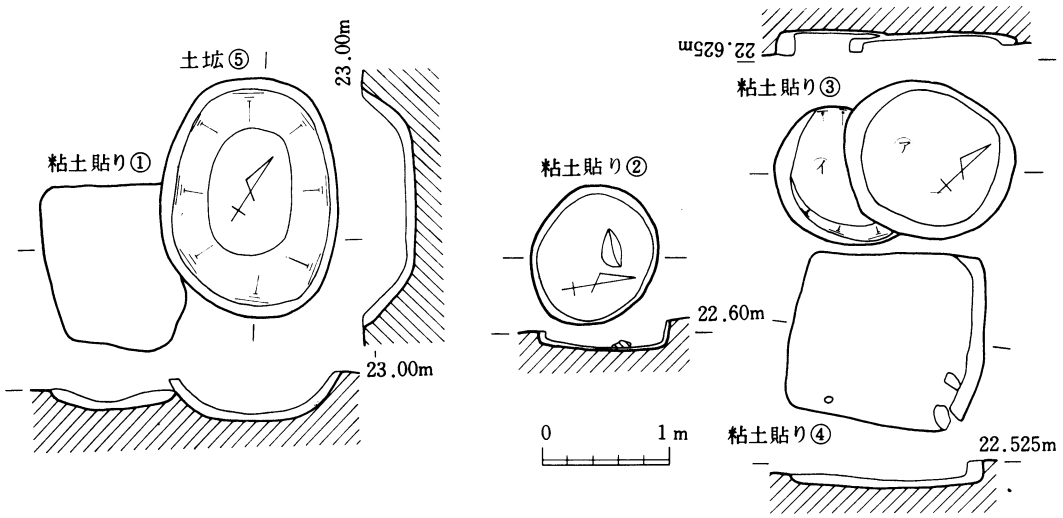
17G区,16H・Ⅰ区には平面形が円形あるいは方形を呈する用途不明の粘土貼り遺構が検出された。粘土貼り遺構①・②は，隣接して土坑⑤・⑥があることから，これらと関連があるかもしれない。ただ，これらを囲む柱穴はまとまらず，建物外につくられたものと思われる。

粘土貼り①は，17G区に検出されたもので，100cm×130cmの方形を呈し，中央部はややくぼんでいる。粘土の厚さは5cm～10cmを測る。土坑⑤と隣接している。粘土貼り②は，壁と床面に粘土を貼ってある。平面形は楕円形を呈し，長径110cm，短径96cm，深さ20cmを測る。南側に土坑⑥が隣接する。粘土貼り③は，2基が重複するものである（㋐㋑）。㋐が㋑を切るのか，同時期のものかは不明である。いずれも，壁面，床面は粘土を貼ってあり，㋐の平面形は円形に近い楕円形を呈し，長軸140cm，短軸120cm，深さ10cmを測る。粘土の厚さは，壁面で10cm，床面で5cmを測る。

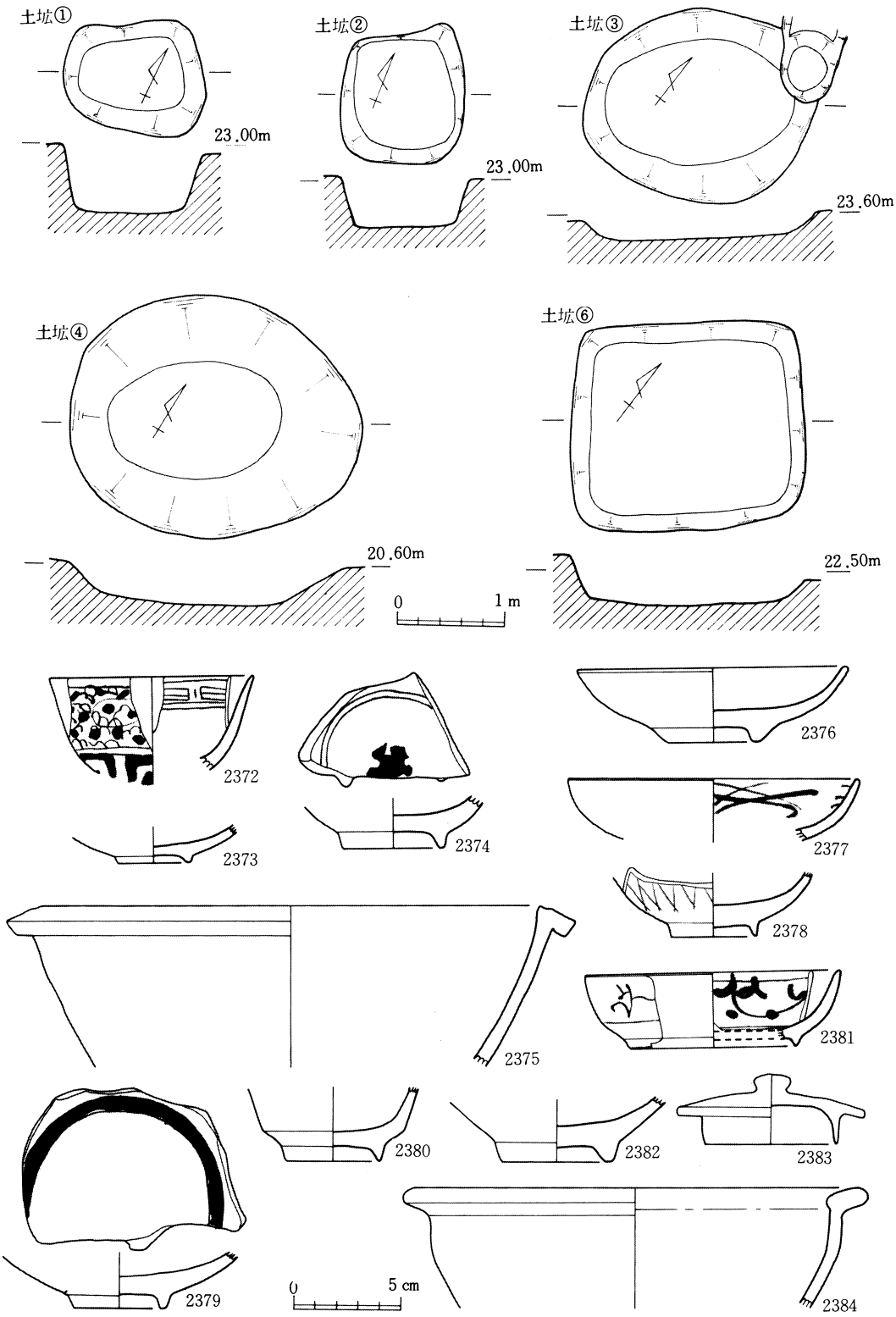
5　土坑

近世の土坑は，17～23F～K区付近に多く検出されたが，ここでは6基について述べる。

土坑①・②は，23J区で掘立柱建物④の北側に検出された東西方向にならぶ土坑群の2つである。①は，平面形が隅丸方形を呈し，長軸130cm，短軸100cm，深さ60cmを測る。②は，平面形が1辺120cmのほぼ正方形を呈し，深さ50cmを測る。①・②とも遺物を含んでいた。土坑③は，19I区に検出されたもので，掘立柱建物②の南西隅に位置する。平面形は楕円形で，長軸2.1m，短軸1.8m，深さ20cmを測る。遺物は出土しなかった。土坑④は，18H区に検出され，長軸2.8m，短軸2.3mの楕円形を呈する土坑である。土坑⑤は，粘土貼り遺構①に隣接するもので，約8cmの厚さで砂礫をめぐらしてある。平面形は楕円形を呈し，長軸1.9m，短軸1.4m，深さ40cmを測る。土坑⑥からは多くの近世磁器が出土した。



第293図　粘土貼り遺構と土坑⑤



第294図　土坑①～④・⑥と土坑出土遺物

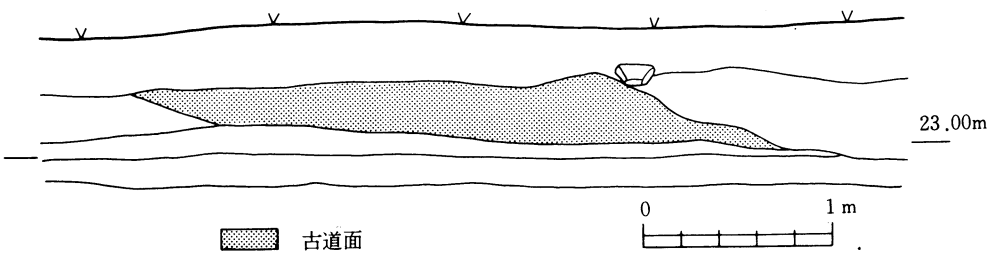
6　土坑の出土遺物

土坑の埋土中に出土したもので，**2372**～**2375**は土坑①内出土で**2372**は唐草文，見込み口縁に雷文を画く磁器染付碗，**2373**は貫入の入る磁器碗，**2374**は青磁染付碗で見込み底に圏線及び五弁花文を画く。**2376**～**2378**は土坑②で**2376**が白磁器染付皿，**2378**が同碗である。

2379～**2384**は土坑⑥に出土したものである。**2379**は磁器皿，**2380**は磁器碗で胴部が直線的に外反する器形を呈する。**2381**は唐草文をあしらう磁器染付皿，**2382**は褐釉を施す陶器碗，**2383**は茶家蓋，**2384**は摺鉢であり，**2383**～**2384**は薩摩焼である。

7　道路跡

道路跡は，北西―南東方向のものが２本検出された。道路跡①は，19D 区から16H 区にかけて検出されたが，南東側は現在使用されている掘り切りの登道に続いている。道路幅は約 1.7 m を測る。道路跡②は，17I 区から15K 区にかけて検出された。道路幅は１m 前後で，南東側へ延び，北東側は耕作による削平で確認できなかった。

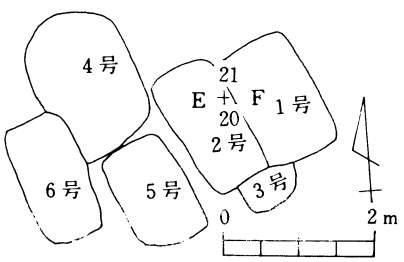


第295図　道路跡断面図

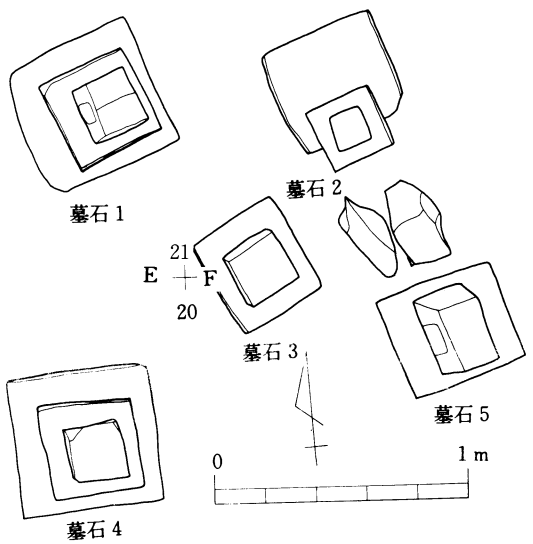
8　近世墓

(1) 墓石

墓石は５基あり，すべて西向きに建てられている。墓坑との重なりは一致せず，



第296図　近世墓群配置図



第297図　近世墓群墓石平面図

5基とも1号墓と3号墓の地表面に集中していた。台座は平均が55cm四方のものと，40cm四方のものとがある。墓標の平均は，長さ40cm，幅20cm，厚さ20cmで，四角柱を呈する。墓標にある刻字および墨書は次のとおりである。

墓石1　正面「心　雪窓禅定尼　寛延4年未2月9日」　側面「春薗之右衛門　母」

墓石2　正面「甲世　幼性妙童□　寛政6年天寅2月11日」　側面「原之□之娘」

墓石3　正面「悟山禅定門　天明6年8月13日」　側面「父　七右衛門　原□名□」

墓石4　正面「悟心禅定門　安永6年天丁酉正月13日」　側面「父　原之門仁兵衛」

墓石5　正面「良久禅定門　享保14酉未4月19日」

これらの墓石で，最も古い墓標は墓石5の享保14年（1729年）で，最も新しい墓標は墓石2の寛政6年（1794年）である。

(2) 墓坑

近世の墓坑は，20・21E・F区に隣接して6基検出された。長軸はN 18° ～38° Wである。

1号墓（4号人骨）

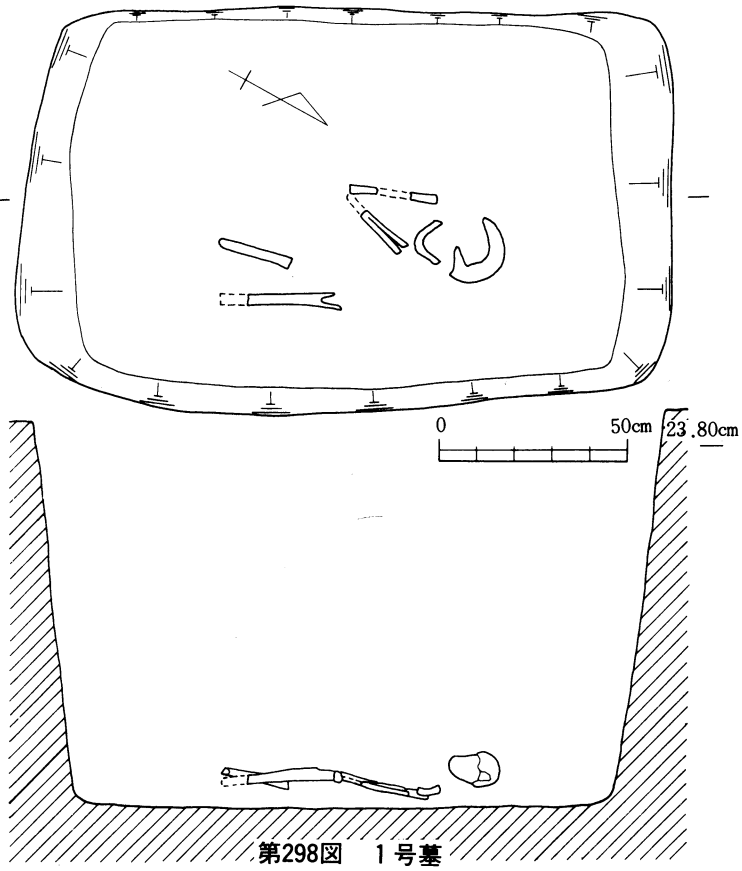
長軸 170cm，短軸 108cm，深さ 105cmを測る。平面形は方形を呈し，長軸はN 28° Wをとる。人骨は，頭蓋・上肢骨・下肢骨が残存しており，頭位は北にとる。副葬品は「寛永通宝」が7枚で，木製の数珠が3個付着していた。「寛永通宝」の3枚には「文」の背文がある。

2号墓（5号人骨）

長軸 182cm，短軸92cm，深さ 103cmを測り，平面形は方形を呈する。長軸をN 28° Wにとる。1号墓と接し，3号墓と切り合っている。新旧関係は，1号墓とは不明，3号墓よりは古い。副葬品は「寛永通宝」が7枚で，1枚は腐蝕が進んでいる。

3号墓（6号人骨）

2号墓の南側に切り合っている。人骨の保存状態は悪く，頭蓋の一部と歯が残存し，「寛永通宝」が7枚副葬されていた。人骨・古



第298図　1号墓

銭の残存状況から２号墓より新しい墓坑である。

４号墓（７号人骨）

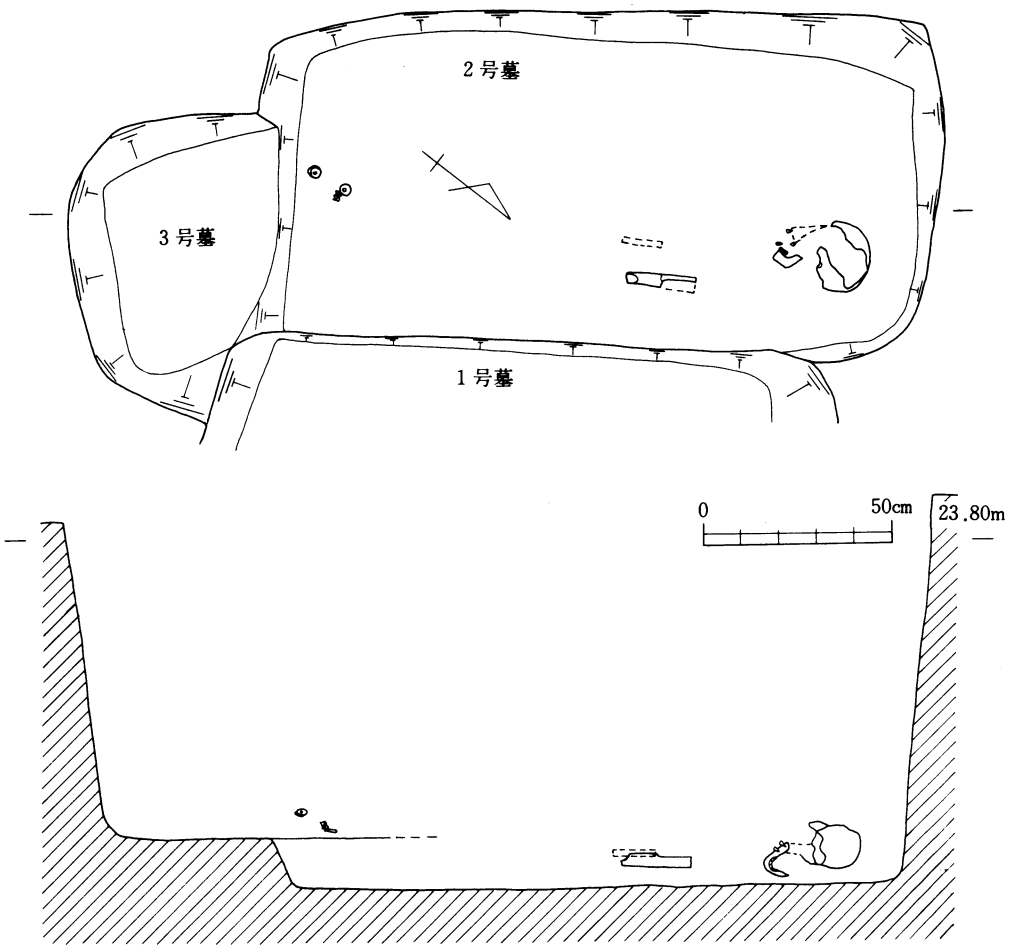
５号墓と南壁を切り合っているが新旧関係は不明である。長軸 193cm，短軸 134cm，深さ128cmを測り，平面形は隅丸方形を呈し，長軸をN 29° Wにとる。人骨は，頭蓋・下肢骨が残存していた。副葬品の「寛永通寶」は６枚検出された。

５号墓（８号人骨）

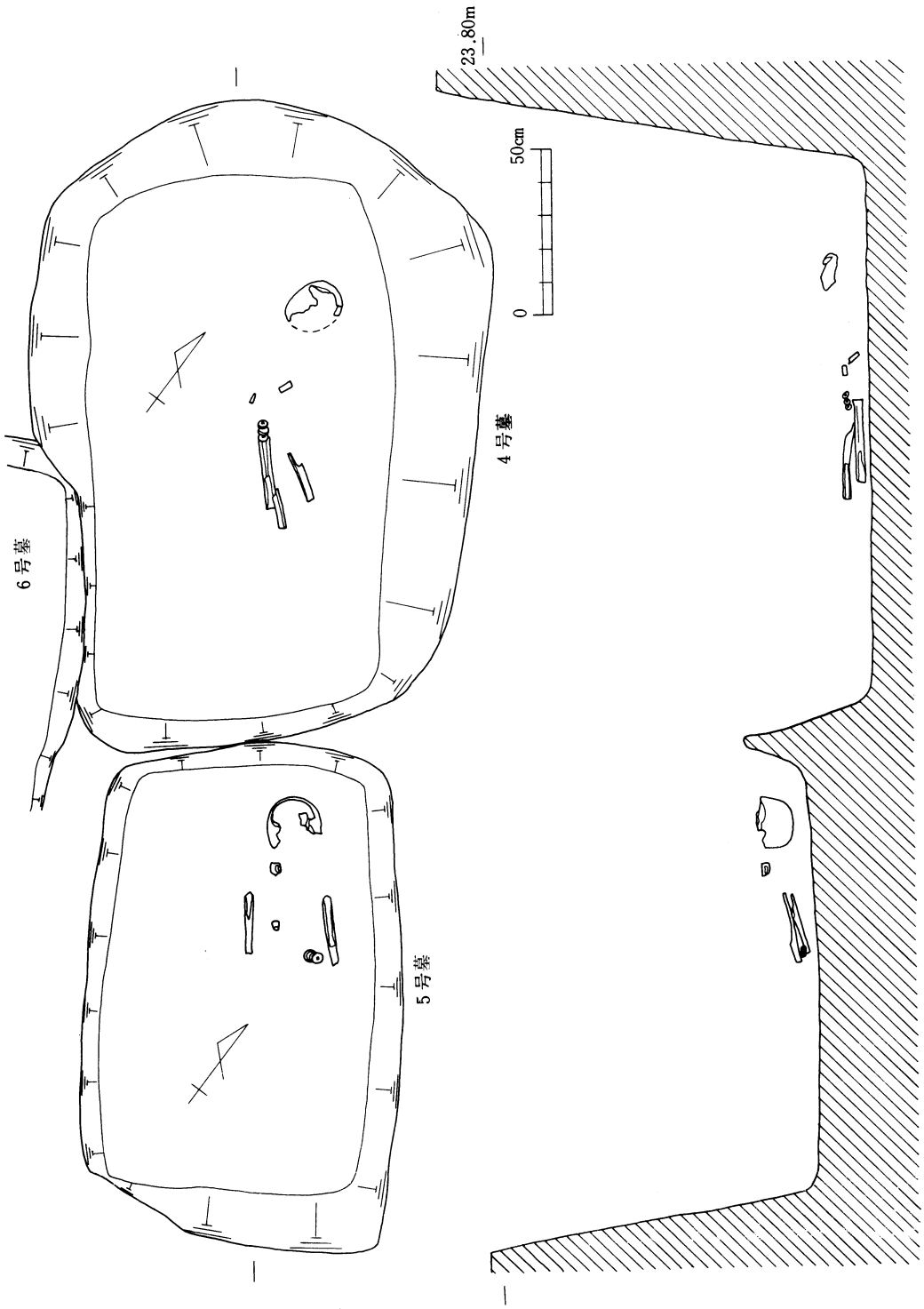
長軸 150cm，短軸93cm，深さ 100cmを測る。平面形は方形を呈し，長軸をN 28° Wにとる。副葬されていた６枚の「寛永通寶」の周囲には布きれが付着して錆ており，古銭２枚は腐蝕が進んでいた。

６号墓（９号人骨）

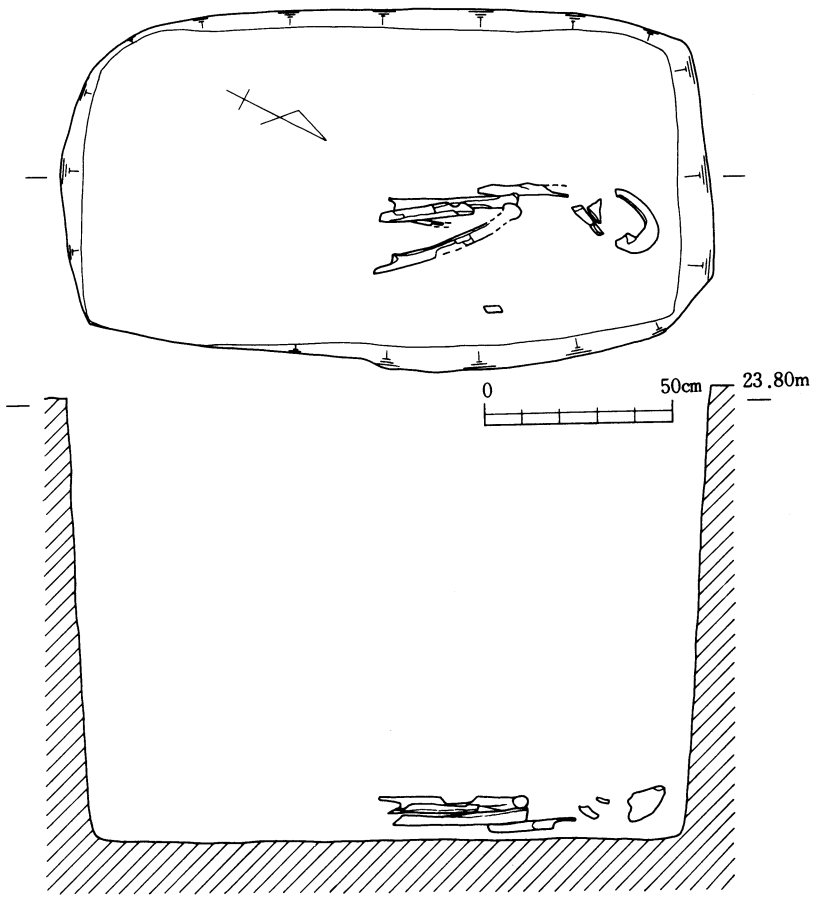
北西壁は４号墓と切り合っているが，新旧関係は不明である。長軸 173cm，短軸95cm，深さ120cmを測る。平面形は方形で，長軸をN 18° Wにとる。副葬されていた古銭は「寛永通寶」が６枚，「景徳元寶」が１枚であった。



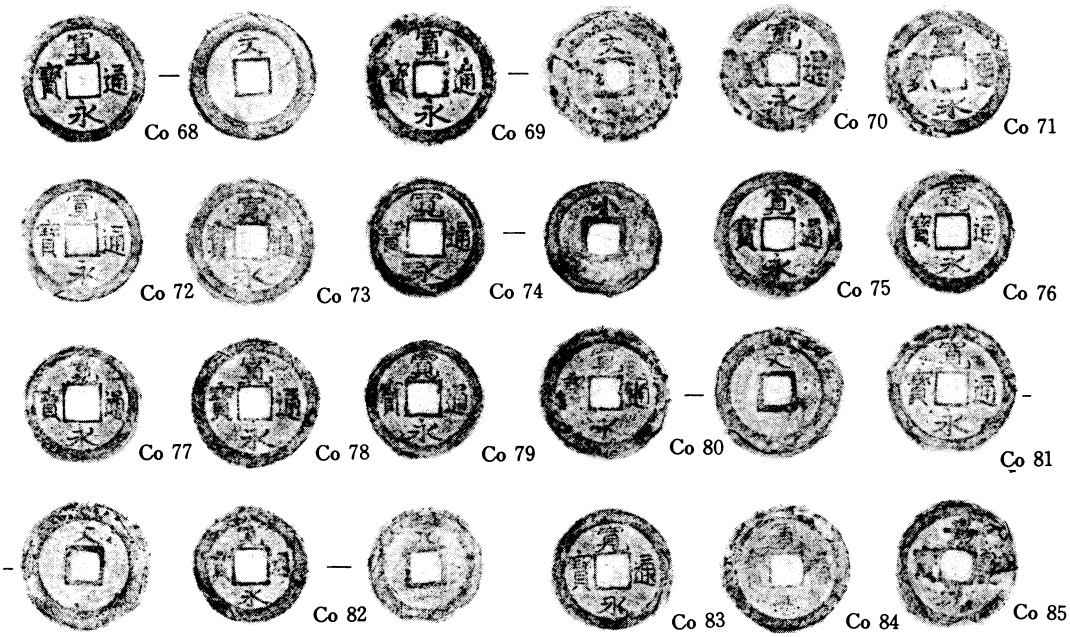
第299図　２・３号墓



第300図　4・5号墓



第301図　6号墓



第302図　墓坑出土古銭拓影 (2/3)

番号	図番	墓坑	外径(cm)	厚さ(cm)	備　考	番号	図番	墓坑	外径(cm)	厚さ(cm)	備　考
1		1	2.61	0.16	背上に「文」	21		3			腐蝕が進む
2		1	2.54	0.15	背上に「文」	22	Co74	4	2.31	0.14	背上に「小」
3		1	2.55	0.15	背上に「文」	23	Co75	4	2.55	0.14	
4		1	2.33	0.13		24	Co76	4	2.35	0.12	
5		1	2.43	0.13		25	Co77	4	2.30	0.12	
6		1	2.42	0.17		26	Co78	4	2.60	0.12	
7		1	2.54	0.12		27	Co79	4	2.37	0.14	
8	Co68	2	2.52	0.14	背上に「文」	28		5	2.52	0.15	背上に「文」
9	Co69	2	2.55	0.17	背上に「文」	29		5	2.47	0.11	
10	Co70	2	2.51	0.14		30		5	2.48	0.16	
11	Co71	2	2.52	0.15		31		5	2.42	0.19	布きれが付着
12	Co72	2	2.45	0.14		32		5			腐蝕が進む
13	Co73	2	2.47	0.12		33		5			腐蝕が進む
14		2			腐蝕が進む	34	Co80	6	2.55	0.15	背上に「文」
15		3	2.52	0.15	背上に「文」	35	Co81	6	2.53	0.13	背上に「文」
16		3	2.57	0.14		36	Co82	6	2.29	0.13	背上に「元」
17		3	2.46	0.14		37	Co83	6	2.41	0.11	
18		3	2.42	0.12		38	Co84	6	2.52	0.15	
19		3	2.36	0.14		39	Co85	6	2.43	0.14	「景徳元宝」
20		3	2.32	0.14		40		6	2.48	0.15	

第57表　墓坑出土古銭一覧表

(3) 副葬品

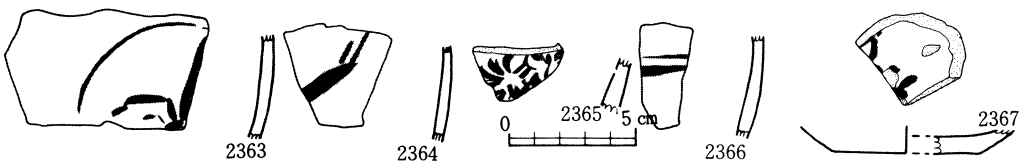
古銭は，6号墓で出土した「景徳元宝」1枚の他はすべて「寛永通宝」であった。1基の墓坑に6枚か7枚，胸の部分に1つに固まって出土し，布ぎれも付着していることから，布袋に入れて首にかけて副葬したものと思われる。

数珠は，1号墓で出土し，古銭に付着していた。他の墓坑から検出されなかったのは，木製の数珠のため腐蝕してしまったのであろう。

9　攪乱層出土の遺物

I層（表層）より出土したもので，磁器，陶器類である。

器種は碗，皿，鉢，猪口，高坏，茶家及び茶家蓋，摺鉢，鉢，壺等で，伊万里焼，薩摩焼が主体である。



第303図　墨書土器

(1) **墨書土器**

2363～**2366**は焼成の良い土師質の壺で，同一個体と思われる。小片のため全体の構図は不明だが，戯絵と思われるものを画く。**2367**は見込み底に墨書するが，細片で判読不可能である。

(2) **碗類**（第304，305図）

磁器染付碗が主体で，器形は碗形，端反，筒形である。碗形は口径９～11.5cm，器高5～6.1cm，底径 3.4～５cmを測る。**2385**は抽象化した梅を画く厚手のものである。**2386**，**2388**は鳥と幾何学文を交互に配し胴部下位には３条の圏線内に「○」，「×」を巡らす。**2387**は竹，梅を画き見込み口縁及び底には圏線，「壽」を画く。**2389**は褐色釉の陶器碗である。見込みに重ね焼痕がある。**2390**～**2392**は磯浜を画く。**2391**の見込み底には４個の目痕，**2392**は磯浜を画く。

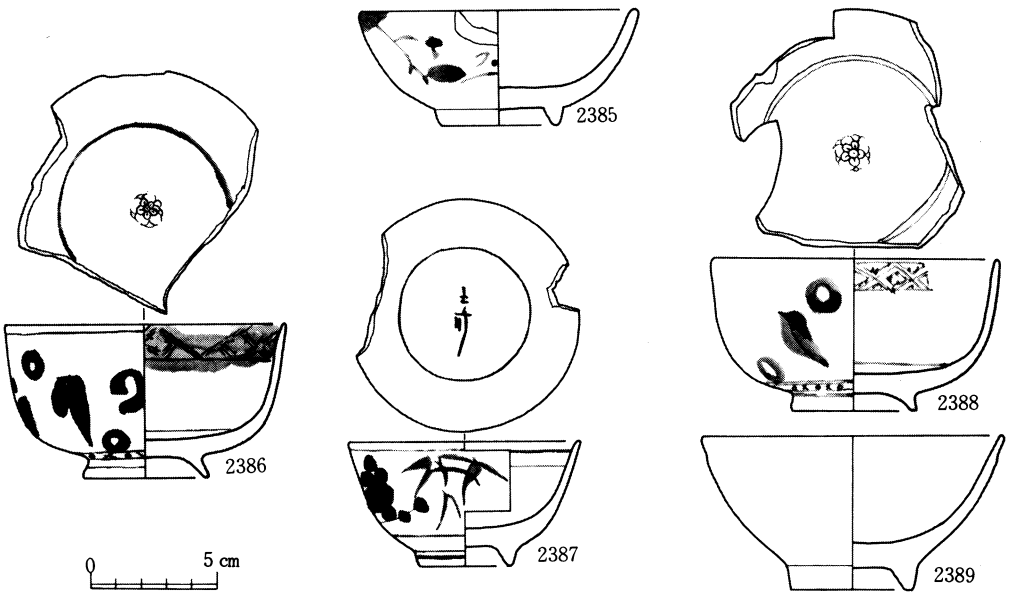
2394～**2397**は端反碗で口径10.3～11cm，器高５～5.5cm，底径4.5～５cmを測り，唐草文及び幾何文，見込み底には磯浜，見込み口縁部には雷文，襷文を巡らす。**2397**は呉須が流れ良くない。また，**2396**の胴部には焼成時において他の碗片が付着している。**2398**は圏線内に唐草文，見込み口縁部に圏線，文字を画く。

2399は草文を画くもので見込みには粗い重焼の痕が残る。内外面とも貫入が入る。

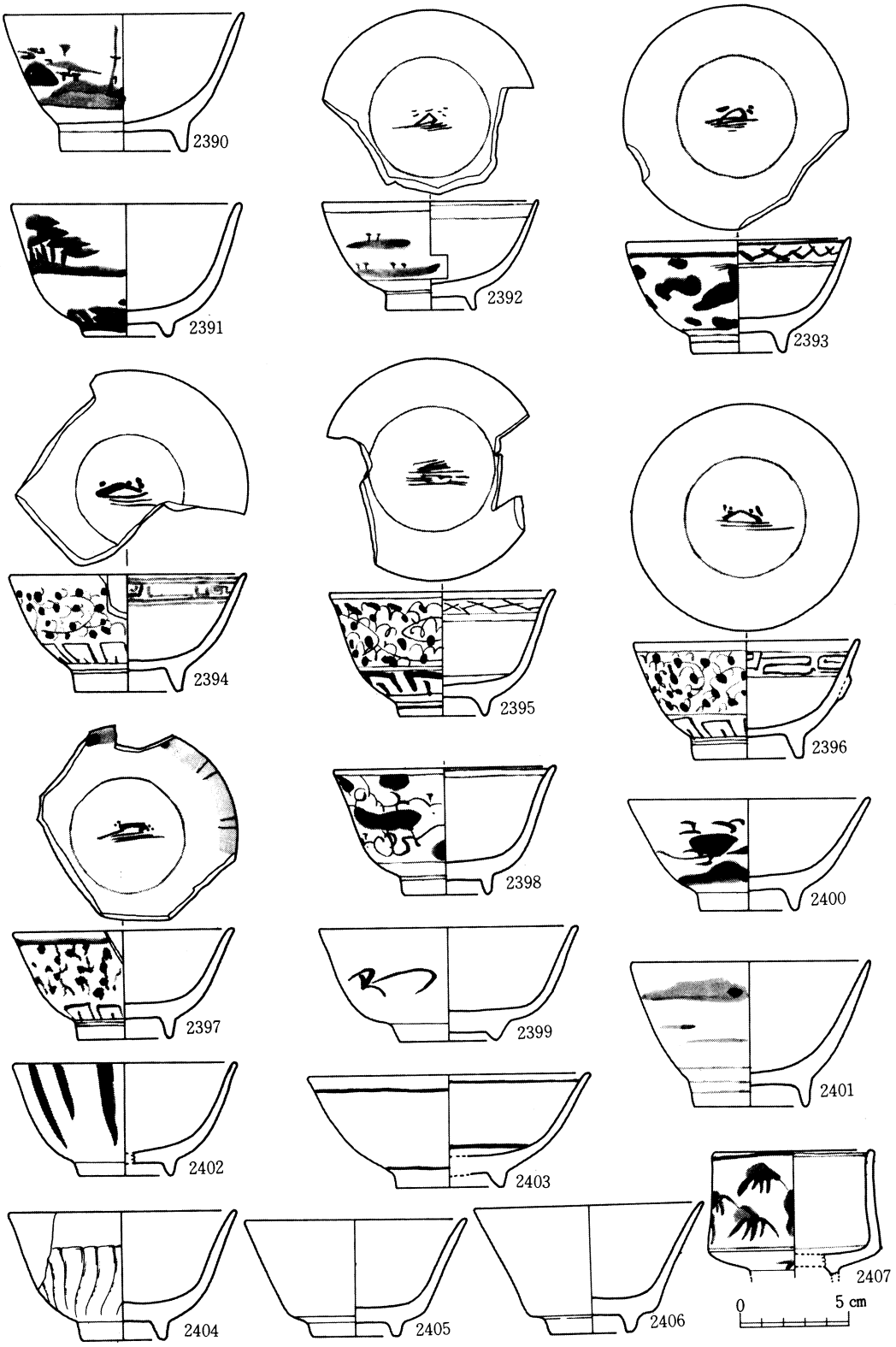
2400，**2401**は磯浜を画いたもので，**2400**の見込みには重ね焼痕が残るほか，文様は画かれていない。**2402**は口縁部から胴部にかけ竹笹様の文様を長短交互に画く。内外面とも貫入が入る。

2403は内外面とも圏線を巡らすだけの碗である。高台はちりめんじわ状である。**2404**は胴部に面取りされたもので白釉も良くのる。**2405**，**2406**は器体が直線的に開き，高台際も稜をもつ。

2407は筒形碗で雪持笹の文様をあしらう。



第304図　碗類(1)


2390
2391
2392
2393
2394
2395
2396
2397
2398
2399
2400
2401
2402
2403
2404
2405
2406
2407
0
5 cm

第305図　碗類(2)

(3) **皿**（第306・307図）

2408～**2422**が皿である。

2408は碁笥底状を呈するもので口径13.7㎝～14.2cm，器高3㎝～3.7cm，底径4.5㎝～7.5cmを測る。見込み口縁部には唐草文，松葉文及び圏線を画く。**2408**，**2409**の見込み底には五弁花文を画くが，**2410**にはない。また重ね焼の痕がみられ，厚手の作りである。**2411**は高台になり，見込み口縁に襷文を画く。還元焼成のためか灰色に近い色調を呈する。

2412は裏文に唐草文，見込み口縁部に唐草文，襷文，見込み底には簡略化された松竹梅を画く。**2413**は小形の皿で見込み口縁部に松皮菱，底に圏線及び松竹梅を画く。裏文に桐と幾何学文を濃く画く。**2414**～**2418**も小形の皿で口径8.8～9.7cm，器高2.8～2.9cm，底径3㎝を測るもので，**2414**は圏線と斜格子文，裏文に斜格子文，**2415**は圏線と文字，裏文に唐草文を画く。

2416は見込み口縁部の菊花は赤釉，底の松圏文及び葉文は緑釉を使用する。

2417，**2418**は裏文に5条の曲線文を口縁部から底部にかけて画く。**2418**は粗い貫入が入る。

2419は見込みに鳥を濃い呉須で画く。**2420**，**2421**は見込みに山水画を画くもので，**2420**は淡く画かれ口唇部は鉄釉で縁取りをする。**2421**は濃く画き上げ，裏文には圏線と唐草文を画く。

2422は見込み底に正円を重ね，周辺には磯と思われる文様を画き，口唇部に鉄釉を塗る。

(4) **鉢**（第307図）

2423は復元口径15.6cmを測るものである。文様は胴部，見込みとも破片のため詳細は不明である。**2424**は復元口径15cm，器高7㎝，底径 5.7cmを測るもので，胴部には花文を散らし，見込み口縁部には波状の口縁に合わせ花弁状に区画し，底には松と思える文様を圏円状に配する。いずれも赤釉を用いる。

(5) **猪口**（第307図）

2425～**2435**までが猪口である。器形は碗形，筒形，端反等に分けられる。**2425**～**2430**は口径6.4～8.8cm，器高4.7～5.1cm，底径2.9～4.5cmを測る。文様は雲あるいは松様の文様を画く。

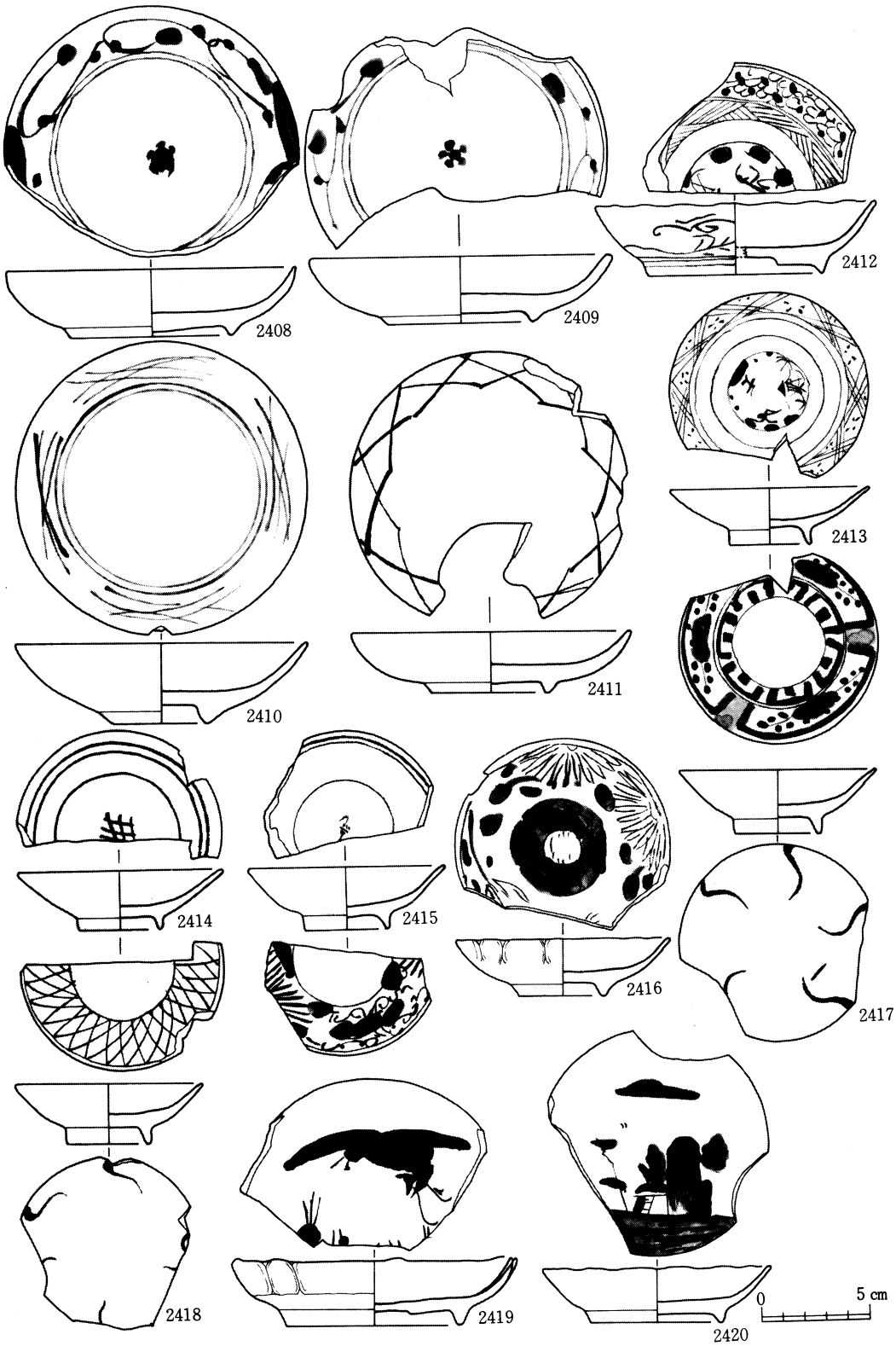
2431はこうもり，**2432**は内外とも唐草文を画き，高台内には文字を画くもので，**2433**の磯浜文をもふくめ端反となる。**2434**，**2435**は筒形で，口径6.6，7.1cm，器高6，5.8cm，底径5，4㎝を測る。**2434**の文様は全体を欠き不明，**2435**は唐草文，見込み口縁部に松皮菱，見込み底に五弁花文を画く。**2436**～**2440**は口径 3.7cm，器高 2.7cm，底径 1.7cm前後を測る小形のもので，文様は画かれていない。

(6) **高坏**（第307図）

2445～**2447**は高坏形の碗器で，口径6～7㎝，器高5～6㎝，底径4㎝を測る。脚部を除き白釉がかかる。

(7) **その他**（第307図）

2441は鉢形の土器である。**2441**，**2442**は染付，**2443**は青磁である。なお**2442**の見込み底には径2㎝の孔がある。**2444**は酒器と考えられるもので，器面には草花文を呉須で画く，**2448**は褐釉がかかるものである。


2408
2409
2410
2411
2412
2413
2414
2415
2416
2417
2418
2419
2420
0
5 cm

第306図　皿



第307図　皿・鉢・猪口・高坏・その他

(8) **茶家・茶家蓋**（第308図・第309図）

2449～**2463**，**2466**，**2467**は茶家及び茶家蓋である。茶家は胴部が丸いものと，尖り稜線をもつもの，大形で，注口をつまみ出したもの等がある。いずれも薩摩焼である。蓋も同様に薩摩焼であり，**2462**，**2463**はいわゆる山茶家の蓋であり大形である。

(9) **茶入・蓋置**（第308図）

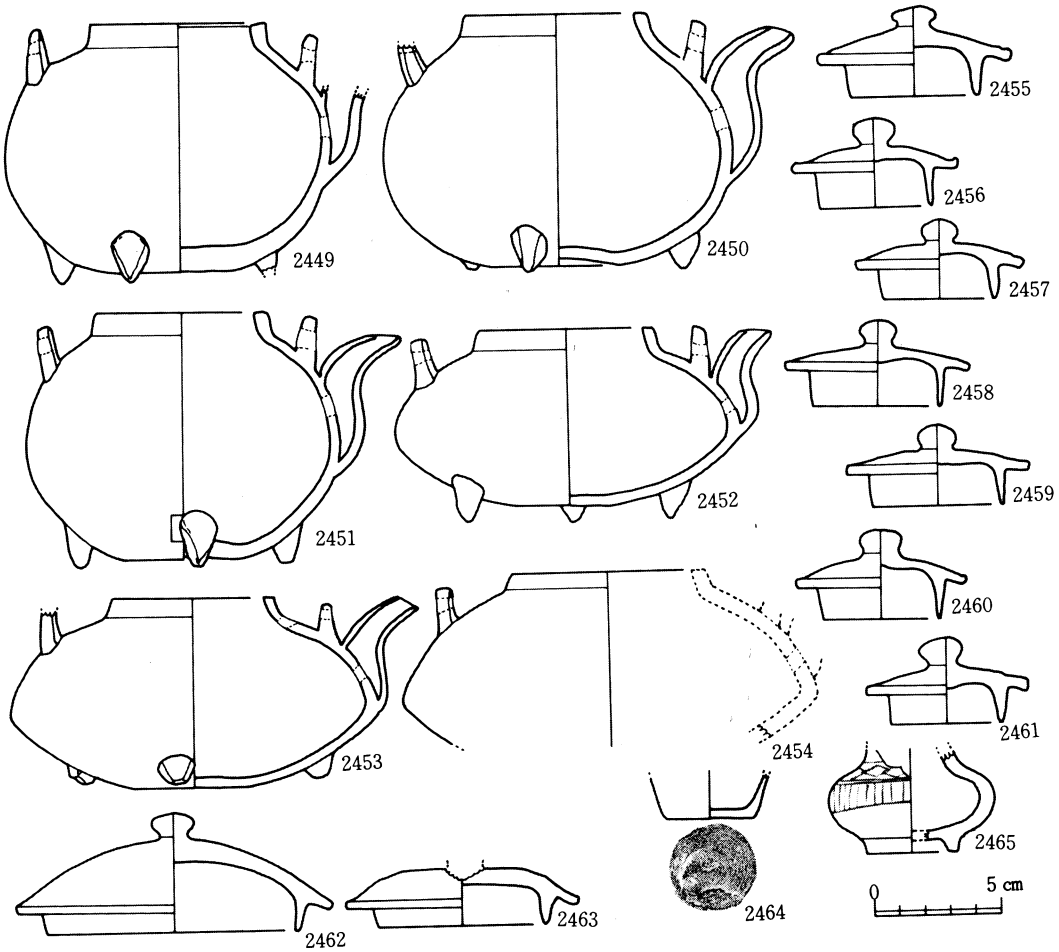
2464，**2465**がそれで，**2464**は陶器，**2465**は磁器である。いずれも薩摩焼である。

(10) **鉢・摺鉢**（第309図）

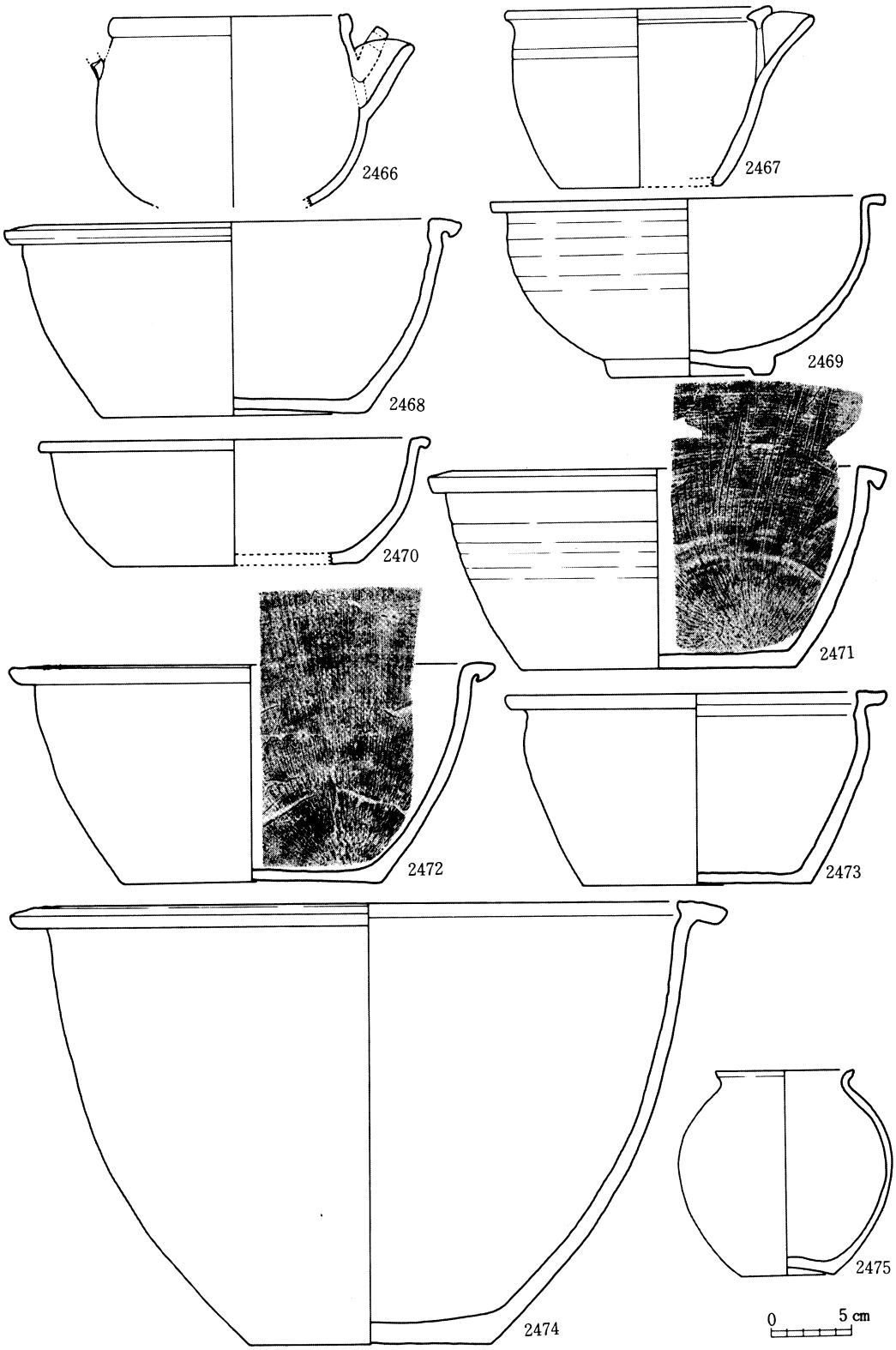
2468～**2474**が鉢及び摺鉢である。いずれも薩摩焼である。カキ目は見込み底から口縁部にかけて細く刻まれていた。

(11) **壺**（第309図，第310図）

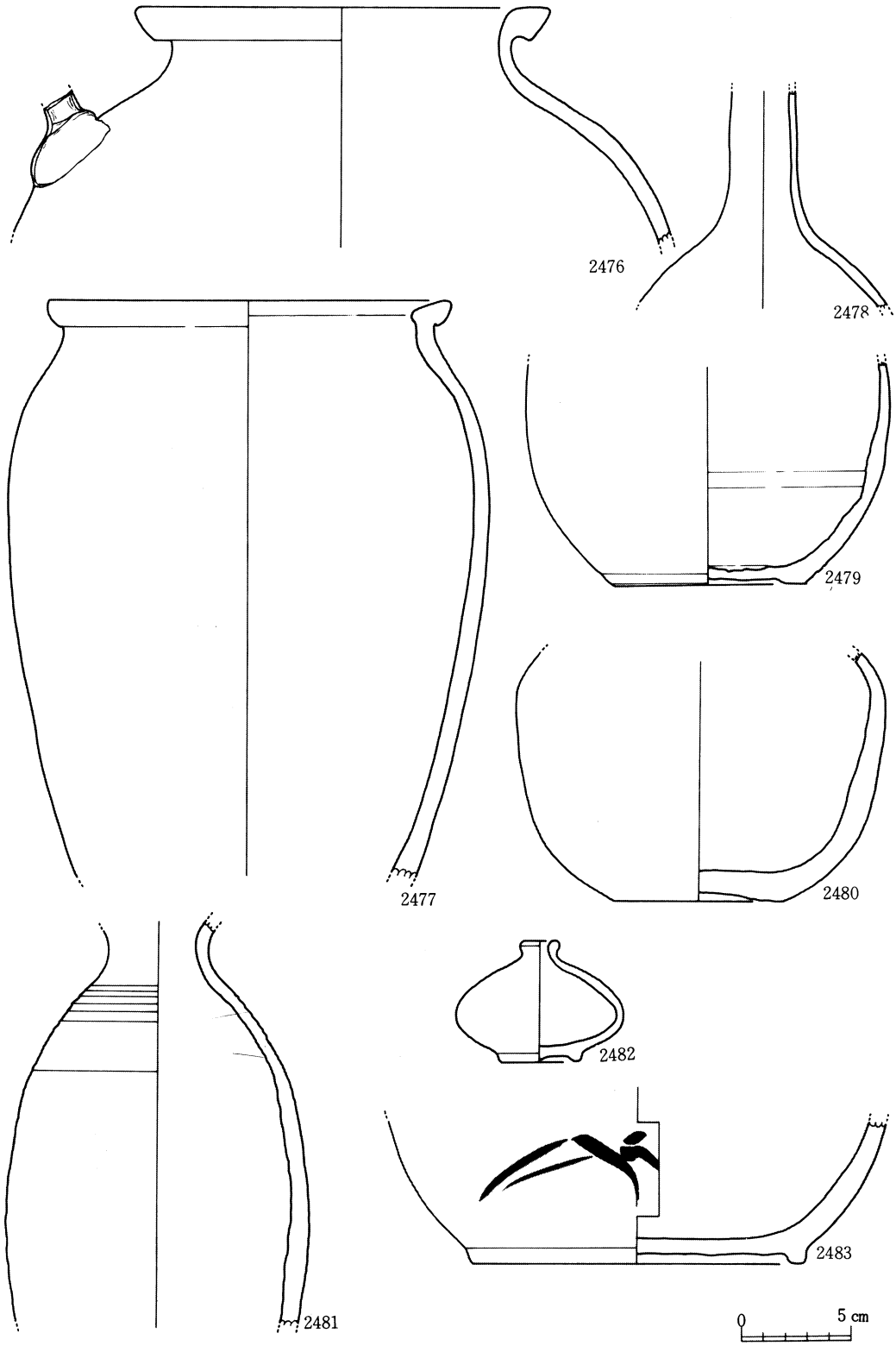
2475～**2483**までが壺である。このうち，**2481**は琉球焼の壺，**2482**は還元焼成された油壺，**2483**は染付壺である。他は褐釉がかかる薩摩焼と考えられる壺である。



第308図　茶家・茶家蓋・その他



第309図　茶家・摺鉢・鉢・壺



第310図　壺

第8章　まとめ

西ノ平遺跡でも旧石器時代から江戸時代までの長い期間にわたる生活跡が検出され、それぞれの時期において重要な問題を呈示している。以下、時代を追ってまとめておく。

1.旧石器時代

成岡遺跡と同様、ナイフ文化と細石器文化の二時期のものが出土している。出土数は少ないが、細石核の中には加治屋園技法を含むなど貴重である。

2.縄文時代

早期の手向山式土器から晩期の黒川式土器まで6種類の土器が出ているが、個々の数は少ない。その中では晩期の黒川式土器が多く出土しており、それに伴うとみられる軽石製岩偶も出土している。手向山式土器は完形になるものである。石器には石鏃・石匙・石斧・叩き石などがある。

3.古墳時代

遺構などは確認されていないが、前期から後期まで各種の土器が出土している。この中には肥後系の土器と思われる複合口縁のものや、古式須恵器、7世紀の須恵器など他地方のものも含まれている。祭祀遺物である手づくね土器もある。

4.奈良～鎌倉時代

多くの遺物とともに掘立柱建物、土坑、溝状遺構などが検出された。

掘立柱建物は14棟がまとまったが、平安時代のもの10棟、鎌倉時代のもの4棟である。平安時代のものは2間×3間のものが9棟（うち1棟は総柱建物）、2間×5間のものが1棟（片面ひさしで、間仕切りがある）である。これらは主軸方向や出土遺物からして、少なくとも2時期以上（前期～後期）のものと思われる。鎌倉時代のものは1間×2間のもの、2間×3間のもの（総柱建物）、2間×5間のものが1棟ずつと、あと1棟は3間とあと一方が5間以上である。このうち3棟は柱痕跡が残っており、2棟には礎板状根石があり、規模が大きい。掘立柱建物2の柱穴には多量の遺物が含まれており、13世紀頃の一括資料として貴重である。これらも2時期のものであるが、遺物からみると大きなへだたりはない。

土坑も多く検出された。土坑Fは周囲に柱が巡っており、屋根のあるものである。土坑Nと土坑Oは並行しており、規模・深さとも大規模であるが、性格等は類例を待って考えたい。

溝状遺構は3本あり、これも平安時代のもの（2と3）と鎌倉時代のもの（1）がある。1は途中に陸橋部がある。

道路跡も南端に集中して検出された。鎌倉時代にはなくなっていることから、それ以前のものと思われる。少しずつ場所を変えている。

祭祀場と思われるものが3ケ所に検出された。土器を積み重ねたもの、1列に並べたもの、2個の杯を合わせたものがあり、土器を積み重ねたものの中には底部に穴を打ち欠いたものや古銭もあった。すべて糸切り底の土師器皿や杯であり、平安時代後期以降のものである。この

他に柱穴中に2枚の古銭を置いたものが3本ある。掘立柱建物2のように柱穴中に完形土器をいれるのも一種の祭祀であろう。

以上の遺構は主として平安時代のものが北半に、鎌倉時代のものが南半にあった。また建物はすべて掘立柱であったが、25K区では包含層の下に扁平な石が1枚あり、東側には礎石建物の存在も予想できることを指摘しておきたい。

遺物も多く出て、長期にわたっている。これらの一括資料もあったが、時間不足のため分類すらできなかった。

土師器は多量におよぶが、圧倒的に皿・杯が多い。大きくヘラ切り底と糸切り底とに分かれその分類も可能である。坏・埦のなかには墨書土器・刻書土器もあったが、これらはヘラ切り底であり、平安時代前期のものである。

黒色土器も多く出土したが、このように多量出土したのは本県では初めてである。形態的にも多くのものがある。黒く変化したものの他に内面に朱の塗られたもの、内外をていねいに研磨したものもある。

須恵器は9世紀前後のものと、13世紀頃のものとがある。9世紀前後のものには坏蓋・坏身・壺・鉢・甕などの器種があり、その多くは荒尾・宇城・八代など肥後の窯跡群から持ってきた可能性がある。特に底にタタキのある壺、車輪文の甕など荒尾窯跡群と断定できるものもあり、色あいなど荒尾のものが主体となるようである。最近みつかった菱刈町岡野窯跡群のものと予想される坏蓋・坏身・甕も多い。坏蓋を利用した硯も4点ほどあり、朱墨の跡を残している。壺の中には器形からみて九州以外に生産地を考えねばならないものもあり、その搬入先の広さが注目される。13世紀頃のものは鉢と甕がある。この時期、九州では熊本県樺番丈窯跡しかわかっておらず、これらの生産地ははっきりしないが、この中には岡山県の亀山焼、兵庫県の魚住焼などに類似したものがある。今後、胎土分析など科学分析も必要となろう。

磁器も各種多時期にわたるものが出てきた。204ページの分類図にあるように9世紀から16世紀まで長期にわたるが、平安時代のものはまだ出土例が少なく、荊州窯系白磁、越州窯系青磁の出土は貴重である。

この他に円面硯・焼塩壺・帯金具など県内で初めてのもの、あるいは緑釉土器など少数しかないものなど豊富な遺物が出土しており、まさに平安時代遺物の宝庫ともいえよう。

5.室町・安土桃山時代

遺物は磁器と陶器のみである。座位の墓2基と、火葬場1基が検出された。人骨も残っており、中世墓研究の貴重な資料となろう。

6.江戸時代

享保14（1729）年～寛政6（1794）年の墓石が5基あり、その下に6基の墓坑があった。近くに掘立柱建物が6棟検出され、多くの土器があった。これは包含層の中に含まれており、時期の限定される資料として貴重である。特に、平佐焼の当地として、その分類・編年は今後、急がれる作業となろう。今回資料化できなかったものも今後資料化せねばならない。

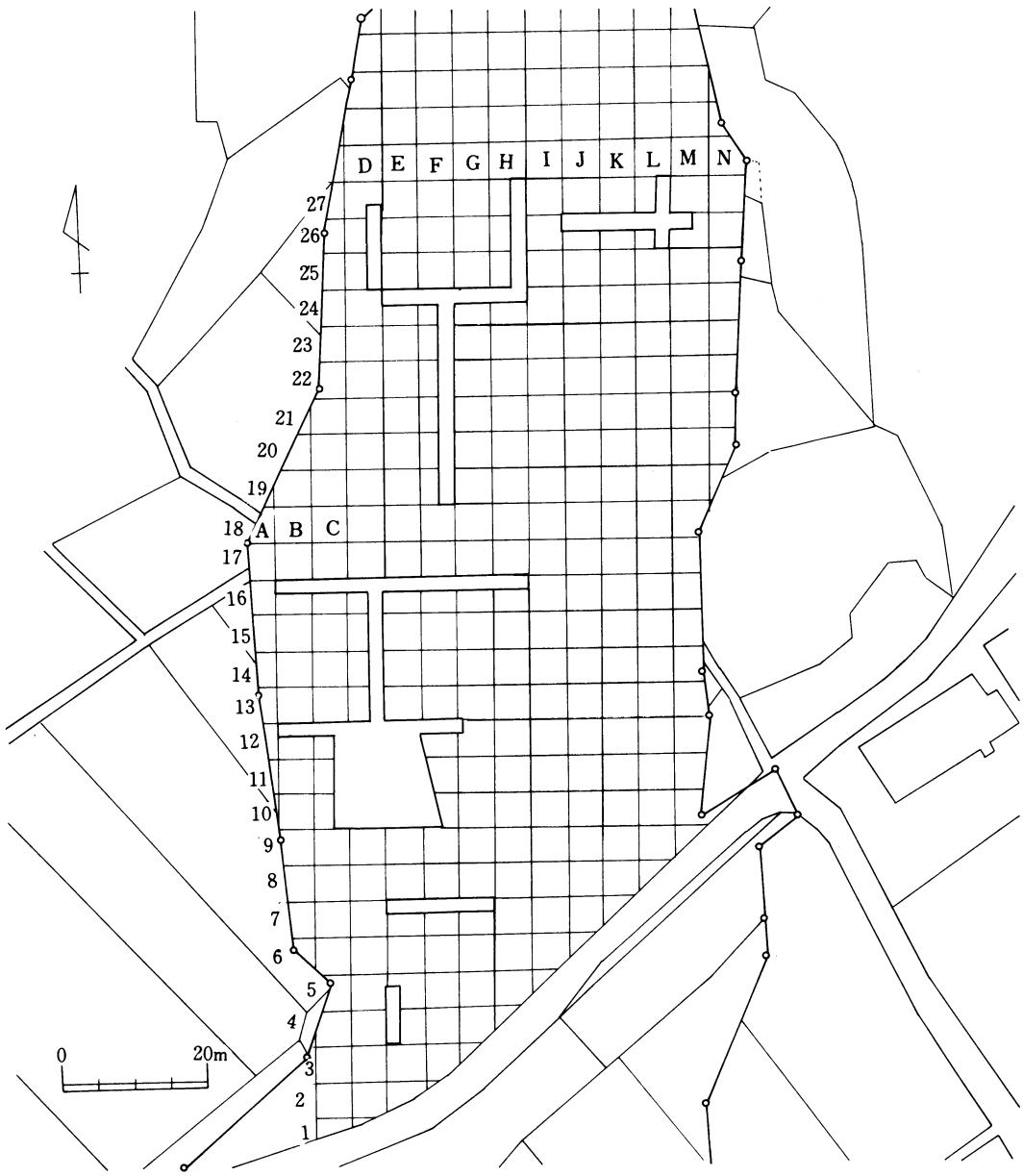
Ⅴ　上ノ原遺跡の調査

第１章　概要
第２章　縄文時代
第３章　古墳時代
第４章　奈良～鎌倉時代
第５章　室町・安土桃山時代
第６章　まとめ

第1章　概要

上ノ原の台地は西ノ平の台地よりさらに約５ｍ高く，最高位の台地である。南へはしだいに下っているが，北側は湯ノ谷へ急傾斜で落ちている。台地は東西の方向に長く，バイパスはその東端を通っている。

調査は未買収地を避けて，ほぼ全域を網羅するようにトレンチを設定した。工事用中心杭の



第 311図　上ノ原遺跡トレンチ配置図

No125を基点に5mグリッドを設定し、南から北へ1・2……とし、西から東へA・B……と名づけた。トレンチは2m幅で11本設け、縄文式土器の散布がみられた10～12C～F区は拡張した。総面積は 580㎡である。

第2章　縄文時代

10～12C～F区ではアカホヤ層中に縄文式土器が包含されていたために拡張して調査をしたが、出土状況は密でなく、割と疎であった。

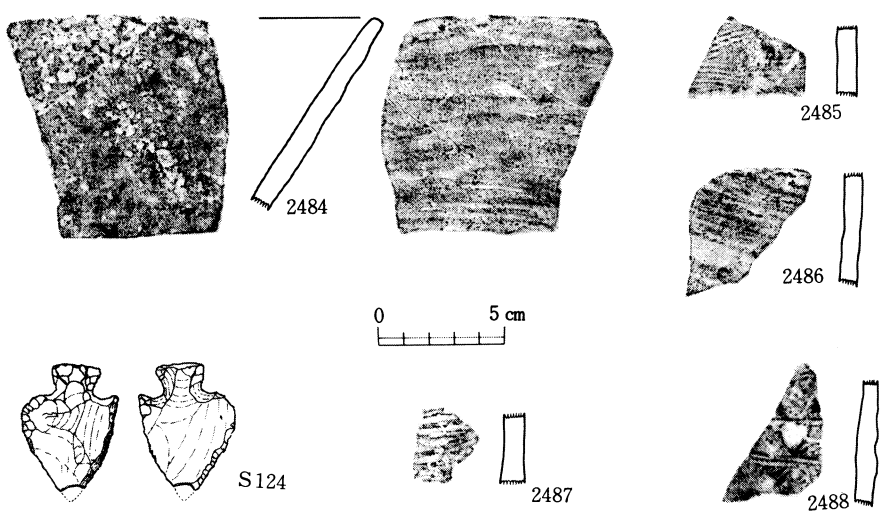
土器は晩期の粗製土器である。**2484**は唯一の口縁部で外へまっすぐ開きながら伸びる深鉢形土器である。外面は横方向のナデ整形、内面はヘラミガキで仕上げており、焼成は良い。**2487**は外面に貝殻条痕の跡をよく残しているが、他の破片も貝殻でナデたあと、さらにその上をヘラ様のものでナデており、部分的に貝殻条痕を残している。内面は**2486**と**2487**が研磨仕上げ、**2485**と**2488**はナデ仕上げである。石英・黒雲母粒を多く含む、割合に細かい土を使用しており焼成は良好である。外面にはススが付着している。

石器としては石匙が1点出土した。先端を欠いているが、ほぼ完形の縦形石匙で、つまみはほぼ中央にある。縦長剝片の打瘤部分をつまみとしており、縁辺部を細かく剝離したものである。安山岩製で、やや磨耗している。20—F区の3層中に包含されていた。他に黒曜石の剝片などが出土している。

第3章　古墳時代

全域に古墳時代の土師器が散布しているが、集中している所はなく、出土量も多くない。

甕形土器（**2489**～**2492**）は口縁部がくの字状に外反しており、底には脚台が付く。**2489**は頸部から口縁が2段階に屈曲しており、口縁直径22.5cmを測る。外面は縦方向のヘラナデ、内面



第 312図　縄文時代の遺物

は横方向のヘラナデで仕上げている。2490は口縁直径25cmを測り、外面・内面ともヘラナデで仕上げている。両方とも外面にはススが付着している。脚台は高さ4.5 mの高いものと、2 cmほどの低いものとがある。

壺形土器（2494～2497）は口縁部・底部・胴部がある。口縁部は直径17cmを測り外へ強く屈折するものと内側へ向かって口縁がやや外反ぎみに直立するものとがある。ともにヘラナデで仕上げている。胴部にはきざみのある、断面半円形の突帯がある。底部は安定した平底であるが、直径7 cmと小さい。

2493は鉢形をした小型の手づくね土器で丸底である。

第4章　奈良～鎌倉時代

土師器・須恵器・磁器が出土している。

2498は内黒土師器埦で、口縁部が外へ反っている。内面は横方向のヘラミガキ、外面は横方向のナデで仕上げる。外は乳茶褐色を呈し、内面には光沢がある。

須恵器には杯（2499・2500）と甕（2501～2503）がある。2500は口縁直径12.8cm、底部直径8.5 cm、高さ4.3 cmを測る完形品である。底部から口縁へまっすぐ伸びており、口縁端部は丸く収めている。底は平底で、ヘラ切りで仕上げる。外面には浅い凹凸があるが、内面はていねいにナデている。明るい緑灰色を呈しているが、口縁付近は青黒くしている。やや軟質の焼きである。2499も同じような器形をしているが、端部は細くなっている。外面は赤みがかった茶褐色を呈しており、内面は茶がかった灰緑色を呈す。焼成は良好である。2502は外面がこまかい格子タタキ、内面が同心円タタキである。2501は灰緑色を呈しており、外は条痕タタキ、内面は同心円タタキで仕上げる。2503は外面に自然釉がかかっており、正格子タタキ、内面は条痕タタキで仕上げる。いずれも焼成良好である。

青磁碗（2504）は外面にしのぎ蓮弁があり明緑色釉がかかっている。灰色の土を使っている。

白磁は碗と皿がある。碗（2505・2506）は口縁部近くがくぼんでいるもので、緑がかった灰白色釉がかかっている。灰白色土を用いて、内面にはヘラナデ痕跡がある。部分的に貫入がみられる。皿（2507）は口縁内面の釉がかきとられる口はげ皿で、口縁直径11.5cmを測る。灰白色の土を使い、青みがかった白灰色の釉がかかっている。

第5章　室町・安土桃山時代

出土品は磁器のみで、青磁・白磁・染付がある。

青磁は3種類に分かれる。ひとつはやや内反ぎみの口縁をもつ碗（2508・2509）で、外面に蓮花文がある。両方ともヘラ描きによるもので、2509は縦線の上に波状文が描かれる。2508は縦線のみである。灰色がかった土を用いて貫入が多い。2509は薄緑色を、2508は暗緑色をしている。2510は口縁部が直立しているもので、外面の端部付近に1条の沈線が描かれている。明るい緑色をしており貫入が多い。2511は口縁が外反するもので釉が厚い。白灰色の土を用い、

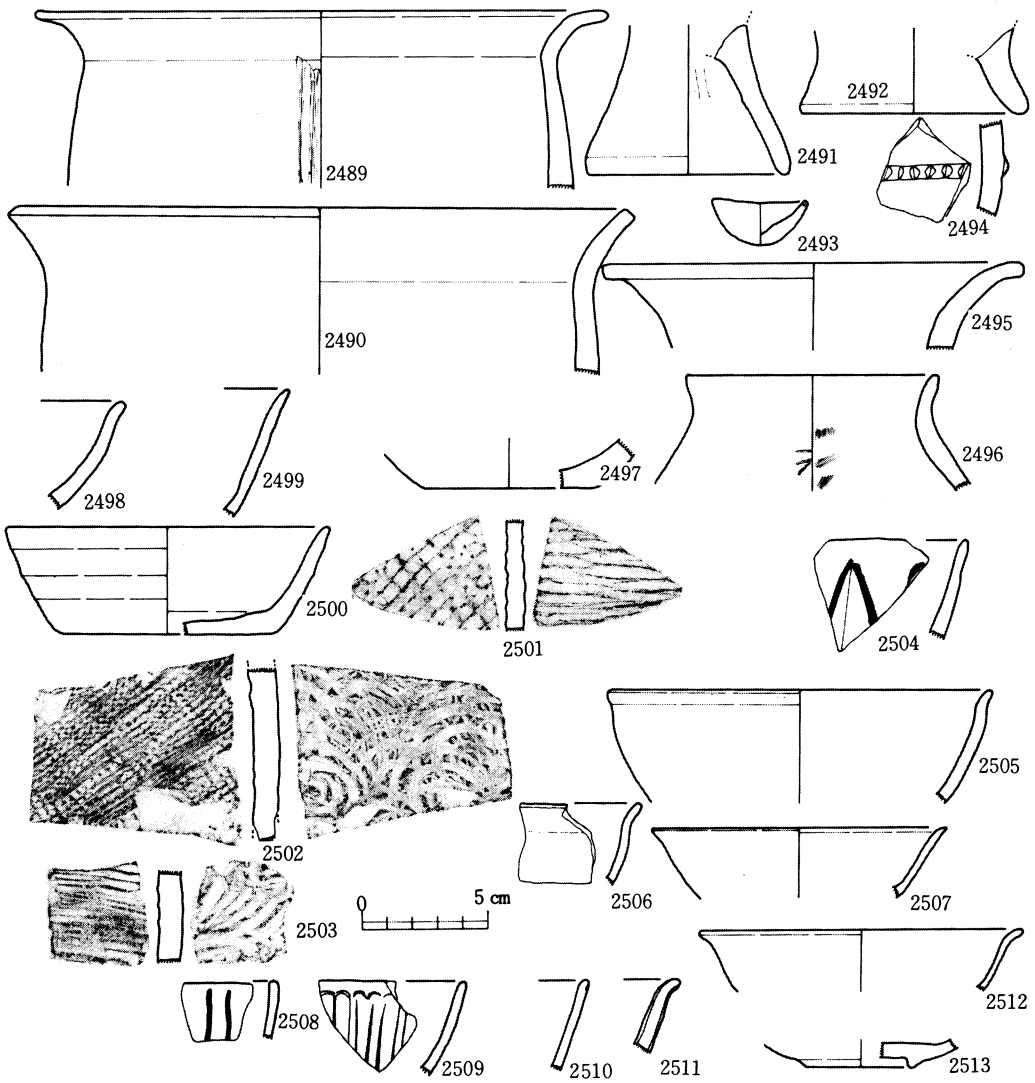
暗緑色の釉がかかっている。

白磁は口縁が外反する皿（**2512**）で、灰白色土を使い、白色の釉がかかっている。口縁部に一部釉切れがある。

2513は低い高台のつく染付皿（**2513**）で、高台内面に釉切れがある。内底部に２条の圏線に囲まれた文様がある。

第６章　まとめ

当遺跡も長期にわたって使われていたが、その中心は台地南端部（10～12区付近）であった。時期的には縄文時代晩期、古墳時代前期、平安時代、鎌倉時代、室町時代の遺物が出土している。



第313図　古墳時代～室町時代の遺物

Ⅵ　人骨所見

第１章　成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨

第２章　成岡・西ノ平遺跡出土の幼小児骨

第1章　成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨

松下孝幸※　　石田　肇※
佐熊正史※※　　用丸英博※※※

はじめに

鹿児島県川内市中福良町に所在する成岡遺跡および西ノ平遺跡の1981年と1982年の調査によって，中世人骨と近世人骨とが出土した。

九州における中世，近世人骨の調査例はまだ少ないのが現状で，鹿児島県では中世人骨の出土例はほとんど皆無に近く，また近世人骨の例も少ない。

本遺跡から出土した人骨の保存状態は必ずしも良好なものではなかったが，九州における中世，近世人骨の貴重な出土例であり，今後の歴史時代人骨研究の数少ない資料となるものなので，できる限り詳細な観察および計測を行った。その結果を報告したい。

資　　料

成岡遺跡からは近世人骨が，またこれに隣接する西ノ平遺跡からは中世人骨と近世人骨とが出土した。中世墓の墓壙はやや浅いものであったが，近世墓は宮崎県の宮崎学園都市堂地東遺跡の場合と同様，その墓壙は深いものであった。また近世墓には墓石が存在していたので，人骨の所属年代は明確である。

表1　資　料　数

	中世					近世					
	男性	女性	不明	幼・小児	小計	男性	女性	不明	幼・小児	小計	合計
成岡	0	0	0	0	0	8	4	9	2	23	23
西ノ平	1	1	1	0	3	4	1	0	1	6	9
合計	1	1	1	0	3	12	5	9	3	29	32

両遺跡から出土した人骨の総数は表1に示すとおり，32体であり，そのうち中世人骨は3体、近世人骨は29体であった。中世人骨のうち1体（2号人骨）は火葬骨であるが，これは当時の火葬場跡と考えられている場所から検出したものなので，あるいは1体分の人骨ではないのかもしれない。29体の近世人骨のうち26体が成人骨で，残りの3体は幼・小児骨であった。また26体のうち12体が男性，5体が女性で，残りの9体は性別を明らかにすることができなかった。なお，各人骨の性別・年令は表2のとおりである。

なお，中世人骨は室町時代に，近世人骨は近世中期に属する人骨である。

※長崎大学医学部解剖学第二教室
※※　〃　大学院
※※※　〃　研究生

両遺跡のうち出土数は成岡遺跡からの方が多いが，保存状態はむしろ西ノ平遺跡の方が良かった。

計測方法はMartin-Saller（1957）によった。比較資料としては，同じ鹿児島県の松之尾中・近世人（松下，1981），熊本県の桑島近世人（脇，立志，1970），興善寺四郎丸（松下，1980）川田京坪近世人（松下，他，1980），宮崎県の宮崎学園都市近世人（松下，他，1983），および関東の例として無縁坂近世人（森田，他，1960）を用いた。

なお，幼・小児骨については，分部が別項で詳述しているので，本稿では成人骨についてのみ報告する。

表２　出土人骨一覧

人骨番号	性別	年令
（中世人骨）		
西ノ平１号人骨	女性	熟年
西ノ平２号人骨	不明	不明
西ノ平３号人骨	男性	壮年
（近世人骨）		
成岡　１号人骨	女性	熟年
２号人骨	不明	不明
３号人骨	男性	壮年
４号人骨	—	小児
５号人骨	男性	熟年
６号人骨	男性	壮年
成岡７号人骨	不明	熟年
８号人骨	不明	熟年
９号人骨	男性	熟年
10号人骨	不明	不明
12号人骨	男性	熟年
13号人骨	男性	熟年
14号人骨	不明	壮年
15号人骨	不明	熟年
16号人骨	女性	壮年
18号人骨	不明	不明
19号人骨	男性	壮年
20号人骨	不明	熟年
成岡21号人骨	不明	熟年
22号人骨	女性	熟年
23号人骨	男性	熟年
24号人骨	女性	熟年
26号人骨	—	小児
西ノ平４号人骨	男性	不明
５号人骨	男性	熟年
６号人骨	—	幼児(6才)
７号人骨	女性	熟年
８号人骨	男性	熟年
９号人骨	男性	熟年

所　　見

〈中世人骨〉

西ノ平１号人骨（女性・熟年）

残存量は少ない。左側頭骨岩様部，後頭骨の左側ラムダ線および左頭頂骨乳突部が残存していた。乳様突起は小さく，ラムダ縫合左側部は内板が既に癒合閉鎖しており，外板にも癒合が進行している。

遊離歯が歯冠のみであるが，残存しており，これを歯式で示すと次のとおりである。

/ / M_1 / / / I_2 /	/ I_2 / / / / / /
/ / / / / / / /	/ / / P_1 P_2 / / /

（/：不明）

歯の径は小さく，咬耗度はBrocaの１～２度である。

性別は乳様突起が小さいことや歯の径が小さいことから，女性と考えられ，年令はラムダ縫合において内板が完全に癒合していることから，熟年と考えられる。

西ノ平２号人骨（性別・年令不明）

火葬場跡から出土したもので，多数の火葬骨が残存していたが，すべて四肢長骨の細片と椎骨の関節突起のごく一部が残存していたに過ぎない。あるいは複数体の人骨かもしれないが，この点は不明である。

西ノ平３号人骨（男性・壮年）

残存量は少なく，右大腿骨の骨頭，頚部と骨体，右踵骨の一部および寛骨臼のごく一部が存在していただけで，計測はできないものであった。

歯は多数残存していたが，すべて遊離歯で，これらを歯式で示せば次のとおりである。

$M_3 M_2 M_1 P_2 P_1$ / / I_1	$I_1 I_2$ C $P_1 P_2 M_1$ / /
$M_3 M_2 M_1 P_2 P_1$ C I_2 /	/ / / P_1 / $M_1 M_2$ /

（/：不明）

歯の径は大きく，咬耗度はBrocaの１～２度である。

性別は，歯の径が大きいことから推定すれば，男性と考えられ，年令は歯の咬耗が著しく弱いことから，壮年と推定される。

〈近世人骨〉

成岡１号人骨（女性・熟年）

(1)　頭蓋

左側頭骨と後頭骨が残存していた。乳様突起はあまり大きいものではないが，外後頭隆起の発達は比較的良い方である。縫合はラムダ縫合の左半分が観察可能で，内外両板とも癒合閉鎖している。

遊離歯が４本残存していた。これを歯式で示すと次のとおりである。

M_3 / / / / / / /	/ / / / / / M_2 /
/ / / / / / / /	/ / / / / $M_1 M_2$ /

（/：不明）

咬耗は著しく弱く，Brocaの１度である。

(2)　四肢骨

左上腕骨骨体，左右の大腿骨，左右の脛骨および左右不明の腓骨の骨体の一部が残存していた。上腕骨の保存状態は悪く，観察もできないものであった。

１．大腿骨

左右とも骨体が残存しているが，緻密質の保存状態が悪く，計測は左の一部のみが可能であった。表18に示すとおり，推定中央位での横径は27mm（左）であった。骨体の径は左右とも小さく，粗線の発達も著しく悪いもので，骨体の断面形は横広ろの楕円形を示している。

２．脛　骨

左右とも骨体が残存していたが，左側の方の保存状態が良い。計測値は表19に示すとおり，

推定中央位での最大径は28㎜（左），横径は18㎜（左）で，中央断面示数は64.29(左）となり，骨体はやや扁平である。また骨体周は74㎜（左）である。ヒラメ筋線の発達は悪いが，鉛直線が認められる。また骨体中央部の断面型はヘリチカのＶ型（左）である。

(3)　性別・年令

性別は，四肢骨の径が小さいことから女性と考えられ，年令は縫合が内外両板とも癒合していることから熟年と考えられる。

成岡２号人骨（性別・年令不明）

保存状態は著しく悪く，左側頭骨の乳突部の一部，大腿骨，脛骨，腓骨のそれぞれ一部が残存していたにすぎない。

大腿骨は右側の骨体後面が残存しており，粗線の発達は中程度である。脛骨は両側とも骨体の一部が残存しているだけであった。腓骨は左側骨体の遠位端が残存していた。

性別・年令はともに不明である。

成岡３号人骨（男性・壮年）

(1)　頭　蓋

右側の一部を除く脳頭蓋が残存していたが，外板の破損が著しく，計測は表11に示すとおり両耳幅のみが可能であった。従って頭蓋長幅示数を算出することはできないが，観察によれば径はやや大きく，頭型は長頭に傾いた中頭型を呈している。乳様突起は大きく，縫合は三主縫合とも内外両板は開離している。

(2)　四肢骨

橈骨，尺骨のごく一部，左右の大腿骨，脛骨および足根骨の一部が残存していた。

１．大腿骨

左右とも骨体が残存していた。左側の方が残存状態は良いが，前面が欠損しているので計測は不可能である。しかし，観察したところでは，長径は長いようである。

２．脛　骨

左右とも骨体が残存していたが，保存状態が悪く，計測はできない。しかし観察したところ径は大きいようである。

(3)　性別・年令

性別は，頭蓋の径や乳様突起の径が大きいことから男性と考えられ，年令は縫合が内板においても開離していることから，壮年と推定される。

成岡５号人骨（男性・熟年）

(1)　頭　蓋

１．脳頭蓋

脳頭蓋の右半分と下顎骨の右半分とが残存していた。眉上弓の隆起は強く，外後頭隆起の発達も比較的良好である。計測は表11に示すとおり頭蓋最大長のみが可能で，その計測値は 177 mmであるが，頭蓋最大幅は計測できないので，頭蓋長幅示数は算出できない。しかし観察したところ，幅径は小さく，頭型は長頭に傾いている。

縫合は三主縫合とも外板では開離しているが，内板では大部分が閉鎖癒合している。

2．下顎骨

右半分のみが残存しているが，歯槽は萎縮閉鎖しており，また下顎枝の後方への傾斜も大きい。

3．歯

遊離歯4本が残存していた。残存歯と下顎骨の歯槽の状態を歯式で示せば次のとおりである。

/ / M_1 P_2 / / / I_1	/ / C / / / / /
/ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ / /	/ / / / / / / /

（/：不明　⊗：歯槽閉鎖）

歯の径は大きく，咬耗度はBrocaの2度である。

(2) 四肢骨

大腿骨と脛骨の骨体が左右とも残存していたが，保存状態が著しく悪く，観察も計測もできないものであった。

(3) 性別・年令

性別は，眉上弓の隆起が強く発達していることから男性と考えられ，年令は，縫合が内板では癒合していることから熟年と推定される。

成岡6号人骨（男性・壮年）

保存状態は著しく悪く，左側頭骨の錐体部と遊離歯10本が残存していた。

残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

/ M_2 M_1 / / C / /	/ / / P_1 P_2 M_1 M_2 /
/ / / / / / / /	/ / / / / M_1 M_2 /

（/：不明）

歯の径は大きく，咬耗度はBrocaの1度である。

性別は，歯の大きいことから推定すれば，男性と考えられ，年令は歯の咬耗が弱いことから壮年と推定される。

成岡7号人骨（性別不明・熟年）

(1) 頭　蓋

脳頭蓋のうしろ半分が残存していた。乳様突起の大きさは中程度である。三主縫合のうち矢状縫合とラムダ縫合とが観察可能で，両者とも内外両板は癒着閉鎖している。

(2)　四肢骨

右大腿骨の後面と脛骨骨体のごく一部が残存していたにすぎない。粗線の発達はあまり良いものではないようである。

(3)　性別・年令

性別は不明であるが，年令は縫合が内外両板とも癒合していることから，熟年と推定される。

成岡8号人骨（性別不明・熟年）

(1)　頭　蓋

大部分が残存はしているが，変形とひずみが著しく，復元することができない。鼻根部は広くて扁平であり，鼻骨は著しく低い。

三主縫合は大部分が内外両板とも癒合閉鎖している。

下顎骨は下顎体が残存しているが，保存状態は悪い。遊離歯も残っており，下顎骨の歯槽部も観察できるので，これらを歯式で表わすと次のとおりである。

/ / / / P_1 C / I_1	I_1 I_2 C / P_2 / / /
/ / / / / / / /	/ I_2 / / / / / /

(/：不明)

咬耗度はBrocaの2度である。

(2)　四肢骨

右大腿骨と左脛骨のそれぞれ骨体が残存していたが，前者は前面を欠損しており，後者も後面を欠損しているので計測は不可能である。しかし観察したところでは両者とも径はやや小さい。

(2)　性別・年令

性別は不明であるが，年令は縫合が内外両板とも閉鎖していることから，熟年と推定される。

成岡9号人骨（男性・熟年）

(1)　頭　蓋

脳頭蓋の左半分が残存していた。乳様突起はやや大きい。計測はできないが，観察したところでは，径はやや大きいようで，また頭型は長頭に傾いた中頭型に属しているようである。

三主縫合はすべて内外両板とも癒合閉鎖している。

遊離歯が残存しており，これを歯式で示すと次のとおりである。

/ / M_1 / / / I_2 /	I_1 / C P_1 P_2 / / /
/ / M_1 / / / / /	/ / C P_1 / M_1 M_2 /

(/：不明)

歯の径は大きく，咬耗度はBrocaの2度である。

(2)　四肢骨

左右の大腿骨の骨体が残存しているだけである。

1．大腿骨

左右とも前面を欠損しているので，計測はできないが，観察したところ粗線そのものの発達は比較的良好であるが，骨体の断面形は丸い。

(3) 性別・年令

性別は，歯の径が大きいことから男性と考えられ，年令は縫合が内外両板とも閉鎖していることから，熟年と推定される。

成岡10号人骨（性別・年令不明）

左右不明の大腿骨骨体のごく一部が残存していただけで，性別・年令はともに不明である。

成岡12号人骨（男性・熟年）

(1) 頭蓋

左側頭骨の錐体部と左頭頂骨とが残存していただけである。ラムダ縫合と矢状縫合の一部が観察可能で，両者とも内板は癒合閉鎖しており，外板も部分的に癒合が認められる。

(2) 四肢骨

大腿骨，脛骨および腓骨が残存していた。

1．大腿骨

左右とも骨体が残存していたが，左側は内側半だけが残存するだけで計測は不可能であった。

左右とも長径は長いが，骨体の径はあまり大きいものではない。計測値は表17に示すとおり推定中央位での矢状径が28mm（右）横径は26mm（右）で，骨体中央断面示数は107.69（右）となり，また中央周は86mm(右)である。上骨体断面示数は83.87(右）となり，骨体上部の扁平性は弱い。

2．脛骨

左右とも骨体が残存していたが、外側面や内側面を欠いており，計測はできないものであった。

(3) 性別・年令

性別は，四肢骨の径がやや大きいことから男性と考えられ，年令は縫合が内板において癒合閉鎖していることから，熟年と推定される。

成岡13号人骨（男性・熟年）

残存していたのは頭蓋のみで,右頭頂骨,後頭骨のラムダ縁および右側頭骨の鱗部の一部である。骨壁は著しく厚く，ラムダ縫合は内板では完全に癒合閉鎖しており，また外板の一部にも癒合が認められる。

性別は，頭蓋の骨壁が著しく厚いことから推定すれば男性の可能性が強く，年令はラムダ縫

合が内板において癒合していることから，熟年と考えられる。

成岡14号人骨（性別不明・壮年）

遊離歯冠3個が残存していただけで，これを歯式で表わすと次のとおりである。

/ M_2 M_1 / / / / /	/ / / / / / / /
/ / M_1 / / / / /	/ / / / / / / /

（/：不明）

咬耗度はBrocaの1度である。

性別は不明であるが，年令は咬耗が著しく弱いことから，壮年と考えられる。

成岡15号人骨（性別不明・熟年）

(1) 頭　蓋

左右の側頭骨の錐体部と後頭骨の一部が残存していただけである。ラムダ縫合の一部が観察できた。この部分は外板においては開離していたが，内板は癒合閉鎖している。

(2) 四肢骨

大腿骨骨体の一部分と右脛骨骨体とが残存していたが，残存状態は著しく悪いもので，これらの特徴を知ることはできなかった。

(3) 性別・年令

性別は不明であるが，年令は縫合の一部が内板において癒合していることから熟年の可能性が強い。

成岡16号人骨（女性・壮年）

(1) 頭　蓋

左右の側頭骨の錐体部とその他骨片が残存していただけである。

歯も残存しており，これを歯式で示すと次のとおりである。

/ / $\dot{M}_1$ $\dot{P}_2$ / / / /	/ / / $\dot{P}_1$ P_2 M_1 M_2 /
/ / / / / / / /	/ / / $\dot{P}_1$ / / / /

（/：不明，•：遊離歯）

歯の径はやや小さく，咬耗度はBrocaの1度である。

(2) 四肢骨

左右の大腿骨と脛骨および左腓骨が残存していた。

1．大腿骨

左右とも骨体の後面のみが残存していた。長径は短かく，粗線の発達もあまり良いものではない。

2．脛骨

左右とも骨体が残存していたが，右側の方が残りは良く計測も可能であった。長径は短かくヒラメ筋線の発達は中程度で，骨体中央部の断面型はヘリチカのⅤ型（右）を呈している。

計測値は表19に示すとおり，推定中央位での最大径は25mm(右)，横径は20mm（右）で，中央断面示数は80.00（右）となり，骨体には扁平性は認められない。また最小周は66mm（右），骨体周は70mm（右）である。

3．腓骨

左側の骨体が残存していた。計測はできないが，径は小さい。

(3) 性別・年令

性別は，歯の径が小さいこと，四肢骨の諸径が小さいことおよび脛骨の形態的特徴より女性と考えられ，年令は歯の咬耗が弱いことから，壮年と推定される。

成岡18号人骨（性別・年令不明）

右側頭骨の岩様部が残存するだけで，性別・年令はともに不明である。

成岡19号人骨

(1) 頭　蓋

頭蓋底が残存しているが，顔面頭蓋は大部分が欠損している。外後頭隆起の発達は良好であるが，乳様突起はあまり大きいものではない。また，三主縫合のうちラムダ縫合の観察が可能で，これは内外両板とも開離している。

下顎骨は下顎体の一部が残存していた。歯も残存しており，これを歯式で表わすと次のとおりである。

$$\frac{M_3\ M_2\ M_1\ \dot{P}_2\ \dot{P}_1\ \dot{C}\ /\ /}{M_3\ M_2\ /\ /\ /\ /\ \dot{I}_2\ /} \Big| \frac{/\ /\ \dot{C}\ \dot{P}_1\ \dot{P}_2\ M_1\ M_2\ M_3}{/\ /\ /\ /\ /\ \dot{M}_1\ \dot{M}_2\ M_3}$$

（/：不明，•：遊離歯）

歯の径はやや大きく，咬耗度はBrocaの1～2度である。

(2) 躯幹骨

第1頸椎の一部分と第2頸椎，第3頸椎が残存していた。

(3) 性別・年令

性別は，外後頭隆起の発達が良いことや歯の径がやや大きいことから男性と考えられ，年令は縫合が内外両板とも開離していることや歯の咬耗が弱いことから，壮年と推定される。

成岡20号人骨（性別不明・熟年）

(1) 頭　蓋

左側頭骨の岩様部と右側頭骨の錐体および左頭頂骨と後頭骨の一部が残存していた。乳様突起はあまり大きいものではなく，縫合はラムダ縫合の左側が観察できたが，内外両板とも癒合閉鎖している。

遊離歯冠が残存しており，これを歯式で示すと次のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	/	/	P_1	/	/	/	/	/	/	P_1	/	M_1	/	/

（/：不明）

咬耗度はBrocaの2度である。

(2) 四肢骨

右上腕骨の三角筋粗面部が残存していたにすぎない。三角筋粗面の発達は中程度である。

(3) 性別・年令

性別は不明であるが，年令はラムダ縫合が内外両板において癒合していることから，熟年と考えられる。

成岡21号人骨（性別不明・熟年）

(1) 頭　蓋

前頭骨，頭頂骨，後頭骨のそれぞれ一部と右側頭骨が残存していた。頭蓋の骨壁はやや厚く縫合は矢状縫合と冠状縫合およびラムダ縫合の右側部分が観察できたが，いずれも内板は完全に癒合閉鎖している。

(2) 四肢骨

四肢長骨の骨片が残存していたにすぎない。

(3) 性別・年令

性別は不明であるが，年令は縫合が内板において癒合していることから熟年と考えられる。

成岡22号人骨（女性・熟年）

(1) 頭　蓋

今回出土した人骨の中では最も保存状態が良好なもので，頭頂骨と後頭骨のそれぞれ一部を欠損している以外はほぼ完全に近い。しかし外板はところどころで剝落しており，計測は不可能な部分が多い。

1．脳頭蓋

諸径はやや小さく，縫合は三主縫合とも内板においては完全に癒合閉鎖している。

計測値は表12に示すとおり，頭蓋最大長は 185mmであるが，最大幅は計測できないので頭蓋長幅示数を算出することはできない。しかし観察したところでは，幅径は小さく，明らかに長頭型を呈している。

2．顔面頭蓋

左側頬骨および上顎体のそれぞれ一部を欠損している。眉上弓の隆起はやや強く，鼻根部は広くて扁平である。また鼻幅は著しく狭い。

計測値は表12に示すとおり，上顎幅が 100mm，眼窩幅は42mm（右）眼窩高は33mm(右)，35mm（左）で，眼窩示数は78.57(右）となり，mesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は25mm，鼻高は50mmで，鼻示数は50.00となり，mesorrhin（中鼻）に属している。

顔面の幅径と高径は計測できないが，観察したところでは，両径も小さいようで，特に高径は著しく低いようである。

また鼻根部の計測値は表３に示すとおり，前眼窩間幅は18mmで，鼻根横弧長は19mmで鼻根彎曲示数は94.74となり，鼻根部は扁平である。また前頭突起水平傾斜角は147度を示し，前頭突起の矢状方向への傾斜は著しく弱く，ほとんど前額位である。

歯は１本も残在していないが，上顎骨の歯槽突起と下顎骨の歯槽の一部とが残っているので，その歯槽の状態を歯式で表わすと次のとおりである。

表３　鼻根部計測値　(mm, 度)

	成岡 22号人骨
前眼窩間幅	18
鼻根横弧長	19
鼻根彎曲示数	94.74
鼻骨最小幅	1
前頭突起上幅（右）	13
（左）	12
前頭突起水平傾斜角	147

／ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／
／ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／

（／：不明　⊗：歯槽閉鎖）

(2)　四肢骨

1）上肢骨

右肩甲骨の肩甲棘部が残存していたにすぎない。

2）下肢骨

大腿骨，脛骨，腓骨，左膝蓋骨および足根骨が残存していた。

1．大腿骨

左右の骨体が残存していたが，計測はできないものである。径はあまり大きいものではない。

2．脛骨

左右の骨体が残存していたが，保存状態は右側の方が良好である。径はやや大きく，ヒラメ筋線の発達も良好である。

計測値は表19に示すとおり，推定中央位における最大径は28mm(右)，横径は17mm（右）で，中央断面示数は60.71(右）となり，platyknem（平脛）に属し，骨体は著しく扁平である。

3．腓骨

左右とも近位部が残っていたにすぎない。径はやや小さい。

(3)　性別・年令

性別は，前頭部が膨隆していることや前頭結節が良く発達していることから女性と考えられ，年令は縫合が内板で癒合閉鎖していることから，熟年と推定される。

成岡23号人骨（男性・熟年）

頭蓋と四肢長骨片が数片残存していたにすぎない。

(1)　頭蓋

左右の側頭骨の岩様部，後頭骨および頭頂骨の骨片が残存していた。乳様突起はやや小さいが，外後頭隆起の発達は良く，後頭隆起も認められる。縫合の一部を観察することができたが，この部分では外板は開離しており，内板は癒合閉鎖している。

(2)　性別・年令

性別は，外後頭隆起が大きく，後頭隆起も著明であることから男性と考えられ，年令は縫合が内板において癒合していることから，熟年と考えられる。

成岡24号人骨（女性・熟年）

(1)頭蓋

脳頭蓋が右半分残っていた。上項線は比較的明瞭で，乳様突起は中程度である。三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合は外板においては開離しているが,内板では癒合閉鎖しておりまたラムダ縫合は内板両板とも開離している。

計測はほとんど不可能であるが（表12）観察したところでは諸径は小さく，また頭型は長頭に傾いている。

下顎骨は右半分が残存しているが，下顎体は著しく低く，下顎枝も後方へ大きく傾斜している。

歯は残存していなかったが,下顎骨の歯槽が観察できたので,これを歯式で表わすと次のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

（/：不明
⊗：歯槽閉鎖）

(2)　四肢骨

1）上肢骨

1．上腕骨

右側の骨体遠位半が残存していた。計測は最小周のみが可能であり，その値は55㎜（右）で径は小さい。

2．橈骨

右側の骨体が残存していたが計測は不可能なものである。径は小さい。

3．尺骨

右側骨体が残存していたが，これも計測はできない。径は小さい。

2）下肢骨

左寛骨の寛骨臼部，大腿骨，脛骨および足根骨が残存していた。

1．大腿骨

左右とも骨体が残存していたが，計測は不可能なものであった。観察したところでは，径は小さいようである。

2．脛骨

左側骨体が残存していたが，保存状態が悪く，計測できないものである。観察したところでは，径は小さい。

(3) 性別・年令

性別は，頭蓋の形態や四肢骨が小さいことから女性と考えられ，年令は矢状縫合および冠状縫合では内板が癒合閉鎖していることや下顎骨の歯槽の閉鎖状態から，熟年と考えられる。

西ノ平4号人骨（男性，年令不明）

(1) 頭　蓋

脳頭蓋のうしろ半分と下顎骨が残存していた。

1．脳頭蓋

計測は表11に示しているとおり，わずかな項目だけが可能であった。径はやや大きく，縫合は三主縫合とも内板では癒合閉鎖しており，矢状縫合およびラムダ縫合は外板でも癒合が認められる。

2．下顎骨

下顎体のみが残存していた。下顎体の高径は著しく低く，また下顎枝は後方へ大きく傾いている。

3．歯

遊離歯が残存していた。これを歯式で示せば次のとおりである。

/ / / / / / / /	/ / / / $\overset{\bullet}{P_2}$ / / /
/ ⊗ ○ ○ $\underset{\bullet}{P_1}$ / / /	/ / / ⊗ ○ ○ ⊗ /

/ ：不明
○ ：歯槽開存
⊗ ：歯槽閉鎖
• ：遊 離 歯

咬耗度はBrocaの2度である。

(2) 四肢骨

１）上肢骨

肩甲骨，鎖骨および上腕骨が残存していた。肩甲骨は左右とも肩甲棘の部分が残っており，鎖骨は右側の中部が残存していた。鎖骨はやや細い。

１．上腕骨

左側の骨体が残存しているが，保存状態が悪く，計測はできない。観察したところでは長径は著しく長いようである。

２）下肢骨

寛骨，大腿骨および脛骨が残存していた。

寛骨は右側の大坐骨切痕部と左側の寛骨臼部が残っており，寛骨臼の径は大きく，大坐骨切痕の角度は小さい。

１．大腿骨

左側は骨体が，右側は大腿骨頭の一部と遠位端を除く大部分が残存していた。長径は著しく長く，右側では残存部だけを計測しても約 460㎜ある。粗線の発達は著しく悪いものである。

計測値は表17に示すとおり，推定中央位での矢状径は28㎜（右）横径は30㎜（右，左）で，骨体中央断面示数は 93.33（右）となり，骨体の断面形は横広ろの隋円形を呈している。また骨体上部はやや扁平である。

２．脛骨

右側骨体の内側面が残存していただけである。

(3) 性別・年令

性別は，大坐骨切痕の角度が小さいことや四肢骨の径が大きいことから男性と考えられるが年令は不明である。

西ノ平５号人骨（男性，熟年）

(1) 頭　蓋

１．脳頭蓋

右半分と左側頭骨が残存していた。上項線は明瞭で，乳様突起も大きい。三主縫合はいずれも内板は癒合閉鎖しており、外板にも部分的に癒合が認められる。

計測値は表11に示すとおり，最大長も最大幅も計測できないが，観察したところでは頭型は明らかに長頭型を呈している。

２．顔面頭蓋

右半分と上顎骨の歯槽突起が残存していた。眉上弓の隆起はやや強く，頬骨も外側へ突出しているようである。

計測値は表11のとおり，眼窩幅は45㎜（右）眼窩高は34㎜（右）で，眼窩示数は 75.56（右）となり，chamaekonch（低眼窩）に属している。

３．下顎骨

下顎骨は左側の下顎枝の一部を欠損している以外は保存状態は良好である。下顎角は外側へ張り出している。計測値は表13に示すとおり，下顎骨の径は大きく，頑丈である。

4．歯

歯もよく残存していた。これらを歯式で示すと次のとおりである。

/ $\dot{M}_2$ M_1 P_2 P_1 / / I_1	I_1 I_2 $\dot{C}$ $\dot{P}_1$ $\dot{P}_2$ $\dot{M}_1$ $\dot{M}_2$ /
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 /	/ ○ C P_1 P_2 M_1 ⊗ ⊗

（/ ：不明（破損）
○：歯槽開存
⊗：歯槽閉鎖
• ：遊離歯）

歯の径はやや大きく，咬耗度はBrocaの2度である。

(2) 四肢骨

1）上肢骨

橈骨と尺骨が存残していた。

1．橈骨

右側の骨体が残存していた。計測値は表15に示すとおり，著しく大きく，骨間縁の発達も良好である。

2．尺骨

右側は骨体の大部分が，左側は骨体の一部が残存していた。計測値は表16に示すとおり，径は著しく大きい。

2）下肢骨

大腿骨と脛骨が残存していたが，脛骨は骨体の一部である。

1．大腿骨

左右とも骨体が残存していたが，左側は外側面のみで，右側の方が保存状態は良好である。計測値は表17に示すとおり，ごく一部のみしか計測できなかったが，観察したところでは，径はやや大きい。

(3) 性別・年令

性別は，眉上弓の発達が良いことや四肢骨の径が大きいことから男性と考えられ、年令は縫合が内板では癒合閉鎖していることから熟年と考えられる。

西ノ平7号（女性・熟年）

(1) 頭　蓋

左頭頂骨を欠損した頭蓋冠が残存していた。外後頭隆起の発達は悪く，前頭部は膨隆している。三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合は内板に癒合が認められ,外板も癒合が始まっているがラムダ縫合は内外両板とも開離している。

計測はできないが，観察したところでは径はやや小さく，頭型は明らかに長頭型である。

(2)　四肢骨

寛骨の寛骨臼と耳状面の一部および大腿骨が残存していた。

1．　大腿骨

右側は内側顆と大転子部を欠損しており，左側は骨体と遠位端が残存していた。計測は右側のみが可能で（表18),推定中央位での矢状径は23mm(右)横径は27mm(右)で，骨体中央断面示数は85.19(右）となり，骨体の断面形は横径が大きい横広ろの楕円形である。また粗線の発達は著しく悪いものである。観察したところでは骨体上部の扁平性は強いようである。最大長は内側顆が欠如しているため計測できないが，外側顆を使って測ってみると，約 390mmあり，女性としては長さは長いようである。

(3)　性別・年令

性別は，頭蓋前頭部が膨隆していることや諸径が小さいことから，女性と考えられ，年令は三主縫合のうち二縫合が内板において癒合閉鎖していることから，熟年と推定される。

西ノ平8号人骨（男性・熟年）

(1)　頭　蓋

うしろ1/2が残存しているだけである。外後頭隆起は弱いが,後頭隆起が認められ，また乳様突起も小さいものではない，三主縫合のうち，ラムダ縫合と矢状縫合のうしろ1/3が観察できたラムダ縫合は内板では癒合閉鎖していたが外板では開離しており，矢状縫合は内外両板とも開離している。

(2)　四肢骨

寛骨臼の一部，大腿骨，脛骨，腓骨の一部および足根骨と中足骨の一部が残存していた。

1．大腿骨

左右とも骨体が残存していたが，保存状態が悪く，計測はほとんど不可能である。観察したところでは，径はやや大きく粗線の発達もやや良好である。

2．脛骨

左右とも骨体が残存していたが，左側の方が保存状態は良好である。径はやや大きく，ヒラメ筋線部は陥凹しており，鉛直線は著明である。また中央断面型はヘリチカのV型（左）である。計測値は表19に示すとおり，推定中央位における最大径は29mm（左）横径は23mm（左）で中央断面示数は79.31(左）となり，骨体には扁平性は認められない。また骨体周は81mm（左）最小周は70mm（左）で，骨体は太い，

(3)　性別・年令

性別は，四肢骨の径がやや大きいことから男性と考えられ，年令はラムダ縫合が内板において癒合閉鎖していることから，一応熟年としておきたい。

西ノ平9号人骨（男性・熟年）

(1) 頭　蓋

1．脳頭蓋

脳頭蓋のうち左前方部⅓を欠損している以外は良く残存していた。外後頭隆起は著明なものではないが，乳様突起は大きい。三主縫合はすべて外板は開離しているが，内板は癒合閉鎖している。計測はできないが，観察によれば，頭型は中頭型を呈している。

2．下顎骨

右半分が残存していたが，関節突起および筋突起は欠損している。下顎体は著しく低く，歯槽はすべて萎縮閉鎖しており，下顎枝の後方への傾斜は著しい。歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	/	/	/	/	/

（/：不明（破損）
⊗：歯槽閉鎖）

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

1．上腕骨

右側骨体が残存していた。径は大きく，骨体は扁平であり，三角筋粗面の発達も良好である。

計測値は表14に示すとおり，推定中央位での最大径は24mm（右）最小径は17mm（右）で骨体断面示数は70.83(右）となり，骨体は著しく扁平である。また骨体最小周は66mm（右）中央周は71mm（右）で，骨体は太い。

2．橈骨

右側骨体が残存していた。計測値は表15に示すとおり，諸径は大きく，特に横径は著しく大きく，頑丈である。

3．尺骨

右側骨体が残存していた。計測値は表16に示しているとおり，径は著しく大きく頑丈である

2) 下肢骨

1．大腿骨

左右とも骨体が残存していた。諸径は大きく，特に長径は著しく長い。粗線の発達は中程度である。計測値は表17に示すとおり，で推定中央位での矢状径が28mm（右），29mm（左），横径は30mm（右，左）で，骨体中央断面示数は93.33(右)，96.67(左)，となり，骨体の断面型は横広ろの楕円形を呈している。骨体中央周は92mm（右），93mm（左）で，骨体は太い。また上骨体断面示数は74.29（右）となり，骨体上部は扁平である。

2．脛骨

左右とも骨体が残存しているが，計測はできないものである。ヒラメ筋線の発達は良好で，

径も大きい。

(3)　性別・年令

性別は，乳様突起が大きいことや四肢骨が大きいことから男性と考えられ，年令は縫合が内板において癒合閉鎖していることから，熟年と推定される。

考　　察

中世人骨は保存状態が著しく悪く，形質を明らかにすることができなかったので，近世人骨について検討する。

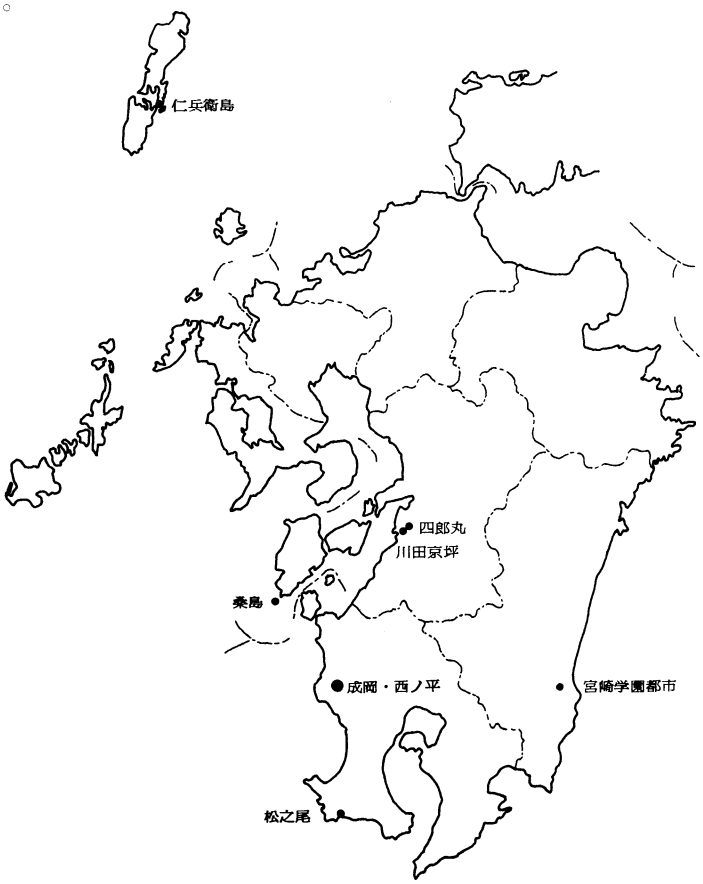


図１　近世人骨出土主要遺跡

(1)　頭　蓋

保存状態があまり良くなかったので，頭蓋長幅示数を算出できたものは１例もなかったが，観察によって頭型を推定できたものが８例あり，そのうちの７例は明らかに長頭に傾いていた。また表４に示すとおり，男性の脳頭蓋は比較群よりも小さく，女性ではむしろやや大きい傾向が認められる(表５)。

また顔面頭蓋については，男女とも眼窩幅がやや大きく，眼窩示数は男女ともどの比較群よりも小さい示数値を示している。

鼻幅もやや広く，鼻示数はどの比較資料よりも大きな示数値となっている。

鼻根部は著しく広く，鼻骨も低くて，鼻根部は著しく扁平であり，他地方の中世人あるいは近世人と同じ傾向を示している。

表4　頭蓋計測値（男性）　(mm)

		成岡・西ノ平 近世人		松之尾 中・近世人 (松下)		桑島 近世人 (脇)		無縁坂 近世人 (森田・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	1	177	11	185.18	13	180.13	92	183,5
8.	頭蓋最大幅	1	135	12	138.42	13	131.02	92	141.1
11.	両耳幅	2	122.50	10	124.40	13	121.47	91	126.6
51.	眼窩幅(右)	1	45	9	42.89(左)	6	40.81	95	43.3
52.	眼窩高(右)	1	34	9	33.67(左)	8	34.47	95	35.1
52/51	眼窩示数(右)	1	75.56	9	78.58(左)	6	83.25	95	81.6

表5　頭蓋計測値（女性）　(mm)

		成岡・西ノ平 近世人		松之尾 中・近世人 (松下)		桑島 近世人 (脇)		無縁坂 近世人 (森田・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	1	185	2	180.00	4	172.60	60	173.2
9.	最小前頭幅	1	92	2	87.50	4	91.87	63	91.5
11.	両耳幅	1	114	1	119	4	118.35	59	119.8
23.	頭蓋水平周	1	508	1	508	4	492.57	60	497.3
43.	上顔幅	1	100	1	101	2	99.95	63	100.7
50.	前眼窩間幅	1	18		—	2	17.95	55	17.3
51.	眼窩幅(右)	1	42	1	41 (左)	2	40.00	54	41.7
52.	眼窩高(右)	1	33	1	34 (左)	2	34.85	54	35.3
52/51	眼窩示数(右)	1	78.57	1	82.93(左)	2	87.12	54	84.7
54.	鼻幅	1	25	1	22	2	24.15	52	24.6
55.	鼻高	1	50	1	47	2	49.90	52	50.4
54/55	鼻示数	1	50.00	1	46.81	2	48.36	50	49.2

(2) 四肢骨

男性上腕骨はわずか1例のみしか計測できなかったが，この1例の諸径はやや大きく，川田京坪近世人，桑島近世人にも近い（表6）。

表6　上腕骨計測値（男性，右）　(mm)

		成岡・西ノ平 近世人		川田京坪 近世人 (松下)		四郎丸 近世人 (松下・他)		松之尾 中・近世人 (松下)		桑島 近世人 (立志)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	1	24	3	24.00	1	23	6	21.33	16	22.00
6.	中央横径	1	17	3	17.33	1	18	6	15.83	16	16.69
7.	骨体最小周	1	66	3	65.33		—	17	60.24	15	66.22
7(a).	中央周	1	71	3	70.00	1	66	6	62.00	15	71.28
6/5	骨体断面示数	1	70.83	3	72.30	1	78.26	6	74.44	16	75.90

また橈骨および尺骨の径も著しく大きいものであった。

下肢骨についても，男性の大腿骨は，宮崎学園都市近世人ほどではないが，諸径は著しく大きく，川田京坪近世人および四郎丸近世人に近い（表7）。

表7　大腿骨計測値（男性，右）　(mm)

		成岡・西ノ平 近世人		川田京坪 近世人 (松下)		四郎丸 近世人 (松下・他)		宮崎学園都市 近世人 (松下・他)		松之尾 中・近世人 (松下)		桑島 近世人 (立志)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	3	28.00	3	28.67	1	28	1	33	11	26.55	14	26.29
7.	骨体中央横径	4	29.00	3	28.33	1	27	1	34	11	25.64	14	24.66
8.	骨体中央周	3	90.33	3	89.67	1	87	1	106	11	82.64	14	80.61
9.	骨体上横径	4	33.25	3	30.67	1	31		—	14	30.93	14	29.58
10.	骨体上矢状径	2	26.00	3	25.67	1	24		—	14	23.86	15	23.01
6/7	骨体中央断面示数	3	98.12	3	102.59	1	103.70	1	97.06	11	104.03	14	107.09
10/9	上骨体断面示数	2	79.08	3	83.75	1	77.42		—	14	77.35	14	77.60

なお，骨体後面の発達は著しく悪く，柱状形成は認められないし，粗線の発達も悪い。また女性大腿骨の諸径も大きく，中央断面示数も著しく小さいもので，男性の場合と同じ傾向が認められる（表8）。しかし，脛骨は男女ともあまり大きいものではない（表9，10）。

表8　大腿骨計測値（女性，右）　(mm)

		成岡・西ノ平 近世人		川田京坪 近世人 (松下)		松之尾 中・近世人 (松下)		桑島 近世人 (立志)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	1	23	2	23.00	3	22.67	7	24.27
7.	骨体中央横径	1	27	2	25.50	3	23.67	7	22.79
8.	骨体中央周	1	81	2	75.00	3	73.67	7	76.59
6/7	骨体中央断面示数	1	85.19	2	90.31	3	96.25	7	107.13

表9　脛骨計測表　（男性）　(mm)

		成岡・西ノ平 近世人 左		川田京坪 近世人 (松下) 左		四郎丸 近世人 (松下・他) 左		桑島 近世人 (立志) 右	
		n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	1	29	2	28.00	1	30	19	27.02
8a.	栄養孔位最大径	1	31	1	37	2	—		—
9.	中央横径	1	23	2	21.00	2	23.00	19	20.18
9.	栄養孔位横径	1	24	1	26		—		—
10a.	骨体周	1	81	2	78.50	1	84	19	80.36
10.	栄養孔位周	1	88		—		—	19	88.95
10b.	最小周	1	70		—		—	18	73.47
9/8	中央断面示数	1	79.31	2	75.10	1	76.67	19	74.89
9a/8a	栄養孔位断面示数	1	77.42	1	70.27		—		—

また大腿骨の長径が著しく長いと推測される例が男性2例，女性1例に認められたが，この例はいずれも西ノ平遺跡から出土したものである。

四肢骨については，縄文・弥生時代人が一般的に大きく，頑丈で，柱状形成や扁平性も認められるが，時代とともに次第に諸径は小さくなり，きゃしゃになったと考えられている。

しかし，近世人では確かに柱状形成や扁平性は認められなくなっているが，諸径はけっして小さいものばかりではない。

表10　脛骨計測値（女性，右）　（mm）

		成岡・西ノ平 近世人		桑島 近世人 (立志)	
		n	M	n	M
8.	中央最大径	2	26.50	5	25.66
8.	栄養孔位最大径	2	33.00		—
9.	中央横径	2	18.50	5	18.54
9a.	栄養孔位横径	2	21.50		—
10.	骨体周	1	70	5	75.76
10a.	栄養孔位周	2	82.50	5	82.08
10b.	最小周	1	66	5	69.06
9/8	中央断面示数	2	70.36	5	72.50
9a/8a	栄養孔位断面示数	2	69.96		—

歴史時代人については所属する社会的階級によって，相当大きな差が存在することが予想されている。本例の所属する階級や階層を明らかにすることはできなかったが，墓石が存在することを考えれば，比較的上層級の人々ではなかったかと推察される。

総　　括

鹿児島県川内市にある成岡・西ノ平遺跡から，中世・近世人骨が合計32体出土した。保存状態は必ずしも良好なものではなかったが，ある程度観察と計測とが可能なものであった。その結果は次のように要約できる。

1．32体のうち3体が中世人骨，残りの29体は近世人骨であった。中世人骨はすべて成人骨でそのうちの1体は火葬骨であった。近世人骨29体のうち26体は成人骨で，残りの3体は幼小児骨であった。成人骨26体のうち12体が男性骨，5体が女性骨で，残りの9体は性別不明である。

2．頭蓋長幅示数は1例も算出できなかったが，観察によって頭型を推定できたものが8例あり，そのうち7例は明らかに長頭型であり，1例は中頭型を呈していた。

3．顔面頭蓋を観察することができたのは，わずか1例（女性）であり，鼻根部は広くて扁平で，低顔である。

4．四肢骨には柱状形成や扁平性は認められないが，上肢骨や大腿骨の諸径は大きい。また大腿骨の長径が著しく長いと推定されるものが，男性2例，女性1例に認められた。

〈擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた鹿児島県教育庁文化課ならびに人骨研究に関して指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。〉

表11　頭蓋計測値（男性）　（mm）

		成岡 3号人骨	成岡 5号人骨	西ノ平 4号人骨	西ノ平 5号人骨	西ノ平 8号人骨	平均 n	平均 M
1.	頭蓋最大長	—	177	—	—	—	1	177
8.	頭蓋最大幅	—	—	135	—	—	1	135
11.	両耳幅	(127)	—	127	118	—	2	122.50
12.	最大後頭幅	—	—	115	107	106	3	109.33
41.	側顔長	—	—	—	72（右）	—	1	72（右）
51.	眼窩幅（右）	—	—	—	45	—	1	45
52.	眼窩高（右）	—	—	—	34	—	1	34
52／51	眼窩示数（右）	—	—	—	75.56	—	1	75.56

表12　頭蓋計測値（女性）　（mm）

		成岡 22号人骨	成岡 24号人骨
1.	頭蓋最大長	185	—
9.	最小前頭幅	92	—
11	両耳幅	—	114
23.	頭蓋水平周	508	—
41.	側顔長	70（右）	—
43.	上顔幅	100	—
50.	前眼窩間幅	18	—
51.	眼窩幅（右）	42	—
	（左）	—	—
52.	眼窩高幅（右）	33	—
	（左）	35	—
52／51	眼窩示数（右）	78.57	—
	（左）	—	—
54.	鼻幅	25	—
55.	鼻高	50	—
54／55	鼻示数	50.00	—

表13　下顎骨計測値（男性）　（mm，度）

			成岡 5号人骨	西ノ平 4号人骨	西ノ平 5号人骨	平均 n	平均 M
67.	前下顎幅		—	41	44	2	42.50
69(3).	下顎体厚	（右）	15	10	14	3	13.00
		（左）	—	10	12	2	11.00
70.	技高	（右）	—	—	71	1	71
		（左）	—	—	—		—
70(3).	下顎切痕高	（右）	—	—	14	1	14
		（左）	—	—	—		—
71	技幅	（右）	—	—	34	1	34
		（左）	—	—	—		—
71a.	最小技幅	（右）	—	—	34	1	34
		（左）	—	—	—		—
71(1).	下顎切痕幅	（右）	—	—	38	1	38
		（左）	—	—	—		—
79.	下顎技角	（右）	—	—	132	1	132
		（左）	—	—	—		—
71／70	下顎技示数	（右）	—	—	47.89	1	47.89
		（左）	—	—	—		—
70(3)／71(1)	下顎切痕示数	（右）	—	—	36.84	1	36.84
		（左）	—	—	—		—

表14　上腕骨計測値）　（mm）

		成岡 24号人骨 女性 右	西ノ平 9号人骨 男性 右
5.	中央最小周	—	24
6.	中央横径	—	17
7.	骨体最小周	55	66
7(a)・	中央周	—	71
6／5	骨体断面示数	—	70.83

表15　橈骨計測値（男性）　（mm）

		西ノ平 5号人骨 右	西ノ平 9号人骨 右	平均 右 n	平均 右 M
3.	最小周	—	43	1	43
4.	骨体横径	20	22	2	21.00
4a.	骨体中央横径	20	21	2	20.50
5.	骨体矢壮径	15	12	2	13.50
5a.	骨体中央矢状径	15	12	2	13.50
5(5)	骨体中央周	56	54	2	55.00
5／4	骨体断面示数	75.00	54.55	2	64.78
5a／4a	中央断面示数	75.00	57.14	2	66.67

表16　尺骨計測値（男性）　（mm）

		西ノ平 5号人骨 右	西ノ平 9号人骨 右	平均 右 n	平均 右 M
11.	尺骨矢状径	15	15	2	15.00
12.	尺骨横径	20	18	2	19.00
S	中央最小径	15	14	2	14.50
L	中央最大径	19	18	2	18.50
G	中央周	57	57	2	57.00
11／12	骨体断面示数	75.00	83.33	2	79.17
S／L	中央断面示数	78.95	77.78	2	78.37

表17　大腿骨計測値（男性）　（mm）

		成岡 12号人骨 右	西ノ平 4号人骨 右	西ノ平 4号人骨 左	西ノ平 5号人骨 右	西ノ平 8号人骨 左	西ノ平 9号人骨 右	西ノ平 9号人骨 左	平均 右 n	平均 右 M	平均 左 n	平均 左 M
6.	骨体中央矢状径	28	28	—	—	27	28	29	3	28.00	1	27
7.	骨体中央横径	26	30	30	30	—	30	30	4	29.00	2	30.00
8.	骨体中央周	86	93	—	—	—	92	93	3	90.33	1	93
9.	骨体上横径	31	34	—	33	—	35	—	4	33.25		—
10.	骨体上矢状径	26	—	—	—	—	26	—	2	26.00		—
6／7	骨体中央断面示数	107.69	93.33	—	—	—	93.33	96.67	3	98.12	1	96.67
10／9	上骨体断面示数	83.87	—	—	—	—	74.29	—	2	79.08		—

表18　大腿骨計測値（女性）　（mm）

		成岡 1号人骨 左	西ノ平 7号人骨 右
6.	骨体中央矢状径	—	23
7.	骨体中央横径	27	27
8.	骨体中央周	—	81
9.	骨体上横径	—	—
10.	骨体上矢状径	—	—
6／7	骨体中央断面示数	—	85.19
10／9	上骨体断面示数	—	—

表19　脛骨計測値　（mm）

		西ノ平 8号人骨 男性 左	成岡 1号人骨 女性 左	成岡 16号人骨 女性 右	成岡 22号人骨 女性 右
8.	中央最大径	29	28	25	28
8a.	栄養孔位最大径	31	—	29	33
9.	中央横径	23	18	20	17
9a.	栄養孔位横径	24	18	23	20
10.	骨体周	81	74	70	—
10a.	栄養孔位周	88	—	81	84
10b.	最小周	70	—	66	—
9／8	中央断面示数	79.31	64.29	80.00	60.71
9a／8a	栄養孔位断面示数	77.42	—	79.31	60.61

参考文献

1．欠田早苗，1959：畿内頭蓋骨の人類学的研究－現代畿内人骨と江戸時代後期墳墓骨について。人類学輯報，25

2．河越逸行,1957:湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究，東京慈恵会医科大学解剖業積集，16：1－18，1－5。

3．松下孝幸，分部哲秋，1980：熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨。興善寺Ⅱ（熊本県

文化財調査報告，45）：59—68。
4．松下孝幸・分部哲秋・田代和則，1980：熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨，熊本県文化財調査報告，46（付論１）：１—17。
5．松下孝幸，1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨。松之尾遺跡（枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告(1)：215— 228。
6．松下孝幸，他，1983：宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨。宮崎学園都市理蔵文化財発掘調査概報(Ⅲ)
7．森本岩太郎・小片丘彦，他，1976：東京都一橋高校遺跡出土の江戸時代人骨。人類誌，84：62
8．森本岩太郎・小片丘彦，他，1976：江戸時代における日本人形質の漸進的変化—東京都一橋高校遺跡出土頭蓋を中心に—。人類誌，84：317— 318。
9．森本岩太郎，1981：歴史時代人骨，季刊人類学，12(1)：７—18。
10．森田　茂，河越逸行，1960：湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺。人類誌，67：278— 295。
11．内藤芳篤，1974：仁兵衛島出土の人骨。対馬（浅茅湾とその周辺の考古学的調査）（長崎県文化財調査報告書，17：106— 112。
12．鈴木　尚・佐倉　朔，他，1962：東京都芝白金，旧海軍基地に埋葬された江戸末，明治初年の日本人頭骨，人類誌，70：105 —120
13．立志悟朗，1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代，上腕骨の人類学的研究，熊本医会誌44：1137—1150。
14．立志悟朗，1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究，第１，大腿骨について，熊本医会誌，44：1092—1115
15．寺門之隆，1981：中世・近世時代人骨。人類学講座，５,日本人Ⅰ，雄山閣，　東京，123—135。

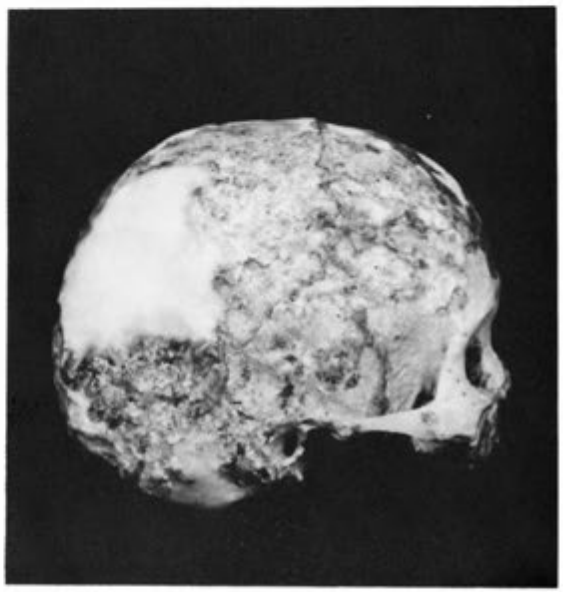
図　　版



頭蓋上面（成岡22号人骨，女性，熟年）



頭蓋正面（成岡22号人骨）



頭蓋側面（成岡22号人骨）



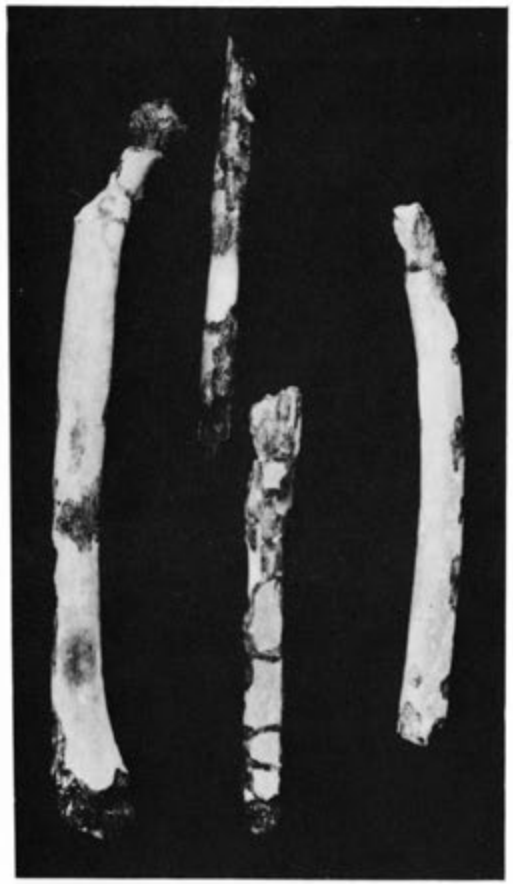
頭蓋上面（成岡３号人骨，男性，壮年）



頭蓋上面（西ノ平４号人骨・男性）



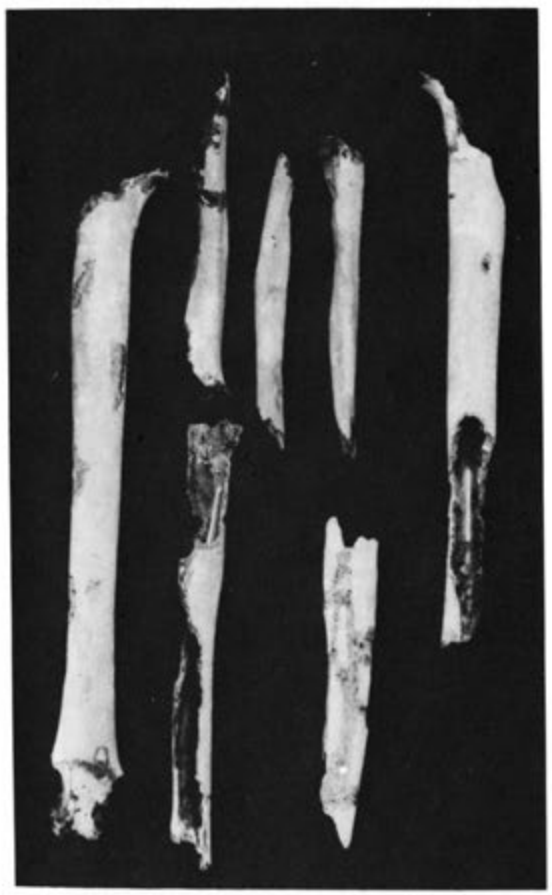
頭蓋上面（西ノ平７号人骨，女性，熟年）



四肢骨（西ノ平４号人骨・男性）



四肢骨（西ノ平７号人骨・女性）



四肢骨（西ノ平９号人骨・男性）

第2章　成岡・西ノ平遺跡出土の幼小児骨

分部哲秋※

はじめに

鹿児島県川内市において近接した地点にある成岡，西ノ平両遺跡は，1981年から1982年にかけて調査された。成岡遺跡からは総数23体の人骨が出土し，うち2体が小児骨で，西ノ平遺跡からは総数9体の人骨が出土し，うち1体が幼児骨であった。これらの出土人骨は，別項で述べられているように考古学的所見より，前者の23体は近世に属し，また，後者の9体は，3体が中世，6体が近世に属する人骨であるが，両遺跡出土の幼小児骨3体はいずれも近世に属するものである。

発掘調査によって見いだされる古人骨の中には，かなり多くの割合で幼小児骨が含まれている。筆者は、現代を含む各時代の幼小児の成長，化骨，歯の萌出などの問題を研究することは，きわめて重要であると考え，現在資料の収集につとめるとともに，各遺跡ごとの報告を行なっている。

成岡および西ノ平遺跡出土の幼小児骨についても，できる限りの詳細な観察，計測および年令の推定を行なったので，その結果を報告したい。

資　　料

成岡および西ノ平遺跡出土の幼小児骨3例の推定年令，年令区分は次のとおりである。

ただし，年令は後記するように，近世人の歯の萌出時期，形成時期が現代人と大差ないと仮定したうえで，これらから推定したものである。年令区分は，大友遺跡出土の幼小児骨（分部，1981）の区分に従った。なお，幼小児骨の性差については，種々の研究がなされているが，現在性別を同定することはむずかしく，3例とも性別は不明である。

表1　幼小児骨資料

人骨番号	推定年令	年令区分
成　岡　4号人骨	11　才	小児（Ⅰ期）
成　岡　26号人骨	12～13才	小児（Ⅱ期）
西ノ平　6号人骨	6　才	幼児

※WAKEBE　TETSUAKI　　長崎大学医学部解剖学第2教室

所　　見

成岡4号人骨（11才，小児）

1）頭蓋

頭蓋においては，右頭頂骨後半部，右側頭骨，左側頭骨の錐体，後頭骨鱗部，左上顎骨歯槽突起および左下顎枝と歯が残存していた。これらの骨壁は成人骨に比べて薄く，外後頭隆起もほとんど認められない。

残存していた歯を歯式で示すと次のとおりである。歯は，上顎M_2が萌出途中で，下顎M_2をはじめその他の歯にはBroca 1度の弱い咬耗が認められ，上顎M_2以外は萌出していたと考えられる。

$\underline{M_3}$| は歯冠の⅓程度が形成され，その他の歯の歯根は欠如していた例が多いが，$\overline{C}$|，$\overline{M_2}$| は¾程度，$\underline{M_2}$| は⅔程度まで形成されている。

(M3) M2 M1 P2 P1 C I2 I1	I1 I2 C P1 P2 M1 M2 /
/ M2 M1 P2 P1 C I2 I1	I1 I2 C P1 P2 M1 M2 /

・遊離歯
( )歯槽内埋伏
∨萌出途中
/不　明

2）四肢骨

四肢骨では，右大腿骨の骨体近位半および右脛骨の骨体遠位半が残存していた。

大腿骨は，成人に比べ近位端，骨体とも小さく，細長い。推定中央位での計測値は，それぞれ矢状径が（19.3 cm），横径が（17.8mm）で，中央断面示数は(108.43)となり成人に比べ示数値はやや大きく，粗線の発達も良好である。中央周は(61.0 mm)で，成人に比べはるかに小さい。また，骨体の中央部の断面形は，粗線が後面外側部にあたるため，三角形に近い形をしている。

計測値を他遺跡出土の同年令のものと比較すると，表2に示すように弥生時代に属す宮の本27号，大友〔11〕号はもとより，古墳時代に属する大友〔15〕号よりもかなり大きい値を示している。このことは，松下により前項で述べられているように，成岡，西ノ平両遺跡出土成人骨の大腿骨の骨体が，他遺跡出土の近世人や大友，宮の本両弥生人よりやや大きいという結果と一致しており，成人における形質の差がすでに小児期において現われているのかも知れない。

表2　大腿骨骨体主要計測値（推定年令11才，右）　(mm)

人骨番号	成岡4号	大友〔15〕号	大友〔11〕号	宮の本27号
時代	近世	古墳	弥生	弥生
6. 骨体中央矢状径	19.3	18.0(ℓ)	15.1	17.0
7. 骨体中央横径	17.8	16.4(ℓ)	16.1	15.0
8. 骨体中央周	61.0	55.0(ℓ)	50.0	51.0
6/7 骨体中央断面示数	108.43	109.76(ℓ)	93.79	113.33

次に脛骨の中央推定位での計測値は，最大径が(20.0mm)，横径が(16.0mm)で，中央断面示数は(80.00)となる。この示数値は，成人女性よりもかなり大きく，成人男性とほぼ同じで扁平性は全く認められない。また，骨体周は(57.0mm)，最小周は(55.0mm)，で両計の差はわずかである。

この計測値を他遺跡出土の同年令の例と比較すると，表3に示すように，諸径は大腿骨と同様に，宮の本27号はもとより大友〔15〕号よりも大きい値を示している。また，断面示数についても，弥生，古墳，近世の順に時代を経るに従い，示数値が次第に大きくなる特徴が認められる。

表3　脛骨骨体主要計測値(推定年令11才，右)　(mm)

人骨番号 時代	成岡4号 近世	大友〔15〕号 古墳	宮の本27号 弥生
8. 中央最大径	20.0	19.4	18.0
9. 中央横径	16.0	15.3	14.0
10. 骨体周	57.0	55.0	51.0
10b. 最小周	55.0	51.0	—
9/8 中央断面示数	80.00	78.87	77.78

3)　年令の推定

歯が下顎M_2まで萌出し，上顎M_2は萌出途中である。藤田(1965)の現代人永久歯の萌出時期によれば，下顎M_2は男性平均11才3ヶ月，女性平均11才1ヶ月，上顎M_2は男性平均11才11ヶ月，女性平均12才である。また，金田(1957)の永久歯の歯根形成時期によっても，ほぼ11才との結果が得られるので，この人骨の年令は，約11才の小児(Ⅰ期)と推定される。

成岡26号人骨　(12～13才，小児)

この人骨は，頭蓋の一部と四肢骨片が残存していた。

頭蓋では，左頭頂骨の一部，左右側頭骨の錐体，後頭骨鱗部上半および上顎歯槽突起の$\underline{M_1}$～$\underline{M_3}$の内面が残存していた。

歯は，$\underline{P_2}$以外はすべて残存し，歯式で示すと次のとおりである。歯の萌出状態は上顎M_2まで萌出し，M_3は歯槽内埋伏で，歯冠の一部が未完成である。咬耗の程度はすべてBrocaの1度であるが，M_1を除きその他は弱く，特にM_2は弱い。歯根はM_2が¾程度まで形成されているが，その他は欠如しているため不明である。

(M₃)	M₂	M₁	P₂	P₁	C	I₂	I₁	I₁	I₂	C	P₁	/	M₁	M₂	(M₃)	• 遊離歯
M₃	M₂	M₁	P₂	P₁	C	I₂	I₁	I₁	I₂	C	P₁	P₂	M₁	M₂	(M₃)	( )歯槽内埋伏
																/不　明

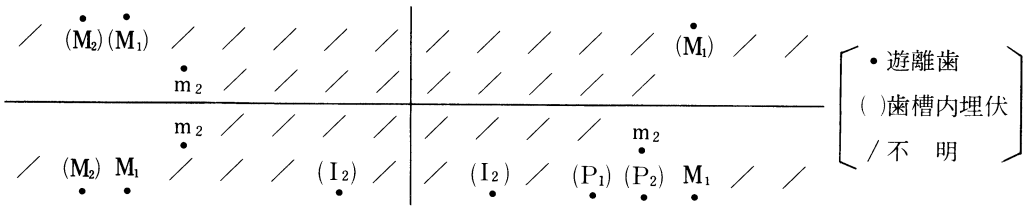
年令の推定

歯は上顎M_2まで萌出しており，藤田によれば，現代人の上顎M_2の萌出時期は男性平均11才11ヶ月，女性平均12才である。また，M_2の歯根形成状態は，金田によれば12～13才程度となり，M_2の咬耗が非常に弱いことも合わせるとこの人骨の年令は，12～13才の小児(Ⅱ期)と推定される。

西ノ平６号人骨（６才，幼児）

この人骨は保存状態が悪く，頭蓋の左側頭骨の錐体と上・下顎の歯が残存するのみであった。

歯はすべて遊離歯で歯式で示すと次のとおりである。咬耗の程度は，乳歯では$\underline{m_2}$がBroca 1度，下顎m_2がBroca２度，永久歯では$\overline{|M_1}$がBroca１度で，その他の歯には認められない。歯の形成状態は，歯冠が$\overline{|P_2}$は⅔，$\underline{M_2}|$は½～⅔程度まで形成され，その他は完成している。また，歯根に欠損がないものでは，歯根が，$\overline{M_1}|$は½，$\overline{I_2}|$は¼程度形成されている。



年令の推定

歯の萌出状態は，歯の咬耗から$\overline{|M_1}$が萌出，$\overline{M_1}|$は萌出途中か萌出直後，上顎M_1が未萌出と考えられる。

藤田によれば，下顎M_1の萌出時期は男性平均６才４ヶ月，女性平均６才である。また，金田の歯根形成時期によれば，$\overline{M_1}|$，$\overline{I_2}|$，$\overline{|P_1}$，$\overline{|P_2}$の歯冠，歯根の形成程度は，６才に相当する。従って，この人骨の年令は，６才の幼児と推定される。

表４　各遺跡出土人骨における幼小児骨の割合

遺跡名	時代	出土総数	幼小児骨			幼小児骨の割合(%)
			幼児	小児	合計	
宮の本	弥生	39	6	3	9	23.08
大友(3.4次)	弥生	55	10	4	14	25.45
日守地下式	古墳	5	1	0	1	20.00
朝田(Ⅱ地区)	古墳	25	1	1	2	8.00
成川(1981年)	古墳	103	1	3	4	3.88
松之尾	近世	25	1	1	2	8.00
成岡，西ノ平	近世	29	1	2	3	10.34

鹿児島県川内市にある成岡および西ノ平遺跡から，近世に属する人骨29体が出土し，そのうち3体が幼小児期の人骨であった。この3体の幼小児骨についての観察，計測の結果を要約すると，次のとおりである。

1．成岡および西ノ平遺跡出土の近世人骨29体のうち，幼小児骨3体の占める割合は10.34％で，弥生時代幼小児骨の割合に比べてかなり低い。

2．成岡4号人骨，成岡26号人骨，西ノ平6号人骨の年令は，歯の萌出状態，形成程度からそれぞれ11才，12～13才，6才と推定される。

3．成岡4号人骨の大腿骨および脛骨は，宮の本，大友両弥生人の同年令のものに比べて，太い傾向がうかがわれる。また，大腿骨の粗線の発達は良好であるが，脛骨における扁平性は全く認められない。

4．以上のように，成岡・西ノ平遺跡出土の幼児骨は，保存状態は必ずしも良好なものではなかったが，資料数の少ない近世に属する人骨であり，今後の幼小児骨の研究にとって，貴重な資料のひとつになると考えられる。

（擱筆するにあたり本研究の機会を与えていただいた鹿児島県教育庁文化課ならびに御指導いただいた内藤芳篤教授に感謝いたします。）

参　考　文　献

1．金田義夫，1957：日本人の永久歯における歯根完成時期の研究，歯科月報，30，165～172

2．藤田恒太郎，1965：歯の話，岩波書店，東京，57～98

3．Martin－Saller. 1957：Leherbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fiseher rerlag. Stuttgart。

4．分部哲秋，1980：長崎県宮の本遺跡出土の幼小児骨，宮の本遺跡，佐世保市教育委員会編 110～113．147．

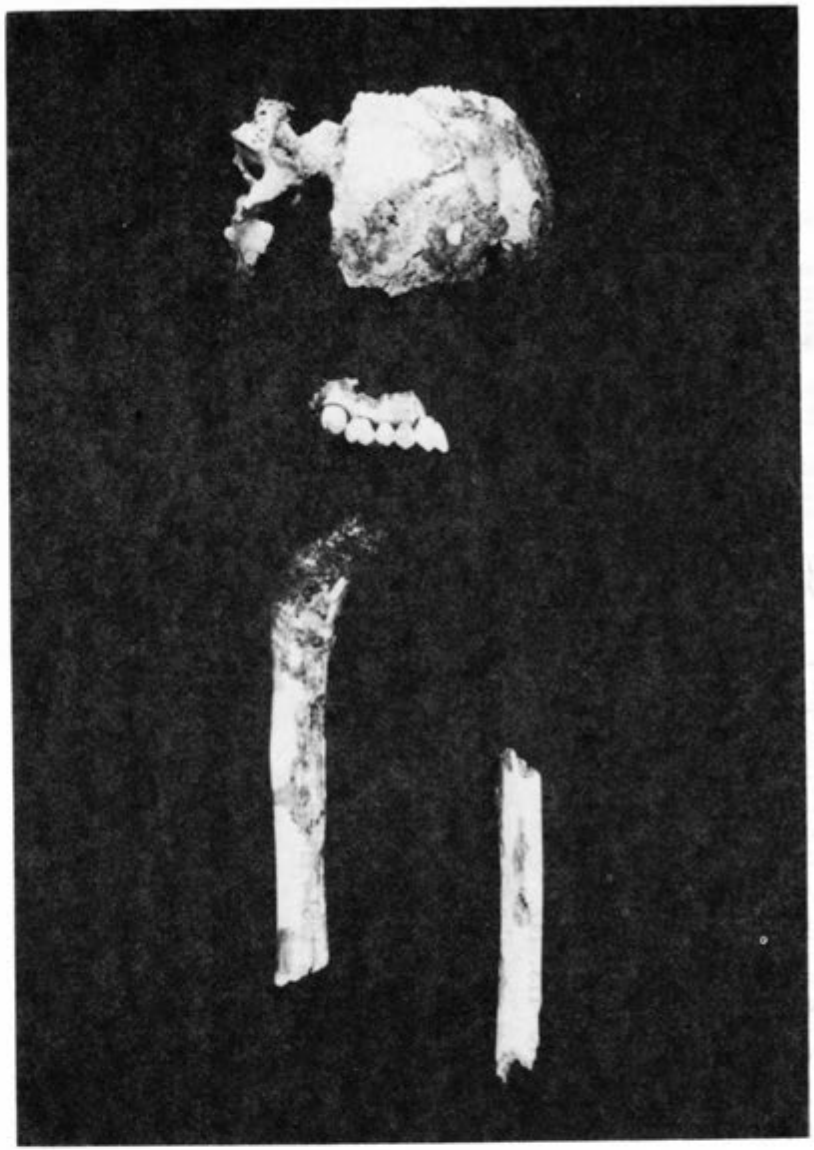
5．分部哲秋，1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の乳児・小児骨，松之尾遺跡，枕崎市教育委員会編，229～235。

6．分部哲秋，1981：宮崎県日守地下式古墳出土の幼児骨，宮崎県文化財調査報告書，23，　179～184。

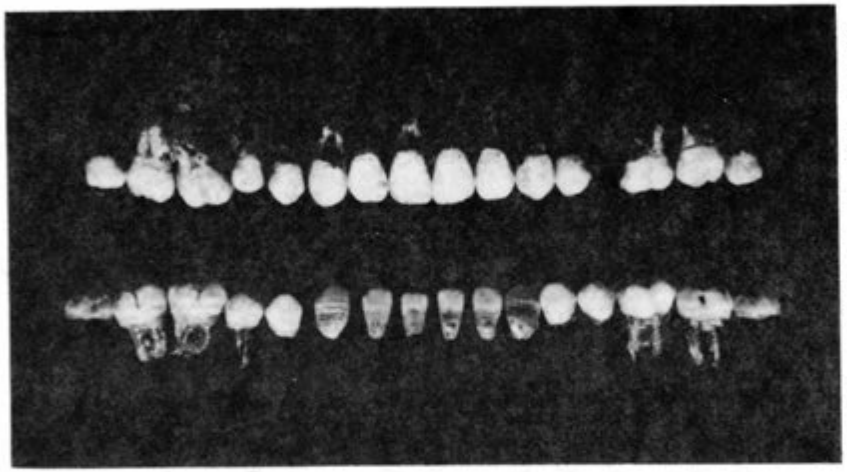
7．分部哲秋，1981：宮崎県上の原地下式古墳出土の成年骨，宮崎県文化財調査報告書，24，135～140。

8．分部哲秋，1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨，大友遺跡，佐賀県呼子町文化財報告書第1集。

9．分部哲秋，1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の幼小児・成年骨，朝田墳墓群Ⅴ，山口県埋蔵文化財調査報告．64，207～211。



成岡４号人骨（11才，幼児）



成岡26号人骨（12～13才，小児）



西ノ平６号人骨（６才，幼児）

Ⅶ　薩摩郡平礼石寺と守護・地頭・郡司との関係

—旧記雑録前編所収山内文書について—

薩摩郡平礼石寺と守護・地頭・郡司との関係

――旧記雑録前編所収山内文書について――

五味克夫

川内市隈之城西手、字成岡の丘陵地に中世薩摩郡々司平氏ゆかりの寺、平礼石寺の跡が僅かに残っている。同寺に関する史料はどのような経緯によってか近世蒲生郷士山内源太夫家に伝えられていた。同家は蒲生正八幡社司二十六家の一であるという。「三国名勝図会」隈之城の部に観現山平嶺石寺金剛院をあげ同寺の歴史の概略と史料の所在に関説している。その中で山内家に「古文書凡十六通を蔵む」とあり、その一部を抄記して説明を加えている。現在その文書の所在は確認できないが、薩藩旧記雑録前編には蒲生士山内氏文書として十六通の文書が採録されている。恐らくその全てであろう。建仁三年より元徳二年まで悉く鎌倉時代の文書であり、既に旧記雑録（九州史料叢書）にはもちろんのこと、鎌倉遺文にも前半の分は収録されていてあらためて掲載するまでもないが、文書に従って私見をのべる便宜上、はじめに一六通全文一括して左に記す。

一、薩摩郡司平忠直譲状
薩摩郡郡司平忠直謹言
　譲与　平礼石寺座主職事
　七男亀童丸
　在四至
　　限東田畔、限南河、限西西山西際、限北温谷
右件寺者、雖為古寺、故忠永朝臣之時、令修造、為子孫繁昌、仏寺之料田被寄進畢、其後忠直差四至奉免、而今子息寺領可令配分之日、七男亀童丸分、相副調度文書等、所譲渡也、適彼寺者、無庄国両方御公事之上、自今以後者、更郡司不可有綺沙汰之事、若令此状之違背者、全忠直之子孫不可為之由、捧此証文守護所、可令言上之状、如件、以譲、
　　建仁三年五月二十七日　　平（花押）
　　嫡子平（花押）

二、平礼石寺座主忠兼申状
引返シウラニ
「さつまこほり郷ひられいしのさりのけ上」
（外題）
「任申状旨、方々違乱止ニハ、令安堵、可致弥御祈禱丁寧状如件
　　惣地頭兼守護所僧（花押）」
薩摩国薩摩郡内平礼石寺座主忠兼解、申請地頭兼守護所裁事、
　請被殊任先跡道理、御免除当寺領四至内万雑事并検断等子細状
　　副進　次第証文等
右、謹考旧記、当寺者是観音殊勝之霊地、利益広大砌也、爰以自往古以来、蒙庄国及地頭方之御免判、所致本家国吏地頭守護所御祈禱也、任先規重申賜御一行、欲備将来之亀鏡矣、望請恩裁、賜御判、弥仰正理之貴、欲致万才千秋之御祈禱、仍勒子細言上如件
　　嘉禎四年五月日　　座主忠兼上

三　別納房忠兼申状案

引返シ裏ニ

「祁答院別納名主七郎薩摩郡内平礼石寺事」

僧忠兼謹言、申進　守護所御裁事、

欲被且依度々免除状、且任申状道理、平礼石寺内有限御裁許子細事、

右、件元者、当時是数百余歳之建立、利益無雙□、観音ト居於此寺給後、自庄国両方、寺内房舎并料田自被奉寄以来、今于全無違乱、又豊後（忠久）守殿三ケ国御奉行之時、度々面々之御代官雖□□賜薩摩郡地頭職、於当寺者仰悲願貴事、全□住侶之煩事、爰以止住僧徒者、偏堂舎於修造、朝暮勤行而致朝家、本家大将軍并守護所御方御祈禱丁寧、罷過処、近来為地頭所之沙汰、寺中土民等之中有之、付任例申事者、不糺所犯之実否、無左右妻子私財併被捜所天、難住侶安堵間、旁御祈禱殆為及闕如、然者自今以後者、自犯科出来者、糺真偽而、於為実犯者、任御式目状、召取下手人之身於地頭所、妻子私財物者、付住宅可令安堵之由、蒙御裁許、住侶招居、敢欲致御祈禱矣、

一平礼石寺者、忠兼法師仁罷成時、自親父忠直之手譲得之後、令堂舎修造、致有限朝夕勤、令旁御祈禱申外、全無餘煩、経年序之処、故忠友之時、件寺依為郡司所近隣、要用之時者、寺内之下人時々雖雇仕、忠友依為忠兼之兄族、不制止申之処、自平次忠　茂之時、背法寺内下人於狩役并諸事召仕之間、不罷向者、制山野天申煩、加之寺中之菓子恣押取、或任法卜□取駄、剰加制止者、返質取之条、道理豈可然哉、就中富永、成求此両名、雖為公田、依為各別之名、其土民一人毛無交仕事、平礼石寺者、適旁御祈禱所也、不可及郡司進退者也、且可御賢察足哉、然者此条任先規、可停止郡司之非分交之由、預御裁許、而招居住侶、弥欲致旁御祈禱丁寧矣、

以前条々、粗大略言上如件、

寛元二年六月廿一日　　僧　忠兼上

四、沙弥願也奉書

（島津忠時）

（花押）

別納七郎房忠兼申、近年為薩摩郡地頭代并本郡司忠友之子孫、於当郡内平礼石寺之寺領、地頭方付検断之沙汰、張行非法、郡司方催狩等之雑役、令煩寺中由事、訴状副書、遣之、如状者、尤以不便、就中彼止住之僧徒等、相続長日暁夕之勤行、令申公家武家之御祈云々、所詮於地頭方者、任前々免除之状、至于田畠以下芋桑等、不可致其違乱、又犯科人出来候時者、尋軽重、糺実否、可処所当之罪科、触事懸横難、不可煩寺家者、次於郡司方者、狩役并菓子之押取、牛馬之野□山野草木制止事、忠兼被申之旨、非無其謂、子細見于訴状、但云地頭方、云郡司方、有別子細者、可被注申之由、所候也、仍執達如件、

寛元二年七月六日　　沙弥願也

即郡地頭代紀二郎兵衛尉殿

五、忠兼譲状案

（引返シウラニ）

「これハやまうちゆつりしやう」

譲与　平太子所仁

薩摩郡内平礼石寺水田畠地等事、

但致四至在本証文

右件於寺領者、僧忠兼先祖相伝之所領也、仍平太子仁限永代、本証文一通幷守護所殿証文一通相副天所譲与実也、然仁任譲状之旨、致子々孫々無相違可令領知、但彼寺領内於寺薗一ヶ所、水田壱丁仁者、宛旁御勤、至五廻一仁国之勘料仁、可為住僧之沙汰、自此外、不可住僧お煩、又彼寺住僧与相次忠兼之末物者、為一味同心可有、若於心相違有悪事者、不可後悔、可思量也、仍為後日証文如件、

正嘉三年二月二十九日　　僧忠兼判スリケス

六、僧忠兼置文

山内之四至之間等事、

任本証文之状

東田畔　西山西際

南　河　北　温谷

忠直譲状云、此四至之内ニ於テハ不可致一塵之違乱をも、若是寺内仁致違乱を者、不可有忠直之子孫、被載了、但於西四至者、山ハ広博ト有レ□ハ、寺サウハイノ時、忠友寺所司相共仁臨ミテ薬師之山之西ノ猿走ノ途(トヲ)リ、立野ノ頭ヲ踏途テ、清水大道仁踏定メラレ、若世間ノ習ハ、末々仁ナレハ女房之身ハウ弱ナリナントモ思テ、彼四至之内を有ラムニハ、一塵之違乱ナリトモ全不可承引、書文之状立申テ可蒙御成敗也、亦東四至之末忠友之屋敷等ハ忠友之屋敷之便吉ト有シカハ、為兄弟之中カハ、為屋敷一旦奉所也、雖然忠友死去畢、不奉永代仁、至于某末仁、於テ彼寺内ニ、致水火之諍ヲ於テハ、違乱有ラムニ、所詮任書文状仁、忠兼之子孫彼屋敷等モ沙汰之、可知行也、末々為仁此ヲ注於ク、若彼四至之内仁違乱有ランニハ、此状ヲ上ニ言上シテ、可蒙御下知也、為後日子細之状如件、

正嘉三年大才己未四月日　　僧忠兼判スリケス

七、地頭某書下案

可早任去嘉禎四年惣地頭浄尊免除状、且依去寛元二年守護所殿御免除状、停止非法沙汰事

右、件薩摩郡内平礼石寺者、是本家国吏守護地頭方旁御祈禱致丁寧候也、而間至彼寺領者、地利物已下雑公事第一向被免除了、至検断事者、糺実否、随軽重、雖被行其身計罪科、妻子資財雑物等併寺内被止了、同守護地頭使乱入事被止了、而忠兼存生之後、太子相伝之今、地頭代致非法之沙汰之由、太子申之、事実(者カ)、太以不可然、早任前々免除之状、可致沙汰、仍重免除之状如件、

弘長三年八月　日　　地頭凌与スリキレ

八、薩摩守護代書下

薩摩郡内平礼石寺内事、任故大隅入道(忠時)殿御免除状、停止方々使者之濫妨、土民等可令安堵之状如件、

文永十一年九月　日　　惣地頭兼守護代（花押）

九、某書下

薩摩郡内平礼石寺内事、任故大隅入道(忠時)殿御免除状、停止方々使者之濫妨、土民等可守先例之由、加下知候之状(如脱カ)件、

建治二年十月　日

稱　忍　房

一〇、島津久氏書下

薩摩郡内平礼石寺内事、任故下野入道殿（久経）御寄進状、如先例可被寺務之状如件、

弘安七年九月　日　　藤原久氏（花押）

一一、性有安堵状

薩摩郡内平礼石寺内事、任故大隅殿御免除状、停止方々使者之濫妨、土民等可令安堵之状如件、

正応弐年四月廿九日　　沙弥性有（花押）

一二、島津忠実書下

（島津忠宗）

薩摩郡内平礼石寺事、任故下野入道殿（久経）免除状、停止方々使者之濫妨、土民等可令安堵之状如件、

永仁弐年四月　日　　（花　押）

一三、平忠仁寄進状　（忠直）

ひられいしのくわんおんに、たゝなをのきしんたてまつるしようもんニまかせて、

右、かのてらハ、わうこのこんりうたるうゑ、たゝなをのもんしよにまかせて、たゝ（忠任）たうかしそんすゑ〳〵ニいたるまて、またくいらんをなすへからす、たゝしこのしやうハ、めくり殿ニたかひニ申うけ給ハるあいた、かきしんし候、このうゑハ、たゝたうかしそんニをいて、かのしない（寺内）にいらんをなさんニいたてハ、たゝなをのもんしよのむねニまかせて、またくたゝたうかしそんニあるるへからす、よてしやう如件、

永仁弐年四月廿日　　平忠仁（任）（花押）

一四、沙弥覚西譲状

譲与　薩摩郡内平礼石寺水田畠地等事、

但至四至者本証文等在之、

右件於寺領者、覚西重代相伝之所領也、而相副次第相伝之証文等嫡子新左衛門尉親成仁限永年譲与畢、全不有（可脱カ）他人之妨状如件、

元亨弐年十一月四日　　沙弥覚西（花押）

一五、親成譲状

譲与　薩摩郡内平礼石寺水田畠地等事、

但至四至者本証文等仁在之、

右、件於寺領者、親成重代相伝之所領也、而相副次第相伝之証文等、嫡子毗沙福丸仁限永代譲与畢、今後日不可有他人之妨状如件

嘉暦三年八月六日　　左衛門尉親成（花押）

一六、源兼義譲状

ゆつりたてまつるさつまこほりのうち、ひられいし寺の水田畠地等事、

たゝし四しにをいてハほんせうもん□□

右件の寺りやうハ、兼義ちうたいさうてんの所りやうなり、しかるにやうしひこいぬまろに、代々のゆつり状の正文をくそくしてやうたいをかきて、ゆつりたてまつるところしかりなり、このうゑハ、きやうこうにをいて、またくた人のさまたけあるへからさる状如件、

元徳二年七月十八日　　源兼義（花押）

二

㈠忠直は忠永の子、忠永は平安末期、薩摩大隅両国にまたがって勢威をふるったという阿多忠景の弟、忠景と結んで薩摩郡々司として同地に地盤を築いた。平礼石寺は古寺として既に存在していたが、忠永は同寺を修造し、子孫繁昌を祈念して料田を寄進したという。忠永の子忠直も四至を定めて賦課を免除している。忠直は建仁三年（一二〇三）五月、寺領を七男亀童丸分として調度文書と共に譲与した。同寺は庄国両方の公事が賦課されぬところであり、今後は郡司としても干渉してはならぬことと定められたのである。そして証文を守護所に提出してその保証を求めたのである。連暑の平とは忠直であり、嫡子平とは忠友をさすのであろう忠友は建久図田帳に薩摩郡三百五十一町三段内の社領一町七段（府領五ヶ社内中島宮）の下司として、また公領三百十七町内、成枝八十六町の郡司としてみえる。㈡さて亀童丸は後の忠兼で、平礼石寺の座主となった。忠兼は嘉禎四年（一二三八）五月、㈠をよりどころに新たに惣地頭兼守護所の保証を求めている。すなわち庄国及び地頭方の免判を得て、本家国吏地頭守護所の祈祷を行なっている上は先例にしたがい重ねて寺領四至内の万雑事並びに検断の免除を申請したのであり、これに応じて惣地頭兼守護所僧は安堵の外題を与えている。惣地頭兼守護とは島津氏で当時は二代忠時代であるが、ここに署名しているのは惣地頭兼守護代で浄尊その人であろう。このようにして平礼石寺領については守護所の安堵を得たものの、坐して傍観していたのではその完全な実施は望めない。忠兼はその後もひきつづき寛元二年（一二四四）六月、守護所の裁定を求め㈢、同年七月には守護忠時の袖判を与えられている㈣。これらの中で忠兼は当寺については庄国両方より寺内坊舎及び料田の寄進をうけ、守護島津忠久の代にその代官が何人か薩摩郡地頭（代）に補任されてきたが、当寺には何の妨害も加えず、住侶は安んじて公家武家守護方の祈祷を勤修してきたところが、最近になって地頭所が寺中の土民らの検断沙汰として、その妻子私財の捜索等にも当るようになり、安心して祈祷に専念しがたくなった。そこで今後は犯罪が発生したら真偽を糺し、犯罪が事実であれば式目の旨に任せ、下手人の身柄は地頭所に召取らせるが、妻子や私財については住宅に付けて安堵させることと定め、住侶をして安んじて祈禱に当らせることにしたいというのである。次に郡司方の非法についてのべている。これについては平礼石寺は忠直から忠兼が相続し堂舎を修造し、祈禱に余念なからしめ、何の妨げもなかった。郡司忠直のあと忠友の代になって寺が郡司所の近隣であるため、要用の時に郡司が寺内の下人を雇仕することがあったが、忠友は忠兼にとっては兄にあたるので一々これを制止するようなことはしなかった。ところが忠友のあと忠茂の代になると、法に背き寺内の下人を狩役や諸事に召仕うようになり、出向しないと山野を制して煩いをかけ、あまつさえ寺中の菓子を勝手に押し取ったり、駄をとったりし、これを制止するとかえって質にとったりする、といったような非法を行なっている。道理にそむくというべきであろう。一体富永・成求（富カ）の両名は、公田ではあるが、各別の名としてそこの土民を郡司が他名の土民と混同して使役するということがあってはならぬ筈である。平礼石寺は庄公守護所の祈禱所であり、郡司の進退権は及ばぬ筈である。先例通り郡司非分の関与を排除し、安んじて住侶が

祈祷に専念できるように裁定ありたしと訴えている。そしてこれに対して守護島津忠時は寺領について「地頭が検断の沙汰に付き非法を張行し、郡司方が狩等の雑役を催促して寺中に煩いをかける」等の非法を停めさせるよう沙弥願也をして郡地頭代紀二郎兵衛尉に令している。そしてそれらの証文と共に正嘉三年（一二五九）二月、寺領を平太子に永代譲与したのである(五)。この譲状の中で「但し彼等領内於寺薗一ヶ所、水田一丁」については「旁御勤、云五廻一任国之勘料仁」宛て住侶の沙汰として勤仕させることとし、それ以外は住侶に負担をかけぬこととし、領主たる忠兼の相続者は一味同心して寺領の保持にあたるべきことを令している。同年四月の忠兼の置文はその寺領の四至について詳細に記したものである(六)。しかし平太子の代になってから早速地頭代の非法があったとみえ、弘長三年（一二六三）八月、地頭（代）凌与は平礼石寺領の不輸の特権を認め、検断について具体的に定め言及している(七)。それによれば「実否を糺し軽重に従い、其身ばかりを罪科に行われても、その妻子や資材雑物等についてはすべて寺内に止め、守護地頭使の乱入についても禁止」している。恐らく地頭代は検断権の濫用により、平太子より訴えられたのであろう。平太子は忠兼の血縁者であろうが、直接の関係にあるかないか明らかでない。「薩摩郡地誌備考」所収古系図の中に、

薩摩六郎忠直二男
忠宗
号山口次郎
忠光
後入道
忠重
女子
平礼石座主職
後忠清成枝弥平三

とあり、この女子が平太子かと思われる。

平太子は女性故あなどられ非法を受けると訴えている。何れにしても忠兼の後継者として譲られたものかと考えられる。以上平礼石寺に付与された特権の確認はその後文永十一年（一二四七）九月(八)、建治二年（一二七六）十月(九)、弘安七年（一二八四）九月(十)正応二年（一二八九）四月(十一)、永仁二年（一二九四）四月(十二)、とつづいて行なわれている。何れも惣地頭兼守護所の発出した書下で、文章はこのうち(八)・(九)・(十一)は「任故大隅殿御免除状」とあり(十二)は「任故下野入道殿免除状」とあるだけの相異で方々の使者の濫妨の停止と土民の安堵を令したものであり、(十)もまた「任下野入道殿御寄進状」せて寺務すべきことを令したものである。

かくして永仁二年（一二九四）四月、平忠任（忠仁とあるが忠任であろう）は先祖平忠直（薩摩郡司）が平礼石観音に寄進した証文にしたがい、忠任の子孫たるものは今後一切寺内に違乱を行なってはならないとの証状を記している(十三)。忠任は忠直―忠友―忠持（茂）―忠国の後で薩摩郡々司を当時世襲していたのであろう。

元亨二年（一三二二）十一月、平太子の後と思われる沙弥覚西は重代相云の所領平礼石寺の水田畠地等を嫡子新左衛門尉親成に永代譲与しており(十四)、さらに嘉暦三年（一三二八）八月にその左衛門尉親成は重代相伝の所領平礼石寺の水田畠地等を嫡子毘沙福丸に永代譲与している(十五)が、翌々年の元徳二年（一三三〇）七月、今度は源兼義なる者が同領（重代相伝所領という）を養子彦犬丸に代々の譲状の正文を一括してそえて永代譲与している(十六)。現在山内文書として伝えられる一六通の文書とはこのようにして彦犬丸が譲りうけた文書だったのである。そして年代からみて源兼義は毘沙福丸その人だったのではあるまいか。

右の相伝系図を作成すれば次の如くになろう。

忠友―忠茂―忠国―忠任
　　忠恒（成岡）
忠永―忠直―忠兼―平太子―覚西―親成―源兼義―彦犬丸
　　（亀童丸）　　（毗沙福丸）

平姓から源姓にかわった時点、事由等について明らかにすることは出来ないが、縁戚関係者の相続による移動（たとえば平太子の夫が源姓であったことにより、その子が源姓を称した）ではないかと推測する。

或は(三)にみえるめくり殿は廻殿で大隅の豪族廻氏かとも思われる。廻氏は頼政の末裔で源姓を称する。

三

忠永は既に存していた古寺を修造し料田を寄進したが、その目的は子孫の繁栄にあった。忠永の子忠直はさらに四至を定め広域を寺領とし、七男の忠兼に譲渡したが、忠兼はこの地が観音殊勝の地であり利益広大の寺域であって、庄国及び地頭方より免判を得、本家、国司、地頭守護所の祈禱に当ってきた格別の寺であることを主張している。忠直の嫡子で郡司となった忠友の代には、忠兼は隣接の郡司所に種々の便宜を与え、郡司が寺内の下人を雇仕することも認めていたが、次の忠茂の代には座主として郡司の干渉を排除し、地頭の検断権行使の排除と併せて郡司の関与を非法としてその停止方を守護所に訴えているのである。即ち郡司薩摩平氏の氏寺としての一面を払拭し、観音の霊場、国、庄園、守護地頭の祈願寺という一面を前面に押し出してきている。忠兼が別納七郎房と称するのは(四)の端裏書に「祁答院別納名主七郎」とあるところから、或は祁答院に名主職を有していたことによるのかもしれないが、惣領郡司に対する独立の立場を表明しているものともうけとれよう。守護地頭所の免判をよりどころに一貫して同所に訴え、郡司進止権の排除を主張してやまない。

そして本来地頭未設置地区の多かった薩摩郡にもようやく地頭の支配権が浸透し、郡司名として地頭不関与の成枝名にも五升米の賦課、地頭名の出現等があり、地頭勢力の進出は抑止しがたい大勢であった。平礼石寺座主はむしろ守護地頭方と緊密に結び寺領の確保につとめたのであろう。

現在平礼石寺跡＝金剛院跡として若干の石造物（平安・鎌倉期のものを含む）を残す場所は大字西手、小字成岡といい、まさに成枝名の支名成岡名の地に当る。成岡は忠友の子、平三郎忠恒の仮名と考えられる。主として忠友の成枝名を相伝した忠持(茂)は兄に当り、平礼石寺座主となった忠兼は叔父に当る。平礼石寺の寺域内に成岡名があり、また富永（長）、成求（富）名も公田ながら各別の名とされていたことは、これらが、成枝名から分れながら平礼石寺との関係で郡司の進止権の及ばぬ別名とされていたことを物語るものであろう。忠兼のあとをついだ平太子が或は成富名主の祖かと推定される忠友の弟忠宗の子忠光（入道極楽）の、弟忠重の女に当ると思われることも注目されよう。

山内氏文書を載録する島津家本「薩藩旧記雑録前編」の関係部分は何れも伊地知季安の自筆にかかり、彼が蒲生士山内氏（『三国名勝図会』では山内源大夫）所蔵の原本から書写したことは間違ないと思われる。また季安は文書の後に人名等について補注を加えている。

(八)に「按ルニ故大隅入道殿ハ忠時ニ当ル、文永九御逝去也」、(九)に「按ルニ故大隅入道ハ御二代忠時公ノ事ナラン」、(十)に「按ル

ニ此年四月、三代久経公御逝去ナレハ故下野入道ハ久経公ノ事ナラン、左アリテ久経公ノ御末弟ニ七郎久氏ト云御方アリ、時代ヲ以テ考レハ当レリ、後考ヲ竢ツ」、(ト)に「按ルニ此花押ハ御四代忠宗公ニテ、故下野入道ハ久経公ナルベシ、比志島氏文書、正応三　十二月十五日、忠宗公御花押等見合ヘシ」の如くである。季安の記す如く薩摩郡は鎌倉時代を通じて薩摩国守護島津氏が惣地頭職をも併せもつ郡であり、惣地頭兼守護とはもちろん島津氏であるが、実務は代官のつかさどるところで、(ニ)の惣地頭兼守護所僧とあるのは、花押からみて延応元年（一二三九）十一月九日付の比志島文書に惣地頭兼守護所代僧とあるのと同じく大輔房浄尊であろう。(四)の袖判について季安は「宝治元年十一月廿二日比志島文書ニ此花押アリ、見合ベシ」と記しているが、それは薩摩国守護前大隅守忠時のものに相違ない。沙弥願也は忠時の意をうけて文書を発出したものであり、宛名は即郡地頭代紀二郎兵衛尉殿となっている。同人は比志島文書、宝治元年（一二四八）十一月廿二日条に惣地頭紀二郎左衛門尉殿とあるのと同人であろう。惣地頭代にして薩摩郡、満家院の地頭を兼職していたのであろう。前述の如く当初薩摩郡には地頭職のない郡司名（建久図田帳によれば成枝八十六町、他に光富四十九町、是枝九町も地頭のおかれぬ一円公領で計一四四町であり、薩摩国々領二一一町の大半をしめている。同郡内島津庄寄郡等には惣地頭島津氏が所職を有している。）があり、惣地頭の関与も検断権の行使を契機としている。そして地頭権限の増大にともない成枝名内の別名的存在となっていた平礼石寺はむしろ惣領郡司の管下を脱して守護惣地頭に接近しその庇護を求めたのであろう。

平礼石寺の文書が何故鎌倉時代の文書のみを蒲生士山内氏文書として伝えたのか疑問はつきないが、その文書相伝の事情の解明が中世から近世からにかけてたどった平礼石寺の歴史を明らかにする重要な鍵のように思われてならない。

（追記）

本論で述べたことは前に「薩摩国御家人薩摩郡成枝、成富名主について　―三角（森）氏文書の紹介を中心に―」（鹿児島大学法文学部紀要「文学科論集」一二）でふれたことがある。参照していただければ幸いである。

（鹿児島中世史研究会報37　所収）

（補記）

右の論文は昭和五十二年執筆のものであるが、今回関係資料として再掲するに際し、とくに改稿せず、若干誤脱等を修補するにとどめたことをおことわりしておく。

あ と が き

バイパスの予定地にあった土師器の散布地は，調査が進むにつれて途方もないほどの大遺跡となった。成岡・西ノ平遺跡とも長期にわたる生活跡を残しているが，これらを正確に記録し報告するにはいま少し時間が不足していた。しかしながら，多くの先生方の御指導，同僚諸氏の協力によって不十分ではあるが，ここに完成するに至ったことを感謝したい。今後，これらの資料が十分に活用できるには，もう少し分析等を加えていかねばならないと思っている。機会をみてやってみたい。

調査するにあたっては地元の中福良町をはじめ，周辺の人々に色々と便宜を図っていただき調査の順調な進捗に協力していただいた。紙上を借りて厚くお礼申しあげるとともに，今後とも周辺地域の文化財保護に一層の御協力をお願いしたい。

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)

成岡・西ノ平・上ノ原遺跡(本文)

発行日　昭和58年３月20日
発　行　鹿児島県教育委員会　　〒892　鹿児島市山下町14番50号
印　刷　文進社印刷株式会社　　〒890　鹿児島市南栄町３－１

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)

成岡遺跡
西ノ平遺跡
上ノ原遺跡

一般国道3号線隈之城バイパス建設に伴う発掘調査報告書(1)

(図　版)

1983・3

鹿児島県教育委員会

図　版　目　次

（カラー図版）

図版１　成岡・西ノ平・上ノ原遺跡全景（南上空より）
図版２－１　成岡遺跡全景（北上空より）
図版２－２　西ノ平遺跡北半全景（北上空より）
図版３－１　緑釉土器（西ノ平遺跡）
　　２　金色・銀色に発色する須恵器

（成岡遺跡）

図版４　縄文式土器
図版５－１　南半部の住居跡群（北より）
　　２　北半部の住居跡群(南より)
図版６－１　１号住居跡（西より）
　　２　２号住居跡（北より）
図版７－１　３号住居跡（南西より）
　　２　４号住居跡（東より）
図版８－１　５号住居跡（北より）
　　２　５号住居跡（東南より）
　　３　５号住居跡（西より）
　　４　坩形土器出土状況
図版９－１　６号住居跡（東より）
　　２　遺物出土状況（西南より）
　　３　遺物出土状況（東南より）
図版10－１　７号住居跡（南より）
　　２　遺物出土状況（東北より）
　　３　遺物出土状況（南より）
図版11－１　８号住居跡（南より）
　　２　遺物出土状況（南より）
　　３　台付鉢形土器
　　４　遺物出土状況（北東より）
図版12－１　９号住居跡（東より）
　　２　10号住居跡（西より）
図版13－１　11号住居跡（北より）
　　２　12号住居跡（南東より）
図版14－１　13号住居跡（東より）
　　２　遺物出土状況（北より）
図版14－３　甕形土器
図版15－１　14号住居跡（北より）
　　２　炉跡（15号住居跡）
　　３　15号住居跡（南より）
図版16　古墳時代の遺物1)（甕形土器・壺形土器）
図版17　古墳時代の遺物2)（高坏形土器・坩形土器・鉢形土器・蓋形土器・須恵器・砥石）
図版18　古墳時代の遺物3)（鉢形土器）
図版19－１　16号住居跡（南より）
　　２　17号住居跡（北より）
図版20－１　18号住居跡（東より）
　　２　溝状遺構２（北より）
図版21－１　土坑A（東より）
　　２　土坑C（南西より）
　　３　土坑H（西より）
　　４　土坑Ｉと土坑Ｊ(東より)
　　５　土坑Ｊ（南より）
　　６　土坑Ｉ（東より）
図版22－１　墓石（北西より）
　　２　墓坑Ｉ群（北西より）
図版23－１　８号墓（北より）
　　２　１号墓（西より）
　　３　15号墓（西より）
　　４　糸のついた古銭
　　５　布痕のある古銭

図版24－1　溝（東より）
2　墓石（南より）
3　チリ溜め（東より）
（西ノ平遺跡）
図版25　石器
図版26　縄文式土器
図版27－1　掘立柱建物1（柱穴掘りあげ前：東より）
2　掘立柱建物1（柱穴掘りあげ後：東より）
図版28　掘立柱建物1の柱穴
図版29－1　掘立柱建物2（柱穴掘りあげ前：東より）
2　掘立柱建物2（柱穴掘りあげ後：東より）
図版30　掘立柱建物2の柱穴
図版31－1　掘立柱建物3（東より）
2　平安時代の建物群（南より）
図版32－1　掘立柱建物8（東より）
2　掘立柱建物8（南より）
図版33－1　掘立柱建物9（南より）
2　掘立柱建物9（東より）
図版34－1　掘立柱建物13（南より）
2　掘立柱建物13（東より）
図版35－1　掘立柱建物14（南より）
2　掘立柱建物14（西より）
図版36－1　土坑C（北より）
2　土坑D（東より）
3　土坑D・F・G（北より）
4　土坑F（北より）
5　土坑F（北より）
6　土坑G（東より）
図版37－1　土坑K・L・M（南東より）
2　土坑K・M（東より）
3　土坑M（東より）
図版37－4　土坑K（南より）
図版38－1　土坑H（東より）
2　土坑Nと土坑O（北より）
3　土坑R（西より）
図版39－1　溝状遺構1（北西より）
2　溝状遺構1（北西より）
3　溝状遺構1と溝状遺構2（北西より）
図版40－1　土器集積遺構1（西より）
2　土器集積遺構1（南より）
3　土器集積遺構1（南より）
4　土器集積遺構2（北より）
5　土器集積遺構2（南より）
6　土器集積遺構3（西より）
図版41　遺物出土状況
図版42　古代・中世の遺物(1)（土師器・黒色土器・須恵器・陶硯）
図版43　古代・中世の遺物(2)（磁器・土製品・石製品・金属製品）
図版44－1　火葬場（南より）
2　1号墓（東より）
3　1号墓（西より）
図版45－1　墓坑群（南より）
2　墓石（西より）
3　9号墓（南より）
図版46－1　江戸時代の建物群（20区付近：東より）
2　かまどA～C（北より）
3　江戸時代の建物群（21区付近：西より）
図版47　江戸時代の土器

図版 1

成田・西ノ平・上ノ原遺跡全景（南上空より）



1．成岡遺跡全景（東上空より）



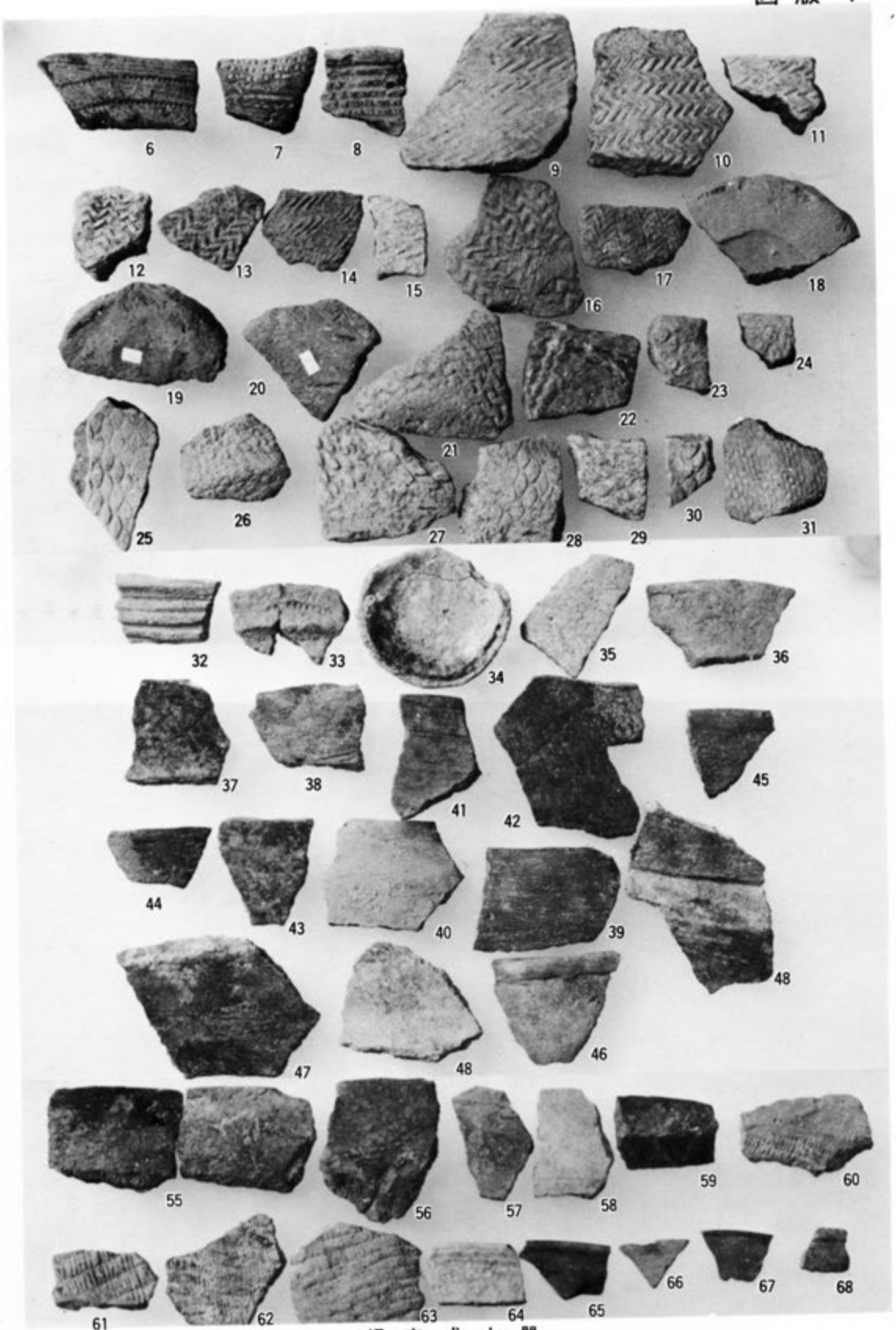
2．西ノ平遺跡北半全景（北上空より）



1．緑　釉　土　器（西ノ平遺跡）



2．金色・銀色に発色する須恵器


6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
41
42
45
44
43
40
39
48
47
48
46
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68

縄 文 式 土 器

図 版 5



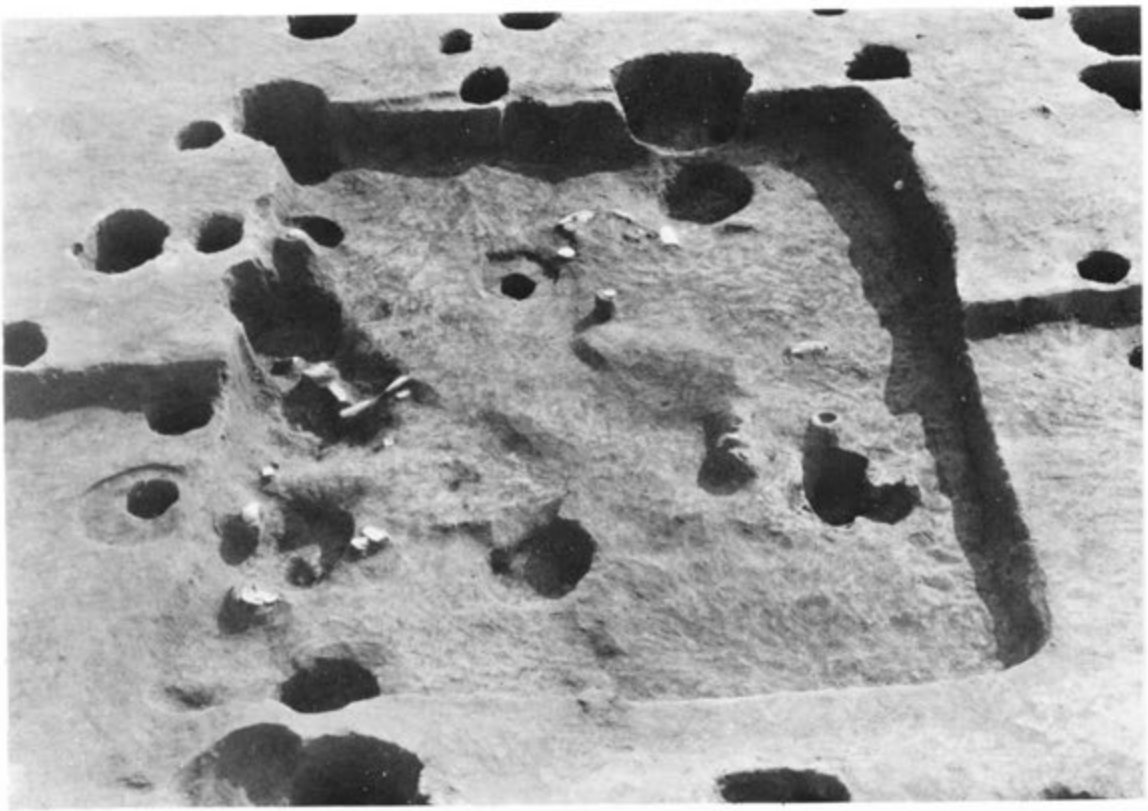
1．南半部の住居跡群（北より）



2．北半部の住居跡群（南より）



1．1号住居跡（西より）

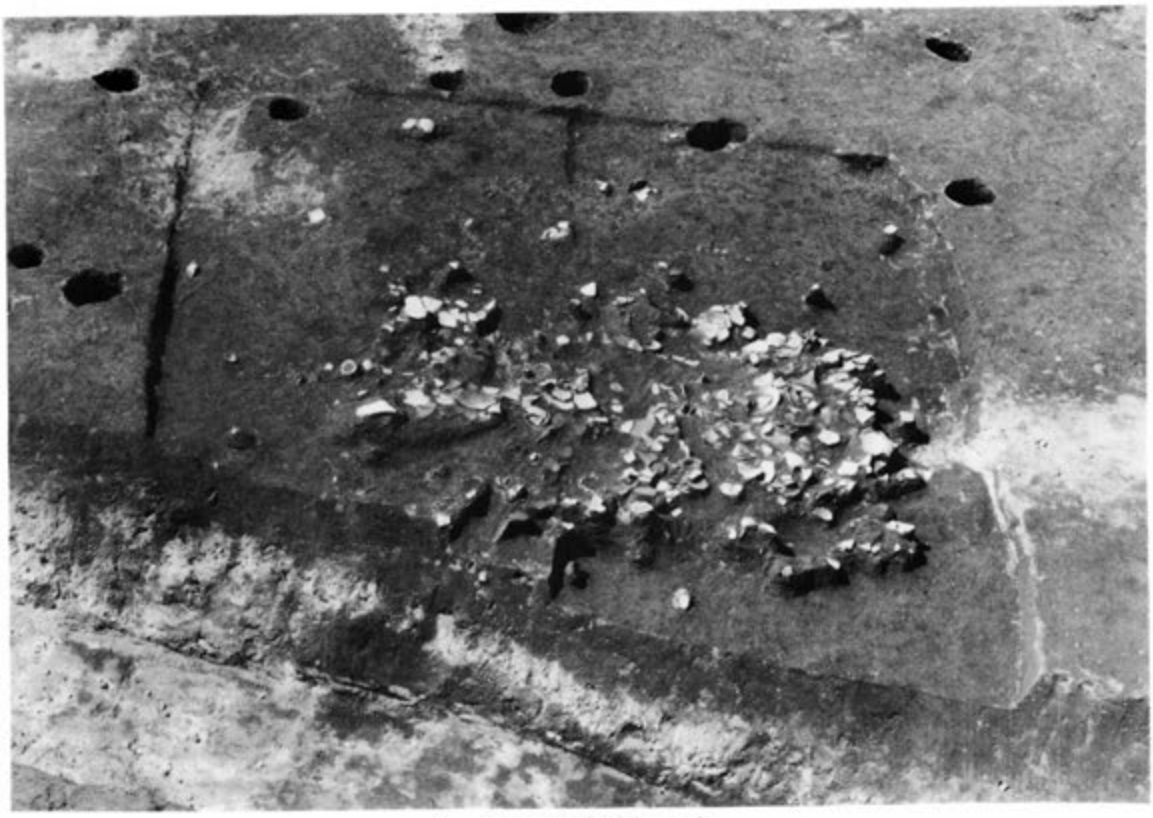


2．2号住居跡（北より）

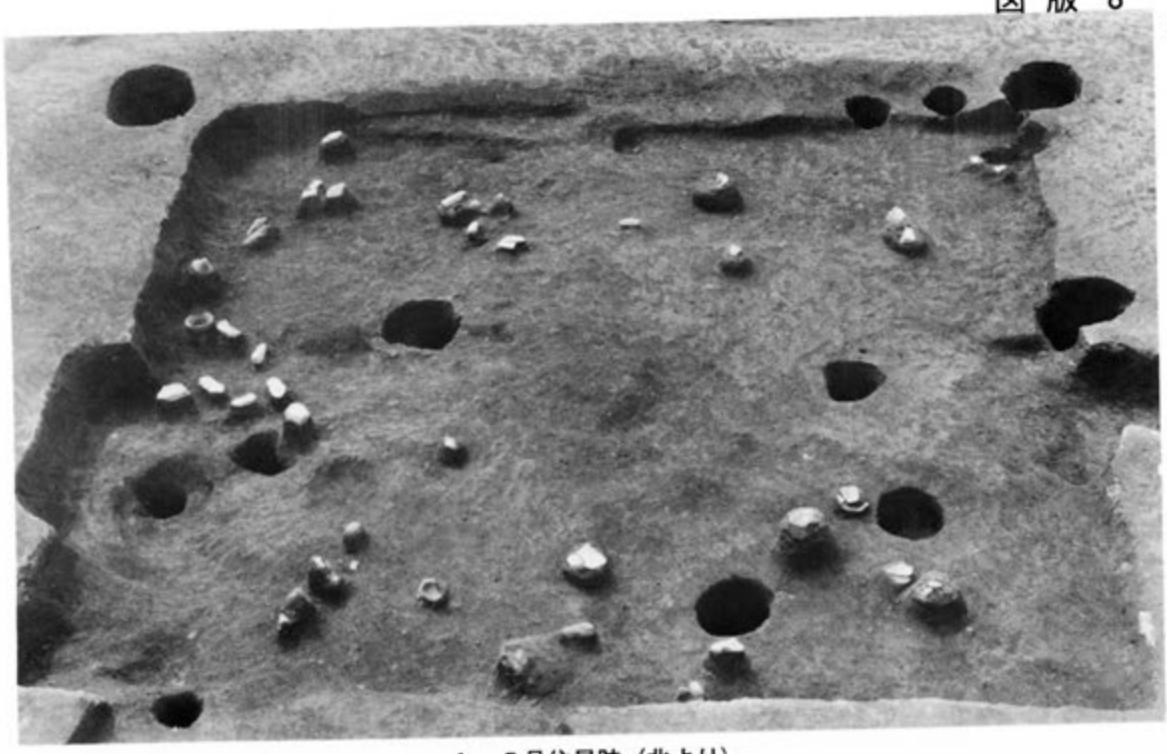
図 版 7



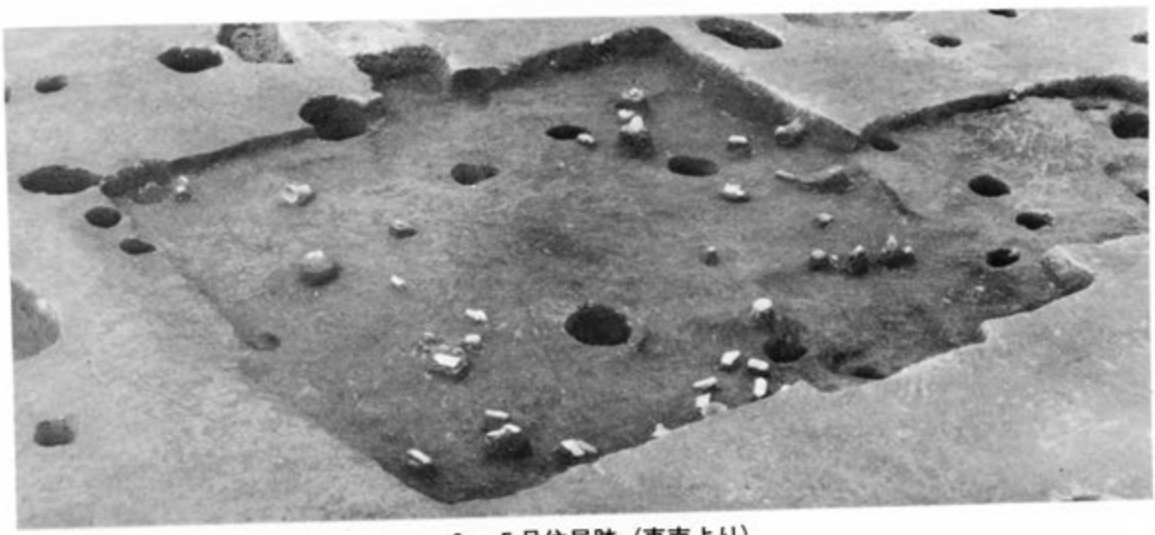
1．3号住居跡（南西より）



2．4号住居跡（東より）



1．5号住居跡（北より）



2．5号住居跡（東南より）



3．5号住居跡（西より）



4．坩形土器出土状況

図 版 9



1．6号住居跡（東より）



2．遺物出土状況（西南より）



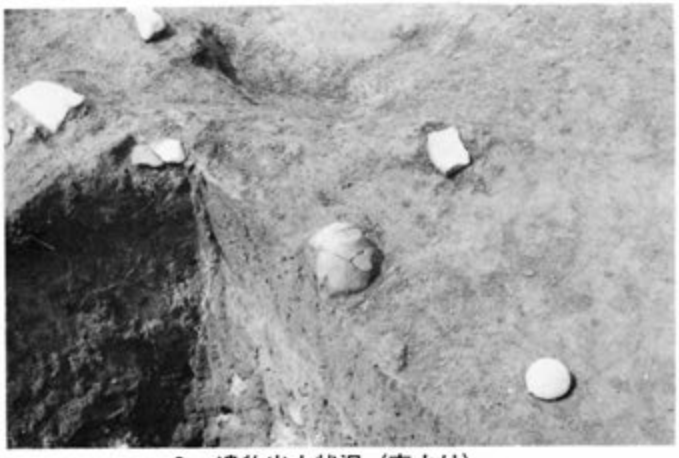
3．遺物出土状況（東南より）



1．7号住居跡（南より）



2．遺物出土状況（東北より）



3．遺物出土状況（南より）

図 版 11



1．8号住居跡（南より）



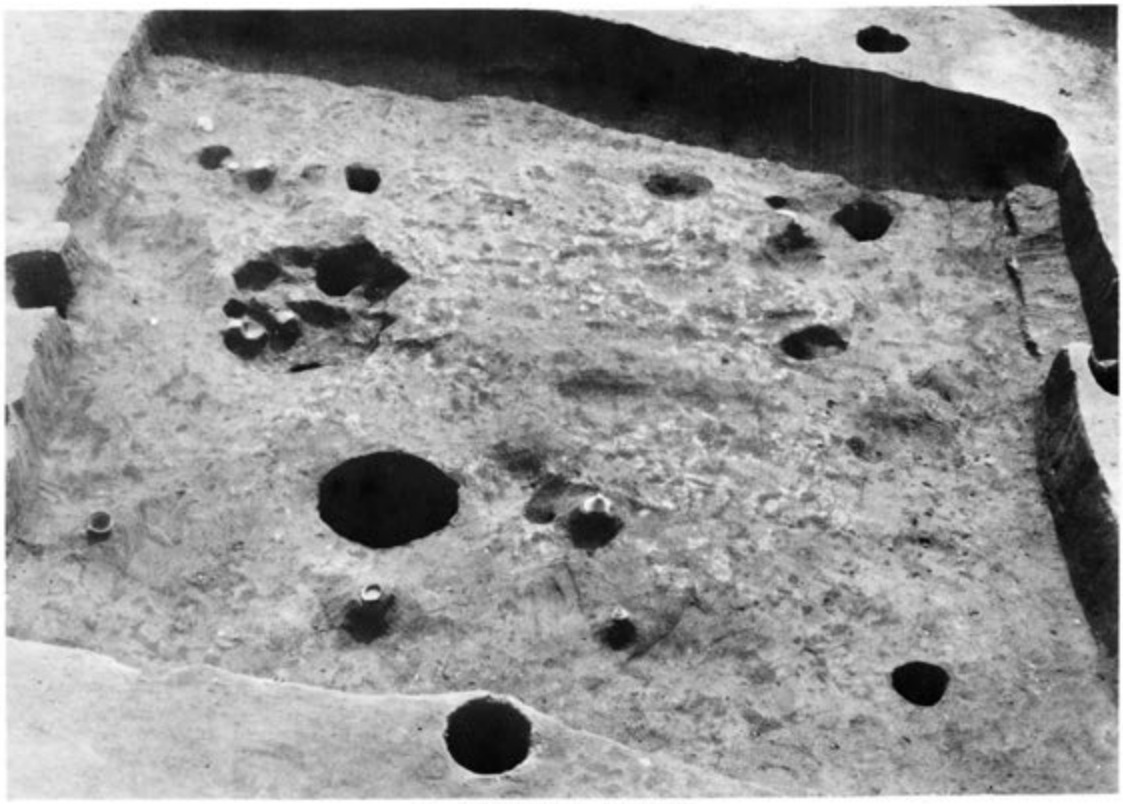
2．遺物出土状況（南より）



3．台付鉢形土器



4．遺物出土状況（北東より）

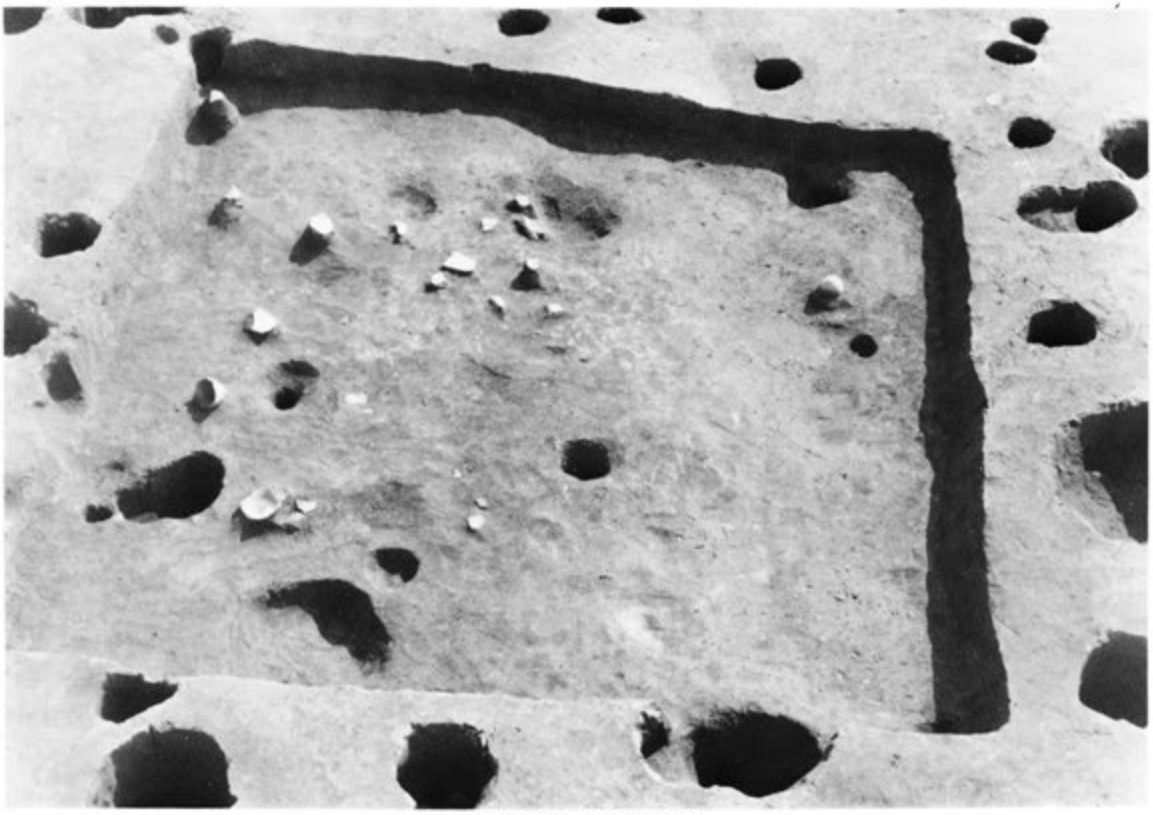


1．9号住居跡（東より）



2．10号住居跡（西より）

図 版 13



1．11号住居跡（北より）



2．12号住居跡（南東より）



1．13号住居跡（東より）

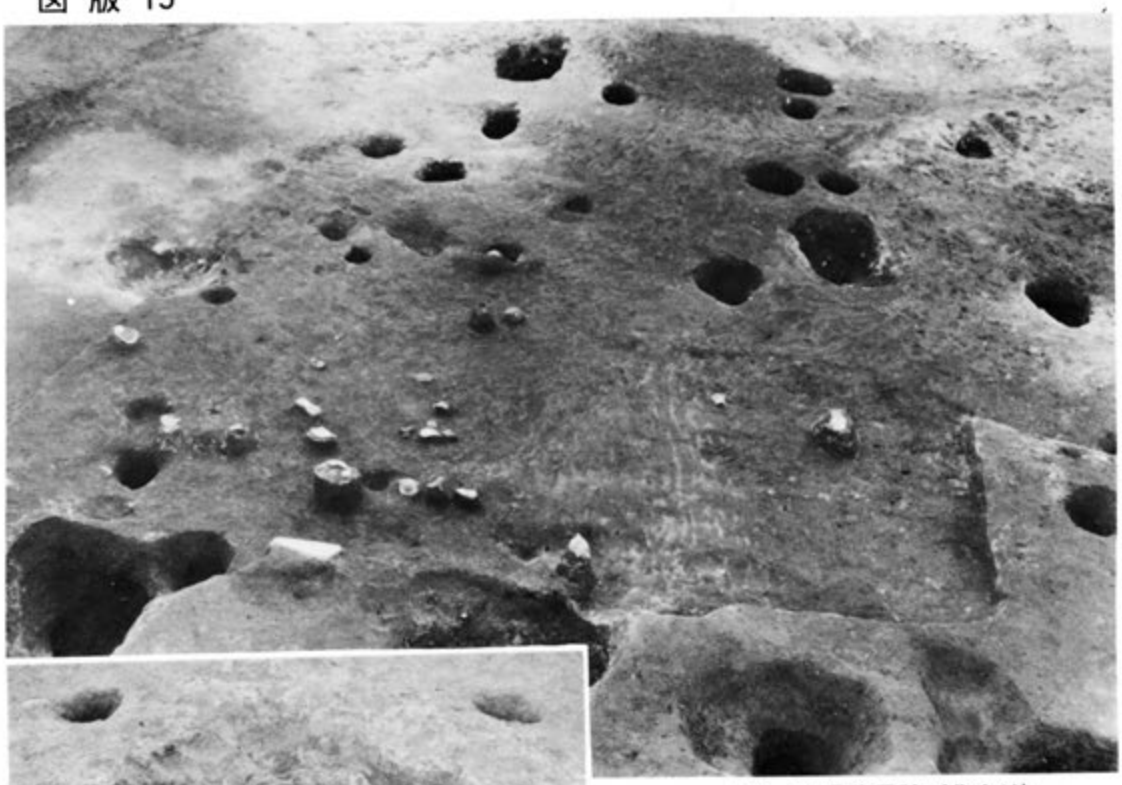


2．遺物出土状況（北より）



3．甕 形 土 器

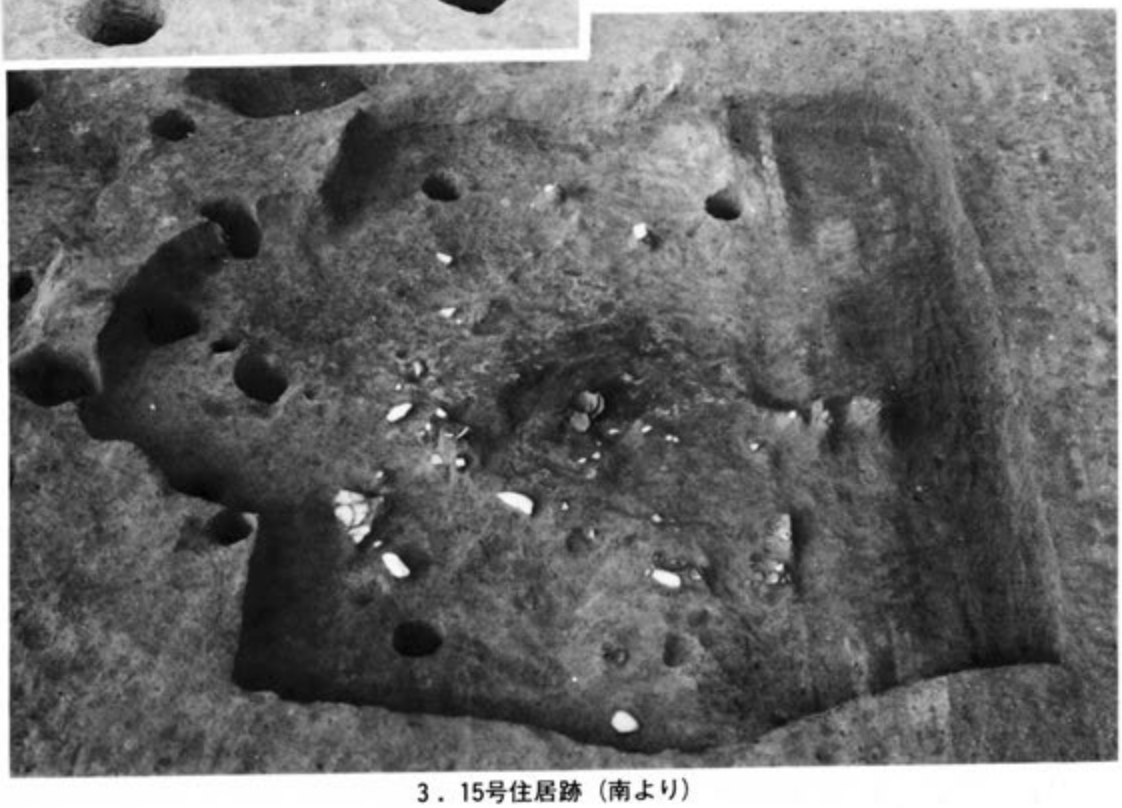
図 版 15



▲1．14号住居跡（北より）



◀2．炉跡（15号住居跡）



3．15号住居跡（南より）


217


115


133


114


283


352


203


140


211


186


139


202

古墳時代の遺物(1)（甕形土器・壺形土器）

図 版 17


93


166


243


268


180


223


255


374


309


S21


148


86


97


98


110


111

古墳時代の遺物(2)（高坏形土器・坩形土器・鉢形土器・蓋形土器・須恵器・砥石）


113


160


281


154


225


282


157


228


375


158

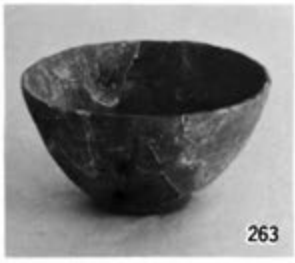

261


376


262


379


162


263

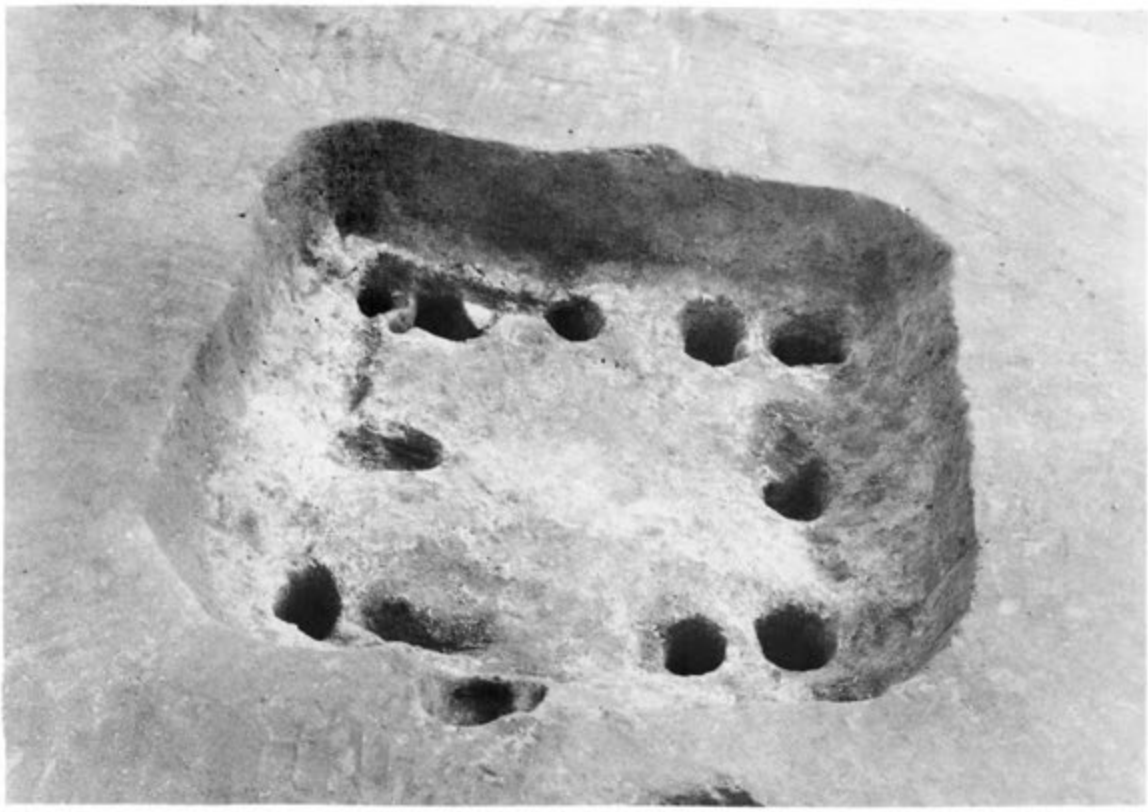

240

古墳時代の遺物(3)（鉢形土器）

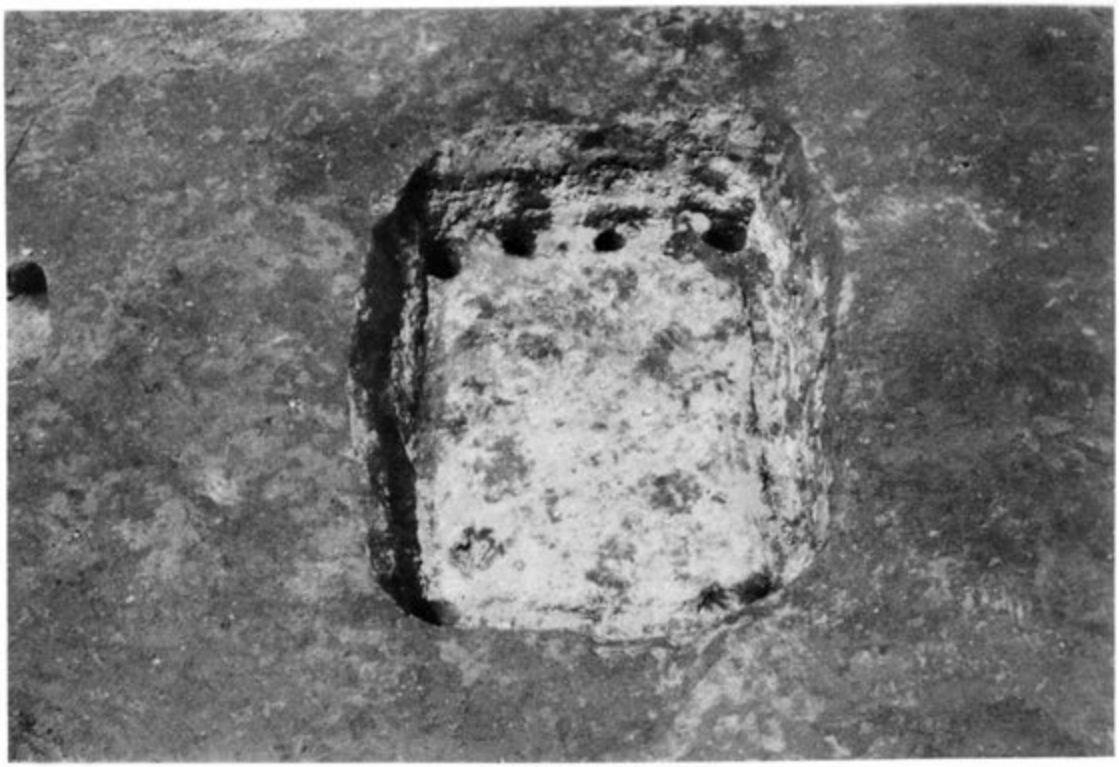
図 版 19



1．16号住居跡（南より）



2．17号住居跡（北より）



1．18号住居跡（東より）



2．溝状遺構２（北より）

図 版 21



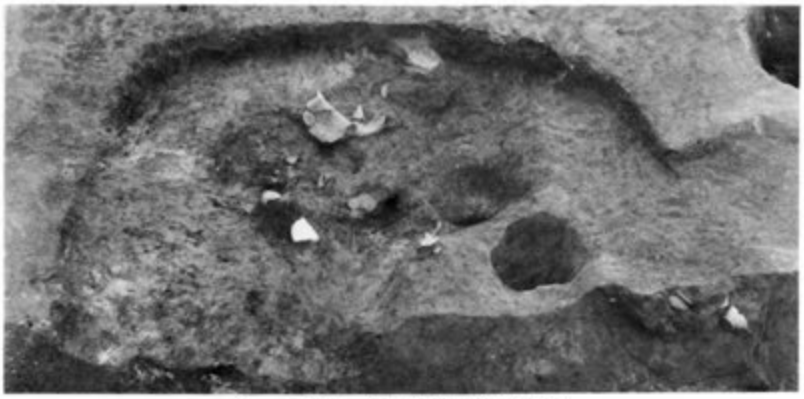
1．土　坑　A（東より）



2．土　坑　C（南西より）



3．土　坑　H（西より）



4．土坑Ⅰと土坑Ｊ（東より）



5．土坑Ｊ（南より）



6．土坑Ⅰ（東より）

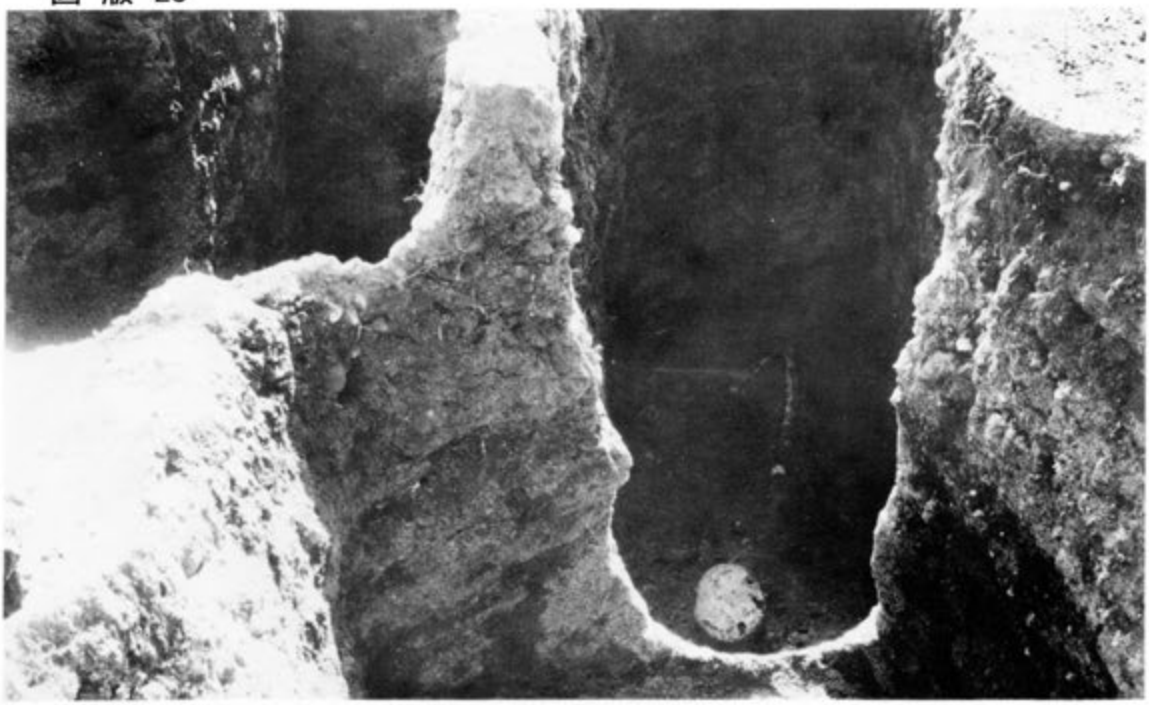


1．墓　　石（北西より）



2．墓坑１群（北西より）

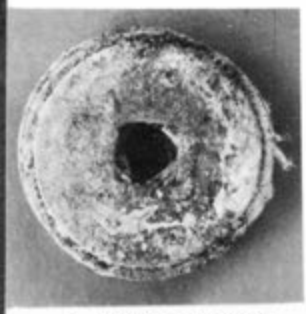
図 版 23



1．8号墓（北より）



2．1号墓（西より）





4．糸のついた古銭



3．15号墓（西より）



5．布痕のある古銭



1．溝　（東より）

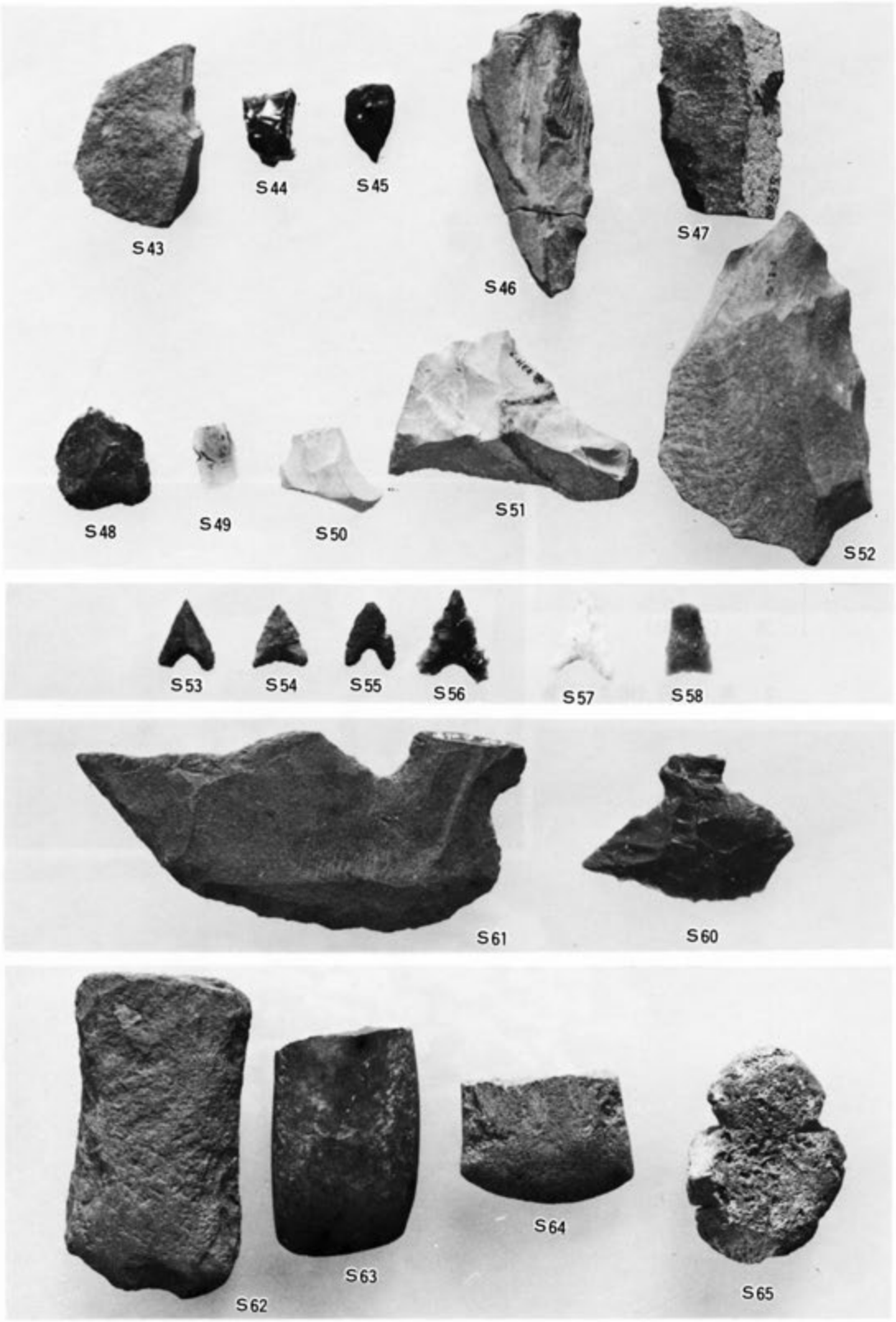


2．墓　石（南より）▶

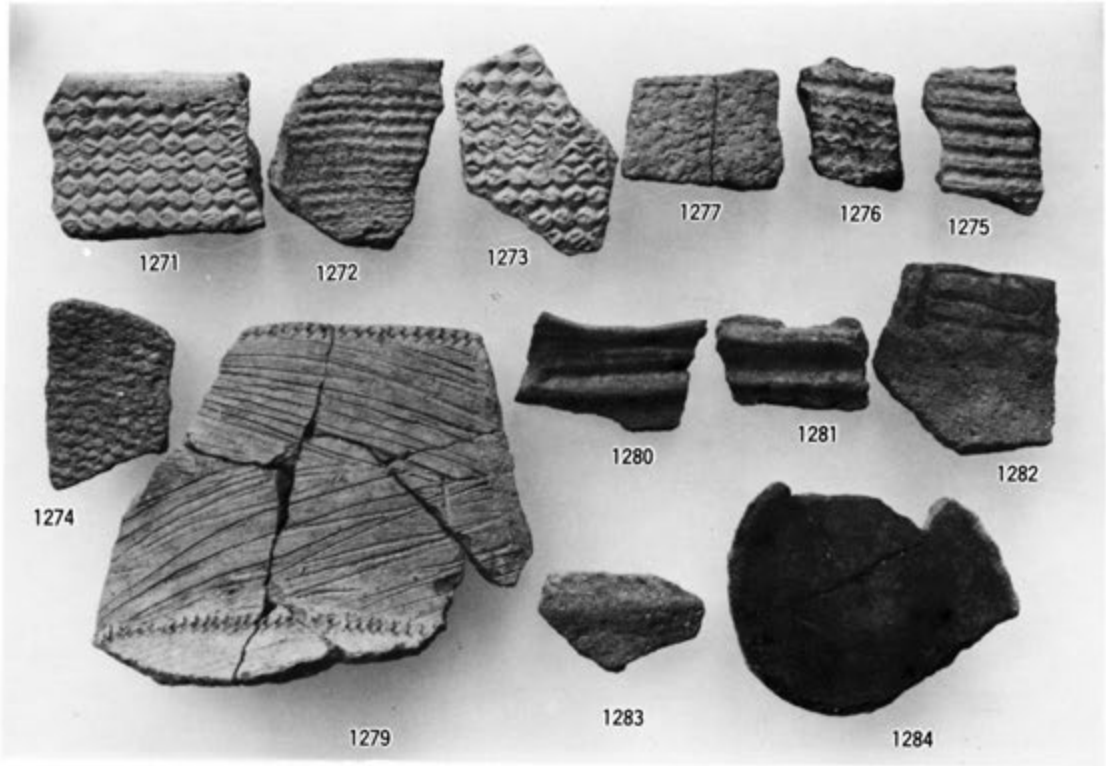


3．チリ溜め（東より）

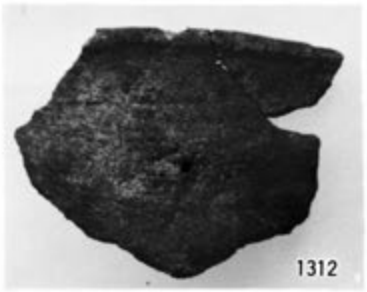
図 版 25


S43
S44
S45
S46
S47
S48
S49
S50
S51
S52
S53
S54
S55
S56
S57
S58
S61
S60
S62
S63
S64
S65

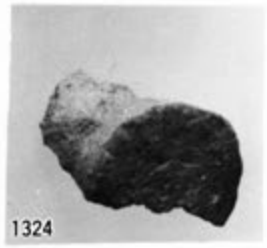
石　　器

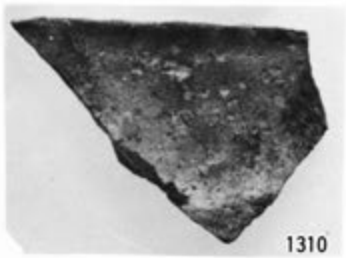

1271
1272
1273
1277
1276
1275
1274
1280
1281
1282
1279
1283
1284


1278

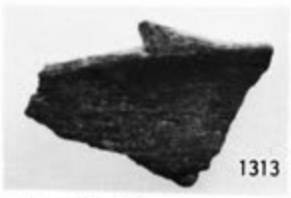

1312


1311


1324


1310


1321


1313

縄 文 式 土 器

図 版 27



1．掘立柱建物1（柱穴掘りあげ前：東より）



2．掘立柱建物1（柱穴掘りあげ後：東より）

図 版 28



柱 穴 5



柱 穴 5



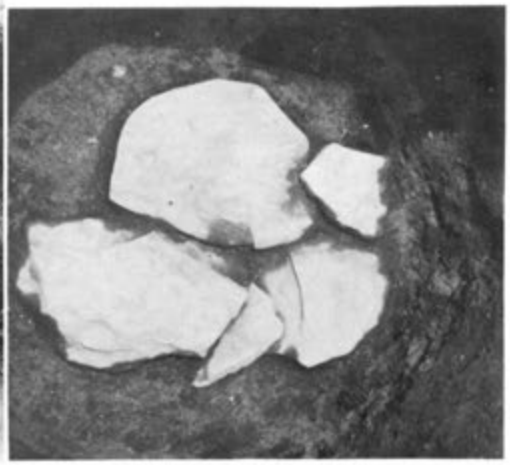
柱 穴 5



柱 穴 7



柱 穴 6



柱 穴 11

掘立柱建物1の柱穴

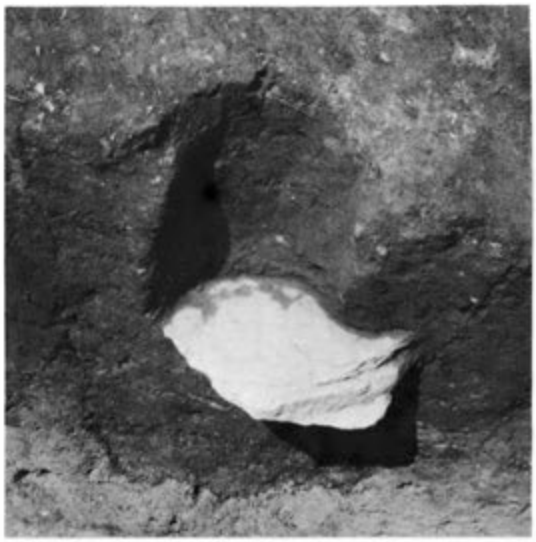
図 版 29



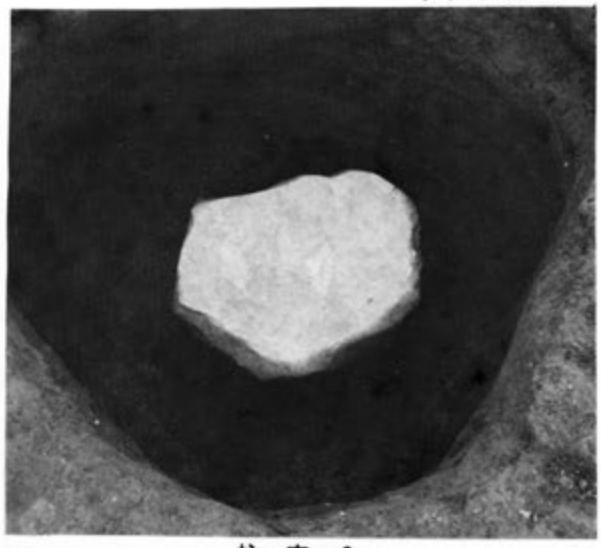
1．掘立柱建物２（柱穴掘りあげ前：東より）



2．掘立柱建物２（柱穴掘りあげ後：東より）



柱 穴 11



柱 穴 2



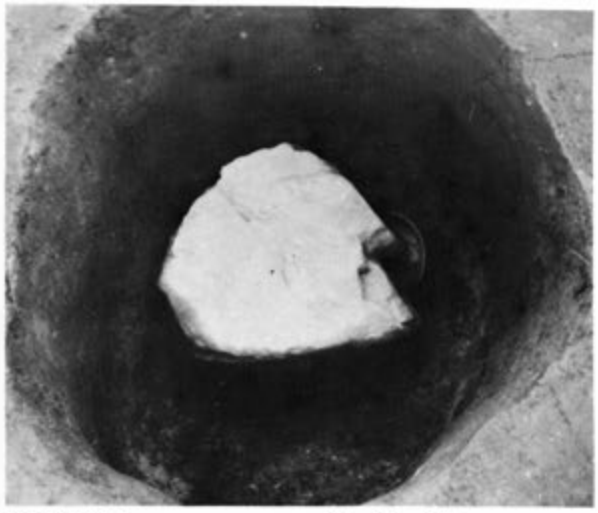
柱 穴 5



柱 穴 7



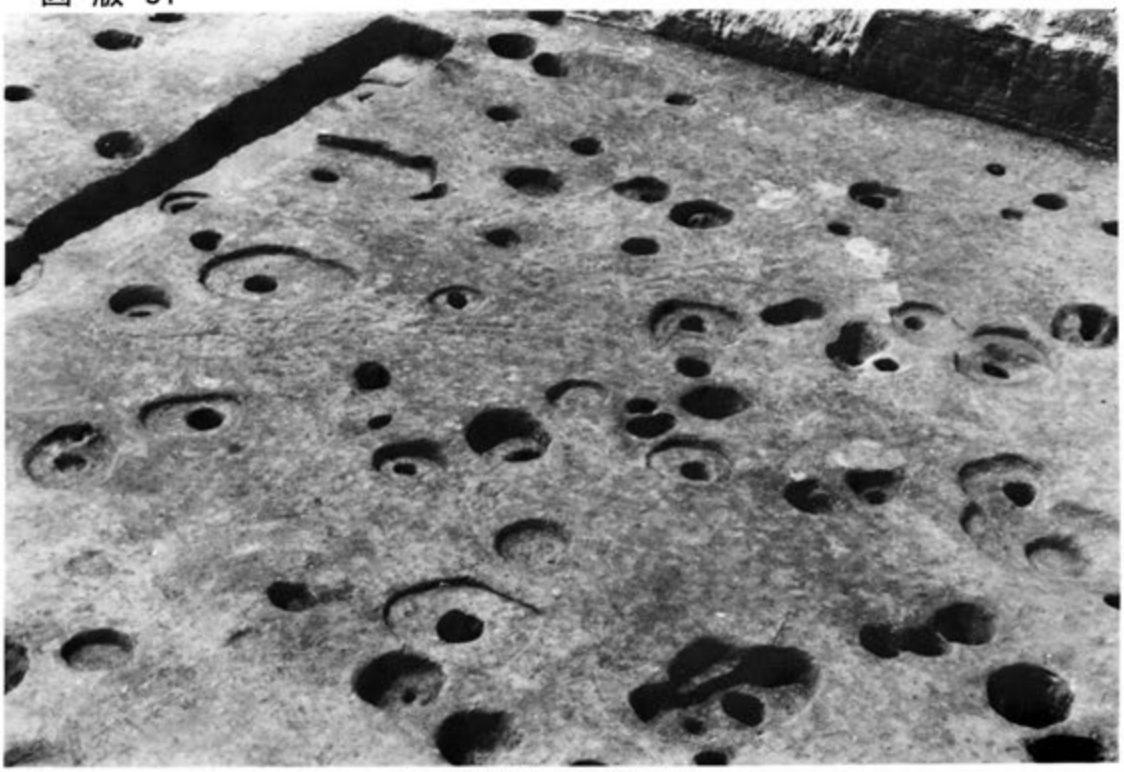
柱 穴 5



柱 穴 12

掘立柱建物2の柱穴

図 版 31



1．掘立柱建物３（東より）



2．平安時代の建物群（南より）



1．掘立柱建物８（東より）



2．掘立柱建物８（南より）

図 版 33



1．掘立柱建物９（南より）



2．掘立柱建物９（東より）



1．掘立柱建物13（南より）



2．掘立柱建物13（東より）

図 版 35



1．掘立柱建物14（南より）



2．掘立柱建物14（西より）



1．土坑C（北より）



2．土坑D（東より）



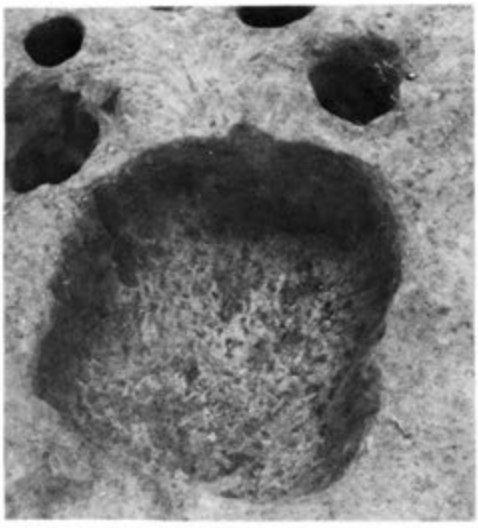
3．土坑D・F・G（北より）



4．土坑F（北より）



5．土坑F（北より）

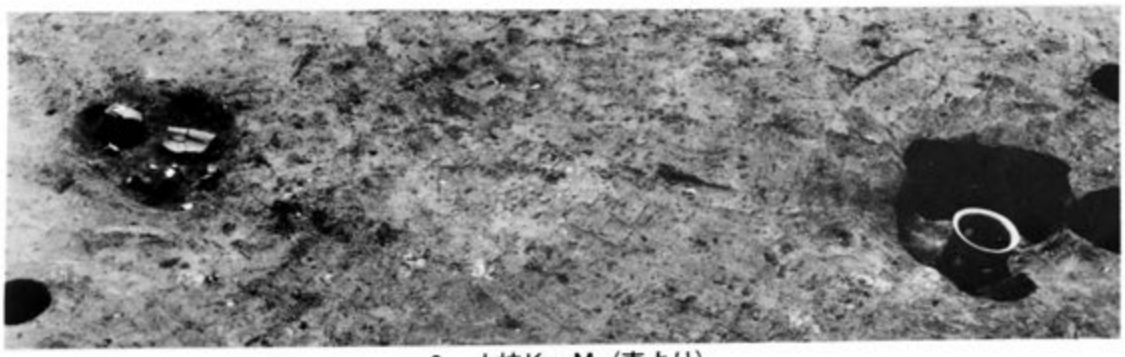


6．土坑G（東より）

図 版 37



1．土坑K・L・M（南東より）



2．土坑K・M（東より）



3．土坑M（東より）



4．土坑K（南より）



1、土坑H（東より）



2．土坑Nと土坑O
（北より）



3．土坑R（西より）

図 版 39



1．溝状遺構１（北西より）



2．溝状遺構１（北西より）



3．溝状遺構１と溝状遺構２（北西より）



1．土器集積遺構１
（西より）



2．土器集石遺構１（南より）



3．土器集積遺構１（南より）



4．土器集積遺構２（北より）



5．土器集積遺構２（南より）



6．土器集積遺構３（西より）

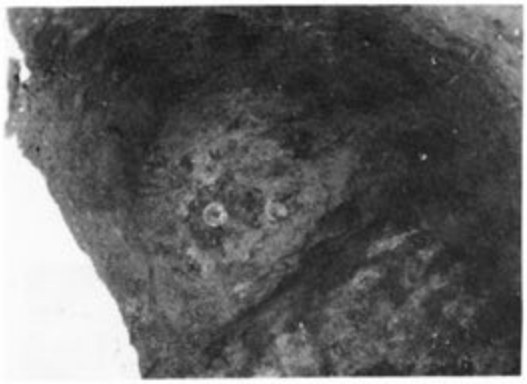
図 版 41



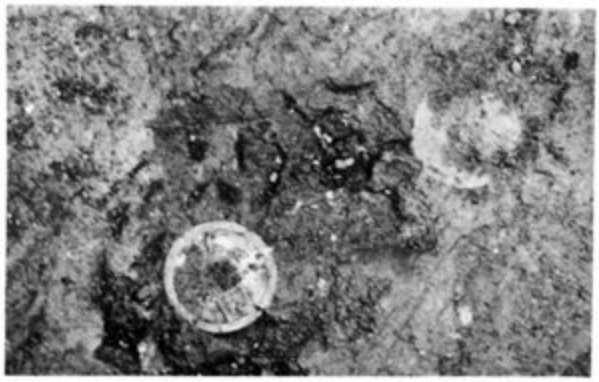
土師器（16F区付近）



土師器（16F区付近）



古　　銭（17G区柱穴4）



古　　銭（17G区柱穴4）



青銅製帯金具（建物7柱穴6）



青銅製帯金具



鉄　製　品（27I区）



須恵器壺（29G区）



内黒土師器（16F区）



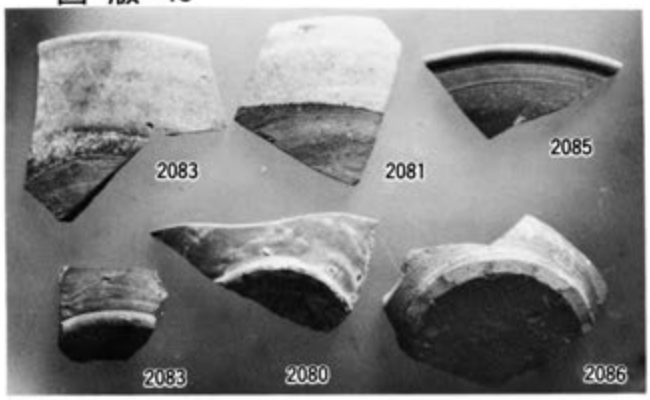
有孔円板（29J区）

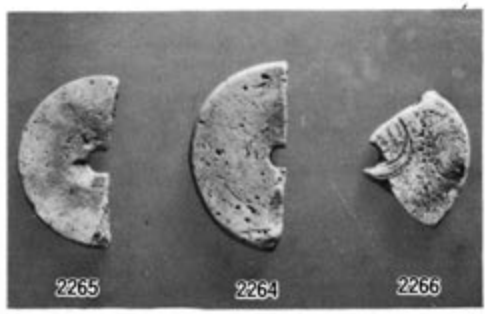
遺 物 出 土 状 況

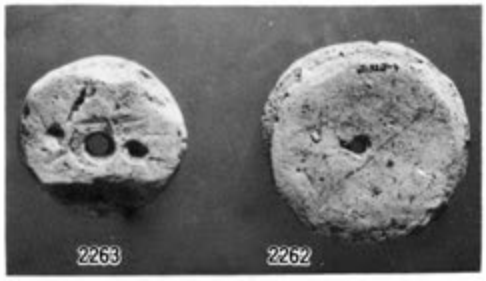


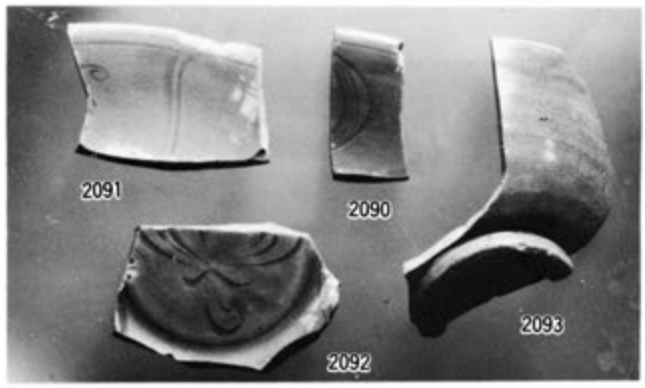
古代・中世の遺物(1)（土師器・黒色土器・須恵器・陶硯）

図 版 43

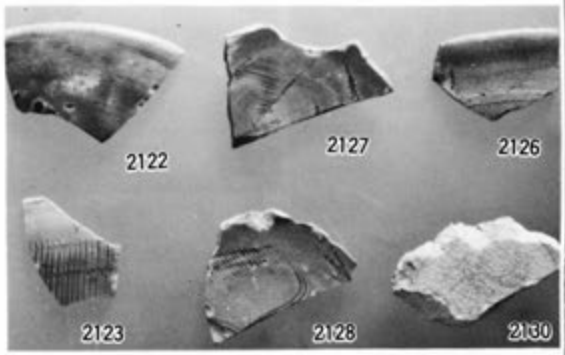


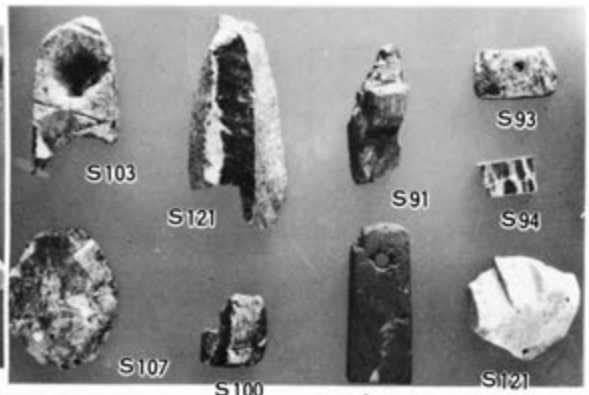


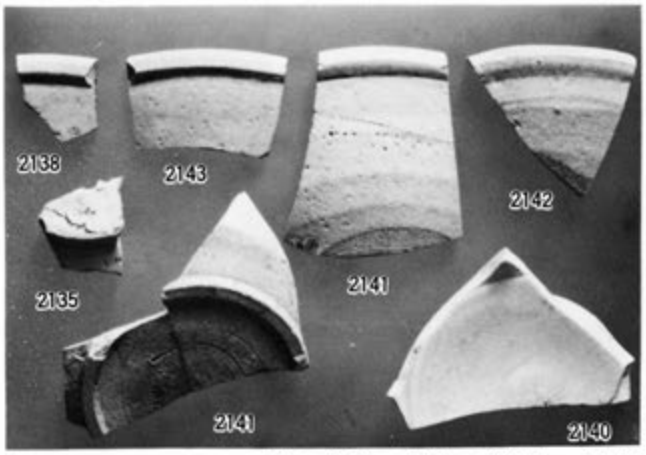






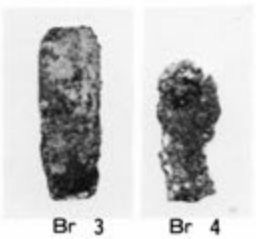








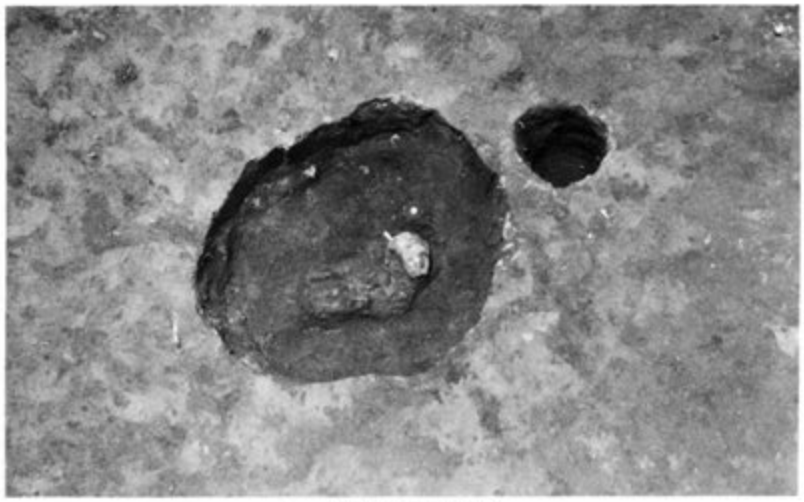




古代・中世の遺物(2)（磁器・土製品・石製品・金属製品）



1．火葬場（南より）



2．1号墓（東より）



3．1号墓（西より）

図 版 45



1．墓坑群（南より）



2．墓　　石（西より）



3．9号墓（南より）



1．江戸時代の建物群（20区付近・東より）



2．か　ま　ど　A～C（北より）



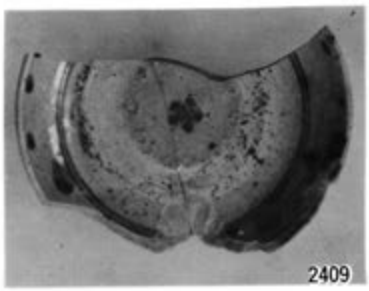
3．江戸時代の建物群（21区付近・西より）

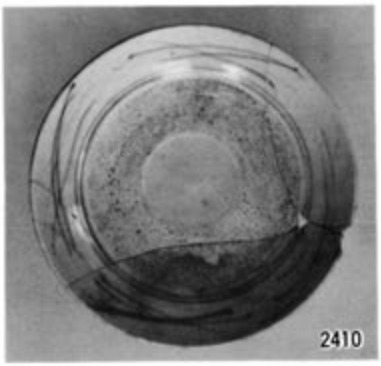
図 版 47


2396

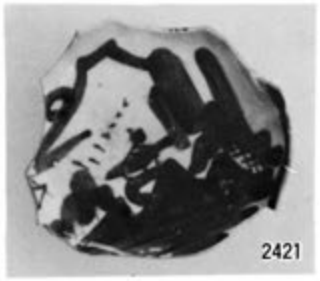

2387

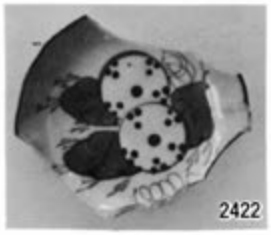

2390


2409


2410


2413


2421


2422


2424


2430


2431


2444


2438


2446


2468

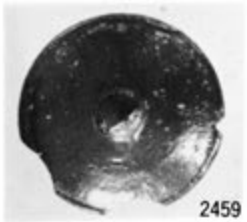

2469


2448


2465


2450


2453


2459

江戸時代の土器

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (28)

成岡・西ノ平・上ノ原遺跡（図版）

発行日　昭和58年３月20日
発　行　鹿児島県教育委員会　〒892 鹿児島市山下町14番50号
印　刷　文進社印刷株式会社　〒890 鹿児島市南栄町３－１